福岡市埋蔵文化財調査報告書第207集

唐原（とうのばる）遺跡 II

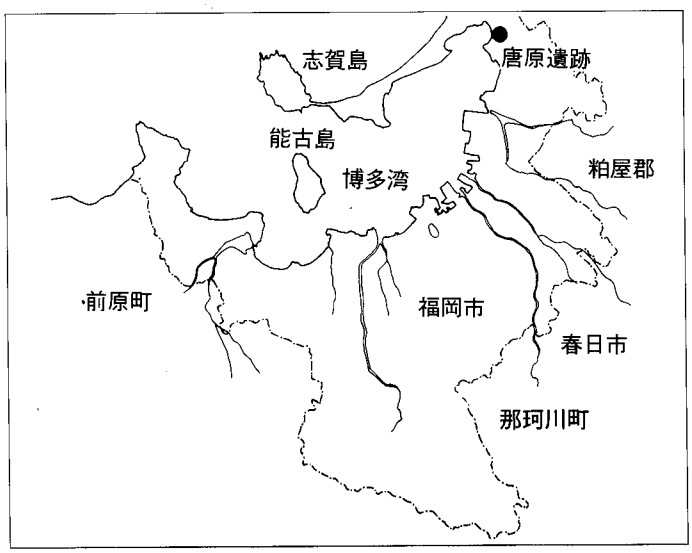
——集 落 址 編——

1989

福岡市教育委員会

唐　原　遺　跡　II

――集　落　址　編――



遺跡略号　ＴＮＨ
遺跡調査番号　8401

１９８９

福岡市教育委員会

題字は、福岡市教育委員会文化部長　河野清一氏による

調査区全景

(1)　SR－06全景

(2)　SR－30全景

(1)　SC－30 全景

(2)　銅鏃

序

いにしえの昔から、大陸文化の窓口として博多湾は常に清新な息吹きを送りつづけてきました。この博多湾の東部には和白浜・香椎浜の砂丘が拡がっています。

今回調査した唐原遺跡は、博多湾に面したこの砂丘上に位置し、眼前に開けた干潟には数千羽の鴨・都鳥などが越冬し、豊かな自然に包まれたところです。

発掘調査の結果、弥生時代後期から古墳時代にかけて綿々と営まれた一大集落遺跡・墳墓群が検出され、海にむかって躍動する古代人の姿を容易に想い浮かべることができます。また、砂丘上に営まれた住居や墳墓群は古代の集落や社会構造を究明する上で貴重な資料になるものと考えます。

本書は、唐原遺跡で検出された竪穴住居址・炉址等の集落址に関するものです。収録された資料が、唐原遺跡－墳墓編－とともに市民の皆さんに広く活用され、埋蔵文化財保護に対するご理解の一助になるとともに、学術研究の分野においても役立つことを願うものであります。

なお、調査にあたって、ご指導・ご助言をいただいた諸先生をはじめ、多くの方々のご協力をいただきました。記して深い感謝の意を表します。

平成元年３月31日

福岡市教育委員会

教育長　佐藤　善郎

例　言

- 本書は福岡市教育委員会が、1984年10月～1985年12月に実施した唐原市営住宅の建替えに伴って発掘調査した「唐原遺跡」の発掘調査報告書－集落址編－である。
- 本書に使用した方向はすべて磁北方向であり、真北からの偏差は西偏6°21′である。
- 本書に掲載した遺構の実測と写真撮影は小林・小畑が行ない、実測については参加学生諸君の協力を得た。
- 本書に掲載した遺物の整理実測は小林・田崎真理・山村信栄・小原哲・境一美が行い、製図は小林と田崎が行った。

  写真撮影は小林と岩本が行った。
- 遺構は呼称を記号化し、箱式石棺墓はSX、古墳はST、竪穴住居址はSC、土壙はSK、炉址はSRとしたが円形周溝墓、方形周溝遺構、火葬墓についてはそのまま使用した。
- 本書の執筆は小林が行なったが、Ⅳ－4、5は山村が執筆した。

  また、Ⅳ－6の土器の形態分類は山村・田崎の協力をえて行った。
- 付論として布目順郎先生の玉稿をいただき内容の充実をはかった。
- 本書の編集は小林が行った。

遺跡調査番号：　8401	遺跡略号：　TNH	
調査地籍：　東区唐原二丁目	分布地図番号：　029－A－1	
工事面積：20,300m²	調査対象面積：20,300m²	調査実施面積：19,000m²
調査期間：　1984年10月24日～1985年12月30日		

本 文 目 次

序

I　はじめに

1.発掘調査にいたるまで……1

2.発掘調査の組織……1

II　立地と歴史的環境……3

1.立地と歴史的環境……3

2.地形と地質……8

III　調査の記録……10

1.調査の概要……10

2.調査の記録……12

1)竪穴住居址……12

2)土　　壙……144

3)炉　　址……174

4)その他の遺構と包含層の遺物……197

IV　おわりに……209

1.発掘調査の成果と問題点……209

2.炉址について……210

3.倒置甕について……212

4.石錘について……212

5.漁具にみる唐原遺跡……213

6.土器群について……215

付　　論……238

鉈に付着する織物について　　布目順郎……238

挿　図　目　次

Fig. 1　周辺遺跡分布図（1/25,000）……2
Fig. 2　唐原遺跡周辺地形図（明治33年　1/25,000）……4
Fig. 3　唐原遺跡位置図（1/10,000）……5
Fig. 4　唐原遺跡周辺現況図（1/3,000）……6
Fig. 5　唐原遺跡地質柱状図……8
Fig. 6　唐原遺跡地質パネルダイヤグラフ……9
Fig. 7　SC－01・02実測図（1/60）……13
Fig. 8　SC－01出土土器実測図（1/4）……14
Fig. 9　SC－02出土土器実測図（1/4）……15
Fig. 10　SC－03・04・05実測図（1/60）……17
Fig. 11　SC－03・05出土土器実測図（1/4）……18
Fig. 12　SC－06・07実測図（1/60）……19
Fig. 13　SC－08実測図（1/60）……20
Fig. 14　SC－06・08出土土器実測図（1/4）……21
Fig. 15　SC－09実測図（1/60）……22
Fig. 16　SC－09出土土器実測図（1/4）……23
Fig. 17　SC－09出土勾玉実測図（2/3）……23
Fig. 18　SC－10実測図（1/60）……24
Fig. 19　SC－10出土土器実測図(1)（1/4）……25
Fig. 20　SC－10出土土器実測図(2)（1/4）……26
Fig. 21　SC－10出土石器実測図（1/4）……27
Fig. 22　SC－11実測図（1/60）……28
Fig. 23　SC－11出土土器実測図（1/4）……29
Fig. 24　SC－12実測図（1/60）……30
Fig. 25　SC－12出土土器実測図（1/4）……31
Fig. 26　SC－12出土石器実測図（1/4）……32
Fig. 27　SC－13・14・15実測図（1/60）……33
Fig. 28　SC－13・14出土土器実測図（1/4）……34
Fig. 29　SC－15出土土器実測図（1/4）……35
Fig. 30　SC－16実測図（1/60）……36
Fig. 31　SC－17・18実測図（1/60）……37
Fig. 32　SC－16・17出土土器実測図（1/4）……38
Fig. 33　SC－19・20実測図（1/60）……39
Fig. 34　SC－18・19・20出土土器実測図（1/4）……40
Fig. 35　SC－20出土石器、勾玉実測図（2/3）……41
Fig. 36　SC－21実測図（1/60）……42

Fig. 37 SC－21出土土器実測図（1/4）……43
Fig. 38 SC－21出土鉄器実測図（1/2）……43
Fig. 39 SC－22実測図（1/60）……44
Fig. 40 SC－23実測図（1/60）……45
Fig. 41 SC－22・23出土土器実測図（1/4）……46
Fig. 42 SC－23出土玉実測図（2/3）……47
Fig. 43 SC－23出土鉄器実測図（1/2）……47
Fig. 44 SC－24実測図（1/60）……48
Fig. 45 SC－24出土石器実測図（1/4）……49
Fig. 46 SC－24出土鉄器実測図（1/2）……49
Fig. 47 SC－25実測図（1/60）……50
Fig. 48 SC－26実測図（1/60）……51
Fig. 49 SC－24・25・26出土土器実測図（1/4）……52
Fig. 50 SC－27実測図（1/60）……53
Fig. 51 SC－28実測図（1/60）……54
Fig. 52 SC－27・28出土土器実測図（1/4）……55
Fig. 53 SC－28出土玉実測図（2/3）……56
Fig. 54 SC－29実測図（1/60）……56
Fig. 55 SC－29出土土器実測図（1/4）……57
Fig. 56 SC－29出土勾玉実測図（2/3）……57
Fig. 57 SC－29出土鉄器実測図（1/2）……57
Fig. 58 SC－30実測図（1/60）……58
Fig. 59 SC－30出土土器実測図(1)（1/4）……59
Fig. 60 SC－30出土土器実測図(2)（1/4）……60
Fig. 61 SC－30出土土器実測図(3)（1/4）……61
Fig. 62 SC－30出土土器実測図(4)（1/4）……62
Fig. 63 SC－30出土土器実測図(5)（1/4）……63
Fig. 64 SC－30出土土器実測図(6)（1/4）……64
Fig. 65 SC－30出土土器実測図(7)（1/4）……65
Fig. 66 SC－30出土土器実測図(8)（1/4）……66
Fig. 67 SC－30出土土器実測図(9)（1/4）……67
Fig. 68 SC－30出土玉類実測図（2/3）……68
Fig. 69 SC－31実測図（1/60）……69
Fig. 70 SC－31出土土器実測図(1)（1/4）……70
Fig. 71 SC－31出土土器実測図(2)（1/4）……71
Fig. 72 SC－31出土土器実測図(3)（1/4）……72
Fig. 73 SC－32実測図（1/60）……73
Fig. 74 SC－32出土土器実測図(1)（1/4）……74
Fig. 75 SC－32出土土器実測図(2)（1/4）……75

Fig. 76 SC－33実測図（1/60）……76
Fig. 77 SC－33出土銅鏃実測図（1/2）……76
Fig. 78 SC－34・35実測図（1/60）……77
Fig. 79 SC－33・34出土土器実測図（1/4）……79
Fig. 80 SC－35出土土器実測図（1/4）……80
Fig. 81 SC－36実測図（1/60）……81
Fig. 82 SC－36出土土器実測図(1)（1/4）……82
Fig. 83 SC－36出土土器実測図(2)（1/4）……83
Fig. 84 SC－37・38実測図（1/60）……84
Fig. 85 SC－37出土石器実測図（1/4）……85
Fig. 86 SC－39・40実測図（1/60）……86
Fig. 87 SC－38・39出土土器実測図（1/4）……87
Fig. 88 SC－41実測図（1/60）……88
Fig. 89 SC－42・43実測図（1/60）……89
Fig. 90 SC－40・41・42・43出土土器実測図（1/4）……90
Fig. 91 SC－41出土石器実測図（1/4）……91
Fig. 92 SC－42出土鉄器実測図（1/2）……91
Fig. 93 SC－44実測図（1/60）……92
Fig. 94 SC－44出土土器実測図（1/4）……93
Fig. 95 SC－45・46実測図（1/60）……95
Fig. 96 SC－45・46出土土器実測図（1/4）……96
Fig. 97 SC－47実測図（1/60）……97
Fig. 98 SC－48実測図（1/60）……98
Fig. 99 SC－47・48出土土器実測図（1/4）……99
Fig. 100 SC－49実測図（1/60）……102
Fig. 101 SC－49出土土器実測図（1/4）……103
Fig. 102 SC－50・51実測図（1/60）……105
Fig. 103 SC－50・51出土土器実測図（1/4）……106
Fig. 104 SC－52・53実測図（1/60）……107
Fig. 105 SC－52出土土器実測図（1/4）……108
Fig. 106 SC－52出土鉄器実測図（1/2）……109
Fig. 107 SC－53出土土器実測図（1/4）……109
Fig. 108 SC－53出土鉄器実測図（1/2）……110
Fig. 109 SC－54実測図（1/60）……110
Fig. 110 SC－55・56実測図（1/60）……111
Fig. 111 SC－54・55出土土器実測図（1/4）……112
Fig. 112 SC－57実測図（1/60）……113
Fig. 113 SC－56・57出土土器実測図（1/4）……114
Fig. 114 SC－57出土石器実測図（2/3）……115

Fig. 115 SC－58実測図（1/60）……115
Fig. 116 SC－58出土土器実測図（1/4）……116
Fig. 117 SC－58出土鉄器実測図（1/2）……116
Fig. 118 SC－59実測図（1/60）……117
Fig. 119 SC－59出土土器実測図(1)（1/4）……118
Fig. 120 SC－59出土土器実測図(2)（1/4）……119
Fig. 121 SC－60実測図（1/60）……120
Fig. 122 SC－60出土土器実測図(1)（1/4）……121
Fig. 123 SC－60出土土器実測図(2)（1/4）……122
Fig. 124 SC－60出土鉄器実測図（1/2）……122
Fig. 125 SC－62実測図（1/60）……123
Fig. 126 SC－62出土土器実測図（1/4）……123
Fig. 127 SC－62出土石器実測図（1/2）……123
Fig. 128 SC－63・64実測図（1/60）……124
Fig. 129 SC－62出土石器実測図（1/4）……125
Fig. 130 SC－64出土土器実測図（1/4）……125
Fig. 131 SC－65実測図（1/60）……126
Fig. 132 SC－65出土土器実測図（1/4）……127
Fig. 133 SC－66・67実測図（1/60）……128
Fig. 134 SC－68・70実測図（1/60）……129
Fig. 135 SC－71実測図（1/60）……130
Fig. 136 SC－72・73実測図（1/60）……131
Fig. 137 SC－68・71・72出土土器実測図（1/4）……133
Fig. 138 SC－71出土鉄器実測図（1/2）……134
Fig. 139 SC－74・75実測図（1/60）……135
Fig. 140 SC－73・74出土土器実測図（1/4）……136
Fig. 141 SC－74出土石器実測図（1/4）……137
Fig. 142 SC－77実測図（1/60）……137
Fig. 143 SC－78実測図（1/60）……138
Fig. 144 SC－79実測図（1/60）……139
Fig. 145 SC－80実測図（1/60）……140
Fig. 146 SC－81実測図（1/60）……141
Fig. 147 SC－80・81出土土器実測図（1/4）……142
Fig. 148 SC－81出土銅鏃実測図（1/2）……143
Fig. 149 SK実測図(1)（1/60）……147
Fig. 150 SK実測図(2)（1/60）……149
Fig. 151 SK実測図(3)（1/60）……151
Fig. 152 SK実測図(4)（1/60）……153
Fig. 153 SK実測図(5)（1/60）……155

Fig. 154　SK実測図(6)（1/60）……157
Fig. 155　SK実測図(7)（1/60）……158
Fig. 156　SK実測図(8)（1/60）……159
Fig. 157　SK実測図(9)（1/60）……161
Fig. 158　SK実測図(10)（1/60）……162
Fig. 159　SK出土土器実測図(1)（1/4）……163
Fig. 160　SK出土土器実測図(2)（1/4）……164
Fig. 161　SK出土土器実測図(3)（1/4）……165
Fig. 162　SK－103出土石器実測図（1/4）……166
Fig. 163　SK出土鉄器実測図（1/2）……166
Fig. 164　SR－06実測図（1/60）……174
Fig. 165　SR－28・40実測図（1/60）……175
Fig. 166　SR－30・31実測図（1/60）……176
Fig. 167　SR－283・300実測図（1/60）……177
Fig. 168　SR出土土器実測図(1)（1/4）……178
Fig. 169　SR出土土器実測図(2)（1/4）……179
Fig. 170　SR出土土器実測図(3)（1/4）……180
Fig. 171　SR出土土器実測図(4)（1/4）……181
Fig. 172　SR出土土器実測図(5)（1/4）……182
Fig. 173　SR出土土器実測図(6)（1/4）……183
Fig. 174　SR出土土器実測図(7)（1/4）……184
Fig. 175　SR出土石器実測図(1)（1/2）……185
Fig. 176　SR出土石器実測図(2)（1/4）……185
Fig. 177　SR出土石器実測図(3)（1/3）……185
Fig. 178　SR出土玉実測図（2/3）……186
Fig. 179　SR出土青銅器・鉄器実測図（1/2）……186
Fig. 180　SR倒置甕分布図（1/2,000）……197
Fig. 181　倒置甕実測図（1/20）……198
Fig. 182　包含層出土土器実測図(1)（1/4）……200
Fig. 183　包含層出土土器実測図(2)（1/4）……201
Fig. 184　包含層出土土器実測図(3)（1/4）……202
Fig. 185　包含層出土土器実測図(4)（1/4）……203
Fig. 186　包含層出土土器実測図(5)（1/4）……204
Fig. 187　包含層出土土器実測図(6)（1/4）……205
Fig. 188　包含層出土土器実測図(7)（1/4）……206
Fig. 189　包含層出土石器実測図(1)（1/2）……207
Fig. 190　包含層出土石器実測図(2)（1/4）……207
Fig. 191　包含層出土青銅器・鉄器実測図（1/2）……207
Fig. 192　SC－06出土石錘実測図（1/3）……212

Fig. 193　壺形土器分類図(1)……225
Fig. 194　壺形土器分類図(2)……226
Fig. 195　壺形土器分類図(3)……227
Fig. 196　壺形土器分類図(4)……228
Fig. 197　壺形土器分類図(5)……229
Fig. 198　壺形土器分類図(6)……230
Fig. 199　甕形土器分類図(1)……231
Fig. 200　甕形土器分類図(2)……232
Fig. 201　甕形土器分類図(3)……233
Fig. 202　鉢形土器分類図(1)……234
Fig. 203　鉢形土器分類図(2)……235
Fig. 204　鉢・器台・手づくね・ミニチュア土器分類図……236
Fig. 205　高坏形土器分類図……237

図　版　目　次

巻頭図版　1　調査区全景
巻頭図版　2　(1)SR－06全景、(2)SR－30全景
巻頭図版　3　(1)SC－30全景、(2)銅鏃
PL.　1　遺跡周辺航空写真
PL.　2　(1)調査区全景（東上空より）、(2)調査区全景（南上空より）
PL.　3　(1)ST－01周辺住居址群全景、(2)SC－02～09全景
PL.　4　(1)SC－01全景、(2)SC－02全景
PL.　5　(1)SC－02・05・06・07全景、(2)SC－09全景
PL.　6　(1)SC－10全景、(2)SC－11全景
PL.　7　(1)SC－12全景、(2)SC－13全景
PL.　8　(1)SC－14全景、(2)SC－15全景
PL.　9　(1)SC－16～20全景、(2)SC－16全景
PL.　10　(1)SC－17全景、(2)SC－18全景
PL.　11　(1)SC－19全景、(2)SC－20全景
PL.　12　(1)SC－21全景、(2)SC－22全景
PL.　13　(1)ST－02周辺住居址群全景、(2)SC－23全景
PL.　14　(1)SC－24全景、(2)SC－25全景
PL.　15　(1)SC－26全景、(2)SC－27全景
PL.　16　(1)SC－28全景、(2)SC－29全景
PL.　17　(1)SC－30全景、(2)SC－30遺物出土状況
PL.　18　(1)調査区西南部住居址・土壙・炉址全景、(2)SC－31全景

PL. 19 (1)SC－32全景、(2)SC－33全景
PL. 20 (1)SC－34全景、(2)SC－36全景
PL. 21 (1)SC－37全景、(2)SC－38全景
PL. 22 (1)SC－39全景、(2)SC－40全景
PL. 23 (1)SC－41全景、(2)SC－41石錘出土状況
PL. 24 (1)調査区中央部住居址・土壙・炉址全景、(2)SC－43～45・SK－94・97全景
PL. 25 (1)SC－42全景、(2)SC－43全景
PL. 26 (1)SC－45全景、(2)SC－46全景
PL. 27 (1)SC－47全景、(2)SC－49全景
PL. 28 (1)SC－50全景、(2)SC－52全景
PL. 29 (1)SC－53全景、(2)SC－57全景
PL. 30 (1)SC－58全景、(2)SC－59全景
PL. 31 (1)SC－60全景、(2)SC－62全景
PL. 32 (1)SC－63全景、(2)SC－64全景
PL. 33 (1)SC－65全景、(2)SC－67全景
PL. 34 (1)SC－71全景、(2)SC－79全景
PL. 35 (1)SC－80全景、(2)SC－81全景
PL. 36 (1)SK－12全景、(2)SK－94全景
PL. 37 (1)SK－101全景、(2)SK－103全景
PL. 38 (1)SK－38全景、(2)SK－120全景
PL. 39 (1)北側炉址群全景（中央部より北を望む）、(2)北側炉址群全景（北から）
PL. 40 (1)東北部炉址群遺物出土状況、(2)東北部炉址群全景
PL. 41 (1)SR－30全景、(2)SR－31全景
PL. 42 (1)SR－215全景、(2)SR－283全景
PL. 43 (1)SR－139全景、(2)SR－141全景
PL. 44 (1)SR－48全景、(2)SR－66全景
PL. 45 (1)SR－108・109全景、(2)SR－192炭・炉壁体検出状況
PL. 46 (1)SR－274全景、(2)SR－74全景
PL. 47 (1)SR－300（石敷炉）全景、(2)SR－301（石敷炉）全景
PL. 48 (1)倒置甕No.1・No.2全景、(2)倒置甕No.3全景
PL. 49 石錘
PL. 50 (1)勾玉類・小玉類、(2)銅鏃

表 目 次

Tab. 1 土壙一覧表(1) ……171
〜 〜
Tab. 3 土壙一覧表(3) ……173
Tab. 4 炉址一覧表(1) ……189
〜 〜
Tab. 11 炉址一覧表(8) ……196
Tab. 12 青銅器鉄器計測表 ……208
Tab. 13 石錘計測表 ……208
Tab. 14 博多湾沿周辺主要遺跡出土漁具表 ……214
Tab. 15 土器型式分類表(1) ……216
〜 〜
Tab. 23 土器型式分類表(9) ……224
Tab. 24 土器観察表(1) ……242
〜 〜
Tab. 59 土器観察表(36) ……277

I はじめに

1．発掘調査にいたるまで

昭和30年代、日本経済のめざましい復興は都市部への急速な人口増加を招き、わが福岡市も例外ではなかった。昭和33年、福岡市はその要望にこたえて東区唐原に市営住宅を建築した。

それから20余年の歳月を経た昭和56年、福岡市建築局の第４期５カ年計画が策定され、この中で昭和61年度事業として老朽化した市営住宅唐原団地の建替工事が計画されていた。しかし、昭和58年にこの計画を２カ年繰り上げて、昭和59年度事業として実施することが決定され、昭和59年７月に至って、当該地における埋蔵文化財の事前調査依頼が文化課にあった。

市営住宅唐原団地は、博多湾北奥の和白浜から香椎浜と連なる砂丘上にあり、福岡市文化財分布図「東部II、29・30」に唐原遺跡群として周知されている。また、分布調査において多量の弥生式土器・古式土師器が採集されており、弥生時代から古墳時代に至る一大砂丘遺跡の存在が予想された。このため昭和59年９月、既存住宅の解体を待って20,300m²の対象地に８本、のべ270mのトレンチを設定して試掘調査を実施した。その結果、弥生時代後期から古墳時代初めの竪穴住居址や土壙等が対象地全域に拡がる大集落遺跡であることが確認され長期間におよぶ発掘調査が必要となった。これをもとに文化課は建築局住宅整備課と協議を重ねたが、昭和59年度内着工は動かし難く、内部調整の結果昭和59年10月24日より発掘調査を開始した。

発掘調査は建設工事の工程に沿う形ですすめられたが、集落規模が当初予想をはるかに越え、かつ300基以上の炉址、箱式石棺墓群、古墳等が相次いで発見され、調査期間の延長止むなきに至ったが、住宅整備課の方々のご理解とご協力を得て昭和60年12月30日に無事調査を終えた。

2．発掘調査の組織

調査委託　福岡市建築局　住宅整備課

調査主体　福岡市教育委員会　　教育長　西津茂美（前任）　佐藤善郎（現任）

調査総括　福岡市教育委員会文化部文化課　課　長　生田征生（前任）　柳田純孝（現埋蔵文化財課長）

調査庶務　埋蔵文化財課第１係　折尾　学（係長）　松延好文

調査担当　埋蔵文化財課第１係　小林義彦、小畑弘己

補助員　山村信栄（現太宰府市教育委員会）、小原哲（九州大学大学院）、田崎真理

なお、発掘調査にあたっては、岡崎　敬・横山浩一・西谷　正（九州大学）、近藤義郎（岡山大学）、小田富士雄（北九州市考古博物館）、甲元真之（熊本大学）、下條信行（愛媛大学）の諸先生方には数々の貴重なご指導・ご助言を受けた。記して謝意を表したい。

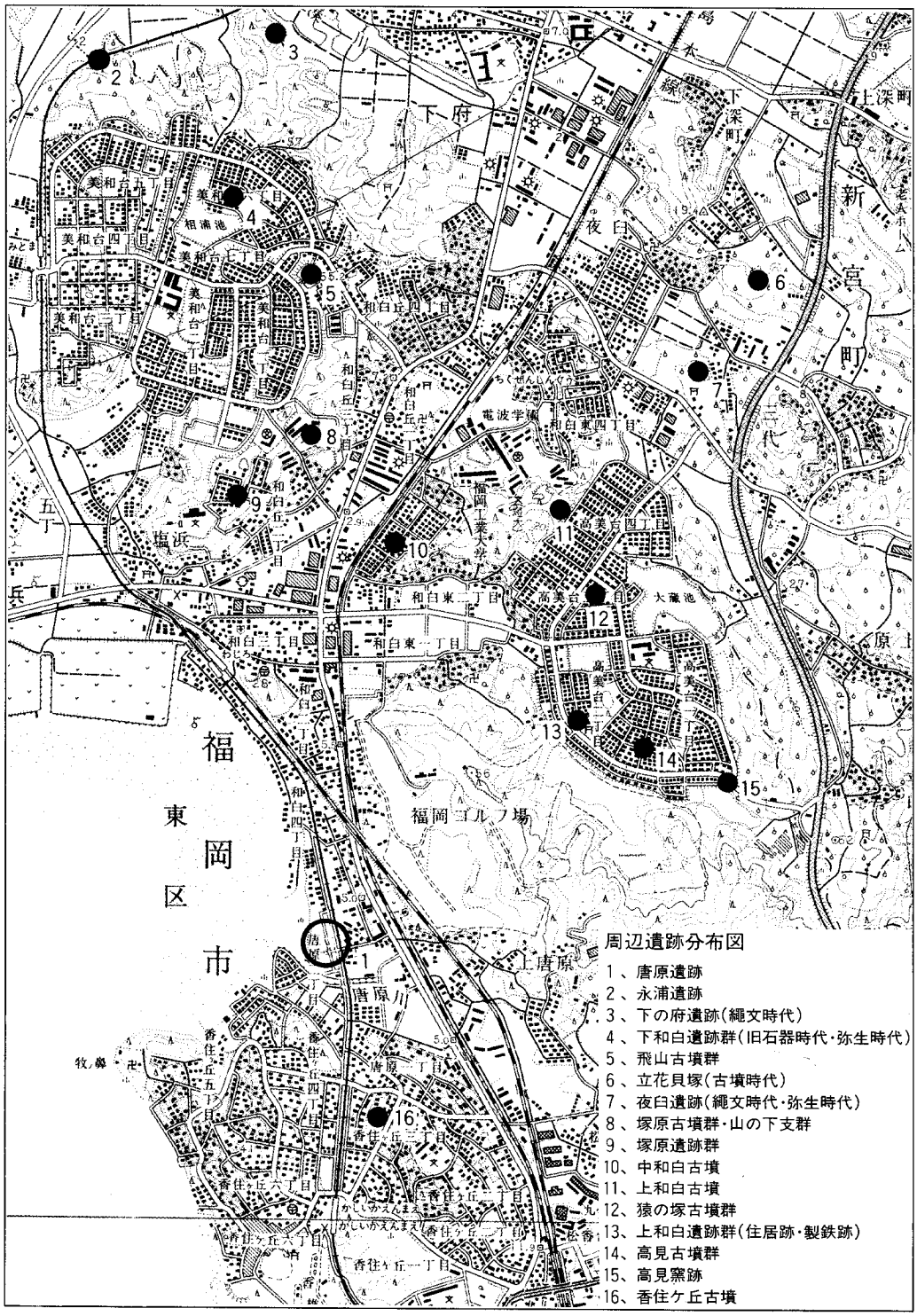


Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1／25,000)

II　立地と歴史的環境

1．立地と歴史的環境

唐原遺跡は、福岡平野の北部、博多湾の最奥部にあたる福岡市東区唐原二丁目地内に所在し、福岡市文化財分布地図「東部II．29・30」で周知化された唐原遺跡群内に位置する。

博多湾の最奥部は、玄海灘の西流海流と博多湾の左転回流の土砂運搬作用によって作られた海岸砂丘、いわゆる海の中道が10km沖の志賀島までつづき自然の大防波堤として博多湾を守っている。この海の中道の基部にあたる奈多・和白浜からは、左転回流によって作られた海岸砂丘が香椎浜・箱崎浜へと南へつづく。唐原遺跡は、和白浜から南へ500mの海岸砂丘上に立地するが、立花山に源を発する唐原川が西流し、砂丘は一旦途絶える。遺跡の西側全面には、この唐原川の土砂運搬作業によって作られた干潟が拡がり、南に伸びる香住ケ丘丘陵との間には唐原川の沈澱による低湿地が拡がっていたであろう。

また、遺跡の背後には、三群山地の支脈に属する犬鳴山・立花山がつづき、立花山からのびた丘陵は東区三苫で玄海灘とぶつかり、粕屋平野を表粕屋と裏粕屋に二分する。標高367mの立花山からは北・南・西と、新生代三紀層を基盤とする低丘陵が幾筋も派生し、この舌状にのびた低丘陵の頂部から斜面には飛山古墳群(註1)・塚原古墳群(註2)等の群集墳が立地する。

唐原遺跡の所在する地域は、福岡市東区大字唐原字大新開にあたり、昭和30年、福岡市に編入されるまでは粕屋郡香椎町に所属していた。市営唐原団地の建設される昭和33年以前は海岸砂丘が拡がり、弥生時代以来の姿をとどめていたところである。この唐原村は、古来裏粕屋郡に属し、「筑前國續風土記」に「村中に唐人と言うあり。よって村の名起れりと里傳にあり。」と記されている。また、「筑前國續風土記拾遺」には「上村下村琵琶橋。初は下村と同村也。下村の辺に塚二有。地名を塚の元と云。其辺に塔ノ元といふも有。是村名の起る所成るべし。(中略) 地蔵堂高藤近辺に大墓有。里民は地主といえり。」とあり、いずれも村中に塚（古墳）があり、その塚に由来して村名としている。上村・下村は唐原川流域、琵琶橋は香住ケ丘団地にあたり、現在報告されている古墳は三角縁神獣鏡を出土した香住ケ丘古墳だけであるが、元来、立花山麓や低丘稜上にはいくつかの古墳が点在していたものであろう。ここに云う唐原村は立花山南山裾に拡がる地域で、遺跡の所在する海岸砂丘は、村はずれの波打ち際にあたり、砂丘上には、古墳が連なり、あながち村名の起こりと無縁でなかったかも知れない。

唐原遺跡周辺での発掘調査は少なく、昭和45年の和白遺跡群、昭和54年の塚原古墳群、海の中道遺跡、昭和59年の梅ヶ崎遺跡の調査に次ぐものである。ここでこれらの調査成果をふまえて、唐原遺跡周辺の歴史的環境について概観してみたい。

この地域に、人間が初めて足跡を印すのは旧石器時代後期である。和白遺跡では、ナイフ形文化期にみられる三稜尖頭器が出土しており、本遺跡においても細石刃が出土している。雁ノ

（註１）「福岡市和白遺跡群発掘調査報告書」　1971　福岡市埋蔵文化財調査報告書第 18 集
（註２）「福岡市埋蔵文化財遺跡地名表（総集編）」　1971　福岡市埋蔵文化財調査報告書第 12 集

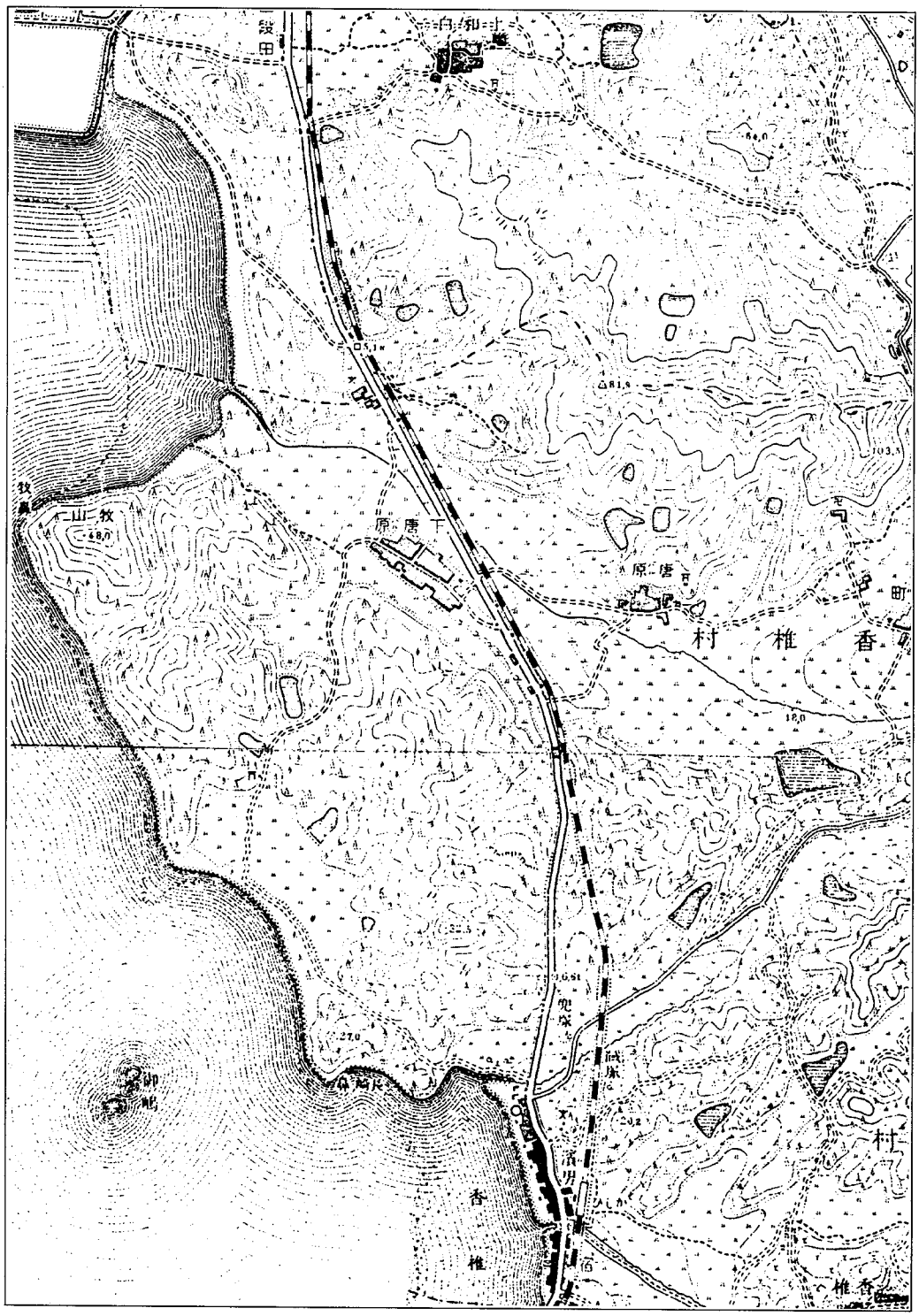


Fig. 2 唐原遺跡周辺地形図（明治33年 1／25,000）

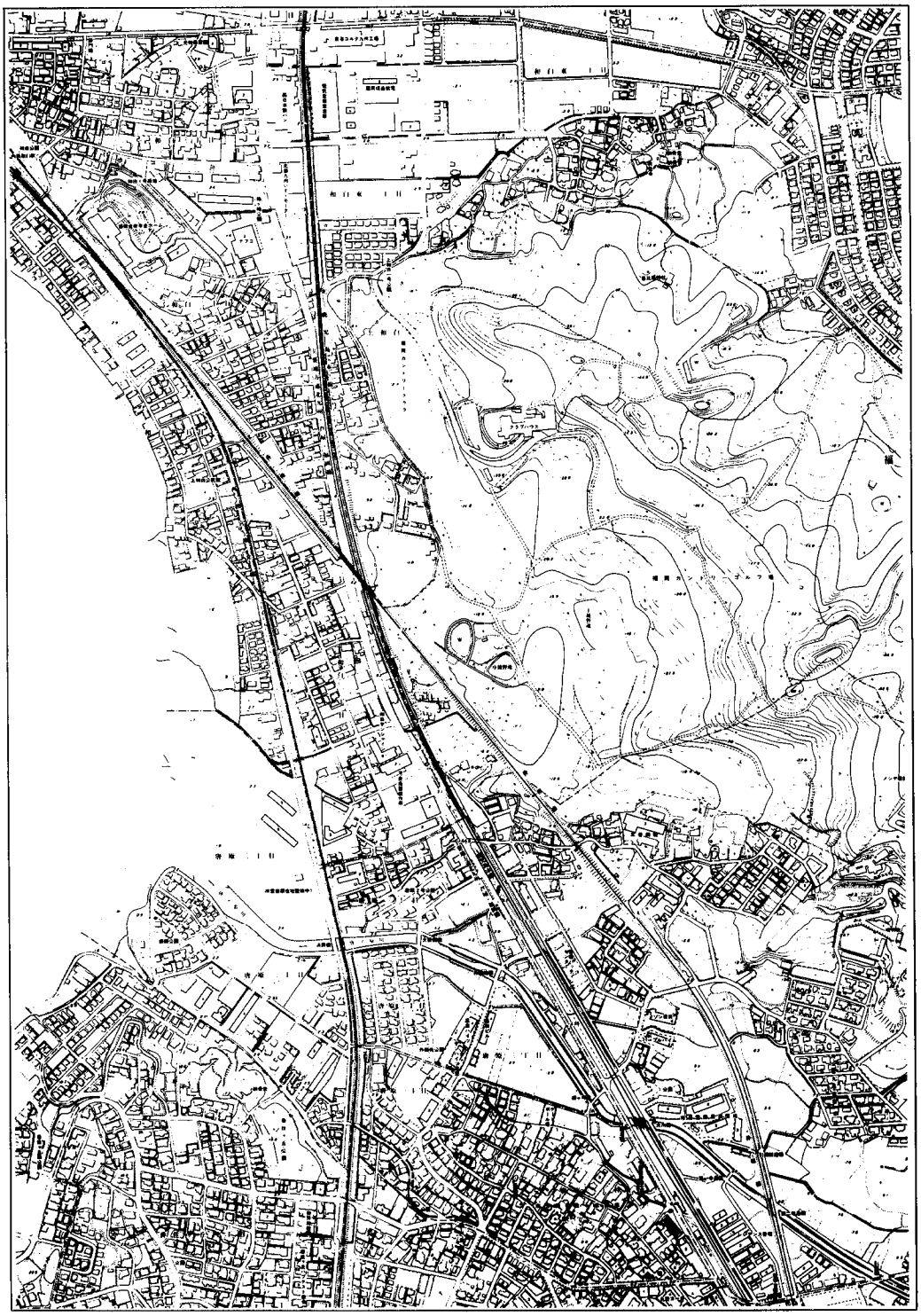


Fig. 3 唐原遺跡位置図 (1／10,000)

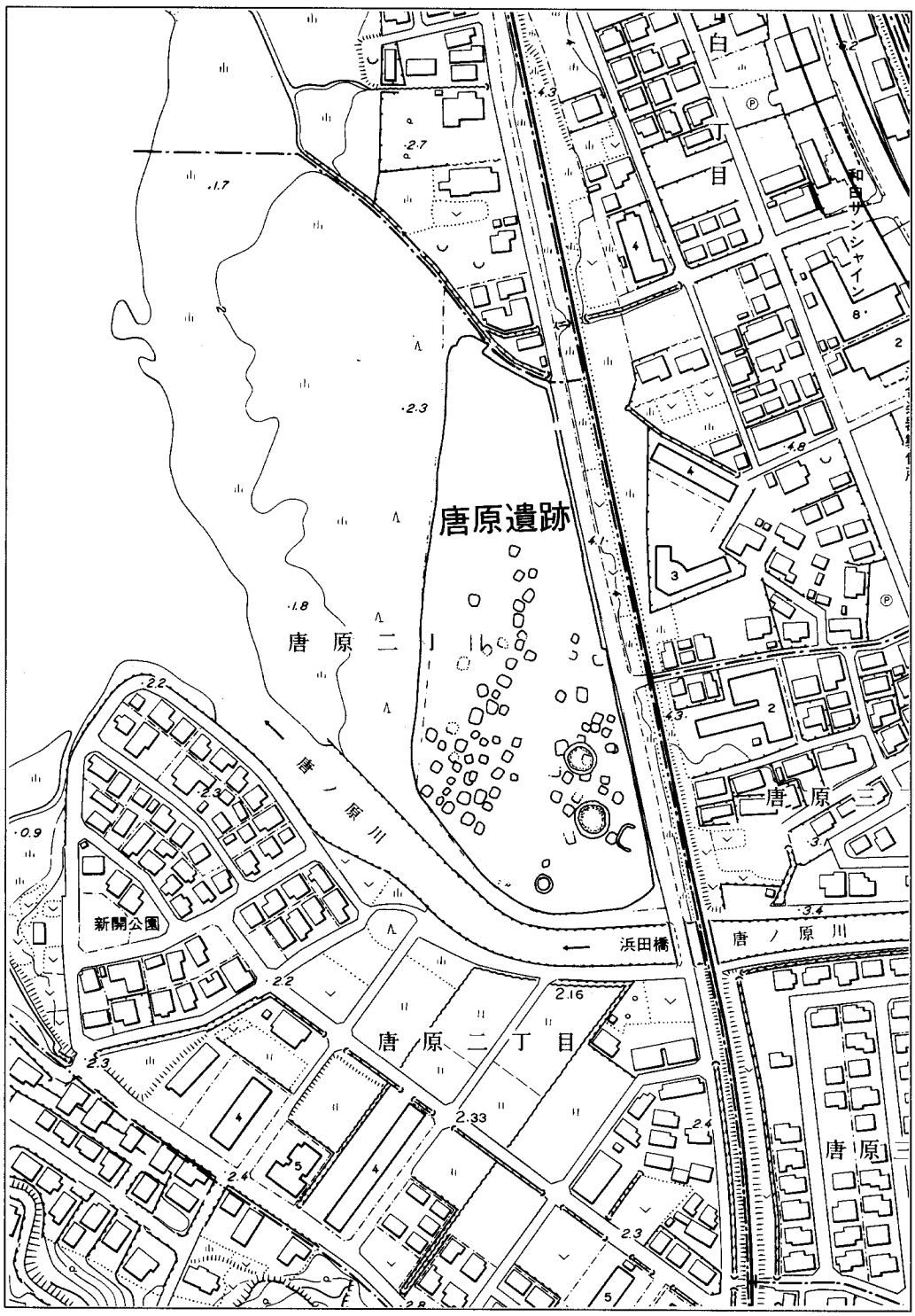


Fig. 4 唐原遺跡周辺現況図 (1／3,000)

巣砂丘遺跡や粕屋郡古賀町佐谷古墳(註3)からもナイフ石器が出土している。また、同町鹿部山遺跡(註4)からは細石刃核が出土している。

縄文時代に入ると後期から晩期に遺跡が散見される。志賀海神社口遺跡では後・晩期の土器が、古賀町水上遺跡・新宮町下ノ府遺跡では後期の土器が検出されている。上和白・下和白遺跡では縄文時代と思われる石匙が出土している。晩期末になると、夜臼式土器の型式認定遺跡として著名な新宮町夜臼遺跡(註5)や立花貝塚があるが、総じてこの地域における旧石器時代から縄文時代の遺跡はきわめて希薄である。

弥生時代になると遺跡はいくらかの拡がりを示す。下和白遺跡では中期から終末期の、古賀町鹿部山遺跡では前期から後期のまとまった遺物が出土している。水稲耕作技術の導入によって肥沃な可耕地を背景に飛躍的に発展を遂げる福岡平野に比べ、海岸線に丘稜がせりだし後背平野のないこの地域は発展性に欠ける。この中にあって、弥生時代後期から古墳時代前期の漁撈的性格を有する一大集落址を検出した本遺跡の成果は注目に値する。

古墳時代になると、立花山から西に派生した幾筋もの丘稜上に古墳が現れる。まず4世紀後半代に本遺跡南の丘陵に香住ケ丘古墳が出現する。舶載三角縁二神二獣鏡を出土して著名なこの古墳は、海に臨んだこの狭小な平野を包括する主長クラスの墳墓であろう。この他に三角縁神獣鏡を副葬する古墳としては東区唯一の前方後円墳である名島古墳(註6)が挙げられる。5世紀代になると、和白丘陵に竪穴式石室や竪穴系横口式石室をもつ飛山1、2号墳がある。古賀町鹿部山遺跡群浦口4号墳も竪穴系横口式石室を内部主体としている。本遺跡の円墳は石室構造は明確ではないが、これに近い時期にあたり、この両者を比較するとその立地のあり方が生産基盤の相違に由来するもの否かは明確でないが非常に興味深い。6世紀以降になると横穴式石室を内部主体とする群集墳が丘陵頂部や斜面に出現する。三苫経塚古墳・飛山古墳群・塚原古墳群・中和白古墳・宮の前古墳群・高見古墳群・猿の塚古墳群が列挙されるが、何れも1基か3～6基で一群をなし、福岡・早良平野の群集墳と様相を異にする。後背地に可耕地をもたない生産基盤の脆弱さ故によるものであろうか。一方、玄海灘に面した海の中道遺跡では古墳時代後期の製塩土器が確認され、海岸遺跡の優位性を示す生産活動が行われていた。

古代から中世にかけては、和白遺跡で奈良時代の製鉄遺構が確認されている。奈多浜・和白浜では鉱量は少ないながらも近年まで海砂鉄の採集が行われていた事実がある。製塩土器とともにこの地域の生産活動を解明する上で貴重であり、今後の資料の増加を待ちたい。一方、博多ほどではないが、和白遺跡等では中国陶磁器も出土している。中世の一時期に貿易港が那津から今津に移った時期があり、博多湾の奥に位置する本遺跡周辺の入江にも宋船が出入りしたのかもしれない。唐原村の由来とされる「唐人塚あり」の一節を思い浮かべると興味深い。中世末になると後背の立花山城を舞台に大内・大友・島津・毛利氏などの戦国大名が覇権を争い合うことになる。

(註3)「佐谷・脇田山・古墳調査報告」　1974　福岡県教育委員会
(註4)「鹿部山遺跡」　1973　九州大学考古学研究室編
(註5) 日本農耕文化の生成　1972　日本考古学協会編
(註6) 1986年調査　池崎譲二氏ご教示による

2．地形と地質

唐原遺跡は、福岡市東部に所在する香椎宮より北方約２kmの距離に位置し、玄海灘に向かって湾口を北に開く博多湾のもっとも奥まった東北岸沿いにある。

地形的には玄海灘の西流海流と博多湾の左転海流によってつくられた、いわゆる「海の中道」と云われる砂洲が新宮浜から志賀島にむかって長く西へのび、この砂洲のつけ根にあたる奈多・和白浜からは、さらに南へとのびる砂丘が香椎浜・箱崎浜へとつづいている。この砂丘地帯に唐原遺跡はあり、その前面（西側）には唐原川の土砂運搬作用によって作られた干潟が拡がり、渡り鳥の格好の越冬地となっている。

また、唐原遺跡のすぐ後背には、山城の築かれた標高367mの立花山があり、山塊は、さらに東へのびて粕屋平野を裏粕屋と表粕屋とに二分している。また、この立花山からは標高40～100mの丘陵が幾筋も派生してのびている。遺跡のすぐ東にはこの立花山から派生した和白丘陵が、南には香住ケ丘丘陵がのびだし、この丘陵の間には唐原川の土砂運搬作用によって作られた標高５mほどの狭小な沖積平野が拡がっている。

唐原遺跡周辺の地質は、粕屋平野を表裏に区切る山塊が古生代三郡変成岩層よりなり、その西端部にあたる立花山は、中世代花崗岩類（早良花崗岩・糸島花崗閃緑岩）よりなる。立花山

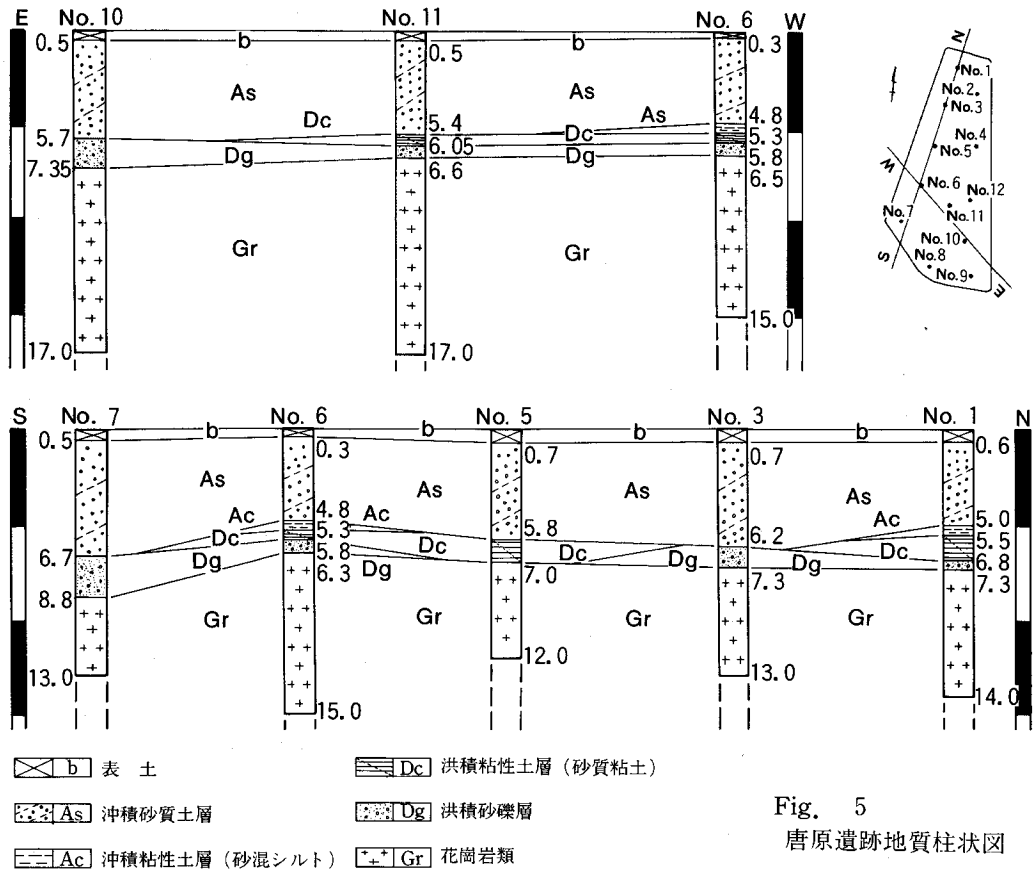
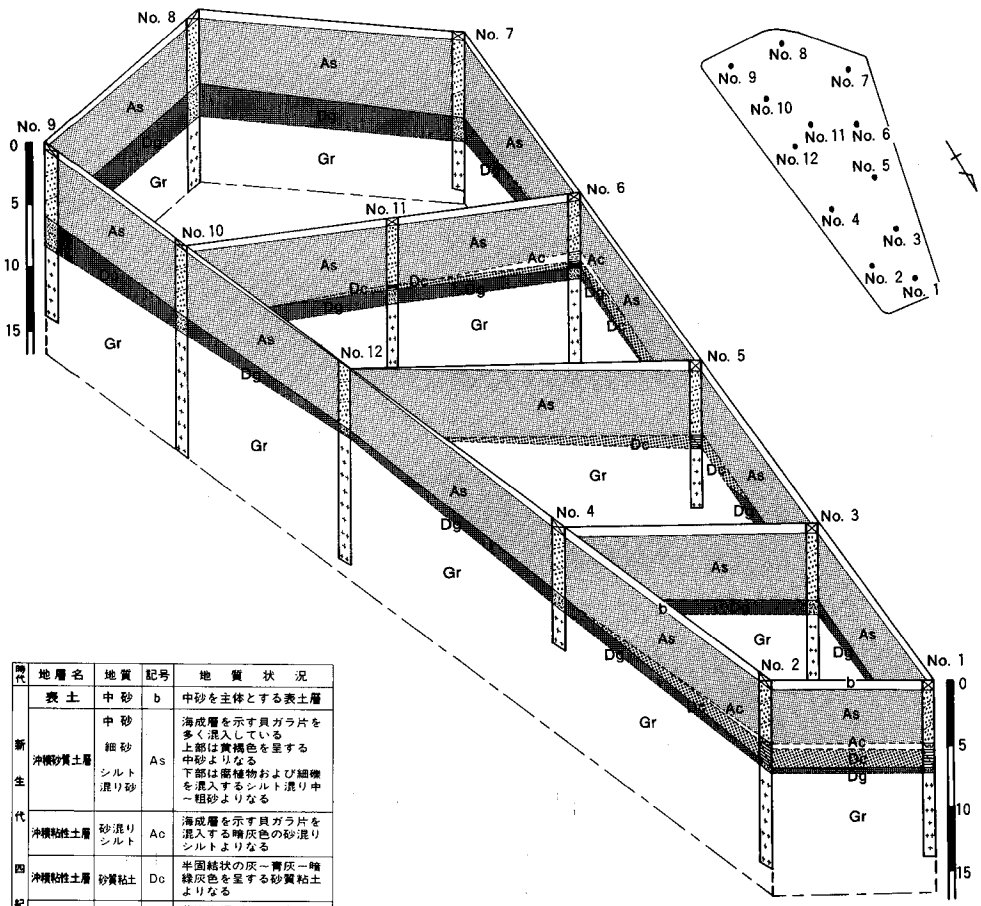


Fig. 5
唐原遺跡地質柱状図

より派生した和白丘陵・香住ケ丘丘陵は、新生代第三紀層からなり、両丘陵によって囲まれた狭小な沖積平野部では、これら新生代第三紀層が地下に埋没し、新生代第四紀層に覆われている。また、唐原遺跡の南東にある九州産業大学の北側の丘陵の一部には古第三紀層中に花崗岩類の部分的な露頭がみられる。

一方、唐原遺跡は、中世代白亜紀の花崗岩類を基盤とし、その上部に花崗岩に由来する新生代第四紀の末固結層が不整合に堆積している。地層は、上層より(1). 表土層、(2). 沖積砂質土層、(3). 沖積粘性土層、(4). 洪積粘性土層、(5). 洪積砂礫層、(6). 花崗岩類の6層に区分される。花崗岩類は、風化が進行し、真砂土化している。



時代	地層名	地質	記号	地質状況
新生代四紀	表土	中砂	b	中砂を主体とする表土層
	沖積砂質土層	中砂 細砂 シルト混り砂	As	海成層を示す貝ガラ片を多く混入している 上部は黄褐色を呈する中砂よりなる 下部は腐植物および細礫を混入するシルト混り中～粗砂よりなる
	沖積粘性土層	砂混りシルト	Ac	海成層を示す貝ガラ片を混入する暗灰色の砂混りシルトよりなる
	洪積粘性土層	砂質粘土	Dc	半固結状の灰～青灰～暗緑灰色を呈する砂質粘土よりなる
	洪積砂礫層	礫混り砂 砂礫	Dg	花崗岩類・角礫・亜角礫を混入し、花崗岩類・風化土砂の2次堆積と思われる 暗青灰～暗緑灰～茶褐色のシルト質砂よりなる
中生代白亜紀	花崗岩類	風化花崗閃緑岩	Gr	風化変質の顕著な強風化部 石英粒子を除いては脆弱で真砂土状に変化している

Fig. 6 唐原遺跡地質パネルダイヤグラフ

III　調査の記録

1．調査の概要

唐原遺跡は、試掘調査の所見によれば、調査区のほぼ中央を海岸線に沿って古砂丘の尾根が南北方向にはしり、この古砂丘の尾根上および砂丘が内陸部へむかって低くなる緩斜面上に弥生時代後期から古墳時代前期に亘る多数の竪穴住居址・土壙・柱穴等を中心とする集落址が検出された。遺跡前面には豊かな博多湾が拡がり、この海を舞台に活動した慣海洋性の集落址である可能性が十分に予想される。また砂丘上に立地することなど等から慎重にかつ多方面に亘る調査が望まれた。同時に、建設される８棟の共同住宅のうち、北側に建設される２棟は昭和59年度中の着工がすでに決定されており、公園用地を含む北側の約5,000m²については昭和60年２月中旬までの調査終了が果せられたため、発掘調査は北側より開始し、終了次第造成・建設工事と併行して進められることになった。

調査対象地は南北に長く、かつ三角形に近い形状をしていることから長辺に沿って調査区中央の磁北より 8° 30′西へ振った長軸を任意に設定し、これを基準線として一辺20ｍのグリットを割付けた。この20ｍのグリットは東西方向に西よりＡ・Ｂ・Ｃ、南北方向に北よりＩ・II・III とした。さらに、これを２ｍ×２ｍの小グリットに細分し、東西方向にａ・ｂ・ｃ、南北方向に１・２・３と呼称し、遺構に伴わない遺物はこの小グリットで取り上げた。

発掘調査は、建設予定地20,300m²全域が調査対象であるため公園用地を含む北側5,000m²の調査に先立ち、まず、発掘調査事務所設営地から開始し、北から南へと調査区を広げていくこととした。事務所用地は、北側5,000m²の調査が急がれることから、試掘調査によって比較的遺構の稀薄とされたＥ・Ｆ－ＸＩ・ＸII区に選定し、10月24日から発掘調査を開始した。

その結果、試掘調査では予想もされなかった直径15ｍの円墳が発見された。この円墳は墳丘に河原石を敷並べて葺石とし、幅1.5～2.0ｍの周溝を巡らすものであるが、主体部は市営住宅建設に際して削平されていた。周溝には須恵器・土師器の完形品が21個供献されていた。しかしながら、これらのほとんどは仮設事務所保管中に窓ガラスを破って侵入した心ない愛好家によって持ち去られた。考古学を学ぶものとして非常に残念であった。更に、この古墳検出面から15～20cm掘り下げると弥生時代終わり頃から古墳時代前期（布留式期）の竪穴住居跡15棟が検出された。この1,000m²の調査に約１カ月を要し、調査工程は、開始早々から遅れだした。

次に、北側より調査に移ると、調査区の中央に海岸線に沿ってほぼ南北方向の古砂丘が検出された。この砂丘は、調査区北端で北へ低くなり、湾奥へつづく砂丘との間に浅い谷様の凹みがあり、古砂丘として独立したものである。この砂丘の尾根上は一面に赤褐色砂で覆われていた。この赤褐色砂（焼け砂）を覆土とする遺構は、すべてが円形あるいは楕円形プランで、深さ15～30cmの浅い凹レンズ状を呈する炉址であった。これらの炉址の中には、赤褐色砂を中心としてドーナツ状に灰を掻き出したものもある。構造的には、(1). 素掘りのもの、(2). 底面に

粘土を貼ったもの、(3). 底面に5cm内外の礫石を敷いたものの3タイプに区分される。このうち素掘のものにも覆土内に焼けた粘土塊をふくむものが多くあり、使用後は貼った粘土床および、炉体を破壊したもののようである。覆土中からは弥生時代後期の土器片が多数出土するが、土器片は甕形土器が圧倒的におおく、壺形土器は少ない。高坏にいたってはほとんど出土していない。これら土器片の中には二次焼成を受けたものもあり、製塩遺構の可能性も考えられた。しかし、二次焼成を受けた土器片には製塩課程で生じる土器内面の化学変化がないこと、二次焼成痕が弱いこと、粘土を貼った炉床の焼け方が弱いこと、更に、いわゆる「製塩土器」が出土していないことから製塩遺構としては考え難い。(註1)

また、粘土床を作るもののうち、炉壁に沿って凹レンズ状に粘土を貼り覆土に炭片の混入していたものがある。中国雲南省で報告されている原始的な土器窯に多少類する点もあるが、これも断定的ではない。(註2)

これらの炉址は、大小合わせると総数300基にものぼり見分けもつかぬ程に重複しているが、その立地する範囲は砂丘の尾根線上のみで、海側や内陸側の緩斜面上にはなく、明らかに砂丘尾根に占地することを意識していたようである。いずれにしてもこの炉址群のもつ意味・性格等および砂丘上に点在するほぼ同時期の竪穴式住居址との関わりを明らかにしていくことが大きな課題となろう。

この一群の炉址は、砂丘尾根の北端部より営まれはじめ、漸次南へ移動して砂丘の南端まで至っているが、両端部は重複が希薄であるのに比べ中央部は著しく、そのプランすら摑みかねるものもあった。また、砂丘尾根の中央部にあたるD－VI区付近で炉址下より竪穴住居跡が検出され、炉址と歩みを同じくするように南へ移動するが、炉址との間には一定の距離を保っているようである。竪穴住居址同志の切り合いはほとんどなく、いずれも炉址下より検出されるが、弥生時代終末期に至ると内陸側の緩斜面に立地するようになる。

一方、唐原川に沿って南へ舌状に突き出す狭い砂丘尾根には、箱式石棺墓群と円形周溝墓からなる小墳墓群があり、竪穴住居址は後出する1棟を除いてはまったくなく、集落址とは明確に区分されている。時期幅があり短絡的には云い難いが意識的に聖なる墓域として集落と隔絶していたことだけは明らかなようである。また、最初に発見された円墳（1号墳）の、南側には葺石を敷いて周溝を巡らした円墳（2号墳）がもう1基発見された。一説によれば、昭和初年頃には遺跡の北方500mの湾奥部までの砂丘上には点々と塚があったと云われており、時期的な問題もあるが、立花山から派生した丘陵上に立地する古墳群と比べて考えたとき、非常に興味深い資料となりえよう。

このように試掘調査では予見されなかった結果、問題点を残して発掘調査は終了した。

（註1）岡山大学教授近藤義郎先生よりご教示を受ける。

（註2）北九州市立考古博物館長小田富士雄先生よりご教示を受ける。

2．調査の記録

(1)竪穴住居址

本調査区内において弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居址を81棟検出したが、炉址等による著しい削平を受けて明確に把握しえなかったものを含めれば100棟近いものであったと推定される。これらの竪穴住居址群は、調査区北から南西方へやゝ弧状にのびる古砂丘尾根上に連なるものと古砂丘東側の緩斜面上（山側）に立地するものの概ね二群に大別される。

このうち古砂丘尾根上に立地する一群は、古砂丘の東西に浅い谷状の流路がはいるC～F－Ⅶ区を北限として南方に展開し、西側緩斜面上に（海側）には立地しない。この古砂丘上には尾根北端から南西端に至るまで300基以上の炉址群が折り重なるように連なり、そのほとんどが竪穴住居址上に構築されている。この尾根上の竪穴住居址群と炉址群は、弥生時代後期前半より始まり、時間の経過とともに南方へ移動する。この両者はある距離をおいて歩を一にしており興味深い。

一方、古砂丘の東側緩斜面上に立地する竪穴住居址群は、F－Ⅸ区を北限、D－XⅣ区を西限とする狭い範囲に拡がり、数例を除いて古墳時代前期に属する竪穴住居址群によって構成され、更に東側の内陸部へと拡がるものであろう。

SC－01（Fig. 7　PL. 4）

E－Ⅻ区に検出した住居址で、ST－01より西へ3ｍの距離にある。埋設管等によって北半分は破壊されている。平面形は東西3.39ｍ、南北2.60ｍ以上の方形に近いプランをなしたものと推定される。面積は8.81㎡以上である。壁高は24㎝を測り、ゆるく傾斜して立ち上がる。床面は平坦であるが、中央部がやや高まる。柱穴は検出できなかった。

遺物は東・南壁際に3カ所程土器小片が散布していた。

出土遺物（Fig. 8）

壺形土器(1)　口縁部が短い「く」字状で、球形の胴部には丸底ぎみの小さな平底の底部がつく。外面には研磨調整を施す。F類。

甕形土器(2)　口縁部は短く「く」字状に外反し、砲弾形の胴部をもつ大型のもの。調整は内外面ともに粗いハケ目。AⅠ類。

SC－02（Fig. 7　PL. 4）

F－Ⅺ区に検出した住居址でST－01より北東8ｍの距離にあり、SC－03･05の中間に位置する。平面形は南北4.07ｍ、東西3.65ｍを測る方形をなし、面積は14.8㎡である。壁高は32㎝を測り急峻に傾斜して立ち上がる。床面はほぼ平坦で西壁側は巾60㎝、高さ10㎝のベット状遺構がある。柱穴は7個あるが主柱穴は隅角の4本と考えられる。南壁側の柱穴間には115×110㎝、深さ35㎝の土壙がある。

遺物はベット状遺構上より完形の甕と高坏が出土しているほか、小型丸底壺・甑等が土壙上

より出土している。

出土遺物（Fig. 9）

壺形土器（3・4）いずれも小型壺である。3は「く」字状の口縁部が内弯ぎみに長く開き、球形の胴部がつく。BII類に属する。

甕形土器（5～10）いずれも「く」字状口縁をもつものである。7・8は口縁部が反りぎみに開く。AII類に属する。5・9は口縁部が一旦上方にのびて開くもので、5は短胴のやや肩の張った胴部に丸底の底部がつく。胴部は中央部に穿孔あり。AIII類。6・10は口縁部が内弯ぎみに立ち上がり、端部をつまみ上げるもので、布留系の影響をうけているものである。AIV類に属する。

高坏（11～13）いずれもC類に属する。11は坏部が下半に屈曲して稜をつくり反りぎみに外方に開く。脚部は膨らみぎみに短く開く。12・13は脚部資料で、ストレートにのびる脚部は短く、裾端部は内方に小さくつまみだ

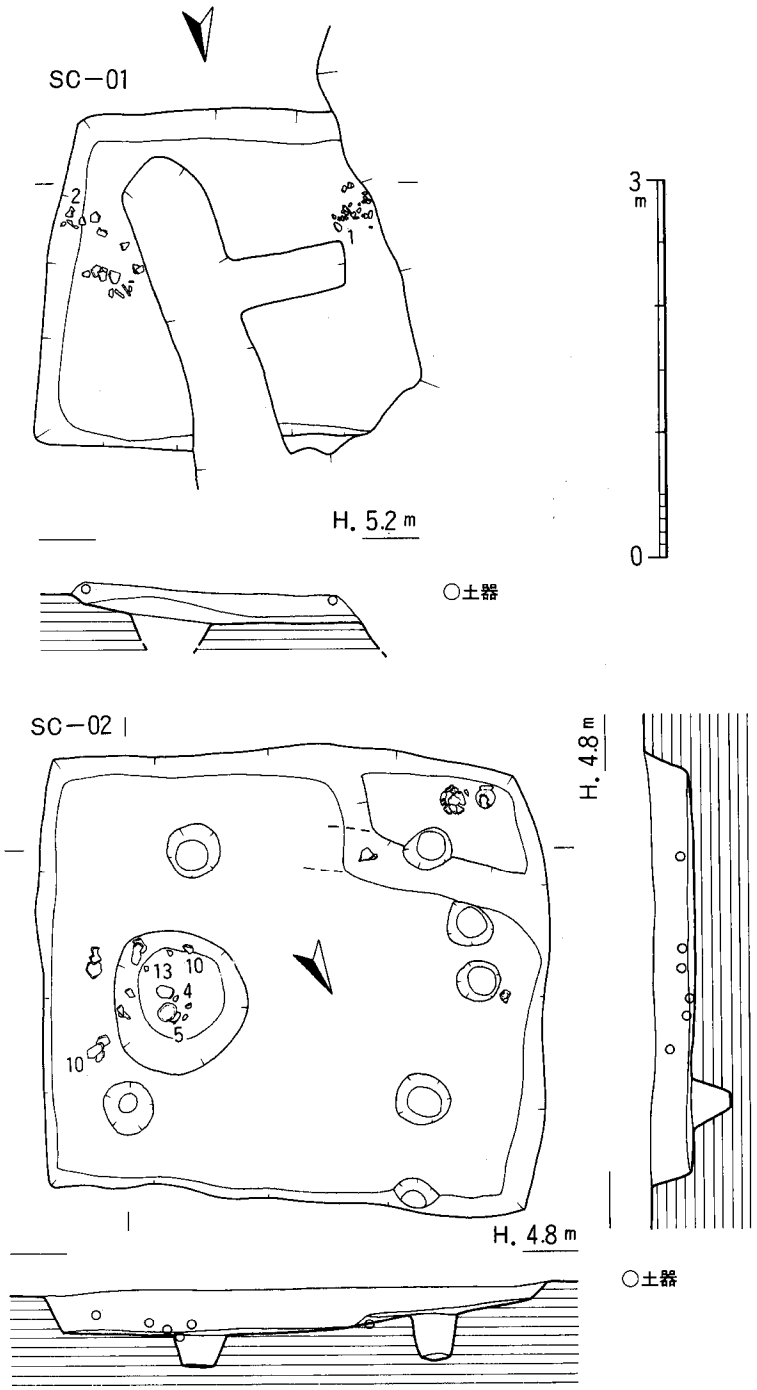


Fig. 7 SC－01・02実測図（1/60）

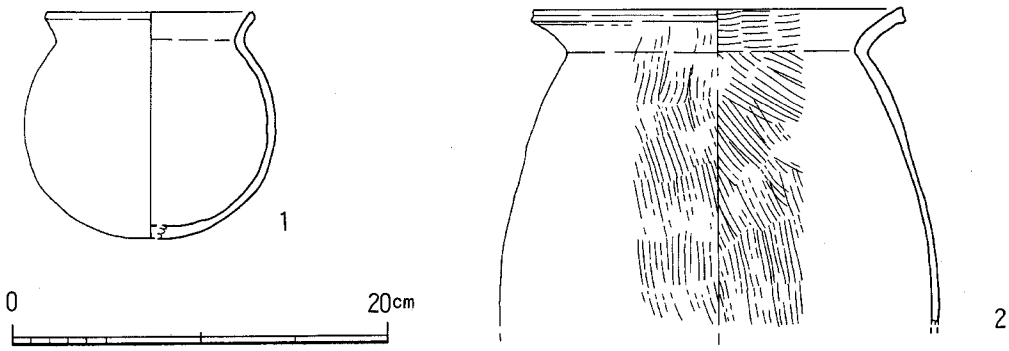


Fig. 8 SC－01出土土器実測図（1/4）

す。

SC－03（Fig.10 PL.3）

F－XII区に検出した住居址で、ST－01の東5mにあり、東側でSC－04を切っている。平面形は東西4.42m、南北3.87mを測る方形をなし、面積は17.1m²である。壁高は24cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は平坦である。柱穴は東・南壁側に3個確認したが西・北壁側では検出できなかった。ベット状遺構は認められない。

遺物は、甕・壺・高坏等があるが、おおむね北側壁際に集中する傾向があった。

出土遺物（Fig.11）

壺形土器（14・15）いづれも小型壺である。14は口径9.4cm、器高9.3cm。「く」字状の口縁部は内弯ぎみに長くのびる。小さめの扁球形胴部に小さな平底がつく。15は短く外反する「く」字状口縁のもので、球形の胴部がつく。BIII類。

甕形土器（16～19）16～18は口縁部が短く「く」字状に外反するもので、端部を小さくつまみ出す。胴部は短胴で球形。AII類。19は布留系の影響を受けたもので「く」字状の口縁端部を内方に小さくつまみ上げている。AIV類。

高坏（20・21）20は坏部資料で、内弯ぎみに開く。21は脚部が短くストレートにのび、裾部はラッパ状に開く。C類。

SC－04（Fig.10 PL.3）

F－XII区に検出した住居址で、ST－01より東へ8mほどの距離にあり、西半分以上はSC－03によって切り取られて東側の壁を残すのみである。平面形は南北3.70mで方形をなすものと推定される。壁高は25cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は平坦である。柱穴は検出できなかった。

遺物はほとんど検出できなかった。

SC－05（Fig.10 PL.5）

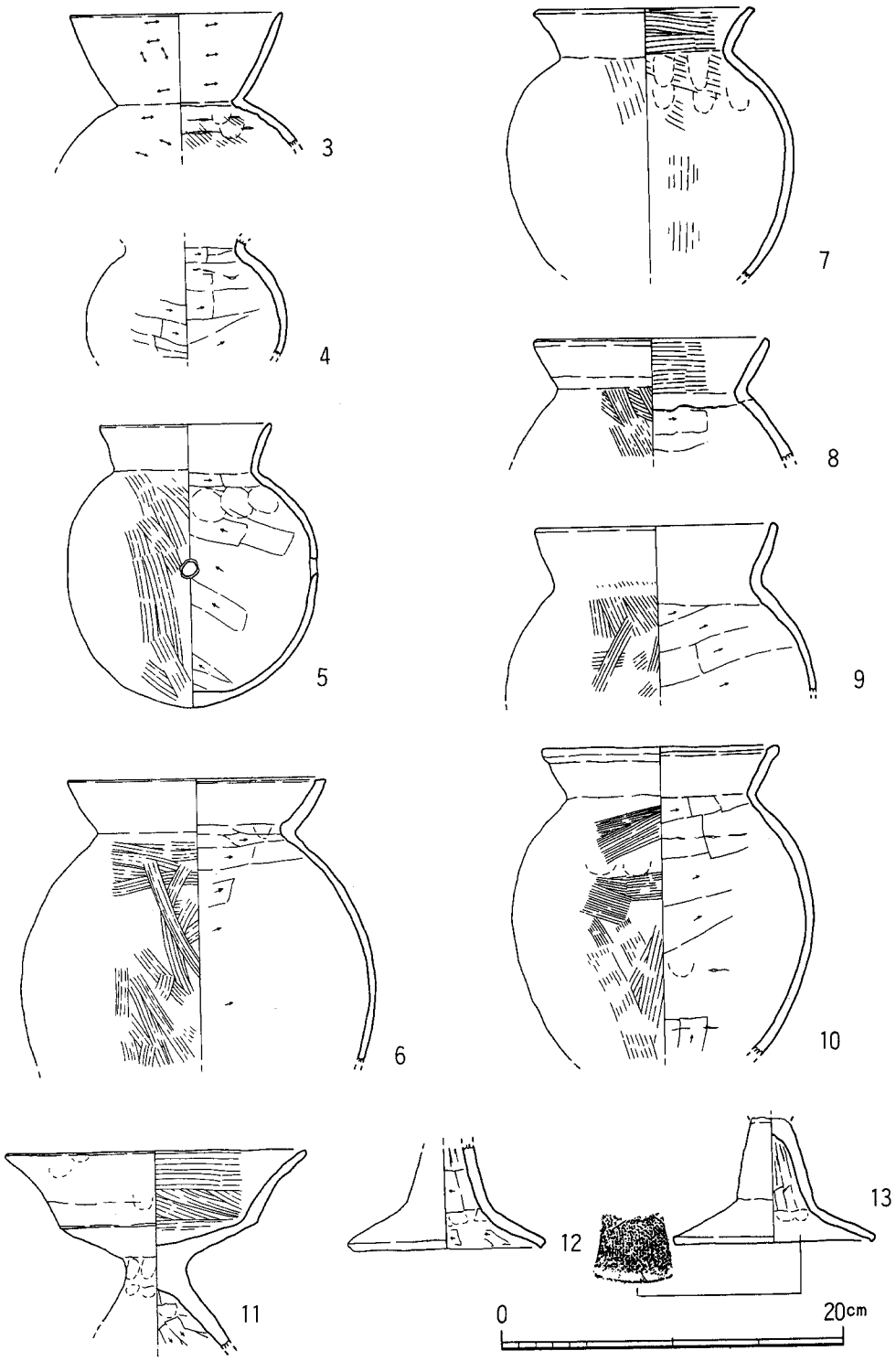


Fig. 9 SC－02出土土器実測図（1/4）

F－XI区に検出した住居址で、SC－06の東2.0mの距離に隣接している。住居中央には炭片の多く混入した径2.0mの円形土壙が切り込んでおり、床面は大半を破壊している。平面形は東西3.47m、南北3.45mを測る方形をなし、面積は11.9m²である。壁高は29cmを測りほぼ垂直に立ち上がる。床面は浅い凹レンズ状である。柱穴は3個あり、主柱穴は4本と考えられるが、西壁側の柱穴は破壊によるものか検出できなかった。

遺物は土師器壺・甕・高坏等が全域にわたって散布する。

出土遺物（Fig.11）

壺形土器（22・23）いずれも小型壺である。22は「く」字状の口縁部がストレートに長くのび、球形の胴部がつく。BIV類。23は「く」字状の口縁部が短くストレートにのび、胴部は球形である。BIII類。

甕形土器（24・25）いずれも「く」字状の口縁部は内弯ぎみに立ち上がり、端部は内側に小さくつまみ出す手法のもので、布留系の影響を受けたものである。AIV類。25は口径12.4cmで、球形の胴部はやや肩がはる。

高坏（26・27）26は口径18.3cm。坏部は内弯ぎみに大きく外方に開く。27は脚部で、短くストレートにのび、裾部は小さく開く。C類。

SC－06（Fig.12　PL.5）

F－XI区に検出した住居址で、ST－01の北東10mにある。平面形は南北4.86m、東西4.17mの方形をなし、面積は20.2m²である。壁高は38cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は平坦である。柱穴は精査したが検出できなかった。南壁際西に寄って115×85cm、深さ25cmの楕円形の土壙がある。

遺物は、壺・甕・高坏等が少量出土した。

出土遺物（Fig.14・192）

壺形土器（28・29）28は小型壺である。「く」字状の口縁部は内弯ぎみに開き、球形の胴部がつくものである。BIV類。29は球形の胴部をもつ大型のもので、最大径26.2cmを測る。

高坏（30～34）いずれもC類。30～32の体部は反りぎみに開き、端部は小さくつまみ出すようにしておさめる。33は体部下半に凸帯状の段をつくり出し、口縁部は反りぎみに開く。34は脚部資料で、ストレートにのび、短くラッパ状に開く裾部は端部を小さくつまみ上げている。底径13.4cm。

石錘（32）長さ8.5cm、幅5.6cm、厚さ4.7cmの有溝石錘である。溝は短軸に平行し、幅広である。このタイプの石錘は瀬戸内海沿岸に主とし、東は駿河湾、西は博多湾までの広い地域に分布するもので、手釣り用の沈子と推定される。花崗岩系。重さは260g。

SC－07（Fig.12　PL.5）

F－XI区に検出した住居址で、ST－01の北東7mの距離にある。SK－12、SC－06・09と重

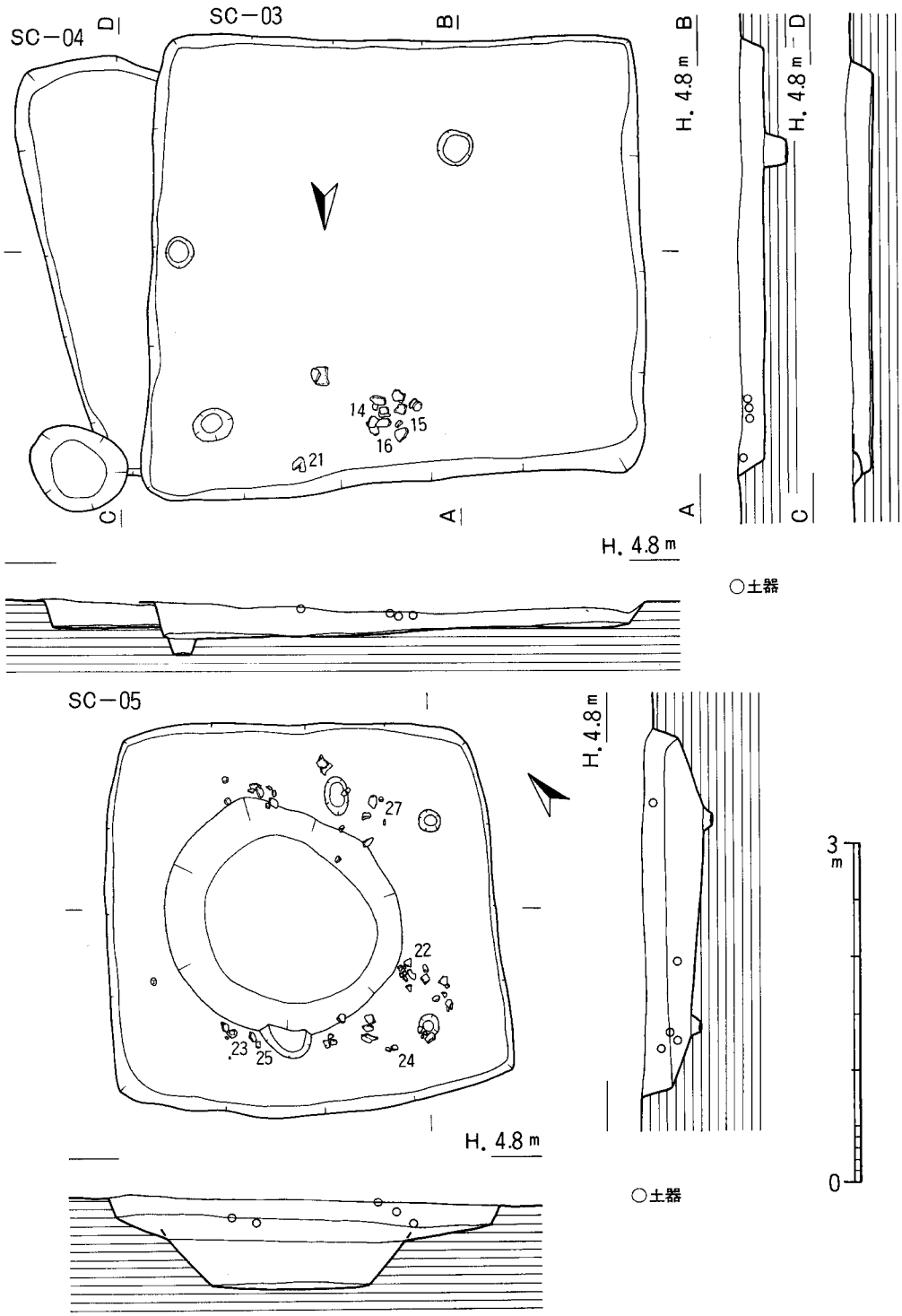


Fig. 10 SC−03・04・05実測図 (1/60)

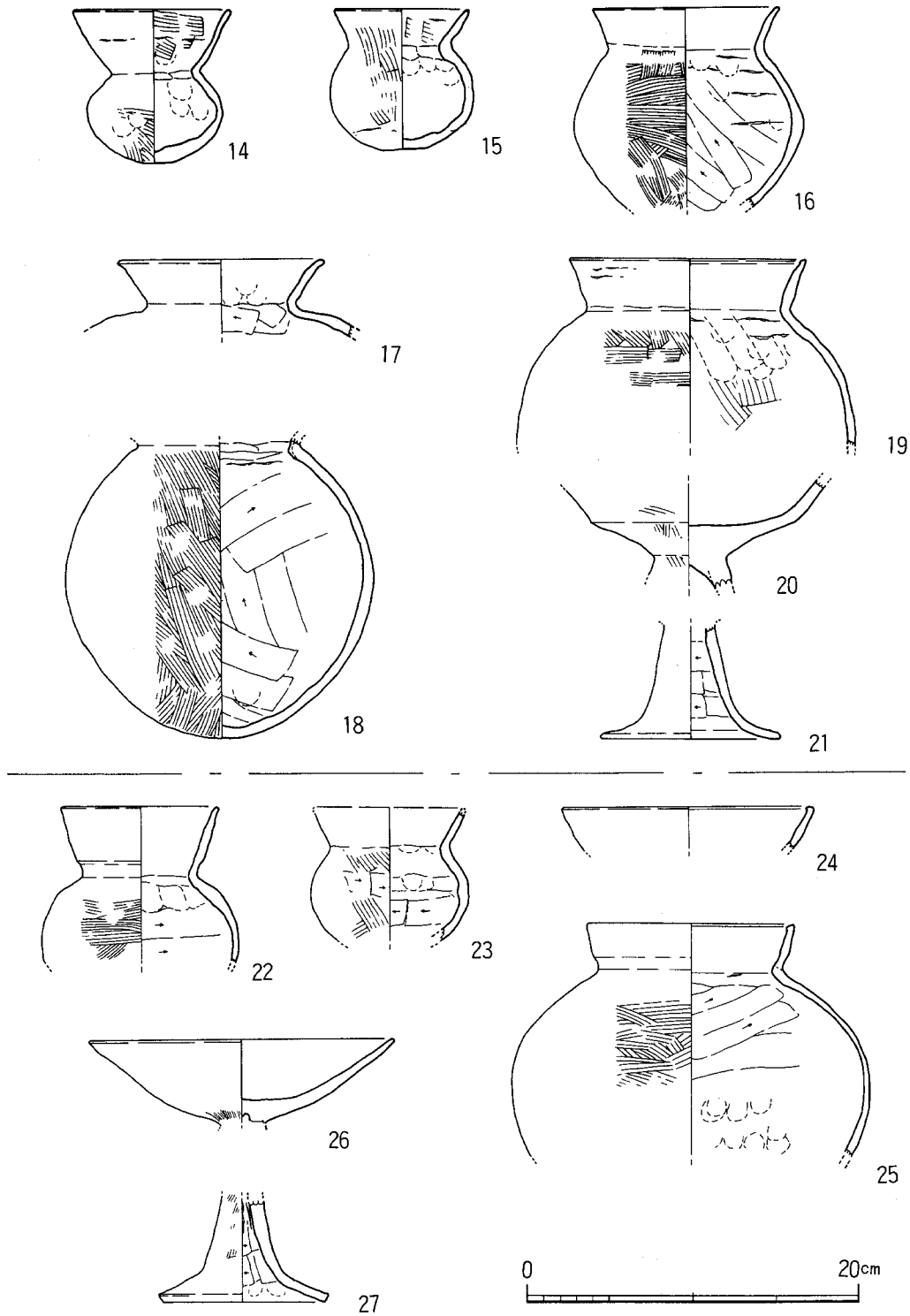


Fig. 11 SC－03・05出土土器実測図（1/4）

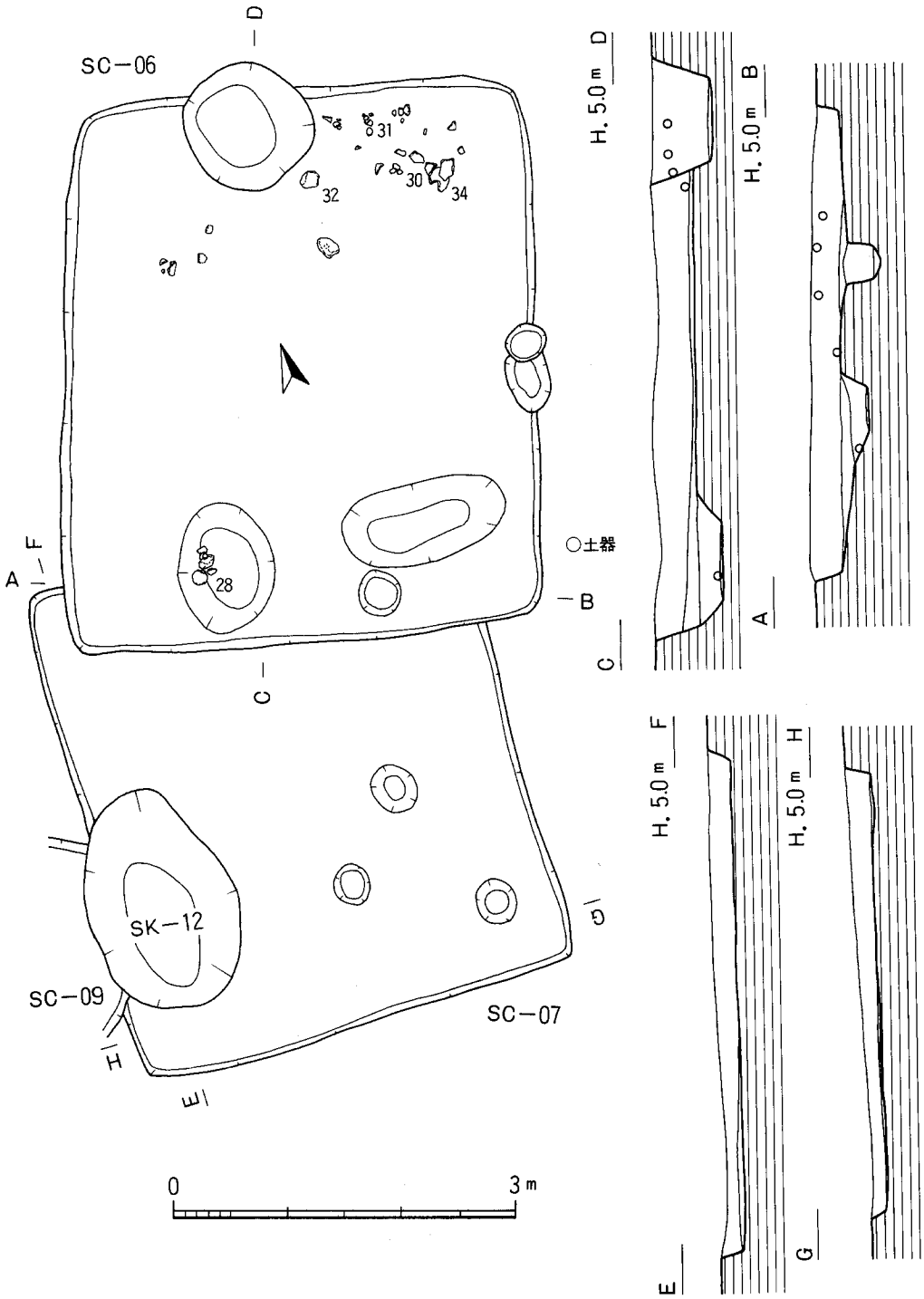


Fig. 12 SC−06・07実測図 (1/60)

複関係にあり、この中で最も古く、SK－12→SC－06・09→SC－07となる。平面形は南北4.43m、東西3.87mを測る方形をなし、面積は17.1m²である。壁高は22cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は平坦であるが、東・南方向に傾斜する。柱穴は南東隅とSC－06南側の柱穴を主柱穴とする4本柱と考えられるが、西壁側では精査したにもかかわらず検出できなかった。

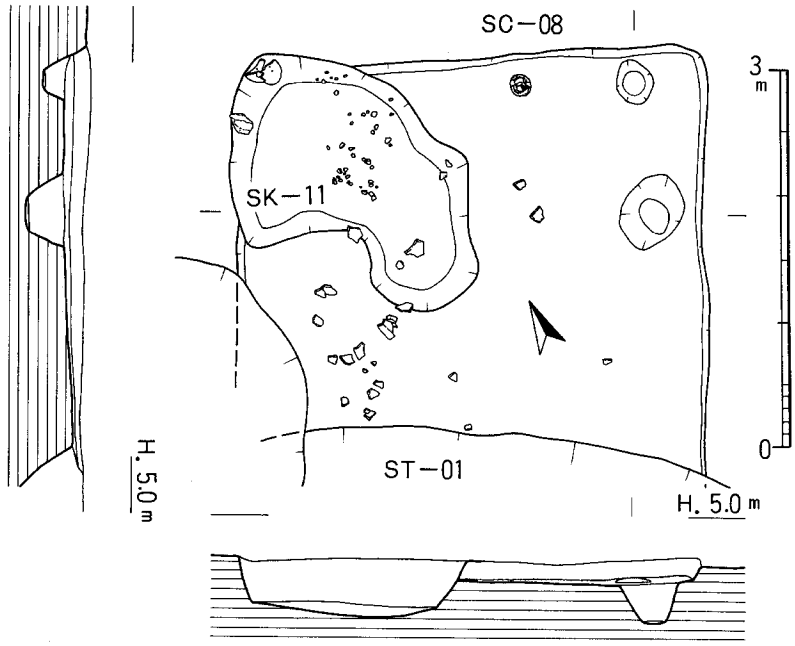


Fig. 13 SC－08実測図（1/60）

遺物の出土は少ない。

SC－08（Fig.13 PL.3）

E－XI区に検出した住居址で、SC－09より南へ2mの距離にある。北西隅は土壙に、南壁はST－01によって大部分が破壊されている。平面形は東西3.74mを測り方形をなすと思われる。面積は12.6m²以上。壁高は17mを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は平坦である。柱穴は東壁際で2個検出した。

遺物は床面上より甕・高坏等を検出したが量的には少ない。

出土遺物（Fig.14）

壺形土器（35）口径12.4cm。口縁部は直口ぎみに外反し、端分布を外方に小さくつまみ出す。胴部はラグビーボール状の長胴形でDII類に属す。口縁部内外と胴部外面は比較的丁寧な研磨を施す。

甕形土器（36）「く」字状の口縁部は短く外反し、ラグビーボール状の長胴の胴部がつく、調整は内外面ともに粗いハケ目。口径18.1cm。AI類。

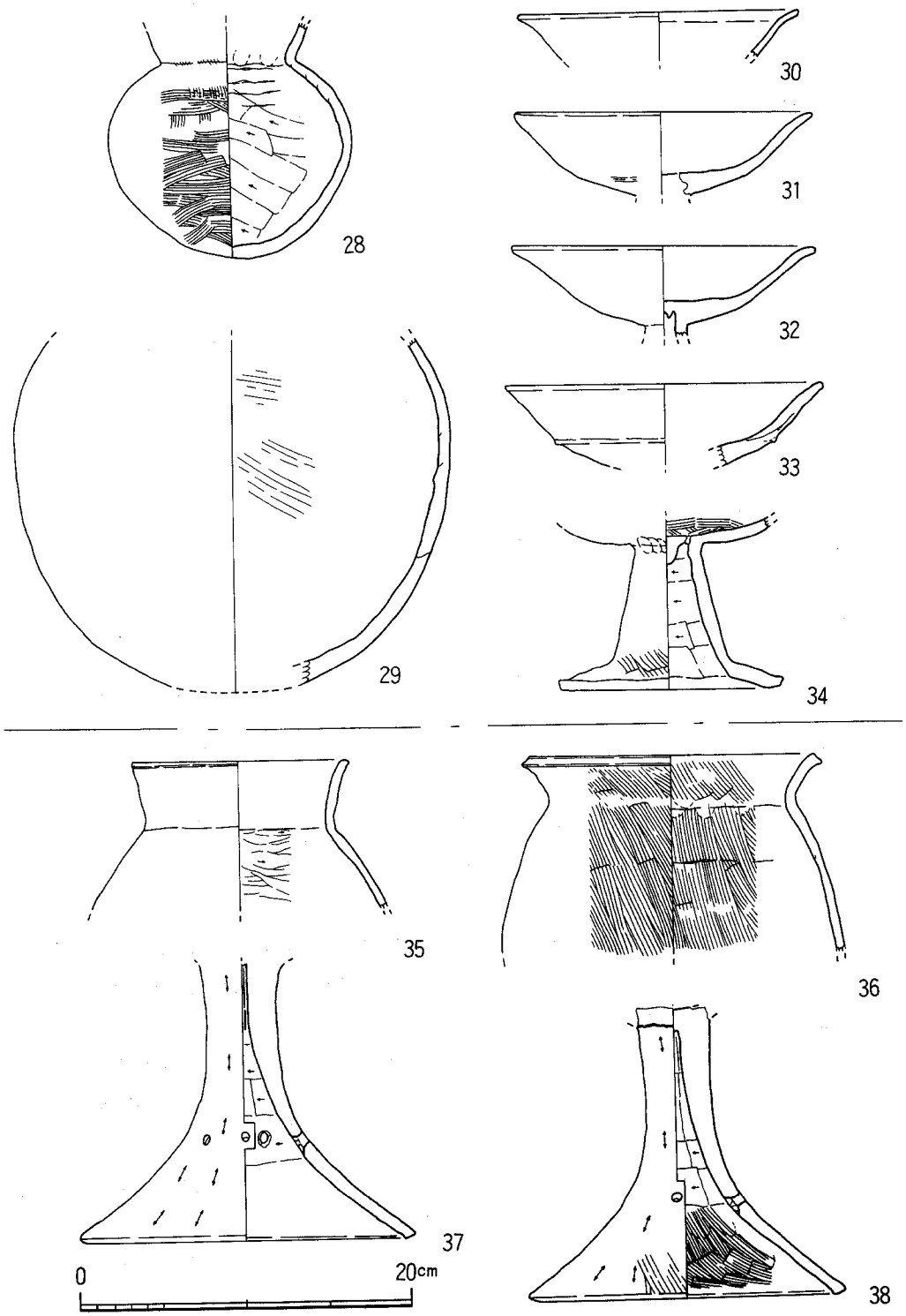


Fig. 14 SC－06・08出土土器実測図（1/4）

高坏（37・38）A類の脚部資料。脚部は細長くのび、裾部はラッパ状に大きく開く。裾端部は内方に小さくつまみだす。外面は丁寧な研磨を施し、下半に円孔を穿つ。底径は37が20.1cm、38が19.4cm。

SC－09（Fig.15　PL.5）

F－XI区に検出した住居址で、ST－01より北へ5mの距離にある。SK－12・SC－07と重複関係にあり、SC－07より新しくSK－12より古い。平面形は南北3.10m、西壁は消失しているが、約3.5mに推定できる長方形をなすものであろう。面積は10.2m²以上。壁高は26cmを測りほぼ垂直に立ち上がる。床面は平坦である。柱穴は東側で3個確認できた。

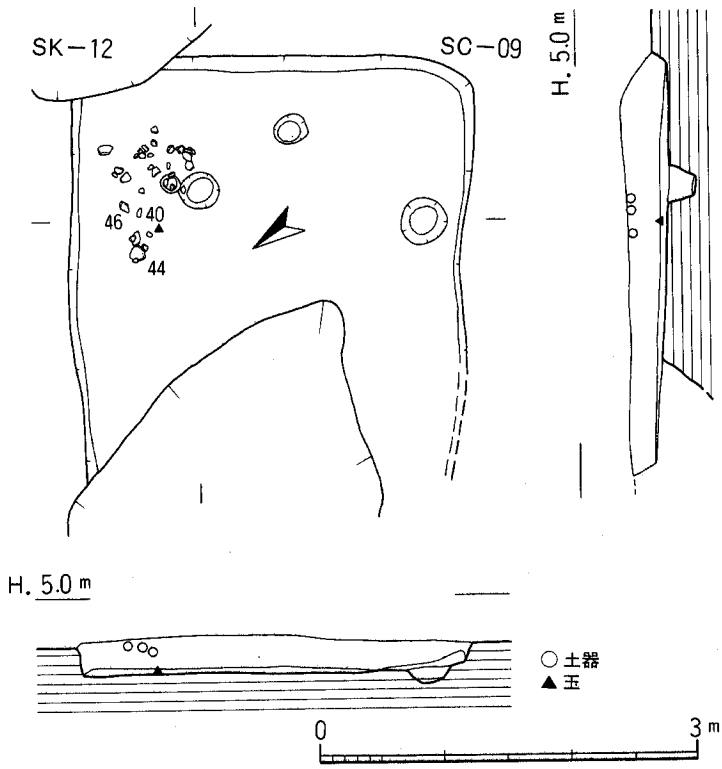


Fig.　15　SC－09実測図（1/60）

遺物は土師器の壺・甕・高坏等があり、北東隅部に集中している。

出土遺物（Fig.16・17）

壺形土器（39・40）39は二重口縁の小型壺である。擬口縁上の口縁部は直口した後に小さく外反する。胴部は扁球形で小さく肩がはる。口径8.7cm。AIII類。40は口径13.3cm。「く」字状の口縁部は長めでストレートに開く。BII類。

甕形土器（41・42）口縁部は内弯ぎみに開くもので、布留系の影響を受けたものである。AIV類。41は口径15.6cmで端部を内側に小さくつまみ出す。42は口径17.6cm。胴部は卵形を呈し、やや薄手。

高坏（43～45）43は口径22.8cm。体部下半に凸帯状の段をつくり、口縁部は反りぎみに開く。C類。44は口径20.1cm、器高13.4cmを測る完形品。体部は下半に屈曲して弱い稜をつくり、口縁部は反りぎみに開く。脚部はストレートにのび、裾部は跳ね上がりぎみに外反する。C類。45は脚部で、裾部はラッパ状に開く。

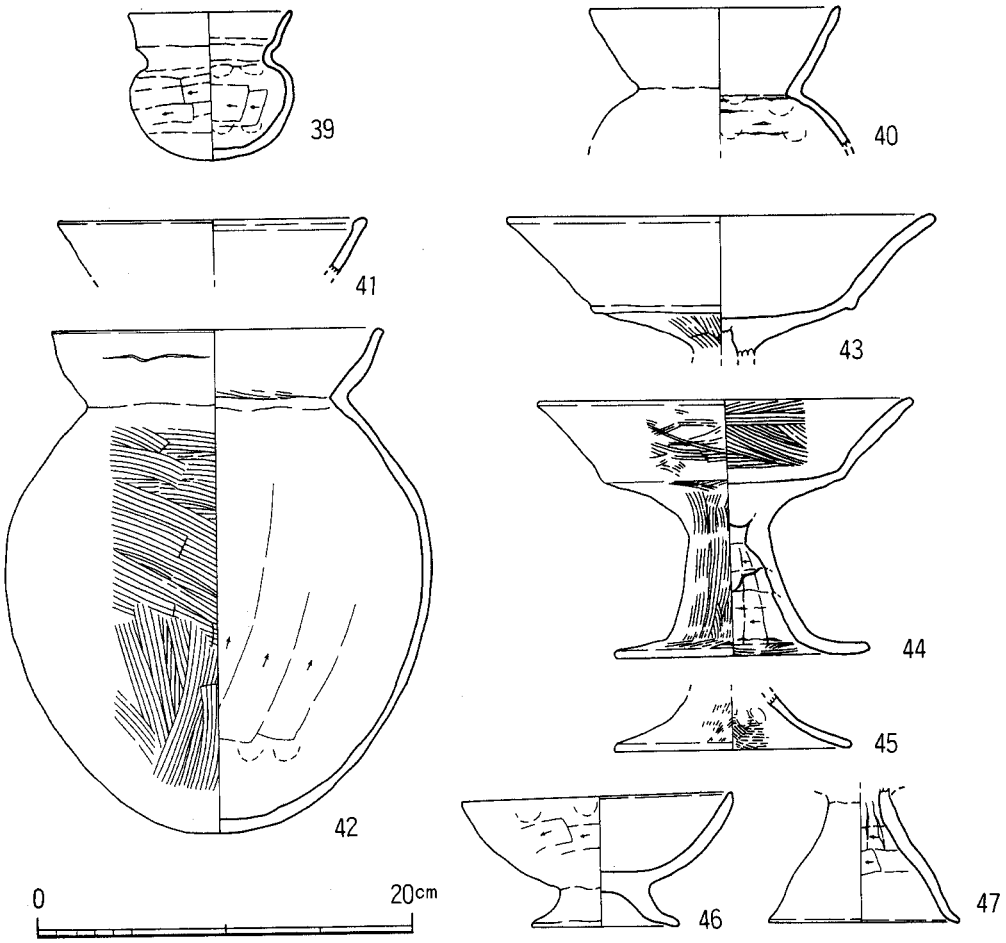


Fig. 16 SC－09出土土器実測図（1/4）

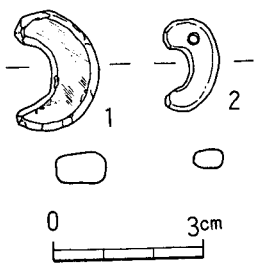


Fig. 17 SC－09
出土勾玉実測図（2/3）

鉢形土器（46）台付の鉢で体部は内弯ぎみに立ち上がる。脚部はずんぐりと短く裾部は屈曲して短く開く。口径14.5cm、器高6.9cm。G類。

器台（47）底径10.3cm。脚部は内弯ぎみに開き、裾部は小さく外方につまみ出す。

勾玉（1・2）1は長さ23.9mm、厚さ5.5mm、重さ3.6gを測る。背部が丸味をもつ半月形をなし、断面形は長方形を呈す。未製品で孔はない。蛇文岩製か。2は長さ18mm、厚さ4mm、重さ1.3gの碧玉製勾玉。「く」字形をなす背部は丸みをおび、尾部はややすぼまる。色調は白いところもあるが緑色を呈す。

SC－10（Fig.18　PL. 6）

E－Ⅺ区に検出した住居址で、ST－01の北西部に接し、南東隅をST－01の周溝によって破壊されている。平面形は南北6.25m、東西5.78mを測る大型の方形で、面積は36.2m²である。壁は遺存状況が良く53cmの高さがあり、急峻に立ち上がる。床面は浅い凹レンズ状である。柱穴は12個あり、P. 1～P. 4を主柱穴とする4本柱と考えられる。

遺物は床面よりやや浮いた状況で、壺・甕・高坏・鉢等が多数出土した。また、南壁際より

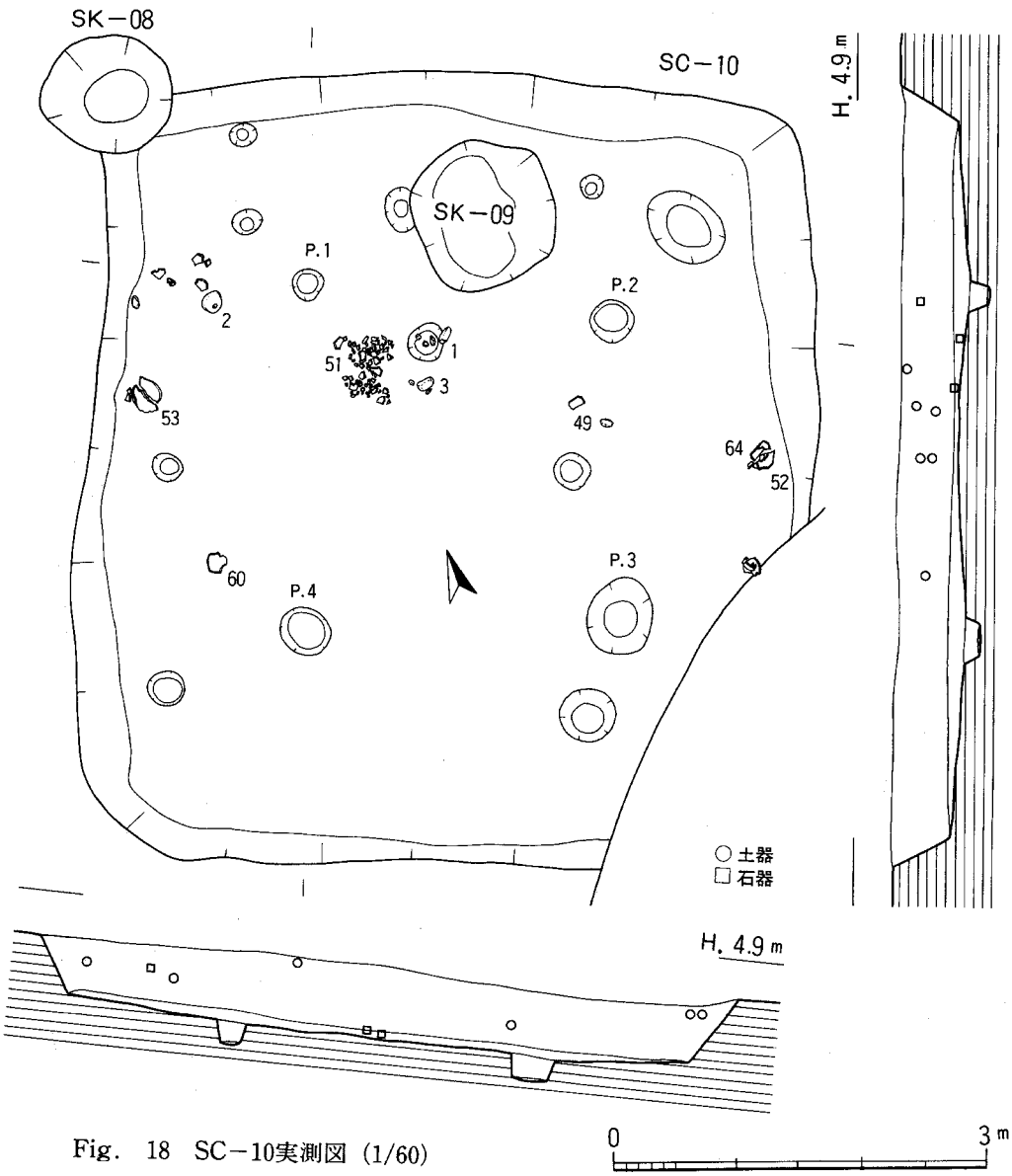


Fig.　18　SC－10実測図（1/60）

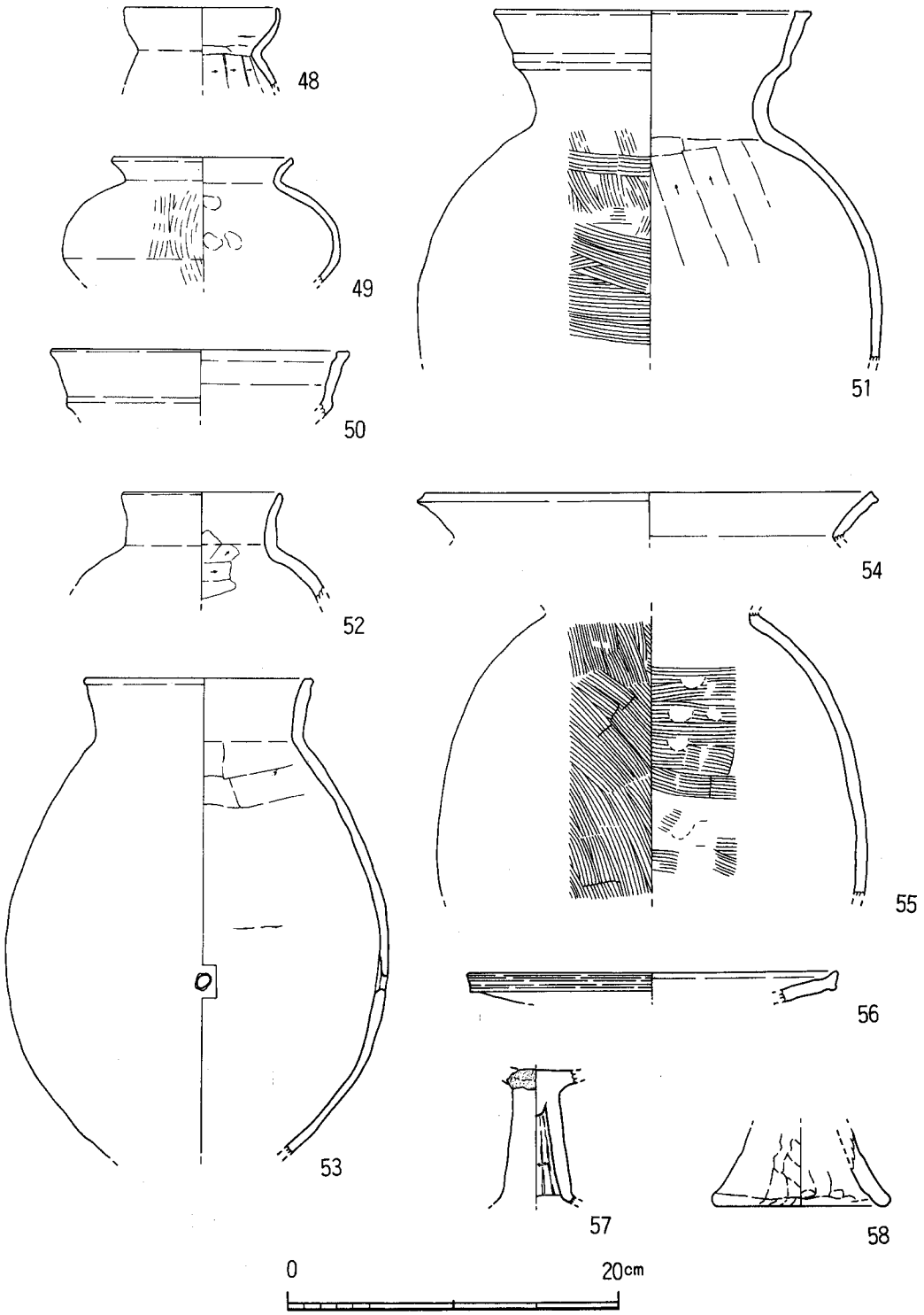


Fig. 19 SC－10出土土器実測図(1) (1/4)

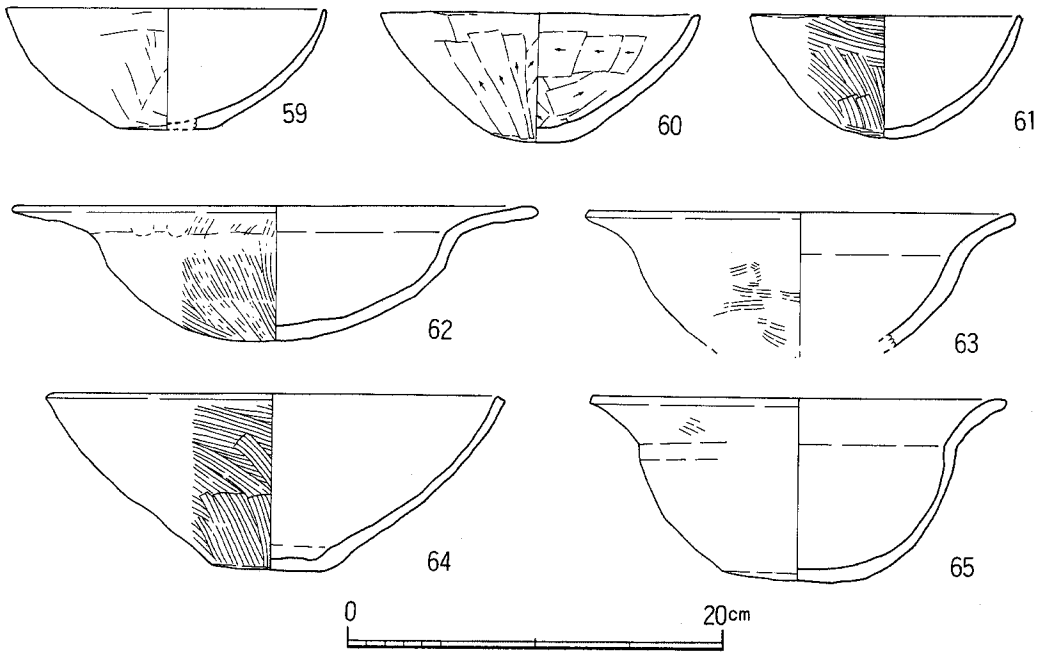


Fig. 20 SC－10出土土器実測図(2) (1/4)

滑石製の大型有孔石錘３個が出土している。

出土遺物 (Fig.19・20・21)

壺形土器 (48～53) 48は小型壺で、口縁部は内弯ぎみに開き、端部は直口する。50・51は二重口縁の壺で擬口縁部は凸帯状の段を有し、直口ぎみに開く口縁部は端部を水平に整えて外方に小さくつまみ出す。胴部は肩のはった球形。ＡⅡ類。52は口径9.4cm。口縁部は直口し、端部小さく外反する。ＤⅠ類。53は口径13.8cm。口縁部は直口して立ち上がり、水平に整えた端部は外方に小さくつまみ出す。胴部は長胴形で、中位に穿孔がある。ＤⅡ類。49は口径10.4cm。「く」字状の口縁部は短く外反し、扁球形の胴部がつく。器高に比べて最大径が大きい。Ｆ類に属する。

高坏 (56・57) 56は口径22.0cm。口縁端部にカキ目状の横凹線を巡らす。吉備系のものであろう。57は細くストレートにのびる脚部でＣ類に属す。

器台 (58) 底径9.8cm。器壁は厚く、裾部はストレートに開く。Ａ類。

鉢形土器 (59～65) 63.65は深手の鉢で、口縁部は鍔状に外反する。Ｂ類。62はやや浅めの鉢で、口縁部は鍔状に長くのびて開く。口径27.8cm、器高7.3cm。Ｃ類。59～61・64はＧ類に属するもので、体部は内弯ぎみに膨らみ、口縁部は直口ぎみになる。底部は平底ぎみのものと丸底ぎみのものがある。

石錘（1～3）いずれも滑石製の大型有孔石錘である。形状はやや楕円形で中央部に内径2.0～2.3cmの孔を穿ち、断面形は扁平な不整六角形。整形は粗く面取りした後に側縁はノミ状工具によって上下より鋭角的に削り出す。1は径19.0×14.3cm、厚さ5.2～6.4cm、重さ2.87kg。2は径18.0×14.8cm、厚さ4.9～5.8cm、重さ1.62kg。3は径15.2×13.4cm、厚さ5.4～6.4cm、重さ2.17kg。この外に図示していない破片資料がある。

SC－11（Fig.22　PL.6）

E－Ⅲ区に検出した住居址で、ST－01の南面に接してあり、南壁は攪乱を受けている。平面形は南北5.17m、東西3.97mを測る長方形をなし、面積は20.5m²である。壁高は40cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は浅い凹レンズ状である。柱穴は3個あり、主柱穴は長軸線上に並ぶP.1、P.2の2本と考えられる。

遺物は量的には少ないが、弥生時代後期の長頸壺・二重口縁壺・高坏等がP.1近くに比較的集中して出土した。

出土遺物（Fig.23）

壺形土器（66～69）66は長頸壺で、頸部は細長くラッパ状にのび、口縁部は小さく外方に開く。BⅠ類。61は二重口縁壺で、口縁部は内傾する。68・69は同タイプの胴部で、68は最大径部に三角凸帯が巡る。AⅠ類。

甕形土器（70～72）口縁部は短く「く」字状に外反し、長胴形の胴部をもつものでAⅠ類に属する。口径は70が20.0cm、72が16.9cmを測る。73は凸レンズ状の平底をもつ底部資料。

高坏（74・75）74は脚部が短くストレートにのび、裾部は強く屈曲して水平に開く。C類。75は底径20.0cm。脚部は朝顔状に大きく開き、端部は

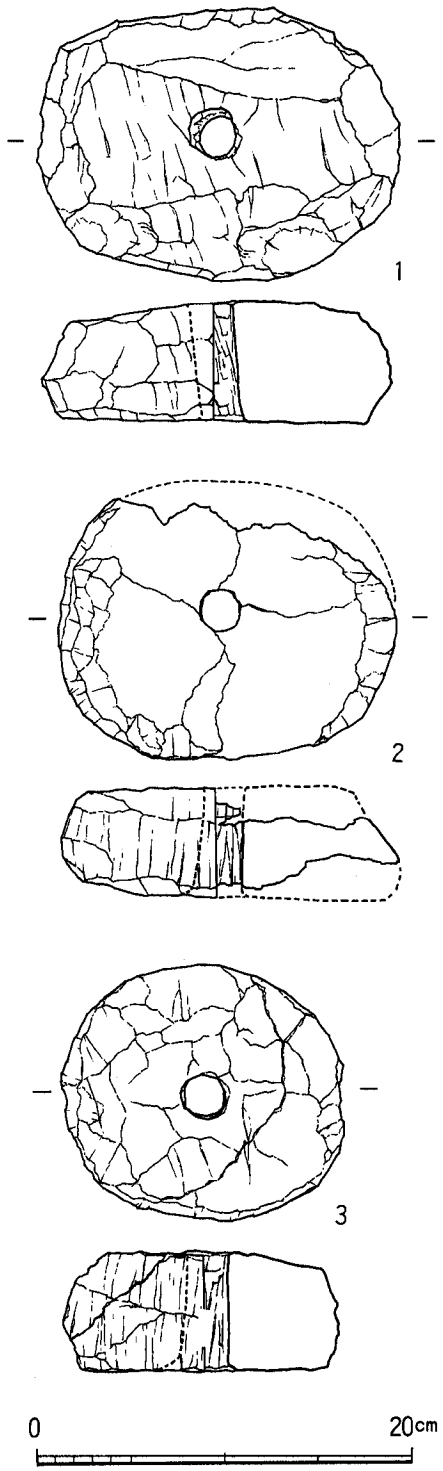


Fig.　21　SC－10出土石器実測図（1/4）

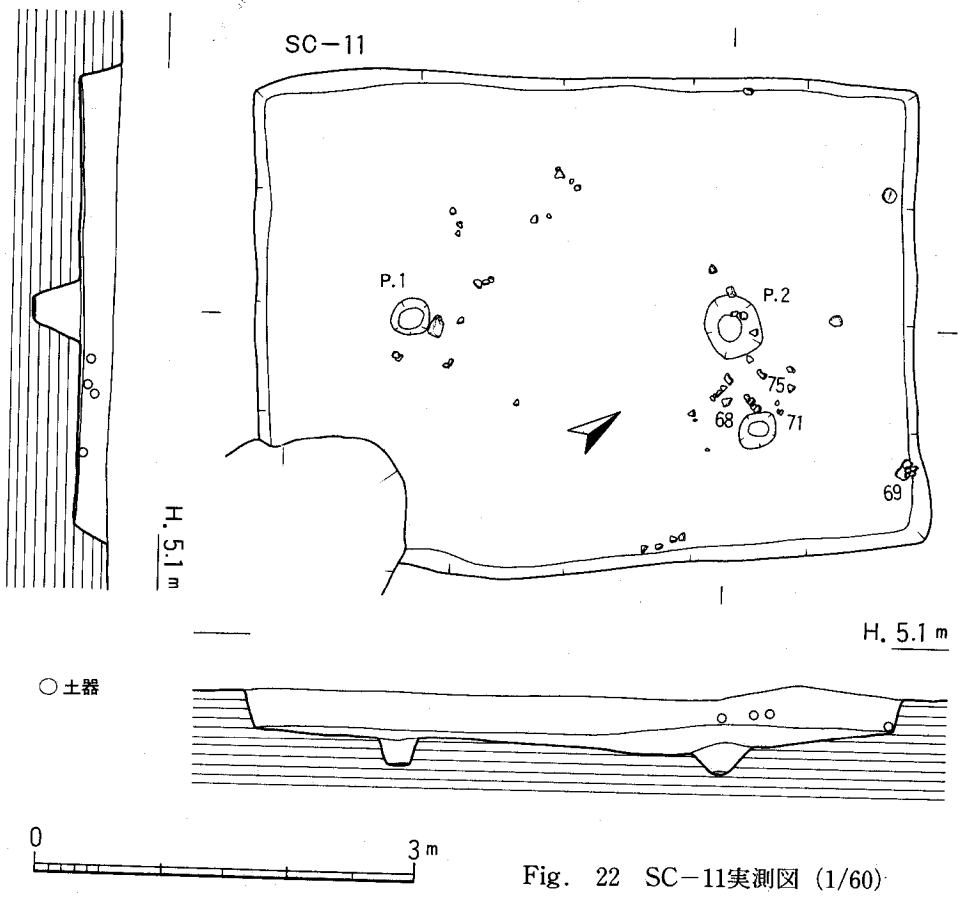


Fig. 22 SC－11実測図（1/60）

小さくつまみ出す。中位に焼成前の穿孔がある。A類。

SC－12（Fig.24 PL.7）

E－Ⅻ区に検出した住居址で、ST－01の南に接し、北半分はST－01の周溝によって破壊されている。平面形は東西4.90mで、南北が5.50mに復原出来る長方形をなす。壁高は遺存状況がよく64cmを測り、ややゆるく傾斜して立ち上がる。床面は、浅い凹レンズ状である。柱穴は3個ある。南西隅には120×70cmの楕円形を呈する、深さ20cmの浅い土壙がある。

遺物は壺・甕・高坏等のほか砥石も出土している。

出土遺物（Fig.25・26）

壺形土器（76～78）76は口径8.1cmの長頸壺。口縁部はラッパ状に開く。BI類。77・78はBIII類の小型壺である。「く」字状の口縁部は短めで、反りぎみに開くものである。口径は77が10.6cm、78が10.5cm。

甕形土器（80～85）81～85はAI類のものである。口縁部は「く」字状に外反するもので、端

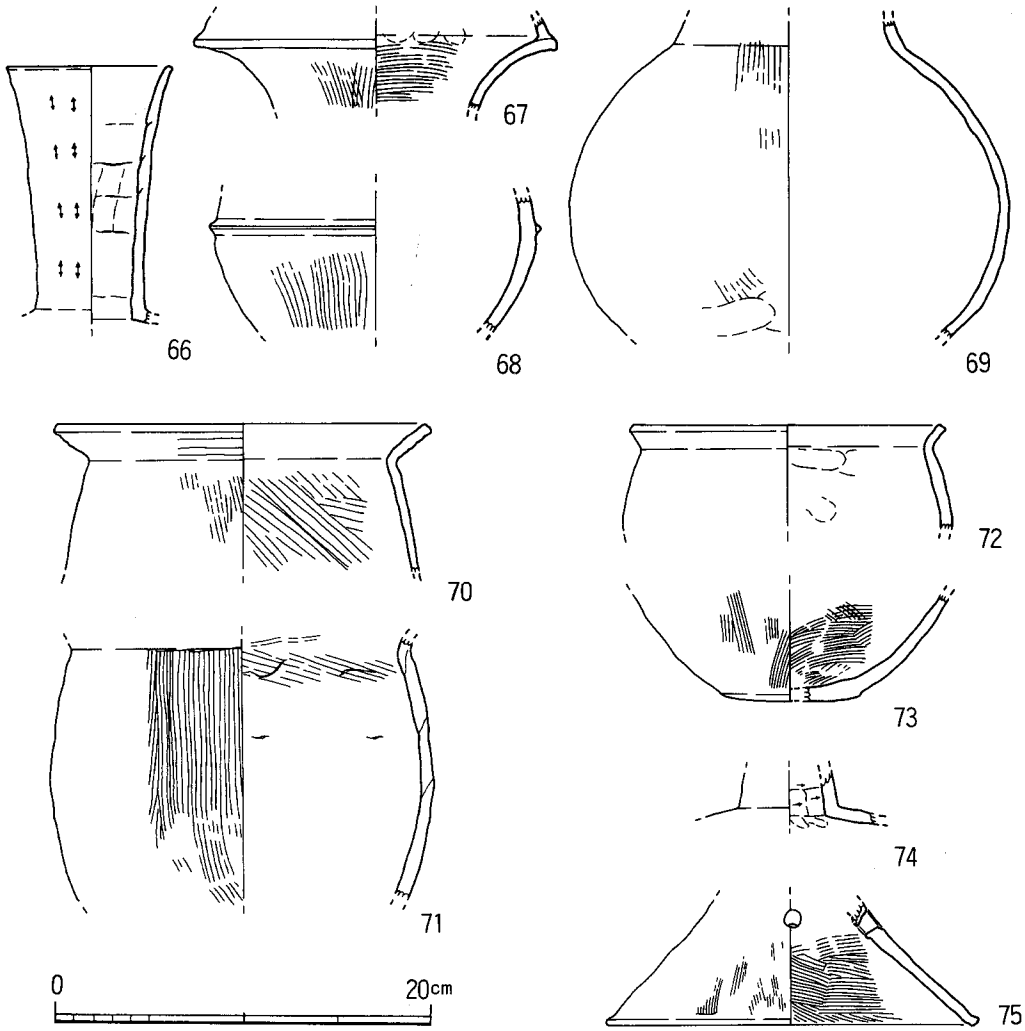


Fig. 23 SC－11出土土器実測図（1/4）

部を小さくつまみ上げるもの(81・82)と平坦に仕上げるもの（83・84）とがある。80は口縁部がやや上方にストレートにのびるものである。球形の胴部に丸底の底部がつくものである。AIII類。

鉢形土器（79）「く」字状の口縁部は短く反りぎみに開く。胴部は半球形で、丸底ぎみの小さな底部がつく。D類。

高坏（86・87・89・90）いずれもA類のものである。86はやや深手のもので口径25.0cm。内弯ぎみに立ち上がる体部は中位で弱く屈曲して稜をつくり、口縁部は直口ぎみに小さく外反する。87は口径26.0cm。外反する口縁部は端部を水平に小さくつまみ出す。90は大きく朝顔状に開く

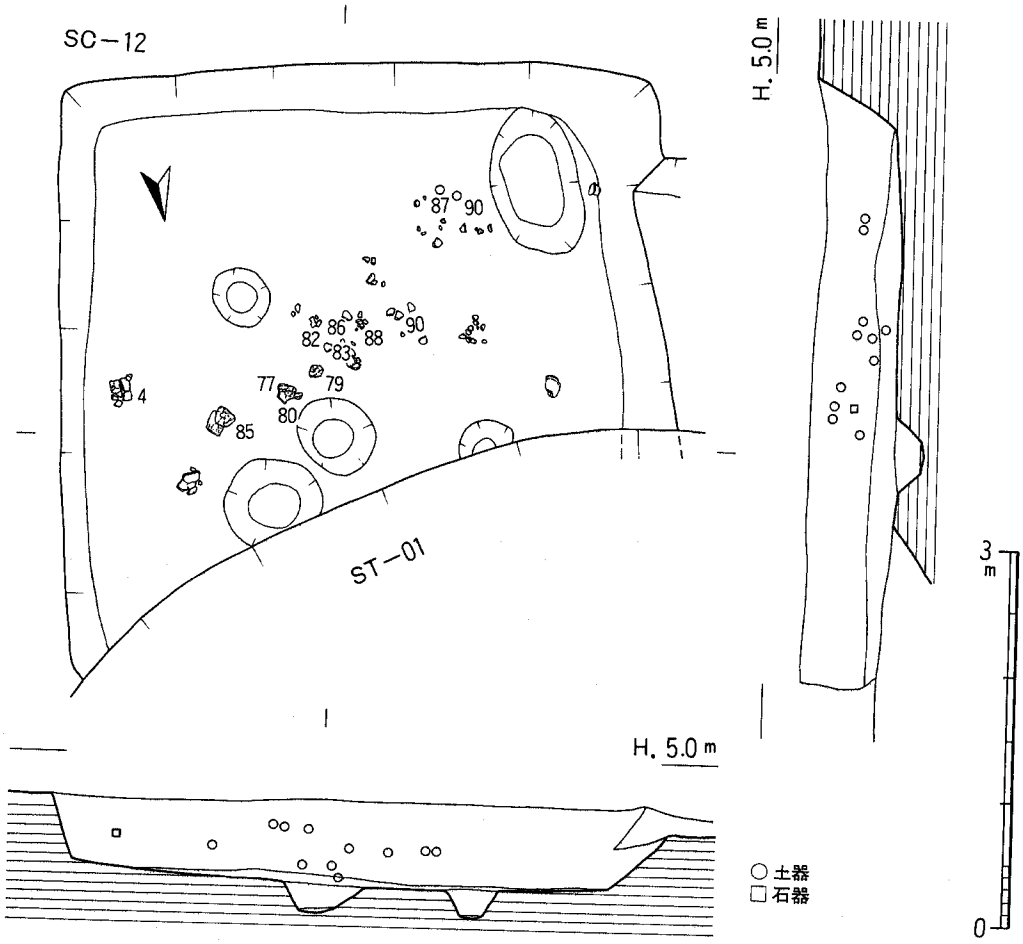


Fig. 24 SC－12実測図（1/60）

脚部で底径19.3cm。

器台（88）小型のもので受け部は内弯ぎみに小さく開くものであろう。B類。

土匙（91）手捏ねの基部を欠く資料である。長さ9.7cm。断面形は台形に近い方形。

砥石（4）扁平な板状の荒研用砥石で両端部を欠く。砥面は表裏と両側面の4面が使用され、表面は中央がわずかに凹んでいる。研砥の機能とともに作業台的機能も兼ねて使用されたものと思われる。砂岩質で長さ19.5cm、幅15.8cm、厚さ5.0cm。

SC－13（Fig.27 PL.7）

F－Ⅻ区に検出した住居址で、ST－01より南東5mの距離にあり、南東隅は土壙に切られる。平面形は東西4.11m、南北3.88mを測る方形をなし、面積は15.9m²である。壁高は43cmを

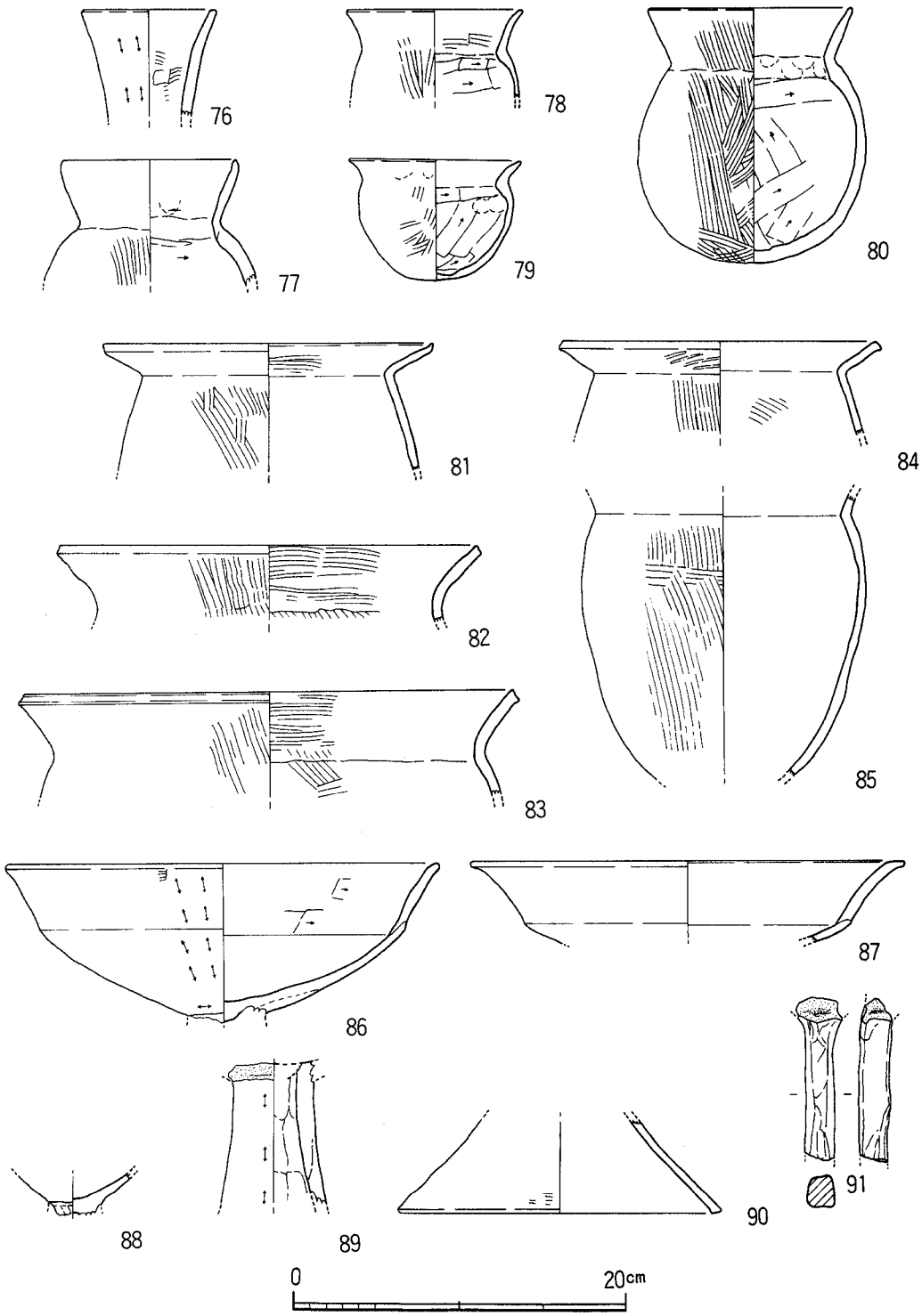


Fig. 25 SC－12出土土器実測図（1/4）

測りゆるく傾斜して立ち上がる。床面は平坦である。柱穴は精査したが検出できなかった。北西隅には85×75cm、深さ18cmの浅い楕円形土壙がある。

遺物は甕・高坏等があるが量的には少ない。

出土遺物（Fig.28）

壺形土器（92・93）92は二重口縁壺。口縁部は小さく膨らんで鋭く内傾する。口径20.4cm。93は同タイプの胴部資料で頸部との境に三角凸帯が1条巡る。AI類。

甕形土器（94～96）いずれもAI類に属する。「く」字状の口縁部は反りぎみに開き、平坦に整えた端部は外方に小さくつまみ出す。胴部は長胴形。口径は94が19.4cm、96が23.6cm。95は底部資料で底径4.5cm、凸レンズ状の平底。

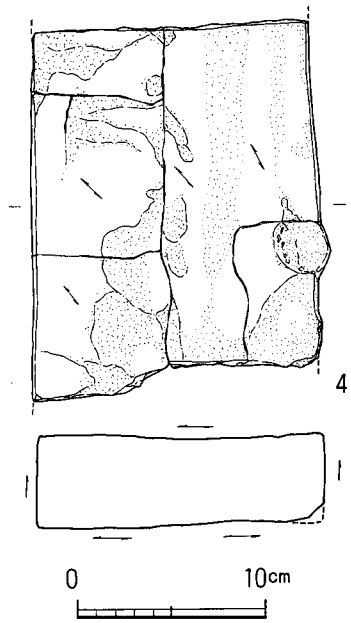


Fig. 26 SC－12出土石器実測図（1/4）

高坏（97）口径28.5cm。内弯ぎみに立ち上がる坏部は中位で屈曲して弱い稜をつくり、口縁部は一旦直口した後反りぎみに開く。口縁端部は内方に小さくつまみだす。内面は暗文状に粗い研磨を加えている。A類。

SC－14（Fig.27 PL.8）

E－Ⅻ区に検出した住居址で、ST－01の西に接しており、東側半分以上をST－01の周溝によって破壊されている。平面形は南北が2.05mあり、東西も2.0m余の小型の方形と推定される。壁高は24cmを測り、急峻に立ち上がる。床面はほぼ平坦である。柱穴は精査したが検出できなかった。

遺物はほとんどなく、小礫石が比較的多く混入していた。

出土遺物（Fig.28）

甕形土器（98）口径24.3cm。「く」字状の口縁部は短く外反し、平坦に整えた端部は外方に小さくつまみ出す。胴部は長胴形。調整は内外面とも粗いハケ目。AI類。

SC－15（Fig.27 PL.8）

E－Ⅻ区に検出した住居址で、ST－01の東側封土下にある。東側はST－01の周溝（葺石）に、南側は埋設管によって破壊され、北西のコーナー（3.40×3.0m）を残すのみであるが、復原すれば一辺4mほどの方形となるものであろう。壁高は25cmを測り、ゆるく傾斜して立ち上がる。床面は平坦で、2個の柱穴のほか中央部に径1.35m、深さ10cmの浅い土壙がある。

遺物は量的には少ないが、壺・甕・鉢・高坏・器台等が土壙を中心にまとまって出土した。

出土遺物（Fig.29）

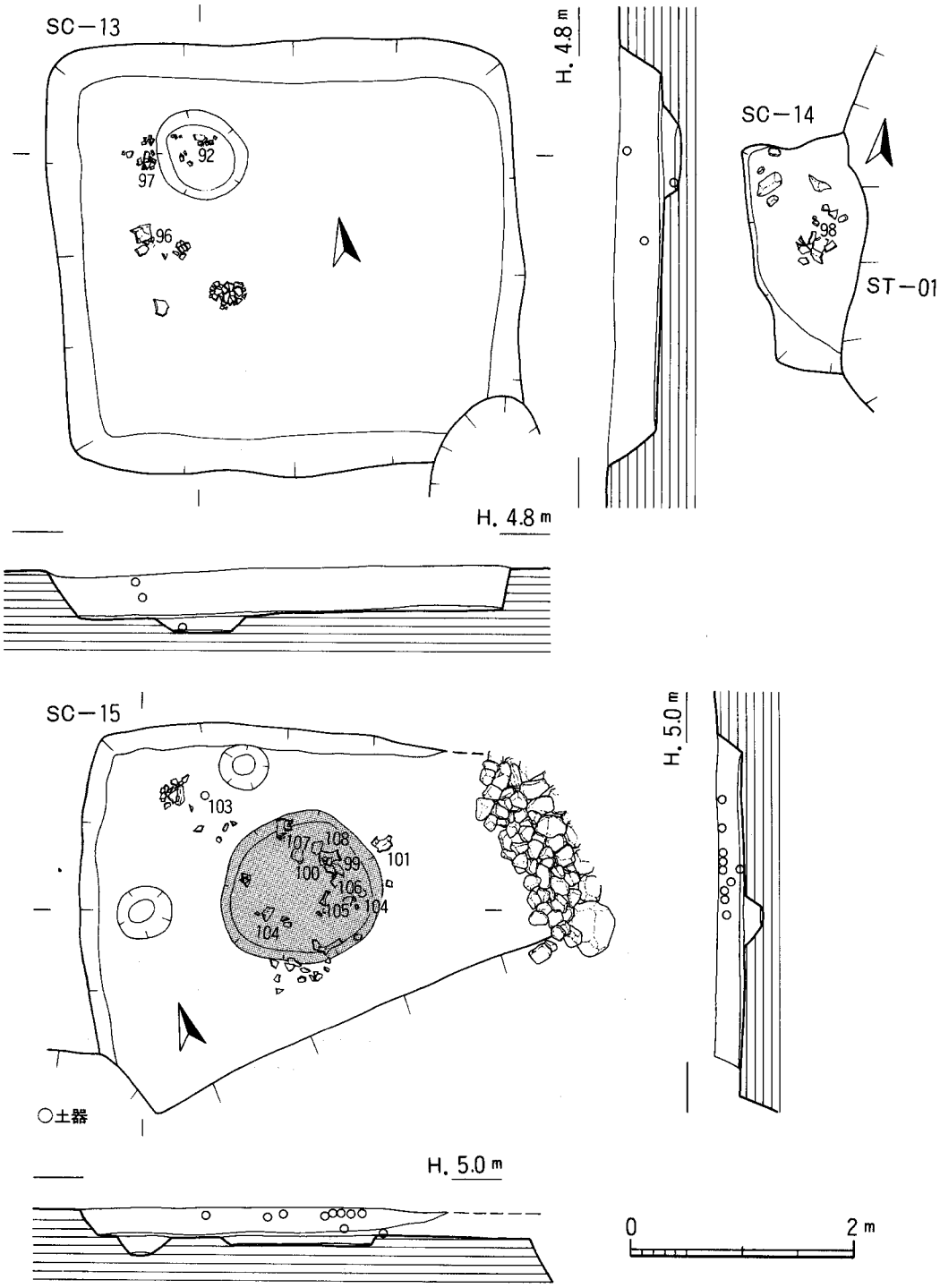


Fig. 27 SC－13・14・15実測図（1/60）

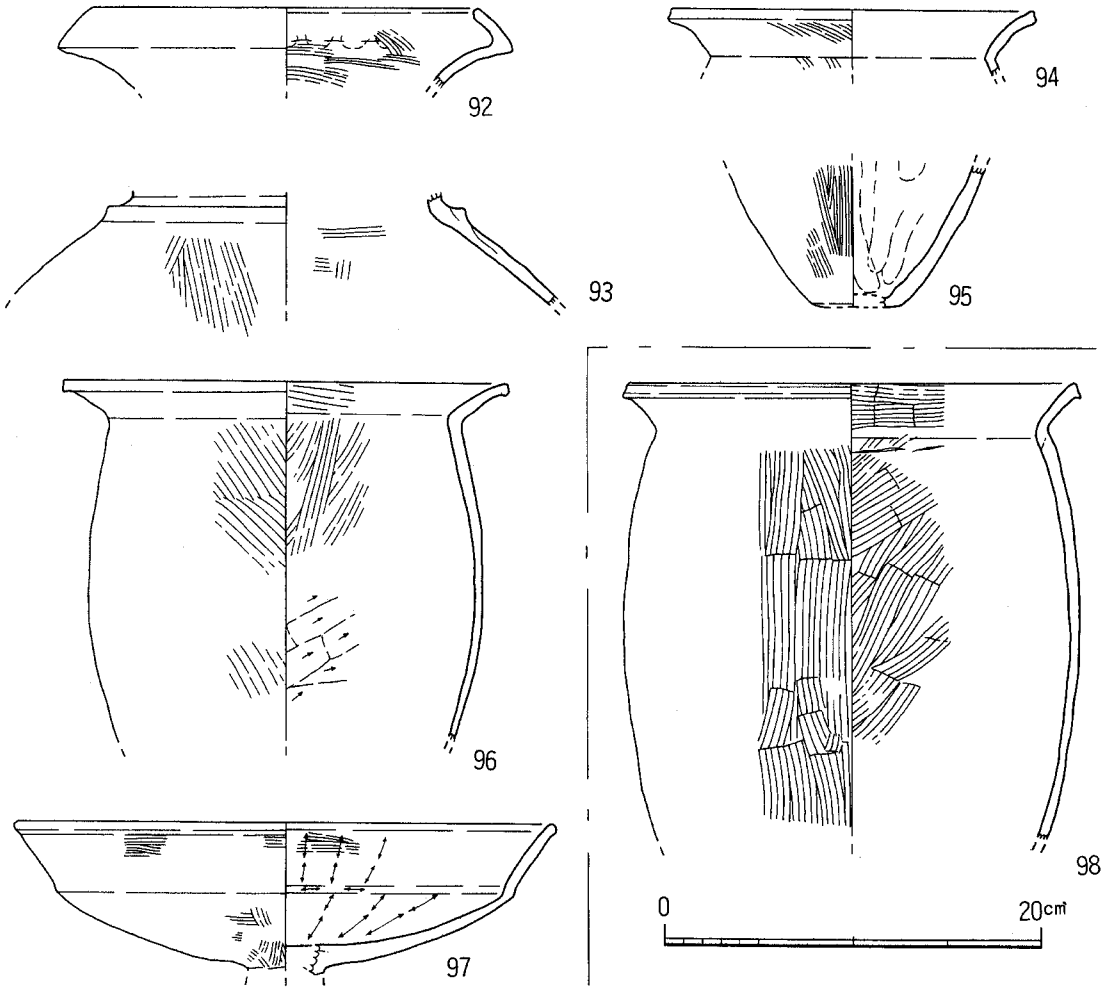


Fig. 28 SC－13・14出土土器実測図 (1/4)

壺形土器 (99～101) 99はBI類の長頸壺。口頸部は細長くラッパ状に開く。外面は縦方向の研磨を施す。口径11.6cm。100は小型壺。「く」字状の口縁部は長く外方に開き、端部は薄くなる。胴部は玉葱状の扁球形。口径10.1cm。BIV類。101は口径21.7cm。口縁部はラッパ状に大きく開き、端部は平坦に整えている。調整は内外面ともに粗いハケ目。EI類。

甕形土器 (102) 口径18.9cm。「く」字状の口縁部は短くストレートに外方に開く。AI類。

鉢形土器 (103) 口径33.3cm、底径6.4cm、器高9.0cm。口縁部は鍔状に長く外方に開く。胴部は扁平な半球形で、小さな凸レンズ状の底部がつく。C類。

高坏 (104～106) 104は口径30.2cm、底径18.2cm、器高24.4cm。坏部は浅めで、口縁部は屈曲した後反りぎみに外方に開き、平坦に整えた端部は外方に小さくつまみ出す。105は底径10.6

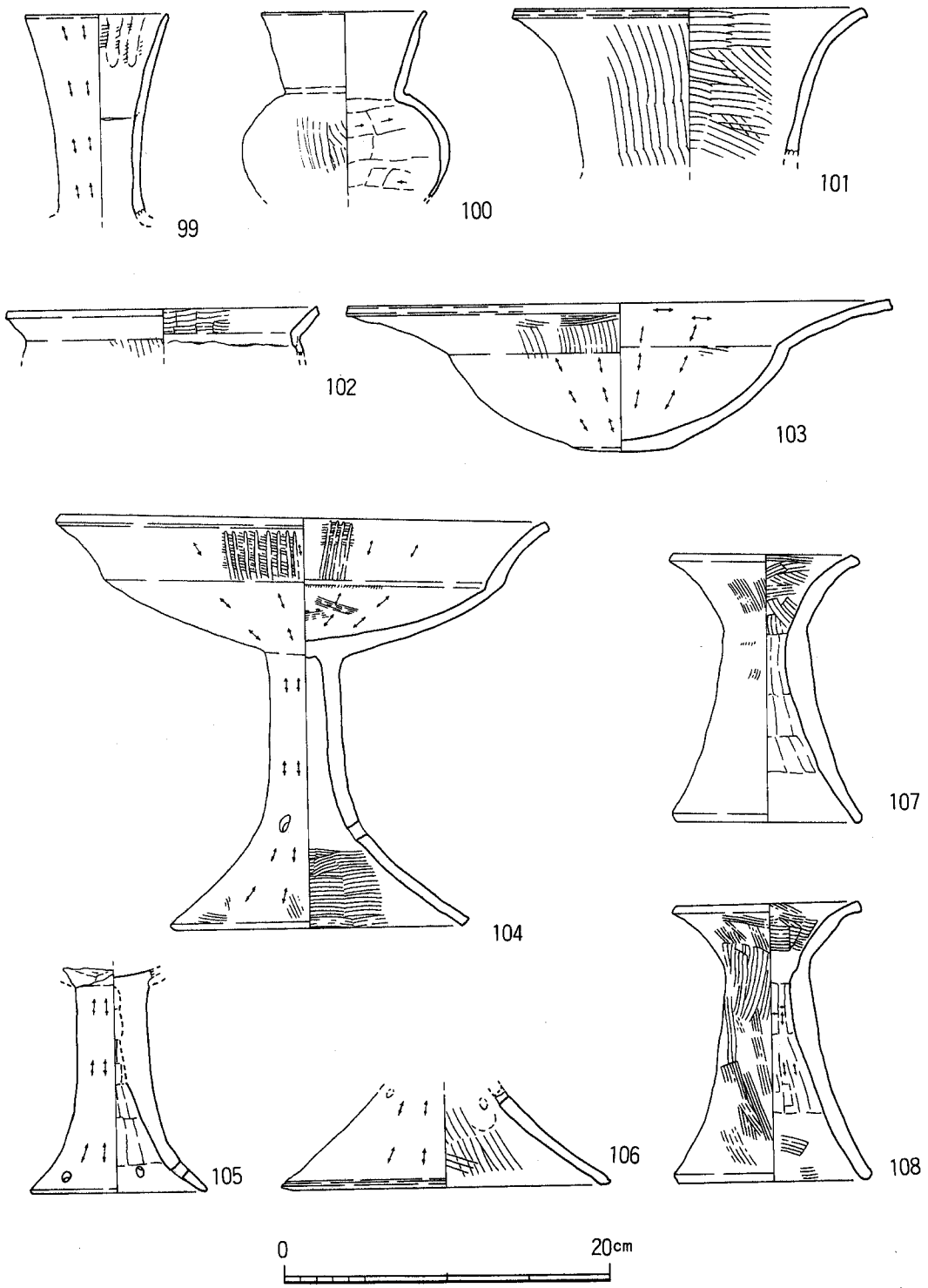


Fig. 29 SC－15出土土器実測図（1/4）

cm。脚部は細長くラッパ状に開く。裾部に穿孔がある。106は底径20.0cm。裾部はラッパ状に開く。平坦に整えた端部は水平に近く、端部は内方に小さくつまみ出す。中位に穿孔がある。いずれもA類。

器台（107・108）いずれもA類。受け部はやや反りぎみに開き、脚部はラッパ状に開く。端部は平坦に整え、受け部は外方に小さくつまみ出す。調整は内外面ともに粗いハケ目。内面中央部はヘラケズリ。

SC－16（Fig.30　PL.9）

E－Ⅶ区に検出した住居址で、SC－20より北東へ5mの距離にある。平面形は南北4.90m、

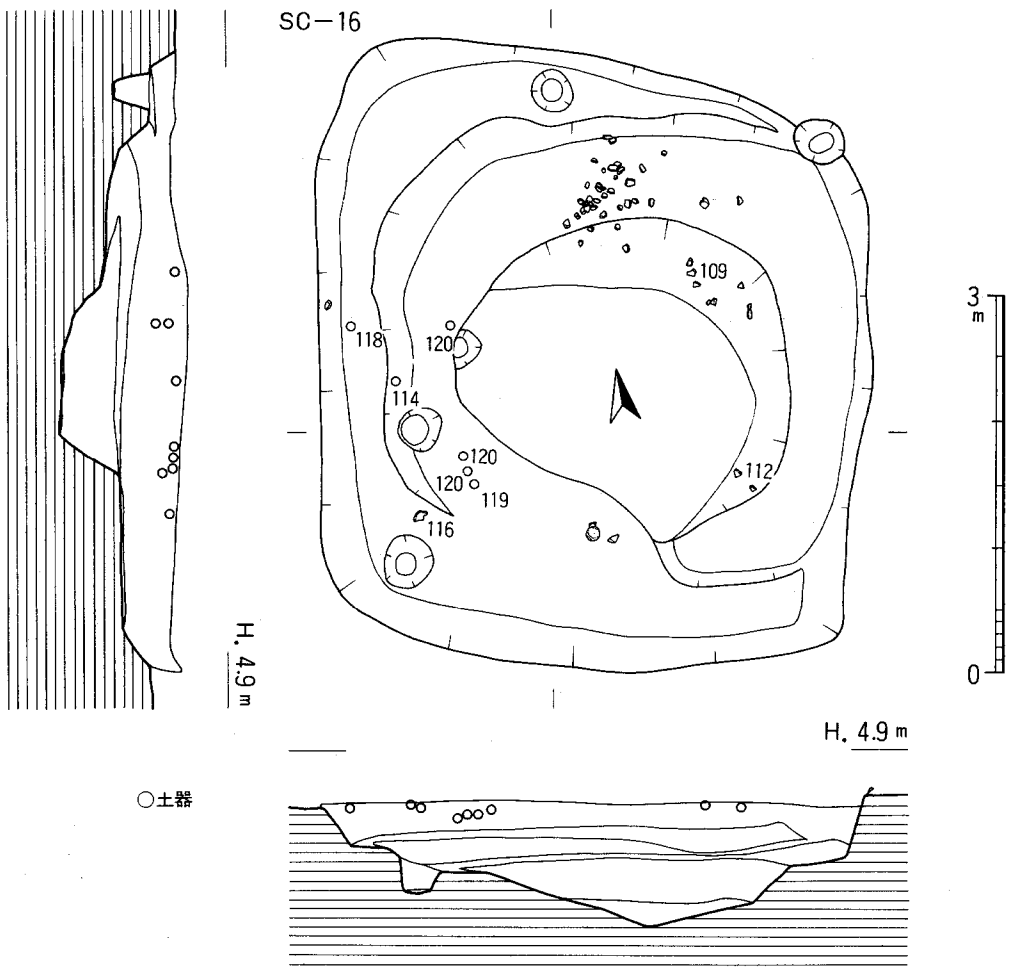


Fig.　30　SC－16実測図（1/60）

東西4.42mを測る方形をなし、面積は21.6m²である。壁高は48cmを測り、急峻に立ち上がる。床面は浅い凹レンズ状であるが中央部は攪乱によって大きく破壊されている。北西壁側には弧状に幅の狭いベット状の段がつく。柱穴は5個あるが主柱穴は明確ではない。

遺物は壺・甕・高坏・砥石等があるが量的には少ない。陶質土器の甕小片が1点出土している。

出土遺物 (Fig.32)

壺形土器 (109) 口径9.1cmの小型壺。「く」字状の口縁部はストレートに開く。胴部は球形。BIII類。

甕形土器 (110～114) 110・111はAII類。「く」字状の口縁部は短く外反する。口径は110が12.8cm、111が12.2cm。112・113は布留系の影響を受けたAIV類。「く」字状の口縁部は内弯ぎみに立ち上がり、端部を内方に小さくつまみ出す。口径は112が15.0cm、113が15.8cm。114は同タイプの胴部上半資料である。

高坏 (115～119) 115は口径23.3cm。坏部はわずかに膨らんで外方に開く。A類。116～119はC類に属する。116は口径20.6cm。体部下半に段を作った後に口縁部は反りぎみに外方に開く。119は底径16.0cm。脚裾部は朝顔状に大きく開く。調整は内外面ともにハケ目。

陶質土器 (120) 小型甕の肩部資

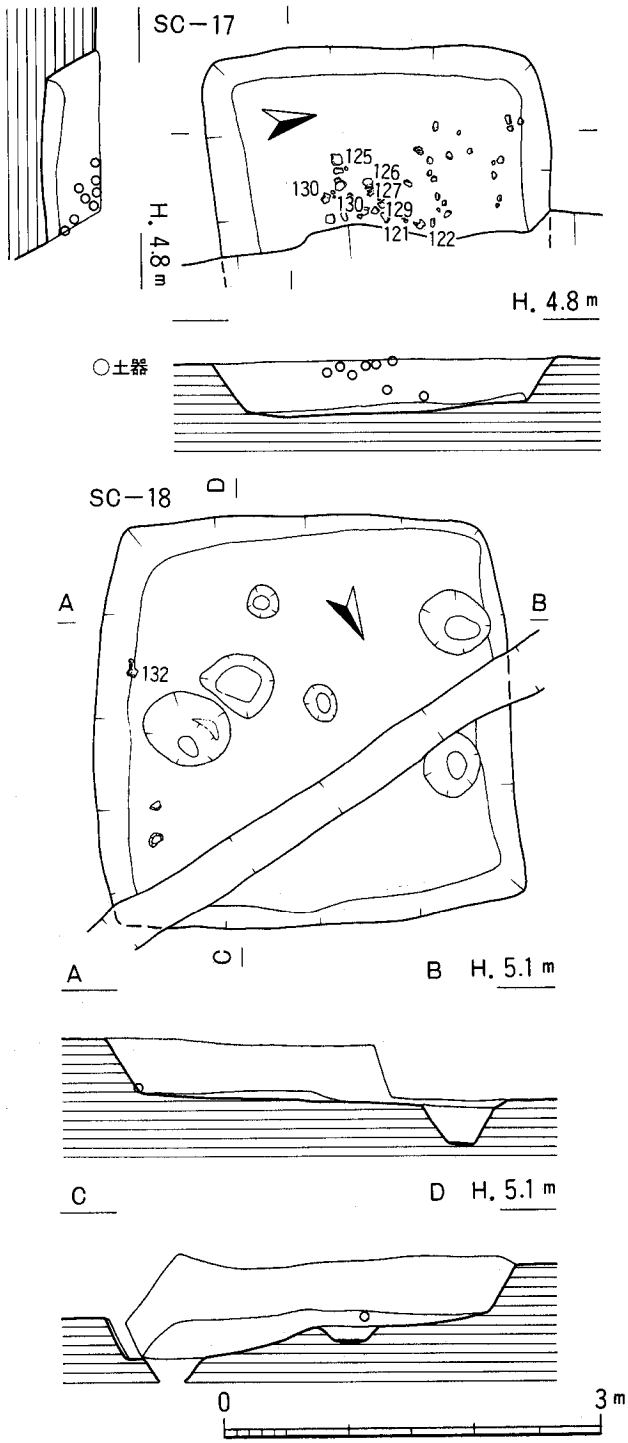


Fig. 31 SC－17・18実測図 (1/60)

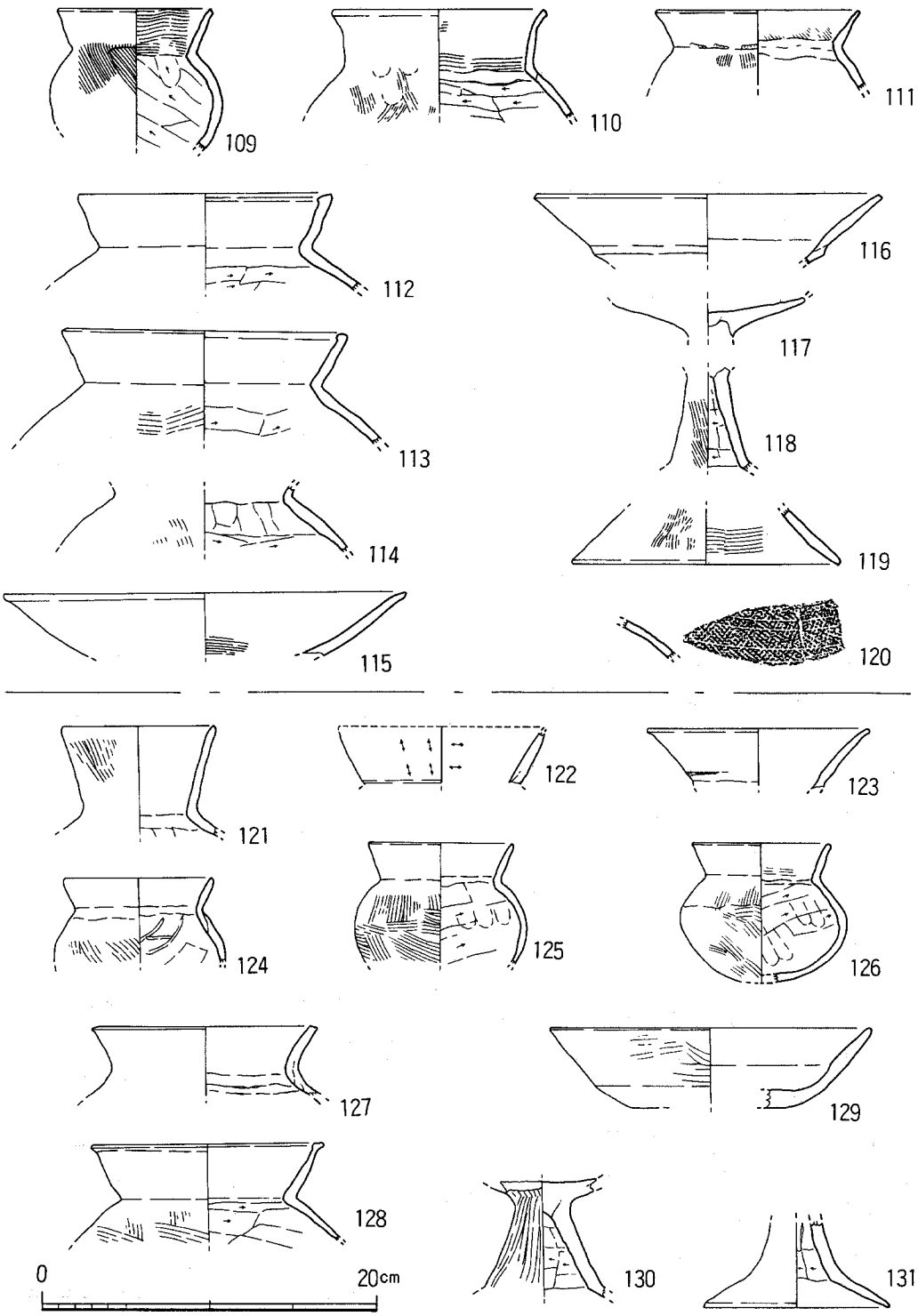


Fig. 32 SC－16・17出土土器実測図 (1/4)

料。外面は縄蓆文の叩き目後に横凹線が巡る。内面はナデ。

SC－17 (Fig.31　PL.10)

F－IX区に検出した住居址で、SC－16より北へ3mの距離にあり、東半分は攪乱を受けている。平面形は南北が2.73mを測り東西もほぼ同規模の小型の方形をなすと推定される。壁高は38cmを測り、ゆるく傾斜して立ち上がる。床面は浅い凹レンズ状である。柱穴は精査したが検出できなかった。

遺物は壺・甕・高坏等があるが量的に少ない。

出土遺物 (Fig.32)

壺形土器 (121～126) いずれも小型壺である。121は口径9.2cm。「く」字状の口縁部はストレートに長くのびる。BI類。122は口縁部がやや内弯ぎみにのびる。123は口径13.2cmで口縁部は反りぎみに開く。124～126はいずれもBIII類に属する。「く」字状の口縁部はやや反りぎみに短く開き、やや肩のはった球形の胴部がつく。調整は外面がハケ目、内面がヘラケズり、口径は124が8.9cm、125が8.6cm、126が8.2cm。

甕形土器(127・128)いずれもAIV類に属する。127は口径13.4cm。128は口径13.6cm。内弯ぎみに開く「く」字状の口縁部は端部を水平に整え外方に小さくつまみ出す。

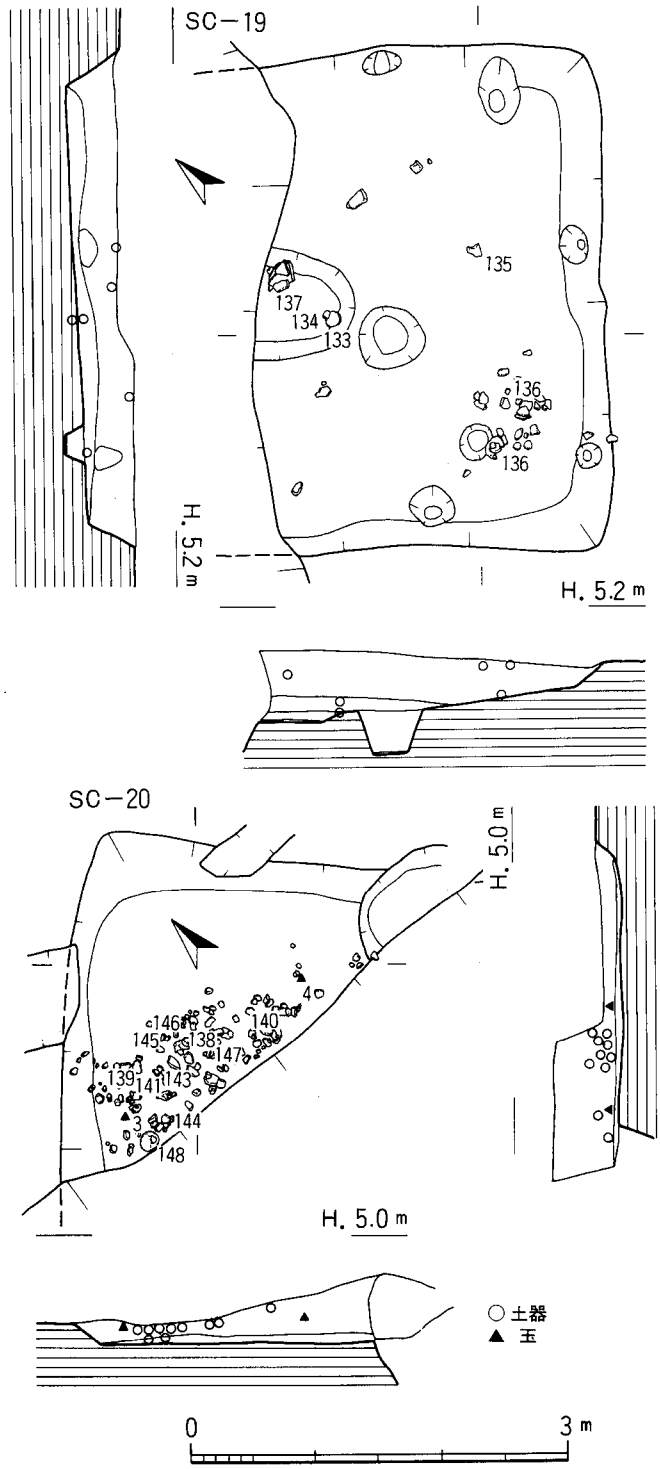


Fig. 33　SC－19・20実測図 (1/60)

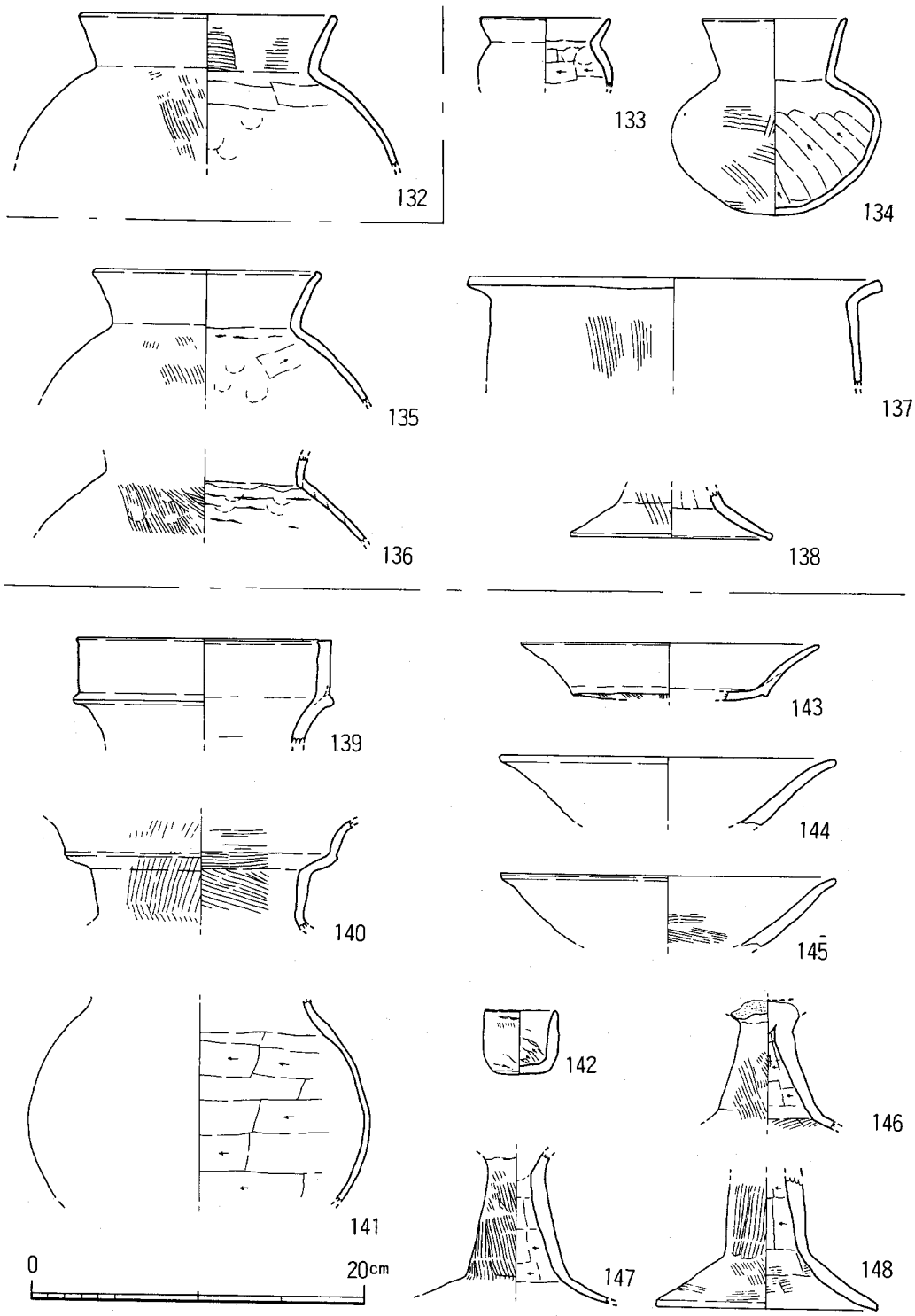


Fig. 34 SC－18・19・20出土土器実測図 (1/4)

高坏（129～131）129は口径18.6cm。坏部下半は平坦で、口縁部は直線的に開く。131は底径11.0cm。脚部は短く、裾部は屈曲して大きく外方に開く。

SC－18（Fig.31　PL.10）

F－IX区に検出した住居址で、SC－19より北東へ4mの距離にある。平面形は東西3.31m、南北3.25mを測る方形をなし、面積は10.8m²である。壁は遺存状況がよく高さ49cmを測り、ゆるく傾斜して立ち上がる。床面はほぼ平坦であるが北側にやや傾斜する。柱穴は6個ある。

遺物は壺・甕・高坏等があるが量的に少ない。

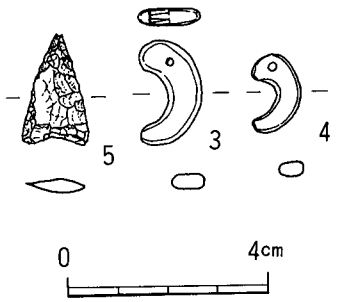


Fig.　35　SC－20出土石器、勾玉実測図（2/3）

出土遺物（Fig.34）

甕形土器（132）「く」字状の口縁部は小さく外方に開き、胴部は肩のはった球形をなす。外面はハケ目、内面はハケ目・ヘラケズリ調整、口径13.5cm、AII類。

SC－19（Fig.33　PL.11）

F－IX区に検出した住居址で、SC－18より南西へ4mの距離にあり、西半分は攪乱を受け消失している。平面形は南北で3.97mを測り一辺約4.0mの方形に復原できよう。壁高は35cmを測り、急峻に立ち上がる。床面は浅い凹レンズ状で北壁側にやや傾斜する。柱穴は中央に1個あり、東・北壁には中心にむかう傾斜する小ピットがある。中央には楕円形の浅い土壙があるが覆土が黒っぽく、炭小片を多く含んでいることから炉として使用したものであろう。

遺物は量的に少ないが、南東隅に比較的まとまって出土した。

出土遺物（Fig.34）

壺形土器（133・134）133は口径7.8cm。「く」字状の口縁部は短く開き、球形の胴部がつく。BIII類。134は口径8.7cm、器高11.7cm。長めの口縁部は反りぎみに小さく開く。胴部は玉葱状の扁球形をなす。BI類。

甕形土器（135～137）135は口径13.6cm。「く」字状の口縁部は反りぎみに開き、端部は内方に小さくつまみ出す。胴部は球形をなす。AIV類。136は同タイプの胴部資料であろう。137は口径24.8cm。「く」字状の口縁部は短く、折り曲げたように大きく開く。AI類。

高坏（138）脚部はストレートにのび、屈曲して大きく外方に開く。底径12.1cm。C類

SC－20（Fig.33　PL.11）

F－X区に検出した住居址で、SC－23より北へ4mの距離にある。埋設管等によって大部分が破壊され、北のコーナー（2.83×2.25m）を残すのみである。壁の遺存状況は比較的良好で壁高は42cmを測り、ゆるく傾斜して立ち上がる。床面は浅い凹レンズ状である。柱穴は精査したが検出できなかった。

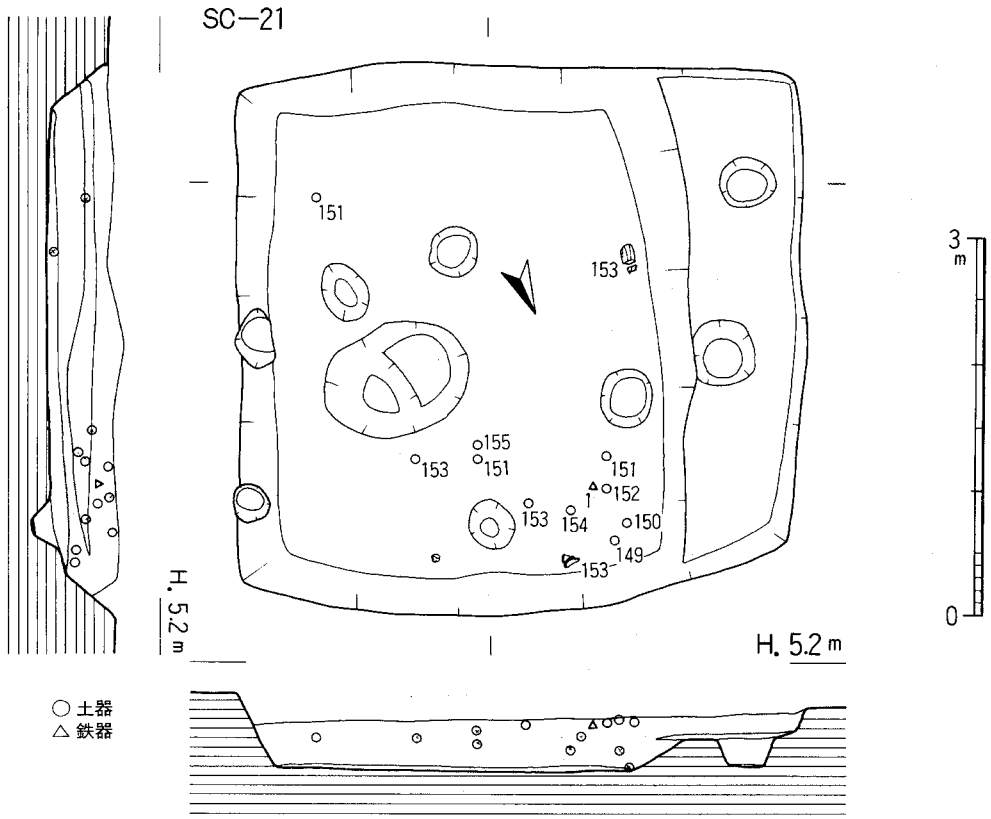


Fig. 36 SC−21実測図 (1/60)

遺物は壺・甕・高坏等の土器に混って玉も出土した。

出土遺物 (Fig.34・35)

壺形土器 (139・140) いずれも二重口縁壺。139は口径15.2cm。擬口縁上に凸帯状の段をつくり、口縁部は直口する。端部は水平に整え、内方に小さくつまみ出す。AI類。140はAIV類。口縁部は反りぎみに開く。調整は内外面ともに粗いハケ目。

甕形土器 (141) 薄手の球形をなす胴部資料である。最大径20.5cm。調整は外面がハケ目、内面がヘラケズリ。

高坏 (143〜148) いずれもC類に属する。143は口径17.8cm。体部下半に三角凸帯状の段をつくり、口縁部は反りぎみに大きく開く。144は口径20.1cm。口縁部は大きく外反する。145は口径20.0cm。体部は内弯ぎみに開き、口縁端部は小さく屈曲する。148は底径13.2cm。脚部は短く裾部はラッパ状に開く。外面と裾部内側はハケ目調整。外面はヘラケズリ。

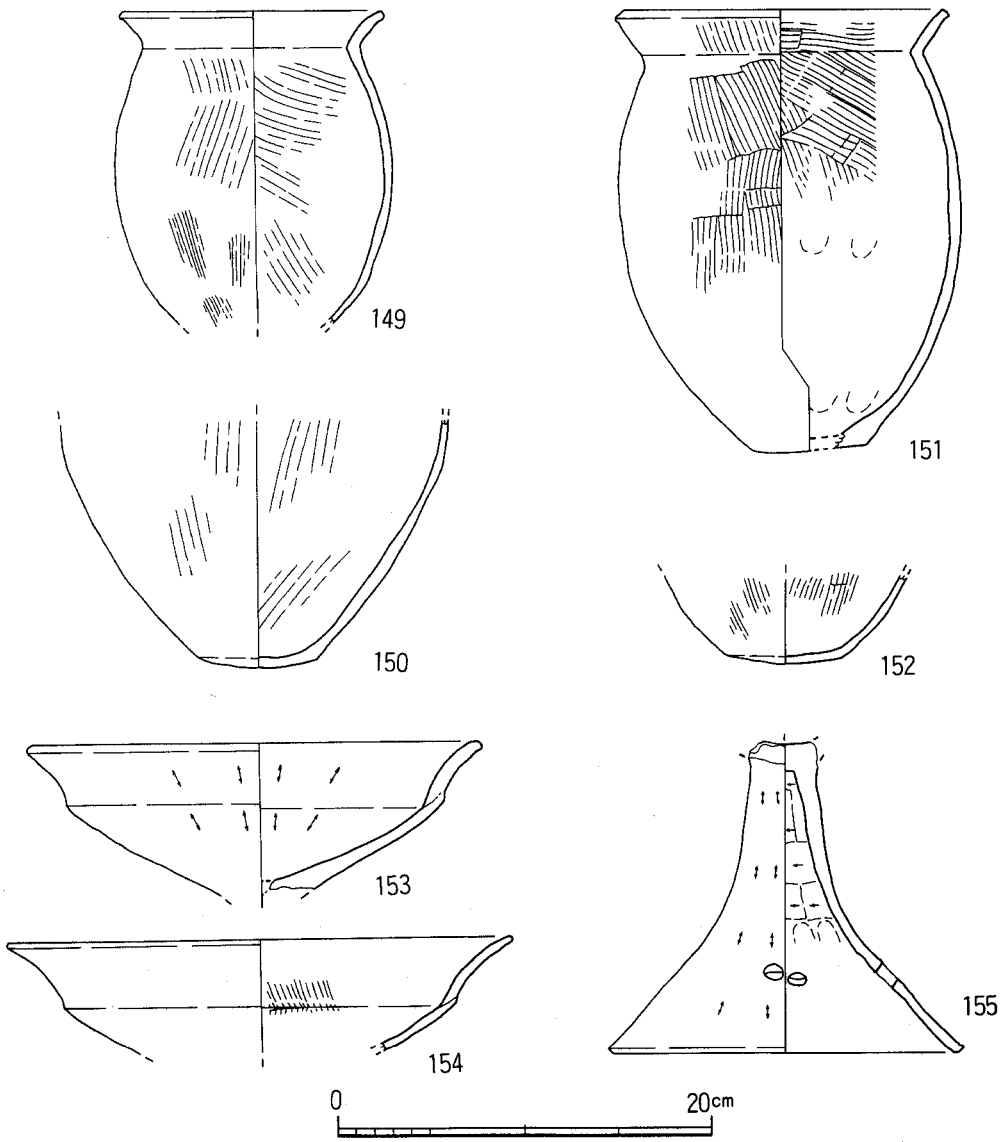


Fig. 37 SC－21出土土器実測図 (1/4)

手捏ね土器 (142) 口径4.4cm、底径3.4cm、器高3.9cm。底部は厚手の平底で、体部は直口して立ち上がる。B類。

勾玉 (3・4) 3は長さ20.2mm、厚さ3.5mm、重さ1.3gを測る。背部は丸みをもつ半月形をなし、尾部はややすぼまる。頭頂部には「VI」字状の線

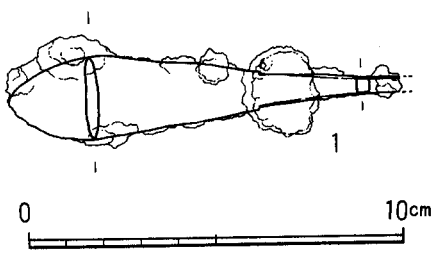


Fig. 38 SC－21出土鉄器実測図 (1/2)

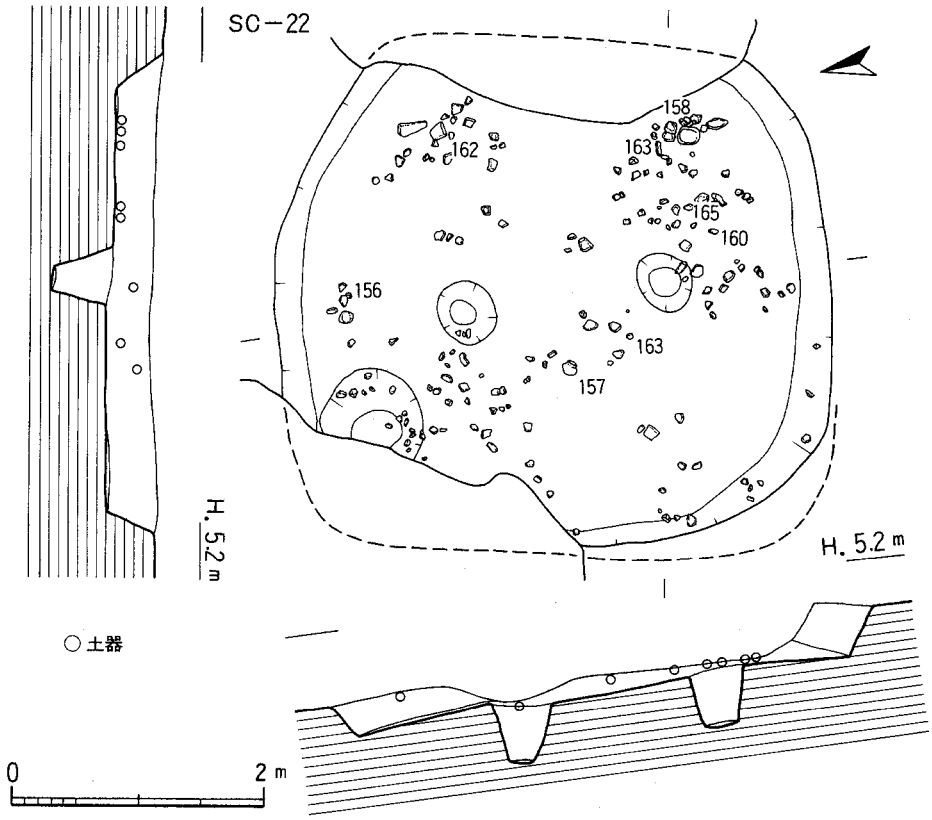


Fig. 39 SC－22実測図（1/60）

刻がある。蛇文岩製か。4は碧玉製勾玉の未製品で、面取りした後、背腹面のみ粗く磨かれている。頭部には内径1.7㎜の孔があるが貫通していない。長さ15㎜、厚さ3㎜、重さ0.7g。色調は淡緑色。

石鏃（5）安山岩製の打製石鏃で凹基無茎式。長さ23㎜、厚さ2.5㎜で、断面形は菱形に近い。

SC－21（Fig.36 PL.12）

E－X区に検出した住居址で、SC－23より西へ5mの距離にある。SK－21・22・23と重複関係にあり、この中で最も古い。平面形は東西4.49m、南北4.36mを測る方形をなし、面積は19.5m²である。壁の遺存状況は良好で高さ43cmを測り、急峻に立ち上がる。床面は浅い凹レンズ状である。西壁に沿って幅90cm、高さ20cmのベット状遺構が付設される。柱穴は7個あるが南北壁に沿った2本が主柱となるものであろう。東壁際に120×85cmの楕円形土壙がある。

遺物は弥生時代の壺・甕・高坏等が出土したが量的には少ない。

出土遺物（Fig.37・38）

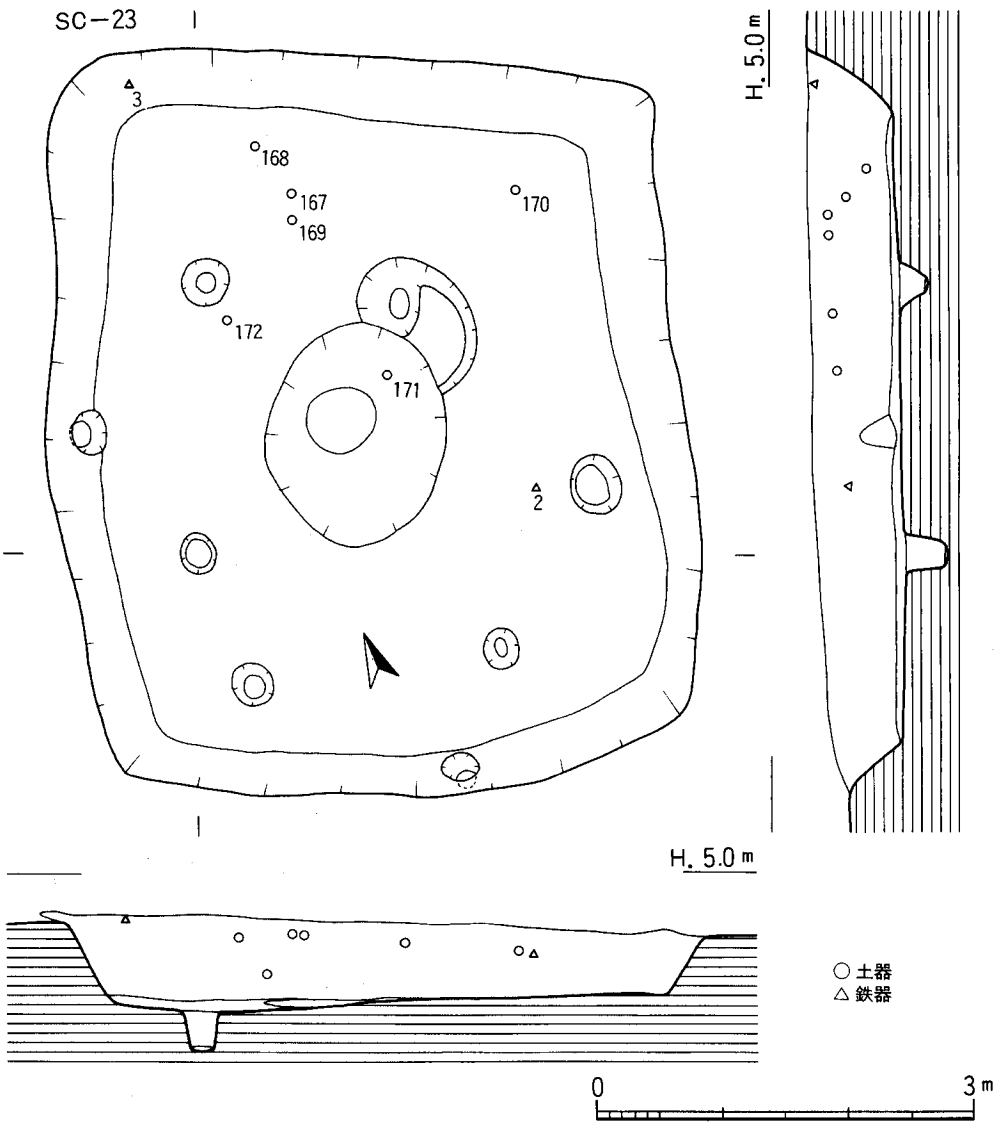


Fig. 40 SC－23実測図（1/60）

甕形土器（149～152）いずれもAI類に属する。「く」字状の口縁部は短く開く。胴部はラグビーボール状の長胴形で、凸レンズ状の底部がつく。調整は内外面ともに粗いハケ目。149は口径14.1cm。150は底径6.2cm。151は口径18.0cm、底径6.1cm、器高23.4cmで、口縁部は端部を平坦に整え外方に小さくつまみ出している。152は底径6.0cm。

高坏（153～155）153･154はA類に属する。体部は内弯ぎみに立ち上がった後に屈曲して弱い稜をつくり、口縁部は反りぎみに外方に開く。口径は153が24.2cm、154が26.7cmと大型である。

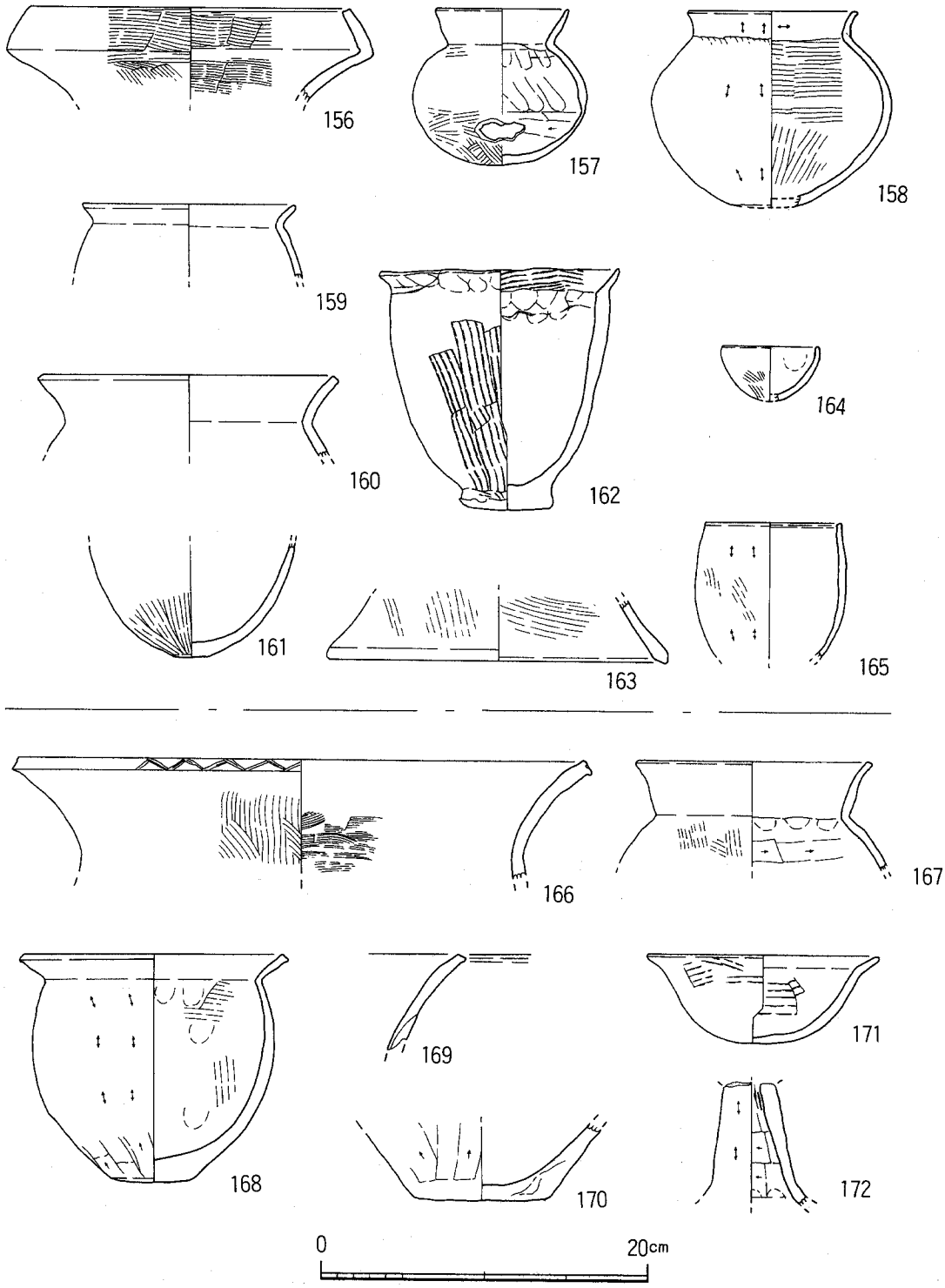


Fig. 41 SC－22・23出土土器実測図（1/4）

155は底径19.0cm。脚部は細長くラッパ状に大きく開く。裾部に焼成前の穿孔あり。外面は研磨、内面はヘラケズリ・ナデ調整を施す。

鉄鏃（1）圭頭斧箭式に属するもので、身幅2.2cm、長さ10.5cmを測る。

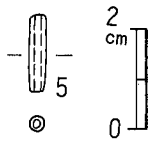


Fig. 42　SC－23
出土玉実測図（2/3）

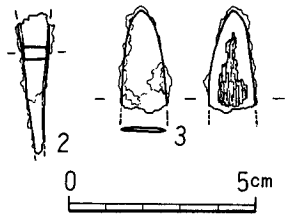


Fig.　43　SC－23出土
鉄器実測図（1/2）

SC－22（Fig.39　PL.12）

E－IX区に検出した住居址で、SC－73より南東へ2mの距離にある。東・西壁側は攪乱を受けている。平面形は南北4.42m、東西3.9mを測る隅丸方形をなし、面積は17.3m²である。壁高は43cmを測り、急峻に立ち上がる。床面はほぼ平坦である。南北に並んで2個の主柱穴が配される。

遺物は壺・甕・高坏が全域に散布するが量的には少ない。

出土遺物（Fig.41）

壺形土器（156～158）156は口径19.5cmの二重口縁壺。擬口縁上の口縁部は膨らみぎみに内傾し、端部は平坦に整える。調整は内外面ともにハケ目。AI類。157は口径8.2cm、器高10.0cmの小型壺。「く」字状の口縁部は短くストレートに開き、胴部はやゝ肩のはった球形をなす。BIII類。158は口径11.0cm、器高11.9cm。口縁部は直口ぎみに立ち上がった後に小さく外反する。胴部は肩のはった扁球形で、丸底ぎみの小さな底部がつく。調整は口縁部内外と外面が研磨、内面がハケ目。

甕形土器（159～162）159・160はAI類。「く」字状の口縁部は短く外反する。口径は159が12.8cm、160が18.2cm。161は長胴形の胴部に小さな平底がつく胴部下半の資料で、底径2.2cm。162は口径14.5cm、底径5.7cm、器高14.6cm。「く」字状の口縁部は短く内弯ぎみに開く。胴部は砲弾形で、厚手の平底がつく。AVI類。

鉢形土器（165）体部はコップ状で、口縁部は直口して立ち上がる。平坦に整えた端部は内傾し外方に小さくつまみだす。E類。

高坏（163）脚裾部はラッパ状に大きく開く。端部は両側を平坦に整えとがりぎみになる。底径20.8cm。

手捏ね土器（164）口径6.0cm、器高3.3cm。体部は埦状の半球形で、口縁部は小さく直口する。D類。

SC－23（Fig.40　PL.13）

F－X区に検出した住居址で、SC－21より東へ5mの距離にある。北壁を中央部はSK－18・19によって切られている。平面形は南北5.85m、東西5.15mを測る長方形をなし、面積は30.1m²である。壁の遺存状況は良好で高さは63cmあり、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は平坦である。柱穴は4個あるが北東隅部では精査したにもかかわらず検出できなかった。西・南壁には中心

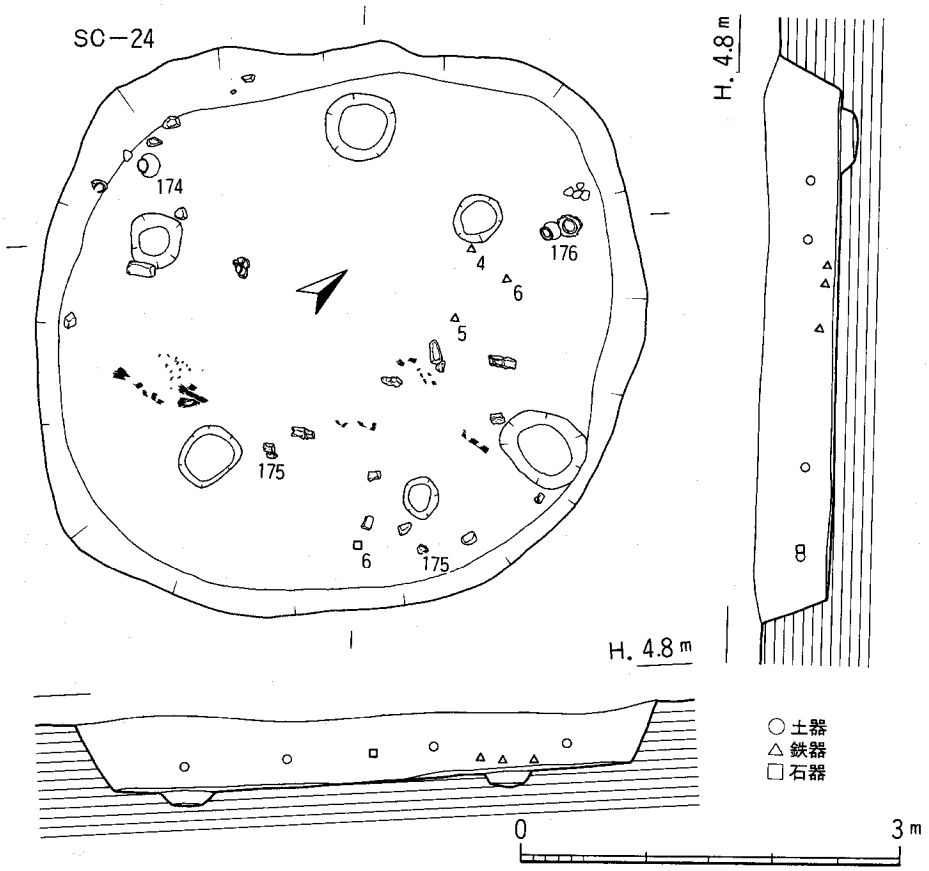


Fig. 44 SC－24実測図（1/60）

にむかった小ピットがある。北壁寄りのところに楕円形の浅い土壙がある。

出土遺物（Fig.41・42・43）

甕形土器（166～170）166は口径35.4cmと大型である。口縁部はラッパ状に開き、平坦な端部には山形の刻目を施す。調整は内外面ともにハケ目。ＡＩ類。167は口径14.4cm。「く」字状の口縁部は反りぎみに外方に開き、球形の胴部がつく。ＡII類。168は口径10.3cm、底径4.7cm、器高13.9cm。「く」字状の口縁部は短く開き、平坦に整えた端部は外方に小さく摘み出す。胴部は卵形で、厚手の平底がつく。

鉢形土器（171）口径14.0cm、器高5.5cm。体部は半球形で、口縁部は短く「く」字状に開く。B類。

高坏（172）脚部は短くラッパ状に開く。調整は外面がナデ、内面がヘラケズリ。C類。

管玉（５）長さ15mm、径３mm、重さ0.4gの碧玉製管玉で、孔は同一の大きさで貫通してい

る。色調は緑色。

鉄鏃（2）全容を知りえないが鉄鏃茎部の資料であろう。長さ3.7cmを測り、断面形は長方形。

不明鉄器（3）長さ2.7cm、身幅1.3cmを測る扁平な先端部資料で全容は不明。剣の切先かとも思われるがやゝ小さすぎる。一部に木質が残る。

SC－24（Fig.44　PL.14）

F－XIII区に検出した住居址で、ST－02より北東へ5mの距離にある。平面形は南北4.85m、東西4.54mを測り、やや胴のはった隅丸方形をなす。面積は22.0m²。壁高は57cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は平坦である。柱穴は6個あるが隅角に近い4本が主柱穴となるものであろう。床面から20cmほどの面に炭化材片や炭化物が散らばっており、家災家屋と考えることができる。

遺物は壺・甕等が比較的原位置に近い状況で出土した。

出土遺物（Fig.45・46・49）

壺形土器（173・174）173は口径10.7cmの小型の二重口縁壺。擬口縁上の口縁部は反りぎみに短く直口する。内外面ともにハケ目調整。174は口径10.5cm、底径1.9cm、器高11.0cm。「く」字状の口縁部は直口ぎみに小さく外反する。胴部は肩のはった玉葱状で、小さな平底の底部がつく。BI類。

甕形土器（175～178）177・178は二重口縁をもつC類。擬口縁は短く「く」字状に外反して三角凸帯状に小さく張り出し、口縁部は一旦直口した後に小さく外反する。口径に177が15.5cm、178が20.2cm。175・176はD類に属する。175は口径10.3cm。短く開く「く」字状の口縁部は三角凸帯状につくり出し、外見上は二重口縁状をなす。176は口径10.1cm、底径3.0cm、器高10.5cm。「く」字状の口縁部は小さく開き、端部を直口ぎみにつまみ上げており一見二重口縁状をなす。卵形の胴部に小さな平底がつく。

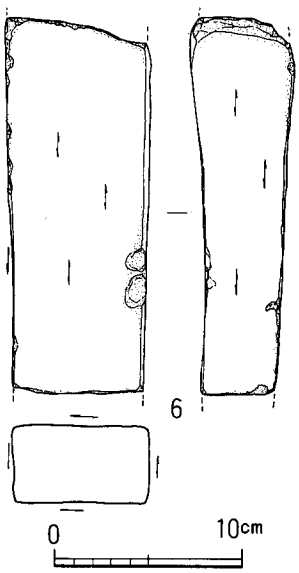


Fig.　45　SC－24
出土石器実測図（1/4）

鉢形土器（179）体部は内弯ぎみに立ち上がり、「く」字状の口縁部は緩く屈曲して反りぎみに短く開く。口径26.0cm。B類。

砥石（6）棒状のも

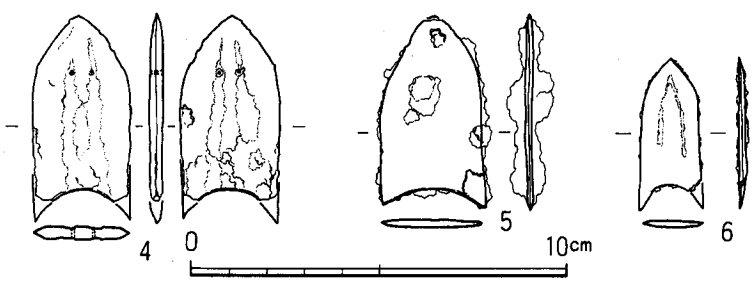


Fig.　46　SC－24出土鉄器実測図（1/2）

ので上下端を欠く。表裏面と両側面が砥面として使用され、砥面は中央が反りぎみに凹み、よく使用されている。砂岩質で、長さ20cm、幅7.8cm、厚さ4.0～5.4cm。

鉄鏃（4～6）いずれも無茎切刃造腸抉三角形式に属するものである。4は長さ4.9cm、身幅2.6cmで、先端側には1対の孔があり装着痕が残る。5は長さ5.1cm、身幅2.7cm。6は長さ4.1cm、身幅1.7cm。

SC－25（Fig.47　PL.14）

F－XIV区に検出した住居址で、ST－02の南東1mの距離にあり、東壁側の方形周溝遺構によ

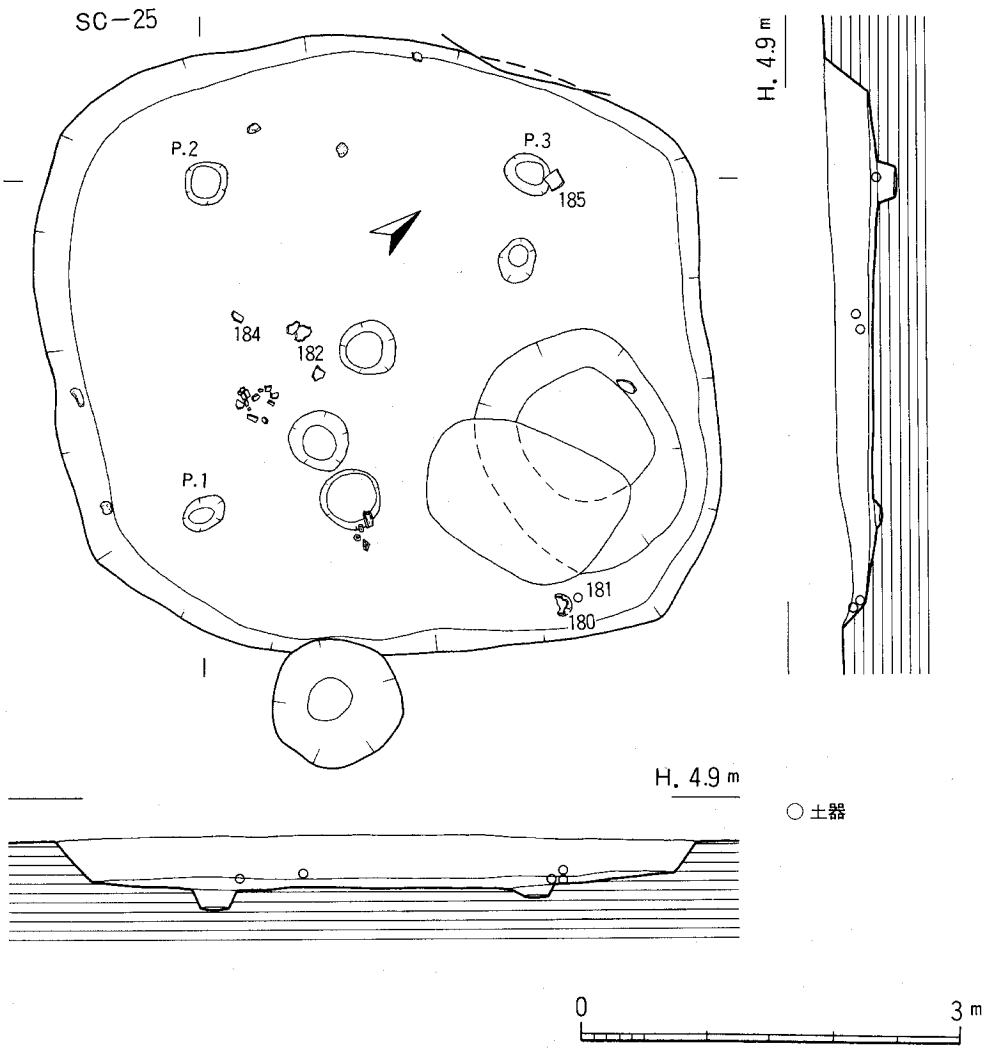


Fig.　47　SC－25実測図（1/60）

って切られている。平面形は南北5.14m、東西4.94mを測るやや胴張りの隅丸方形をなし、面積は25.4m²である。壁高は38cmを測り、ゆるく傾斜して立ち上がる。床面は浅い凹レンズ状である。柱穴は7個あり、主柱穴は隅角のP.1～P.3を含む4本と考えられるが、東隅部の柱穴は土壙の重複により消失していた。

遺物は壺・甕・高坏等があるが量的に少ない。

出土遺物 (Fig.49)

壺形土器 (181) 玉葱状の胴部をもつ長頸壺の胴部資料であろう。調整は内外面ともにハケ目。底径3.5cm、胴部最大径17.9cm。

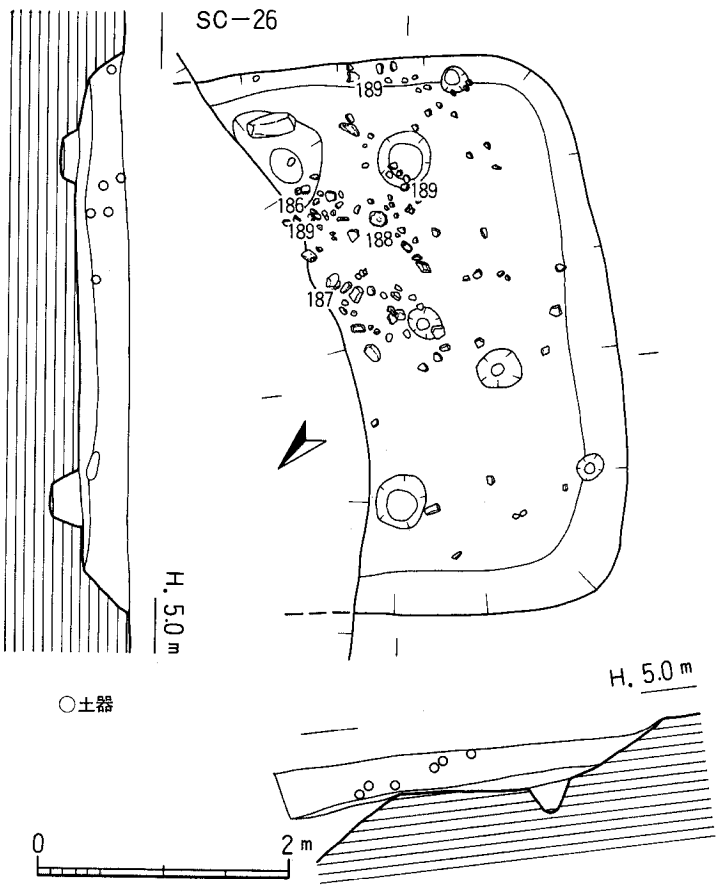


Fig. 48 SC－26実測図 (1/60)

甕形土器(180・182～185) 183～185は「く」字状の口縁部が短く外反するものでＡⅠ類に属する。183は口径10.8cm。184は口径21.9cmで、平坦に整えた端部は上方に小さくつまみ上げている。180は口径11.2cm。「く」字状の口縁部は短く直線的に開き、端部を内側に小さくつまみ出す。布留系の影響を受けたものでAⅣ類。

SC－26 (Fig.48 PL.15)

Ｅ－XIII区に検出した住居址で、ST－01の北西１ｍの距離に接して位置する。北半分は攪乱を受けているが東西は4.52ｍを測り、方形プランをなすものと推定される。壁高は38cmを測り、ゆるく傾斜して立ち上がる。床面は浅い凹レンズ状である。柱穴は５個ある。東・南壁のコーナー部には径20cmの小ピットが壁面に打ち込まれている。

遺物は少ないが東側に集中して拡がる。

出土遺物 (Fig.49)

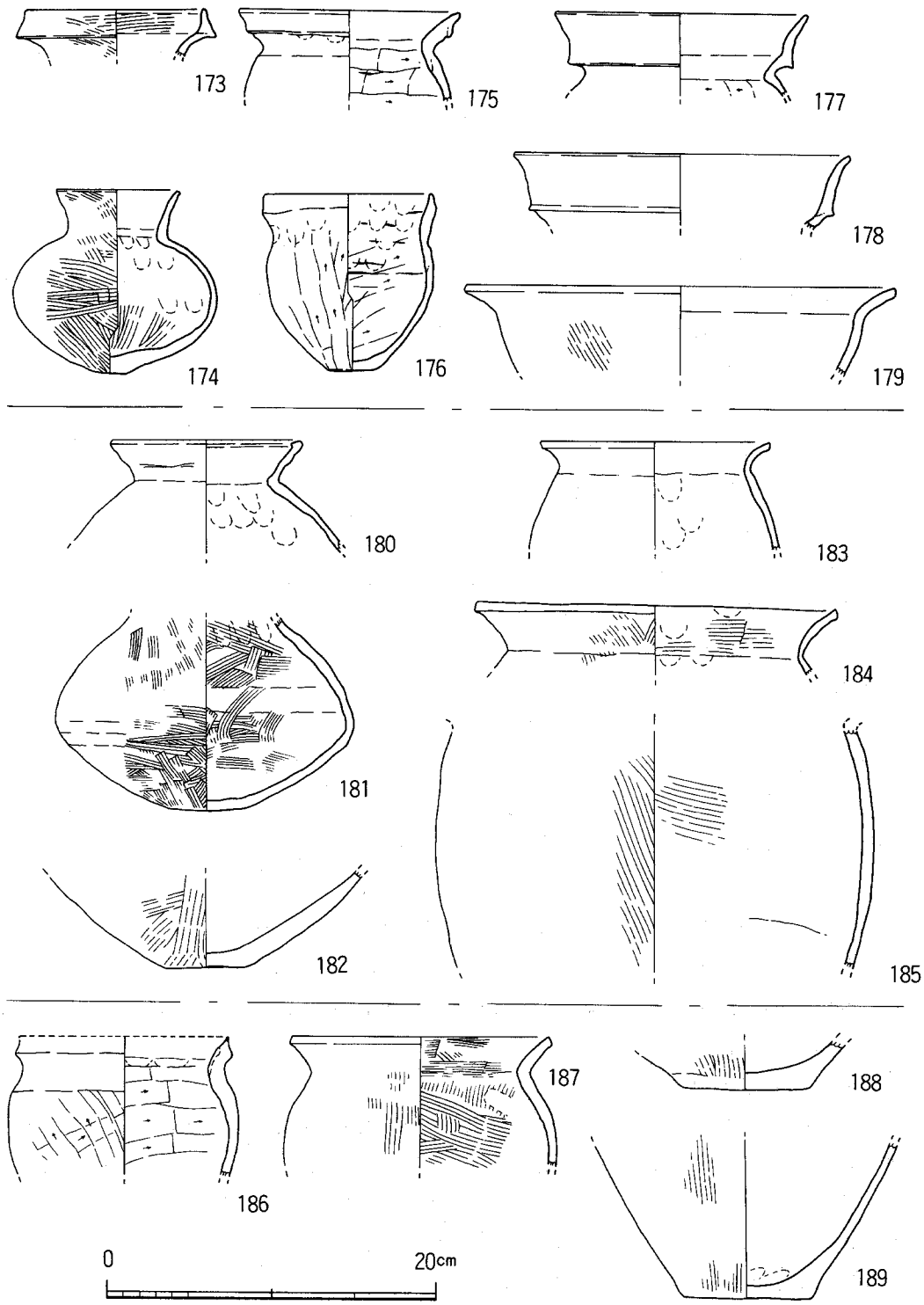


Fig. 49 SC－24・25・26出土土器実測図（1/4）

甕形土器（186～189）186は口径12.6cm。肥厚した「く」字状の口縁部は短く外反し、端部は小さくつまみ上げて稜をつくり一見二重口縁状をなす。胴部は卵形。調整は内外面ともに口縁部がヨコナデ、胴部はヘラケズリ。D類。187は口径15.8cm。「く」字状の口縁部は短く外反し、端部は平坦に整えて外方に小さくつまみ出す。胴部は卵形。調整は内外面ともにハケ目。AⅠ類。188・189は底部資料。底径は188が7.8cm。189が7.5cm。

SC－27（Fig.50　PL.15）

E－Ⅻ区に検出した住居址で、SC－28より北西へ2mの距離にある。平面形は南北6.15m、東西5.10mを測る長方形をなし、面積は31.4m²である。壁高は35cmを測り、ゆるく傾斜して立ち上がる。床面は浅い凹レンズ状である。柱穴は12個あるが、主柱穴は明確でない。

遺物は甕・壺の小片が全域に散布しているが量的には少ない。

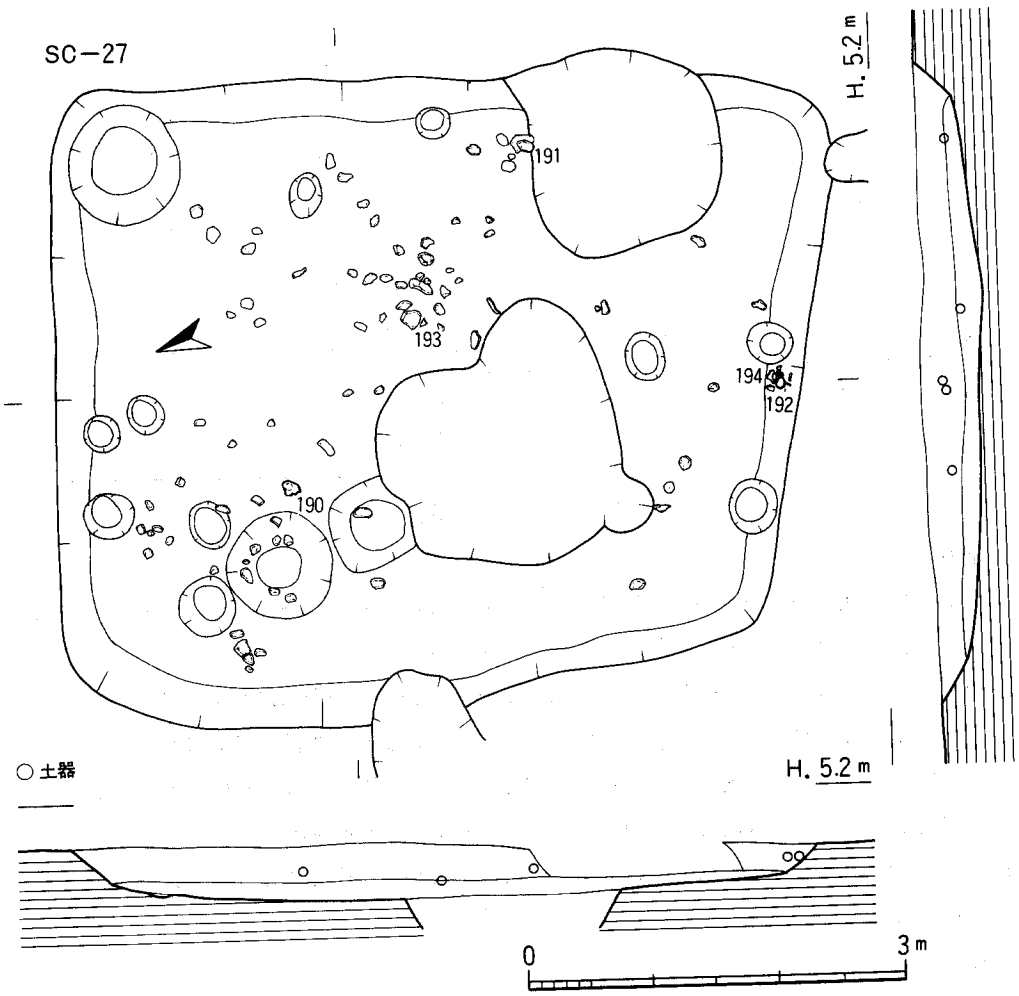


Fig.　50　SC－27実測図（1/60）

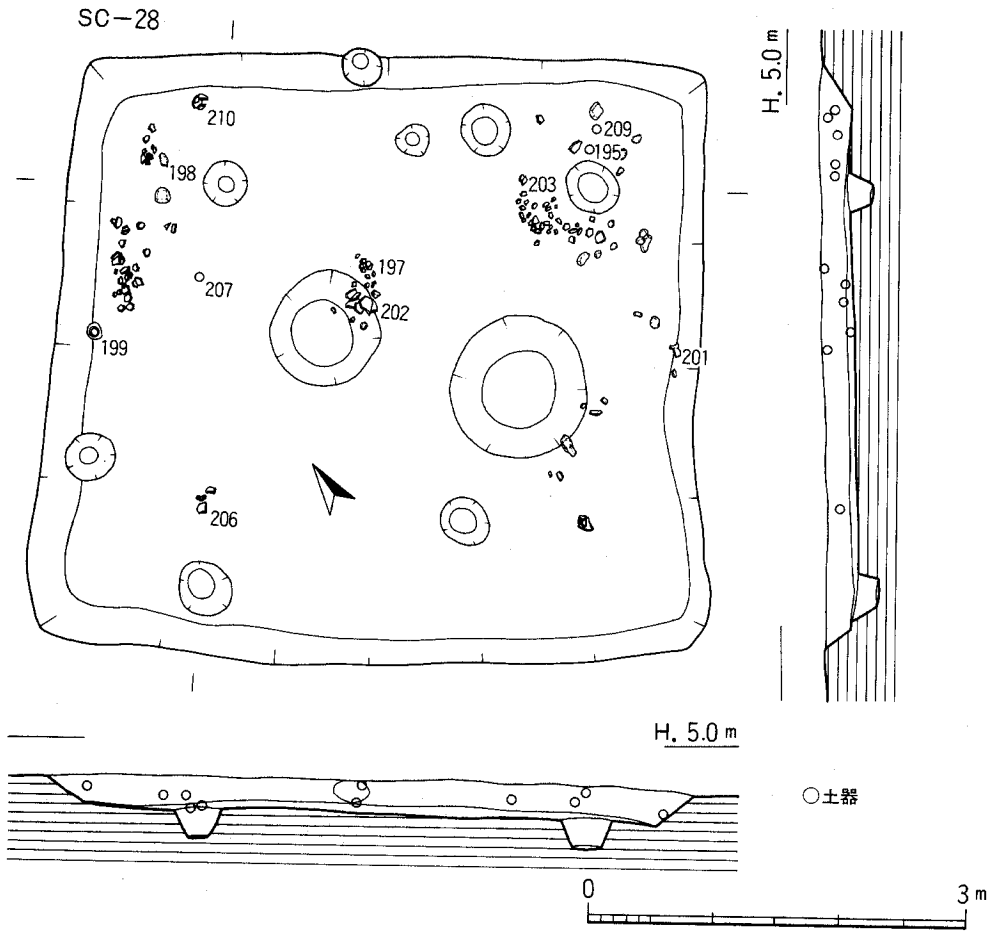


Fig. 51 SC－28実測図（1/60）

出土遺物（Fig. 52）

壺形土器（190）扁球形の胴部資料で、胴部最大径16.1cmを測る。調整は内面がヘラケズリ、外面は研磨を施しており長頸壺の胴部になるものであろう。

甕形土器（191～194）191は底径5.0cmの胴部下半資料。長胴形の胴部に凸レンズ状の平底がつく。192・193は口縁部が短く「く」字状に外反し、平坦に整えた端部は外方に小さくつまみだす。調整は外面がハケ目、内面はハケ目・ナデ仕上げ。ＡＩ類。192は口径13.2cm、底径4.0cm、器高16.1cmで、卵形の胴部に平底の底部がつく。193は口径16.5cm。

鉢形土器（194）体部は内弯ぎみに立ち上がり、口縁部は小さく内傾する。調整は内外面ともにナデ調整。口径9.5cm。F類。

SC－28（Fig.51 PL.16）

Ｅ－XIII区に検出した住居址で、ST－02のすぐ北西に接してある。平面形は東西5.13ｍ、南北

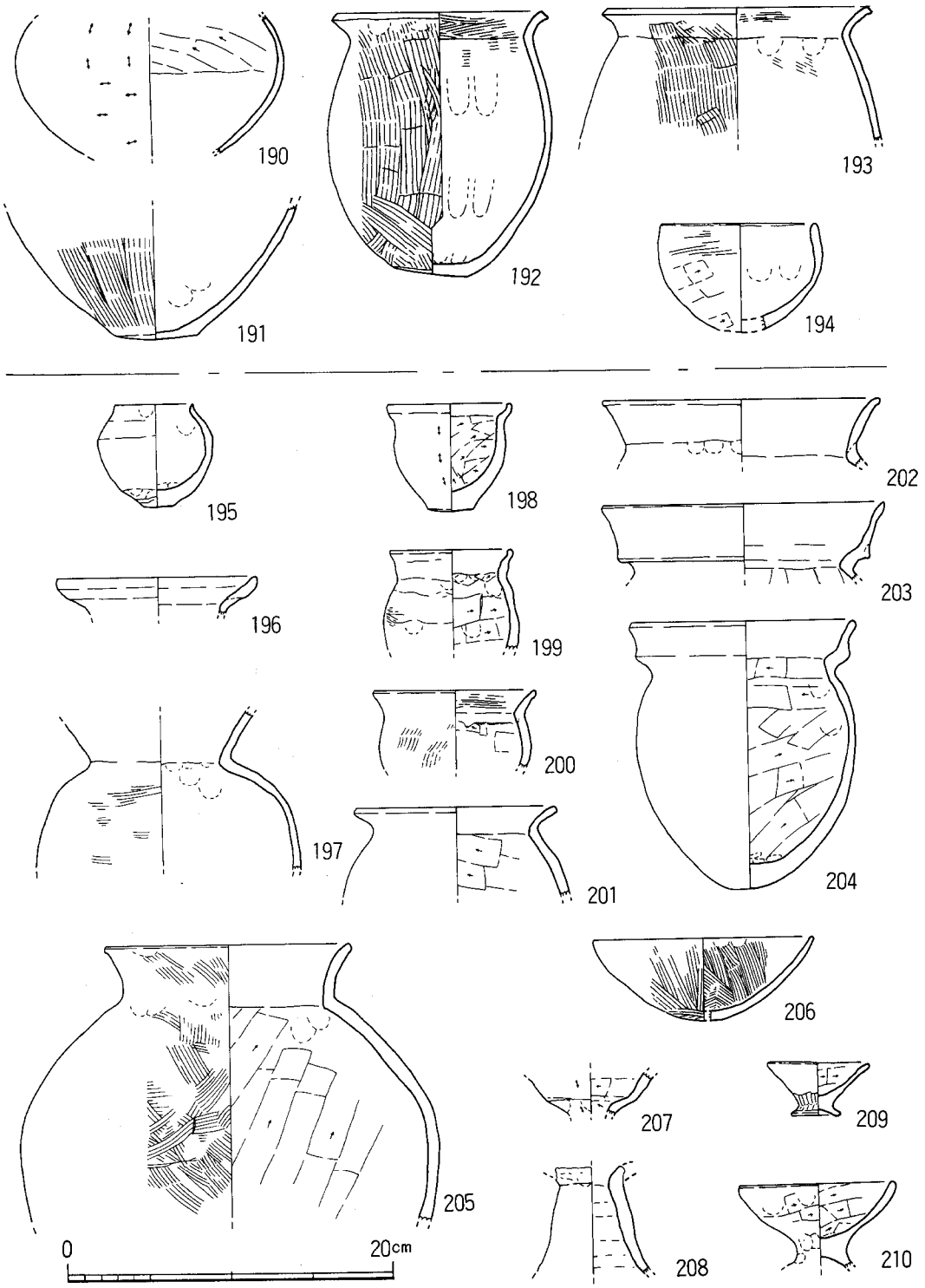


Fig. 52 SC－27・28出土土器実測図（1/4）

4.80mを測る方形をなし、面積は24.6m²である。壁高は28cmを測り、ゆるく傾斜して立ち上がる。床面はほぼ平坦であるが南にむかってやや傾斜する。柱穴は8個あり、主柱穴は各コーナー部の4本と考えられる。中央に径90cm、深さ20cmの円形土壙があるが覆土に炭を含み、壁が淡く赤変することから炉であろうと思われる。

遺物は壺・甕・高坏等が多く、北側に集中する。

出土遺物（Fig.52・53）

壺形土器（196・197）196は口径12.5cm。口縁部は緩く屈曲して内弯ぎみに大きく開き、端部は直口ぎみに小さくつまみ上げる。197は「く」字状の口縁部が直線的に開き、肩のはった球形の胴部がつく。

甕形土器（198～205）202・205はAII類に属する。「く」字状の口縁部は小さく外反し、端部は小さく外方につまみだす。202は口径17.0cm。205は口径15.2cmで、球形の胴部がつく。203・204は二重口縁をもつC類に属する。短く「く」字状に外反する擬口縁は小さく凸帯状に段をつくり、口縁部は反りぎみに開く。203は口径17.3cm。204は口径14.0cm、器高16.4cmで、卵形の胴部に小さな底部がつく。198は口径7.6cm、底径2.7cm、器高6.0cmを測る。口縁部は短く「く」字状に開いた後に小さく直口する。胴部は卵形を呈し、厚手の平底がつく。D類に属するものである。199は口径7.4cm。「く」字状の口縁部は小さく朝顔状に開く。

鉢形土器（206）口径13.5cm、底径3.6cm、器高5.0cm。体部は内弯ぎみに立ち上がり、

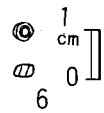


Fig. 53 SC－28 出土玉実測図（2/3）

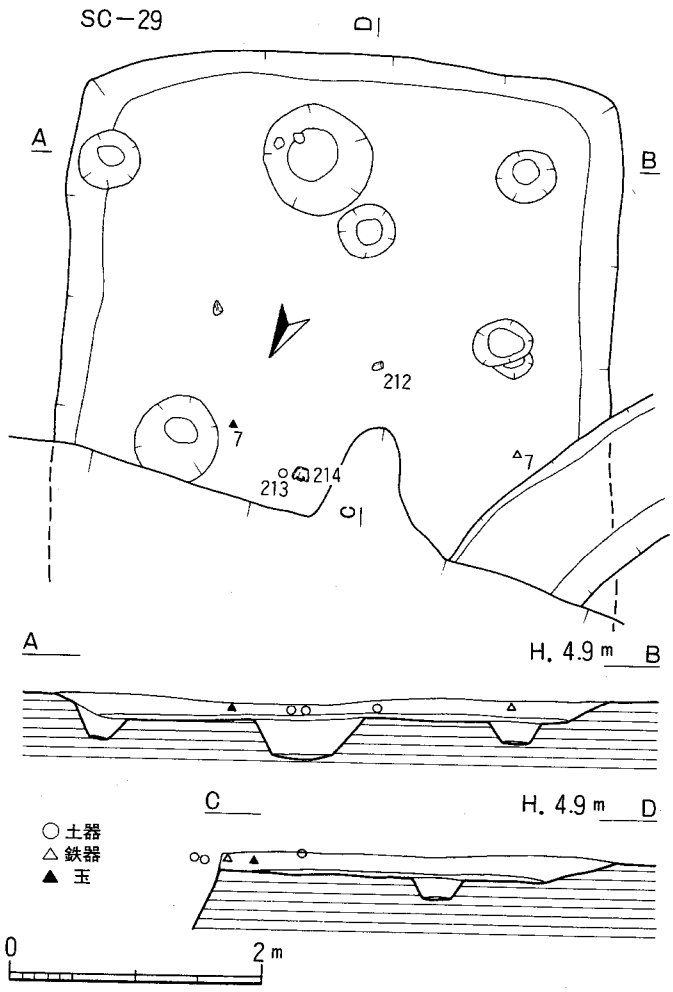


Fig. 54 SC－29実測図（1/60）

小さな丸底ぎみの底部がつく。調整は内外面ともにハケ目。G類。

高坏（207・208・210）210は口径9.5cm。坏部は内弯ぎみに立ち上がり、口縁部は直口ぎみに小さくつまみ上げる。脚部は短く開くものであろう。

手捏ね土器（195・209）195は口径4.8cm、底径1.9cm、器高6.2cmの壺形。口縁部は小さくつまみ上げて直口する。胴部は球形で、上げ底ぎみの平底がつく。C類。209は盃形のもので口径6.2cm、底径2.8cm、器高3.2cmを測る。体部は直線的に大きく開き、短く低い脚がつく。

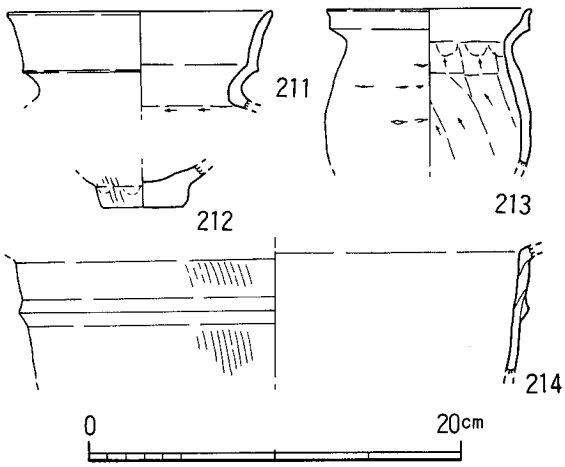


Fig. 55 SC－29出土土器実測図（1/4）

小玉（6）径3.5mm、厚さ2.7mmのコバルトブルーのガラス小玉である。孔に平行して気泡が並ぶところがあり、孔を平行方向にのばして製作したものであろう。孔はやや斜行する。

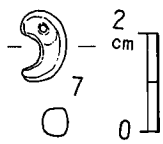


Fig. 56 SC－29出土勾玉実測図（2/3）

SC－29（Fig.54 PL.16）

E－XIII区に検出した住居址で、ST－02より南西方向へ3mの距離にあるが、北半分は埋設管等による攪乱を受けて消失している。平面形は東西壁が4.36mを測り、一辺が約4.50mほどの方形をなすものであろう。壁高は18cmと浅く、ゆるく傾斜して立ち上がる。床面はほぼ平坦である。柱穴は5個あるが主柱穴は明確ではない。南壁側には直径約85cm、深さ30cmの円形土壙がある。

出土遺物（Fig.55～57）

甕形土器（211～214）211は口径14.1cmの二重口縁をもつものでC類に属する。擬口縁は短く「く」字状に外反した後に屈曲して小さな凸帯状の段をつくり、口縁部は小さく外反する。213は口径11.0cm。二重口縁をもつ小型の甕でD類に属する。短く「く」字状に開いた擬口縁は屈曲して強い稜をつくり、直口する口縁部を小さく外方につまみ出す。214は短い「く」字状の口縁部をもつもので、口縁部直下に三角凸帯が1条巡る。調整は外面がハケ目、内面はナデて仕上げている。

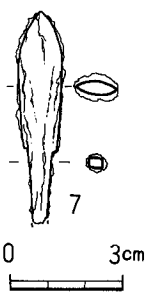


Fig. 57 SC－29出土鉄器実測図（1/2）

勾玉（7）「C」字形をなす背部は丸みをおび、尾部は細くすぼまる。断面形は方形に近く、色調は乳白色を呈す。長さ14mm、厚さ5mm、重さ2gを測る。

鉄鏃（7）長さ5.5cm、身幅1.2cmを測る有茎両丸式鉄鏃である。茎部の断面は方形をなし、一部に木質が残る。

SC－30 (Fig.58　PL.17)

D－XIV区に検出した調査区最南端の住居址で、円形周溝墓より北へ4mの距離にあり、西側には7基の箱式石棺墓が南北に並ぶ。東壁は攪乱によって消失しているが、平面形は東西3.50m、南北3.10mを測る小型の長方形をなすものと推定される。壁高は40cmを測り、ゆるく傾斜して立ち上がる。床面は平坦であるが、中央部が浅くレンズ状に凹む。柱穴は西・北壁側に2個検出したが主柱穴は明確ではない。

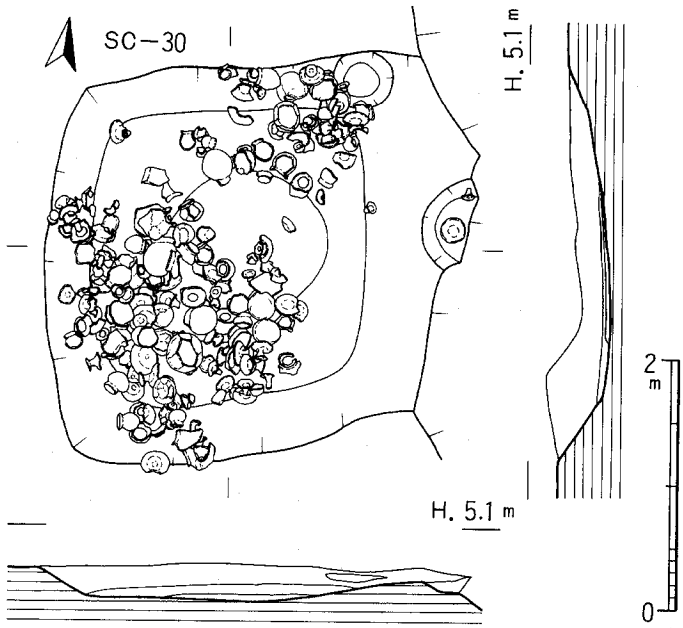


Fig.　58　SC－30実測図 (1/60)

遺物は住居址中最も多く、200個体以上の壺・甕・高坏等が幾重にも折り重なる状態で出土した。この総量は一家屋の使用量にしては異常に多いもので、集中保管したまま何んらかの理由で放置したものか、あるいは一括投棄されたものではないかと推測される。

出土遺物 (Fig.59～68)

壺形土器 (215～244・246・253) 215～240は小型壺である。238～240は口縁部がストレートに長くのび、球形の胴部がつくものでBII類に属する。238は口径12.4cmで、端部を直口ぎみに小さくつまみ上げる。239は口径13.1cmで、底径3.6cmの小さな平底の底部がつく。240は口径12.5cmで端部を外方に小さくつまみ出す。215・217・222～229・232・234・237は口縁部が短く外反し、器高が10cm内外を測るものでBIII類に属する。胴部は扁球形で、底部は尖底ぎみになるものと丸底ぎみになるものとがある。216・218～221・231は「く」字状の口縁部がストレートにのび、頸部直上が段状に小さく膨らむもので、BIV類に属する。胴部はやゝ肩のはった扁球形で、底部は尖底ぎみのものと丸底のものとがある。233は口径8.9cm、器高8.5cm。口縁部は内弯ぎみに直口して立ち上がる。244は口径21.3cmの二重口縁壺でAI類のものである。口縁部は内弯ぎみに直口し、平坦に整えた端部は小さく内傾する。241はAII類の二重口縁壺である。擬口縁直上には横凹線が1条巡り、直口する口縁部は小さく開く。端部は平坦面を水平に整え小さく外方につまみ出す。胴部は肩のはった卵形をなす。246はAIII類の二重口縁壺。口縁部は直口ぎみに立ち上がり、端部を反りぎみに外方につまみ出す。243は口径10.8cm。口縁部部は反り

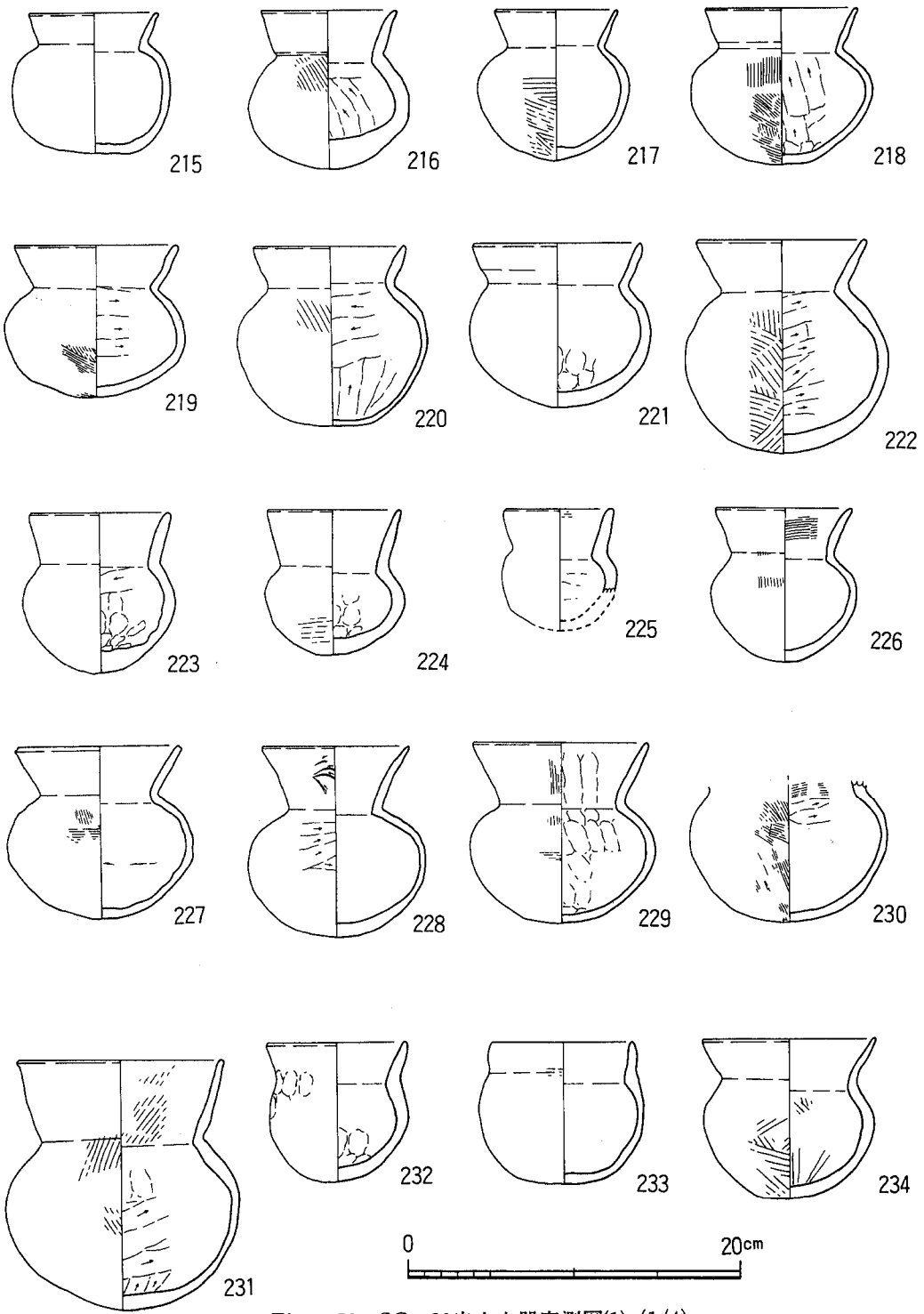


Fig. 59 SC－30出土土器実測図(1) (1/4)

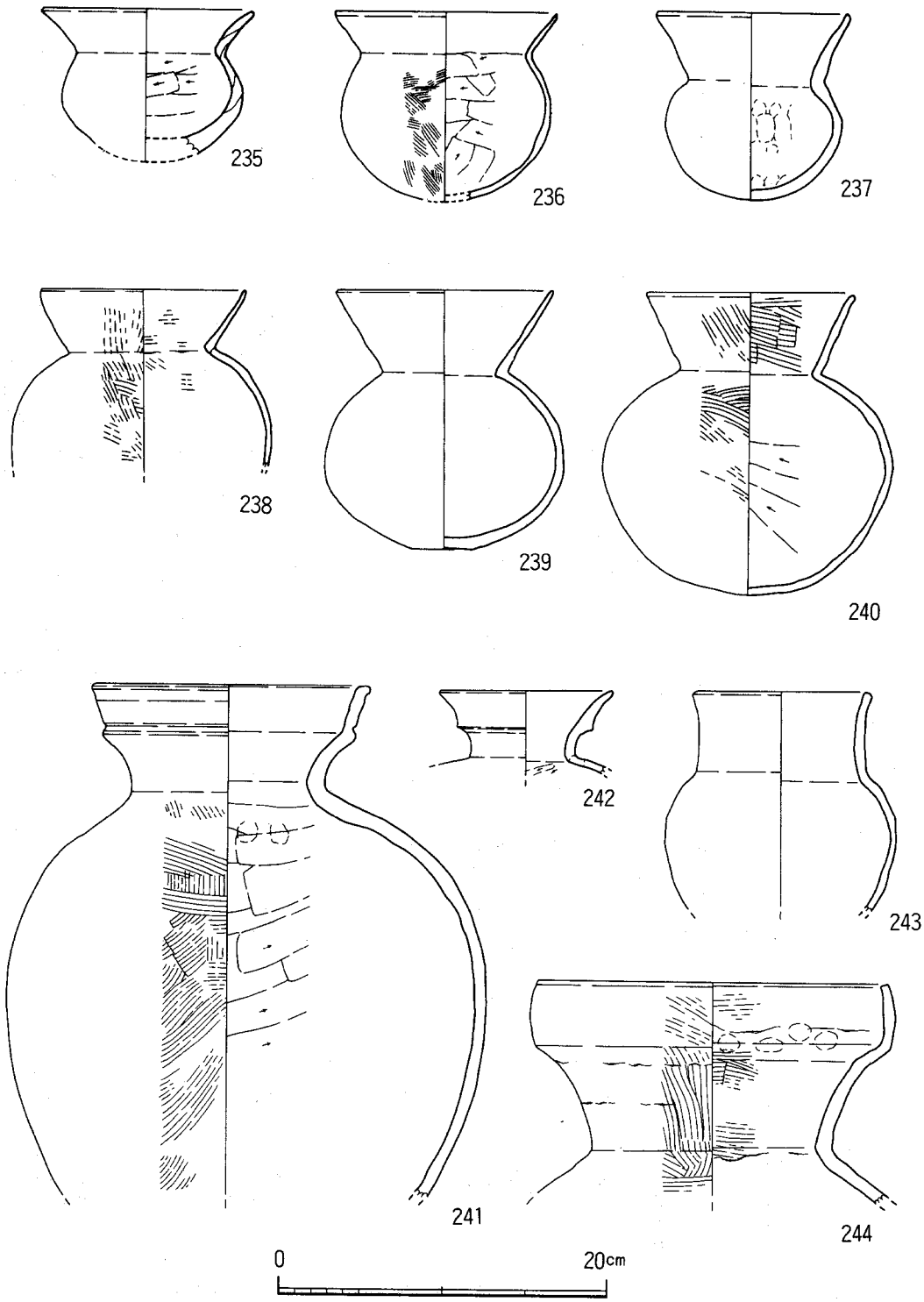


Fig. 60 SC－30出土土器実測図(2) (1/4)

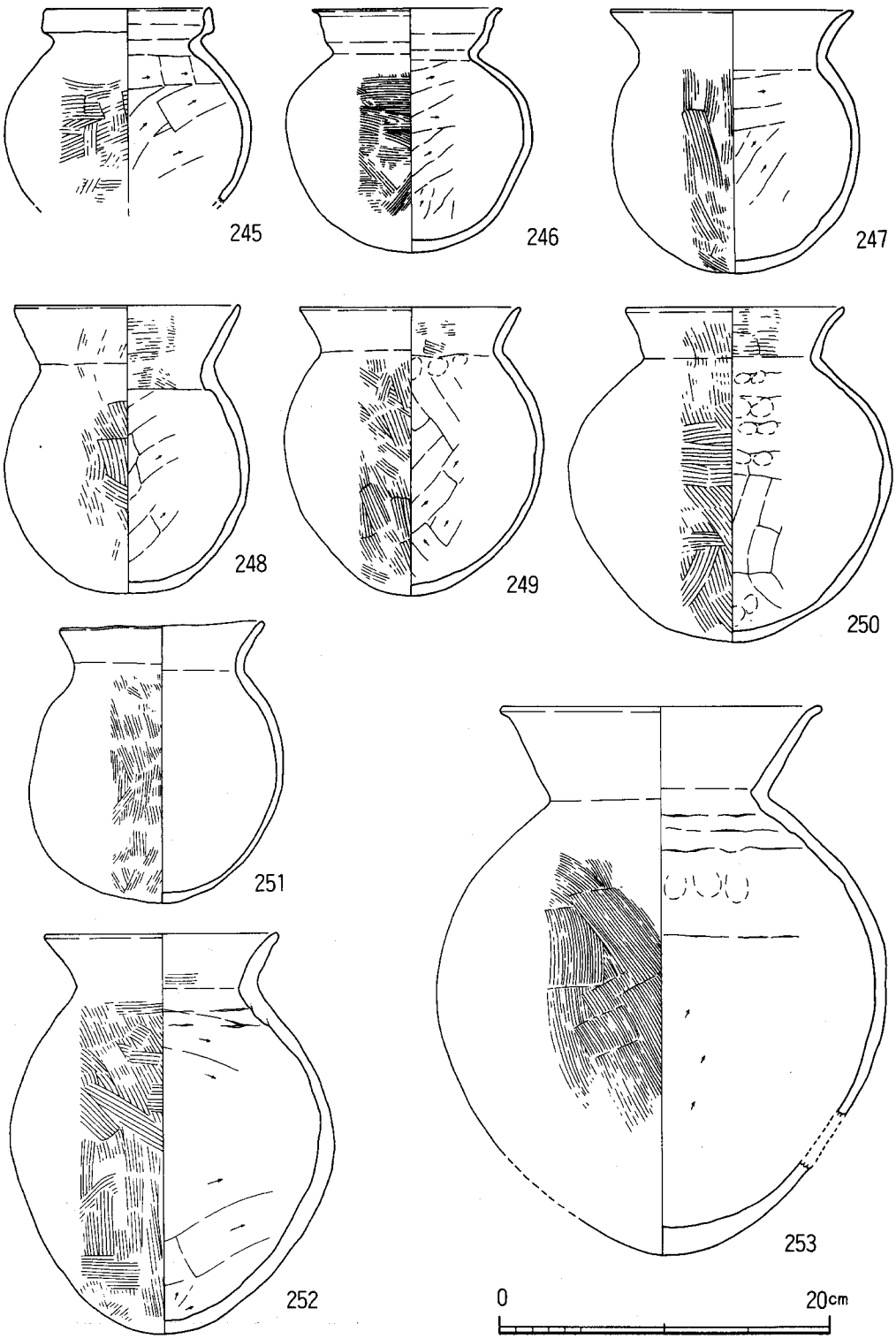


Fig. 61 SC－30出土土器実測図(3) (1/4)

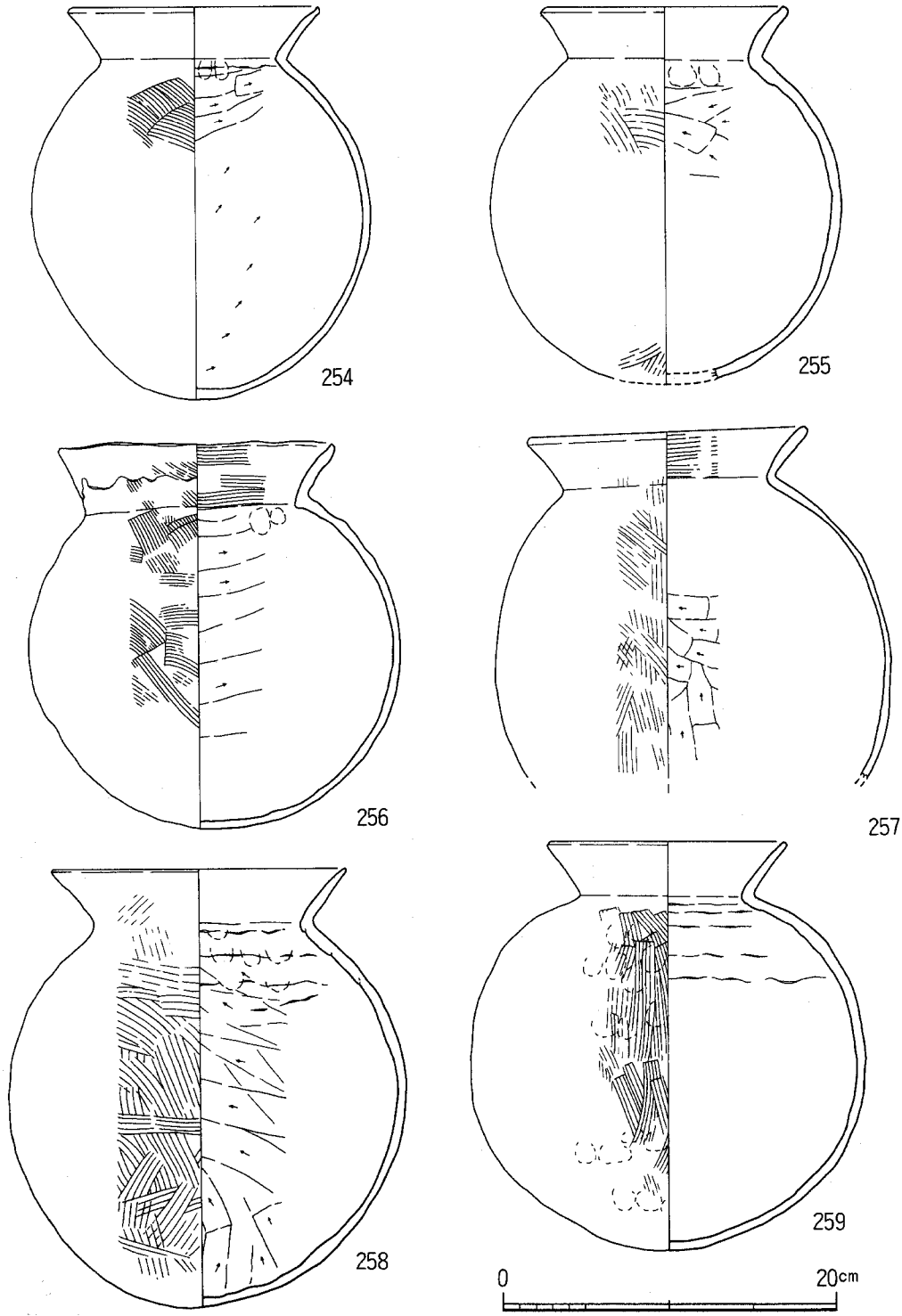


Fig. 62 SC－30出土土器実測図(4) (1/4)

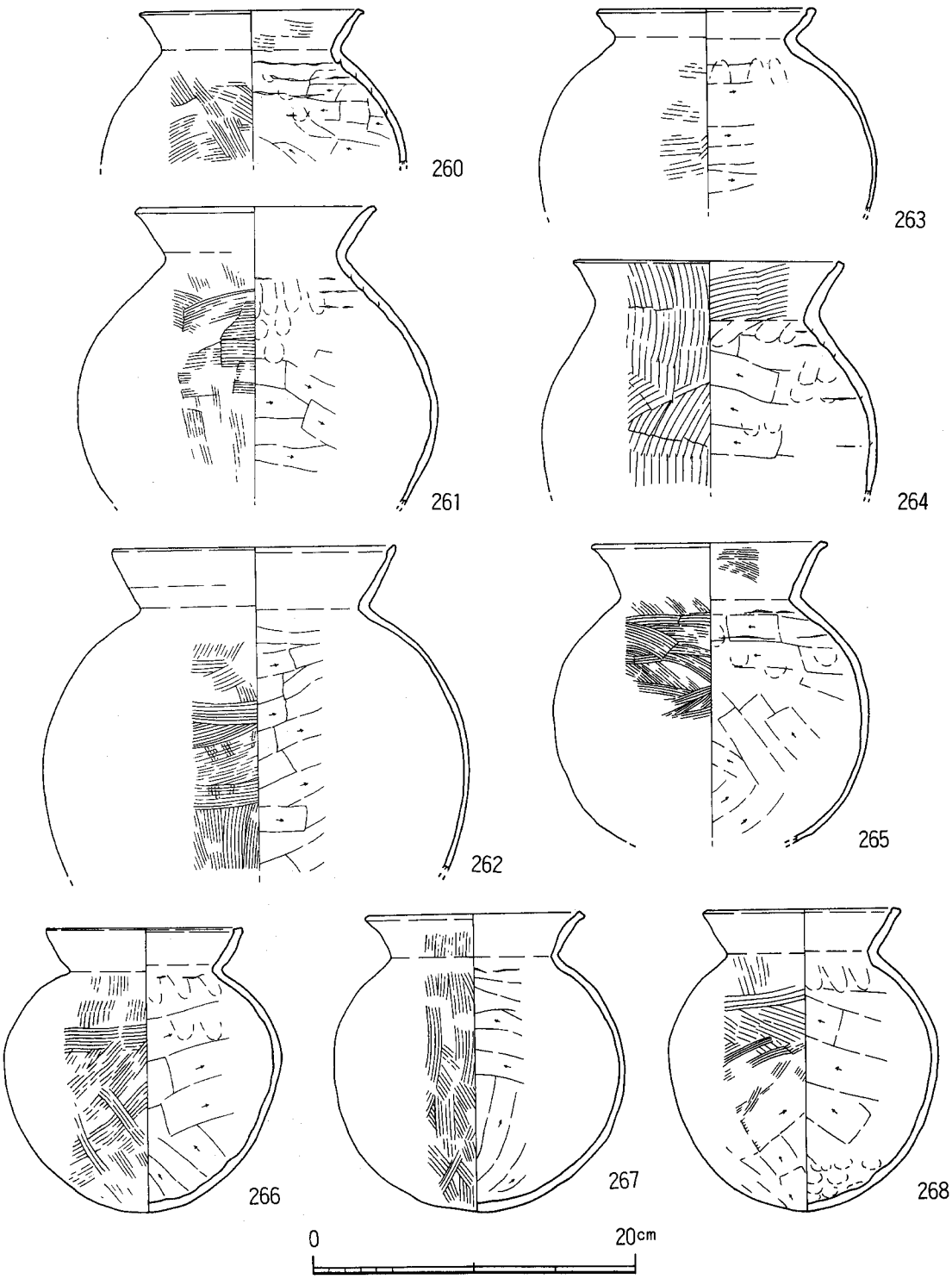


Fig. 63 SC－30出土土器実測図(5) (1/4)

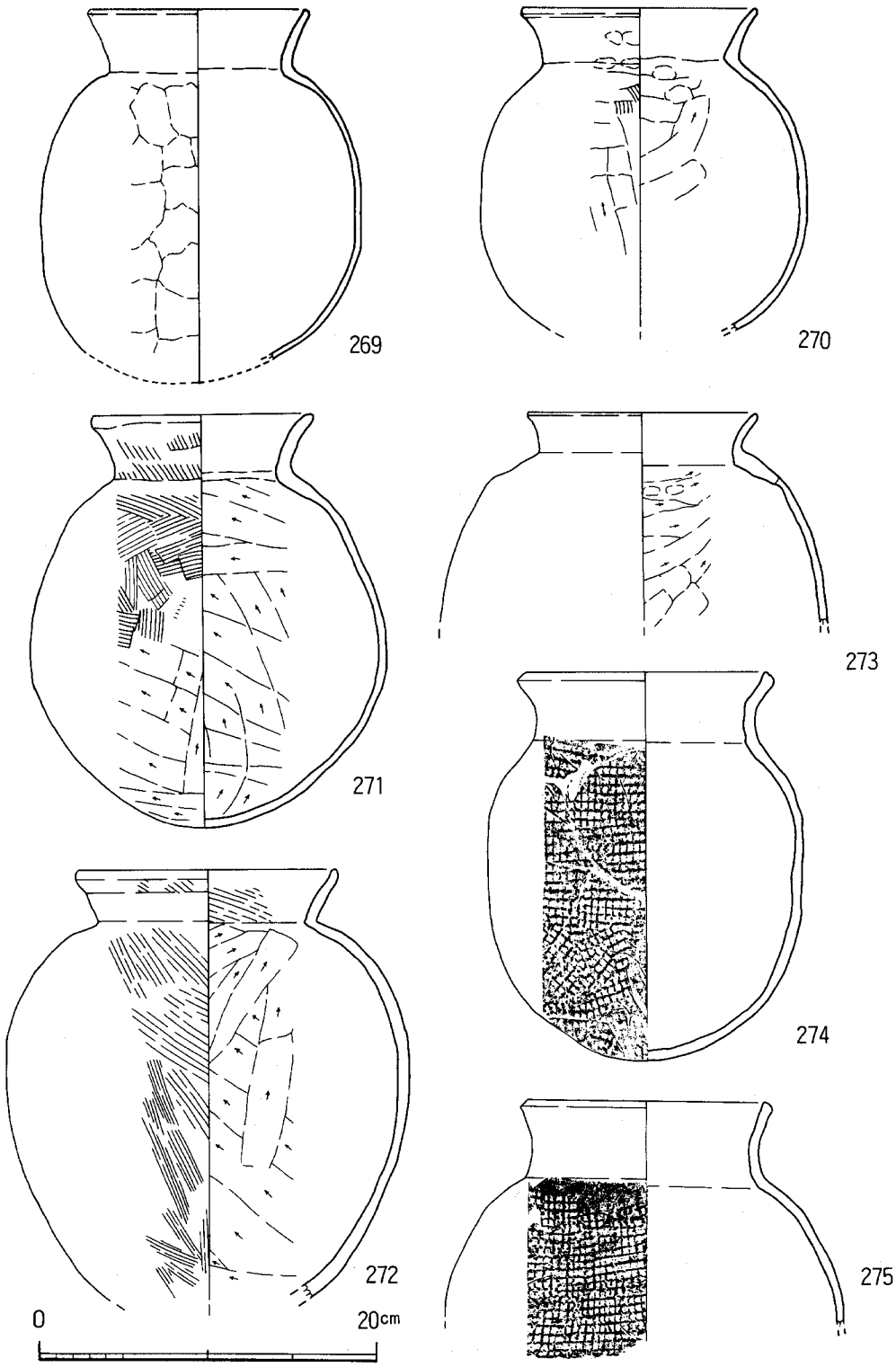


Fig. 64 SC－30出土土器実測図(6) (1/4)

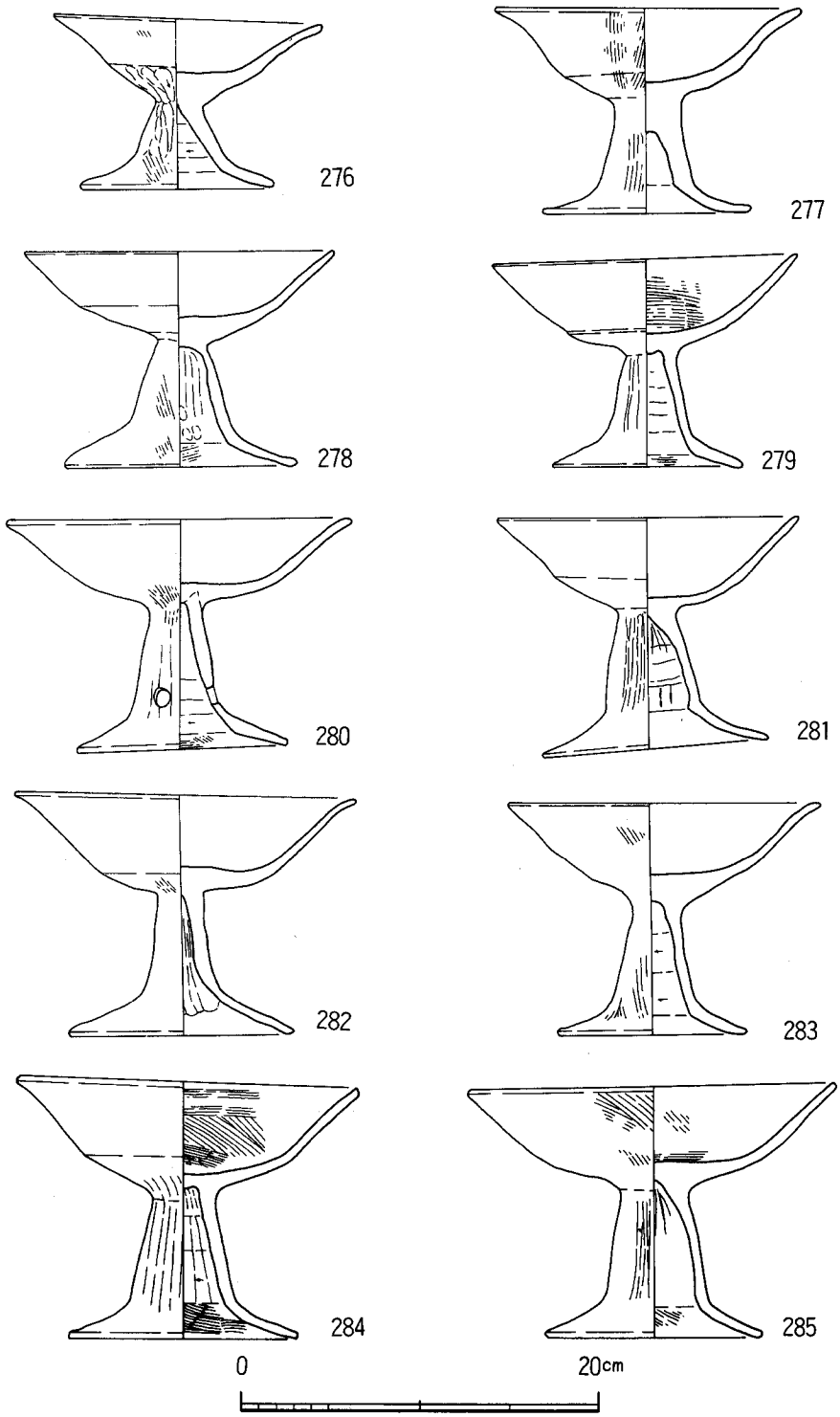


Fig. 65 SC－30出土土器実測図(7) (1/4)

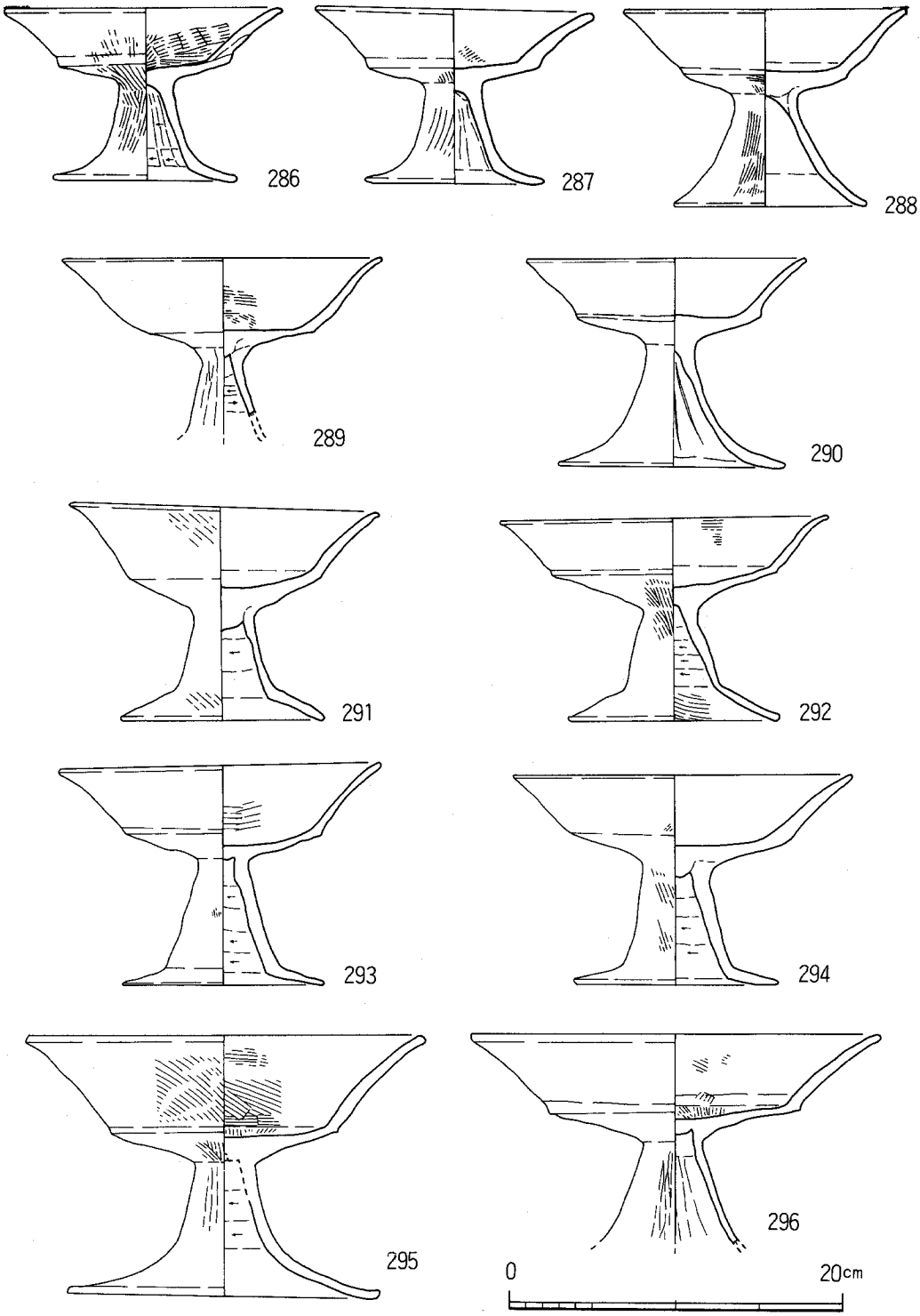


Fig. 66 SC－30出土土器実測図(8) (1/4)

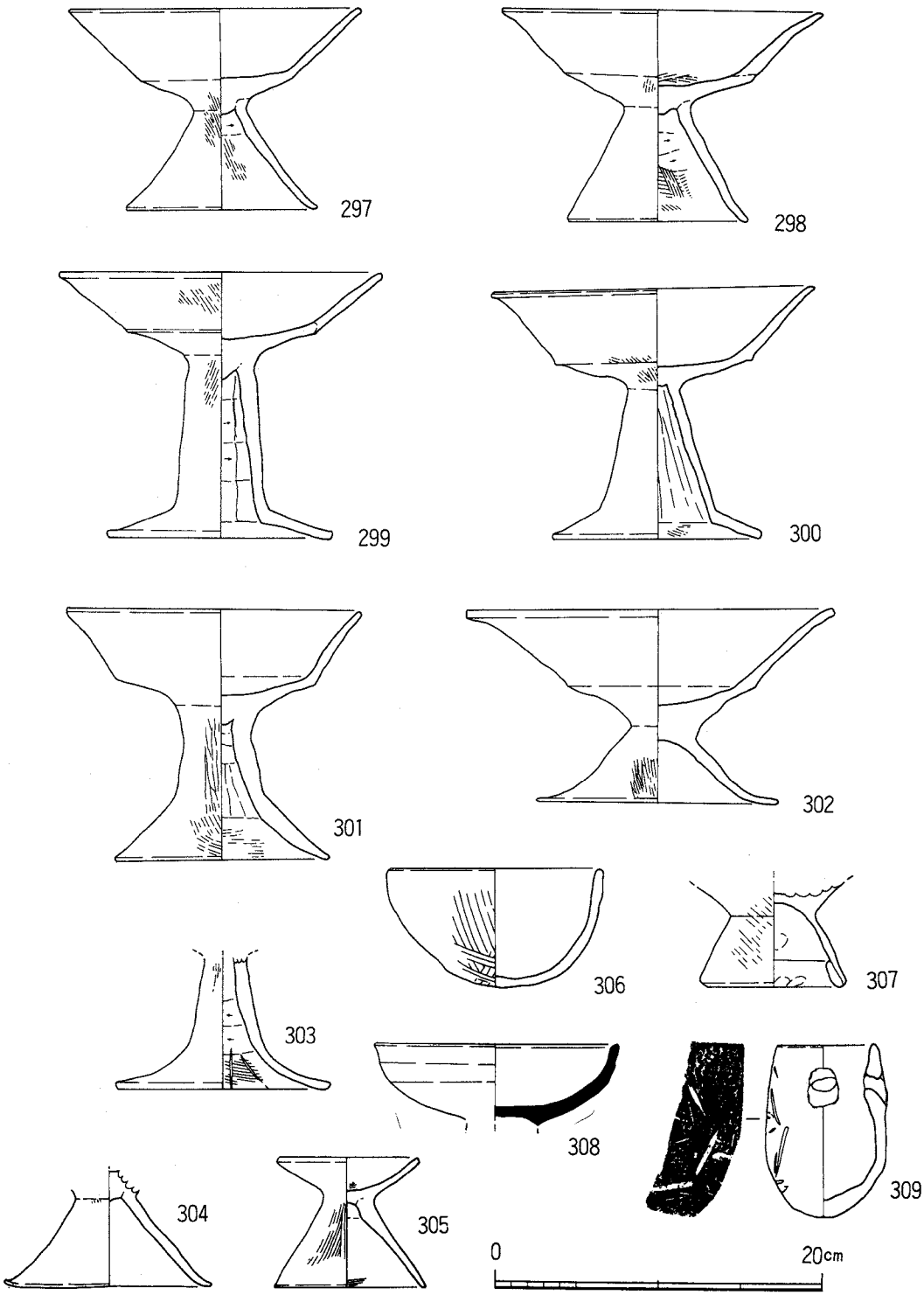


Fig. 67 SC－30出土土器実測図(9) (1/4)

ぎみに直口する。胴部は卵形。C類。253は口径19.5cm、器高33.0cmの大型壺。「く」字状の口縁部は大きく外反し、端部は外方につまみ出す。

甕形土器（245・247～252・255～275）249・250・254～261・264・270～273は口縁部が短く「く」字状に外反し、胴部が短胴の球形をなすものでAII類に属する。247・248・251・252・264・265は「く」字状の口縁部が上方に長くのび、卵形の胴部をもつものでAIII類に属する。262・263・266～268は「く」字状の口縁部が内弯ぎみに立ち上がり、端部を内側に小さくつまみ出すもので、布留系もしくはその影響を受けたものである。AIV類に属する。269・274・275は口縁部が直口した後に小さく外反するもので、端部は内側に小さくつまみだす。胴部は肩がはり、外面に叩き目を施すものでB類に属する。245は口径10.0cmの二重口縁をもつものでC類に属する。擬口縁は短く「く」字状に外反し、口縁部は直口して立ち上がる。

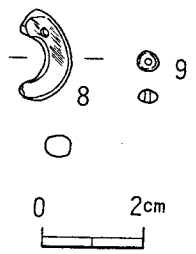


Fig. 68
SC－30出土
玉類実測図（2/3）

鉢形土器（306）口径13.0cm、器高7.2cm。体部は半球形で口縁部は直口して立ち上がる。G類に属する。

高坏（276～304）いずれもおおまかにはC類の範ちゅうに含まれるが豊富なバリエーションがあり、更に細分化されるものである。坏部についてみれば体部が内弯ぎみに立ち上がり、口縁部が外反するものと、体部下半に凸帯状の段をつくって口縁部が外反するものとに大別される。脚部はストレートにのびて裾部が屈曲して短く開くものと、大きくラッパ状に開くものとに分けられる。303の脚裾部内面にはヘラ記号がある。

器台（305・307）305は口径8.7cm、器高7.9cm。受け部は内弯ぎみに開き、脚部は短く朝顔状に開く。B類に属する。

蛸壺（309）口径6.0cm、器高10.5cm。体部はコップ状に直口し、口縁部直下に穿孔がある。半欠する為に明確ではないが、外面には人面様の線刻がある。調整は内外面ともに指頭押圧後にていねいにナデて仕上げている。

須恵器高坏（308）口径14.9cm。体部は内弯ぎみに立ち上がり、口縁部は直口する。平坦に整えた端部は小さく内傾する。調整は内外面とも、口縁部がヨコナデ、体部はナデて仕上げている。本住居址出土の遺物で唯一の須恵器である。

勾玉（8）背部は丸みをおび、半月形をなす。長さ18mm、厚さ2.5～4.7mm、重さ1g。断面形は円形に近い。

小玉（9）径4.1mm、厚さ2.3mmのライトグリーンのガラス小玉である。

SC－31（Fig.69　PL.18）

C－XIII区に検出した住居址で、砂丘尾根上に南北に連なる住居群中で南端に位置する。SC－35より南東へ3mの距離にある。平面形は南北5.80m、東西4.80mを測る隅丸方形をなし、面

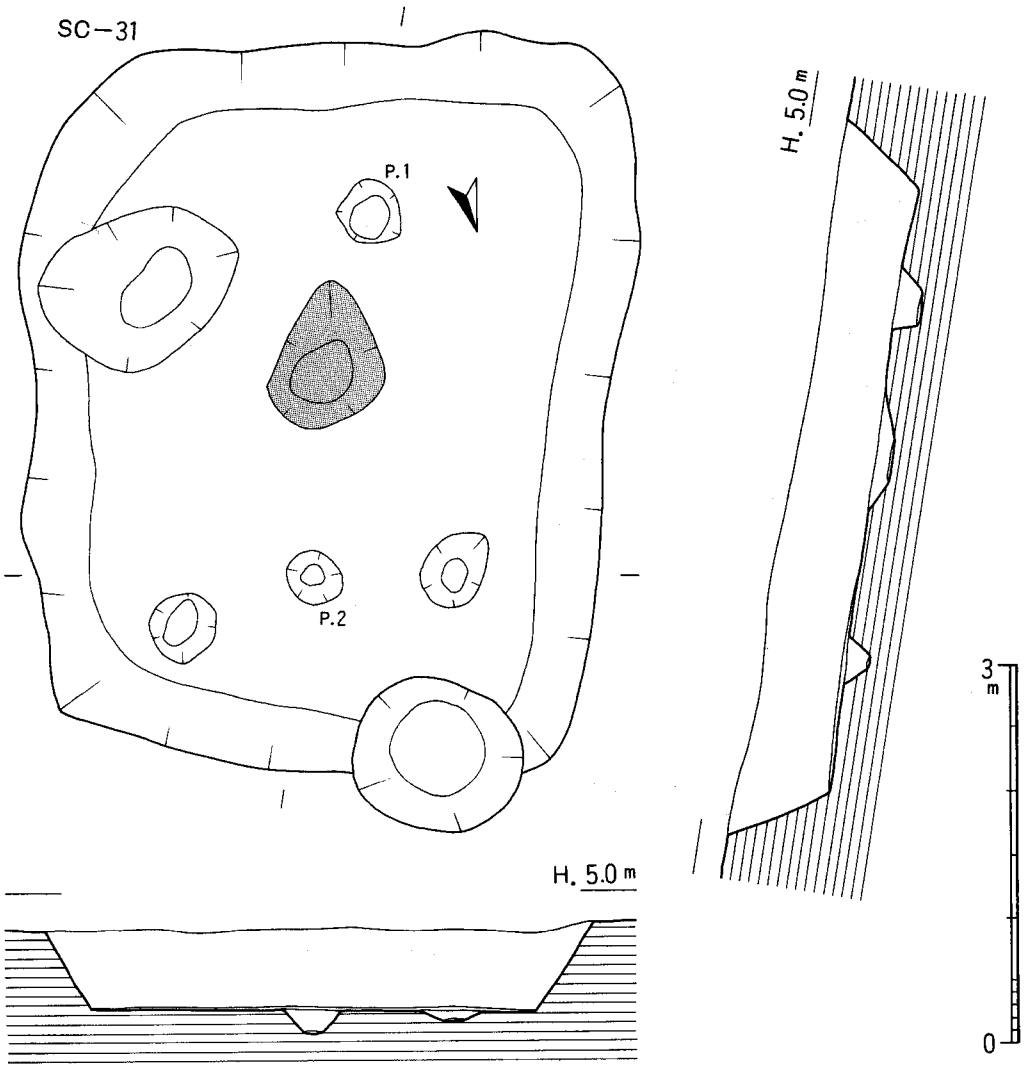


Fig. 69 SC－31実測図（1/60）

積は27.9m²である。壁の遺存状況は良好で、高さは83cmを測り、急峻に立ち上がる。床面は平坦であるが中央部が浅くくぼんでいる。主柱穴は南北筋の２本と考えられる。主柱穴間に炉址を検出した。炉は120×85cmの楕円形で、浅くレンズ状に凹み、炭片を含む淡黒色砂が充満していた。

出土遺物（Fig.70～72）

壺形土器（310～312）310は口径5.7cm。口縁部が細長くラッパ状に開く長頸壺でＢⅠ類。311はＢⅢ類の小型壺。「く」字状の口縁部はストレートに開き、端部は尖る。胴部は扁球形で、頸部に穿孔がある。口径10.2cm、器高10.8cm。313は口径13.8cmの小型壺。「く」字状の口縁部は

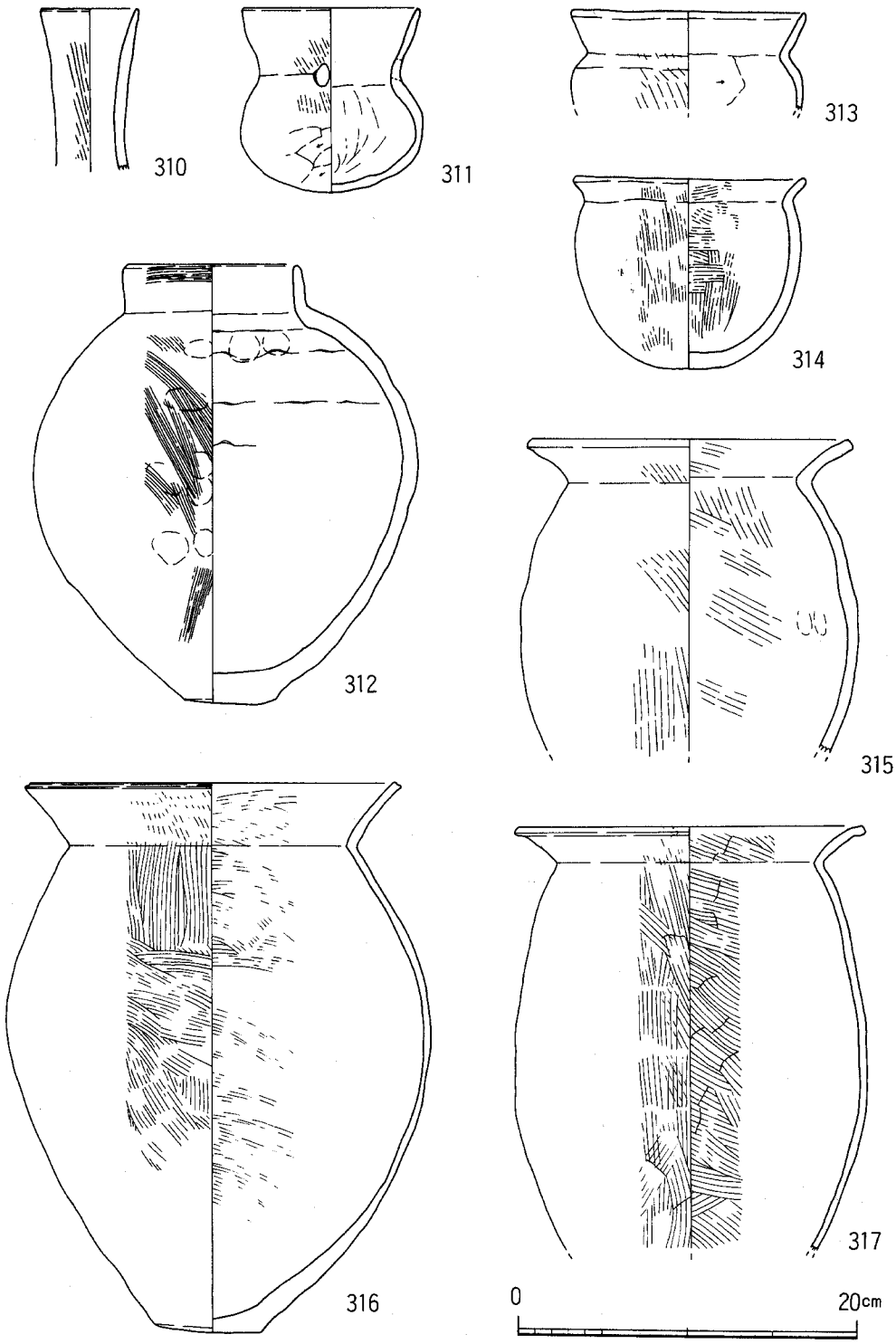


Fig. 70 SC－31出土土器実測図(1) (1/4)

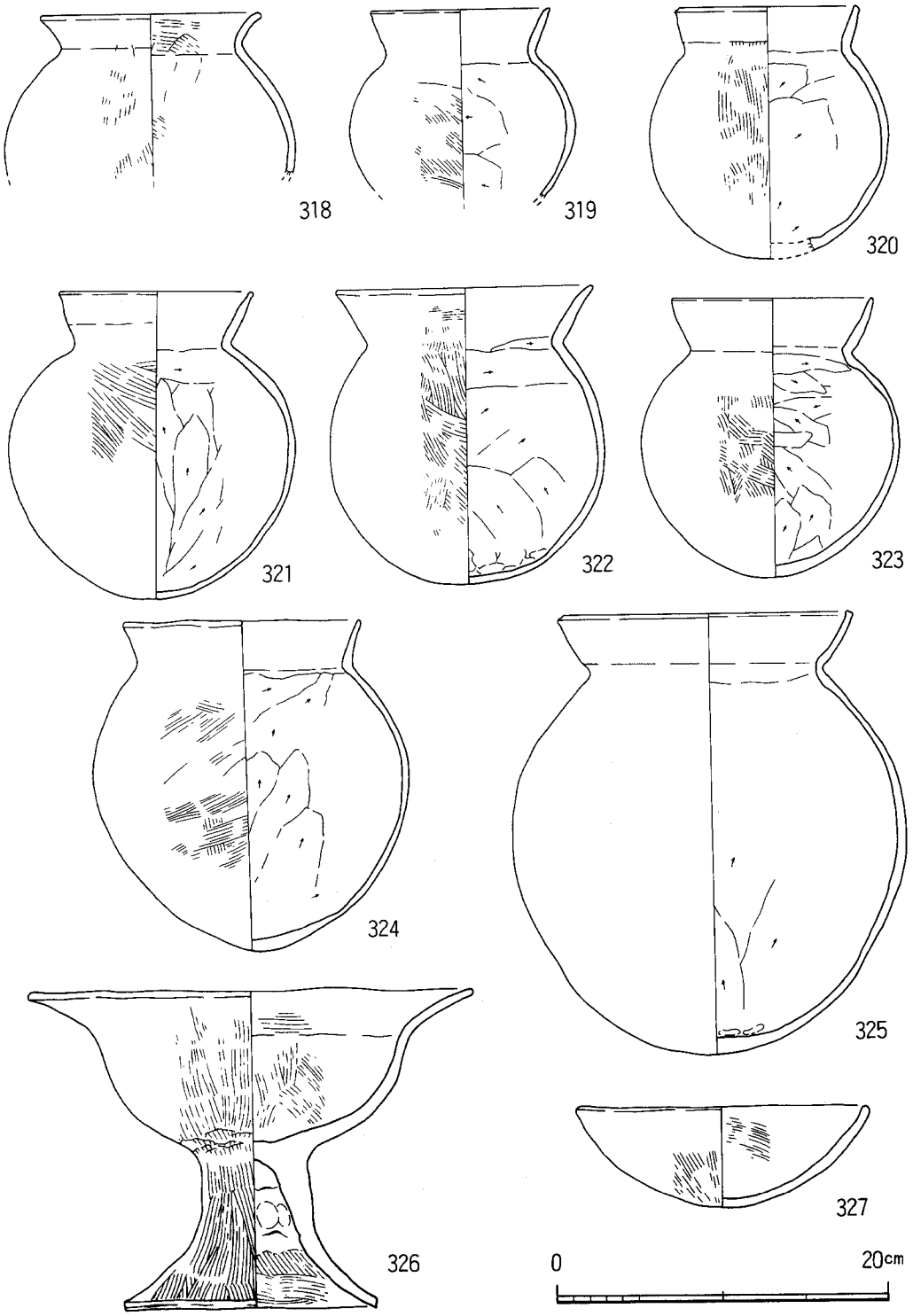


Fig. 71 SC－31出土土器実測図(2) (1/4)

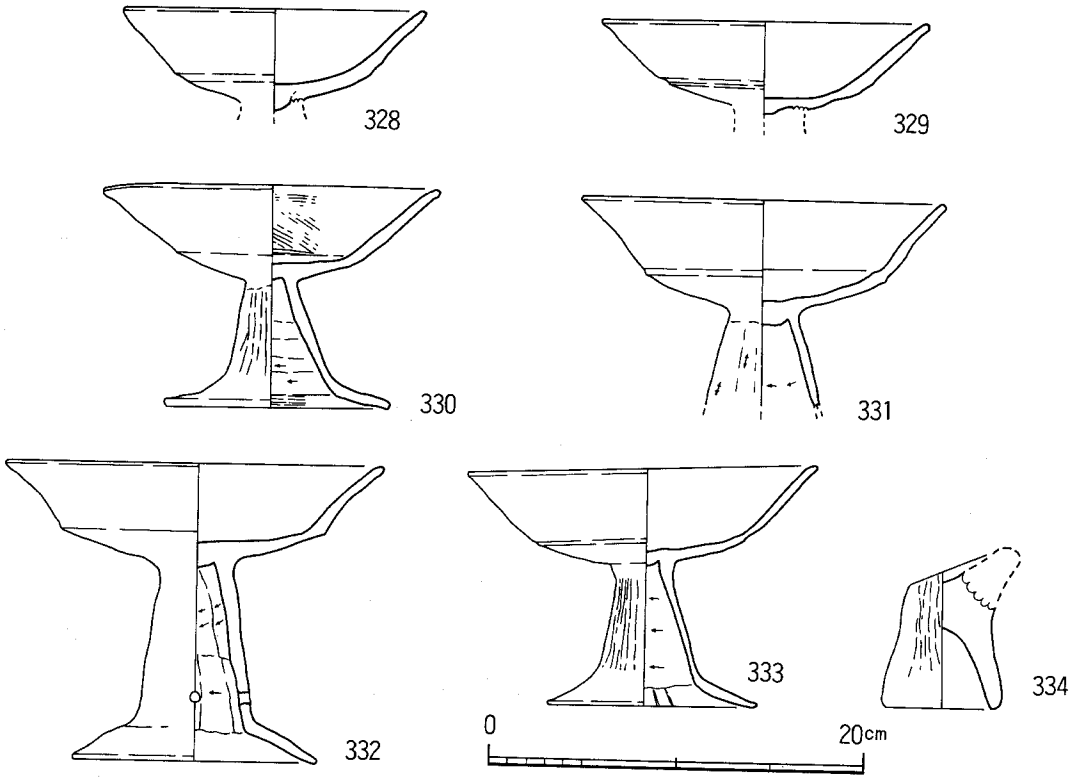


Fig. 72 SC－31出土土器実測図(3) (1/4)

短く外反する。312は口径10.6cm、口縁部は短く直口する。胴部は卵形で厚手の平底がつく。D I 類。

甕形土器 (315～325) 315～317はAI類の甕である。「く」字状の口縁部は短く外反し、砲弾状の長い胴部がつく。調整は内外面ともにハケ目。315は口径19.2cm。316は口径22.2cmで、平底の底部がつく。317は口径20.0cm。318・324はA II類に属する甕である。「く」字状の口縁部は短く外反し、短い胴部がつくものである。324は口径14.2cm、器高20.1cmで尖底の底部がつく。319・320・322・323は「く」字状の口縁部が上方にのびるものでA III類に属する。胴部は球形で丸底の底部がつく。321・325は「く」字状の口縁部が内弯ぎみに立ち上がる布留系の甕でA IV類。口縁端部は内側に小さくつまみ出す。胴部は球形で丸底の底部がつく。

鉢形土器 (314・326・327) 314は口径13.4cm、器高11.3cm。口縁部は短く「く」字状に外反し、小さな平底の底部がつく。D類。326は口径26.7cm、器高19.2cm。口縁部は鍔状に長く外反し、半球形の胴部に丸底の底部のつくC類の鉢に脚のつくものである。脚は短くラッパ状に開く。327は口径17.7cm、器高5.1cm。体部は内弯ぎみに立ち上がり、口縁部は小さく直口する。

高坏 (328～333) いずれもC類に属する。坏部は下半が屈曲して弱い段状の稜をつくり、口縁部は反りぎみに開く。稜直上には凹線の巡るものがある。脚部はストレートにのびて裾部が

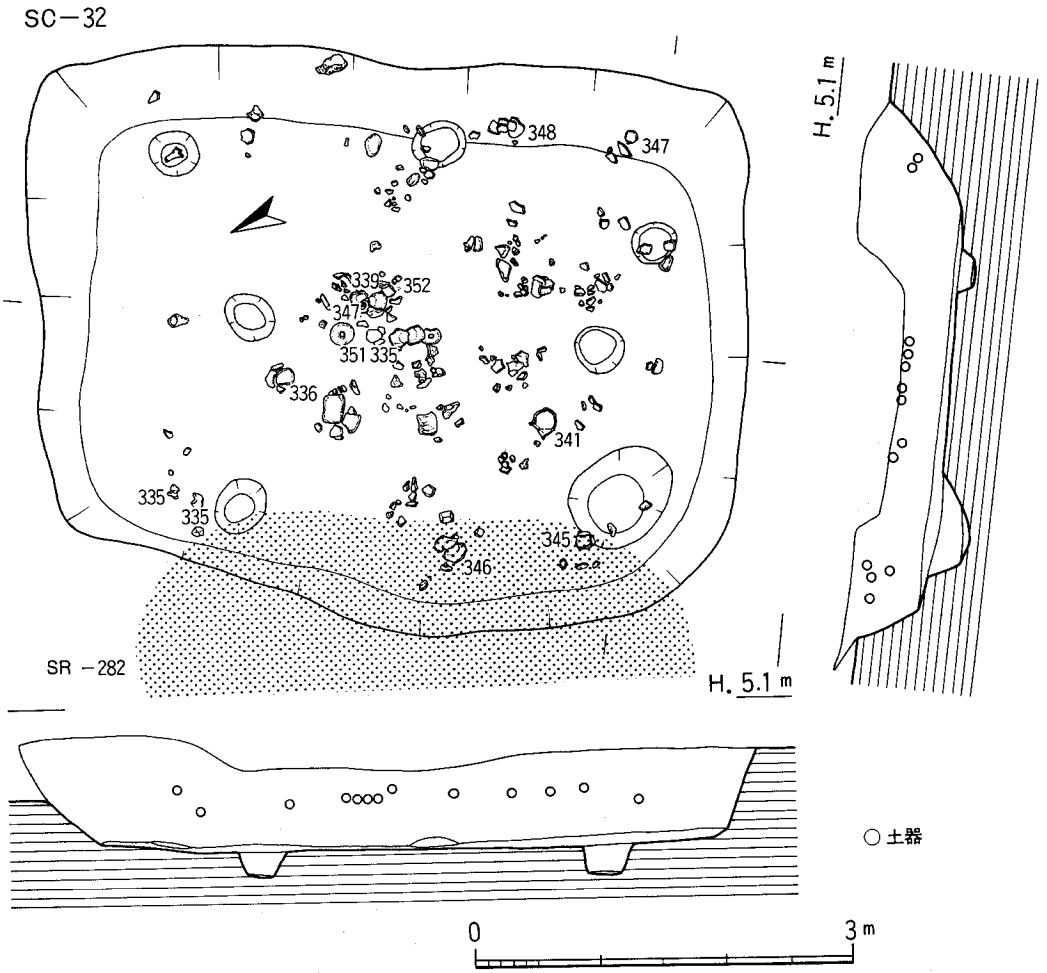


Fig. 73 SC－32実測図（1/60）

屈曲して開くもの（330・332・333）と短く筒状に開くもの（331）がある。

支脚（334）受け部が嘴状になる沓形のもので、脚部は直線的に短く開く。

SC－32（Fig.73 PL.19）

B－Ⅻ区に検出した住居址で、SC－36の西2mにあり、SR－282と重複する。平面形は南北5.68m、東西4.53mを測る隅丸長方形をなし、面積は25.8m²である。壁の遺存状況は良好で壁高は84cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は平坦である。柱穴は7個あるが、主柱穴は肩面中央の南北筋の2本と考えられる。南西隅には85×70cm、深さ35cmの楕円形土壙がある。

遺物は壺・高杯等の完形土器があるが、住居址中央に集中して拡がる。

出土遺物（Fig.74・75）

壺形土器（335～339）すべて小型壺である。339は二重口縁のAⅢ類。擬口縁は短く「く」字

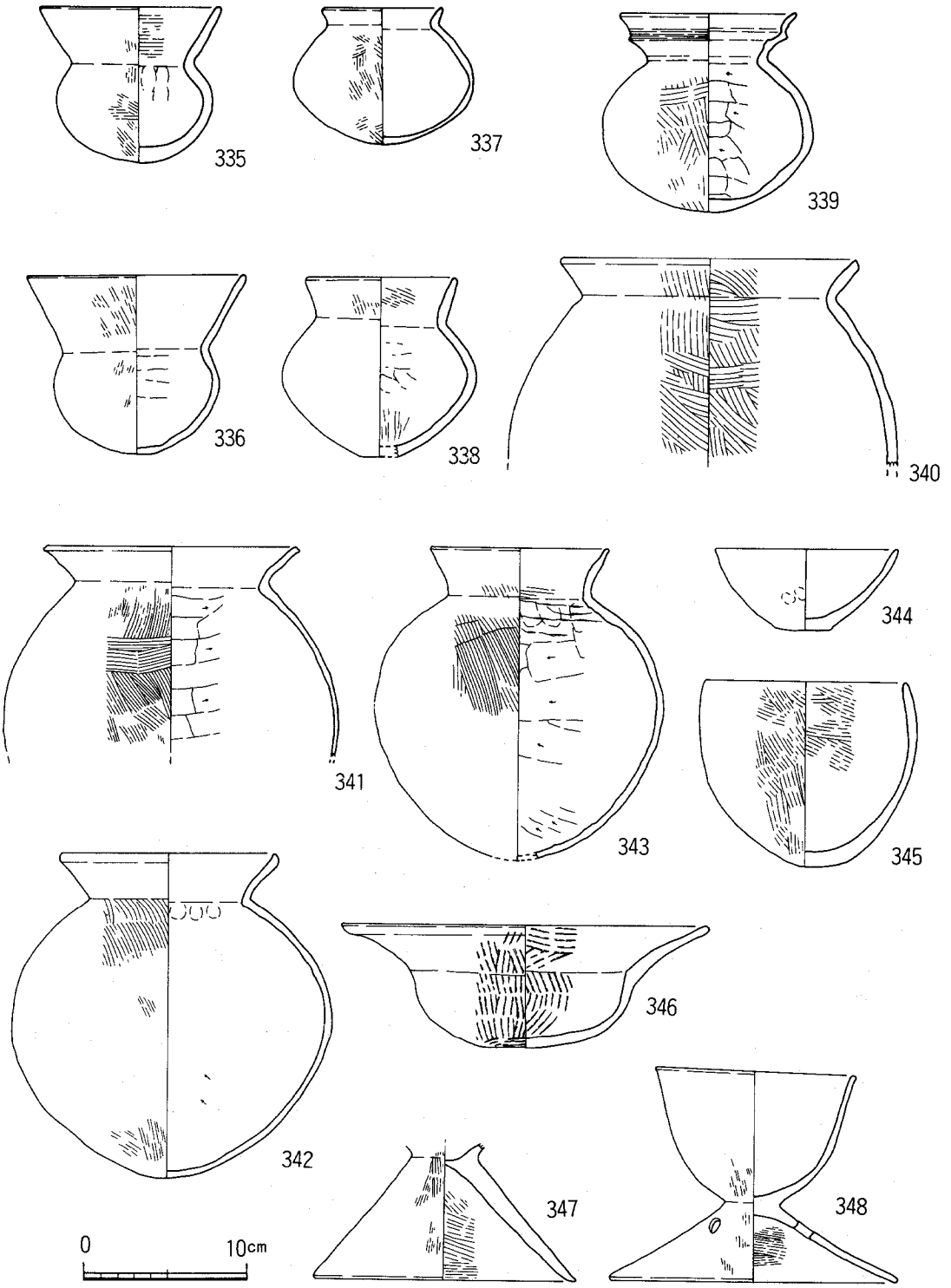


Fig. 74 SC－32出土土器実測図(1) (1/4)

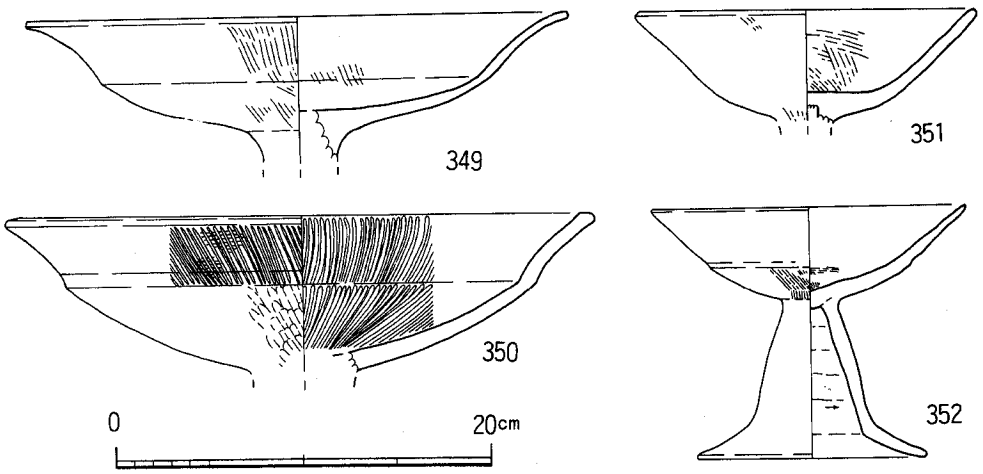


Fig. 75 SC－32出土土器実測図(2) (1/4)

状に外反して凸帯状の段をつくり、口縁部は短く直口した後に小さく外反する。口径9.3cm、器高12.0cm。335・338はBIII類に属する。「く」字状の口縁部は短く外反する。338は小さな平底の底部が付く。337は口径7.2cm。口縁部は短く直口した後に小さく外反する。胴部は扁球形。F類。336は口径13.3cm、器高11.1cm。口縁部は長く直線的に開き、扁球形の胴部がつく。

甕形土器 (340～343) 340は口径15.0cm。「く」字状の口縁部は短く開き、卵形の胴部がつく。AI類。341・343はAII類の甕である。口縁部は「く」字状に外反し、胴部は短胴で球形をなす。341は口径15.0cm。343は口径11.0cmで尖底ぎみの底部がつく。342は口径13.3cm。布留系の影響を受けたものでAIV類に属する。「く」字状の口縁部は内弯ぎみに開き、端部は直口ぎみにつまみ上げる。胴部は短めの卵形で尖底ぎみの丸底が付く。

鉢形土器 (345～347) 345は口径12.0cm、器高11.5cm。胴部は砲弾状をなし、口縁部は小さく内傾する。E類。346は口径22.5cm。胴部は下脹れの半球形で、口縁部は鍔状に長くのびる。C類に属する。

高坏 (348～352) 348は坏部が直口ぎみに立ち上がる鉢状をなし、端部は小さくつまみ出す。脚部は低く朝顔状に大きく開く。上位に円孔を穿つ。349・350はA類に属する大型の高坏である。体部は内弯ぎみに立ち上がり、口縁部は大きく外反する。349は口径28.8cm。350は口径31.4cmで口縁部外面と内面全域に箆描きの粗い暗文を施す。351・352はC類の高坏で、口縁部はストレートに開く。352は口径16.8cm。直線的にのびた脚は裾部が強く屈曲して反りぎみに開く。

SC－33 (Fig.76 PL.19)

C－XII区に検出した住居址で、SC－36より東へ3mの距離にあり、南隅部はSC－37によって切られる。平面形は南北6.60m、東西4.70mを測る長方形をなし、面積は31.0m²である。壁の

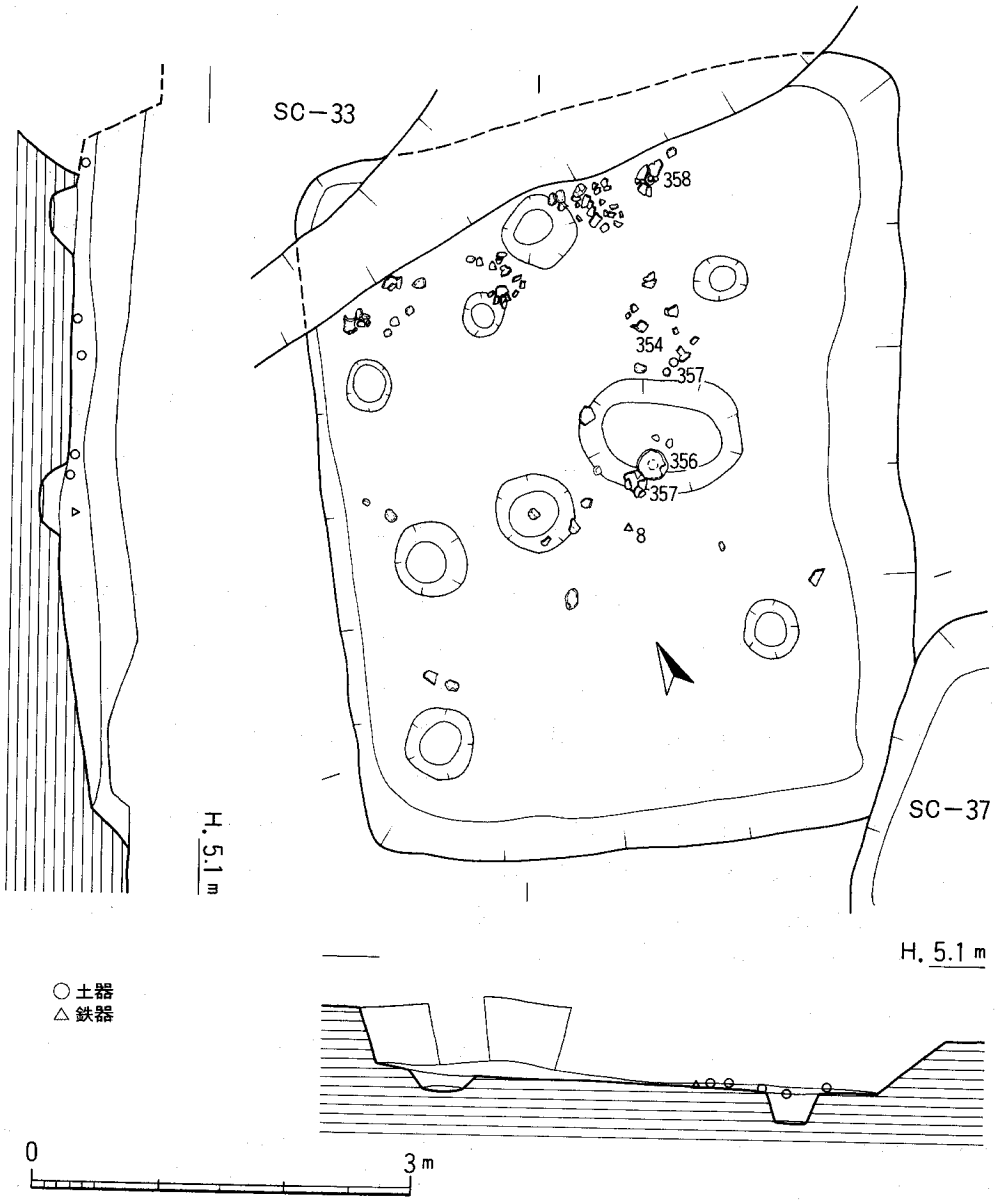


Fig. 76 SC－33実測図（1/60）

遺存状況は良好で、高さ88cmを測りゆるく傾斜して立ち上がるが西壁は垂直になる。床面は浅い凹レンズ状である。中央部東寄りの位置に炉がありこれを取り囲むように８個の柱穴がある。炉は140×85cm、深さ12cmの楕円形で浅いレンズ状に凹み、炭・焼砂が堆積していた。炉を中心に西側に薄い炭層の拡がりが認められた。灰の掻き出しによる

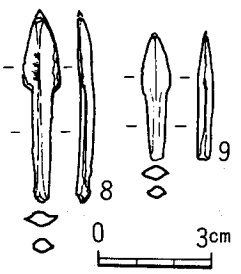


Fig. 77 SC－33出土銅鏃実測図（1/2）

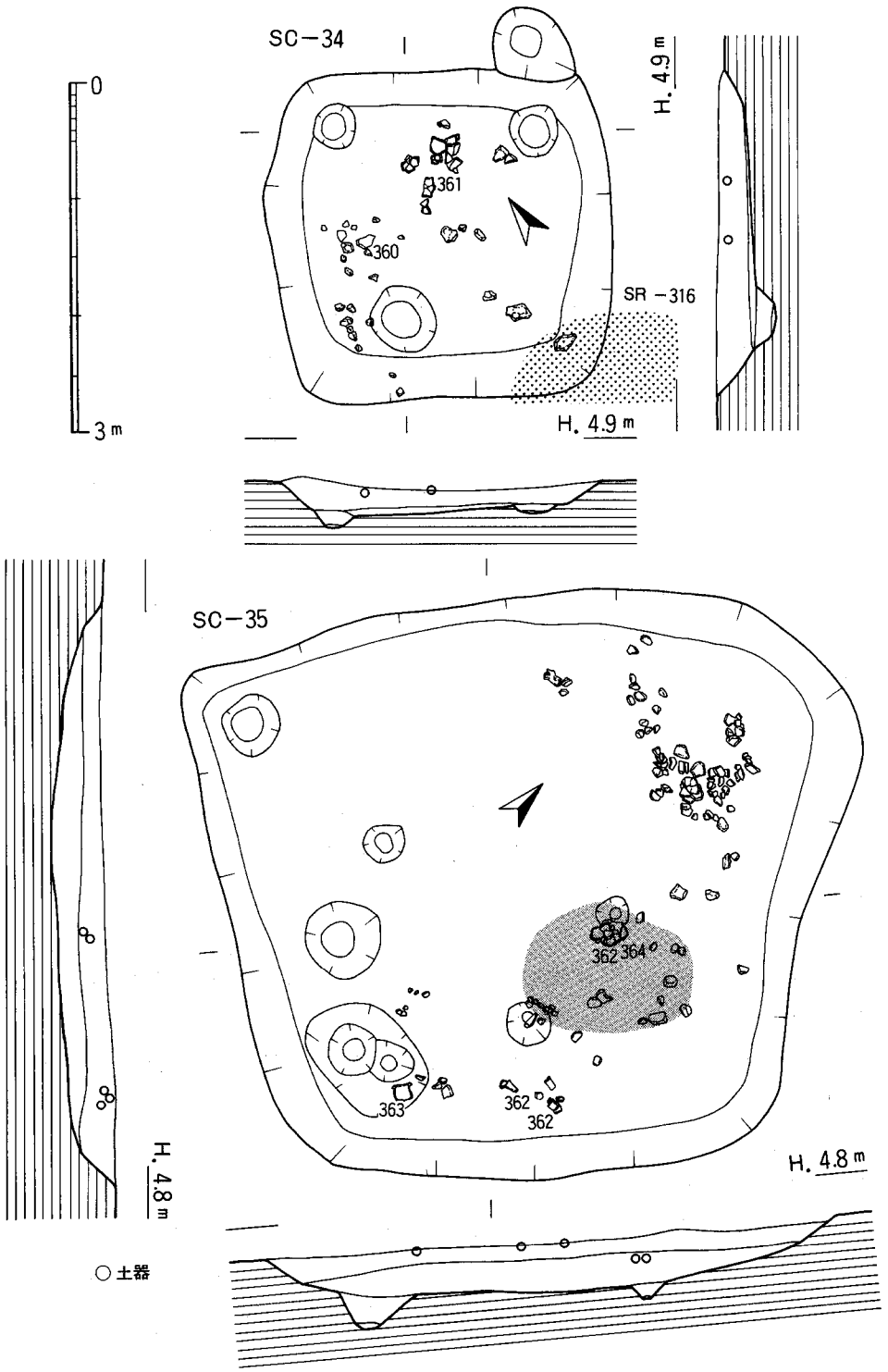


Fig. 78 SC−34・35実測図 (1/60)

ものであろう。

出土遺物 (Fig.79)

壺形土器 (353・354) 353はBII類の小型壺。口径は12.4cm。「く」字状の口縁部は長くストレートにのびる。354はBIII類の小型壺。「く」字状の口縁部は短く直線的にのび、球形の胴部がつく。

甕形土器 (355) AI類に属するもので口縁部は短く「く」字状に外反するものであろう。胴部は砲弾形で平底の底部がつく。調整は内外ともに粗いハケ目。

鉢形土器 (358・359) 358は口径19.0cm、底径3.8cm、器高9.4cm。胴部は内弯ぎみに立ち上がり、口縁部は直口ぎみになる。底部は小さな平底で厚手である。F類。359は口径12.6cm、底径3.7cm、器高11.9cm。胴部は半球形で、口縁部は屈曲して強く内傾する。F類に属するものである。

高坏 (356・357) いずれもC類に属する高坏である。口縁部は反りぎみに大きく開き、端部は小さくつまみ出す。356は口径18.7cm。357は口径18.8cm。脚部は直線的に短くのび、裾部は反りぎみに開く。

銅鏃 (8・9) 有茎鏑造腸抉柳葉式に属する。開部は損傷が著しい。8は全長5.1cm、身幅1.0cm、茎長3.0cmを測り、反りが強い。茎部にはバリのカット痕が残る。重さ4.5g。9は全長3.4cm、身幅0.8cm。

SC－34 (Fig.78 PL.20)

C－XII区に検出した住居址で、SC－62のすぐ南1mの距離にある。平面形は南北2.98m、東西2.80mを測る小型の方形をなし、面積は8.40m²である。壁高は30cmを測り、ゆるく傾斜して立ち上がる。床面は平坦である。柱穴は西壁の西隅と東隅際に3個ある。

遺物は壺・甕・高坏等があるが量的に少ない。

出土遺物 (Fig.79)

壺形土器 (360) 口径24.3cm。口縁部は一旦直口ぎみに立ち上がった後に朝顔状に開く。胴部は肩のはった卵形をなす。調整は内外ともに粗いハケ目。EI類に属する。

甕形土器(361)口径15.5cm。「く」字状の口縁部は短く直線的に開く。胴部は短めの卵形をなす。調整は内外面ともにハケ目。

SC－35 (Fig.78)

C－XII区に検出した住居址で、SC－31より北西へ3mの距離にある。平面形は東西5.03m、南北は西壁が5.60m、東壁が4.00mを測る台形状の方形をなし、面積は24.0m²である。壁高は29cmを測り、ゆるく傾斜して立ち上がる。床面は浅い凹レンズ状である。柱穴は7個あるが、南壁側に集中する。北東隅寄りの柱穴間1.2mの範囲に炭片を含む黒色砂が薄く拡がり、炉址の可能性がある。

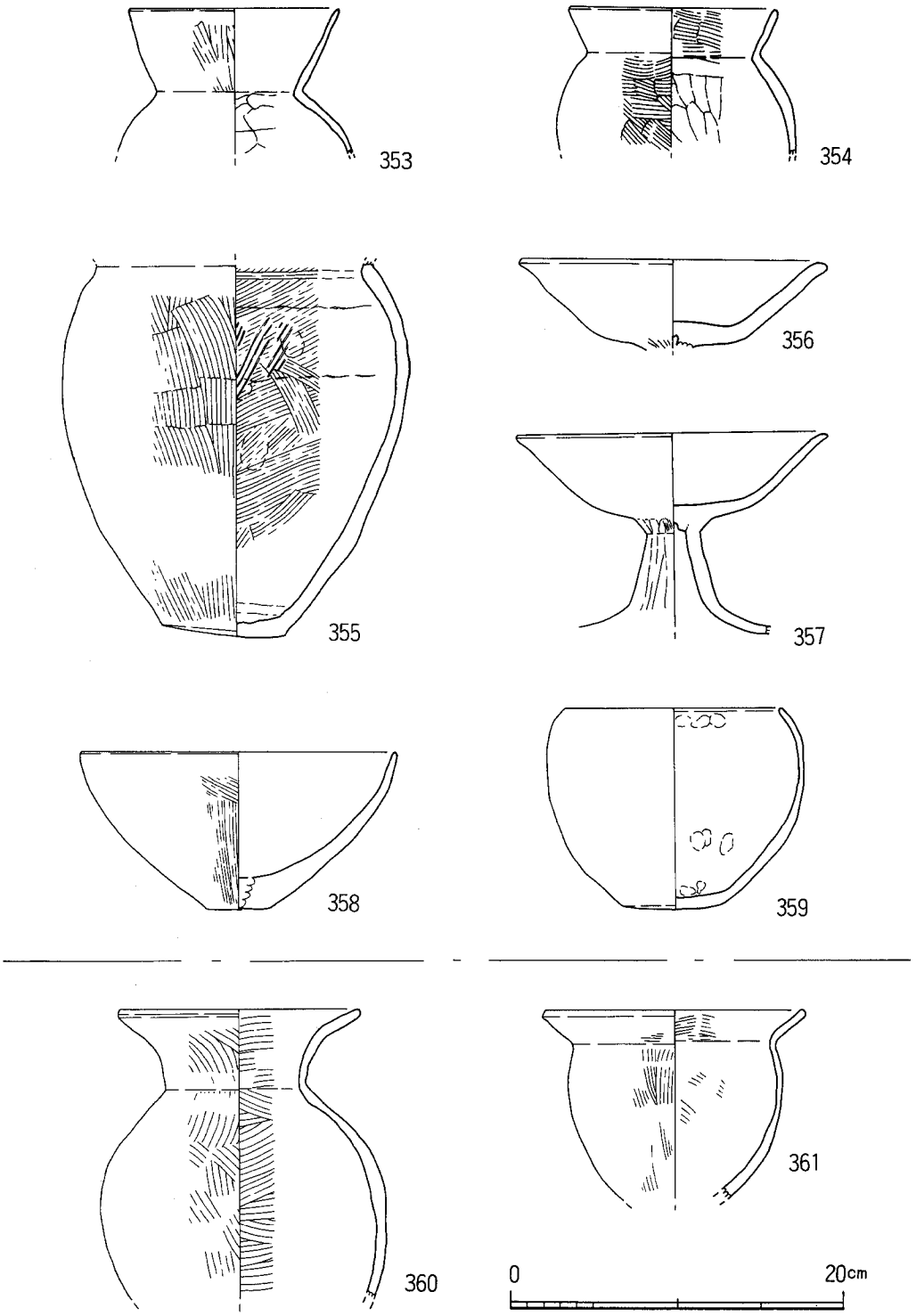


Fig. 79 SC－33・34出土土器実測図（1/4）

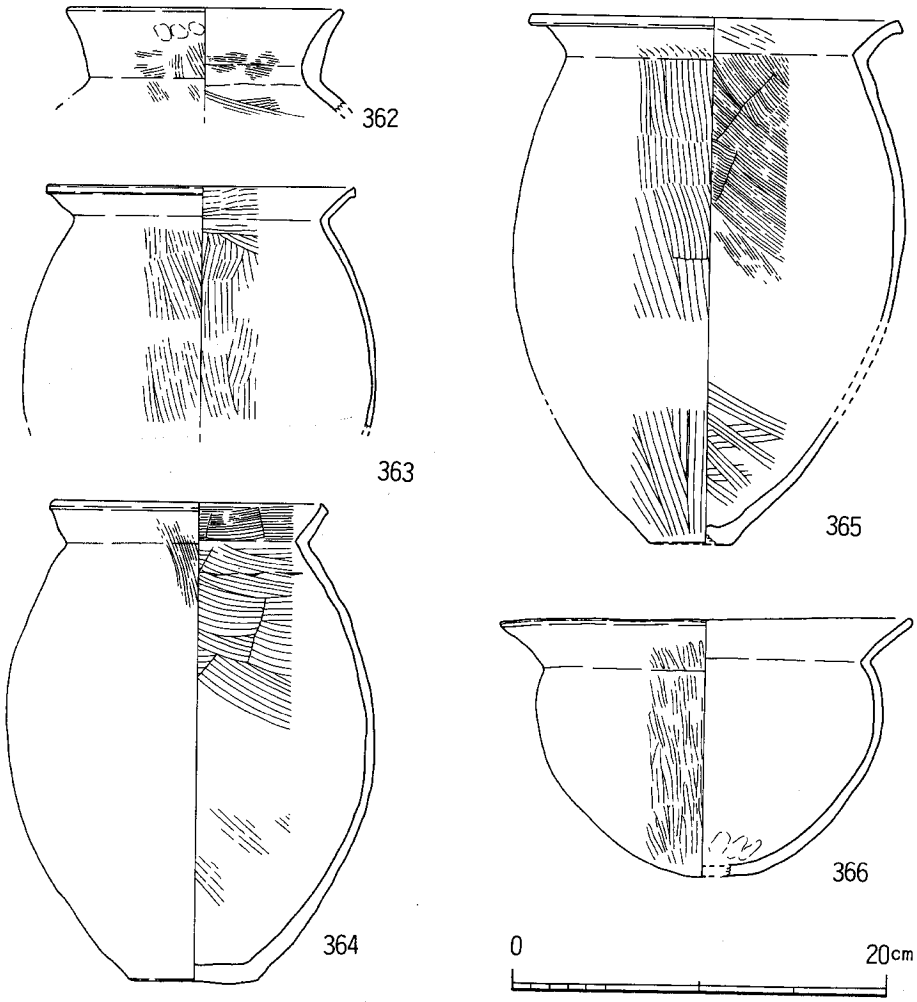


Fig. 80 SC－35出土土器実測図（1/4）

遺物は量的に少ないが北壁側に集中して拡がる。

出土遺物（Fig.80）

甕形土器（362～365）363～365はいずれもAI類の甕である。「く」字状の口縁部は短く外反し、端部は平坦に整えて内側あるいは外方に小さくつまみ出す。胴部は長胴の卵形をなし、平底の底部がつく。調整は内外面ともにハケ目。363は口径16.2cm。364は口径14.7cm、底径7.0cm、器高25.5cm。365は口径20.0cm、底径4.6cm、器高28.1cm。362は口径14.2cm。「く」字状の口縁部は厚く、小さく外反する。調整は内外面ともにハケ目。AII類に属する。

鉢形土器（366）口径21.7cm、底径3.4cm、器高13.9cm。「く」字状の口縁部は直線的に短く開く。胴部は半球形で小さな平底の底部がつく。外面は丁寧な研磨仕上げ。B類。

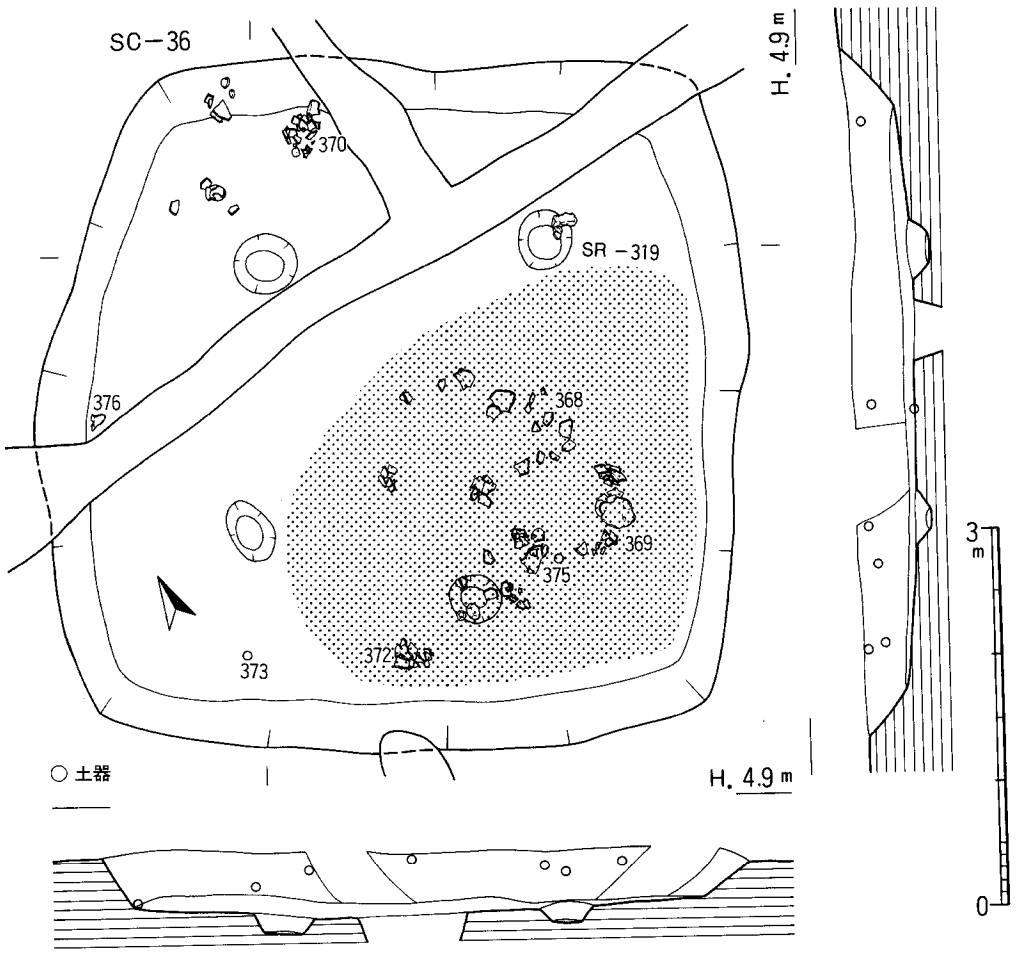


Fig. 81 SC－36実測図（1/60）

SC－36（Fig.81 PL.20）

C－Ⅲ区に検出した住居址で、SC－33より西へ3mの距離にあり、SR－319と重複する。平面形は東西5.66m、南北5.42mを測る隅丸方形をなし、面積は30.6m²である。壁の遺存状況は比較的良好で高さ44cmを測り、ゆるく傾斜して立ち上がる。床面は浅い凹レンズ状である。柱穴は4個あり、柱間は2.2mであるが西東の柱穴はやや西に寄る。なおSR－319は竪穴住居址埋没後の凹みを利用して構築されたものである。遺物は壺・甕・高坏等がある。

出土遺物（Fig.82・83）

壺形土器（367～369）367は口径20.3cm。口縁部は直口して立ち上がった後に、小さくラッパ状に開く。頸部に三角凸帯が1条巡る。胴部はやや肩のはった卵形をなす。368は球形の胴部に朝顔状の口縁部がつくものであろう。369はAI類の二重口縁壺。口径24.8cm、底径8.8cm、器高

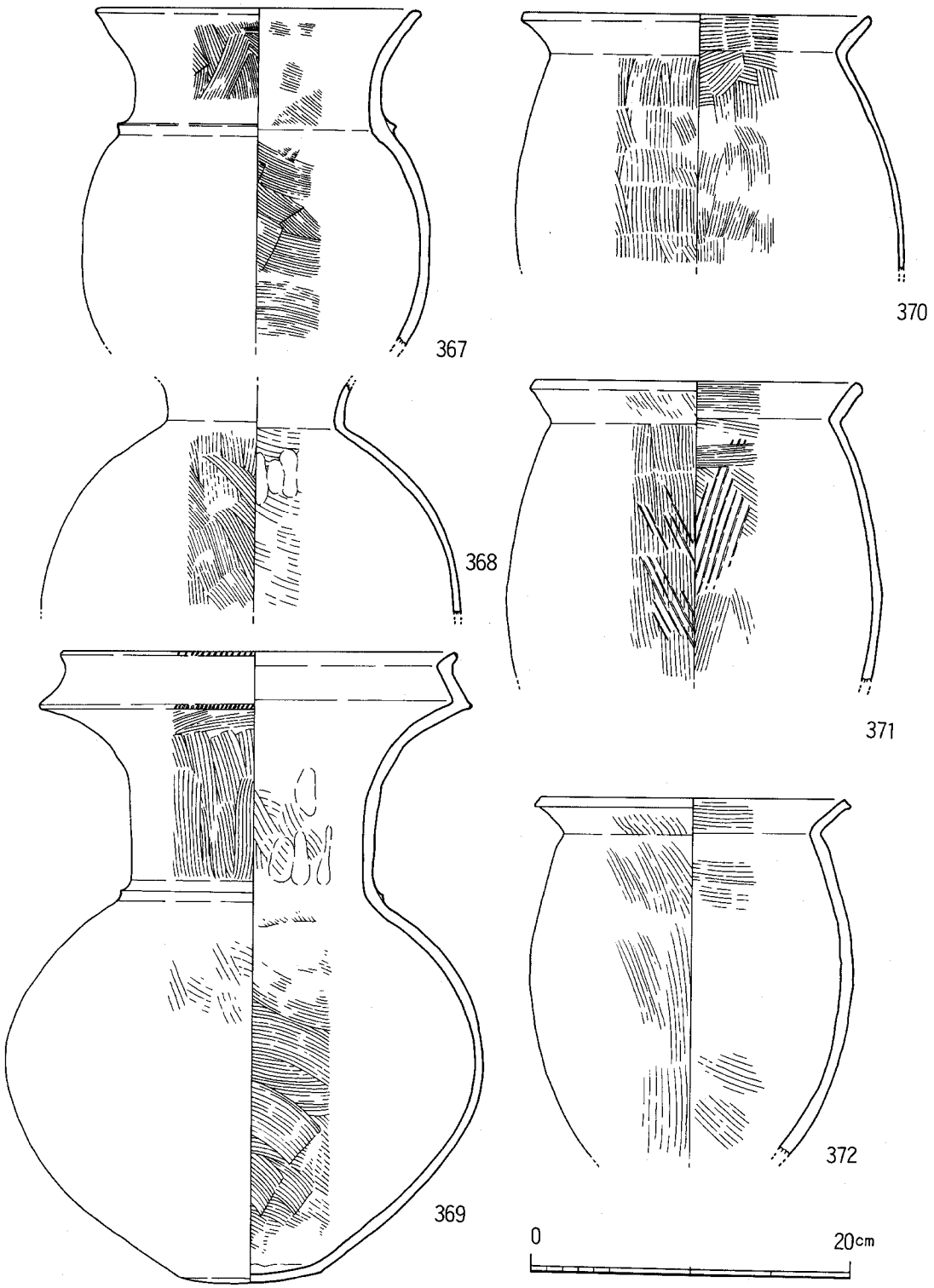


Fig. 82 SC－36出土土器実測図(1) (1/4)

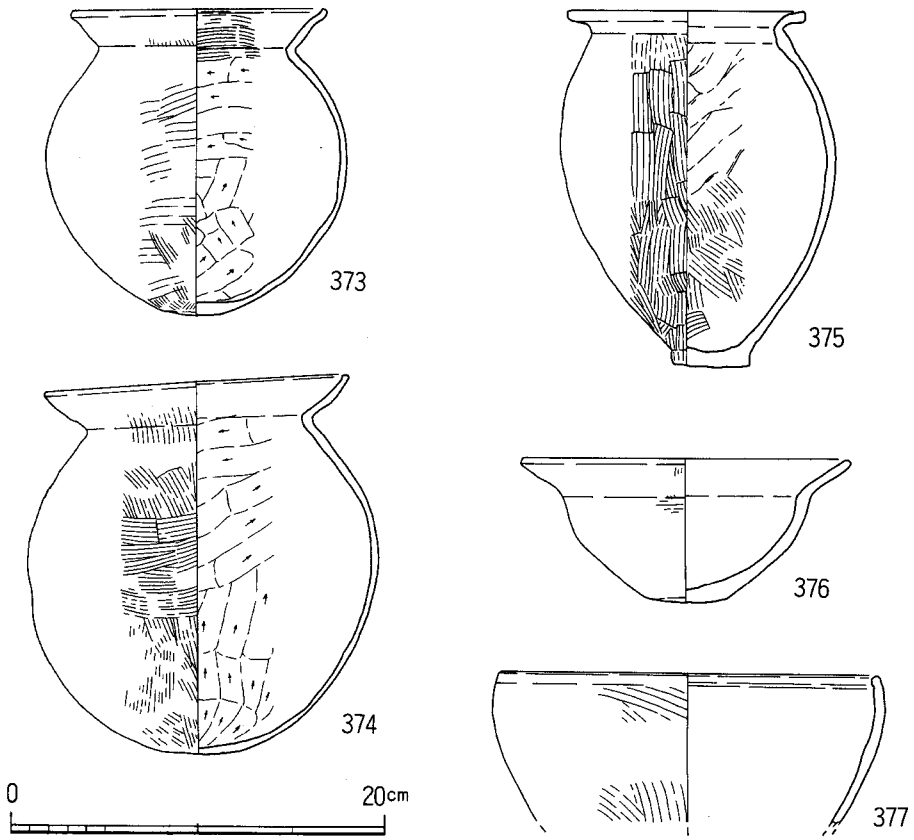


Fig. 83 SC－36出土土器実測図(2) (1/4)

39.4cmと大型の壺である。頸部は直口ぎみに立ち上がった後に、朝顔状に外反して擬口縁をつくり、外方に凸帯状の段をつくる。口縁部は直線的に短く内傾し、端部は外方に直口して大きくつまみ出す。口唇部と擬口縁部に刻み目を施し、頸部には三角凸帯が巡る。胴部は玉葱状をなす。

甕形土器(370～375)370～372・375はAI類の甕である。口縁部は「く」字状に短く外反し、長胴の胴部がつく。調整は内外面ともにハケ目。口径は370が20.1cm、371が21.0cm、372が19.8cm。375は口径12.4cm、底径4.0cm、器高14.0cmと小型で、「く」字状の口縁部は折り曲げたように水平に開き、端部を小さくつまみ上げる。373は口径13.3cm、器高16.4cm。「く」字状の口縁部は反りぎみに開き、端部を小さくつまみ上げる。胴部は短卵形。AII類。374は布留系のものでAIV類に属する。内弯ぎみに立ち上がる口縁部は、端部を小さくつまみ出す。胴部は球形を呈する。

鉢形土器 (376・377) 376は口径19.4cm、底径4.6cm、器高7.6cm。口縁部はゆるく屈曲して短

く直線的に開く。胴部は扁平な半球形で、凸レンズ状の平底がつく。B類に属する。377は口径20.0cm。胴部は内弯ぎみに立ち上がり、直口する口縁部は端部が小さく内傾する。F類に属する。

SC－37（Fig.84 PL.21）

C－Ⅻ区に検出した住居址で、SC－35より東へ7mの距離にある。SC－33と重複関係にあり新しい。平面形は東西3.92m、南北3.08mを測るやや小型の長方形をなし、面積は12.1m²である。壁高は29cmを測り、ゆるく傾斜して立ち上がる。床面は浅い凹レンズ状である。主柱穴は北隅を除く各隅にあり、本来は4本柱であったと考えられる。南隅寄りのところに炭を含む黒色砂層が70cmの範囲で拡がっており、炉址であろう。

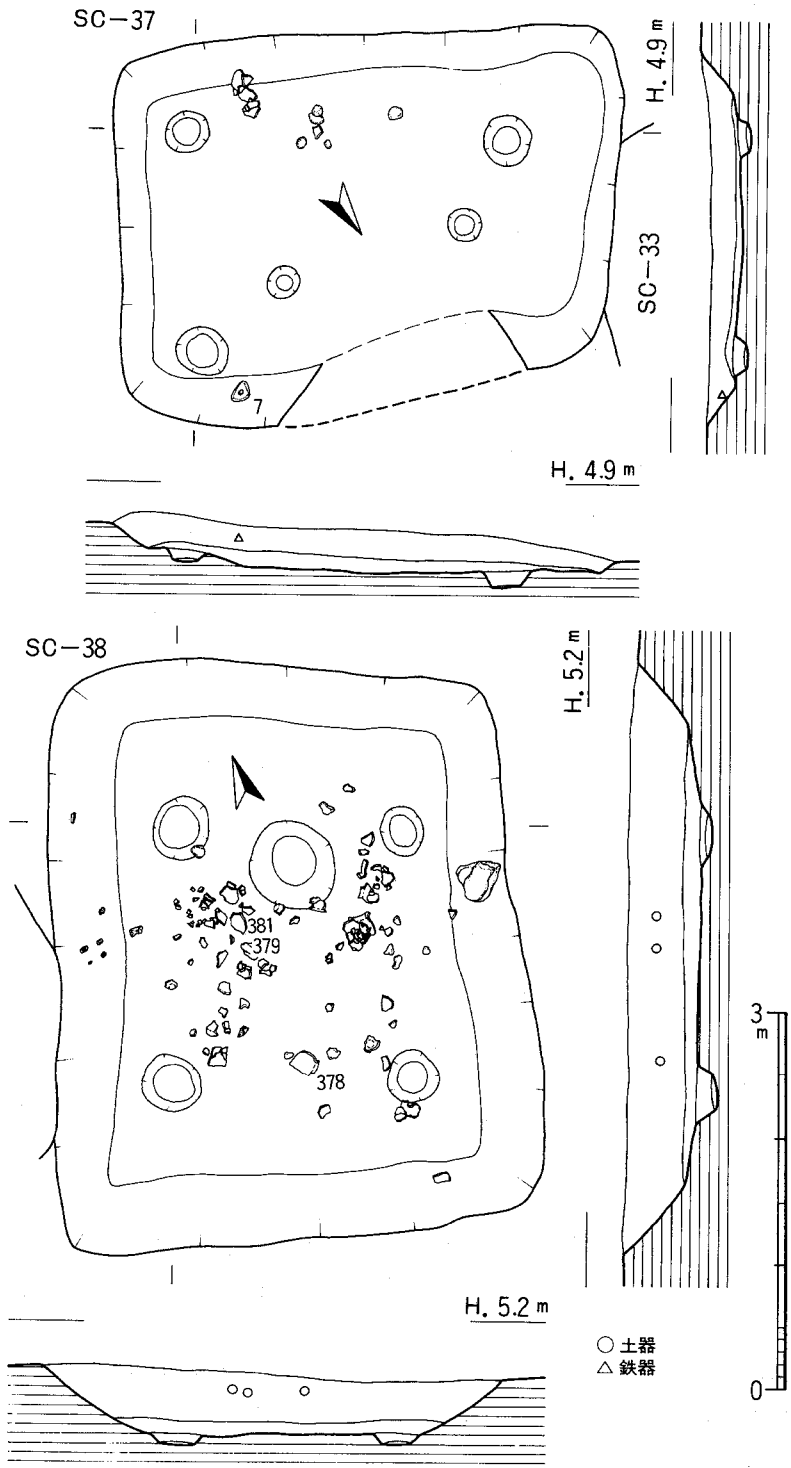


Fig. 84 SC－37・38実測図（1/60）

遺物は弥生時代後期の壺・甕・高坏等があるが量的には少ない。

出土遺物 (Fig.85)

石錘(7)滑石製の大型有孔石錘。形状は径19.9×17.0cmの卵形に近い楕円形で、中央部に内径2.6cmの円孔を穿つ。断面形は下半部を欠くが側縁中央を平坦に整え上下方向に削り出す扁平な八角形を呈するが、上下の平坦面は磨き出して丸みをおびる。重さは3.64kg。

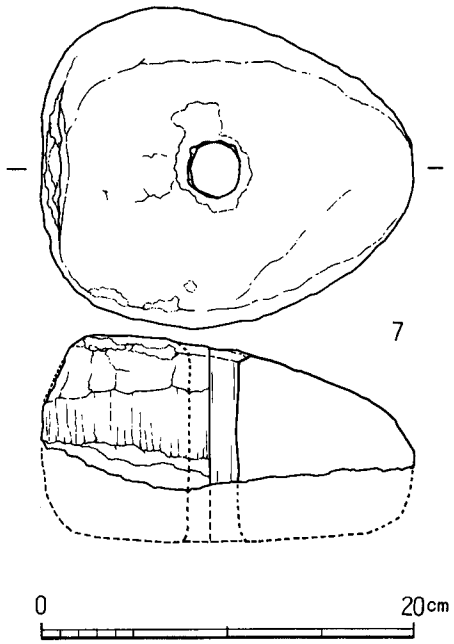


Fig. 85 SC−37出土石器実測図 (1/4)

SC−38 (Fig.84 PL.21)

D−XI区に検出した住居址で、SC−39より北東へ4mの距離にある。平面形は南北4.65m、東西3.86mを測る隅丸長方形をなし、面積は18.0m²である。壁の遺存状況は良好で高さは47cmを測り、ゆるく傾斜して立ち上がる。床面は平坦である。柱穴は南北柱間が2.00m、東西柱間が1.8mの4本柱で中央部北偏りに炉址をもつ。炉は径70cmの円形で、深さ15cmの浅い皿状に凹む。炉址内は炭片を含む黒色砂が堆積していた。

遺物は弥生時代後期の壺・甕・高坏等があるが量的に少なく、中央部に拡がる。

出土遺物 (Fig.87)

甕形土器 (378〜381)「く」字状の口縁部は短く外反し、端部は小さくつまみ出す。胴部はラグビーボール状の長胴形をなし、凸レンズ状の平底がつくもので、いずれもAI類に属する。調整は内外面ともにハケ目。378は口径19.3cm、器高25.7cmを測り、底径4.5cmの丸底ぎみの底部がつく。379は口径16.4cm、底径5.5cm、器高26.1cm。380は口径21.5cm、底径7.9cm、器高33.6cmを測る大型のものである。381は口径19.0cm、底径6.2cm、器高27.4cm。

SC−39 (Fig.86 PL.22)

D−XI区に検出した住居址で、SC−38より南西へ4mの距離にある。平面形は南北5.45m、東西4.43mを測る隅丸長方形をなし、面積は24.1m²である。壁の遺存状況は比較的良く、高さ45cmを測り急峻に立ち上がる。床面は平坦である。柱穴は北東隅が不明なものの、P.1〜P.3を主柱穴とする4本柱と考えられ、中央部には炭片を含む薄い炭層が拡がり炉であろう。

遺物は弥生時代後期の壺・甕・高坏等があるが量的には少ない。

出土遺物 (Fig.87)

鉢形土器 (382) 体部は薄く内弯ぎみに立ち上がり、口縁部は小さく直口する。調整は内外面

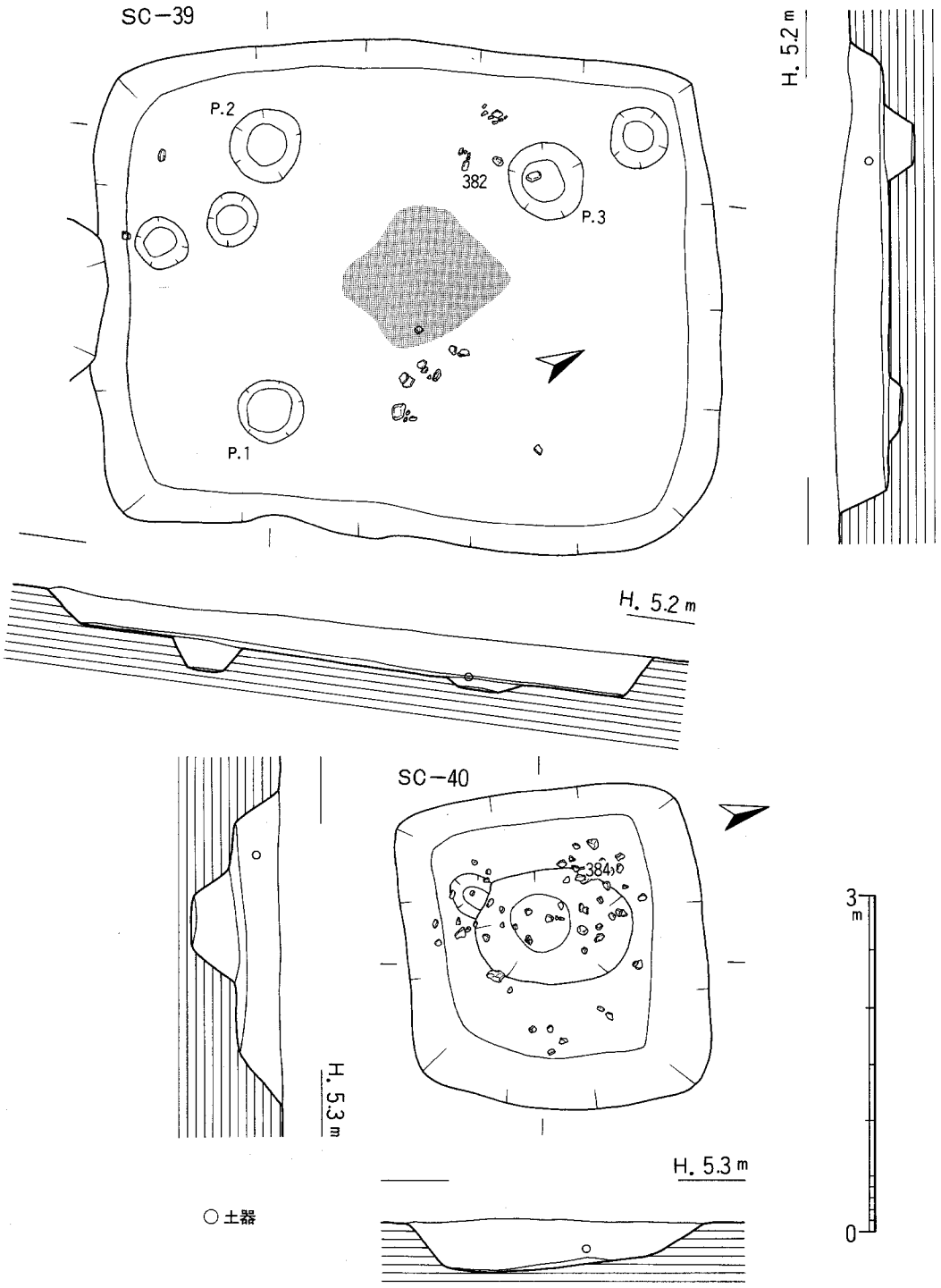


Fig. 86 SC－39・40実測図（1/60）

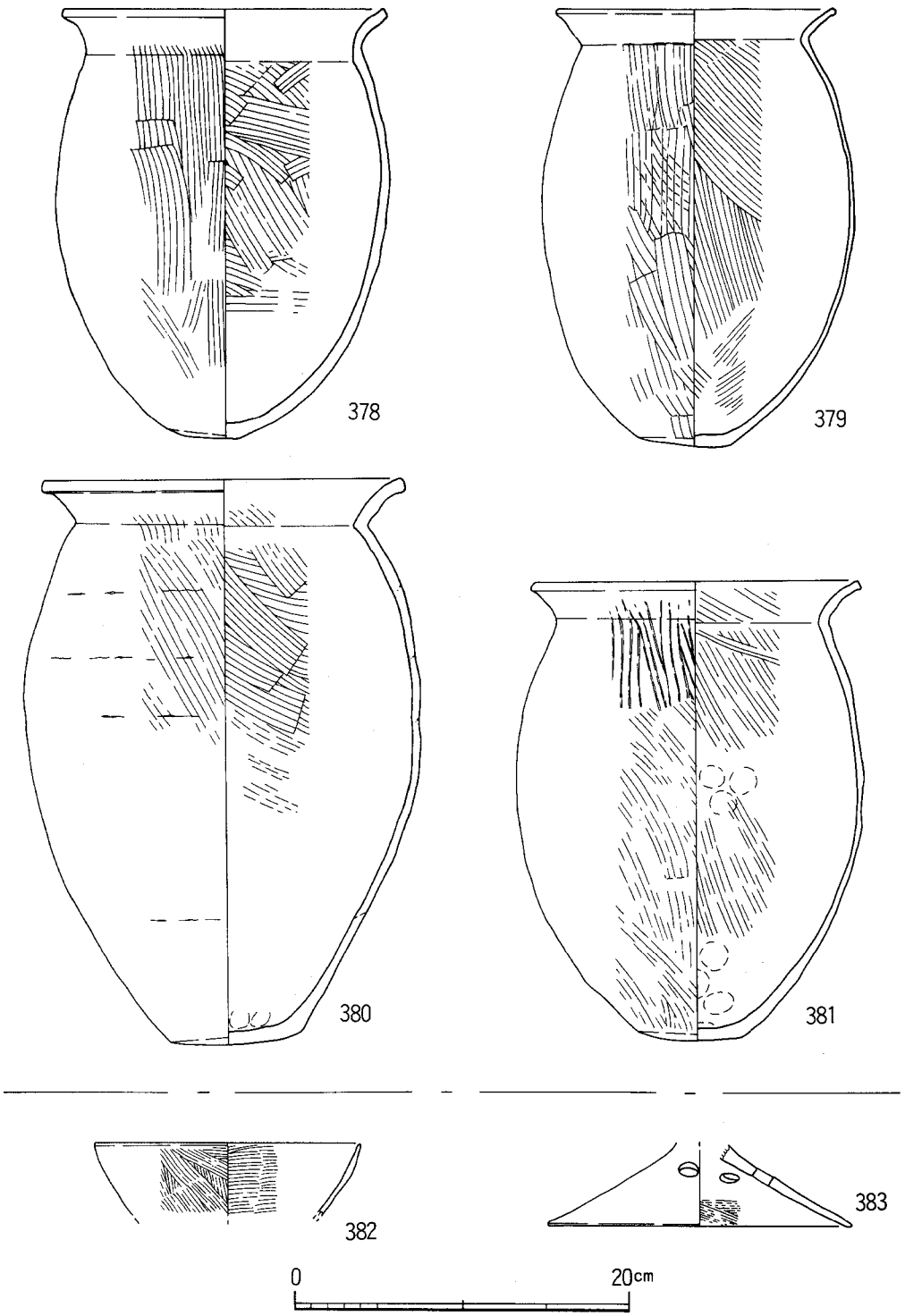


Fig. 87 SC－38・39出土土器実測図（1/4）

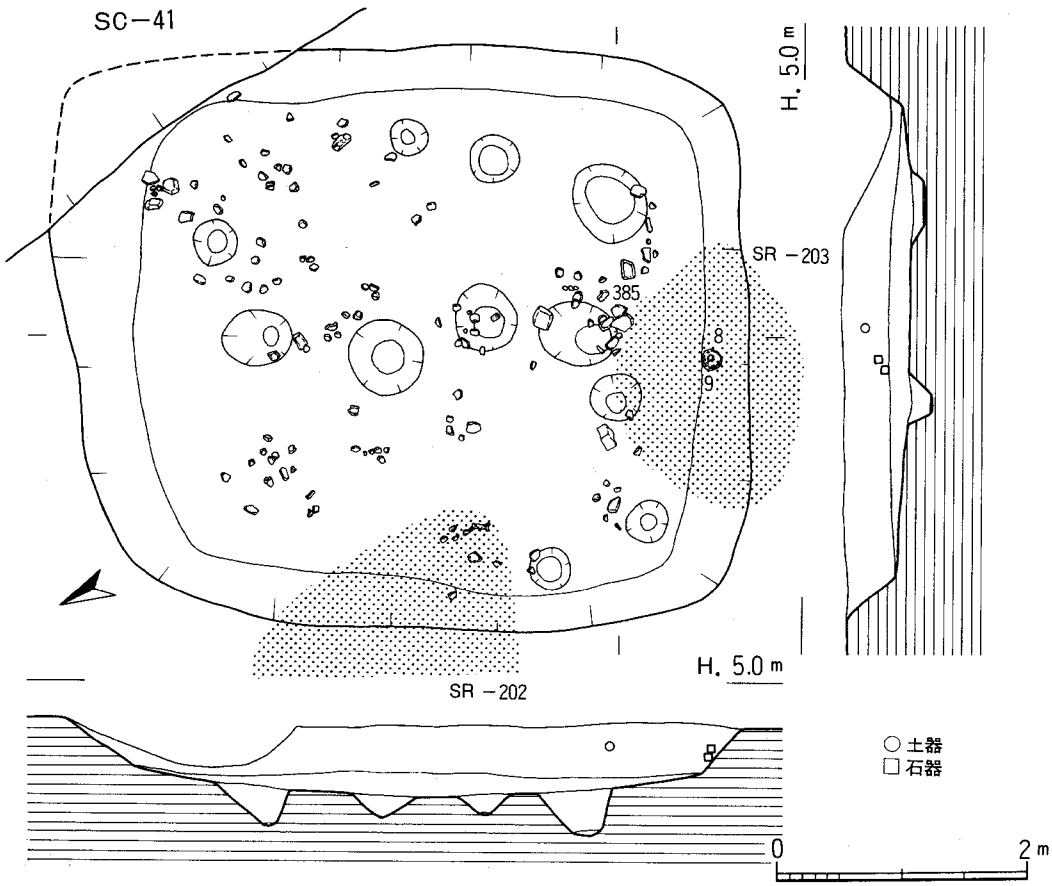


Fig. 88 SC－41実測図（1/60）

ともにハケ目。口径16.0cm。F類に属する。

高坏（383）底径18.1cmを測る薄手の脚部資料である。脚部は低く、ストレートに朝顔状に開く。脚部上位に円孔を穿つ。外面はナデ、内面はナデ・ハケ目調整を施す。

SC－40（Fig.86 PL.22）

D－Ⅺ区に検出した住居址で、SC－39より南へ5mの距離にある。平面形は東西2.84m、南北2.67mを測る小型方形をなし、面積は7.58m²である。壁高は44cmを測り、ゆるく傾斜して立ち上がる。床面は浅い凹レンズ状である。柱穴は精査したが南壁側で1個検出したのみである。中央部に140×102cmの楕円形土壙がある。断面形は舟底状で深さは40cm。

遺物はほとんどなく、弥生時代後期の甕・鉢片を出土した。

出土遺物（Fig.90）

鉢形土器（384）口径16.6cm。薄手の体部は内弯ぎみに立ち上がり、口縁部は小さく直口す

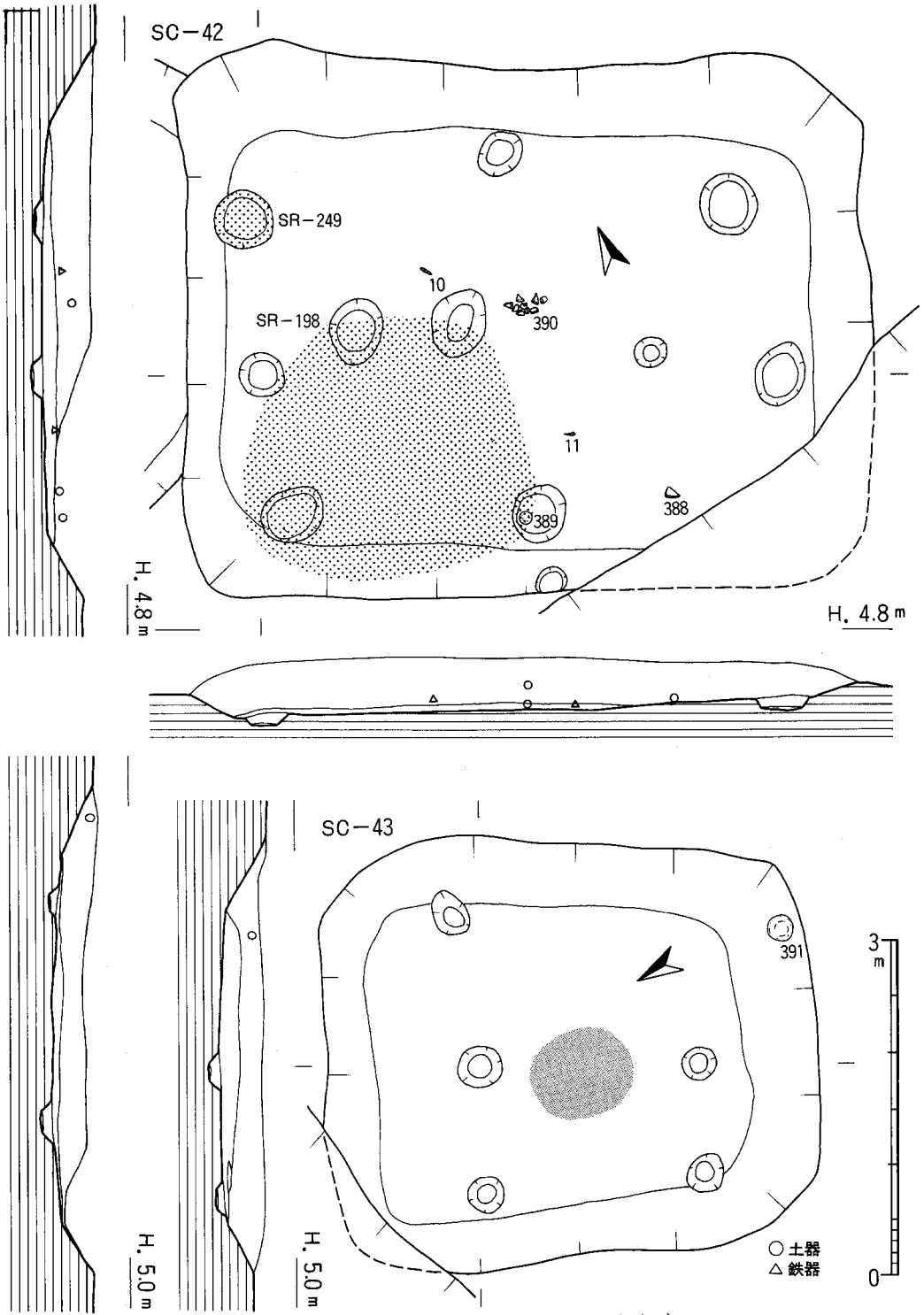


Fig. 89 SC－42・43実測図 (1/60)

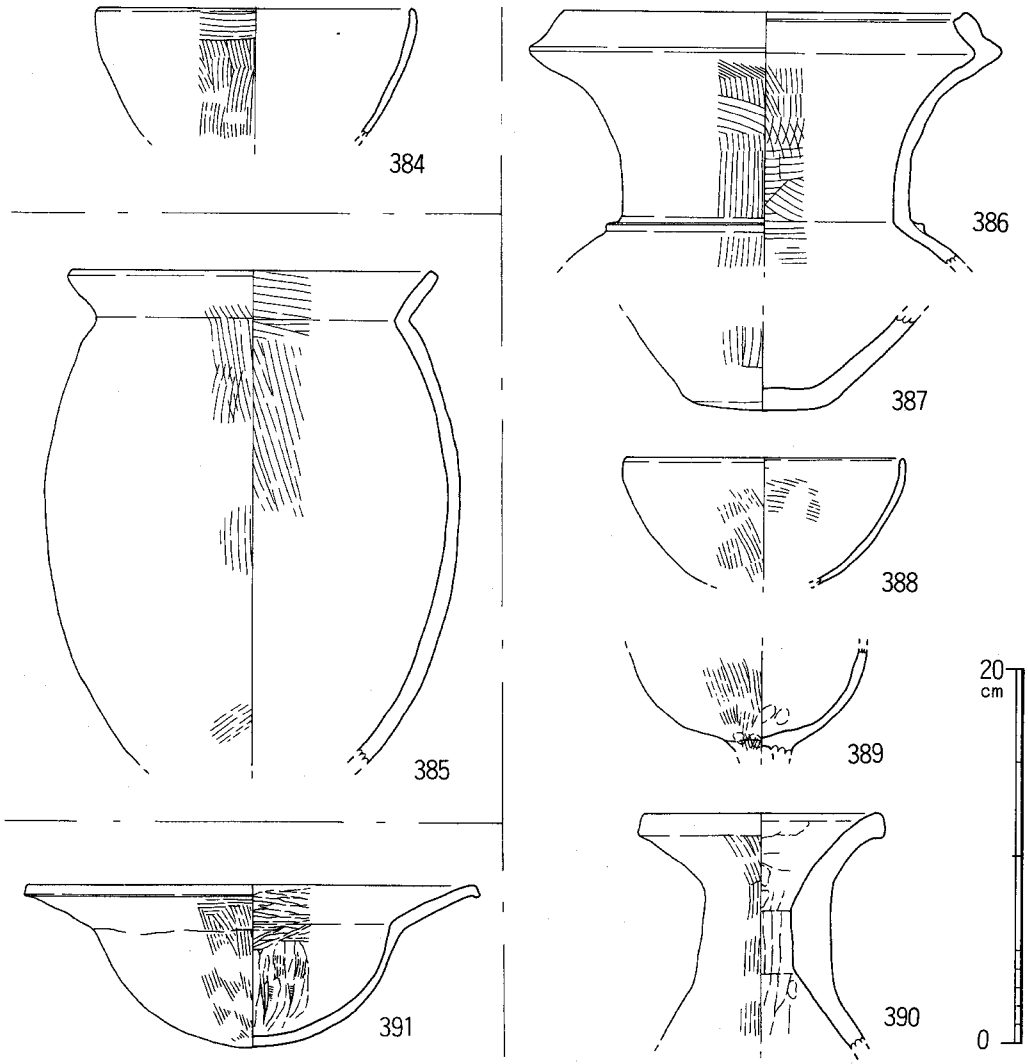


Fig. 90 SC－40・41・42・43出土土器実測図（1/4）

る。調整は外面がハケ目、内面はナデて仕上げている。胎土には細砂粒・雲母粒を含み、焼成は良好で色調は赤褐色。F類に属する。

SC－41 (Fig.88 PL.23)

D－IX区に検出した住居址で、SC－42より北東へ3mの距離にある。SR－202・203と重複関係にあり、最も古い。平面形は南北5.40m、東西4.55mを測る隅丸長方形をなし、面積は24.6m²である。壁高は38cmを測り、ゆるく傾斜して立ち上がる。床面は浅い凹レンズ状である。柱穴は11個あるが、南北軸中央に並ぶ4個の外側2個を主柱穴とする2本柱であろう。

遺物は量的には少ないが、南壁際から2個の石錘が重なった状態で出土した。

出土遺物（Fig.90・91）

甕形土器（385）「く」字状の口縁部は短く直線的に開き、端部は平坦に整えている。胴部はラグビーボール状の長胴形をなす。調整は内外面ともに粗いハケ目を施す。口径は19.8cm。AⅠ類に属する。

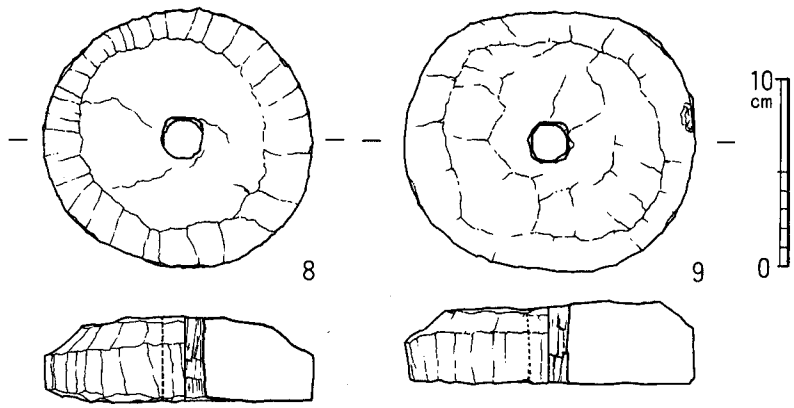


Fig. 91 SC－41出土石器実測図（1/4）

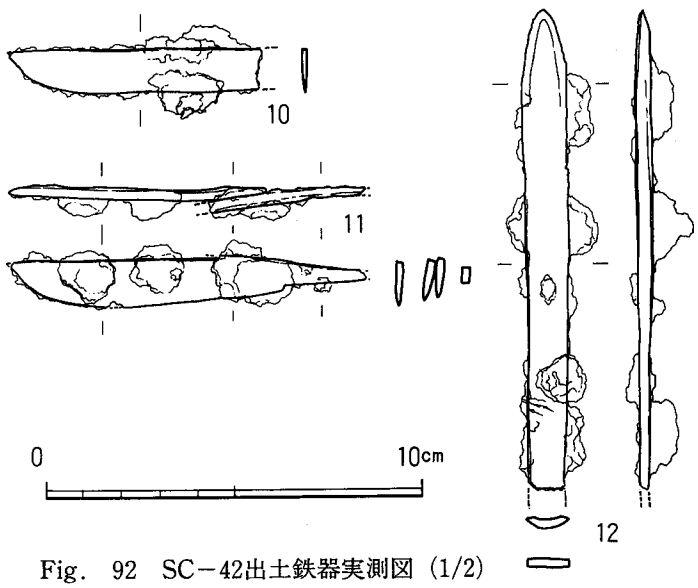


Fig. 92 SC－42出土鉄器実測図（1/2）

石錘（8・9）いずれも滑石製の大型有孔石錘で壁際より8を上にして重なって出土したもので対として使用されたものであろう。形状は円形で中央に内径約2cmの円孔を穿つ。断面形は側縁が平坦で、上面にむかって斜めに削り出す扁平な台形である。円孔内には縦方向の、側縁部には連続した横方向のノミ状工具痕が残る。8は径14.3cm×13.6cm、厚4.5cm、重さ1.36kg。9は径15.5cm×13.8cm、厚3.8cm～4.4cm、重さ1.46kg。

SC－42（Fig.89 PL.25）

D－IX区に検出した住居址で、SC－41より南西へ3mの距離にあり、SR－198・249と重複関係にある。平面形は東西6.10m、南北4.75mを測る隅丸長方形をなし、面積は29.0m²である。壁高は45cmを測り、ゆるく傾斜して立ち上がる。床面は浅い凹レンズ状である。柱穴は11個ある。南東壁が削平されているが、北南壁際に2.2mの間隔で3個の柱穴が並びこの対する6本が主柱穴と考えられる。

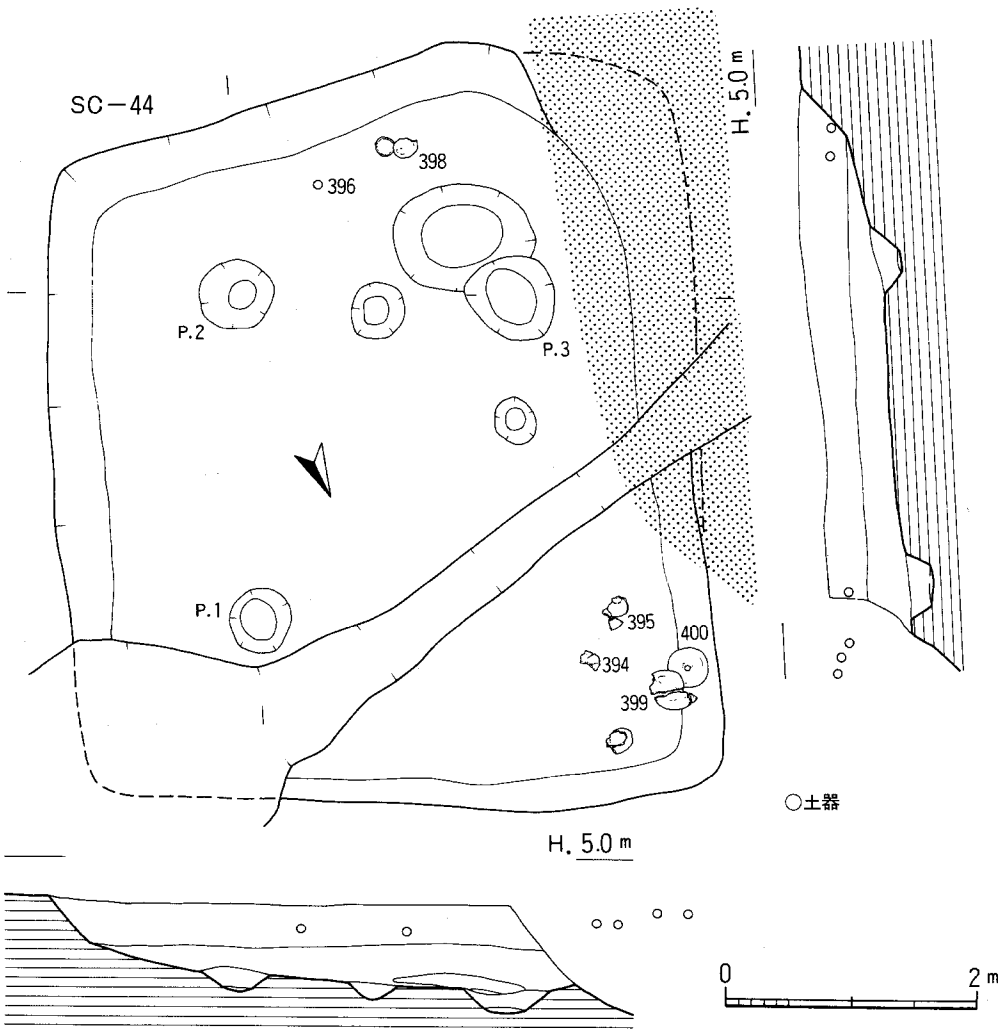


Fig. 93 SC－44実測図 (1/60)

遺物は弥生時代後期の壺・甕等が南西偏りに拡がって出土したが量的に少ない。

出土遺物 (Fig.90・92)

壺形土器 (386) 口径21.5cmの二重口縁壺でＡＩ類に属する。口縁部は一旦大きく朝顔状に開き、短く内傾する。端部は平坦に整える。頸部には三角凸帯が１条巡り、肩のはった卵形の胴部がつくものであろう。調整は内外面ともにハケ目。

甕形土器 (387) 底径7.0cmを測る凸レンズ状の平底で、ラグビーボール状の胴部がつくものであろう。

鉢形土器 (388) 口径14.8cm。薄手の体部は半球形をなし、口縁部はつまみ出すように小さく

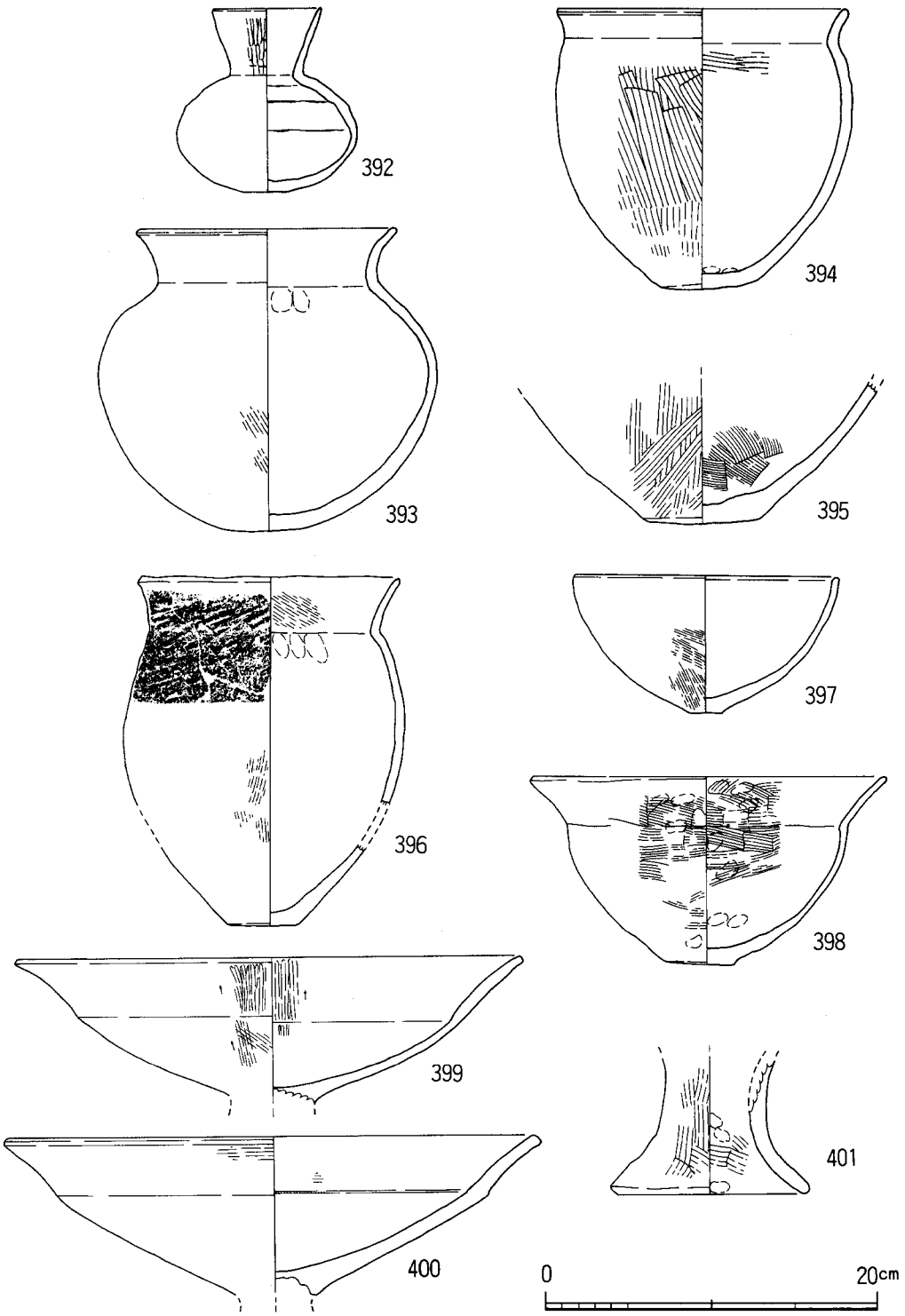


Fig. 94 SC－44出土土器実測図（1/4）

直口する。調整は内外面ともに細かいハケ目を施す。F類に属する。

高坏（389）坏部下半資料である。坏部は内弯ぎみに立ち上がり、短い「く」字状の口縁部がつくものであろう。脚部は棒状の細長いものである。

器台（390）口径12.5cm。受け部と脚部がラッパ状に開く筒状のもので、A類に属するものである。全体に厚手で、受け部端部は平坦に整える。調整は外面がハケ目、内面はナデて仕上げている。

刀子（10・11）10は身部資料で、長さ6.8cm、身幅1.2cm。11は身部と関から茎部の２本の資料が癒着したものである。

鉇（12）長さ12.8cm、身幅1.2cmを測る。V字形の刃部は端部が両方とも水平に研がれている。

SC－43（Fig.89　PL.25）

D－X区に検出した住居址で、SC－44の南東１ｍの距離に接してある。平面形は南北4.38ｍ、東西3.95ｍを測る隅丸方形をなし、面積は17.3m²である。壁高は27cmを測り、ゆるく傾斜して立ち上がる。床面は浅い凹レンズ状である。柱穴は５個あり、主柱穴は長軸中央の２本と考えられる。中央に炉址をもつ。径70cmの範囲に炭を含む炭層が拡がり、浅いレンズ状にくぼむ。

遺物は弥生時代後期の甕・高坏等が出土したが量的には少ない。

出土遺物（Fig.90）

鉢形土器（391）口径23.8cm、器高8.6cm。口縁部はゆるく屈曲して鍔状に長く外反し、端部は小さくつまみ出す。胴部は半球形をなす。調整は外面がハケ目、内面はハケ目の後に粗い研磨を加えている。C類に属する。

SC－44（Fig.93　PL.24）

D－X区に検出した住居址で、SC－45より東西へ１ｍの距離にある。北壁と北東隅は埋設管等による攪乱を受けている。平面形は南北6.15ｍ、東西4.60ｍを測る長方形でやや台形ぎみ。面積は28.3m²である。壁高は39cmを測り、ゆるく傾斜して立ち上がる。床面は浅い凹レンズ状である。柱穴は５個ある。主柱穴は北西隅が消失しているもののP.1～P.3を含む４本柱と考えられる。

遺物は弥生時代後期の高坏・甕が完形に近い状態で北壁側でまとまって出土したが、量的には少ない。

出土遺物（Fig.94）

壺形土器（392）口径6.5cm、底径1.2cm、器高11.0cmの長頸壺でＢＩ類に属する。口縁部はストレートに開くが、長頸壺としては頸部は短めである。胴部は扁球形で、上げ底ぎみの小さな底部がつく。調整は外面が研磨、内面はナデて仕上げている。

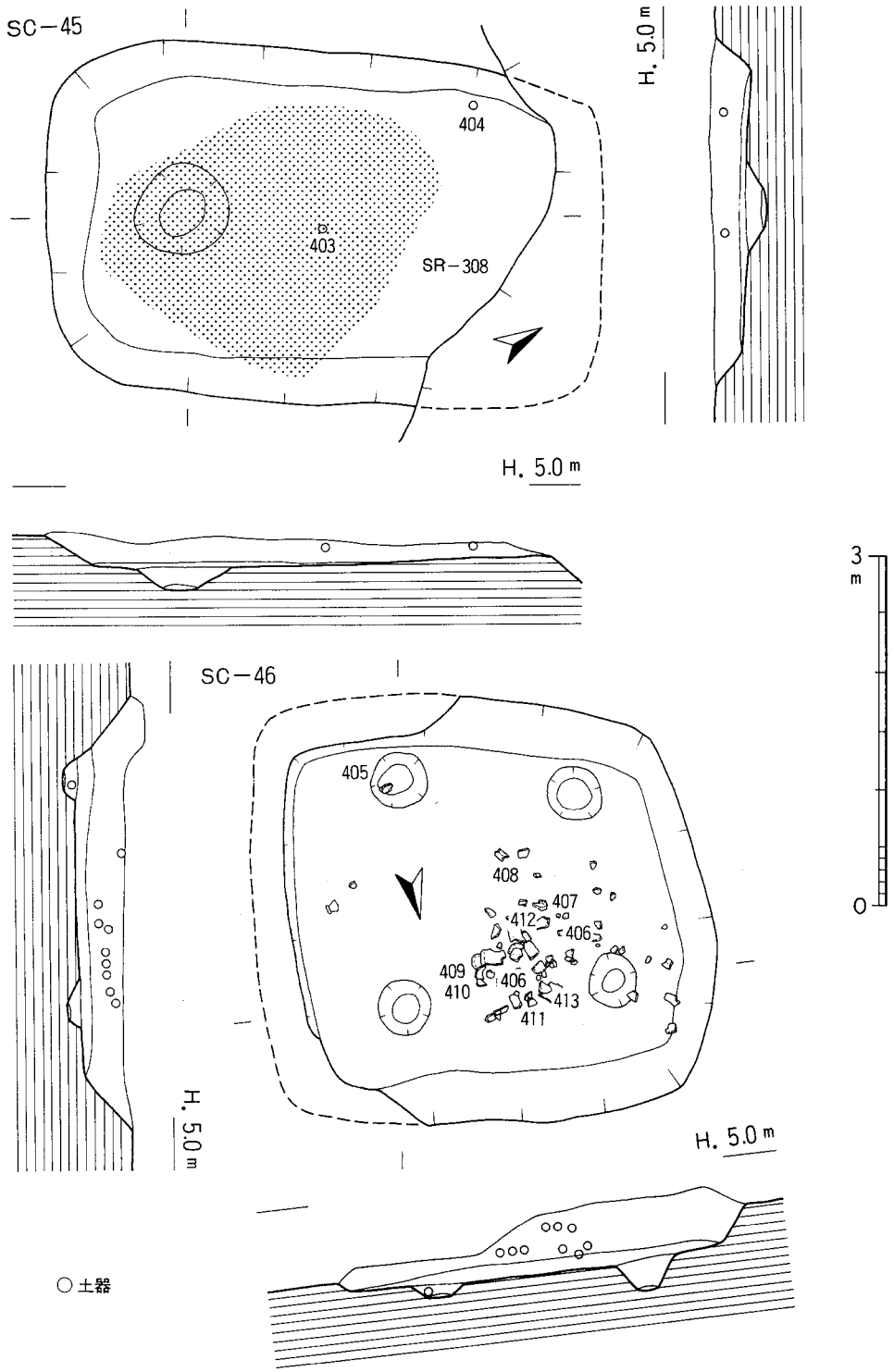


Fig. 95 SC－45・46実測図（1/60）

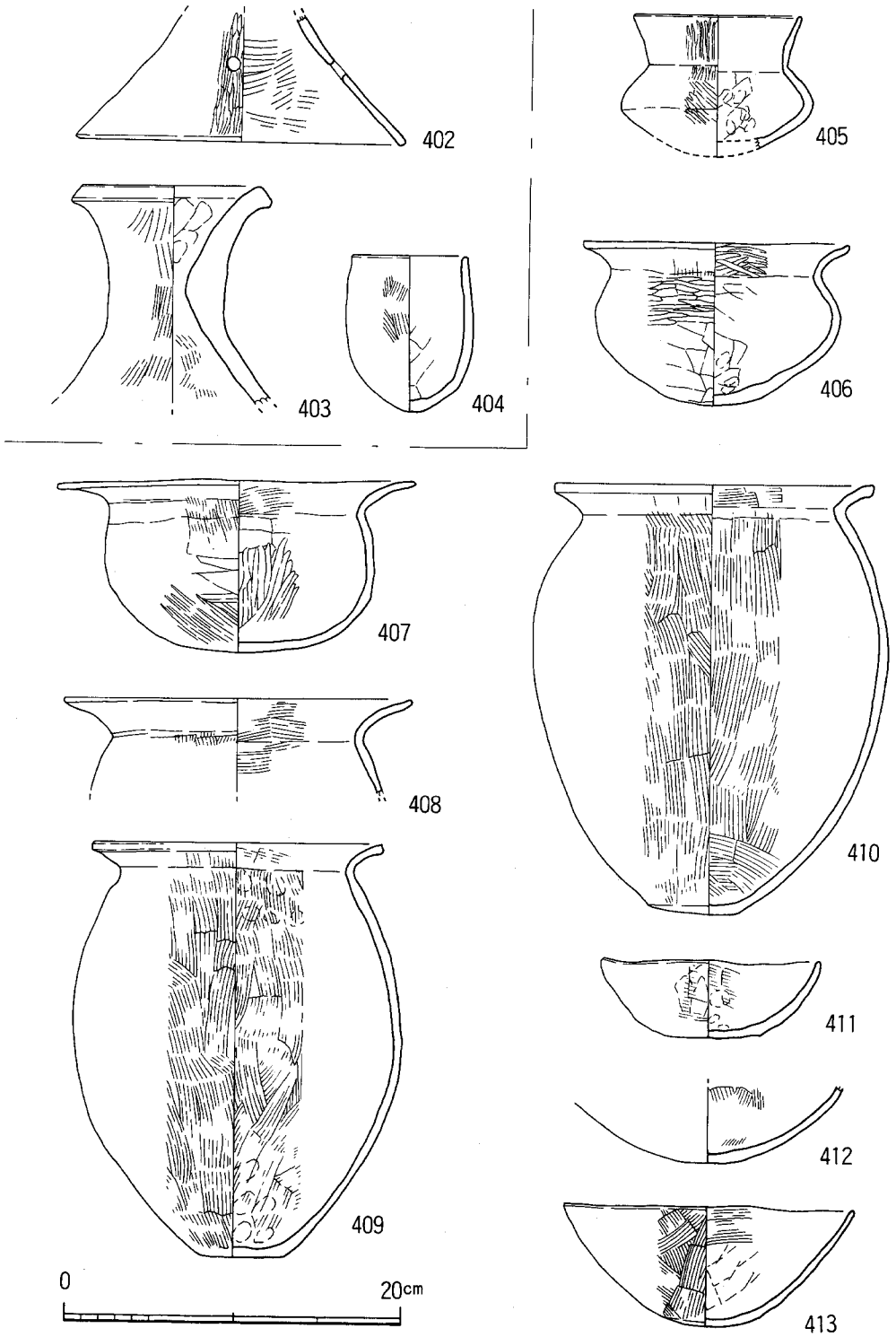


Fig. 96 SC－45・46出土土器実測図 (1/4)

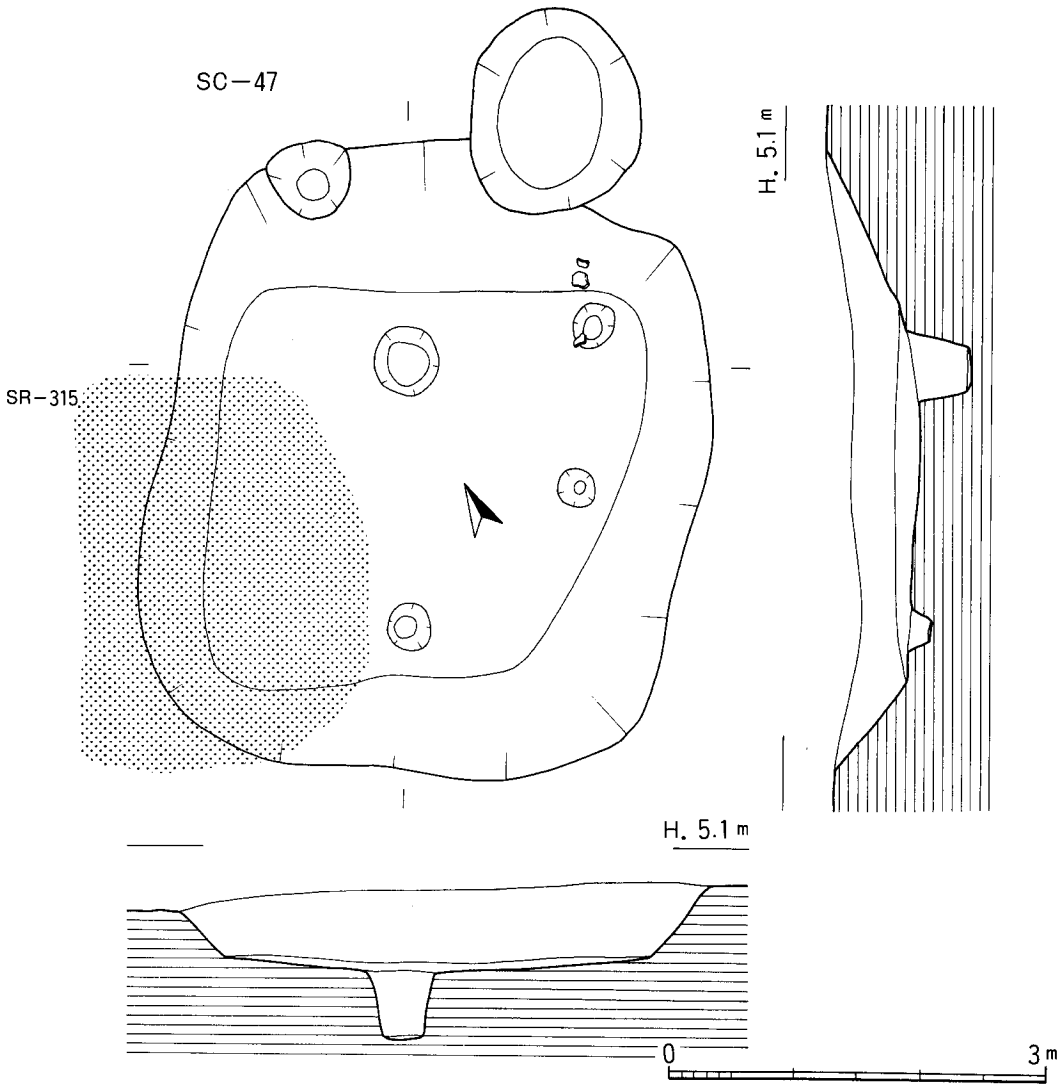


Fig. 97 SC－47実測図（1/60）

甕形土器（395・396）395は底径7.0cm。卵形の胴部に凸レンズ状の底部がつくものである。調整は内外面ともにハケ目。396は口径15.8cm、底径4.3cm、器高20.9cm。「く」字状の口縁部は短く外反するものでAVI類に属する。胴部は卵形で、平底の底部がつく。調整は外面がハケ目、内面はヘラケズリ。

鉢形土器（393・394・397・398）393は口径15.7cm、器高18.1cm。小さく外反する口縁部に肩のはる球形の胴部をもつもので、D類に含まれるが甕とも類する。394は口径17.5cm、底径6.0cm、器高16.8cm。口縁部が短く「く」字状に外反する深手のものでA類に属する。胴部は短卵

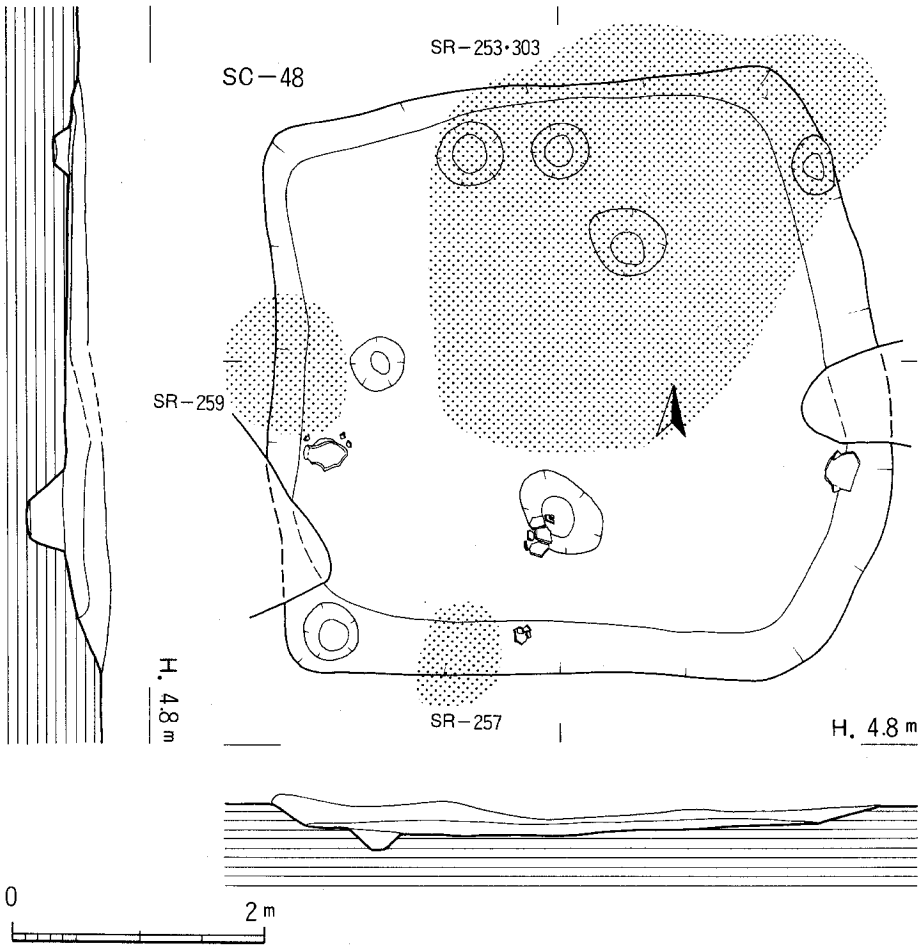


Fig. 98 SC－48実測図（1/60）

形で、平底の底部がつく。397は口径17.5cm、器高8.2cm。素口縁のやゝ深手の鉢でF類に属する。体部は半球形で口縁部は直口ぎみに立ち上がる。底部は小さな平底。398は口径21.1cm、器高11.3cm。口縁部が鍔状に長くのびるもので、B類に属する。胴部は扁平な半球形で底部は平底。調整は内外面ともにハケ目・ナデ。

高杯（399・400）大型の高杯でA類に属する。体部は浅く内弯ぎみに立ち上がり、口縁部は弱く屈曲して反りぎみに外方に開く。399は口径が30.5cmを測り、調整は内外面ともに研磨で仕上げている。400は口径32.2cm。調整は内外面ともにハケ目後に丁寧なナデ仕上げを施している。

器台（401）筒状をなすA類のもので、裾部は短くラッパ状に開く。調整は内外面ともに粗いハケ目。底径11.3cm。

SC－45（Fig.95 PL.27）

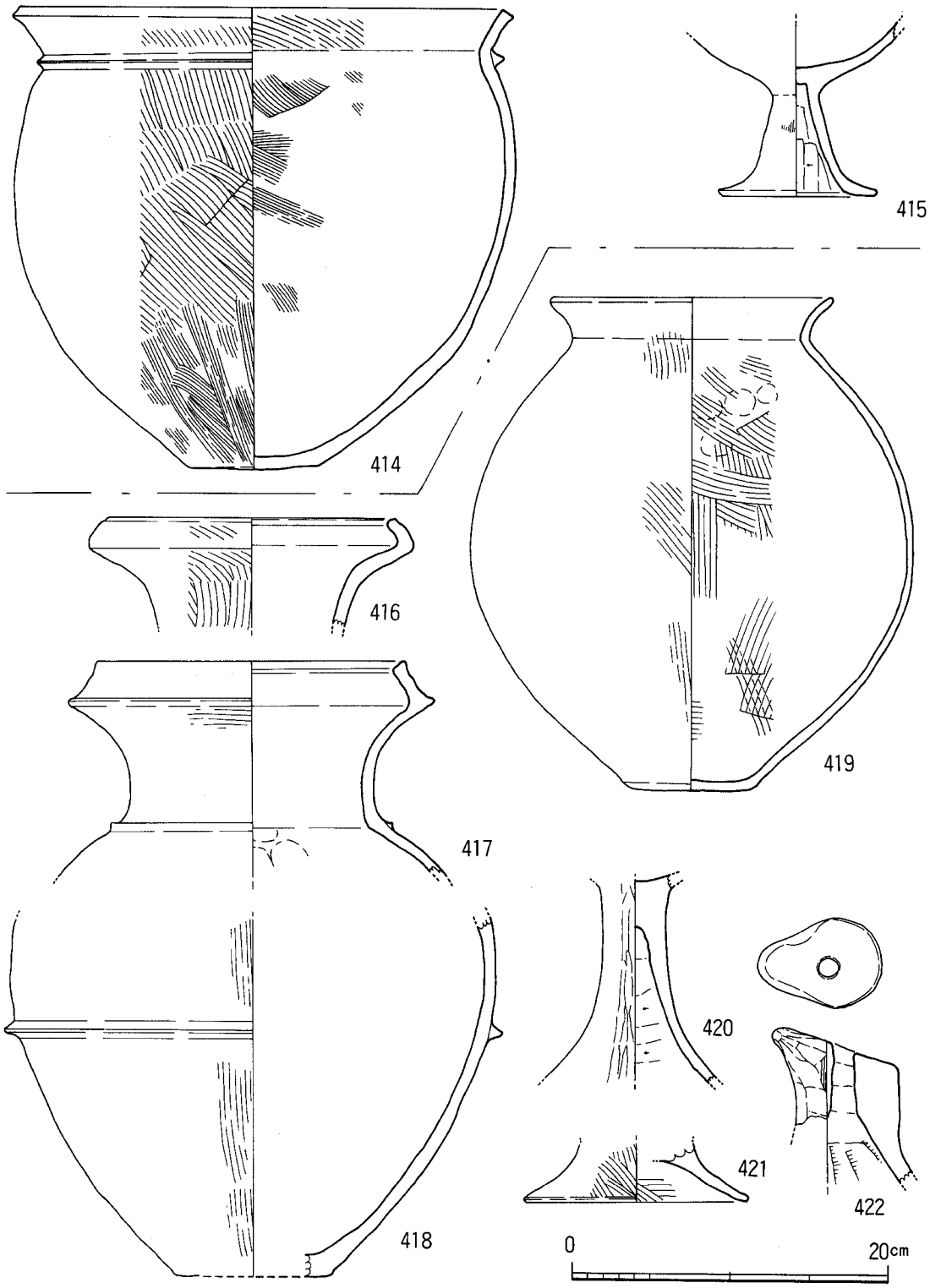


Fig. 99 SC－47・48出土土器実測図（1/4）

D－X区に検出した住居址で、SC－44より北東へ1mの距離にあり、北壁は攪乱により消失している。SR－308と重複関係にあり、古い。平面形は東西で3.0m、南北で約5.0mと推測される長方形をなすと思われる。壁高は33cmを測り、ゆるく傾斜して立ち上がる。床面は平坦である。柱穴は南壁側に1個あり消失しているものの、長軸に2本の主柱穴をもつものと考えられる。住居址は埋没した後中央の浅い凹みに拳大の小礫を敷きつめ炉址として使用している。小礫の表面は赤変し、礫石の隙間には炭片が混入している。中央ほど石には赤変が著しい。

遺物は弥生時代後期の壺・甕・高坏等を出土するが、量的には少ない。

出土遺物（Fig.96）

鉢形土器（404）体部は小さく膨らんだ後に直口して立ち上がり、口縁部は小さくつまみ出す。調整は外面がハケ目後にナデ、内面はナデ・ヘラケズリ。口径6.5cm、底径9.3cm。全体として蛸壺によく似ており、E類に属する。

高坏（402）底径19.0cm。脚部は薄く朝顔状に大きく開くもので、A類に属する。調整は外面が研磨、内面はハケ目で仕上げ、中位に円孔を穿つ。

器台（403）口径10.2cm。受け部と裾部がラッパ状に開く筒形のものでA類に属する。内外面ともにハケ目調整。

SC－46（Fig.95　PL.26）

D－XI区に検出した住居址で、SC－51より東へ2mの距離にある。平面形は東西3.90m、南北3.67mを測る隅丸方形をなし、面積は14.3m²である。壁高は46cmを測り傾斜して立ち上がる。床面は浅い凹レンズ状である。柱穴は各コーナー部に4個ある4本柱で、柱間は1.7mと2.0mを測り、やや菱形に近い。中央のやや南西偏りに炉をもち、100×75cmの楕円形の範囲に炭片、灰が薄く堆積していた。

遺物は炉の北側にまとまってあり、完形の壺・甕・ミニチュア土器が出土したが、量的に少ない。

出土遺物（Fig.96）

壺形土器（405）口径4.7cmの小型壺である。「く」字状のやゝ長めで、反りぎみに開く。胴部は玉葱状の扁球形をなし、BI類に属する。調整は外面が研磨、内面はナデ・ヘラケズリ。

甕形土器（408～410・412）「く」字状に短く外反する口縁部に長胴の胴部がつくものでAI類に属する。調整は内外面ともに粗いハケ目。408は口径20.2cm。409は口径17.0cm、器高24.5cmで底径5.0cmの平底の底部がつく。410は口径18.7cm。器高25.6cmで底径5.1cmの平底がつき、口縁端部は平坦に整えて小さくつまみ上げている。

鉢形土器（406・407・411・413）406は口径15.7cm、器高9.7cm。「く」字状の口縁部は短く外反し、胴部は扁球形をなす。調整は内外面とも上半が研磨で下半がヘラケズリ。D類。407は口径11.1cm。器高10.2cm。「く」字状の口縁部は鍔状に長くのびるものでB類に属する。胴部は下脹れぎみの半球形。411・413は素口縁の浅手のものでG類に属する。411は口径12.7cm。胴部は

扁平な半球形で、口縁部は短く直口する。413は口径17.0cm。体部は丸底の底部から内弯ぎみに大きく外方に開く。

SC－47 (Fig.97　PL.27)

C－XI区に検出した住居址で、SC－39より南西へ4mの距離にあり、SR－315と重複する。平面形は南北5.08m、東西4.1mを測る隅丸長方形をなし、面積は21.8m²である。壁の遺存状況は良好で高さは49cmを測り、ゆるく傾斜して立ち上がる。床面は浅い凹レンズ状である。柱穴は4個あるが、主柱穴は中央長軸上の2本である。住居址埋没後は、南西隅に拳大の小礫を敷きつめて石敷炉を築いている。

出土遺物 (Fig.99)

鉢形土器 (414) 口径30.2cm、底径8.0cm、器高28.9cmを測る大型の鉢でA類。「く」字状の口縁部は短く外反し、端部は平坦に整える。短卵形の胴部に平底の底部がつき、頸部に三角凸帯が1条巡る。調整は内外面ともに粗いハケ目。

高坏 (415) 坏部上半を欠く資料である。坏部は内弯ぎみに立ち上がる。脚部は直線的に開き、裾部は屈曲して短く水平に開く。底径10.0cm。

SC－48 (Fig.98)

C－X区に検出した住居址で、SC－45より北西へ3mの距離にあり、SR－253・257と重複する。平面形は東西4.75m、南北4.65mを測る方形をなし、東壁がやゝ張り出す。面積は22.1m²である。壁高は22cmを測り、ゆるく傾斜して立ち上がる。床面は浅い凹レンズ状である。柱穴は6個あるが、主柱穴は中央南北軸の2本と考えられる。北半部上面には焼けた小礫とともに灰が散在しており、石敷炉が構築されていたものであろう。

遺物は少なく、弥生時代後期の壺・甕・高坏等が出土している。

出土遺物 (Fig.99)

壺形土器 (416～419) 416～418は長頸の二重口縁をもつ壺でＡＩ類に属する。416は口径18.0cm。朝顔状に開いた口縁部は袋状に小さく内傾する。調整は外面がハケ目、内面はナデて仕上げている。417は口径19.2cm。朝顔状に外反した擬口縁は凸帯状の段をつくり、口縁部は短く直線的に内傾する。平坦に整えた端部は内傾し、外方に小さくつまみ出す。頸部には三角凸帯が1条巡り、胴部は卵形となるものであろう。418は同タイプの胴部下半資料で三角凸帯が1条巡る。419は口径18.0cm、底径8.6cm、器高31.0cmの大型壺でＥＩ類に属する。口縁部は短く「く」字状に外反する。胴部は卵形で平底の底部がつく。調整は内外面ともにハケ目・ナデを施す。

高杯 (420・421) 420は大型高杯の脚部資料でA類に属する。脚部は細長くラッパ状に開く。調整は外面が研磨、内面はヘラケズリ。

支脚 (422) 内傾する受け部の上端が嘴状に尖る沓形の支脚で、中央に円孔を穿つ。脚部はラッパ状に開く。

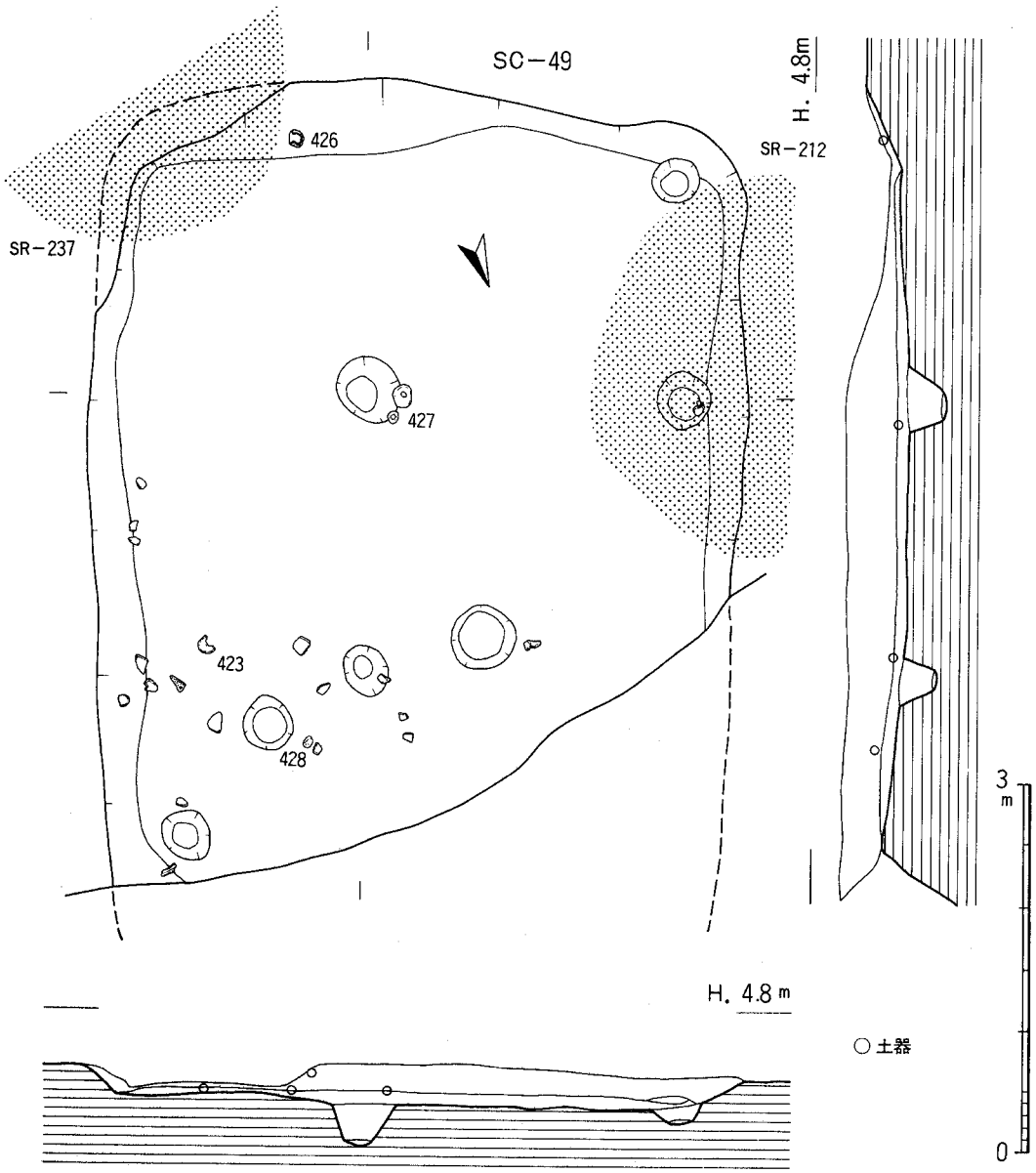


Fig. 100　SC−49実測図（1/60）

SC−49（Fig.100　PL.27）

C−X区に検出した住居址で、SC−63より北へ3mの距離にあり、SR−212・237と重複する。北壁側は攪乱による削平を受けている。平面形は南北が6.50m以上、東西5.3mの大型隅丸長方形をなすと推定される。壁高は42cmを測り、ゆるく傾斜して立ち上がる。床面は浅い凹レンズ状である。柱穴は7個あるが、柱穴としてはまとまりをなさない。

遺物は弥生時代後期の壺・鉢・高坏等が、北東隅にまとまって出土したが量的には少ない。

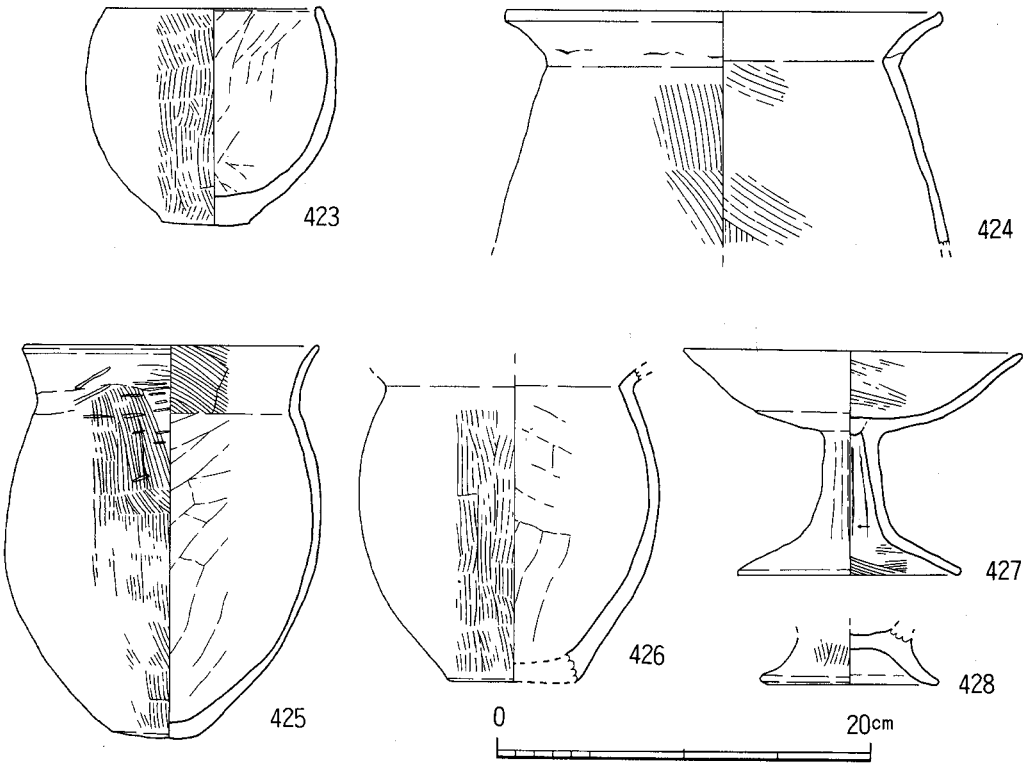


Fig. 101　SC－49出土土器実測図（1/4）

出土遺物（Fig.101）

甕形土器（424～426）424は口径23.4cm。「く」字状の口縁部は短く外反し、胴部は砲弾状の長胴形になるものであろう。調整は内外面ともに粗いハケ目。ＡＩ類。425は口径15.2cm、底径4.6cm、器高21.0cm。口縁部はやゝ長めで反りぎみに上方にのびるものでAIII類に属する。胴部は卵形で凸レンズ状の底部がつく。調整は口縁部内外と外面がハケ目、内面はナデて仕上げている。426は口縁部が短く「く」字状に外反し、短胴の胴部がつくものでAII類に属する。底部は大きめの平底で底径6.4cm。外面がハケ目、内面はナデ調整。

鉢形土器（423）口径11.3cm、底径4.6cm、器高11.6cm。素口縁の鉢でE類に属する。胴部は内弯して立ち上がった後に直口し、口縁部は小さく内傾する。底部は厚く。凸レンズ状の平底。

高坏（427～428）427は口径18.0cm、底径11.7cm、器高12.0cmでC類に属する。坏部は浅く、口縁部はストレートに外方に開く。脚部は細く、裾部はゆるく屈曲して大きくラッパ状に開く。

SC－50（Fig.102　PL.28）

Ｃ－XI区に検出した住居址で、SC－65より東へ３ｍの距離にある。平面形は南北3.98ｍ、東西3.80ｍを測る隅丸方形をなし、面積は15.1m²である。壁の遺存状況は比較的に良好で、壁高

は43cmを測り、ゆるく傾斜して立ち上がる。床面は平坦で南へ僅かに傾斜する。柱穴は5個あるが、主柱穴は中央東西軸の2本である。中央に炉をもち、径100cmの浅く凹んだ範囲に炭が散らばる。

遺物は壺・甕・高坏等が南東隅に比較的まとまって出土したが、量的には少ない。

出土遺物（Fig.103）

壺形土器（429・430）429は口径15.2cmの二重口縁壺でＡＩ類に属する。朝顔状に開いた口縁部は強く屈曲して直線的に内傾する。端部は水平に整え、直下を小さく外方につまみ出す。頸部に三角凸帯が1条巡り、胴部はやゝ肩のはった卵形をなす。調整は内外面ともに粗いハケ目。430は口径9.8cmの小型壺である。「く」字状の口縁部は長めで直線的に開くものでBII類に属する。調整は内外面ともにハケ目後ナデ調整を加えている。

甕形土器（431）口径16.0cm。「く」字状の口縁部は短く直線的に開き、内方に小さくつまみだす。胴部は肩のはった球形となろう。

鉢形土器（434・435）434は素口縁の鉢でF類に属する。体部は半球形をなし、口縁部は直口ぎみに立ち上がる。調整は内外面ともにハケ目。口径18.7cm。器高9.0cm。435は口径26.0cm。口縁部が鍔状に長くのびるC類のもので、平坦に整えた端部は小さくつまみあげる。調整は内外面ともにハケ目後にナデて仕上げている。

高坏（432・433）432は口径17.3cm。体部は内弯ぎみに立ち上がり、口縁部はストレートに外方に開く。433は口径15.8cm、底径11.9cm、器高11.3cm。平底ぎみの坏部は下半でゆるく屈曲して稜をつくり、口縁部は反りぎみに大きく開く。ラッパ状に開く脚部は短く、裾部は屈曲して反りぎみに開く。いずれもC類に属する。

SC－51（Fig.102）

Ｃ－XI区に検出した住居址で、SC－50より北へ5ｍの距離にあり、SR－263と重複する。平面形は南北4.03ｍ、東西3.35ｍを測る隅丸方形をなし、面積は13.5m²である。壁高は45cmを測り、ゆるく傾斜して立ち上がる。床面は浅い凹レンズ状である。柱穴は2個あるが、主柱穴は明確でない。

遺物は弥生時代の壺・甕・高坏等が中央に拡がって出土したが、量的には少ない。

出土遺物（Fig.103）

甕形土器（436）口縁部が「く」字状に短く外反するもので、ＡＩ類に属する。平坦に整えた口縁端部は外方に小さくつまみ出す。胴部は砲弾形の長胴をなし、凸レンズ状の平底がつく。調整は内外面ともにハケ目。口径22.4cm、底径5.6cm、器高33.0cm。

SC－52（Fig.104　PL.28）

Ｂ－XI区に検出した住居址で、SC－53より北へ1ｍの距離にあり、SK－102、SR－154・284と重複関係にあり最も古い。平面形は東西3.41ｍ、南北3.38ｍを測る隅丸方形をなし、面積は

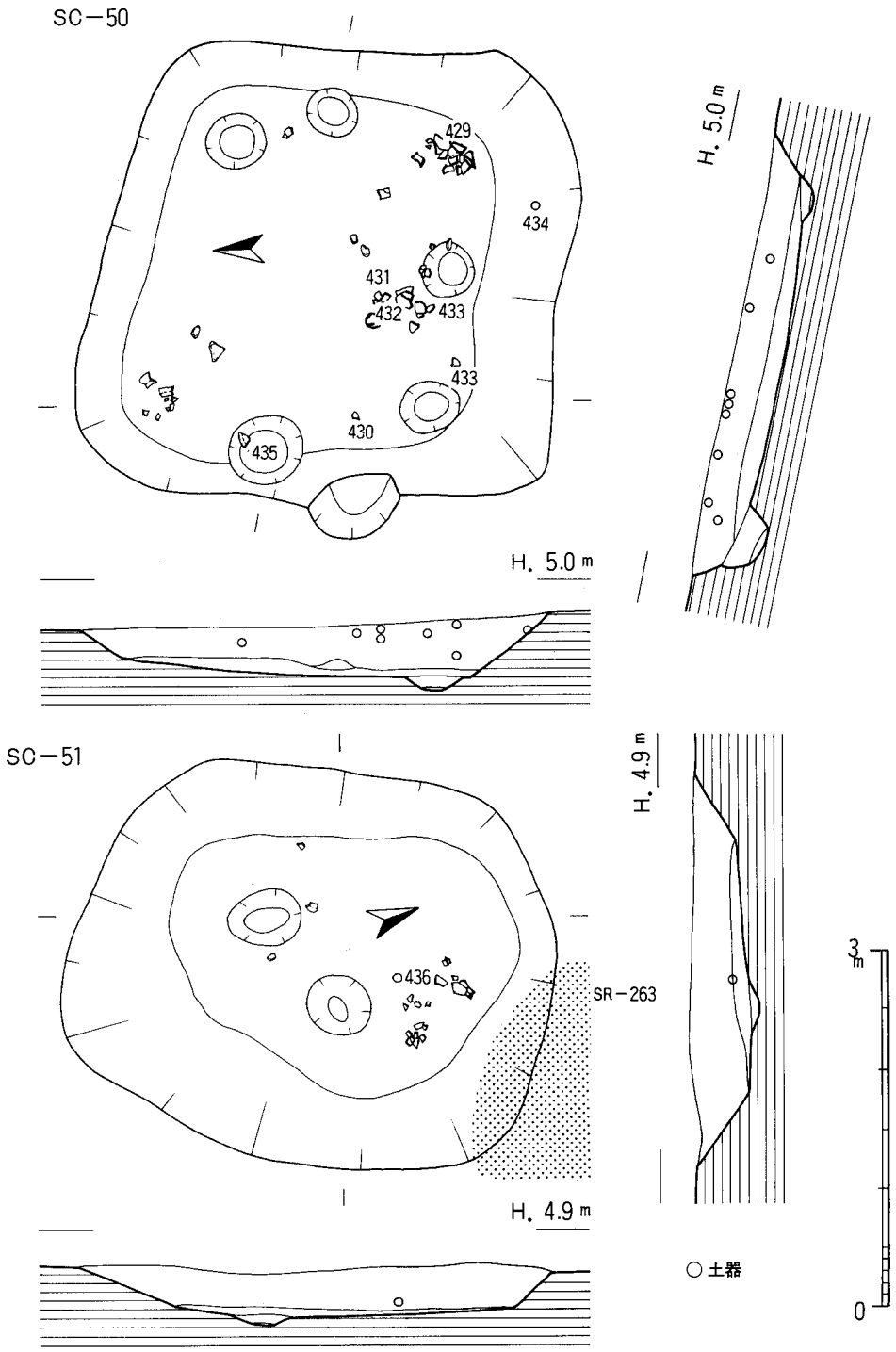


Fig. 102　SC－50・51実測図（1/60）

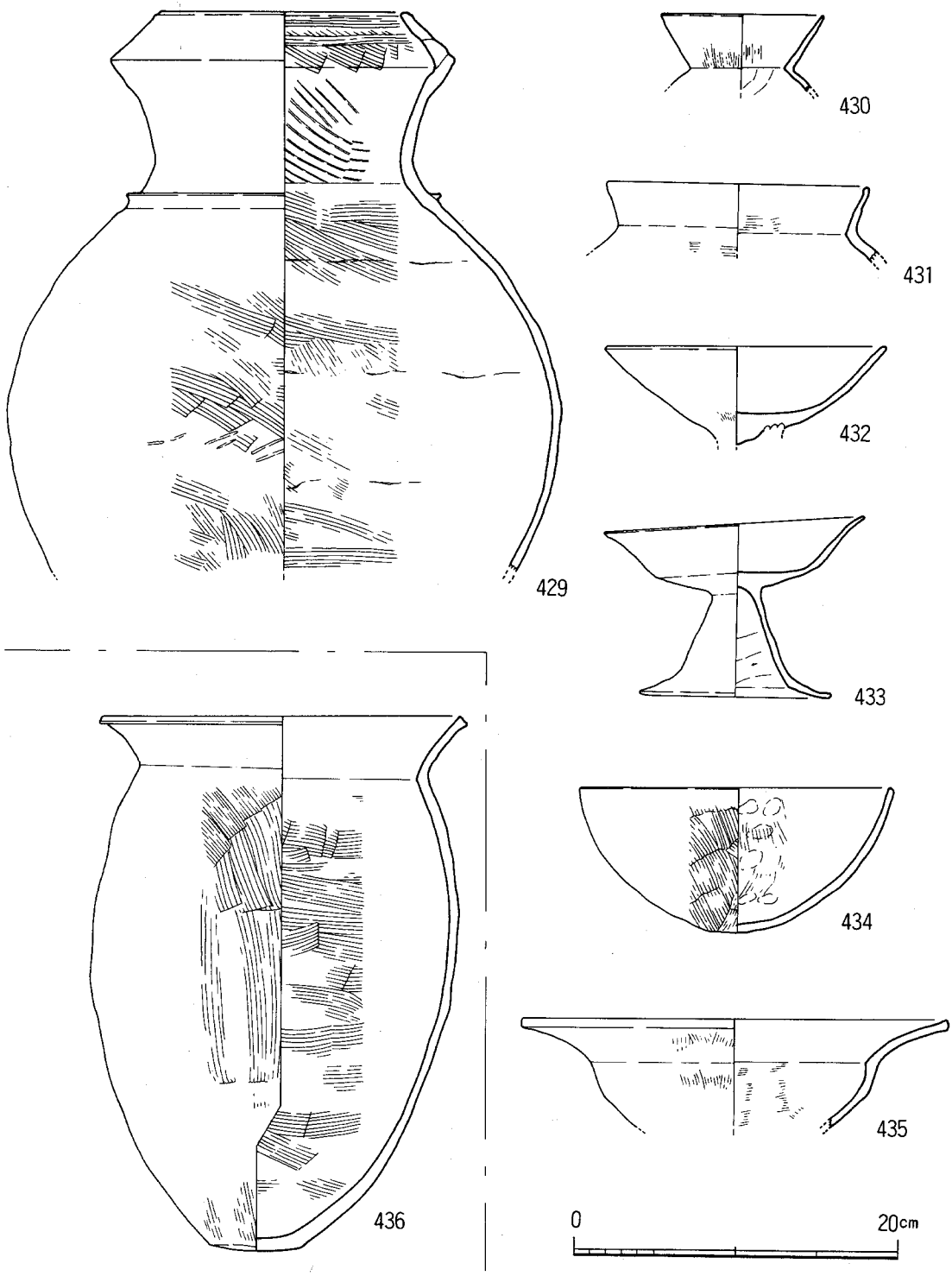


Fig. 103　SC－50・51出土土器実測図（1/4）

11.5m²である。壁の遺存状況は良く高さ50cmを測り、ゆるく傾斜して立ち上がる。床面は平坦であるがやゝ北側に傾斜する。柱穴は4個あるが、中央部東西軸の2本を主柱穴とする2本柱である。

遺物は弥生時代後期の完形の壺・甕・鉢・高坏等がまとまって出土した。

出土遺物（Fig.105・106）

壺形土器（437）口径11.2cm、器高16.2cm。直線的にのびる「く」字状の口縁部に球形の胴部がつくもので、BII類に属する。調整は外面がハケ目、内面はハケ目・ヘラケズリ。

甕形土器（440・441）440は口径16.4cm、底径4.8cm、器高19.8cm。短い「く」字状の口縁部に短胴の胴部がつくもので、AII類に属する。底部は凸レンズ状をなす。調整は内外面ともにハケ目。441は口径18.4cm、底径4.2cm、器

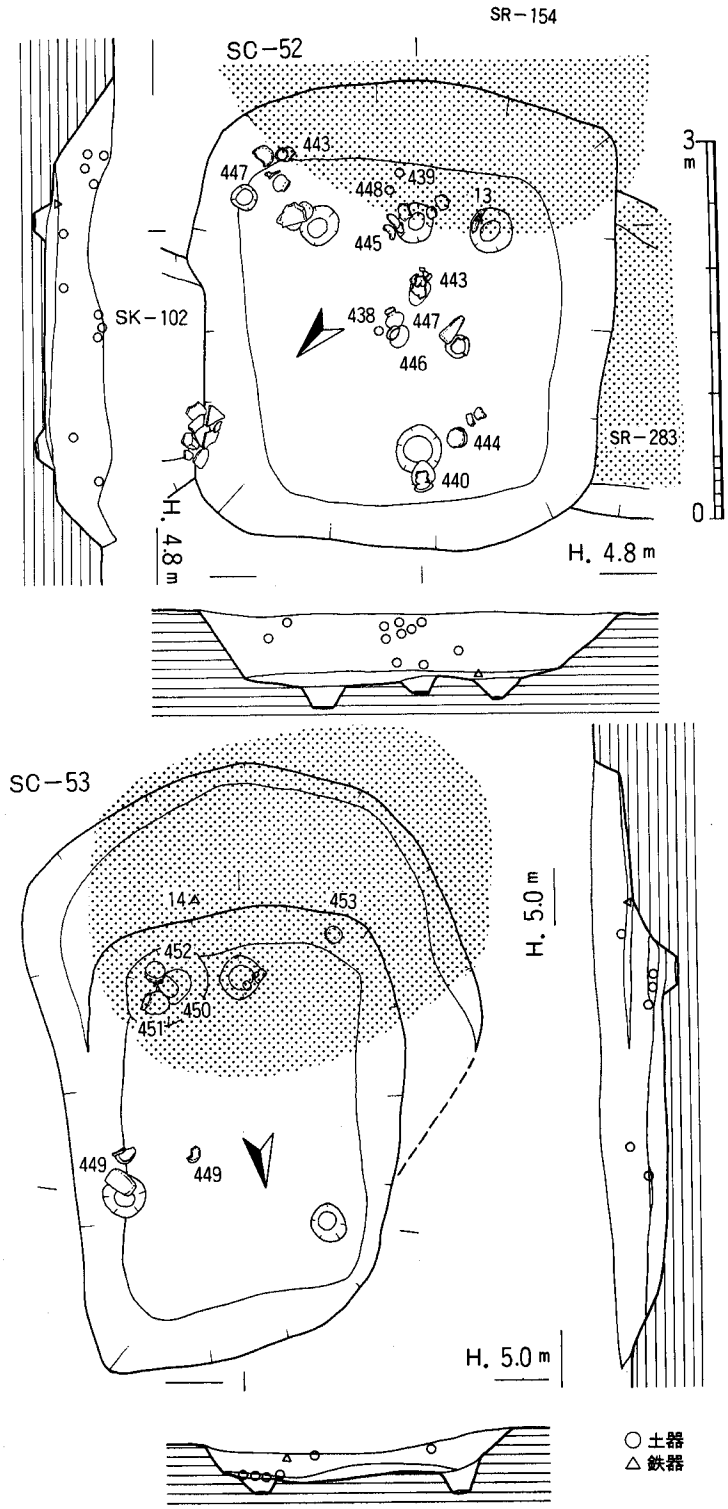


Fig. 104　SC－52・53実測図（1/60）

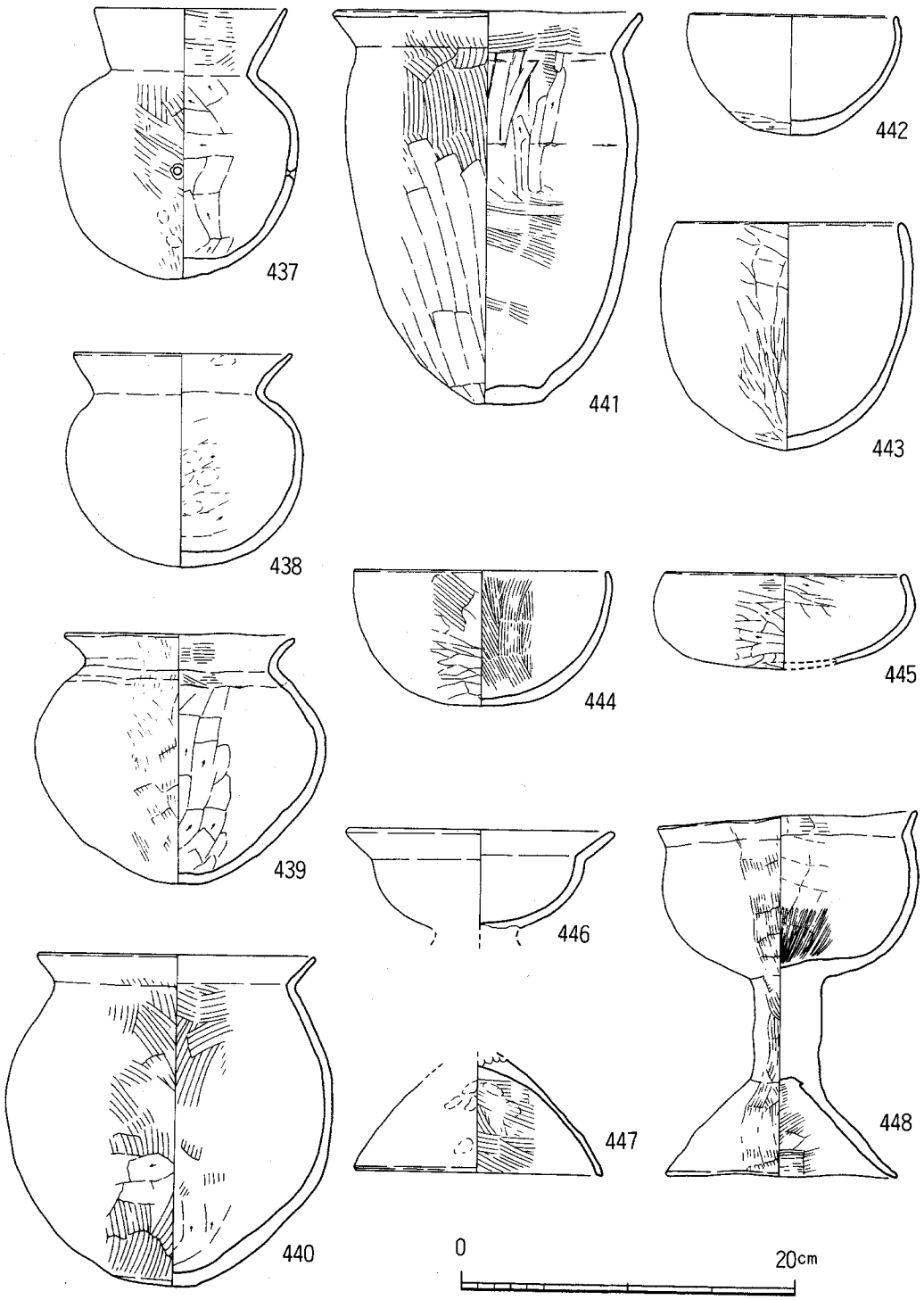


Fig. 105　SC－52出土土器実測図（1/4）

高23.5cm。「く」字状の口縁部は短くストレートに開き、胴部は長胴形をなすものでＡＩ類に属する。底部は丸底ぎみになる。調整は内外面ともにハケ目・ナデ。

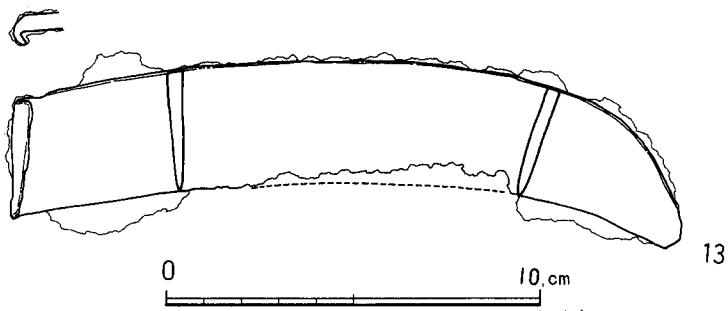


Fig. 106　SC－52出土鉄器実測図（1/2）

鉢形土器（438・439・442～446）438・439は「く」字状の口縁部にやゝ肩のはった球形の体部がつくものでD類に属する。438は口径12.7cm、器高12.8cm。439は口径13.6cm、器高14.8cmで、小さな丸底がつく。442～445は素口縁の鉢である。442・443は体部が半球形で、直口ぎみに立ち上がった口縁部は僅かに内傾するF類のものである。442は口径12.5cm、器高7.2cm。444は口径15.0cm、器高8.0cm。443は口径13.2cm、器高13.5cm。砲弾形の胴部をもつもので、E類に属する。肥厚した口縁部は僅かに内傾する。445は口径14.0cm。体部は浅く扁平で、口縁部は内傾する。446は口径14.0cm。体部は浅く扁平で、口縁部は内傾する。446は口縁部が鍔状にストレートにのびるものでB類に属する。胴部は扁平な半球形で、台付きのものである。口径16.0cm。

高坏（447・448）448は口径15.3cm、底径13.8cm、器高21.6cm。坏部は下脹れの半球形に短い「く」字状の口縁部がつくもので鉢形をなす。脚部は細く棒状で、裾部は大きく朝顔状に開く。調整は内外面ともにハケ目。全体に歪みが著しい。

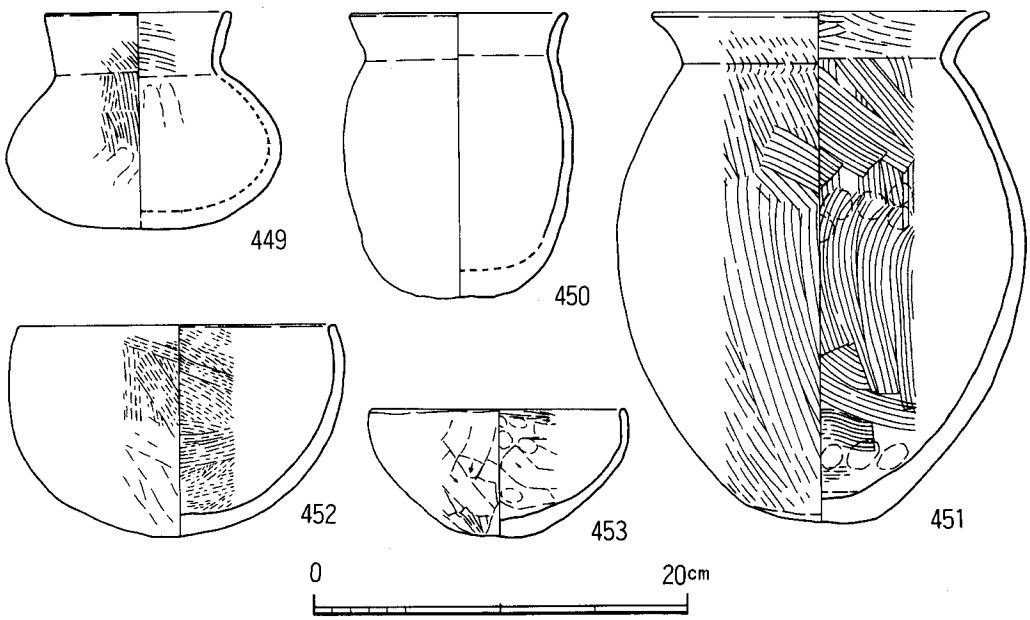


Fig. 107　SC－53出土土器実測図（1/4）

鎌（13）全長18.9cm、身幅3.2cm、背厚4mmを測る。刃部は内弯し、柄部は小さく折り返す。

SC－53（Fig.104　PL.29）

B－XI区に検出した住居址で、SC－52より南へ1mの距離にある。平面形は南北3.57m、東西2.7mを測る小型の長方形をなし、面積は9.7m²である。南西壁側に幅50～90cm、高さ20cmの平坦面がL字状に巡り、ベット状遺構の可能性がある。仮にベット状遺構であれば南北4.65m、東西3.4mとなる。壁高は40cmを測り、ゆるく傾斜して立ち上がる。床面は浅い凹レンズ状である。柱穴は3個あるが、主柱穴は明確でない。南壁東隅に径70cmの土壙があり、壙中より完形の壺・甕が出土した。

出土遺物（Fig.107・108）

壺形土器（449）口径9.9cm、器高11.5cmの小型壺である。口縁部は短く直口ぎみに開く。胴部は張りの強い扁球形で底部は扁平な平底状をなす。調整は内外面ともにハケ目、ナデ。BI類に属する。

甕形土器（450・451）450は口径11.5cm、底径3.3cm、器高15.2cm。「く」字状の口縁部は屈曲が弱く直口ぎみに外反する。胴部は下脹れの短胴形で、平底の底部がつく。AVI類。451は口縁部が短く「く」字状に外反するものでAI類に属する。胴部は卵形。調整は内外面ともに粗いハケ目。口径17.9cm、底径6.8cm、器高27.2cm。

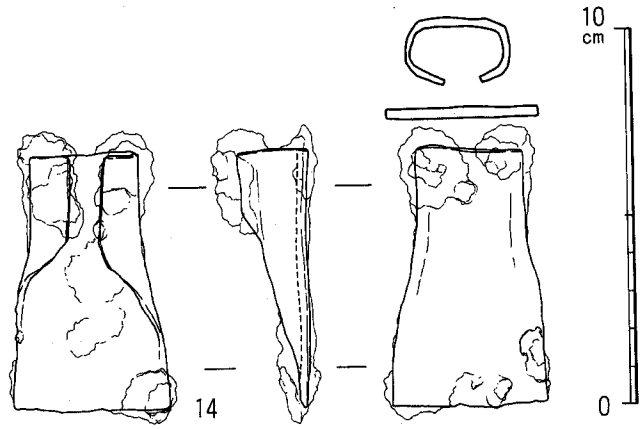


Fig. 108　SC－53出土鉄器実測図（1/2）

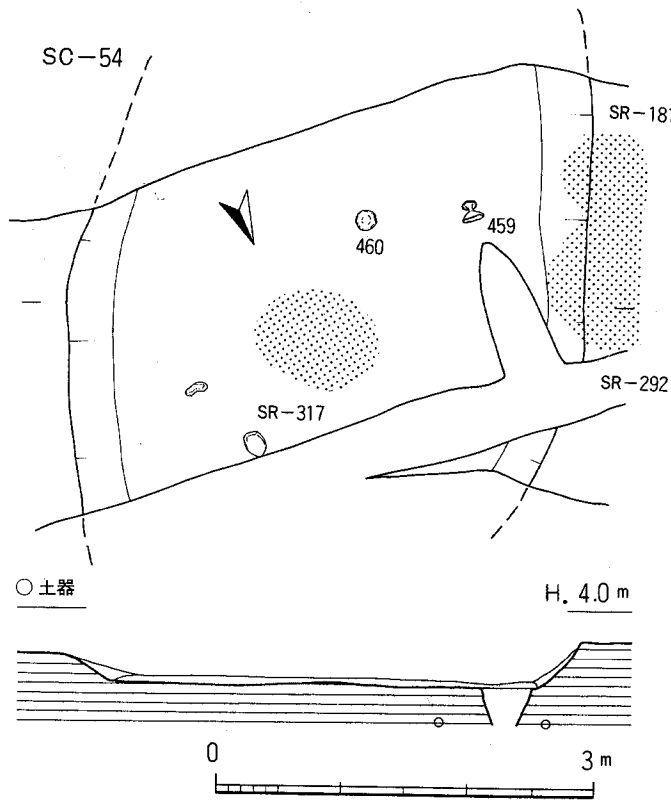


Fig. 109　SC－54実測図（1/60）

鉢形土器（452・453）452は口径16.7cm、器高11.3cmの素口縁をもつ深めの鉢でF類に属する。直口ぎみに立ち上がった口縁部は小さく内傾する。端部は平坦面を水平に整え、外方に小さくつまみ出す。調整は内外面ともにハケ目。453は口径13.2cm、器高6.8cm。素口縁の浅めの鉢でG類のものである。口縁部は直口ぎみに立ち上がる。胴部は半球形で1.9cmの小さな底部がつく。

鉄斧（14）長さ6.9cm、基部幅2.9cm、刃部幅4.1cm、袋部幅1.8cmを測る鍛造鉄斧で、刃部は短冊形をなす。

SC－54（Fig.109）

C－IX区に検出した住居址で、SC－48より北西へ10mの距離にある。SR－181・292・317と重複し、南北壁は攪乱も加わって消失している。平面形は東西4.14m、南北3.40m以上を測り、方形をなすと推定される。壁高は23

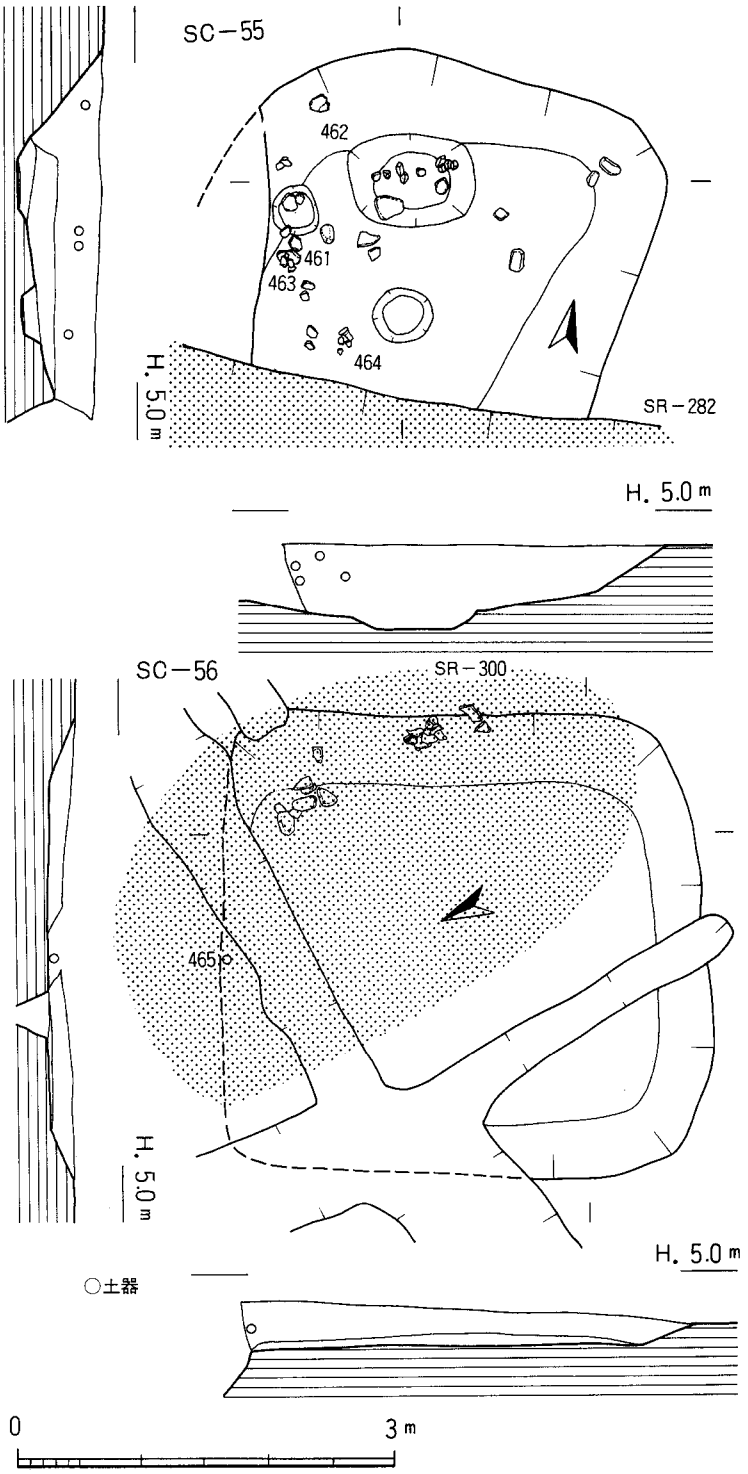


Fig. 110　SC－55・56実測図（1/60）

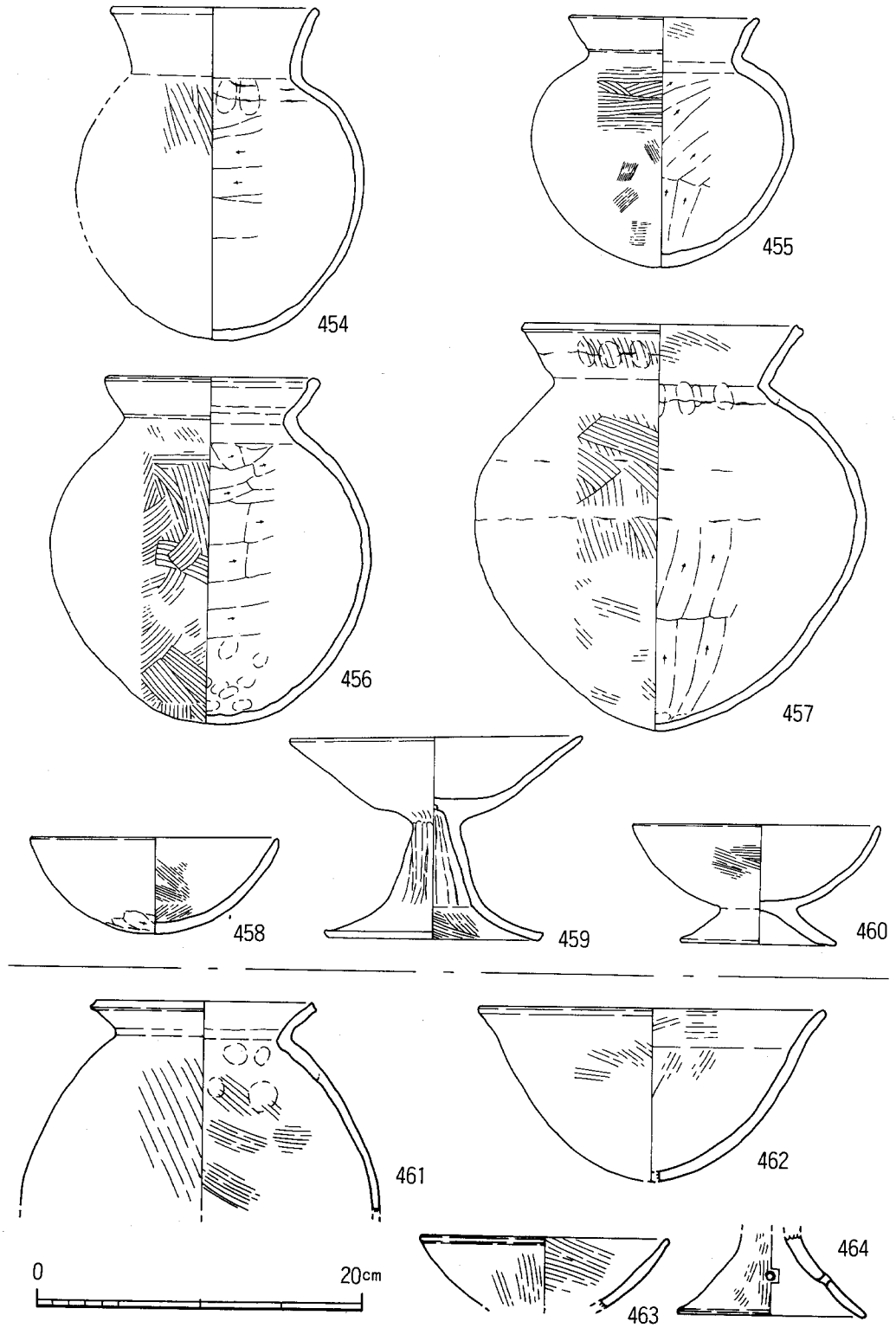


Fig. 111　SC－54・55出土土器実測図（1/4）

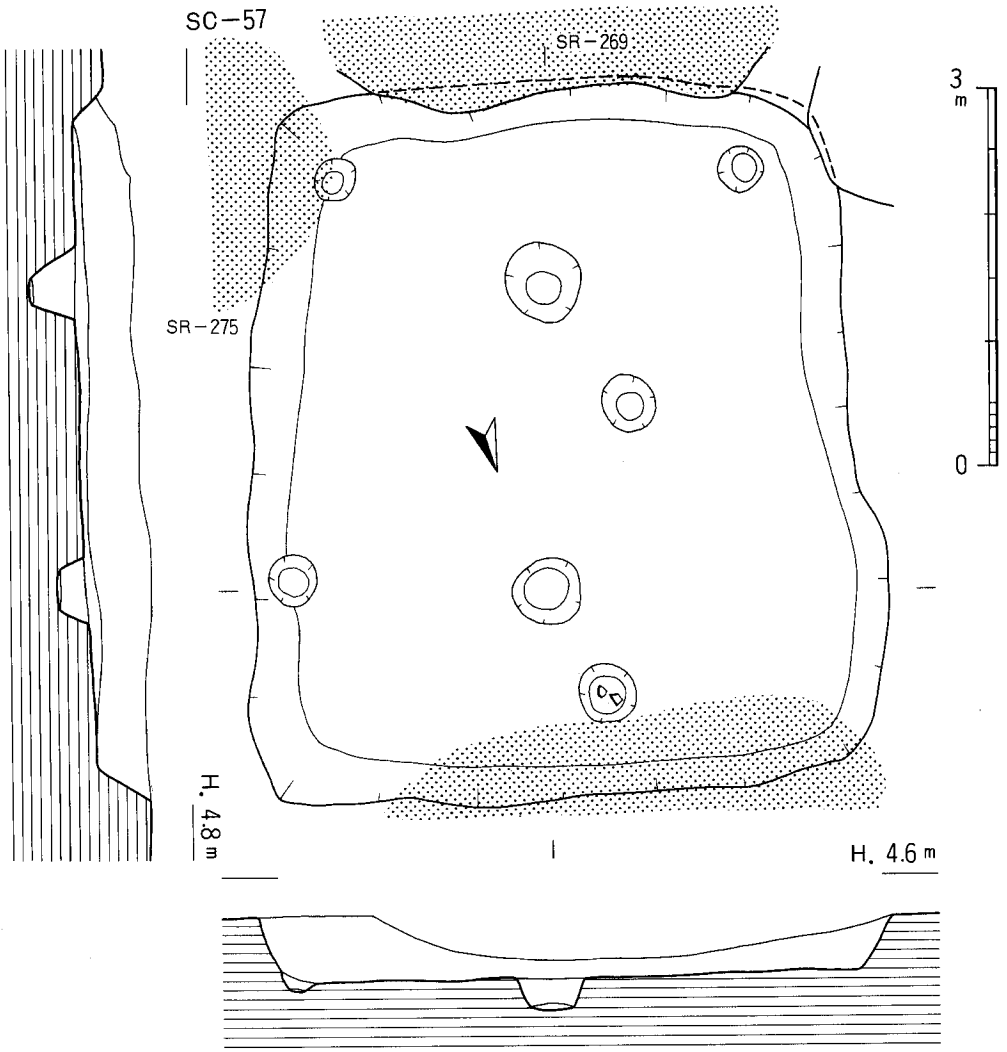


Fig. 112　SC－57実測図（1/60）

cmを測りゆるく傾斜して立ち上がる。床面は平坦である。柱穴は精査したが、検出できなかった。

遺物は、土師器の完形の甕・高坏・鉢等が出土しているが量的には少ない。

出土遺物（Fig.111）

壺形土器（455）口径11.8cm、器高15.3cm。「く」字状の口縁部はストレートにのび、端部は小さく外反する。胴部は肩のはった球形をなす。BIV類。

甕形土器（454・456・457）454は口径12.8cm、器高20.5cm。口縁部が上方に長くのびるものでAIII類に属する。胴部は肩のはった球形をなす。456は口径13.1cm、器高21.3cm。布留系のものでAIV類。「く」字状の口縁部は内弯ぎみに立ち上がり、端部を内側に小さくつまみだす。胴部は球形で、丸底の底部がつく。457は口径17.2cm、器高25.5cm。「く」字状の口縁部は直線的に開き、平坦な端部は小さくつまみ出す。短形の胴部は肩のはった卵形で、尖底の底部がつく。

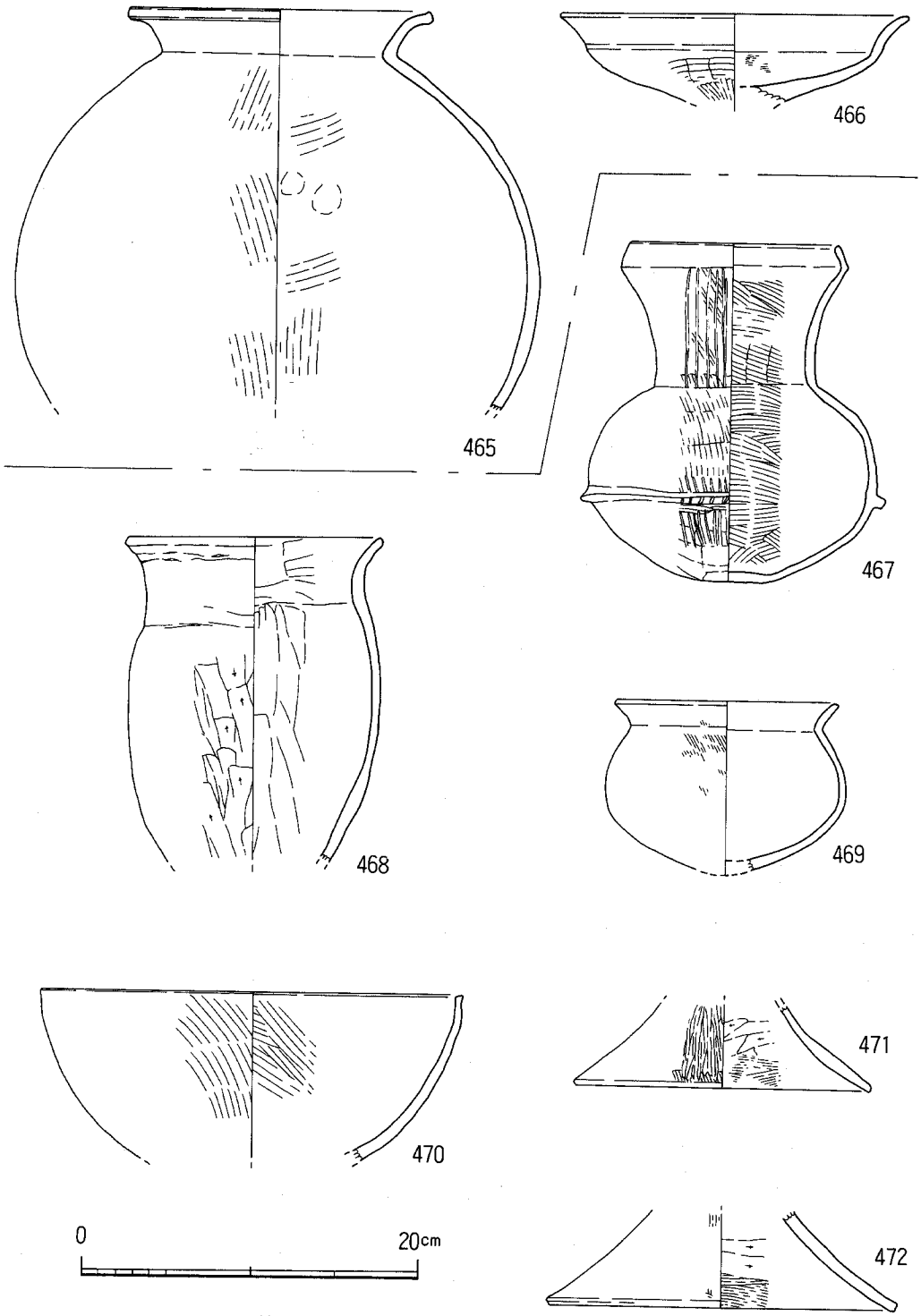


Fig. 113　SC－56・57出土土器実測図（1/4）

AII類。

鉢形土器（458・460）458・460は素口縁の浅手の鉢でG類に属する。体部は扁平な半球形で口縁部は内弯ぎみに開く。458は口径15.2cm、器高5.9cm。460は口径15.3cm、器高7.2cmで、ラッパ状に開く低い脚がつく台付鉢である。

高坏（459）口径18.0cm、底径13.3cm、器高12.3cmを測る小型のもので、C類に属する。坏部は浅く体部はストレートに開く。脚部は短く直線的で、裾部は大きくラッパ状に開く。

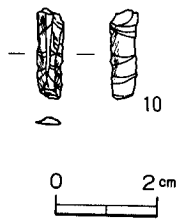


Fig. 114　SC－57
出土石器実測図（2/3）

SC－55（Fig.110）

B－XII区に検出した住居址で、SC－32のすぐ北西に隣接し、SR－282と重複し南半分は消失している。平面形は東西で3.45m、南北で2.78m以上を測り、方形に復原できるものであろう。壁高は53cmを測り、ゆるく傾斜して立ち上がる。床面は浅い凹レンズ状である。柱穴は2個あるが、主柱穴は明確でない。北壁西偏りに100×72cmの楕円形土壙がある。

遺物は壺・甕・鉢等があるが量的には少ない。

出土遺物（Fig.111）

甕形土器（461）口径13.0cm。「く」字状の口縁部は短く反りぎみに開き、平坦な端部は横凹線状に小さく凹む。調整は内外面ともに粗いハケ目。AII類に属するものである。

鉢形土器（462・463）462は口径21.0cm、器高10.7cm。やや深手の鉢でF類に属する。外方に開く口縁部は内側に弱い稜をつくり、やや反りぎみになる。調整は内外面ともにハケ目後にナデて仕上げている。463は口径15.0cm。素口縁の浅手のものでG類に属する。内弯ぎみに立ち上がった口縁部は、端部を外方に小さくつまみ出す。調整は内外面ともにハケ目。

高坏（464）底径11.4cmの脚部資料である。裾部は朝顔状に開き、中位に円孔を穿つ。

SC－56（Fig.110）

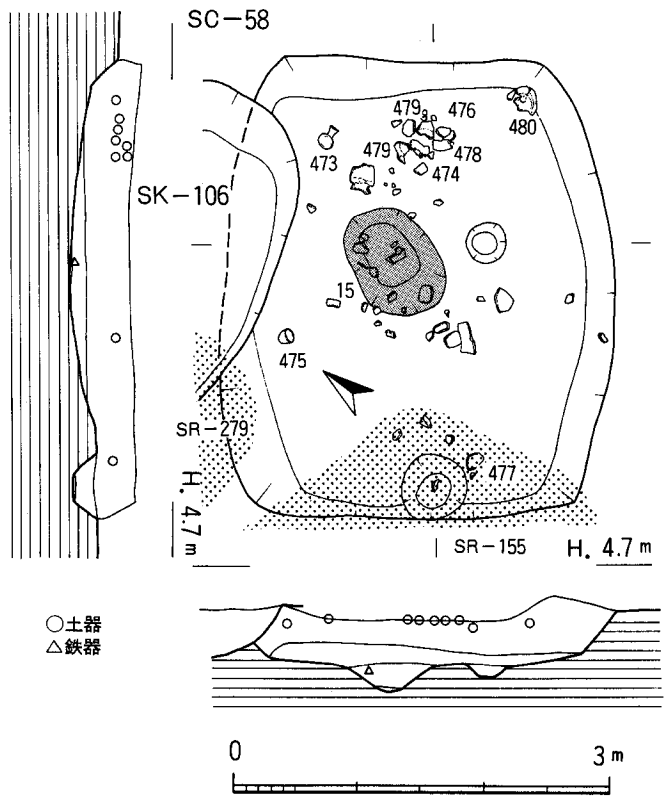


Fig. 115　SC－58実測図（1/60）

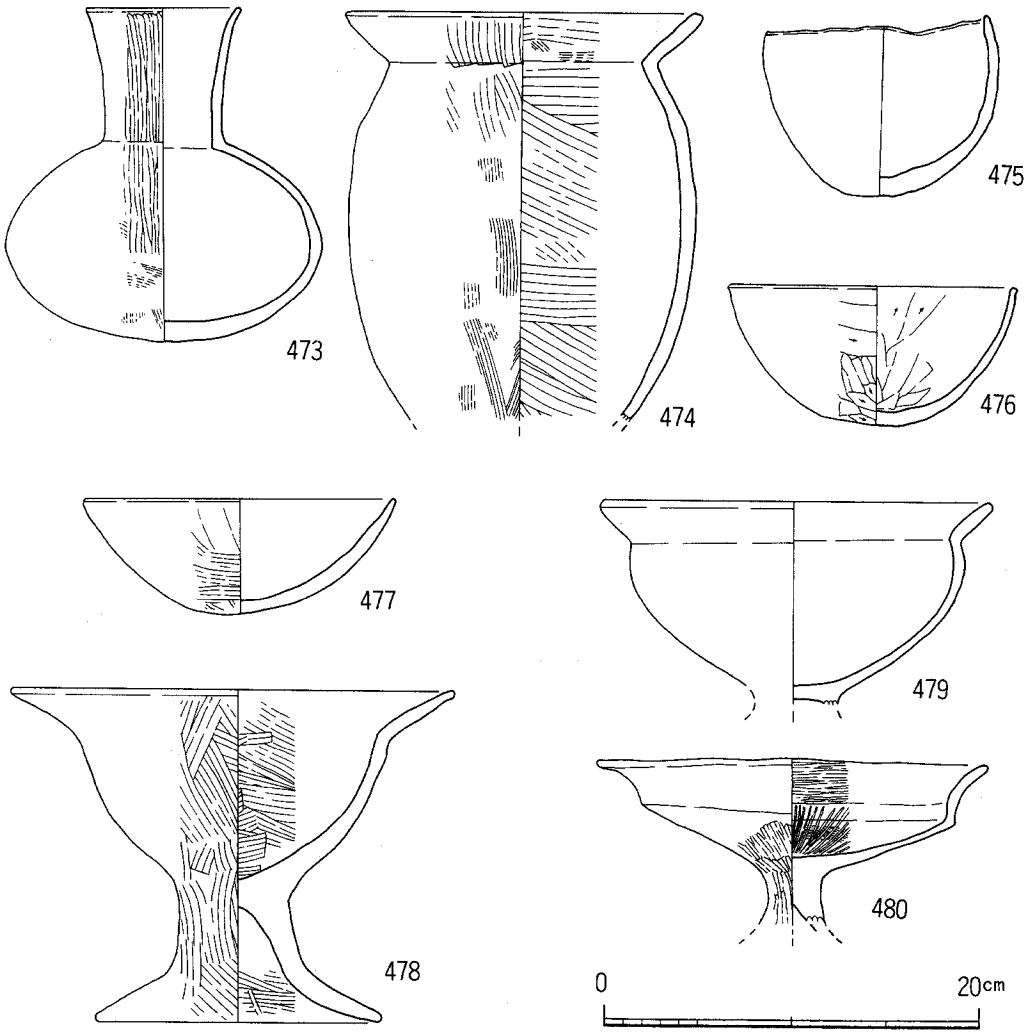


Fig. 116　SC－58出土土器実測図（1/4）

C－Ⅻ区に検出した住居址で、SC－33より東へ2mの距離にある。SR－300と重複関係にあり、古い。北壁と西壁北半分は埋設管等による攪乱を受けて消失している。平面形は東西3.68m、南北約4mを測る隅丸方形をなすものであろう。壁の遺存状況は比較的良好で40cmを測り、ゆるく傾斜して立ち上がる。床面は平坦である。柱穴は精査したが検出できなかった。埋土上面には拳大の小礫石を厚く敷きつめた状態でおかれていた。小礫石は焼けて赤変し、礫石の隙間に炭片が詰まっていることから埋没後の凹みを利用して炉として使用したものであろう。

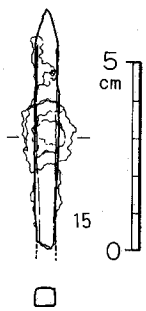


Fig. 117　SC－58
出土鉄器実測図（1/2）

遺物は弥生時代後期の壺・甕・高坏があるが量的にはほとんど少量である。

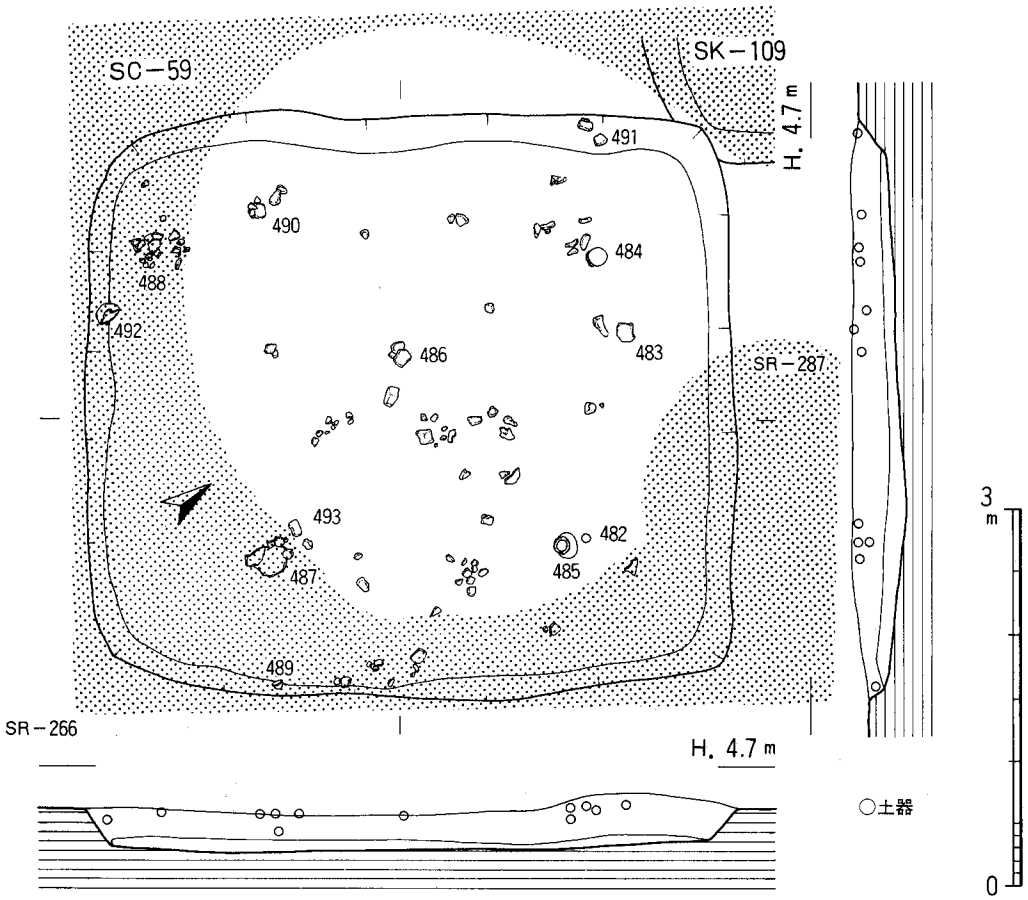


Fig. 118　SC－59出土土器実測図（1/60）

出土遺物（Fig. 113）

壺形土器（465）口径18.0cm。「く」字状の口縁部はやゝ長めで大きく外反し、端部を上方につまみ上げる。胴部は肩のはった大型の球形をなす。調整は内外面ともにハケ目後にナデて仕上げている。ＥＩ類。

高坏（466）口径20.4cmとやゝ大型でA類に属する。坏部は浅めで中位に弱い稜をつくり、口縁部は反りぎみに開く。

SC－57（Fig.112　PL.29）

Ｃ－Ⅺ区に検出した住居址で、SC－64より東へ５ｍの距離にある。SK－105、SR－269･275と重複関係にあり、SK－105よりも新しく、SR－269・275よりも古い。平面形は、南北5.7ｍ、東西5.08ｍを測る長方形をなし、面積は28.9m²である。壁の遺存状況は比較的良好で壁高は50cmを測り、急峻に立ち上がる。床面は平坦である。柱穴は７本あるが、中央南北軸の２本が主柱穴である。主柱穴間のやゝ西偏りに130×80cmの範囲に炭と赤変した砂が拡がっており、炉址

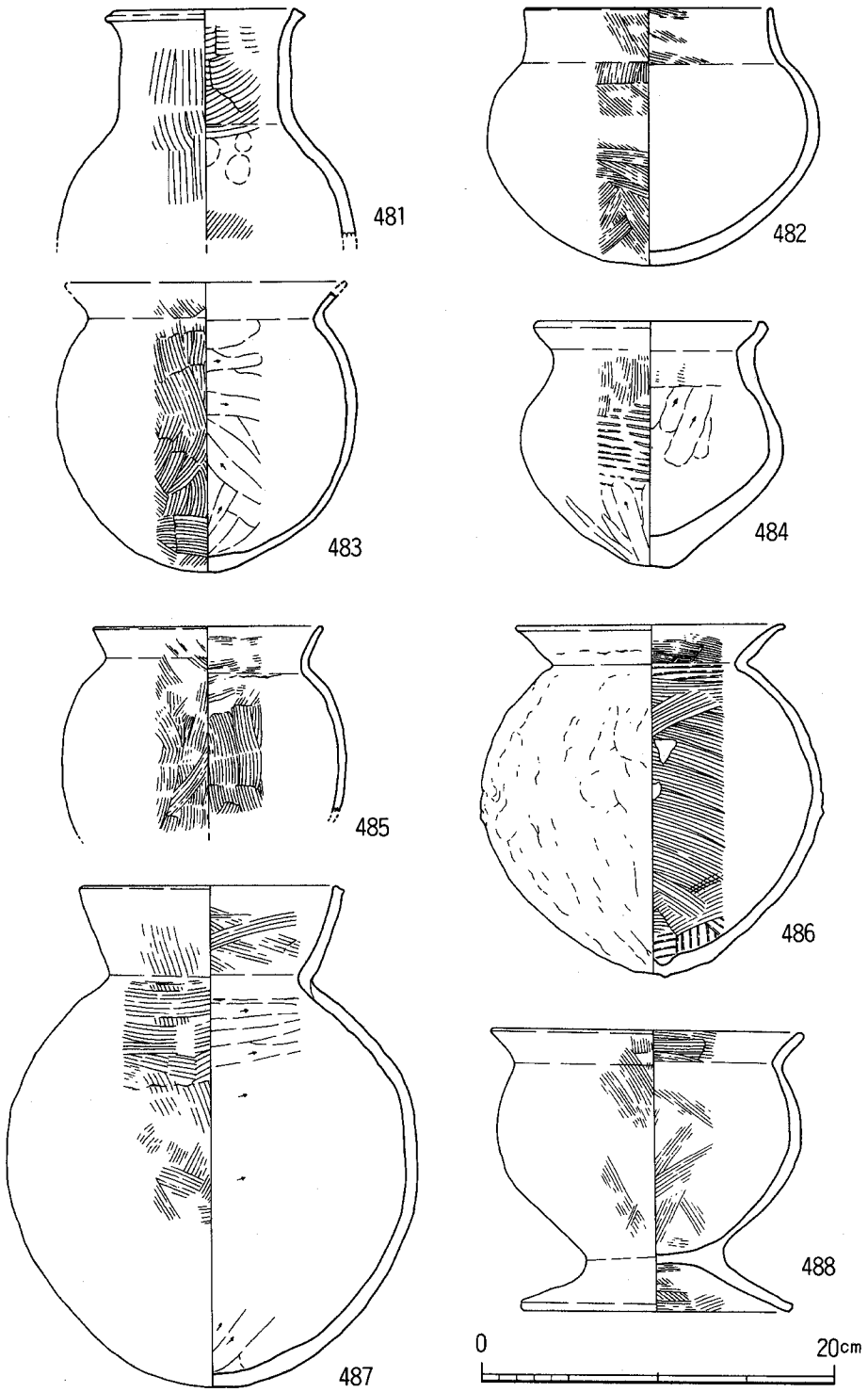


Fig. 119　SC－59出土土器実測図(1)（1/4）

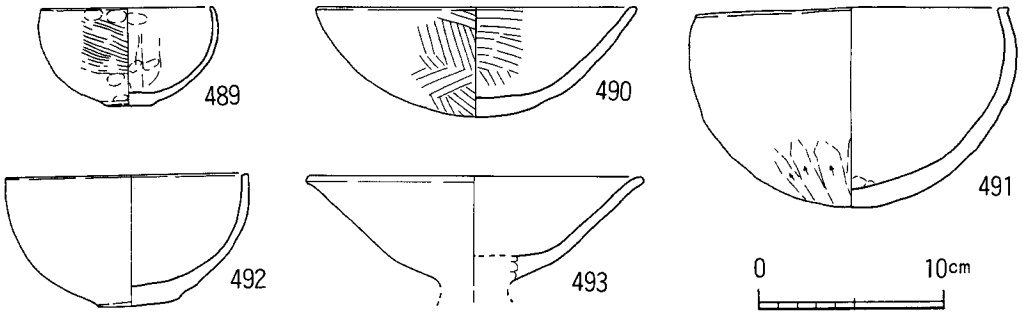


Fig. 120　SC－59出土土器実測図(2)（1/4）

として使用したものであろうが堆積が薄く断面形は明確に確認できなかった。

遺物は壺・甕・鉢・高坏のほか土錘が１点出土しているが量的にはきわめて少なく、あり方も散逸的である。

出土遺物（Fig.113・114）

壺形土器（467）二重口縁をもつ長頸の壺でＡＩ類に属する。朝顔状に開いた口縁部は屈曲して短く内傾する。胴部は肩の張った扁球形で、最大径部に刻目を施した「コ」字状の凸帯が巡る。頸部には縦方向の暗文を施す。口径12.0cm。器高20.1cm。

甕形土器(468)口径14.9cm。口縁部は一旦直口した後に反りぎみに開く、胴部は砲弾状でやゝ長めである。AVI類。

鉢形土器（469・470）口径13.3cm。「く」字状の口縁部は短く外反し、胴部は肩の張った扁球形をなすもので、D類に属する。470は口径25.0cm。素口縁をもつ深手のもので、F類に属する。口縁部は直口ぎみに立ち上がり、平坦に整えた端部は外方に小さくつまみ出す。調整は内外面ともにハケ目。

高坏(471・472)いずれもA類に属する脚部資料で、裾部は大きくラッパ状に開く。底径は471が17.3cm、472が20.4cmを測る。

細石刃（10）黒色砂中より出土した黒曜石製細石刃で刃部には刃こぼれがある。長さ18mm、断面形は台形に近い。

SC－58（Fig.115　PL.30）

Ｃ－XI区に検出した住居址で、SC－65より西へ２ｍの距離にある。SK－106、SR－155・279と重複関係にあり、いずれよりも古い。平面形は南北3.65ｍ、東西3.08ｍを測る小型の長方形をなし、面積は11.3m²である。壁高は44cmを測り、ゆるく傾斜して立ち上がる。床面は浅い凹レンズ状である。柱穴は２本あるが、主柱穴は明確にはできなかった。中央より北偏りに91×65cmの楕円形土壙があり断面形は舟底状になる。土壙内には黒褐色砂に混って炭が入っており、炉址として使用されたものであろう。

遺物は弥生時代後期の長頸壺・鉢・高坏が完形で西・北壁より出土したが、全体にはまばら

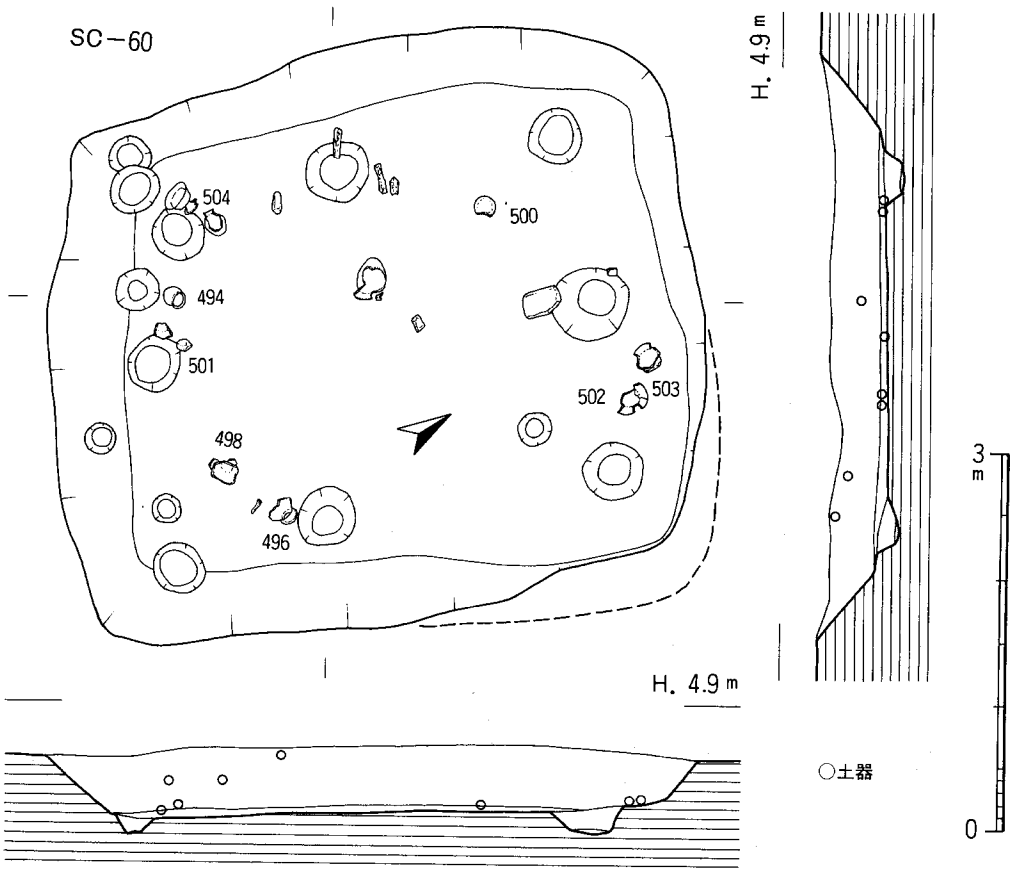


Fig. 121　SC－60実測図（1/60）

な分布を示し、量的にも少ない。

出土遺物（Fig.116・117）

壺形土器（473）口径8.1cm、器高17.8cmの長頸壺でBⅠ類に属する。口縁部はラッパ状に開き、頸部は短めである。胴部は張りの強い扁球形である。調整は外面がハケ目後に研磨、内面がヨコナデ・ナデ仕上げ。

甕形土器（474）口径18.8cm。「く」字状の口縁部はストレートに開き、胴部は長めの卵形をなす。調整は内外面ともにハケ目。AⅠ類に属する。

鉢形土器（475～479）475は口径11.4cm、器高9.7cm。素口縁をもつ深手のもので、F類に属する。体部は半球形で、直口ぎみに立ち上がった口縁部は小さく内傾する。476・477は素口縁をもつ浅手のもので、G類に属する。体部は内弯ぎみに立ち上がり、口縁部は直口ぎみに開く。476は口径14.6cm、器高7.4cmで、口縁端部を小さくつまみ出す。477は口径16.2cm、器高6.1cm。478は口縁部が鍔状に長くのびるもので、C類に属する。調整は内外面ともに粗いハケ目。口径23.

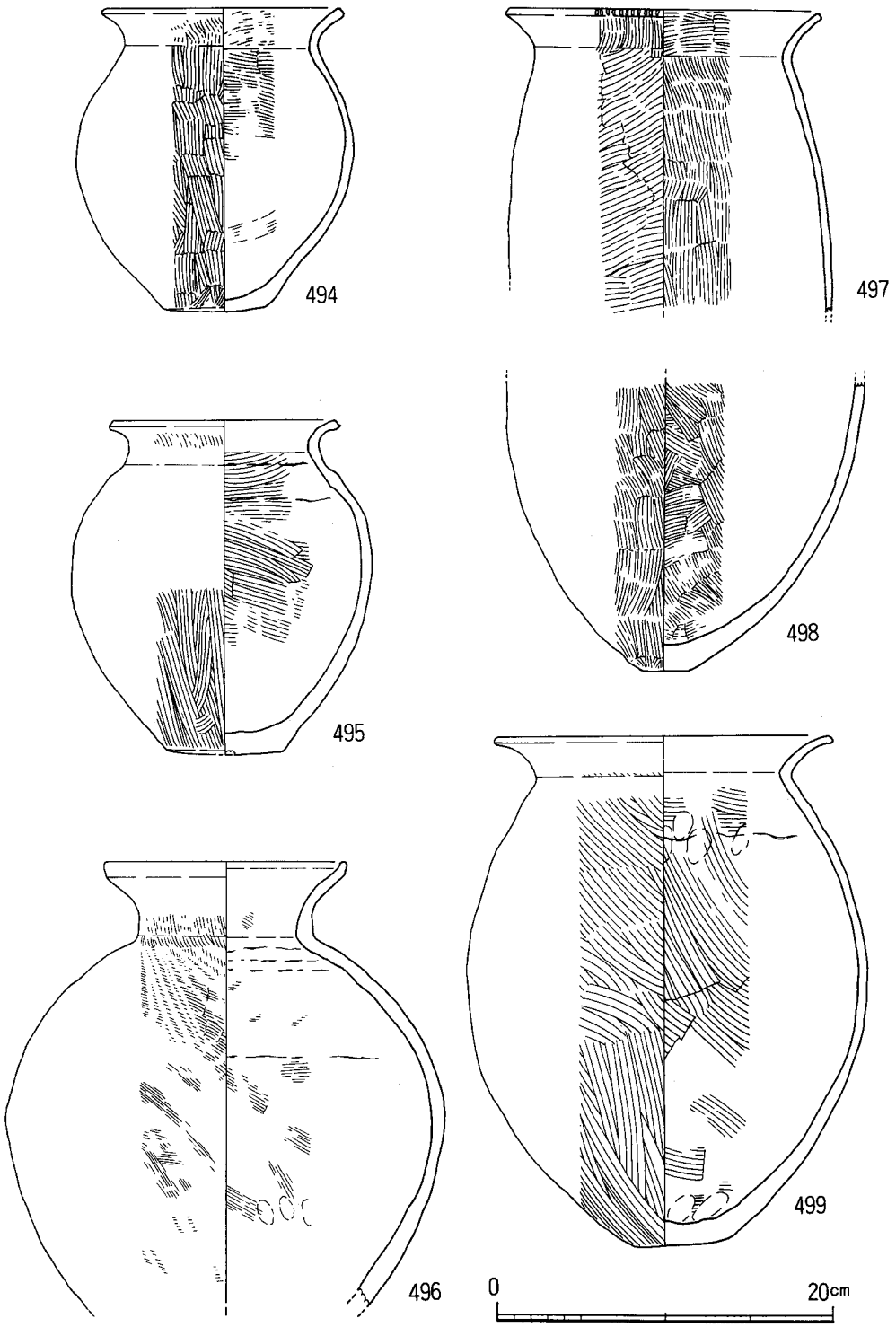


Fig. 122　SC－60出土土器実測図(1)（1/4）

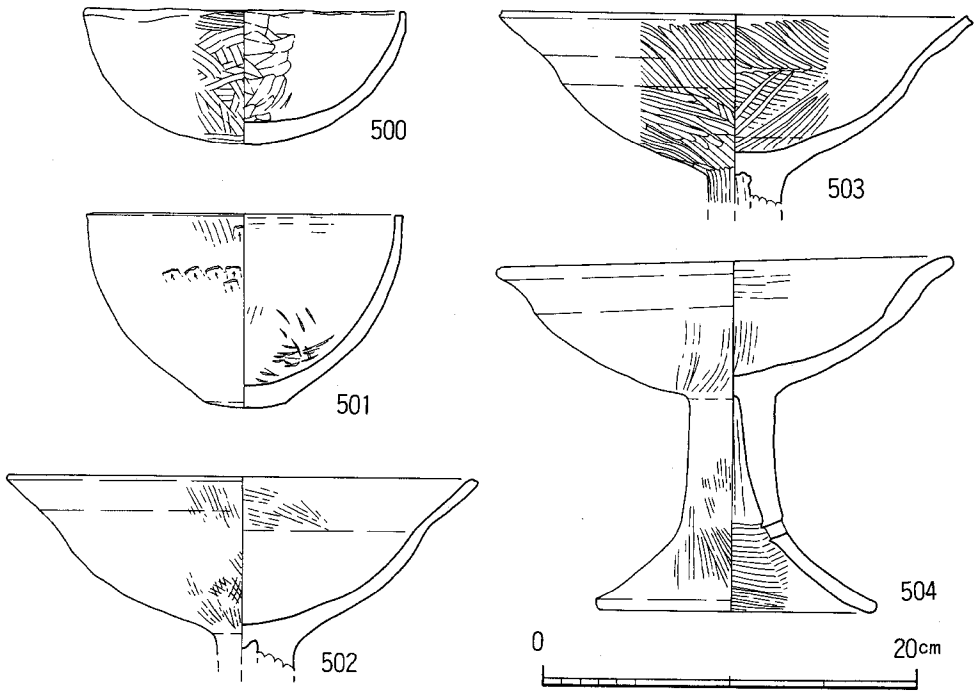


Fig. 123　SC－60出土土器実測図(2)（1/4）

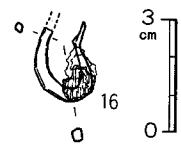


Fig. 124　SC－60
出土鉄器実測図（1/2）

3cm、器高17.7cmで、底径14.9cmのラッパ状に開く脚がつく台付鉢である。479は「く」字状の口縁部が鍔状に開く深手の鉢でB類に属する。調整は内外面ともに丁寧なナデ仕上げ。口径は20.9cmで脚のつく台付鉢である。

高坏（480）口径10.6cm。坏部はやゝ深く、口縁部は中位で屈曲して直口した後に大きく外反する。脚部は短くラッパ状に開くものであろう。調整は内外面ともにナデ・研磨。B類。

不明鉄器（15）長さ6.3cm、身幅6㎜を測る。端部は鋭利に尖り、断面形は方形を呈す。

SC－59（Fig.118　PL.30）

B－XI区に検出した住居址で、SC－60より南へ10mの距離にある。SK－109、SR－266・287と重複関係にあり、SK－109よりも新しく、SR－266・287よりも古い。平面形は南北5.19m、東西4.6mを測る長方形をなし、面積は23.9m²である。壁高は33cmを測り、ゆるく傾斜して立ち上がる。床面は平坦である。柱穴は精査したが検出できなかった。

遺物は完形の土師器甕・鉢・高坏等が出土したが量的には少ない。

出土遺物（Fig.119・120）

壺形土器（481・482）481は口径10.0cm、長頸の素口縁をもつものでC類に属する。頸部はやや短めで、口縁部は小さく外反する。平坦な整部は中央が凹線状にやや凹む。胴部は肩の張った球形。調整は内外面ともに粗いハケ目。482は口径14.0cm、器高14.6cm。口縁部は内傾ぎみに

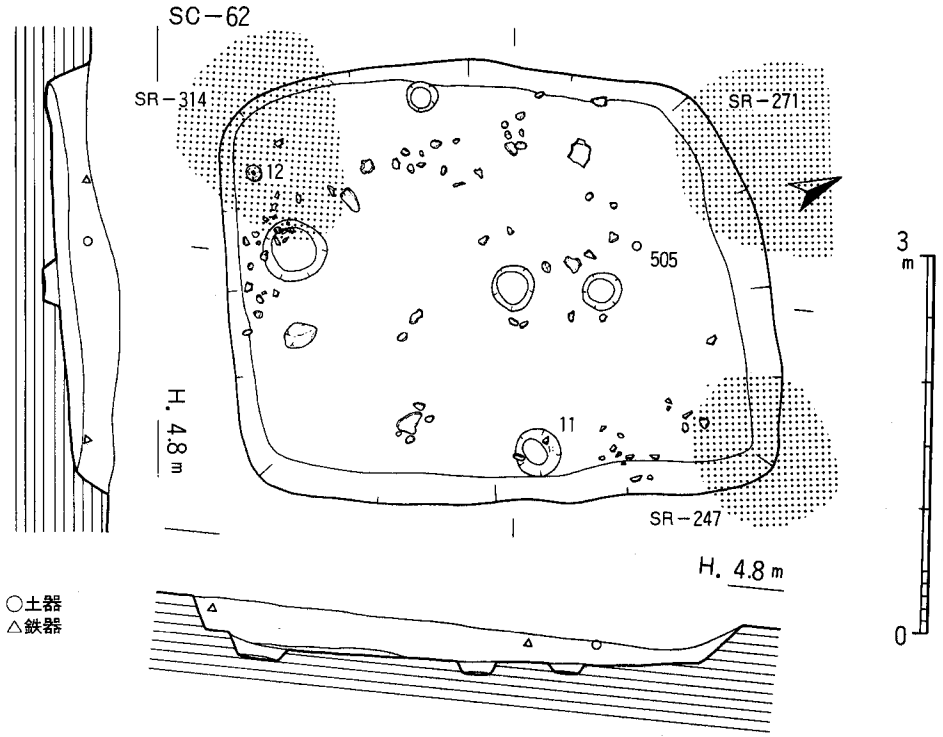


Fig. 125　SC－62実測図（1/60）

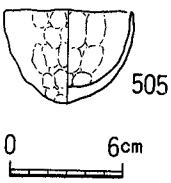


Fig. 126　SC－62
出土土器実測図（1/4）

短く直口し、胴部は肩のはった扁球形をなす。E類に属する。調整は胴部内面がヘラケズリのほかはハケ目。

甕形土器（483～487）483・485・486は「く」字状に外反する口縁部に、短胴形の胴部がつくものでAII類に属する。485は口径12.6cm。486は口径15.2cm、器高19.8cm、口縁端部は小さくつまみ出す。胴部は張りの強い卵形で、尖底ぎみの底部がつく。484は口径13.3cm、底径2.1cm、器高13.7cm。「く」字状の口縁部は短く内弯ぎみに開き、端部を上方につまみ上げる。胴部は玉葱状の扁球形で、小さな平底の底部がつく。胴部外面は下半がヘラケズリ、上半が平行叩き後にハケ目調整を加えている。内面はナデ・ヘラケズリ。487は口径14.9cm、器高28.3cm。「く」字状の口縁部は内弯ぎみに上方に開き、平坦に整えた端部は外方に小さくつまみ出す。胴部は肩のはった卵形で、丸底の底部がつく。AIII類。

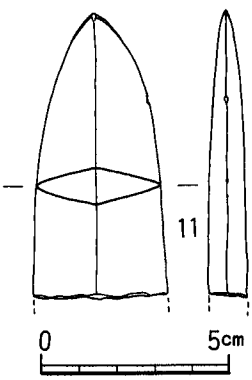


Fig. 127　SC－62
出土石器実測図（1/2）

鉢形土器（488～492）488は口径17.8cm、器高15.8cm。口縁部は短く「く」字状に外反し、肩のはった球形の胴部がつくもので、D類に属する。底部には低い朝顔状の脚がつく台付鉢である。490は口径17.0cm、器高5.9cm。口縁部が内弯ぎみに開く浅手のもので、G類に属す

る。調整は内外面ともにハケ目。489・491・492は素口縁をもつ深手の鉢で、F類に属する。胴部は半球形で、直口ぎみに立ち上がった口縁部は小さく内傾し、端部は小さくつまみ出す。489は口径8.9cmで底径2.2cmの小さな平底がつく。491は口径14.3cm、器高10.7cm。492は口径12.8cm、器高6.6cmで、底径4.1cmの平底がつく。

高坏（493）口径18.0cm。口縁部は反りぎみに大きく開くものでC類に属する。

SC－60（Fig.121　PL.31）

B－X区に検出した住居址で、SC－68より西へ4mの距離にある。平面形は南北5.15m、東西4.68mを測る長方形をなし、面積は24.1m²である。壁の遺存状況は比較的良好で壁高は50cmを測り、傾斜して立ち上がる。床面は平坦である。主柱穴はほぼ中央南北軸の2本柱で、東・西壁際には等間隔に各々3本の柱穴が並び補助柱的性格のものと思われる。

遺物は南・北壁際からほとんど完形の甕・鉢・高坏が出土したが量的には少ない。

出土遺物（Fig.122～124）

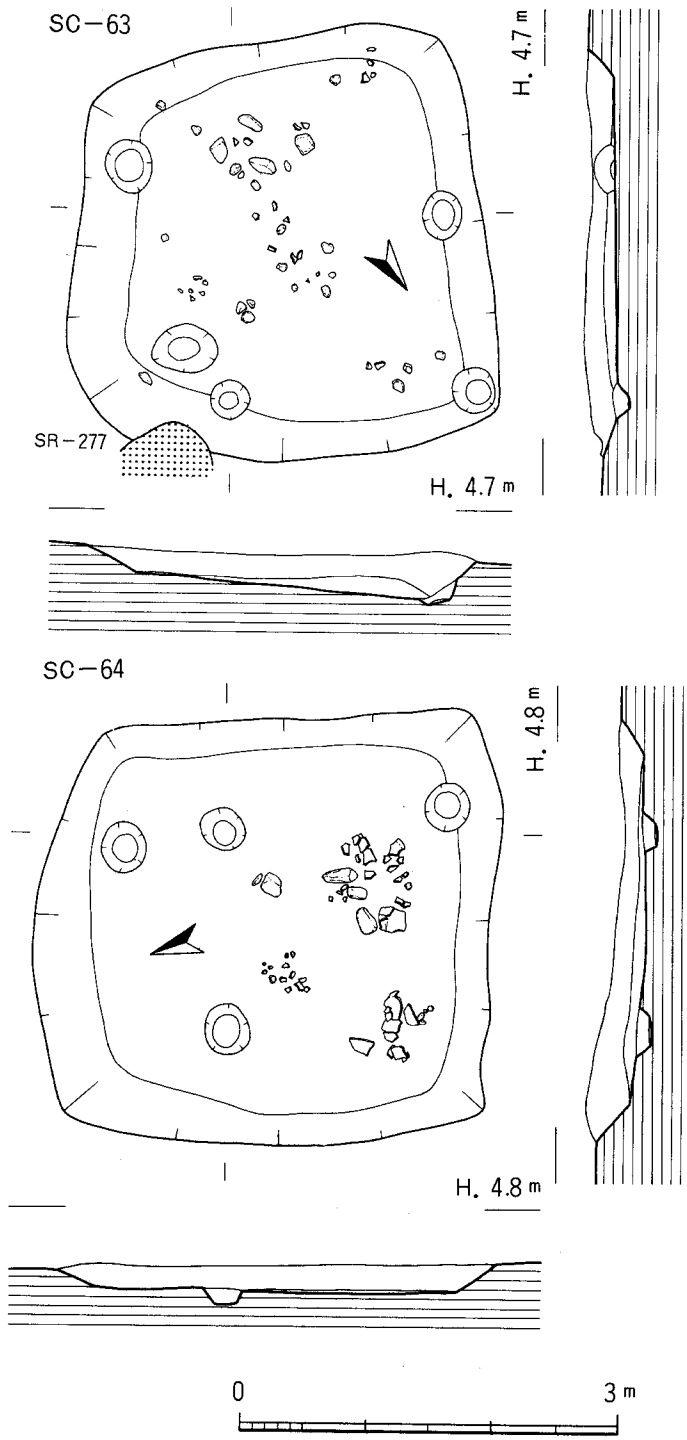


Fig. 128　SC－63・64実測図（1/60）

壺形土器(494～496) 494・495は短く「く」字状に外反する口縁部に肩のはった短形の胴部がつくもので、EII類に属する。底部は平底で、甕に類する。調整は内外面ともにハケ目。494は口径13.8cm、器高18.0cm、495は口径13.0cm、器高20.0cm。496は口径14.3cm。口縁部は短く直口した後にラッパ状に開き、端部は直口して垂直につまみ上げる。胴部は張りの強い卵形をなす。E I 類。

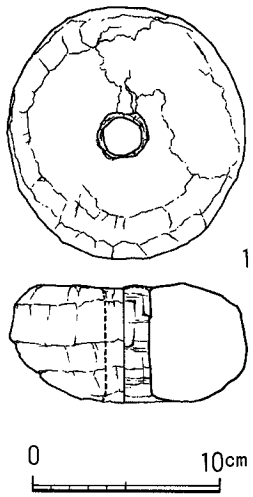


Fig. 129
SC－62出土石器実測図 (1/4)

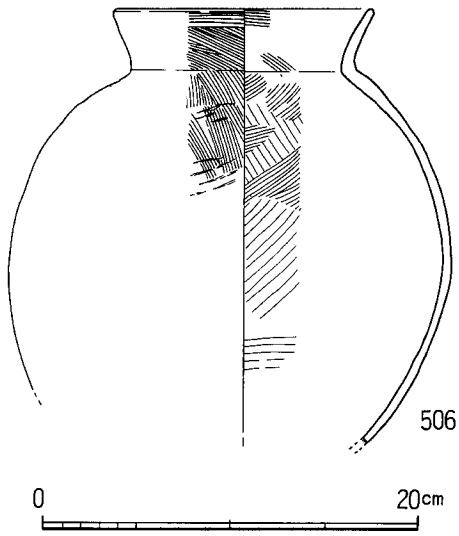


Fig. 130 SC－64出土土器実測図 (1/4)

甕形土器 (497～499)「く」字状に外反する口縁部に長胴形の胴部がつくもので、いずれもA I 類に属する。調整は内外面ともにハケ目。497は口径18.5cm。499は口径20.2cm、器高30.3cmで、底径5.2cmの平底がつく。

鉢形土器 (500・501) 500は口径16.5cm、器高7.1cm。体部は扁平な半球形で、口縁部は小さく直口する。調整は外面がハケ目後にナデ、内面がナデ仕上げである。G類に属する。501は素口縁の深手の鉢でF類に属する。胴部は半球形で、口縁部は直口して立ち上がる。端部は水平に整え、外方に小さくつまみ出す。口径16.8cm、器高10.3cmで凸レンズ状の底部がつく。

高坏 (502～504) いずれも大型の坏部にラッパ状に開く長めの脚がつくものでA類に属する。坏部は内弯ぎみに立ち上がり、口縁部は屈曲して外方に開く。502は口径24.6cm。口縁部は直線的にのび、平坦な端部は中央が凹む。503は口径24.6cm。平坦に整えた端部は外方に小さくつまみ出し、中央が僅かに凹む。調整は粗い研磨。504は口径23.8cm。底径14.4cm、器高18.6cm。口縁部は厚く、反りぎみに開く。脚部は長くラッパ状に開き、中位に円孔を穿つ。

釣針 (16) 基部を欠く資料で、長さ2.2cmを測る。針先は細身で、U字状に内弯した後に外方に長い返りをもつ。身の断面は方形をなす。

SC－62 (Fig.125 PL.31)

C－XI区に検出した住居址で、SC－65より南へ4mの距離にある。SC－67、SR－247・271と重複関係にあり、SR－247・271より古く、SC－67よりも新しい。平面形は南北4.33m、東西3.45mを測る隅丸長方形をなし、面積は14.9m²である。壁の遺存状況は比較的良好で高さは37

cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は平坦で僅かに南西側へ傾斜する。柱穴は5個あるが中央南北軸の2本が主柱穴と考えられる。

遺物は壺・甕・高坏とあるが量的には少ない。南西コーナーからは完形の大型有孔石錘が出土した。

出土遺物（Fig.126・127・129）

手捏ね土器（505）口径6.8cm、器高5.0cm。体部は内弯して立ち上がり、口縁部は小さく直口する。底部は尖底状で、小型の鉢形に類する。調整は内外面ともに指頭による押圧ナデ。D類に属する。

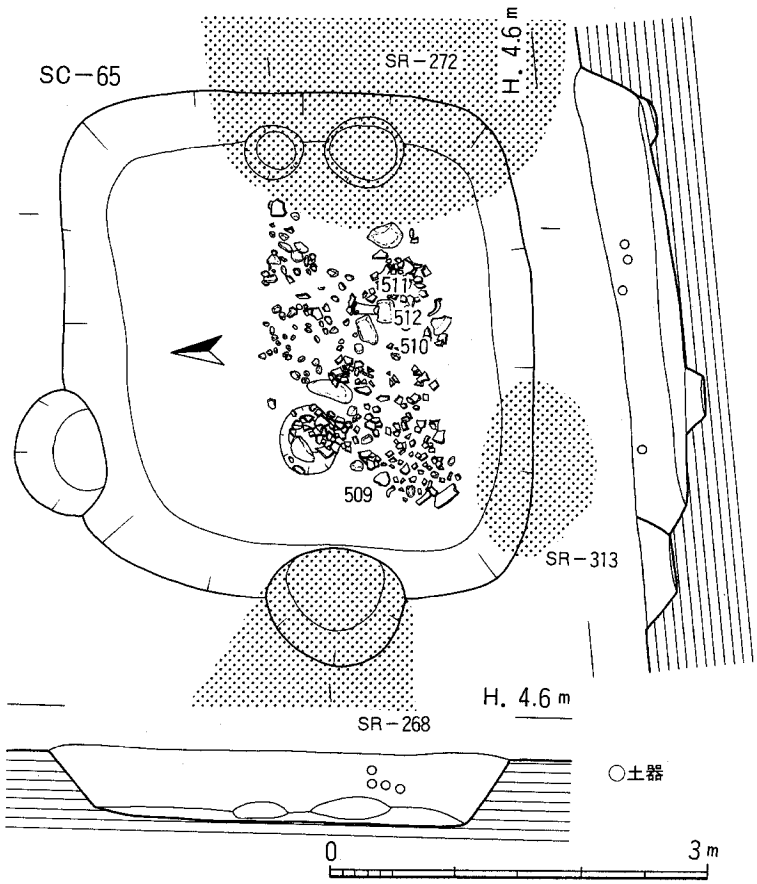


Fig. 131　SC－65実測図（1/60）

石剣（11）茎から身下半を欠く頁岩製磨製石剣である。身の中央部には明瞭な鎬が通り、断面は菱形を呈する。刃部は鋭利で丁寧に研磨されている。長さ7.5cm、幅3.4cm、厚さ1.0cm。

石錘（12）滑石製の大型有孔石錘である。形状は径13.5×12.7cmのほぼ円形で、中央部に内径2.3cmの円孔を穿つ。断面形は長円形で厚さは6.3cm。重さ1.72kg。円孔内および側縁部にはノミ状工具による粗い整形痕が残る。

SC－63（Fig.128　PL.32）

C－X区に検出した住居址で、SC－49より南へ3mの距離にある。SR－277と重複し古い。平面形は東西3.4m、南北3.3mを測る隅丸方形をなし、面積は11.3m²である。壁高は35cmを測り、ゆるく傾斜して立ち上がる。床面は平坦である。柱穴は壁際に5個あるがまとまらない。

遺物は弥生時代後期の壺・甕・鉢等があるが量的にはきわめて少ない。

SC－64(Fig.128　PL.32)

B－X区に検出した住居址で、SC－57より西へ5mの距離にある。平面形は南北3.57m、東

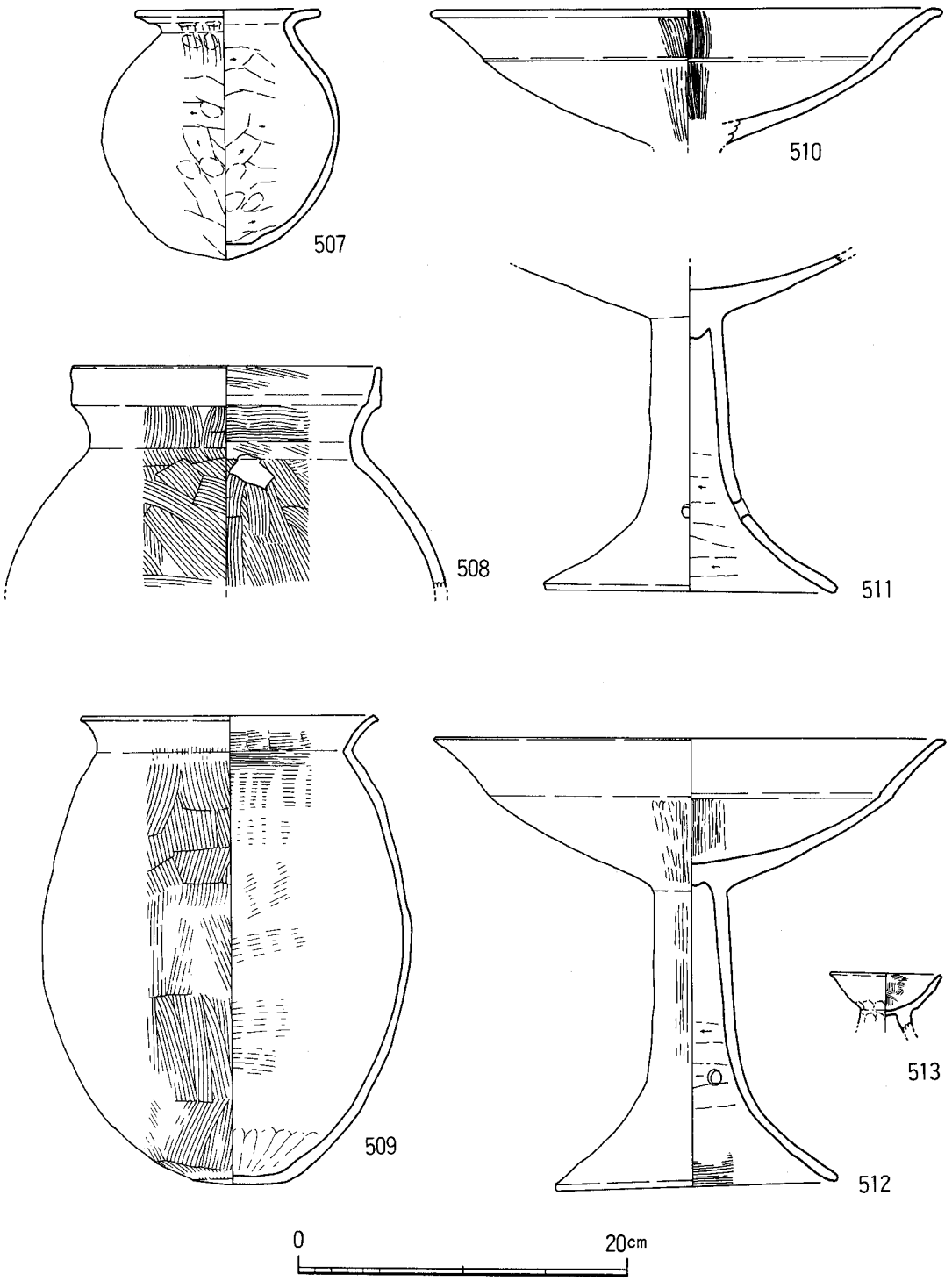


Fig. 132　SC－65出土土器実測図（1/4）

西3.37mを測る方形で、面積は12.1m²である。壁高は34cmを測り、ゆるく傾斜して立ち上がる。床面は平坦である。柱穴は中央やゝ北偏りにある2個を主柱穴とするものであろう。

遺物はほとんどなく、弥生時代後期の甕・鉢を出土した。

出土遺物 (Fig.130)

甕形土器(506)口径14.0cm。口縁部は「く」字状に外反し、胴部は肩のはった短胴の卵形をなすものでAII類に属する。内外面ともにハケ目調整で、胴部下半はナデ消して仕上げている。

SC－65(Fig.131 PL.33)

C－XI区に検出した住居址で、SC－50より西へ3mの距離にある。SR－268・272と重複関係にあり最も古い。平面形は東西が4.0m、南北が3.75mを測る隅丸方形で、面積は15m²である。壁の遺存状況は良く高さは54cmを測り、

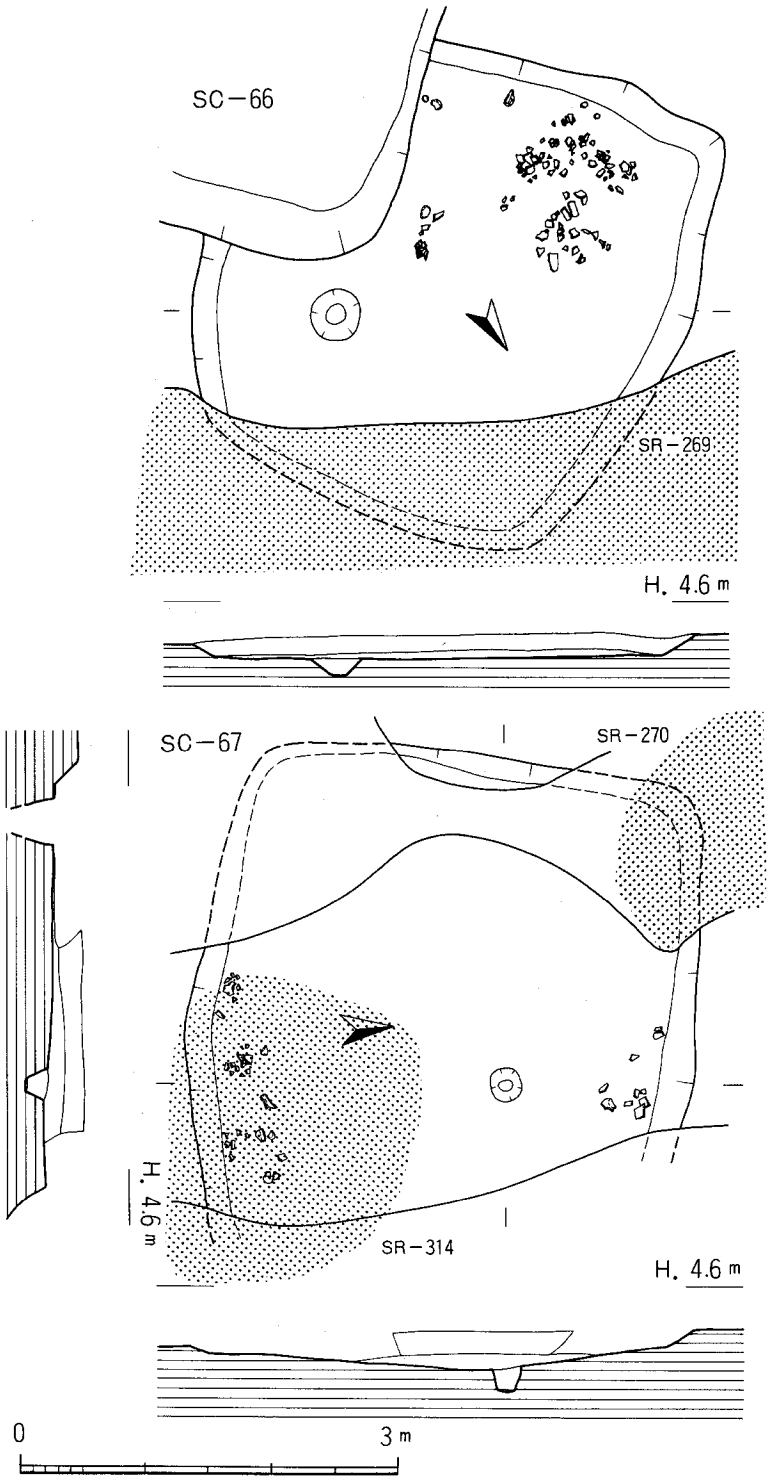


Fig. 133 SC－66・67実測図 (1/60)

急峻に立ち上がる。床面は浅い凹レンズ状である。柱穴は3個あり、東西軸の2個を主柱穴とする2本柱であろう。

遺物は壺・甕・高坏等があるが、量的には少ない。南壁際には人頭大の礫石4個を中心に小礫が床面より多少浮いた状況でまとまって検出された。礫間には炭が詰まり、礫も焼けているところから廃棄直後に石敷炉として使用されたものであろう。

出土遺物（Fig.132）

壺形土器（507・508）507は口径10.8cm、底径3.7cm、器高14.9cm。短く外反する「く」字状の口縁部は折り曲げるようにして内面を水平にする。胴部は肩のはった球形で、平底の底部がつく。EII類に属する。508は口径18.8cmの二重口縁壺で、AI類に属する。口縁部は短く「く」字状に外反して擬口縁をつくり、屈曲して短く直口する。端部は水平に整える。胴部は肩のはった卵形となろう。調整は内外面ともにハケ目。

甕形土器（509）口径18.

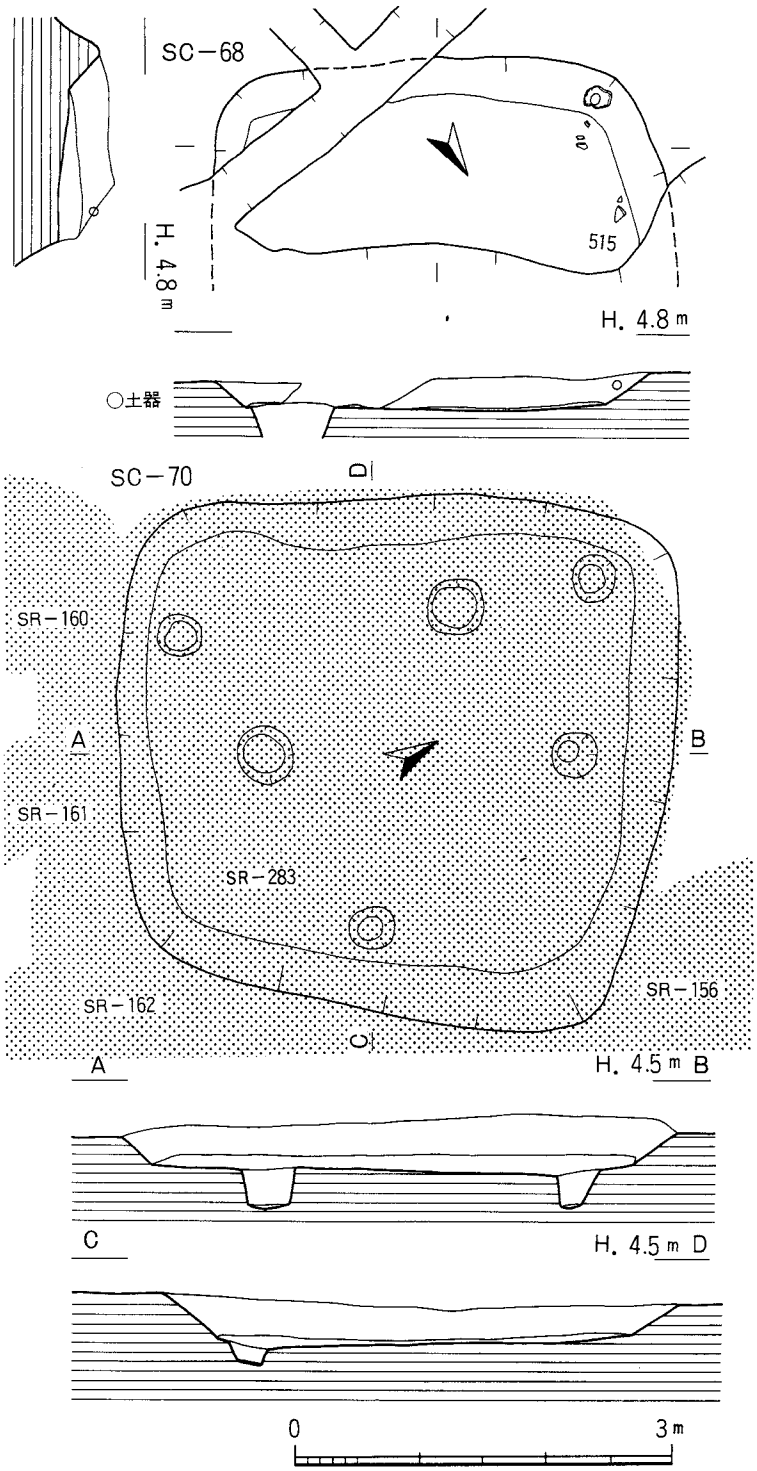


Fig. 134　SC－68・70実測図（1/60）

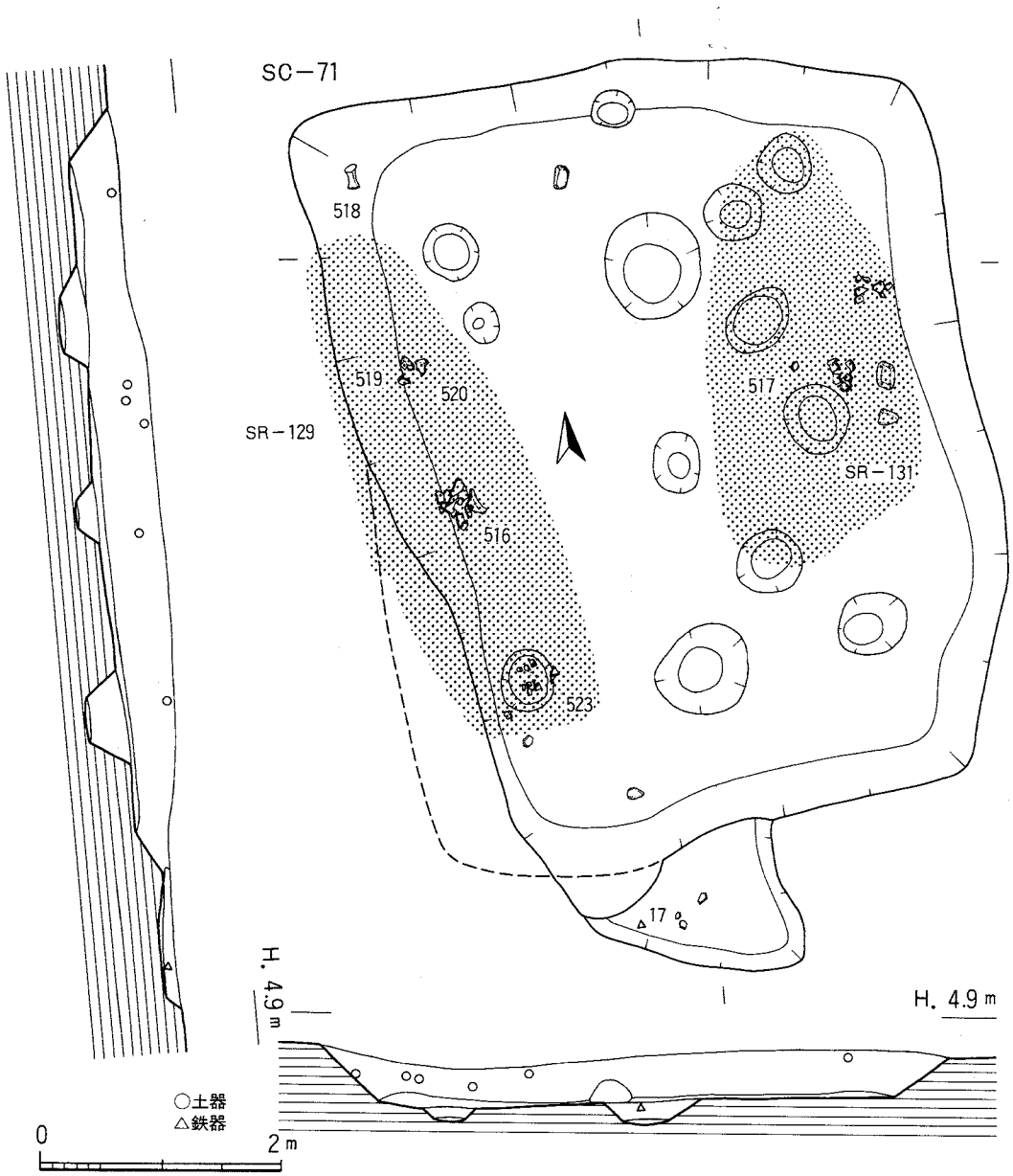


Fig. 135　SC－71実測図（1/60）

0cm、底径5.7cm、器高28.4cm。口縁部は短く「く」字状に外反するもので、ＡＩ類に属する。胴部は長めの卵形をなし、底部は凸レンズ状の平底である。調整は内外面ともにハケ目であるが、胴部内面は更にナデて仕上げる。

高坏（510～512）いずれも大型の坏に長くラッパ状に開く脚部がつくもので、A類に属する。510は口径30.0cm。体部は浅く内弯ぎみに立ち上がり、屈曲して反りぎみに開いた口縁部は外方につまみ出す。内外面ともに箆先状工具による暗文風の研磨調整を施している。511は底径17.

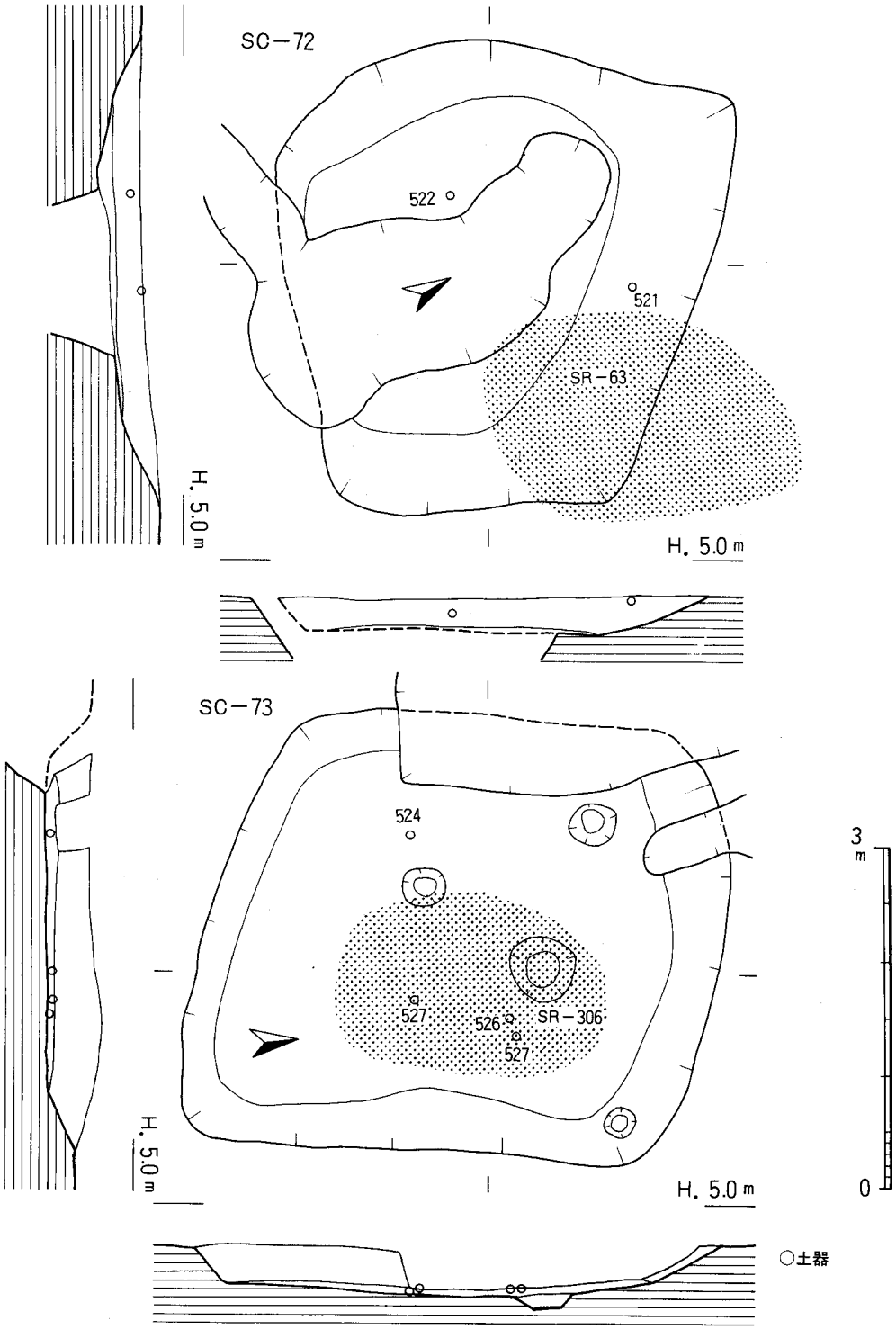


Fig. 136　SC－72・73実測図（1/60）

9cm。坏部は内弯ぎみに立ち上がる。脚部は柱状に細長く、裾部はラッパ状に開く。下位の屈曲部に円孔を穿つ。512は口径31.5cm、底径17.4cm、器高27.5cm。体部は内弯ぎみに立ち上がり、反りぎみに開いた口縁部は端部を水平に整え、外方に小さくつまみだす。脚部は柱状に細長く、裾部はラッパ状に開く。調整は外面と坏部内面が丁寧なナデ仕上げ。脚部内面はヘラケズリ・ハケ目。

器台(513)口径6.5cm。ラッパ状に開く脚部に盃状の受け部がつくもので、B類に属する。受け部は内弯ぎみに立ち上がり、口縁部は反りぎみになる。受け部は内外面ともにハケ目調整。

SC－66(Fig.133)

C－XI区に検出した住居址で、SC－59より東へ4mの距離にある。SK－106、SR－269と重複関係にあり最も古い。重複・削平により南西コーナーと東壁の一部を残すのみであるが、東西が4.1mを測り、平面形は方形になると推定される。壁高は21cmでゆるく傾斜して立ち上がり、床面は平坦である。柱穴は東壁側で1個検出された。

遺物は弥生時代後期の壺・甕・砥石等があるが、量的にはほとんど少ない。

SC－67(Fig.133　PL.33)

C－XI区に検出した住居址で、SC－65より南へ4mの距離にある。SC－62、SK－104、SR－270・314と重複関係にあり、最も古い。重複が著しいために北・南・西壁の一部を残すのみである。平面形は南北4.07mを測り、方形をなすものと推定される。壁高は24cmを測り、ゆるく傾斜して立ち上がる。床面は浅い凹レンズ状である。柱穴は精査したが中央北壁よりに1個検出したのみである。

遺物は弥生時代後期の壺・甕片があるが量的には少ない。

SC－68(Fig.134)

C－Xに検出した住居址で、SC－57の西へ6mの距離にあり、埋設管等により東半分は削平を受け消失している。平面形は東西が3.65mを測り、方形をなすものと推定される。壁高は30cmを測り、傾斜して立ち上がる。床面は浅い凹レンズ状である。柱穴は検出できなかった。

遺物は攪乱によるものかほとんどない。

出土遺物(Fig.137)

甕形土器(514)口径14.7cm。短く「く」字状に外反する口縁部に肩のはった卵形の胴部がつくもので、AII類に属する。全体に厚手。調整は外面と口縁部内面がハケ目で胴部内面はナデて仕上げている。

高坏(515)底径14.3cm。脚部は短く朝顔状に開くもので、上半部に円孔を穿つ。調整は外面と裾部内面がハケ目で、内面上半はナデて仕上げている。

SC－70(Fig.134)

B－XI区に検出した住居址で、SC－59の南西6mの距離にある。SR－156・162・283と重複

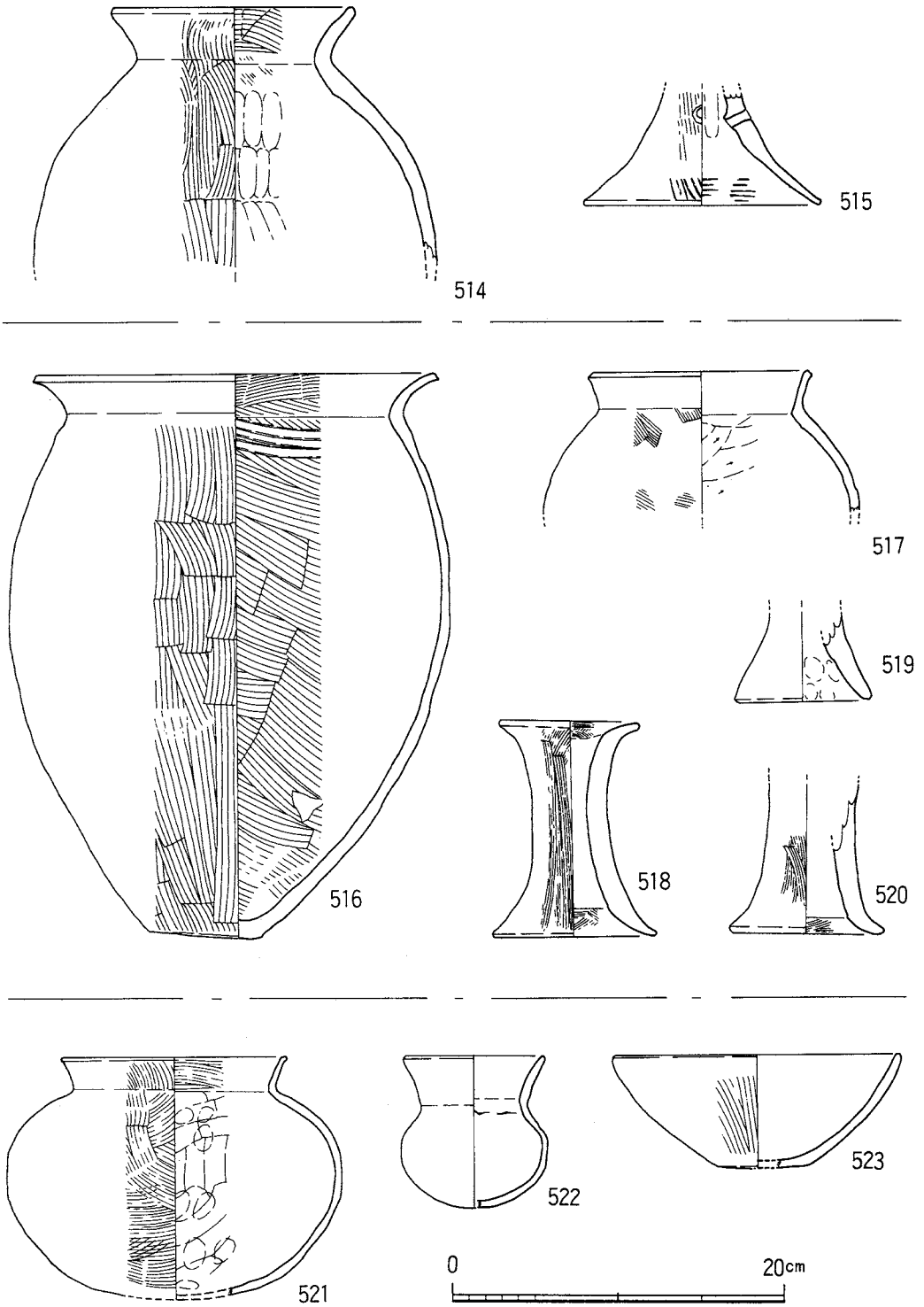


Fig. 137　SC－68・71・72出土土器実測図（1/4）

関係にあり、最も古い。平面形は南北4.4m、東西4.1mを測る隅丸方形をなし、面積は18.4m²である。壁の遺存状況は比較的良好で壁高は30cmを測り、ゆるく傾斜して立ち上がる。床面は浅い凹レンズ状である。柱穴は6個あるが、主柱穴は南北軸の2本柱である。住居址上面にはSR－283が一致して重なり、住居址埋没後の浅い凹みが炉として利用されたものであろう。

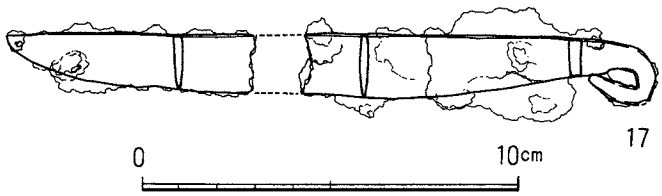


Fig. 138　SC－71出土鉄器実測図（1/2）

SC－71(Fig.135　PL.34)

E－Ⅷ区に検出した住居址で、SC－79のすぐ南1mの距離にあり、SR－129・131と重複関係にある。平面形は南北6.3m、東西5.2mを測る長方形をなし、面積は32.8m²である。壁の遺存状況は良好で高さ45cmを測り、傾斜して立ち上がる。床面は平坦で中央が浅く凹む。柱穴は13個あるが、中央南北軸の2個が主柱穴と考えられる。

遺物は東・西壁際で支脚等が出土したが、量的には少ない。

出土遺物（Fig.137・138）

甕形土器（516・517）516は口径23.6cm、底部6.6cm、器高34.0cm。口縁部は「く」字状に外反し、平坦に整えた端部は小さくつまみ出す。胴部は長胴の砲弾状をなし、平底の底部がつく。調整は口縁部外面がヨコナデの外は粗いハケ目。517は口径12.8cm。「く」字状の口縁部は短く直線的に開き、端部は平坦に整え僅かにつまみ出している。胴部は肩のはった短胴形のものであろう。AII類に属する。調整は外面がハケ目後にナデ、内面はヘラケズリ。

器台（518～520）いずれも受け部と脚裾部がラッパ状に開もので、A類に属する。519は口径8.4cm、底径9.9cm、器高13.0cm。受け部と裾部は短くラッパ状に開く。調整は外面がハケ目、内面はハケ目・ヘラケズリ。519は底径8.2cm。520は底径9.3cm。筒状の脚部は長めで、裾部は短く反りぎみに開く。調整は外面がハケ目、内面はハケ目・ヘラケズリ。

刀子（17）蕨手刀子で、身部の一部を欠損する。刃部は若干内反りぎみで、身幅は1.7cm。環は柄から水平にのばして下端に密着させるが、接着部は環端が柄に接するだけである。

SC－72(Fig.136)

E－Ⅷ区に検出した住居址で、SC－73のすぐ北にある。SR－63と重複関係にあり、床面の大半は攪乱を受けて消失している。東西軸は4.15mを測り、隅丸方形をなすものと推定される。壁面はゆるく傾斜して立ち上がり、壁高は30cmを測る。床面は浅い凹レンズ状である。柱穴は精査したが検出できなかった。

遺物は壺・甕が北壁に沿って僅かに残っていた。

出土遺物 (Fig.137)

壺形土器 (521・522) 521は口径13.0cm。口縁部は短く「く」字状に外反し、口縁部は小さくつまみ出す。胴部は肩の強くはった扁球形で、丸底の底部がつくものである。調整は外面と口縁部内面がハケ目、胴部内面がヘラケズリ。F類。522は口径8.6cm、器高9.1cmの小型壺である。「く」字状の口縁部はゆるく外反して開き、胴部はやゝ肩のはった扁球形をなす。BIII類に属する。調整は内外面ともにナデて仕上げている。

鉢形土器 (523) 口径17.3cm、底径5.6cm、器高6.9cm。素口縁の浅めの鉢でG類に属する。胴部は内弯ぎみに立ち上がり、口縁部は小さく直口する。底部は凸レンズ状の平底がつく。調整は外面がハケ目、内面は丁寧にナデて仕上げている。

SC－73(Fig.136)

E－IX区に検出した

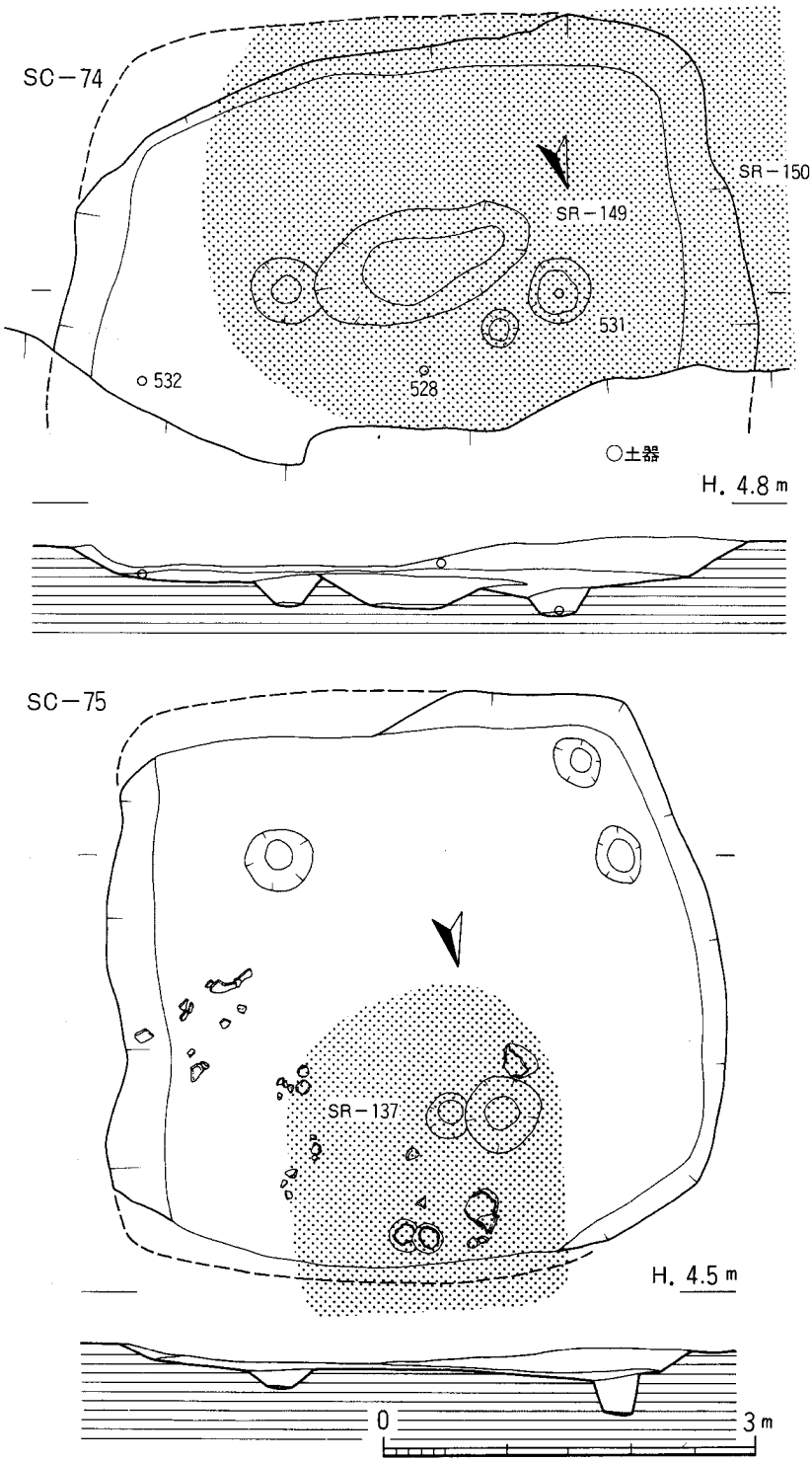


Fig. 139 SC－74・75実測図 (1/60)

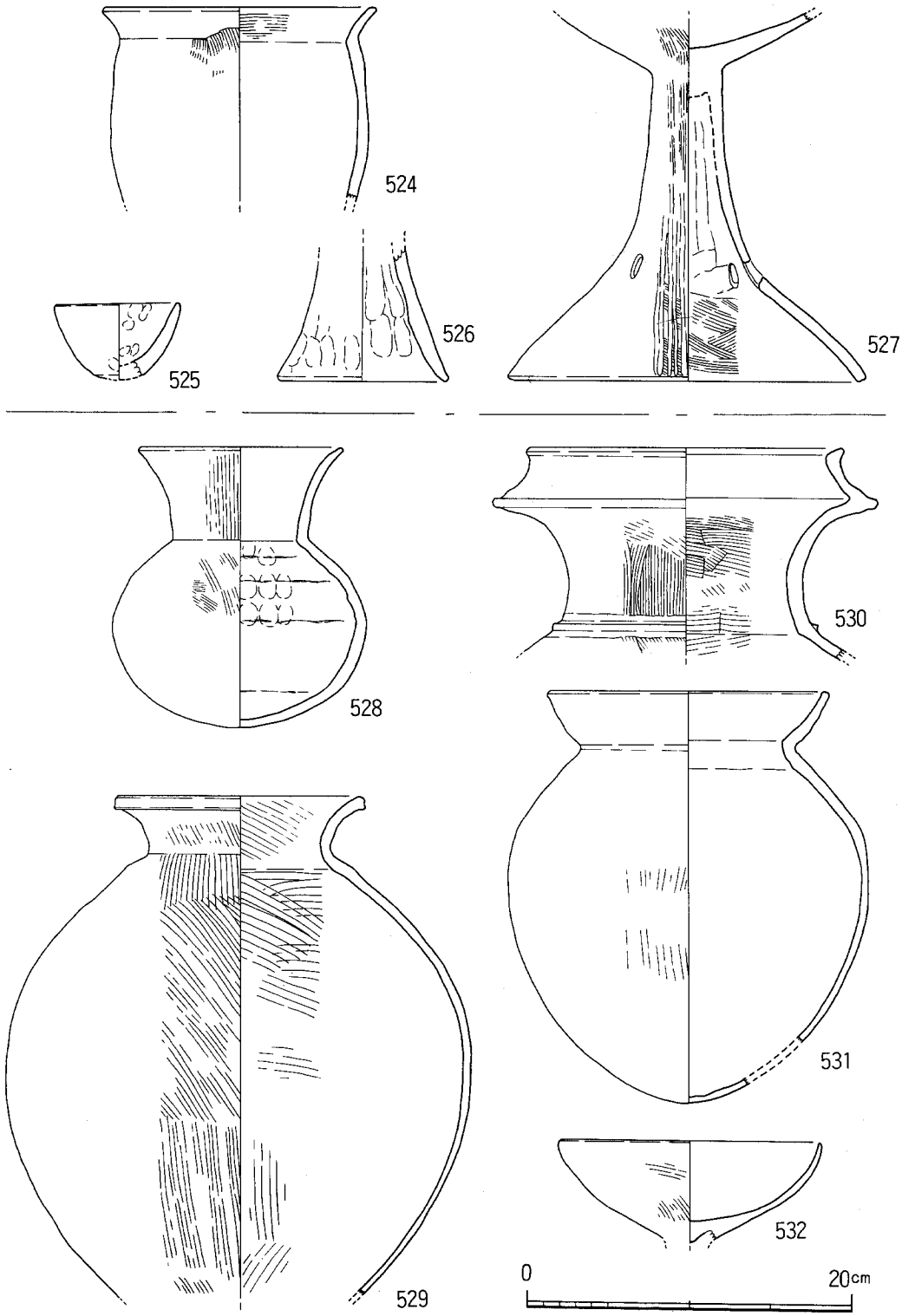


Fig. 140　SC－73・74出土土器実測図（1/4）

住居址で、SC－72のすぐ南にあり、砂丘尾根上に並ぶ。西壁は攪乱を受けて消失している。SR－306と重複関係にある。平面形は南北4.5m、東西3.88mを測る隅丸長方形をなし、面積は17.5m²である。壁面はゆるく傾斜して立ち上がり、壁高は45cmを測る。柱穴は精査したが3個しかなくまとまらない。

遺物は壺・甕・高坏等があり、中央部にまとまって出土した。甕片の中には籾圧痕のついたものもある。

出土遺物（Fig.140）

甕形土器（524）口径16.8cm。口縁部は「く」字状に短く外反するもので、AⅠ類に属する。胴部は卵形。調整は内外面ともにハケ目・ナデ。

高坏（527）大型の坏部をもち、脚部が長くラッパ状に開くものでA類に属する。底径21.9cm。ラッパ状の脚裾部は内弯ぎみに開き、屈曲する中位には円孔を穿つ。調整は外面がハケ目後にナデ、内面へラケズリ・ハケ目。

器台（526）底径10.5cm。脚部がラッパ状に開くものでA類に属する。

手捏ね土器（525）口径7.0cm、底径3.1cm、器高4.6cm。体部は厚く、内弯ぎみに開く。底部は凸レンズ状をなす。

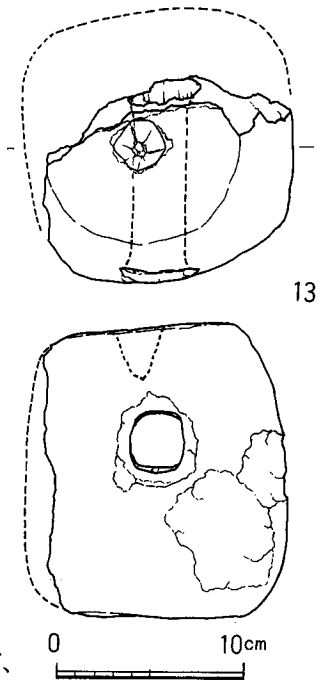


Fig. 141
SC－74出土石器実測図（1/4）

SC－74（Fig. 139）

D－Ⅸ区に検出した住居址で、SC－76より東へ2mの距離にありSR－149・150と重複関係にある。東西軸は5.58mを測り、

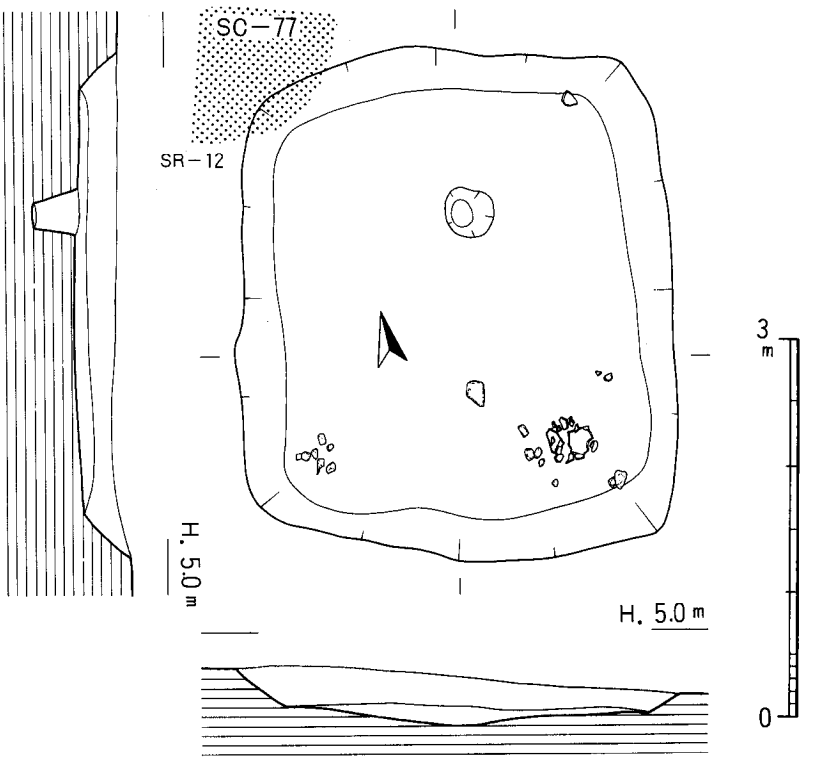


Fig. 142　SC－77実測図（1/60）

方形プランをなすものと推定される。壁高は29cmを測り、ゆるく傾斜して立ち上がる。床面は凹レンズ状である。主柱穴は東西軸ほぼ中央に並ぶ2本と考えられる。

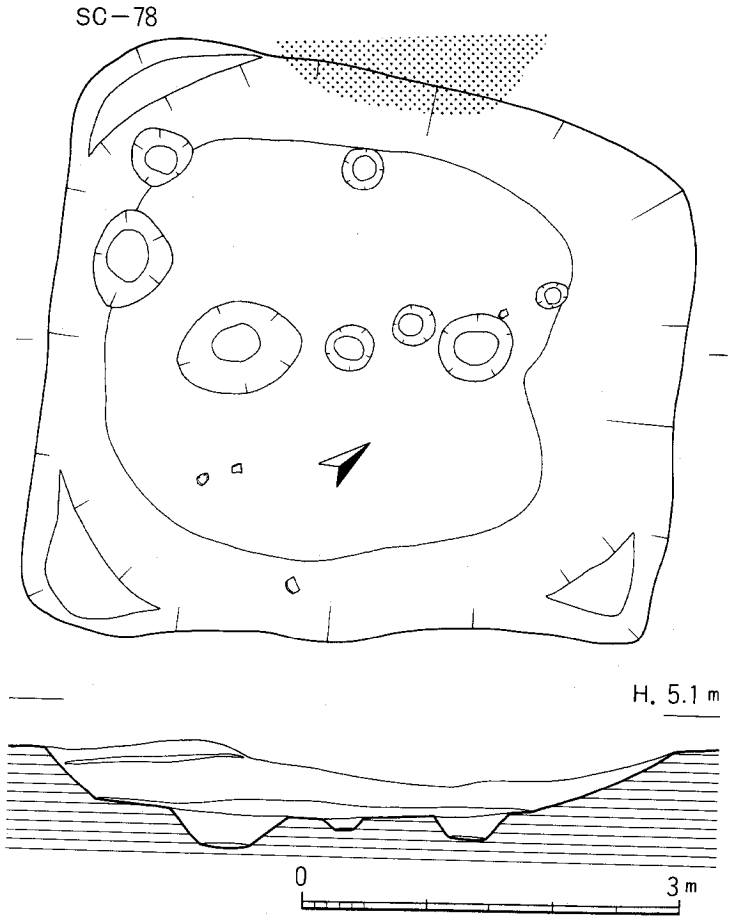


Fig. 143　SC－78実測図（1/60）

出土遺物（Fig.140・141）

壺形土器（528～530）528は口径12.2cm、器高17.2cm。「く」字状の口縁部は長く反りぎみに開き、扁球形の胴部がつくものでBⅠ類に属する。調整は外面がハケ目、内面はナデて仕上げている。529は口径15.0cm。口縁部は内傾ぎみに立ち上がった後に折れ曲がるように外反する。平坦に整えた端部は中央が凹み、外方に小さくつまみ出す。胴部は張りのつよい卵形をなすもので、EⅠ類に属する。調整は内外面ともに粗いハケ目。530は口径19.0cmの二重口縁壺で、AⅠ類のものである。口縁部は朝顔状に開いて鋭く反りぎみに内傾し、端部は直口してつまみ出す。頸部に三角凸帯が1条巡る。調整は内外面ともにハケ目。

甕形土器（531）口径17.4cm、器高25.4cm。布留系のものでAⅣ類に属する。「く」字状の口縁部は内弯ぎみに開く。胴部は肩のはった卵形で、底部は尖底になる。

高坏（532）口径16.1cm。体部は扁平な半球形で、口縁部は小さく直口する。調整は外面がハケ目後にナデ、内面は粗い研磨。

石錘（13）滑石製の大型有孔石錘で1/3ほどを欠く。形状は径約14cmの隅丸方形に近い円形で、断面形も側縁部がやや膨らんで方形を呈する。厚さは15.0～15.7cm。側縁部の中央よりやや上方に内径2.9cmの円孔を横方向に穿つ。上面にも内径2.7cmの円孔があるが2.6cmの深さで途絶えている。本遺跡出土の大型有孔石錘中で側縁に横方向に円孔を穿つただ1点の資料である。重さ2.98kg。

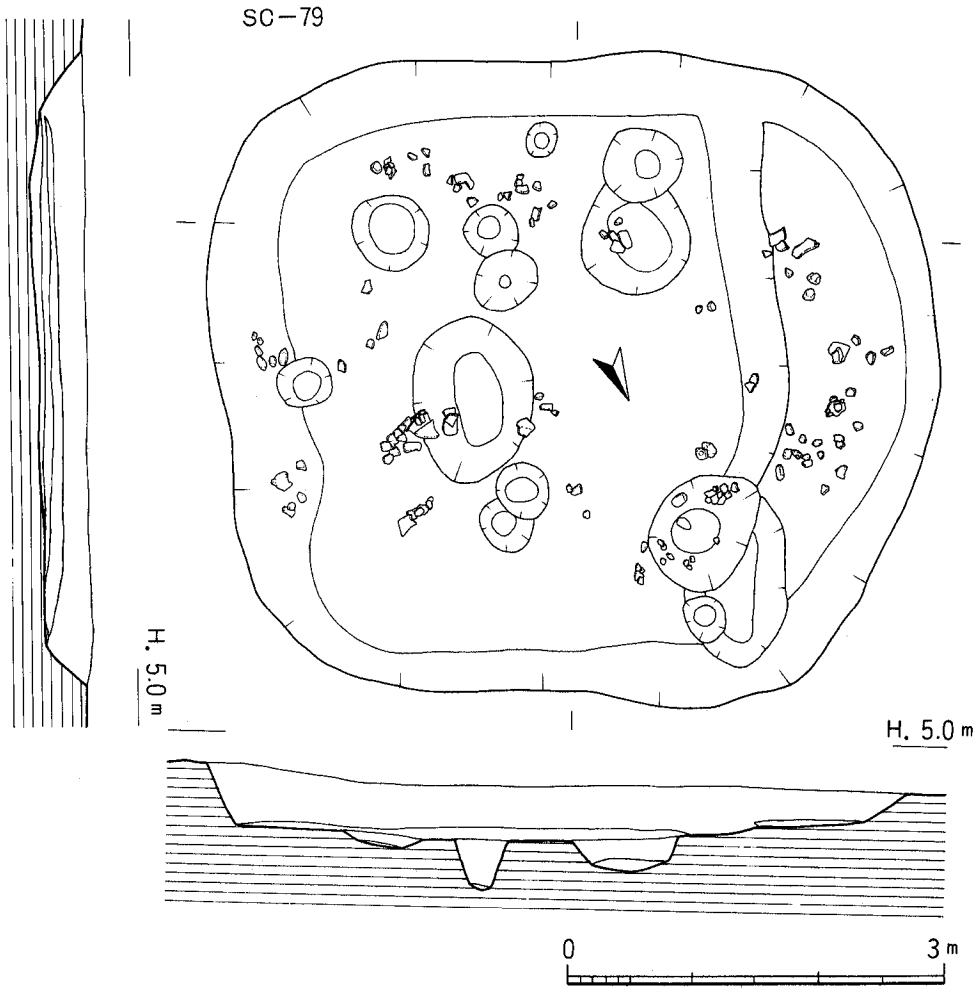


Fig. 144　SC－79実測図（1/60）

SC－75(Fig.139)

D－Ⅶ・Ⅷ区に検出した住居址で、砂丘尾根の西斜面上にあり、SK－86、SR－137と重複関係にあり著しい削平を受けている。SC－79より西へ15mの距離にある。平面形は東西4.9m、南北5.15mの隅丸方形になると推定される。壁高は25cmを測り、ゆるく傾斜して立ち上がる。床面は凹レンズ状である。

遺物は、削平を受けているために少ない。

SC－76

D－Ⅸ区に検出した住居址で、SC－74の西1mの距離にある。SR－148・176と重複関係にあり、著しく削平を受けている。平面形は西壁をコーナーを僅かに残すのみで全容は知りえない。壁高は18cmを測り、ゆるく傾斜して立ち上がる。床面は平坦である。

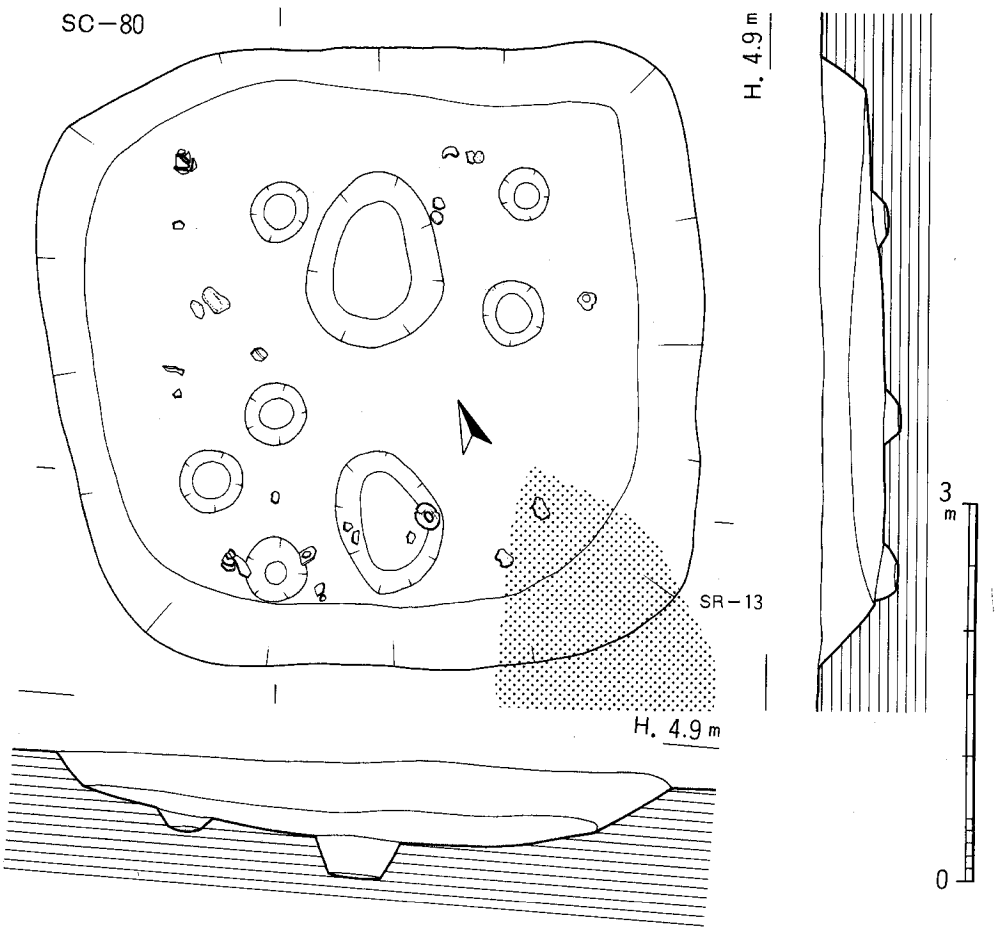


Fig. 145　SC－80実測図（1/60）

SC－77(Fig.142)

E－Ⅶ区に検出した住居址で、SC－81より東へ２ｍの距離にある。平面形は南北4.03ｍ、東西3.50ｍを測る隅丸方形をなし、面積は14.1m²である。壁高は30cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は平坦で中央が浅く凹む。柱穴は精査したにもかかわらず１個しか検出できなかったが、長軸筋に２本の主柱穴をもつものと考えられる。

遺物は壺・甕があるが、量的には少ない。

SC－78(Fig.143)

E－Ⅷ区に検出した住居址で、SC－79より北東へ２ｍの距離にある。平面形は南北5.05ｍ、東西4.60ｍを測る長方形をなし、面積は23.3m²である。壁高は50cmを測りゆるく傾斜して立ち上がる。床面は浅い凹レンズ状である。北西隅を除く３カ所のコーナーには三角形の小さなフラット面がある。柱穴は９個あるが中央部長軸に並び南北軸を柱筋とするものと考えられる。

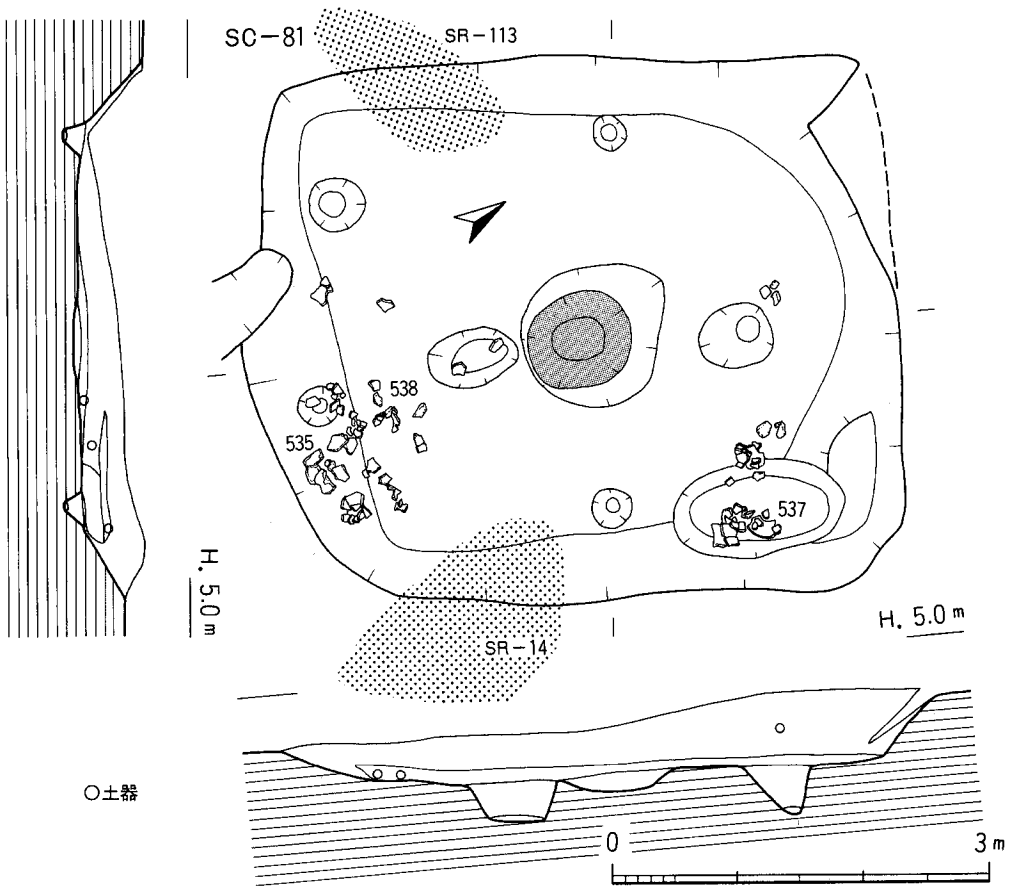


Fig. 146　SC－81実測図（1/60）

遺物は全域に分布するが上層に浮いている。

SC－79(Fig.144　PL.34)

E－Ⅷ区に検出した住居址で、SC－71のすぐ北１ｍの距離にある。平面形は東西5.75ｍ、南北5.02ｍを測り、西壁の張り出した隅丸方形をなし、面積は28.9㎡である。壁の遺存状況は比較的良好で高さ45cmを測りゆるく傾斜して立ち上がる。床面は平坦であるが、東側に傾斜する。張り出した西壁側には幅90cm、高さ10cmのベット状遺構がある。中央部東偏りと北西壁隅に楕円形土壙がある。柱穴は10個あるが、柱穴としてはまとまらない。

遺物は壺・甕等が出土しているが量的には少ない。

SC－80(Fig.145　PL.35)

E－Ⅶ区に検出した住居址で、砂丘尾根上に南北に並ぶ住居址群中で最北端に位置する。SC－81より北へ６ｍの距離にある。SR－13と重複する。平面形は東西5.22ｍ、南北4.93ｍを測る隅丸方形をなし、面積は25.8㎡である。壁高は43cmを測りゆるく傾斜して立ち上がる。床面は浅

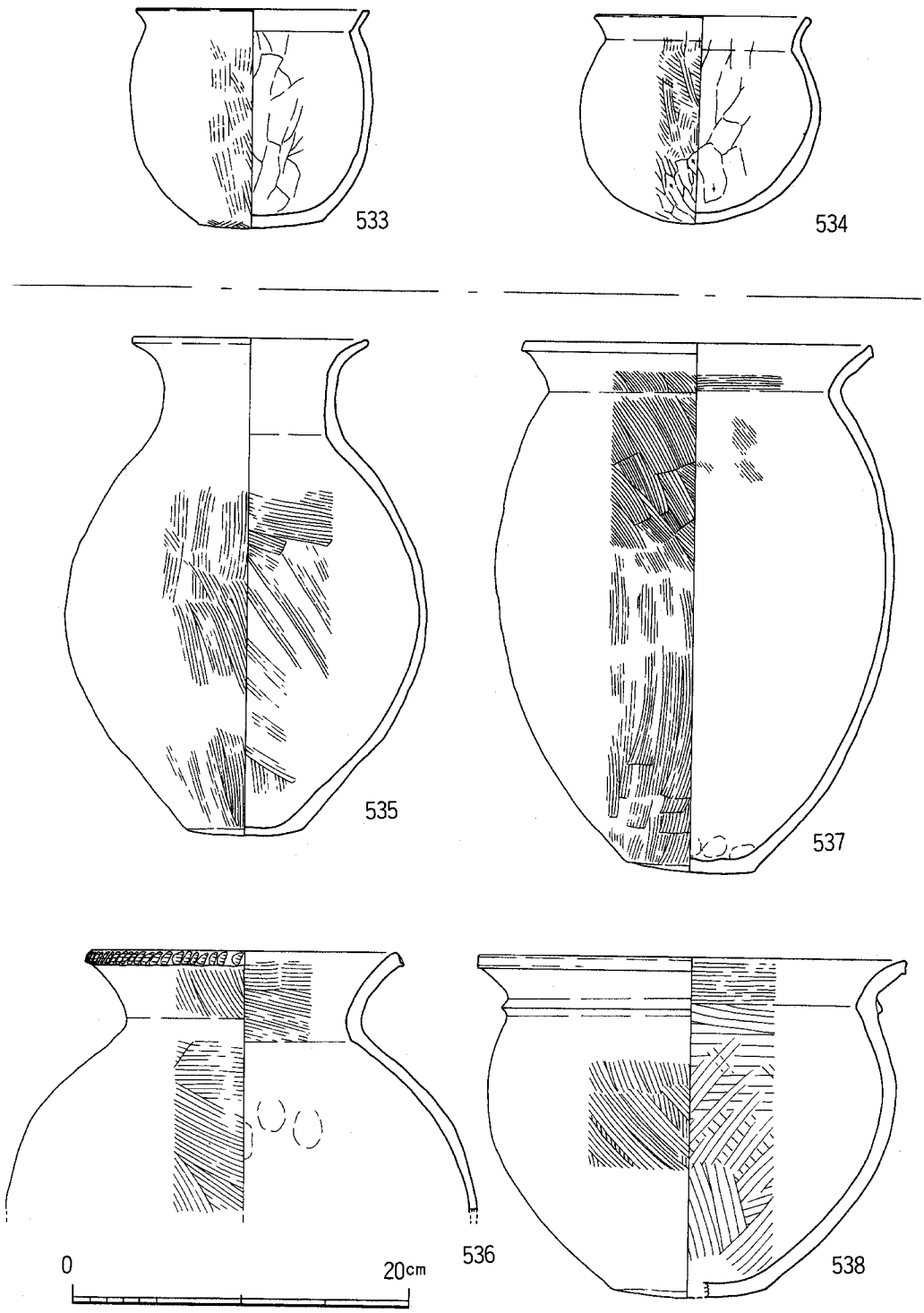


Fig. 147　SC－80・81出土土器実測図（1/4）

い凹レンズ状である。柱穴は東南隅を除いて6個あり、主柱穴は4本柱と考えられる。中央部北偏りと南壁際には楕円形の土壙がある。

遺物は全域に散らばるが量的には少ない。

出土遺物 (Fig.147)

甕形土器 (533・534) 533は口径13.6cm、底径7.3cm、器高13.0cm。「く」字状の口縁部は短く直線的に開く。胴部は下張れの短胴形で、平底の底部がつく。調整は外面がハケ目、内面はヘラケズリ。534は口径12.3cm、器高12.5cm。口縁部は短く「く」字状に外反する。胴部は球形をなす。調整は口縁部は内外がヨコナデ、胴部外面上半がハケ目、ほかはヘラケズリ。

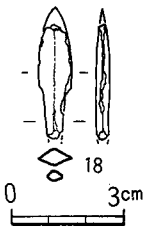


Fig. 148 SC−81 出土銅鏃実測図 (1/2)

SC−81(Fig.146 PL.35)

E−Ⅶ区に検出した住居址で、SC−80より南へ6mの距離にあり、SR−14・113と重複し最も古い。平面形は東西5.20m、南北4.35mを測る長方形をなし、面積は22.6m²である。壁の遺存状況は比較的良好で高さ55cmを測り、ゆるく傾斜して立ち上がる。床面は浅い凹レンズ状である。北東部コーナーに幅35cmのフラットな面があり、ベット状遺構の名残りかと思われる。柱穴は中央東西軸の2本が主柱穴となるもので、南北軸の小柱穴は補助柱となるものであろうか。中央の主柱穴間に炉址をもつ。炉は径110cmの円形で浅く凹み、炭層のみが堆積していた。北西部コーナー壁面に平行して135×75cmの浅い楕円形土壙がある。

遺物は弥生時代後期の壺・甕が北壁際から出土したが量的には少ない。

出土遺物 (Fig.147・148)

壺形土器 (535・536) 535は口径14.0cm、底径7.1cm、器高29.6cm。口縁部は直口して立ち上がった後に短く外反する。胴部はナデ肩の長胴形で、平底の底部がつくものである。EⅡ類に属する。調整は口縁部内外面はナデ、胴部は内外面ともにハケ目。536は口径19.0cm。口縁部は短く直口した後に大きく外反する。平坦に整えた端部には刻目を施し、外方に小さくつまみ出す。調整は口縁部内外と胴部外面がハケ目、胴部内面はナデ。

甕形土器 (537) 口径20.4cm、底径7.7cm、器高31.4cm。口縁部は短く「く」字状に外反し、端部は平坦に整えている。胴部は長胴形をなし、凸レンズ状の平底がつく。調整は外面がハケ目、内面はハケ目後ナデて仕上げている。AI類。

鉢形土器 (538) 口径25.5cm、底径9.2cm、器高20.2cm、口縁部が「く」字状に短く外反する深手のもので、A類に属する。口縁端部は平坦で、外方に小さくつまみ出し中央が僅かに凹む。頸部には三角凸帯が1条巡る。胴部は半球形で、凸レンズ状の底部がつく。調整は内外面ともにハケ目。

銅鏃 (18) 有茎鏑造腸抉柳葉式に属するもので切先と茎端部を欠く。長さ3.0cm、身幅は9mmを測り、茎部は短い。

(2) 土壙

土壙は古砂丘尾根北端のE－V区を北限として調査区全域に亘って分布し、総計120基を検出した。その立地は竪穴住居址のあり方と差異なく、概ね古砂丘尾根上のものと東側緩斜面上のものとに大別される。これらの土壙は数基からなる小単位の群を作りながらも、竪穴住居址と隔絶した距離に存在するものは少なく、竪穴住居址群に付随するかのようなあり方を示す。殊に古砂丘尾根上の土壙は赤褐色砂を取り除いた下層より検出したものがほとんどを占める。

また、これらの土壙はその形状から円形～楕円形のものと、方形～長方形のものとに二大別され、それが直ちに時期差を示すものとは云い難い。しかし、方形・長方形の土壙は古砂丘尾根南半部を中心に分布し、竪穴住居址に隣接して位置し、出土遺物は少ないながらもそれにほとんど一致するものであることから、竪穴住居址群に付随する施設であったろうことは推測するには難くない。円形～楕円形土壙の一部をのぞきほとんどは出土遺物も少なく、時期や性格を明確に決定しえるものは少ないが、あり方からして方形、長方形土壙のそれと同様に考えても大過ないだろう。

SK－01 (Fig.149)

平面形は長軸195cm、短軸181cmを測る隅丸方形の土壙で、深さは67cmを測る。断面形は舟底状をなし、壁面は比較的急に立ち上がる。

SK－02 (Fig.149)

平面形は長軸327cm、短軸142cmを測る不整長方形の土壙で、深さは40cmを測る。断面形は皿状をなすが、東側はわずかに凹み、壁面は緩傾斜する。

SK－03 (Fig.149)

E－XI区に検出した土壙で、SC－10より北へ4mの距離にある。平面形は長軸213cm＋α、短軸132cmの不整楕円形で、長軸方向をN－35°－Eにとる。深さは18cmを測り、断面形は浅いレンズ状をなす。

出土遺物 (Fig.159)

壺形土器 (540) 口縁部がラッパ状に開く長頸壺で、C類に属する。胴部は肩のはった扁球形をなす。

SK－04 (Fig.149)

E－XI区に検出した土壙で、SC－10より北へ5mの距離にある。平面形は長軸103cm、短軸72cmの楕円形で、長軸方向をN－90°－Wにとる。深さは26cmを測り、断面形は摺鉢状をなす。

SK－05 (Fig.149)

E－XI区に検出した土壙で、SC－10より北へ3mの距離にある。平面形は長軸136cm、短軸92cmの楕円形で、長軸方向をN－6°30′－Eにとる。深さは62cmを測り、断面形は緩傾斜する。

SK－06 (Fig.149)

E－XI区に検出した土壙で、SC－21より南へ6mの距離にある。平面形は長軸122cm＋α、短軸74cmの不整楕円形で長軸方向をN－67°－Wにとる。深さは40cmを測り、断面形は舟底状をなす。

SK－07（Fig.149）

E－XII区に検出した土壙で、SC－10より南へ1mの距離にある。平面形は長軸96cm、短軸75cmの楕円形で、長軸方向をN－65°－Wにとる。深さは48cmを測り、断面形は皿状をなす。壁面は急傾斜する。

SK－08（Fig.149）

E－XI区に検出した土壙で、SC－10の北西隅ある。平面形は長軸104cm、短軸95cmの円形で、長軸方向をN－85°－Wにとる。深さは40cmを測り、断面形は舟底状をなす。

SK－09（Fig.149）

E－XI区に検出した土壙で、SC－10と重複する。平面形は長軸122cm、短軸112cmの不整円形で、長軸方向をN－8°－Wにとる。深さは60cmを測り、断面形は逆梯状で壁面は急傾斜する。

SK－10（Fig.149）

F－XI区に検出した土壙で、SC－02の南1mの距離にある。平面形は長軸92cm、短軸58cmの楕円形で、長軸方向をN－33°－Eにとる。深さは30cmを測り、断面形は舟底状をなす。壁面は緩傾斜する。

SK－11（Fig.149）

E－XI区に検出した土壙で、ST－01より北へ1mの距離にある。SC－08と重複関係にあり、SC－08より新しい。平面形は長軸194cm、短軸134cmの不整方形で、長軸方向をN－64°－Wにとる。深さは18cmを測り、断面形は皿状をなす。

SK－12（Fig.149　PL.36）

F－XI区に検出した土壙で、SC－07・09と重複関係にあり、この中では最も新しい。平面形は長軸191cm、短軸125cmの楕円形で、長軸方向をN－9°30′－Eにとる。深さは38cmを測り、断面形は舟底状をなす。南壁際より2枚重ねの須恵器蓋が裏返しの状態で出土した。

出土遺物（Fig.12）

須恵器坏蓋（559・560）いずれも身受けの反りが小さく、天井部が低い。560には外面にヘラ記号がある。

SK－13（Fig.149）

E－XII区に検出した土壙で、SC－10より西へ3mの距離にある。平面形は長軸152cm、短軸98cmの不整楕円形で、長軸方向をN－9°－Eにとる。深さは54cmを測り、断面形は皿状をなす。

SK－14（Fig.150）

E－XII区に検出した土壙で、ST－01に切られ土壙内は古墳の葺石が充満している。平面形は

長軸335cm、短軸140cm＋αの長方形で、長軸方向をN－78°－Eにとる。深さは30cmを測り、断面形は皿状をなす。

SK－15（Fig.149）

E－X区に検出した土壙で、SC－23の東4mに位置する。平面形は長軸179cm、短軸178cmの円形で、長軸方向をN－80°－Eにとる。深さは62cmを測り、断面形は舟底状をなす。西側上面には石組があり、周囲が赤変していることから、石組炉と考えられる。

SK－16（Fig.150）

F－X区に検出した土壙で、SK－15の東2mに位置する。平面形は長軸70cm、短軸58cmの円形で、長軸方向をN－9°30′－Wにとる。深さは16cmを測り、断面形は浅い皿状をなす。

SK－17（Fig.150）

F－X区に検出した土壙で、SC－23の東1mに隣接している。平面形は長軸94cm、短軸91cmの円形で、長軸方向をN－80°－Wにとる。深さは26cmを測り、断面形は浅い皿状をなす。

SK－18（Fig.150）

F－X区に検出した土壙で、SC－23、SK－19と重複関係にあり、この中で最も新しい。平面形は長軸218cm、短軸176cmの不整円形で、長軸方向をN－70°－Wにとる。深さは40cmを測り、断面形は舟底状をなす。壁面は緩傾斜する。

SK－19（Fig.150）

F－X区に検出した土壙で、SC－23より新しく、SK－18より古い。平面形は長軸278cm＋α、短軸230cmの楕円形で、長軸方向をN－70°－Wにとる。深さは38cmを測り、断面形は皿状をなす。

SK－20（Fig.150）

E－X区に検出した土壙で、SC－23より西へ3mの距離にある。平面形は長軸67cm、短軸63cmの小円形で、長軸方向をN－6°40′－Wにとる。深さは34cmを測り、断面形は舟底状をなす。

SK－21（Fig.150）

E－X区に検出した土壙で、SC－21と重複関係にありSC－21よりも新しい。平面形は長軸86cm、短軸84cmの円形で、長軸方向をN－80°40′－Eにとる。深さは12cmを測り、断面形は浅い皿状。

SK－22（Fig.150）

E－X区に検出した土壙で、SC－21と重複関係にあり、これよりも新しい。平面形は長軸90cm、短軸71cmの楕円形で、長軸方向をN－29°－Eにとる。深さは20cmを測り、断面形は浅い皿状。

SK－23（Fig.150）

E－X区に検出した土壙で、SC－21と重複関係にありSC－21より新しい。平面形は長軸98cm、

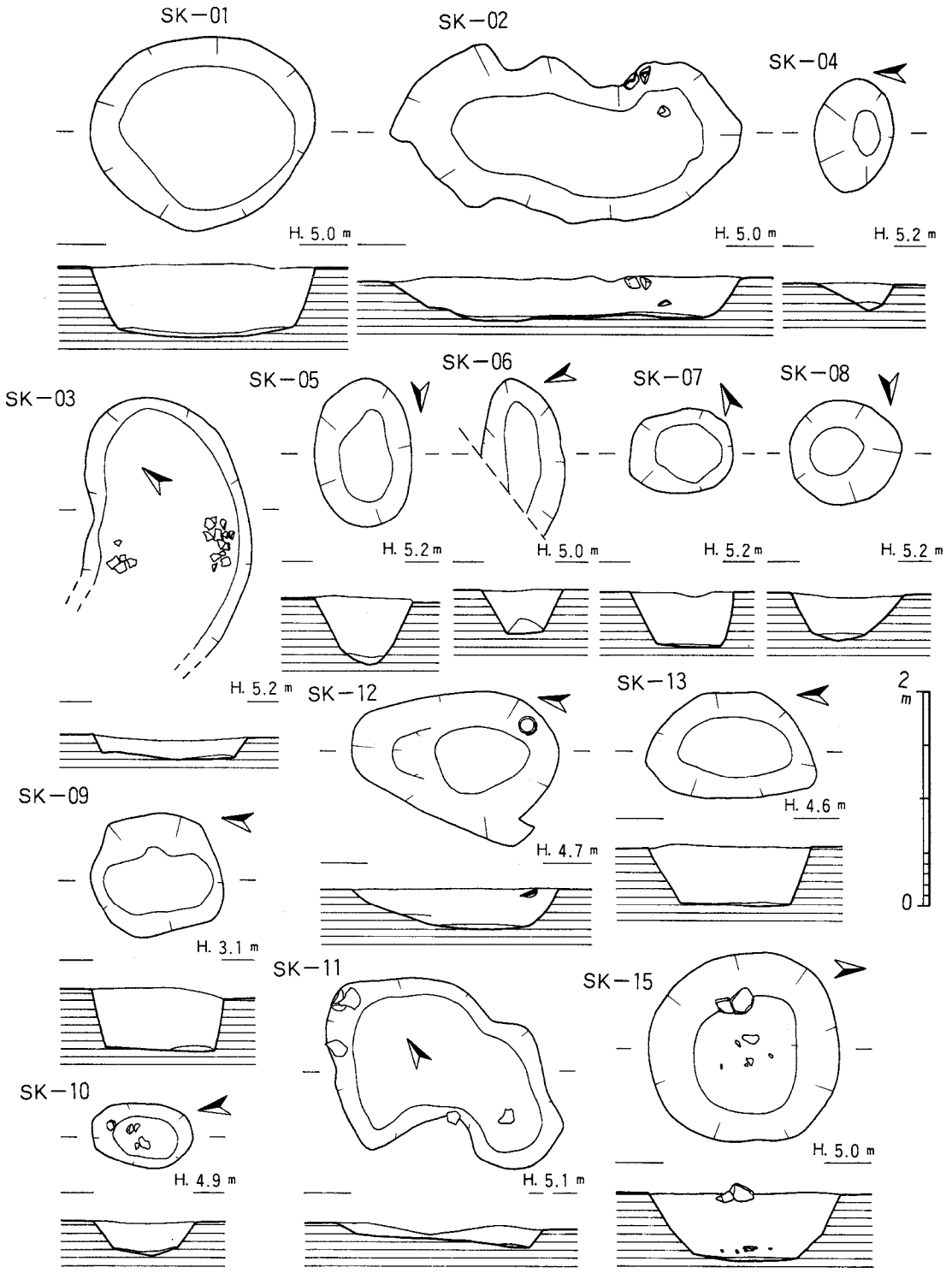


Fig. 149 SK実測図(1) (1/60)

短軸86cmの不整長方形で、長軸方向をN－29°－Eにとる。深さは10cmを測り断面形は浅い皿状。

SK－24 (Fig.150)

F－X区に検出した土壙で、SC－23と重複する。平面形は長軸60cm、短軸54cmの小円形で、長軸方向をN－38°30′－Eにとる。断面形は皿状で深さは13cmを測る。

SK－25 (Fig.150)

E－Ⅸ区に検出した土壙で、SC－22の東1mの距離にある。平面形は長軸74cm＋α、短軸74cmの円形で、長軸方向をN－50°30′－Eにとる。深さは22cmを測り、断面形は舟底状をなす。

SK－26 (Fig.150)

E－Ⅸ区に検出した土壙で、SC－22より南へ5mの距離にあり、SK－27・33と隣接する。平面形は長軸103cm、短軸102cmの円形で、長軸方向をN－70°10′－Eにとる。断面形は舟底状をなし。深さは38cmを測る。

SK－27 (Fig.150)

E－Ⅸ区に検出した土壙で、SC－22の南6mにあり、SK－26に接する。平面形は長軸104cm、短軸90cmの楕円形で、長軸方向をN－26°－Wにとる。深さは25cmを測り、断面形はレンズ状をなす。

SK－28 (Fig.150)

平面形は長軸262cm、短軸227cmを測る隅丸方形の土壙で、深さは33cmを測り、断面形は舟底状をなす。

出土遺物 (Fig.160)

甕形土器 (548)「く」字状に反応する口縁部をもち、AI類に属する。口径16.6cm。

SK－29 (Fig.150)

F－Ⅸ区に検出した土壙で、SC－19より南へ4mの距離にある。SK－34と重複関係にあり、これよりも新しい。平面形は長軸141cm、短軸94cmの楕円形で、長軸方向をN－52°－Wにとる。深さは40cmを測り、断面形は舟底状をなす。壁面は急傾斜する。

SK－32 (Fig.151)

E－Ⅸ区に検出した土壙で、SC－22より南東へ1.5mの距離にある。平面形は長軸203cm、短軸120cmの隅丸方形で、長軸方向をN－42°－Eにとる。深さは36cmを測り、断面形は皿状をなす。壁面は緩傾斜する。

出土遺物 (Fig.163)

鉋 (19) 長さ14.3cm、身幅8mmを測る。外面には目の細かいものと粗い布目痕が残り、2種類の布にまいて埋納されたものである。刃部は錆のために不明瞭であるがわずかにV字状になり、身は長方形をなす。

SK－33 (Fig.151)

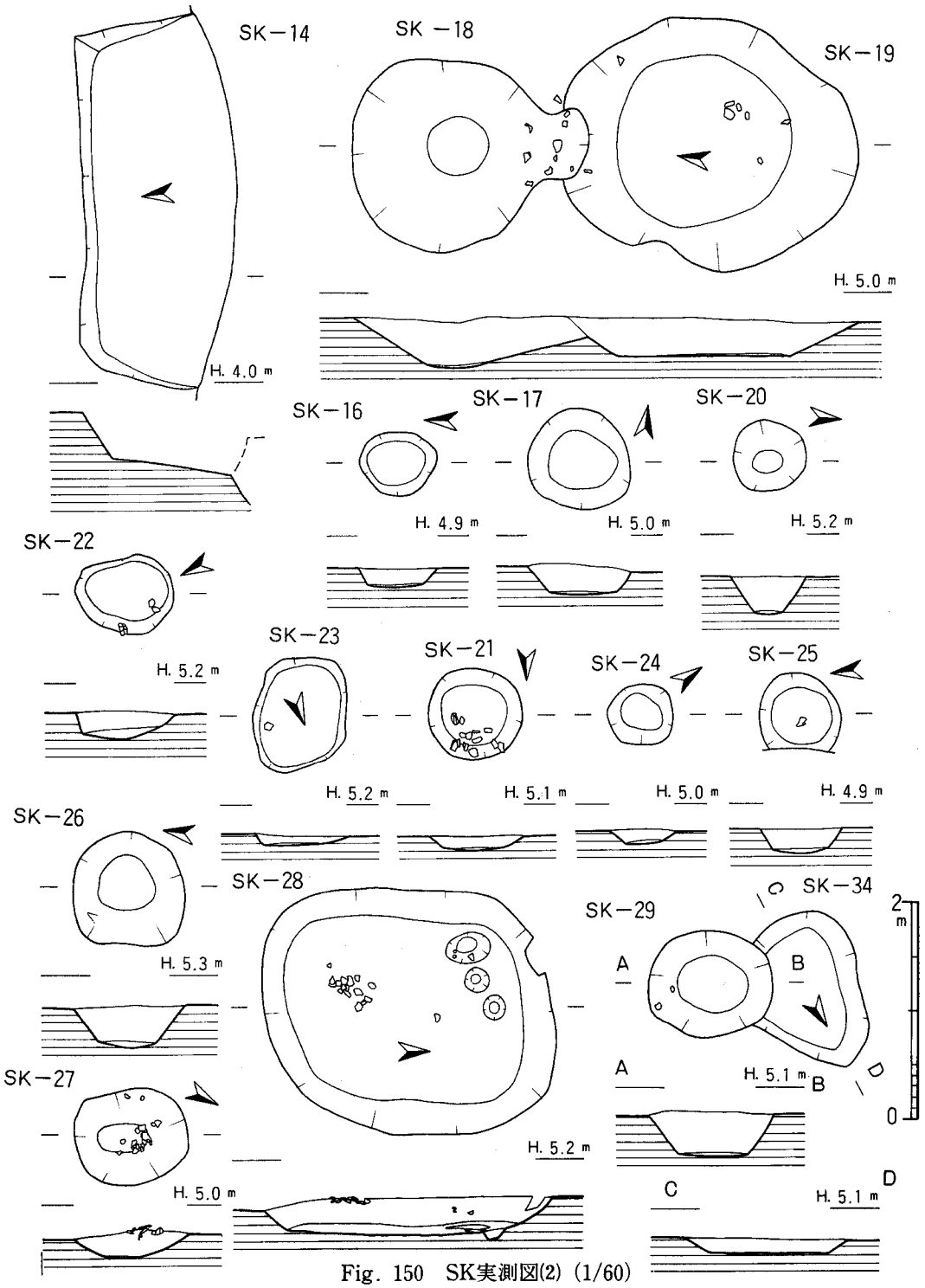


Fig. 150　SK実測図(2)（1/60）

E－Ⅸ区に検出した土壙で、SC－22より南へ4mの距離にあり、SK－26の西に接する。平面形は長軸115cm＋α、短軸97cmの不整楕円形で、長軸方向をN－10°20′－Wにとる。深さは42cmを測り、断面形は舟底状をなす。

SK－34 (Fig.150)

F－Ⅸ区に検出した土壙で、SC－19より南へ3mの距離にある。SK－29と重複関係にあり、SK－29よりも古い。平面形は長軸144cm、短軸108cmの不整円形で、長軸方向をN－10°40′－Eにとる。断面形は浅い皿状をなし、深さは13cmを測る。

SK－35 (Fig.151)

E－Ⅸ区に検出した土壙で、SC－22より南東へ3mの距離にある。平面形は長軸144cm、短軸115cmの楕円形で、長軸方向をN－5°40′－Eにとる。深さは30cmを測り、断面形は皿状をなす。

SK－36 (Fig.151)

F－Ⅹ区に検出した土壙で、SC－23の南西隅に接してある。平面形は長軸76cm、短軸56cmの楕円形で、長軸方向をN－48°－Eにとる。深さは34cmを測り、断面形は舟底状をなす。壁面は急傾斜して立ち上がる。

SK－37 (Fig.151)

E－Ⅸ区に検出した土壙で、SC－18より西へ8mの距離にある。平面形は長軸60cm、短軸53cmの小円形で、長軸方向をN－88°30′－Wにとる。深さは30cmを測り、断面形は舟底状をなす。

SK－38 (Fig.151　PL. 38)

E－Ⅸ区に検出した土壙で、SC－22の南1mの距離にある。平面形は長軸189cm、短軸188cmの隅丸方形で、長軸方向をN－55°－Wにとる。深さは26cmを測り、断面形は浅い皿状をなす。

出土遺物 (Fig.160)

甕形土器 (549) 短く「く」字状に外反する口縁部に短い胴部がつき、AV類に属する。

SK－40 (Fig.151)

E－Ⅷ区に検出した土壙で、SC－79より東へ4mの距離にある。平面形は長軸80cm、短軸73cmの小円形で、長軸方向をN－15°30′－Wにとる。断面形は凹レンズ状をなす。

SK－42 (Fig.151)

E－V区に検出した土壙で、SR－04より北へ2mの距離にある。平面形は長軸83cm、短軸80cmの円形で長軸方向をN－88°－Wにとる。深さは25cmを測り、断面形は舟底状で、壁面は緩傾斜する。

SK－43 (Fig.151)

E－V区に検出した土壙で、SR－01の南1mに隣接して位置する。平面形は長軸78cm、短軸57cmの楕円形で、長軸方向をN－24°40′－Wにとる。断面形は浅い凹レンズ状をなす。

SK－44 (Fig.151)

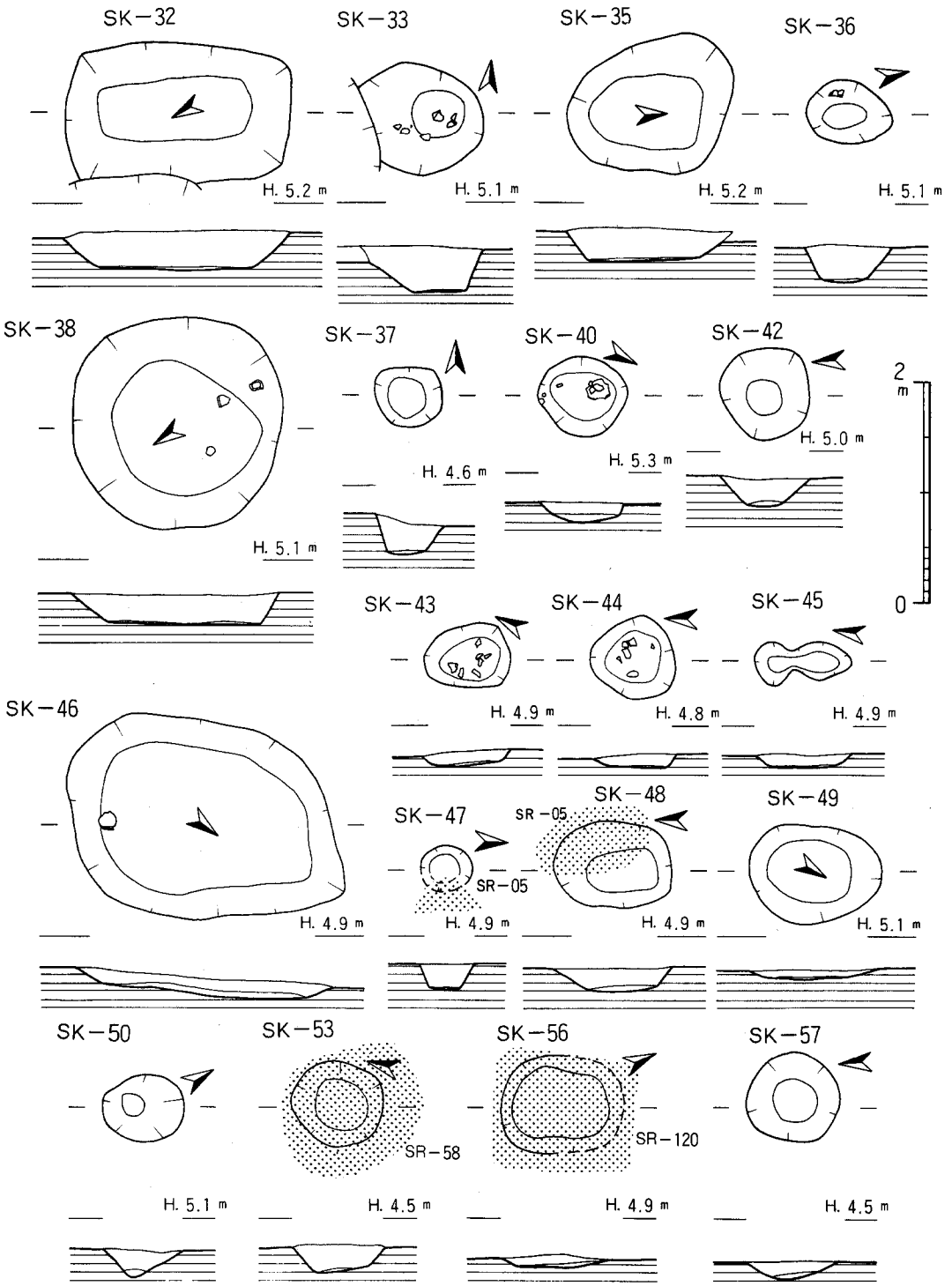


Fig. 151　SK実測図(3)（1/60）

E－V区に検出した土壙で、SR－01より南へ２ｍの距離にあり、SK－43の南に接している。平面形は長軸78cm、短軸74cmの円形で、長軸方向をN－３°40′－Eにとる。断面形は凹レンズ状。

SK－45（Fig.151）

E－V区に検出した土壙で、SR－01の東１ｍの距離にある。平面形は長軸90cm、短軸35cmの瓢状で、長軸方向をN－６°20′－Wにとる。深さは12cmを測り、断面形は皿状をなす。

SK－46（Fig.151）

D－III区に検出した土壙で、SR－30のすぐ西にある。平面形は長軸232cm、短軸180cmの不整楕円形で、長軸方向をN－32°30′－Wにとる。深さは16cmと浅く、断面形は皿状をなす。

SK－47（Fig.151）

E－VI区に検出した土壙で、SR－05の北１ｍの距離にある。平面形は長軸46cm、短軸40cmの円形で、長軸方向をN－10°－Wにとる。深さは24cmを測り、断面形は舟底状で、壁面は急傾斜する。

SK－48（Fig.151）

E－VI区に検出した土壙で、SR－05と重複関係にある。平面形は長軸91cm、短軸76cmの楕円形で、長軸方向をN－２°－Wにとる。深さは22cmを測り、断面形は皿状をなす。

SK－49（Fig.151）

E－V区に検出した土壙で、SR－01の北１ｍに位置する。平面形は長軸120cm、短軸90cmの楕円形で、長軸方向をN－30°40′－Wにとる。断面形は浅い皿状をなし、深さは８cmを測る。

SK－50（Fig.151）

E－V区に検出した土壙で、SR－01より北へ２ｍの距離にある。平面形は長軸72cm、短軸60cmの円形で長軸方向をN－30°－Eにとる。深さは24cmを測り、断面形は摺鉢状で、壁面は緩傾斜する。

SK－51（Fig.152）

D－V区に検出した土壙で、SK－52と重複関係にある。平面形は長軸220cm、短軸98cmの長方形で、長軸方向をN－59°30′－Wにとる。深さは40cmを測り、断面形は舟底状をなす。床面は東側に１段フラットな面を作り緩傾斜して底面にいたる。土壙内には小礫が散らばっていた。

SK－52（Fig.152）

D－V区に検出した土壙で、SR－44より南へ３ｍの距離にある。SK－51と重複関係にある。平面形は長軸278cm、短軸213cmの不整長方形で、長軸方向をN－30°30′－Eにとる。深さは20cmを測り、断面形は舟底状をなす。

SK－53（Fig.151）

D－VI区に検出した土壙で、SR－58と重複関係にあり、SR－58より古い。平面形は長軸82cm、短軸57cmの円形で、長軸方向をN－12°－Wにとる。深さは20cmを測り、断面形は皿状をなす。

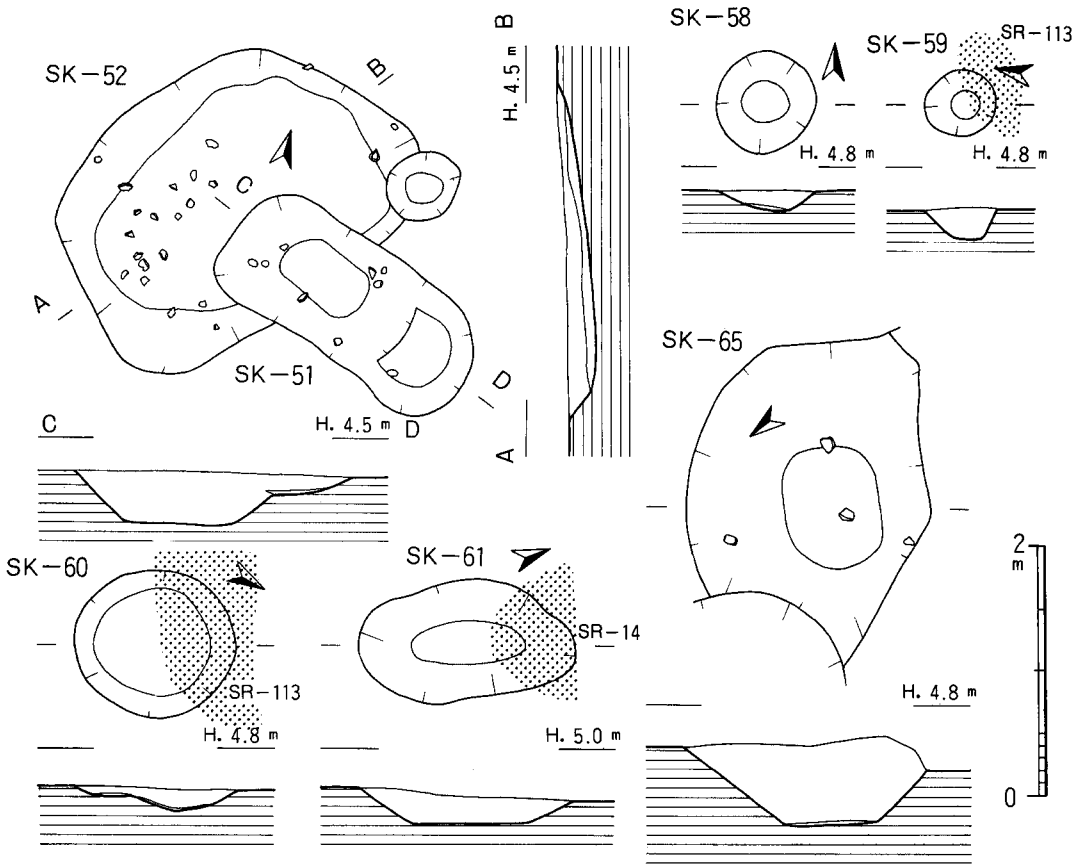


Fig. 152　SK実測図(4)（1/60）

SK－56（Fig.151）

D－Ⅶ区に検出した土壙で、SC－81より西へ４ｍの距離にあり、SR－120と重複関係する。平面形は長軸110cm、短軸87cmの隅丸長方形で、長軸方向をN－24°－Eにとる。断面形は浅い皿状をなし、深さは15cm。

SK－57（Fig.151）

E－Ⅶ区に検出した土壙で、SC－81内にあり覆土は炭層のみである。平面形は長軸84cm、短軸80cmの円形で、長軸方向をN－３°30′－Wにとる。深さは14cmを測り断面形は浅い凹レンズ状をなす。

SK－58（Fig.152）

E－Ⅶ区に検出した土壙で、SC－81の東隅に接してある。平面形は長軸81cm、短軸80cmの円形で、長軸方向をN－89°30′－Eにとる。断面形は浅い凹レンズ状で、深さは16cmを測る。

SK－59（Fig.152）

E－Ⅶ区に検出した土壙で、SC－81の西１ｍの距離にある。平面形は長軸56cm、短軸53cmの

円形で、長軸方向をN－19°30′－Wにとる。深さは24cmを測り、断面形は舟底状をなす。

SK－60（Fig.152）

E－Ⅶ区に検出した土壙で、SC－81の西隅に接してあり、SR－113と重複する。平面形は長軸138cm、短軸116cmの円形で、長軸方向をN－25°40′－Wにとる。深さは16cmを測り、断面形は逆梯状。

SK－61（Fig.152）

E－Ⅷ区に検出した土壙で、SC－78の西に隣接し、SR－14と重複する。平面形は長軸172cm、短軸95cmの長楕円形で、長軸方向をN－23°－Eにとる。深さは24cmを測り、断面形は皿状をなす。壁面は緩傾斜して立ち上がる。

出土遺物（Fig.161）

鉢形土器（554）素口縁をもつ浅手の鉢で、G類に属する。口径12.1cm。

SK－62

D－Ⅶ区に検出した土壙で、SR－95の西に隣接する。

SK－63（Fig.153）

F－XIII区に検出した土壙で、ST－02の東2mの距離にある。平面形は長軸162cm、短軸139cmの円形で、長軸方向をN－57°－Wにとる。深さは56cmを測り、断面形は摺鉢状をなす。壁面は緩傾斜して立ち上がる。

SK－64（Fig.153）

F－Ⅷ区に検出した土壙で、ST－02より東へ1mの距離に隣接する。平面形は長軸128cm、短軸117cmの円形で、長軸方向をN－8°30′－Eにとる。深さは34cmを測り、断面形は舟底状。

SK－65（Fig.152）

F－XIII区に検出した土壙でSC－13より南へ7mの距離にあり、南側はST－02の周溝に切られている。平面形は長軸260cm、短軸250mの円形になるもので、長軸方向をN－50°－Wにとる。深さは62cmを測り、断面形は舟底状をなす。

SK－66（Fig.153）

F－XIII区に検出した土壙で、SC－13より南へ3mの距離にある。平面形は長軸108cm、短軸93cmの楕円形で、長軸方向をN－15°－Eにとる。断面形は浅い凹レンズ状をなす。深さは14cmを測る。土壙上面は炭を含む砂で覆われる。

SK－67（Fig.153）

E－XIV区に検出した土壙で、ST－02より南へ3mの距離にある。平面形は長軸128cm、短軸99cmの楕円形で、長軸方向をN－20°30′－Wにとる。深さは38cmを測り、断面形は舟底状をなす。

SK－68（Fig.153）

E－XIV区に検出した土壙で、ST－02より南へ5mの距離にあり、SK－69・70と並んで位置す

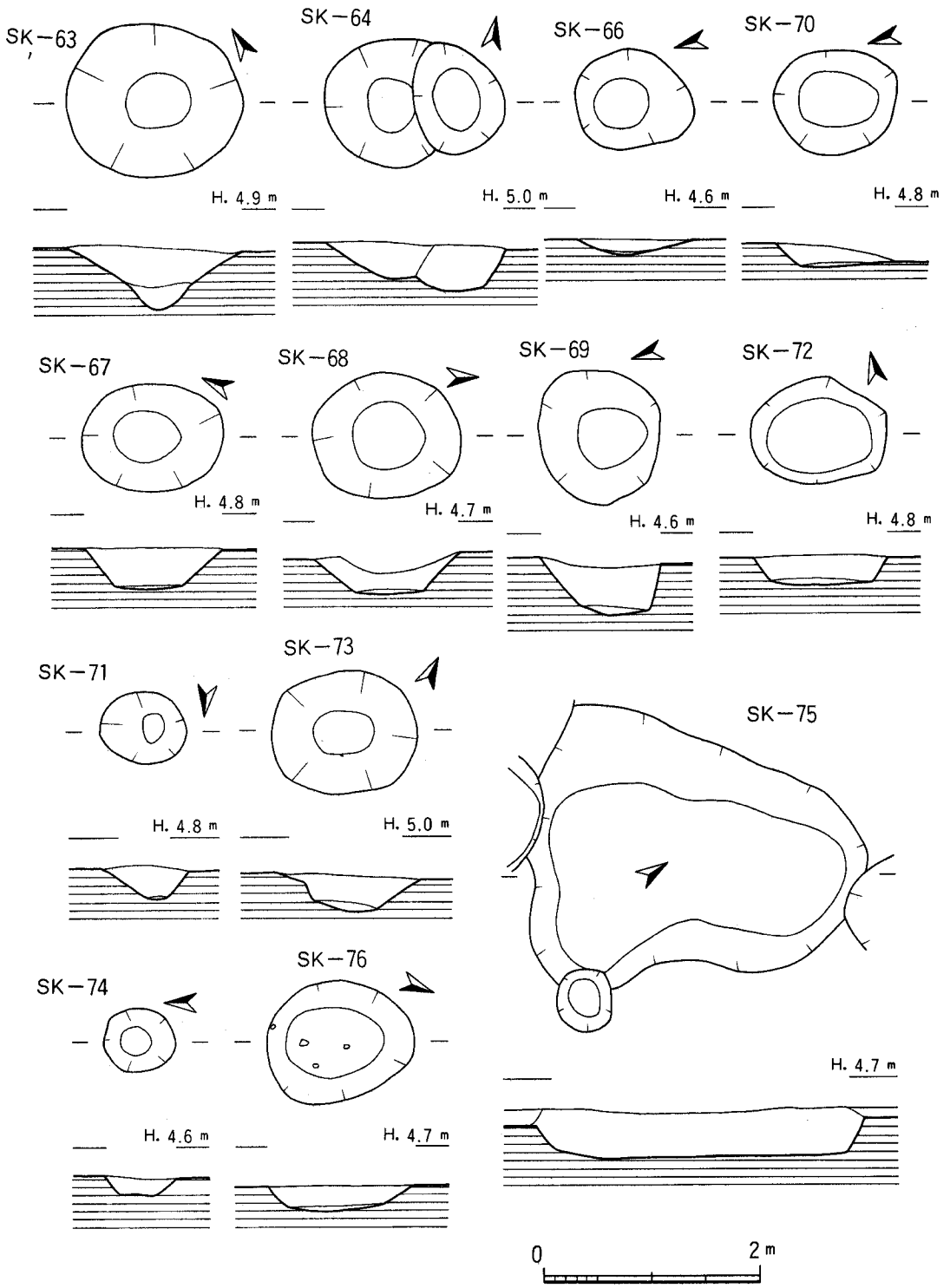


Fig. 153　SK実測図(5) (1/60)

る。平面形は長軸136cm、短軸116cmの楕円形で、長軸方向をN－2°－Eにとる。深さは20cmを測り、断面形は舟底状をなす。

SK－69 (Fig.153)

E－XIV区に検出した土壙で、ST－02の南5mにあり、SK－68・70と並ぶ。平面形は長軸123cm、短軸110cmの円形で、長軸方向をN－20°－Eにとる。深さは44cmを測り、断面形は舟底状を呈する。

SK－70 (Fig.153)

E－XIV区に検出した土壙で、ST－02の南6mの距離にあり、SK－68・69と並ぶ。平面形は長軸112cm、短軸94cmの楕円形で、長軸方向をN－17°－Eにとる。深さは20cmを測り、断面形は皿状を呈する。

SK－71 (Fig.153)

E－XIV区に検出した土壙で、SC－29より南へ7mの距離にある。平面形は長軸78cm、短軸55cmの楕円形で、長軸方向をN－86°－Eにとる。断面形は摺鉢状をなし、深さ30cmを測る。壁面は緩傾斜して立ち上がる。

SK－72 (Fig.153)

E－XIV区に検出した土壙で、SC－29の南東2mの距離にある。平面形は長軸126cm、短軸97cmの楕円形で、長軸方向をN－75°－Wにとる。深さは26cmを測り、断面形は皿状をなす。

SK－73 (Fig.153)

E－XIII区に検出した土壙で、SC－29より北へ2mの距離にあり、SK－74に隣接する。平面形は長軸136cm、短軸112cmの楕円形で、長軸方向をN－69°－Eにとる。深さは32cmを測り、断面形は舟底状をなす。

SK－74 (Fig.153)

E－XIII区に検出した土壙で、ST－02の西に接して位置する。平面形は長軸64cm、短軸59cmの円形で、長軸方向をN－2°－Wにとる。深さは16cmと浅く、断面形は逆梯状をなす。

SK－75 (Fig.153)

E－XIV区に検出した土壙で、ST－02より南へ10mの距離にある。平面形は長軸306cm、短軸203cmの不整長方形で、両小口側はピットで切られる。長軸方向はN－32°30′－Eにとる。深さは44cmを測り、断面形は皿状をなす。

SK－76 (Fig.153)

E－XIV区に検出した土壙で、ST－02の南3mにあり、SK－67と72の中間にある。平面形は長軸136cm、短軸109cmの楕円形で、長軸方向をN－24°－Wにとる。断面形は舟底状をなし、深さは24cmを測る。壁面は緩傾斜して立ち上がる。

SK－77 (Fig.154)

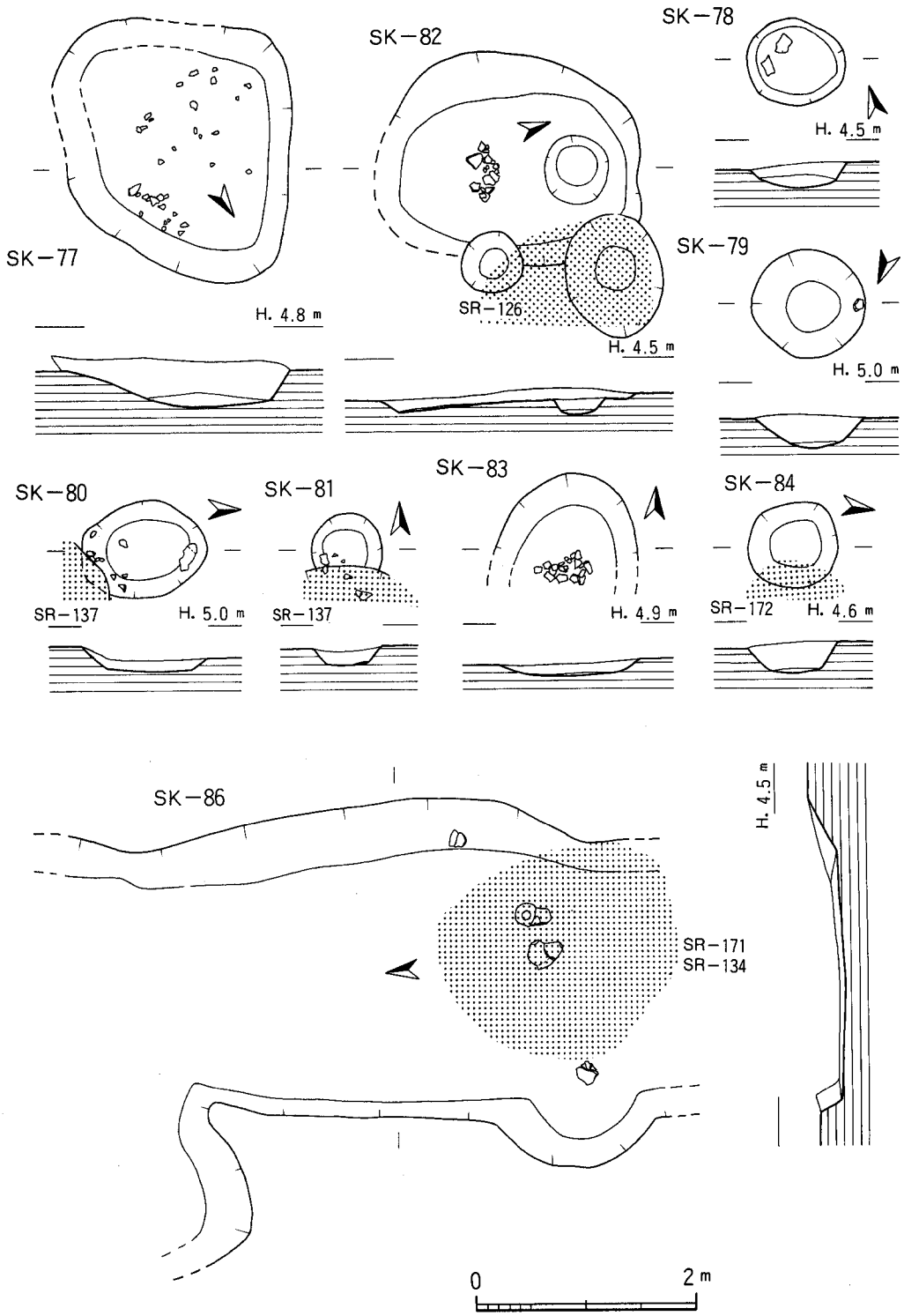


Fig. 154　SK実測図(6)（1/60）

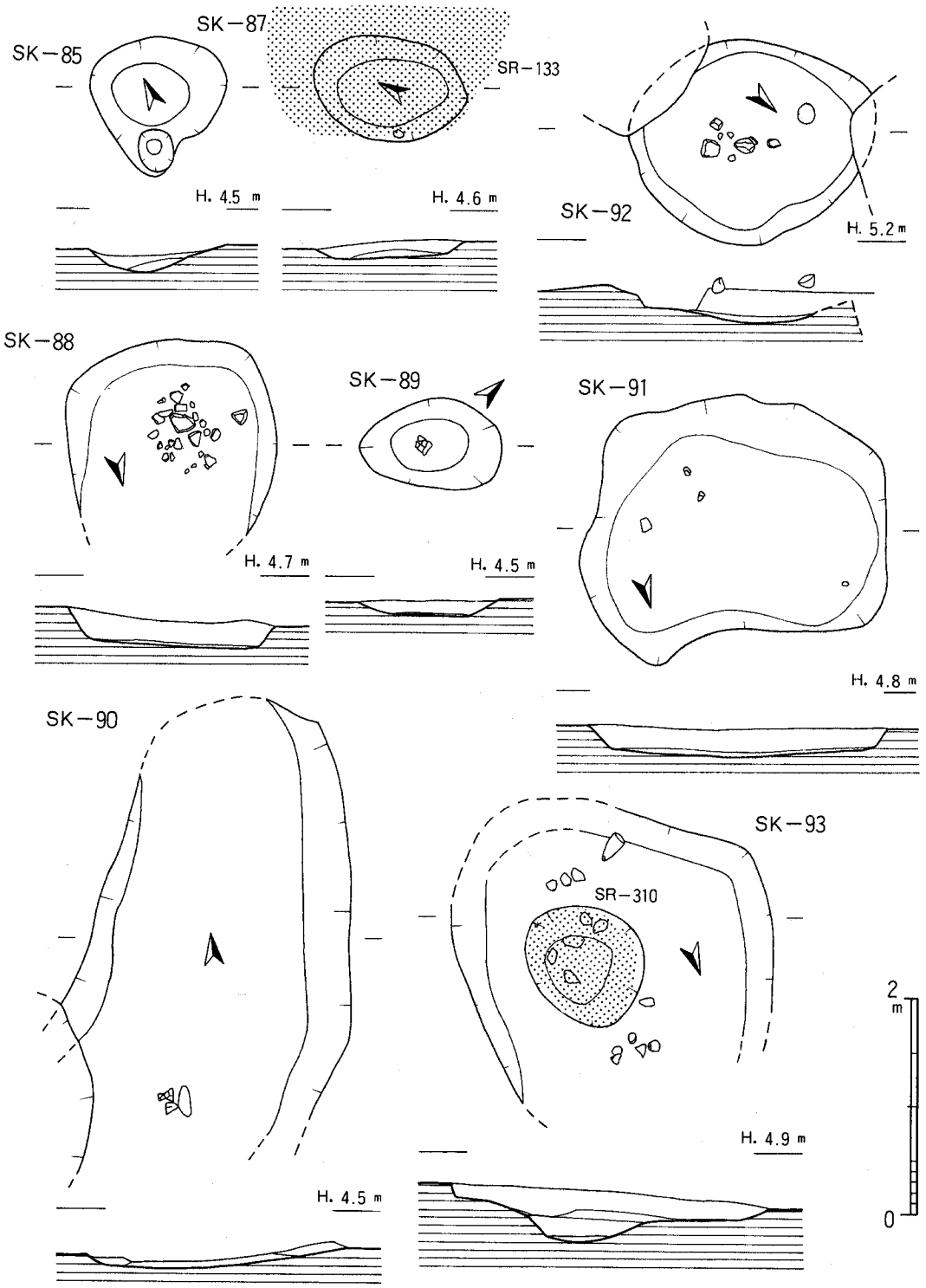


Fig. 155　SK実測図(7)（1/60）

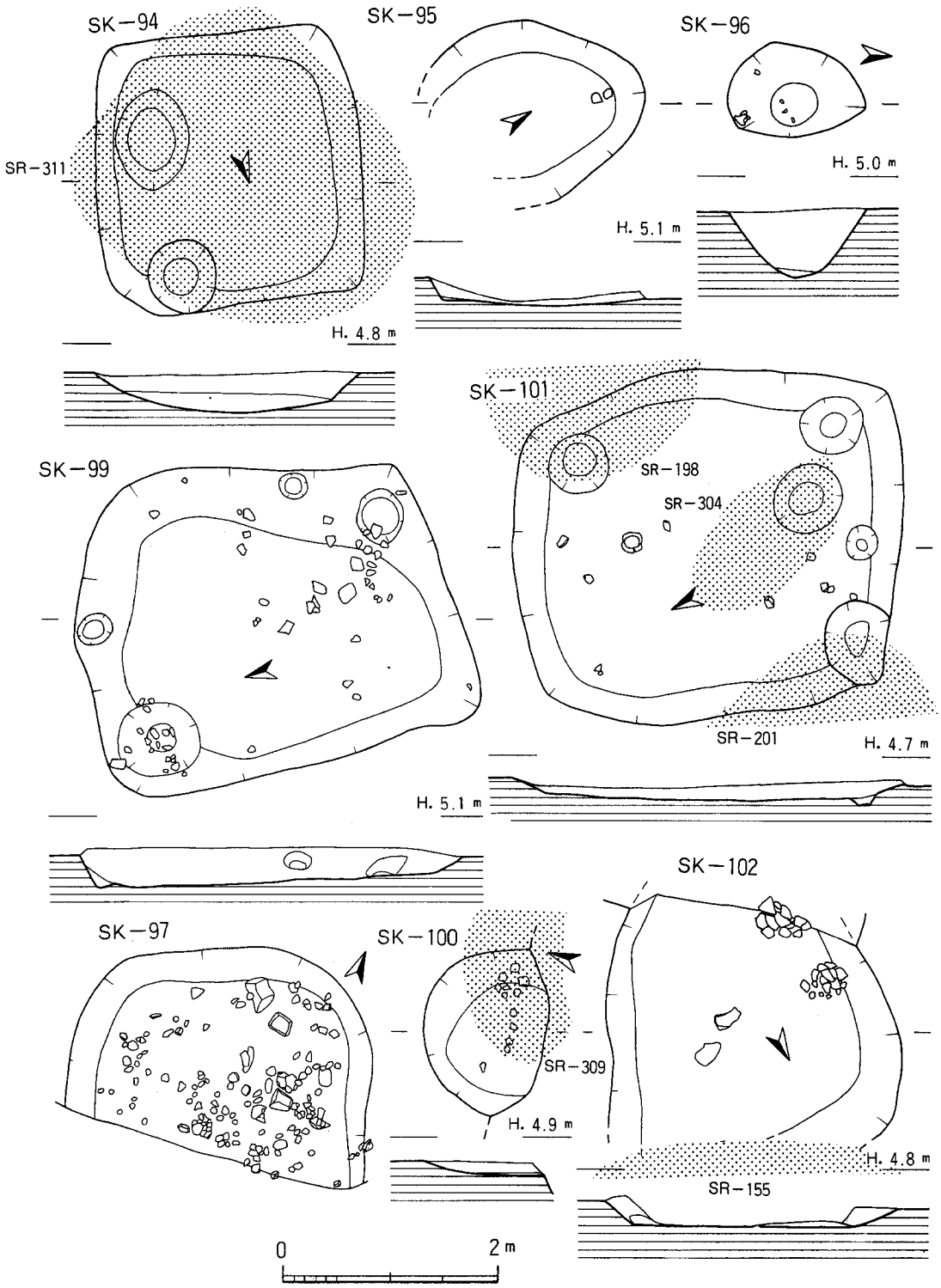


Fig. 156　SK実測図(8)（1/60）

F－XIII区に検出した土壙で、ST－02の東側墳丘下にあり、一部は葺石が重なる。平面形は長軸226cm、短軸200cmの不整方形で、長軸方向をN－56°－Wにとる。深さは40cmを測り、断面形は舟底状をなす。

SK－78 (Fig.154)

C－VIII区に検出した土壙で、SC－75より砂丘尾根西傾面上にある。平面形は長軸88cm、短軸77cmの不整円形で、長軸方向をN－71°30′－Wにとる。深さは22cmを測り、断面形は舟底状をなす。

SK－79 (Fig.154)

E－VIII区に検出した土壙で、SC－71内の南側にありSC－71よりも新しい。平面形は長軸104cm、短軸98cmの円形で、長軸方向をN－66°30′－Eにとる。深さは30cmを測り、断面形は舟底状をなす。

SK－80 (Fig.154)

D－VII区に検出した土壙で、SC－75の北壁際にあり、南側はSC－75によって切られる。平面形は長軸114cm、短軸88cmの楕円形で、長軸方向をN－7°26′－Wにとる。断面形は浅い皿状をなし、深さは10cmを測る。

SK－81 (Fig.154)

D－VII区に検出した土壙で、SC－75の北に隣接し、SC－80の東に並ぶ。SR－137と重複関係にある。平面形は長軸64cm、短軸46cmの円形で長軸方向をN－89°－Wにとる。断面形は浅い皿状をなし、深さは12cmを測る。

SK－82 (Fig.154)

D－VII区に検出した土壙で、SC－75より東へ3mの距離にあり、SR－126と重複する。平面形は長軸240cm、短軸187cmの隅丸長方形で、長軸方向をN－24°40′－Eにとる。断面形は浅い皿状をなし、深さは12cmを測る。

SK－83 (Fig.154)

D－VIII区に検出した土壙で、SC－71より西へ6mの距離にある。平面形は長軸130cm、短軸90cmの楕円形で長軸方向をN－82°40′－Eにとる。断面形は浅い凹レンズ状をなし、深さは12cmを測る。

SK－84 (Fig.154)

D－VIII区に検出した土壙で、SC－75より南へ7mの距離にあり、SR－172と重複する。平面形は長軸80cm、短軸76cmの円形で、長軸方向をN－12°30′－Wにとる。深さは28cmを測り、断面形は舟底状をなす。

SK－85 (Fig.155)

D－VII区に検出した土壙で、SC－75の北1mの距離に隣接する。平面形は長軸128cm、短軸122

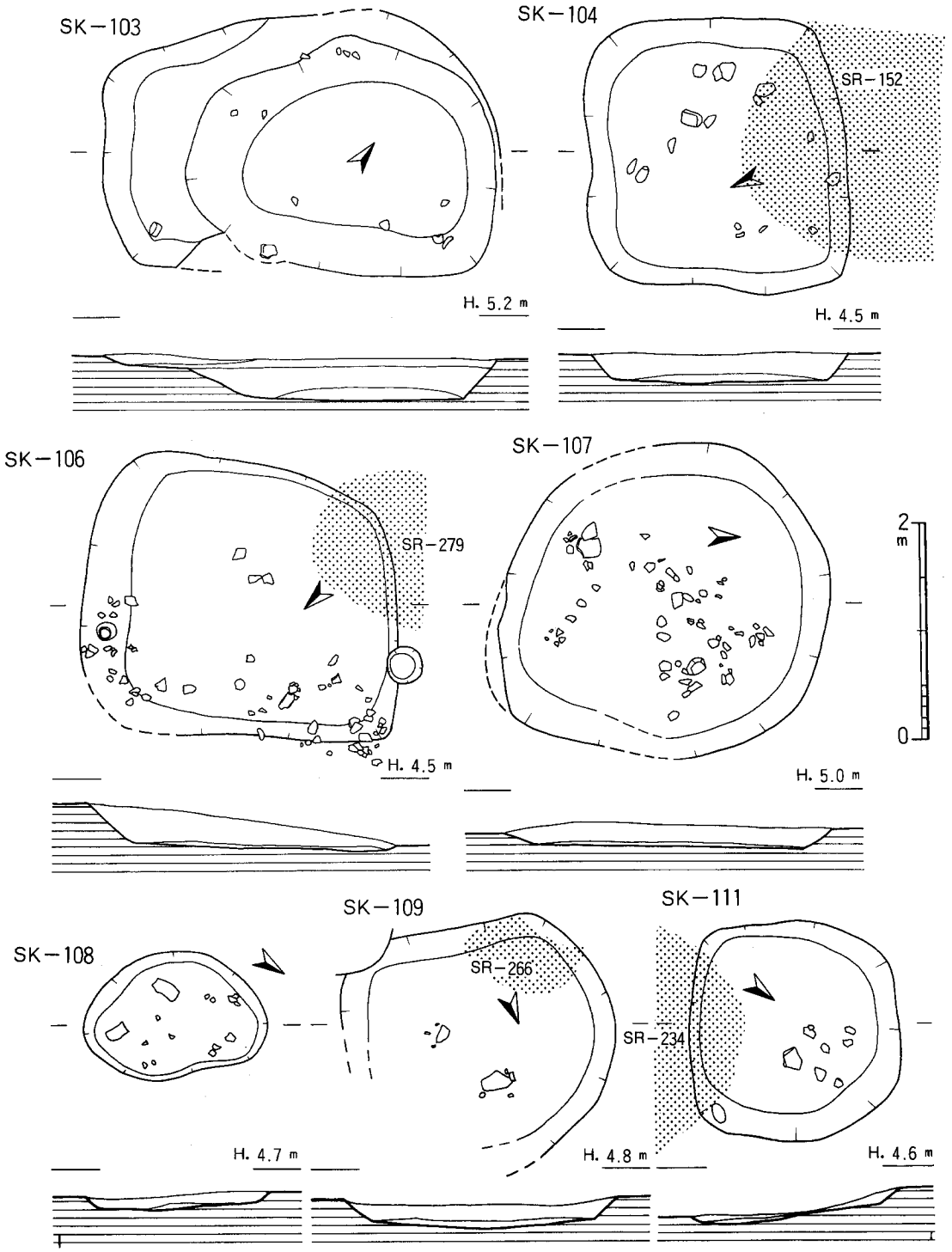


Fig. 157　SK実測図(9)（1/60）

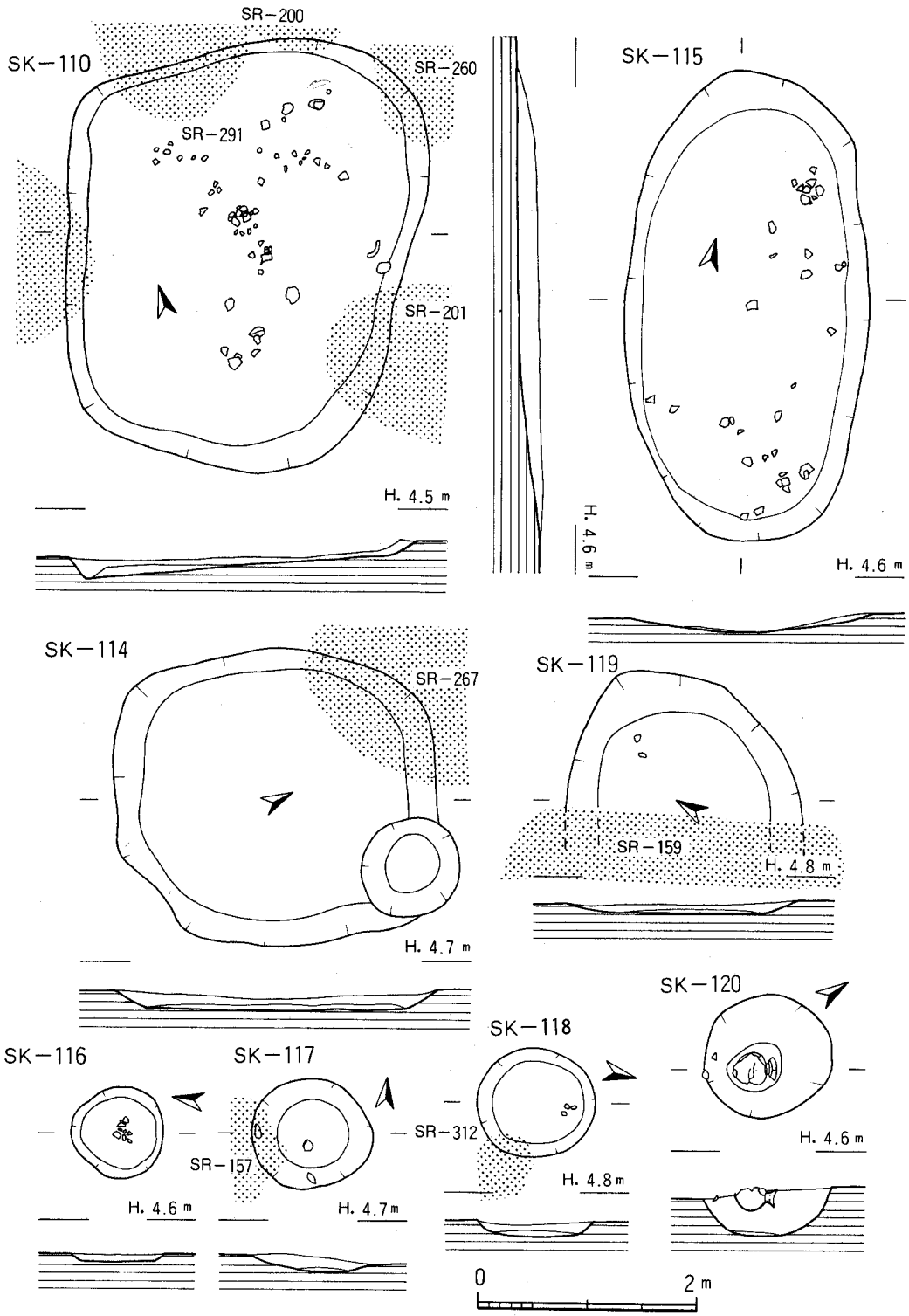


Fig. 158 SK実測図(10) (1/60)

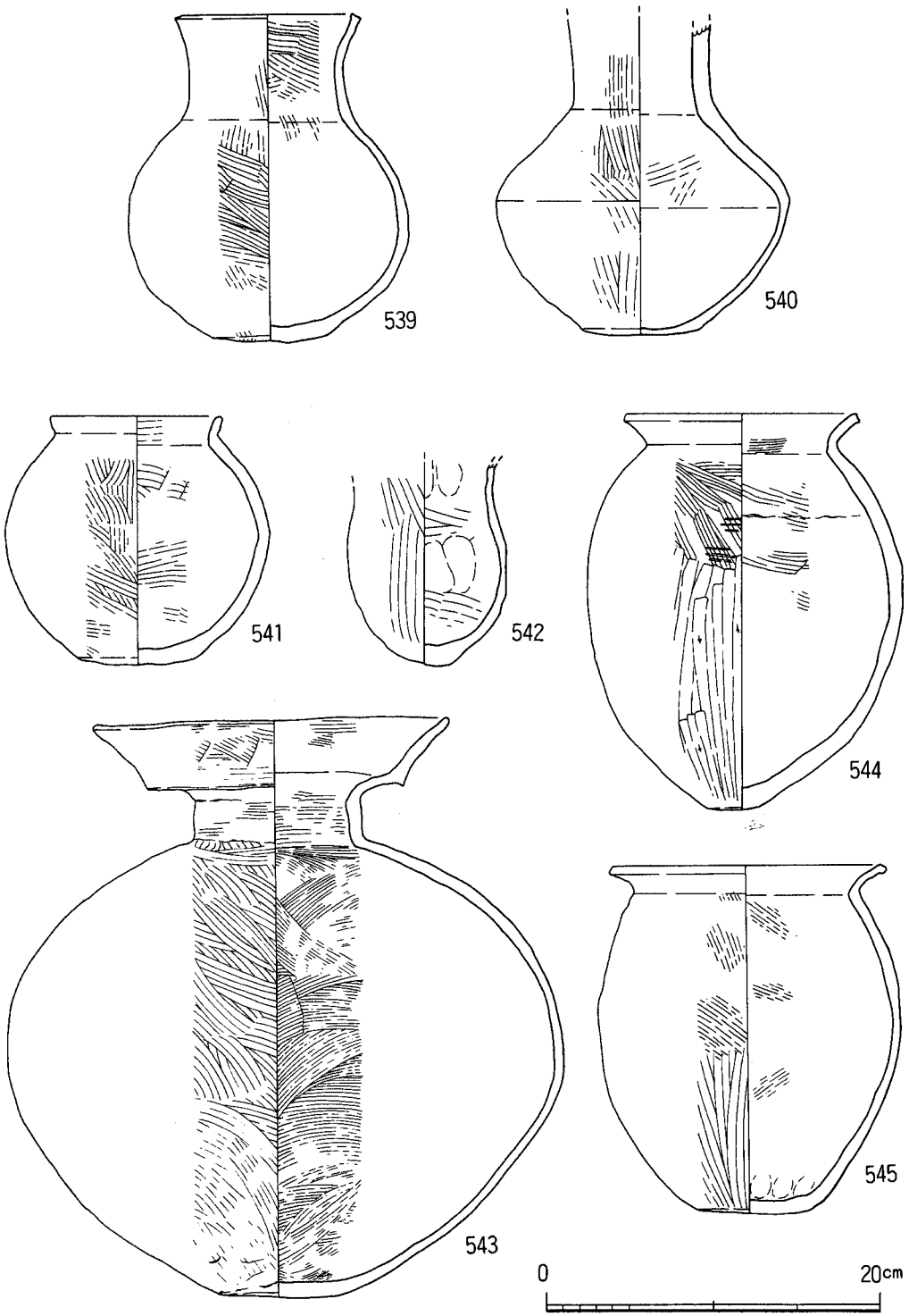


Fig. 159　SK出土土器実測図(1)（1/4）

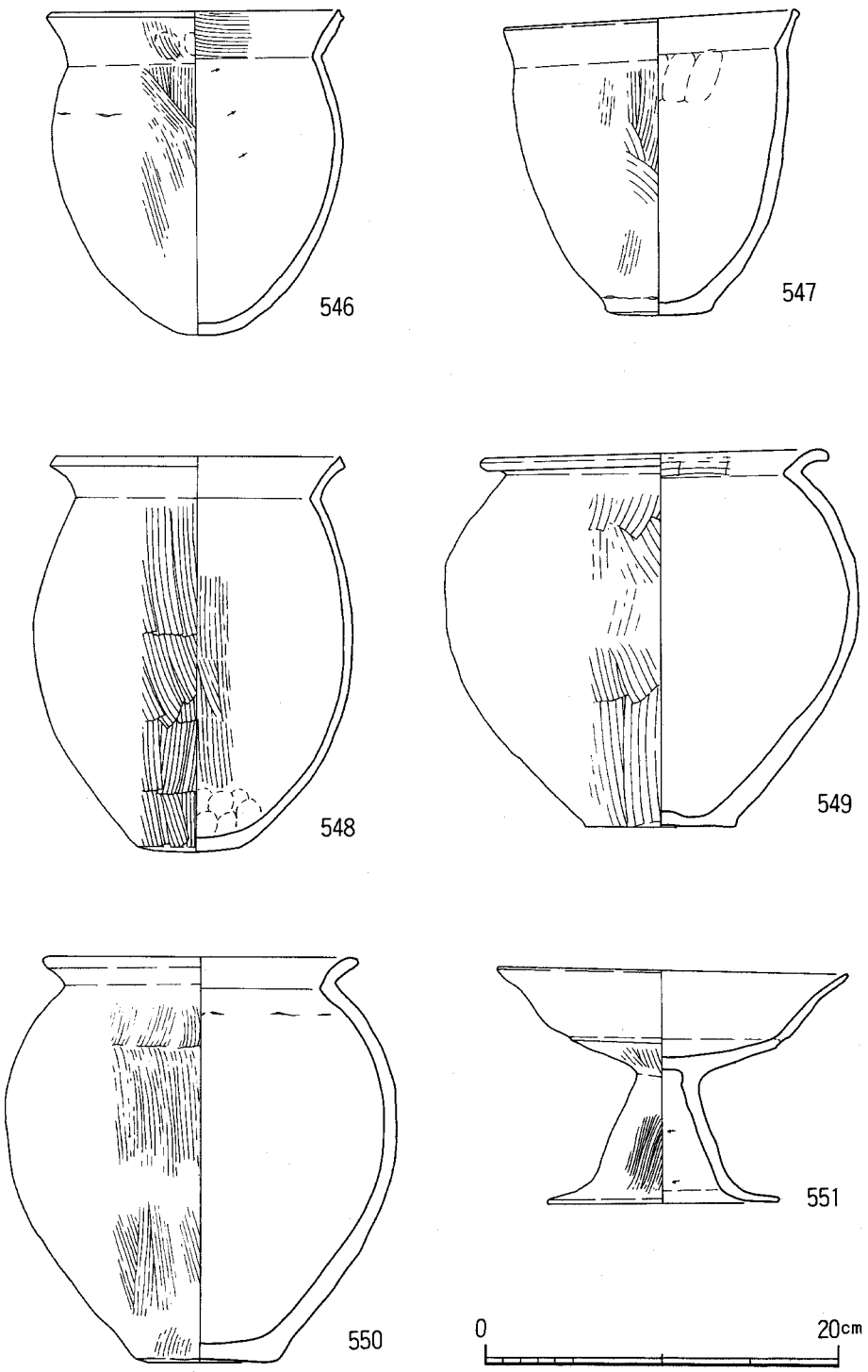


Fig. 160　SK出土土器実測図(2)（1/4）

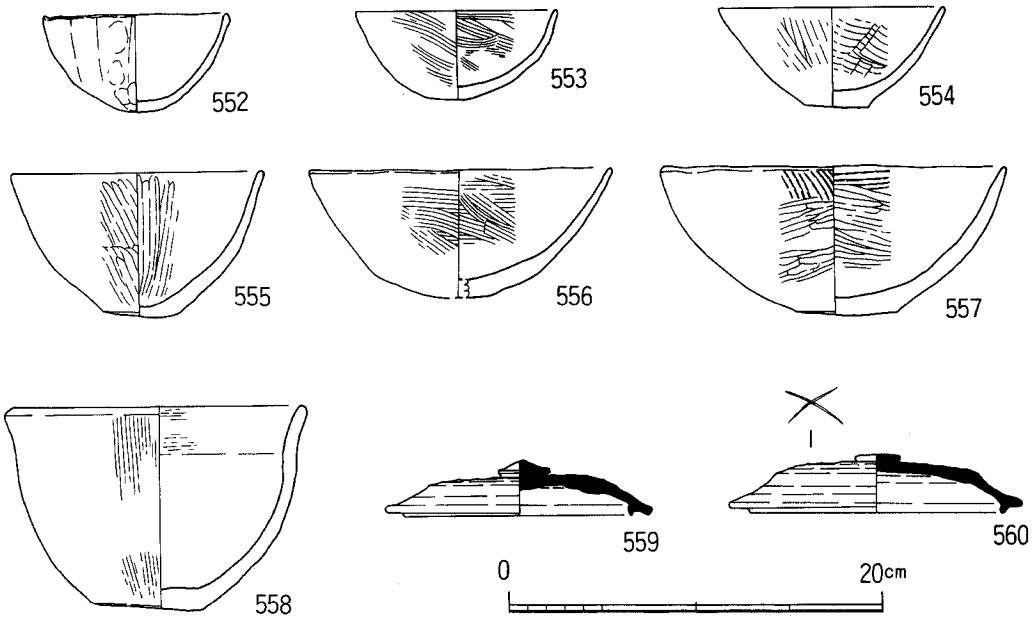


Fig. 161　SK出土土器実測図(3)（1/4）

cmの楕円形で、長軸方向をN－29°－Eにとる。断面形は浅い摺鉢状をなし、深さは16cmを測る。

SK－86（Fig.154）

D－Ⅷ区に検出した土壙で、SC－75、SR－134・171と重複関係にあり、最も古い。平面形は長軸470cm＋α、短軸278cmを測る大型の長方形で、長軸方向をN－11°－Eにとる。深さは25cmを測り、断面形は皿状をなす。土壙上は炉址埋土の赤暗色砂が厚く堆積していた。

出土遺物（Fig.160・161）

甕形土器（550）土壙内より出土したNo.7の倒置甕である。「く」字状口縁をもち、短胴。AV類。

鉢形土器（558）No.8の倒置甕。A類。

SK－87（Fig.155）

D－Ⅷ区に検出した土壙で、SC－76より北へ８ｍの距離にあり、SR－133と重複する。平面形は長軸138cm、短軸93cmの楕円形で、長軸方向をN－28°－Wにとる。断面形は浅い皿状をなし、深さは12cmを測る。

SK－88（Fig.155）

D－XIII区に検出した土壙で、SK－90の東１ｍの距離に接して位置する。平面形は長軸188cmの楕円形に復原され、長軸方向をN－73°30′－Wにとる。断面形は浅い凹レンズ状をなす。

SK－89（Fig.155）

D－Ⅸ区に検出した土壙で、SC－76より北西１ｍの距離にある。平面形は長軸132cm、短軸82cmの楕円形を呈し、長軸方向をN－44°30′－Eにとる。断面形は浅い舟底状をなし、深さは14cmを測る。

SK－90 (Fig.155)

D－XIII区に検出した土壙で、SK－88の西１mの距離に隣接する。平面形は長軸407cm＋α、短軸238cmの不整形で、長軸方向をN－８°－Eにとる。深さは29cmを測り、断面形は浅い舟底状をなす。

SK－91 (Fig.155)

C－XII区に検出した土壙で、SC－31の南へ２ｍの距離にある。平面形は長軸274cm、短軸218cmの不整形で、長軸方向をN－72°－Wにとる。断面形は浅い凹レンズ状をなす。

SK－92 (Fig.155)

C－XII区に検出した土壙で、SC－33のすぐ南に位置し、東側はSC－35に切られている。平面形は長軸230cm、短軸185cmの楕円形で、長軸方向をN－81°30′－Eにとる。深さは30cmを測り、断面形は舟底状をなす。

出土遺物 (Fig.161)

鉢形土器 (557) 素口縁で浅手の鉢。胴部は半球形で口縁部は反りぎみに開く。G類。

SK－93 (Fig.155)

D－Ⅹ区に検出した土壙で、SC－42の南東へ２ｍの距離にあり、SR－310と重複関係にある。平面形は長軸290cm、短軸280cmの隅丸方形で、長軸方向をN－65°40′－Wにとる。深さは50cmで、断面形は舟底状をなす。底面中央に径110cmの浅い円形ピットがある。土壙中央にむかって焼けた小礫が凹レンズ状に敷かれており、土壙廃棄後に石敷炉として使用されたものであろう。

出土遺物 (Fig.160)

甕形土器(547) 短く「く」字状に開く口縁をもつ。AVI類。

SK－94 (Fig.156 PL. 36)

D－Ⅹ区に検出した土壙で、SC－42のすぐ南に接して位置し、SR－311と重複する。平面形は

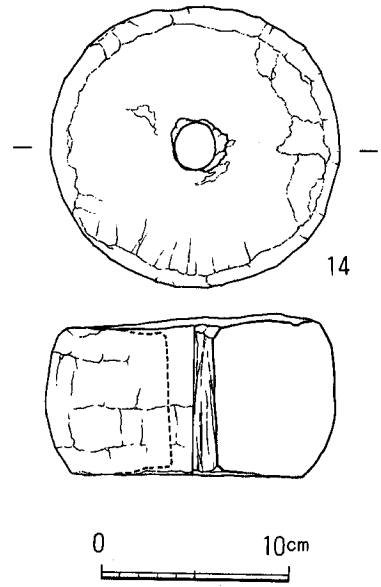


Fig. 162 SK－103出土石器実測図 (1/4)

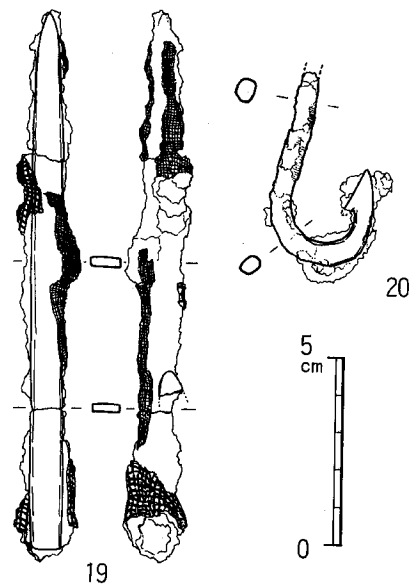


Fig. 163 SK出土鉄器実測図 (1/2)

長軸254cm、短軸246cmの方形で、長軸方向をN－28°－Eにとる。深さは34cmを測り、断面形は舟底状をなす。土壙上層には赤変した砂に混じって焼けた小礫が散乱しており、廃棄後に凹みが、炉として使用されたことが考えられる。

出土遺物（Fig.159）

壺形土器（541）球形の胴部に短い口縁をもつ。F類に属する。

SK－95（Fig.156）

D－X区に検出した土壙で、SC－42の南東4mの距離にあり、SK－94に隣接する。平面形は長軸230cm、短軸173cmの楕円形で、長軸方向をN－10°－Eにとる。断面形は皿状をなし、深さは24cmを測る。

SK－96（Fig.156）

D－X区に検出した土壙で、SC－42より南東へ7mの距離にある。平面形は長軸130cm、短軸85cmの楕円形で、長軸方向をN－2°－Wにとる。断面形は摺鉢状をなし、深さは60cmを測る。

出土遺物（Fig.160）

高坏（551）体部は内弯ぎみに立ち上がり、口縁部は反りぎみに開く。脚部は短いラッパ状で、裾部は水平に開く。C類。

SK－97（Fig.156）

D－X区に検出した土壙で、SC－43のすぐ北隣にある。平面形は長軸275cm、短軸201cm＋αの隅丸方形で、長軸方向をN－68°－Eにとる。断面形は皿状をなし、深さは20cm。土壙上層には、焼けた小礫が敷いたように拡がり、廃棄後に凹みが炉として使用された可能性がある。

出土遺物（Fig.159）

壺形土器（539）C類の長頸壺で，ラッパ状に開く口縁部は短めで端部を内方に小さくつまみ出す。胴部は球形。

SK－99（Fig.156）

D－X区に検出した土壙で、SC－43より東へ2mの距離にある。平面形は長軸358cm、短軸277cmの隅丸方形で、長軸方向をN－17°30′－Eにとる。断面形は平坦な皿状で、深さは36cmを測る。

SK－100（Fig.156）

D－X区に検出した土壙で、SC－43の南東約1mの距離にある。SR－309と重複する。平面形は長軸220cm、短軸142cmの円形で、長軸方向をN－17°－Wにとる。断面形は浅い凹レンズ状をなし、深さは12cmを測る。

SK－101（Fig.156　PL. 37）

D－Ⅸ区に検出した土壙で、SC－42のすぐ西に隣接してあり、SR－198・201・304と重複する。平面形は長軸362cm、短軸320cmの隅丸長方形で、長軸方向をN－25°－Eにとる。断面形は皿

状をなし、壁面は緩傾斜して立ち上がる。

出土遺物（Fig.160）

甕形土器（546）「く」字状の口縁部に卵形の胴部がつく甕で、ＡＩ類に属する。

SK－102（Fig.156）

Ｂ－Ⅺ区に検出した土壙で、SC－52と南側壁に接し、SR－155と重複する。平面形は長軸282cm、短軸250cmの隅丸長方形で、長軸方向をN－60°40′－Wにとる。断面形は皿状をなし、深さは18cmを測る。壁面は緩傾斜して立ち上がる。

SK－103（Fig.157　PL. 37）

Ｃ－Ⅻ区に検出した土壙で、SC－56のすぐ東に位置する。平面形は長軸231cm、短軸217cmの楕円形で、長軸方向をN－52°－Eにとる。深さは38cmを測り、断面形は皿状をなす。

出土遺物（Fig.161・162）

鉢形土器（555）小さく開く素口縁をもつ深手鉢で、F類に属する。

石錘（14）滑石製の大型有孔石錘である。形状は径15.4×15.0cmのほぼ円形で、中央部には、内径2.6×2.1cmの，円孔を穿つ。断面形は側縁部のやゝ膨らんだ長方形で厚さは7.8～8.6cm。側縁部は粗く面取りした後に丸く整形し、上下面は平坦に仕上げている。なお、側縁部には横方向の、円孔内には縦方向のノミ状工具痕が残る。重さは3.17kg。

SK－104（Fig.157）

Ｃ－Ⅺ区に検出した土壙で、SC－67の南西隅を切っている。SR－152と重複し、これよりも古い。平面形は長軸245cm、短軸242cmの隅丸方形で、長軸方向をN－68°30′－Wにとる。断面形は皿状をなし、深さは28cmを測る。壁面は急傾斜して立ち上がる。

SK－105

Ｃ－Ⅺ区に検出した土壙で、SC－57と重複関係にあり、SC－57より古い。平面形はその大半がSC－57によって破壊されているが、一辺が350cm程の方形を呈するものであろう。深さは約20cmを測り、断面形は浅い皿状をなす。

SK－106（Fig.157）

Ｂ－Ⅺ区に検出した土壙で、SC－58・66と重複関係にあり、この中で最も新しい。平面形は長軸290cm、短軸250cmの隅丸長方形で、長軸方向をN－46°30′－Eにとる。深さは30cmを測り、断面形は皿状をなす。壁面は緩傾斜して立ち上がる。

出土遺物（Fig.159・161）

甕形土器（545）口縁部は短く外反する。AI類に属する。

鉢形土器（552）素口縁をもち深手。体部は内弯ぎみに立ち上がり、口縁部は小さく直口する。G類。

SK－107（Fig.157）

C－X区に検出した土壙で、SC－49の南東3mの距離にある。平面形は長軸302cm、短軸288cmの円形で、長軸方向をN－11°－Wにとる。深さは18cmと浅く断面形は皿状をなす。覆土上層に淡赤褐色砂が薄くレンズ状に堆積し小礫が散布する。炉として使用されたのであろうか。

SK－108 (Fig.157)

B－XI区に検出した土壙で、SC－53より北へ2mの距離にある。平面形は長軸170cm、短軸114cmの楕円形で、長軸方向をN－29°－Wにとる。深さは10cmを測り、断面形は浅い皿状をなす。

SK－109 (Fig.157)

B－XI区に検出した土壙で、SC－59の北に隣接し、SR－266と重複する。平面形は長軸252cm、短軸220cmの不整楕円形で、断面形は皿状をなし、深さは22cmを測る。

SK－110 (Fig.158)

C－IX区に検出した土壙で、SC－42より北へ2mの距離にある。SR－196・200・201・260・291と重複関係にある。平面形は長軸390cm、短軸315cmの隅丸方形で、長軸方向をN－18°30′－Eにとる。断面形は浅い皿状で、深さは14cmを測る。

出土遺物 (Fig.159・161・163)

壺形土器 (542) 砲弾状の体部をもつ小型壺で、口縁部は反りぎみに開く。

甕形土器 (544)「く」字状の口縁部が短く外反し、卵形の胴部に小さな平底がつく。AI類。

鉢形土器 (553・556) 553は体部が半球形で、直口ぎみの口縁部は小さく外方へ開く。556は体部が内弯ぎみに大きく開く。いずれもG類。

釣針 (20) 基部を欠く大型の釣針で、長さ5.2cm、幅2.8cmを測る。身はU字状になり、針先は内面に返りがつく。基部には横に巻いた糸が残る。身の断面形は楕円形を呈す。

SK－111 (Fig.157)

C－X区に検出した土壙で、SC－68より北へ4mの距離にある。SR－234と重複関係にある。平面形は長軸204cm、短軸196cmの隅丸方形で、長軸方向をN－54°－Eにとる。深さは8cmと浅く、断面形は凹レンズ状をなす。

SK－114 (Fig.158)

C－XI区に検出した土壙で、SC－50の北に隣接し、SR－267と重複する。平面形は長軸294cm、短軸267cmの隅丸方形で、長軸方向をN－25°30′－Eにとる。深さは12cmを測り、断面形は浅い皿状をなす。

SK－115 (Fig.158)

B－XI区に検出した土壙で、SC－60より南へ6mの距離にあり、SK－109と接している。平面形は長軸424cm、短軸224cmの長楕円形で、長軸方向をN－11°－Wにとる。断面形は浅い凹レンズ状をなし、深さは15cmを測る。

SK－116 (Fig.158)

B－XI区に検出した土壙で、SC－59より南東へ２ｍの距離にある。平面形は径82cmの円形プランを呈する。断面形は浅い皿状をなし、深さは８cmを測る。

SK－117（Fig.158）

B－XI区に検出した土壙で、SC－52のすぐ西１ｍの距離にあり、SR－157と重複関係にある。平面形は長軸110cm、短軸100cmの円形で、長軸方向をN－86°20′－Eにとる。深さは12cmを測り、断面形は浅い凹レンズ状をなす。

SK－118（Fig.158）

B－XI区に検出した土壙で、SC－59より西へ４ｍの距離にある。平面形は長軸108cm、短軸98cmの円形で、長軸方向をN－11°－Wにとる。断面形は浅い凹レンズ状をなし、深さは13cmを測る。

SK－119（Fig.158）

B－XI区に検出した土壙で、SC－70より北西へ３ｍの距離にあり、SR－159と重複関係にある。平面形は長軸218cm、短軸200cmの不整楕円形に復原でき、長軸方向をN－26°－Wにとる。深さは15cmを測り、断面形は浅い皿状をなす。

SK－120（Fig.158　PL. 38）

E－XIV区に検出した土壙で、ST－02より南へ13ｍの距離にあり、土壙群中、最南端に位置する。平面形は長軸115cm、短軸112cmの円形で、長軸方向をN－32°－Eにとる。深さは90cmを測り、断面形は舟底状をなす。土壙には完形の二重口縁壺が埋置されており、そのあり方から墳墓の供献土器の可能性がある。

出土遺物（Fig.159）

壺形土器（543）AIV類の二重口縁壷。口縁部は短く朝顔状に開き、緩く屈曲して外方に開く。胴部は張りの強い球形で平底がつく。

土 壙 一 覧 表

遺構番号	グリット	平面形	断面形	法量(cm) 長さ×幅×深さ	方位	備考
01		隅丸方形	舟底状	195×181×67		
02		不整長方形	皿状	327×142×40		
03	E-XI	不整楕円形	レンズ状	213×132×18	N-35°-E	
04	E-XI	楕円形	摺鉢状	103×72×26	N-90°-W	
05	E-XI	楕円形	摺鉢状	136×92×62	N-6°30′-E	
06	E-XI	不整楕円形	舟底状	122×74×40	N-67°-W	
07	E-XII	楕円形	皿状	96×75×48	N-65°-W	
08	E-XI	円形	舟底状	104×95×40	N-85°-W	
09	E-XI	不整円形	逆底状	122×112×60	N-8°-W	
10	F-XI	楕円形	舟底状	92×58×30	N-33°-E	
11	E-XI	不整方形	皿状	194×134×18	N-64°-W	
12	F-XI	楕円形	舟底状	191×125×38	N-9°30′-E	
13	E-XII	不整楕円形	皿状	152×98×54	N-9°-E	
14	E-XII	長方形	皿状	335×140×30	N-78°-E	
15	F-X	円形	舟底状	179×178×62	N-80°-E	
16	F-X	円形	皿状	70×58×16	N-9°30′-W	
17	F-X	円形	皿状	94×91×26	N-80°-W	
18	F-X	不整円形	舟底状	218×176×40	N-70°-W	
19	F-X	楕円形	皿状	278×230×38	N-70°-W	
20	E-X	円形	舟底状	67×63×34	N-6°40′-W	
21	E-X	円形	皿状	86×84×12	N-80°40′-E	
22	E-X	楕円形	皿状	90×71×20	N-29°-E	
23	E-X	不整長方形	皿状	98×86×10	N-29°-E	
24	F-X	円形	皿状	60×54×13	N-38°30′-E	
25	E-IX	円形	舟底状	74×74×22	N-5°30′-E	
26	E-IX	円形	舟底状	103×102×38	N-70°10′-E	
27	E-IX	楕円形	凹レンズ状	104×90×25	N-26°-W	
28		隅丸方形	舟底状	262×227×33		
29	F-IX	楕円形	皿状	114×94×40	N-52°-W	
30						
31						
32	E-IX	隅丸長方形	皿状	203×120×36	N-42°-E	
33	E-IX	不整楕円形	舟底状	115×97×42	N-10°20′-W	
34	F-IX	不整円形	皿状	144×108×13	N-10°40′-E	
35	E-IX	楕円形	皿状	144×115×30	N-5°40′-E	
36	F-X	楕円形	舟底状	76×56×34	N-48°-E	
37	E-IX	円形	舟底状	60×53×30	N-88°30′-W	
38	E-IX	隅丸方形	皿状	189×188×26	N-55°-W	
39						
40	E-VIII	円形	凹レンズ状	80×73	N-15°30′-W	

Tab. 1　土壙一覧表 (1)

土 壙 一 覧 表

遺構番号	グリット	平面形	断面形	法量(cm) 長さ×幅×深さ	方位	備考
41						
42	E-V	円形	舟底状	83×80×25	N-88°-W	
43	E-V	楕円形	凹レンズ状	78×57	N-24°40′-W	
44	E-V	円形	凹レンズ状	78×74	N-3°40′-E	
45	E-V	瓢状	皿状	90×35×12	N-6°20′-W	
46	D-III	不整楕円形	皿状	232×180×16	N-32°30′-W	
47	E-VI	円形	舟底状	46×40×24	N-10°-W	
48	E-VI	楕円形	皿状	91×76×22	N-2°-W	
49	E-V	楕円形	皿状	120×90×8	N-30°40′-W	
50	E-V	円形	摺鉢状	72×60×24	N-30°-E	
51	D-V	長方形	舟底状	220×98×40	N-59°30′-W	
52	D-V	不整長方形	舟底状	278×213×20	N-30°30′-E	
53	D-VI	円形	皿状	82×57×20	N-12°-W	
54						
55						
56	D-VII	隅丸長方形	皿状	110×87×15	N-24°-E	
57	E-VII	円形	レンズ状	84×80×14	N-3°30′-W	
58	E-VII	円形	レンズ状	81×80×16	N-89°30′-E	
59	E-VII	円形	舟底状	56×53×24	N-19°30′-W	
60	E-VII	円形	逆梯状	138×116×16	N-25°40′-W	
61	E-VIII	長楕円形	皿状	172×95×24	N-23°-E	
62	D-VII					
63	F-XIII	円形	摺鉢状	162×139×56	N-57°-W	
64	F-XIII	円形	舟底状	128×117×34	N-8°30′-E	
65	F-XIII	円形	舟底状	260×250×62	N-50°-W	
66	F-XIII	楕円形	レンズ状	108×93×14	N-15°-E	
67	E-XIV	楕円形	舟底状	128×99×38	N-20°30′-W	
68	E-XIV	楕円形	舟底状	136×116×20	N-2°-E	
69	E-XIV	円形	舟底状	123×110×44	N-20°-E	
70	E-XIV	楕円形	皿状	112×94×20	N-17°-E	
71	E-XIV	楕円状	摺鉢状	78×55×30	N-86°-E	
72	E-XIV	楕円形	皿状	126×97×26	N-75°-W	
73	E-XIII	楕円形	舟底状	136×112×32	N-69°-E	
74	E-XIII	円形	逆梯状	64×59×16	N-2°-W	
75	E-XIV	不整長方形	皿状	306×203×44	N-32°30′-E	
76	E-XIV	楕円形	舟底状	136×109×24	N-24°-W	
77	F-XIII	不整方形	舟底状	226×200×40	N-56°-W	
78	C-VIII	不整円形	舟底状	88×77×22	N-71°30′-W	
79	E-VIII	円形	舟底状	104×98×30	N-66°30′-E	
80	D-VII	楕円形	皿状	114×88×10	N-7°26′-W	

Tab. 2　土壙一覧表 (2)

土 壙 一 覧 表

遺構番号	グリット	平面形	断面形	法量(cm) 長さ×幅×深さ	方位	備考
81	D-Ⅶ	円形	皿状	64×46×12	N-89°-W	
82	D-Ⅶ	長方形	皿状	240×187×12	N-24°40′-E	
83	D-Ⅷ	楕円形	凹レンズ状	130×90×12	N-82°40′-E	
84	D-Ⅷ	円形	舟底状	80×76×28	N-12°30′-W	
85	D-Ⅶ	楕円形	摺鉢状	128×122×16	N-29°-E	
86	D-Ⅷ	長方形	皿状	470×278×25	N-11°-E	
87	D-XII	楕円形	皿状	138×93×12	N-28°-W	
88	D-XII	不整形	凹レンズ状	188×155×0	N-73°30′-W	
89	D-IX	楕円形	舟底状	132×82×14	N-44°30′-E	
90	D-XIII	不整形	舟底状	407×238×29	N-8°-E	
91	C-XII	不整形	凹レンズ状	274×218	N-72°-W	
92	C-XII	楕円形	舟底状	230×185×30	N-81°30′-E	
93	D-X	隅丸方形	舟底形	290×280×50	N-65°40′-W	
94	D-X	方形	舟底状	254×246×34	N-28°-E	
95	D-X	不整楕円形	皿状	230×173×24	N-10°-E	
96	D-X	楕円形	摺鉢状	130×85×60	N-2°-W	
97	D-X	隅丸方形	皿状	275×201×20	N-68°-E	
98						
99	D-X	隅丸方形	皿状	358×277×36	N-17°30′-E	
100	D-X	円形	凹レンズ状	220×142×12	N-17°-E	
101	D-IX	隅丸長方形	皿状	362×320×14	N-25°-E	
102	B-XI	隅丸長方形	皿状	282×250×18	N-60°40′-W	
103	C-XII	楕円形	皿状	231×217×38	N-52°-E	
104	C-XI	隅丸方形	皿状	245×242×28	N-68°30′-W	
105	C-XI	方形	皿状	350×350×20		
106	B-XI	隅丸長方形	皿状	290×250×30	N-46°30′-E	
107	C-X	円形	皿状	302×288×18	N-11°-W	
108	B-XI	楕円形	皿状	170×114×10	N-29°-W	
109	B-XI	不整楕円形	皿状	252×220×22	N-66°-W	
110	C-IX	隅丸方形	皿状	390×315×14	N-18°30′-E	
111	C-X	隅丸方形	凹レンズ状	204×196×8	N-54°-E	
112						
113						
114	C-XI	隅丸方形	皿状	294×267×12	N-25°30′-E	
115	B-XI	長楕円形	凹レンズ状	424×224×15	N-11°-W	
116	B-XI	円形	皿状	82×82×8	N-7°30′-W	
117	B-XI	円形	凹レンズ状	110×101×12	N-86°20′-E	
118	B-XI	円形	凹レンズ状	108×98×13	N-11°-W	
119	B-XI	不整楕円形	皿状	218×200×15	N-26°-W	
120	E-XIV	円形	舟底状	115×112×90	N-32°-E	

Tab. 3　土壙一覧表 (3)

(3) 炉址

炉址は調査区北端から南西方へやや孤状にのびる古砂丘尾根上に重複して連なり、総数は大小合わせると300基以上になる。これら炉址群は古砂丘尾根上に立地するのみで、東西の緩斜面上には1基もなく、明らかに砂丘尾根に占地することを意識したものである。

炉址は、まず古砂丘尾根の北端側より造営が始まり、大勢としては幾筋かに分かれながらも時間の経過とともに漸次南方へ移ってゆき、古砂丘尾根南端にまで至っている。その時期は弥生時代後期前半に始まり、後末には終焉をむかえる。平面形は馬蹄形のSR－266を除いてすべてが円形あるいは楕円形プランで、断面形は皿状あるいは浅い凹レンズ状である。規模は直径50cm内外の小型のものから5m余の大型のものまである。古砂丘尾根の北半部は大型のものが多く、重複も著しいが、南半部は小型のものが多くなり重複も少なくなる。炉址上に拡がる赤褐色砂の濃さ、拡さ、重複度や炉址中に含まれる土器片量はD・E－VI～IX区が最も顕著である。

次に、炉址内は焼けた赤褐色砂で埋まり使用頻度によって濃淡がある。周辺部には掻き出した灰の堆積層があり、大型のものは炉址を中心にドーナツ状に堆積しているものが多い。構造的には、A類：素掘りの炉址。B類：炉床及び炉壁に粘土を貼りつけた炉址。C類：炉床及び炉壁部に小礫石を敷いた炉址の概ね3タイプに分類される。このうちB類は完存するものが少なく、使用後に壊されて焼粘土塊が散在するものがほとんどを占める。C類も同様の傾向を示す。遺物は大型の炉ほど甕を主とする土器小片が炉内に敷きつめたように充ち、小型の炉は少ない。

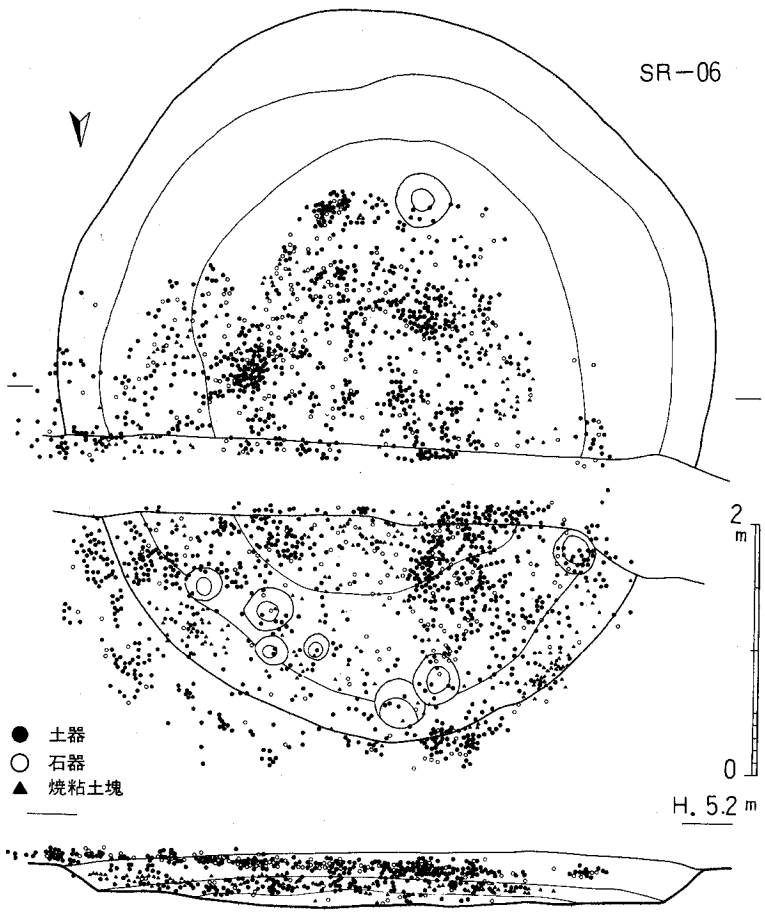


Fig. 164 SR－06実測図 (1/60)

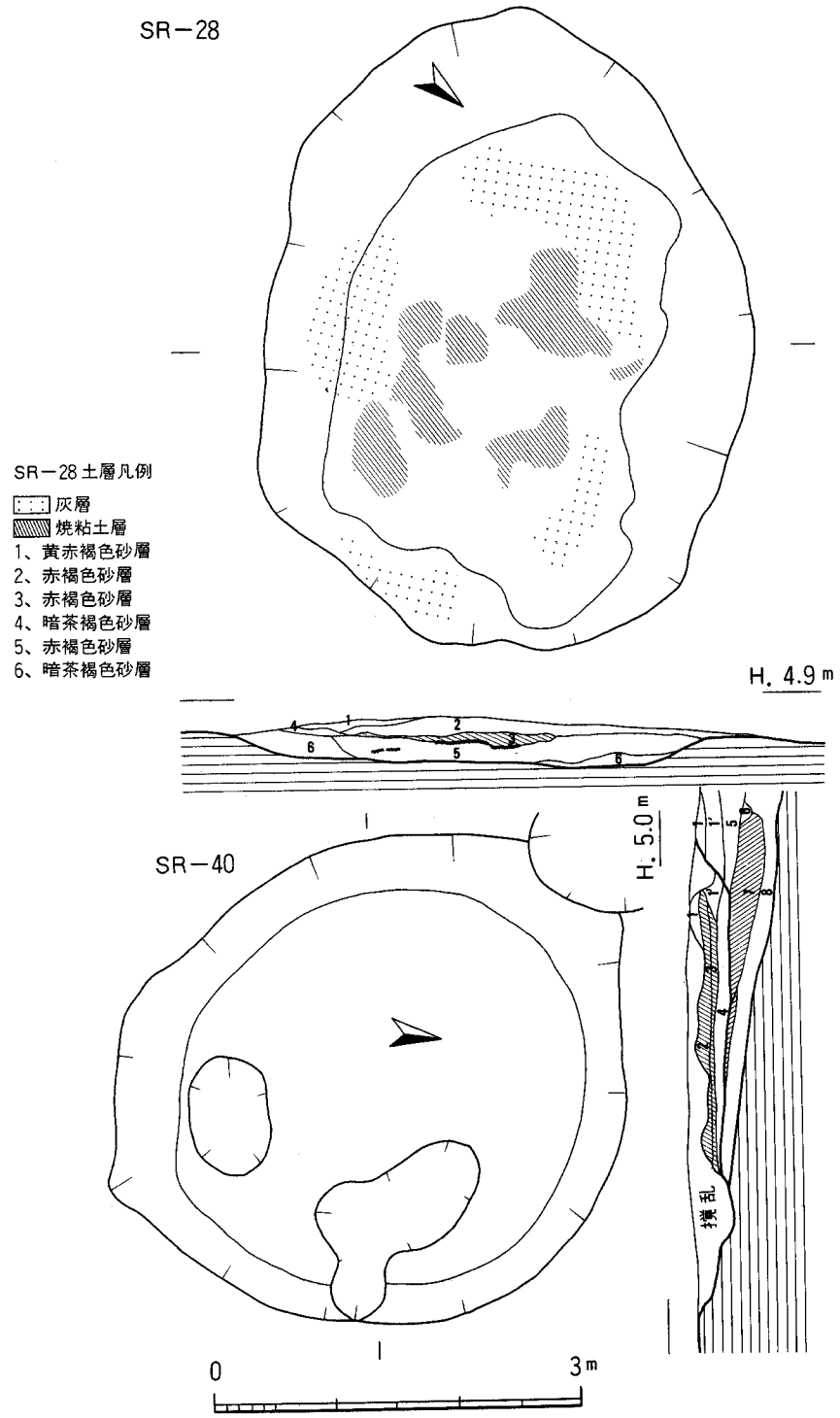


Fig. 165　SR－28・40実測図（1/60）

調査した300基をこえる炉は未だに詳細な検討を加えるに至っておらず、一覧表にしてその規模・形態等を示すにとどまった。

SR－06 (Fig.164)

E－VI区に検出した炉址で、古砂丘尾根の東側に位置する。SR－04の南2mの距離にあり、SR－61と重複する。平面形は5.92×5.24mの大型円形で、断面形は深さ43cmの皿状をなす。炉址内は焼粘土塊・小礫石の混入した濃赤褐色砂が厚くレンズ状に堆積し、下層には淡赤褐色砂が堆積する。土器片は多く、敷きつめた状態でほとんどが濃赤褐色砂中に含まれる。また、炉壁周辺には半環状に灰の掻き出しによる淡灰黒色砂の堆積がみられた。B類に属し、焼粘土塊は粘土床・壁の壊れたものであろう。

SR－28 (Fig.165)

E－III区に検出した炉址で、古砂丘尾根の北端に位置し、SR－30より北へ3mの距離にある。平面形は520×208cmの楕円形をなし、この中の265×250cmの範囲に粘土床を貼っている。粘土床までの深さは21cmで浅い凹レンズ状をなし、粘土の厚さは2cmである。炉心と粘土板周辺には灰の堆積層がブロック状に残

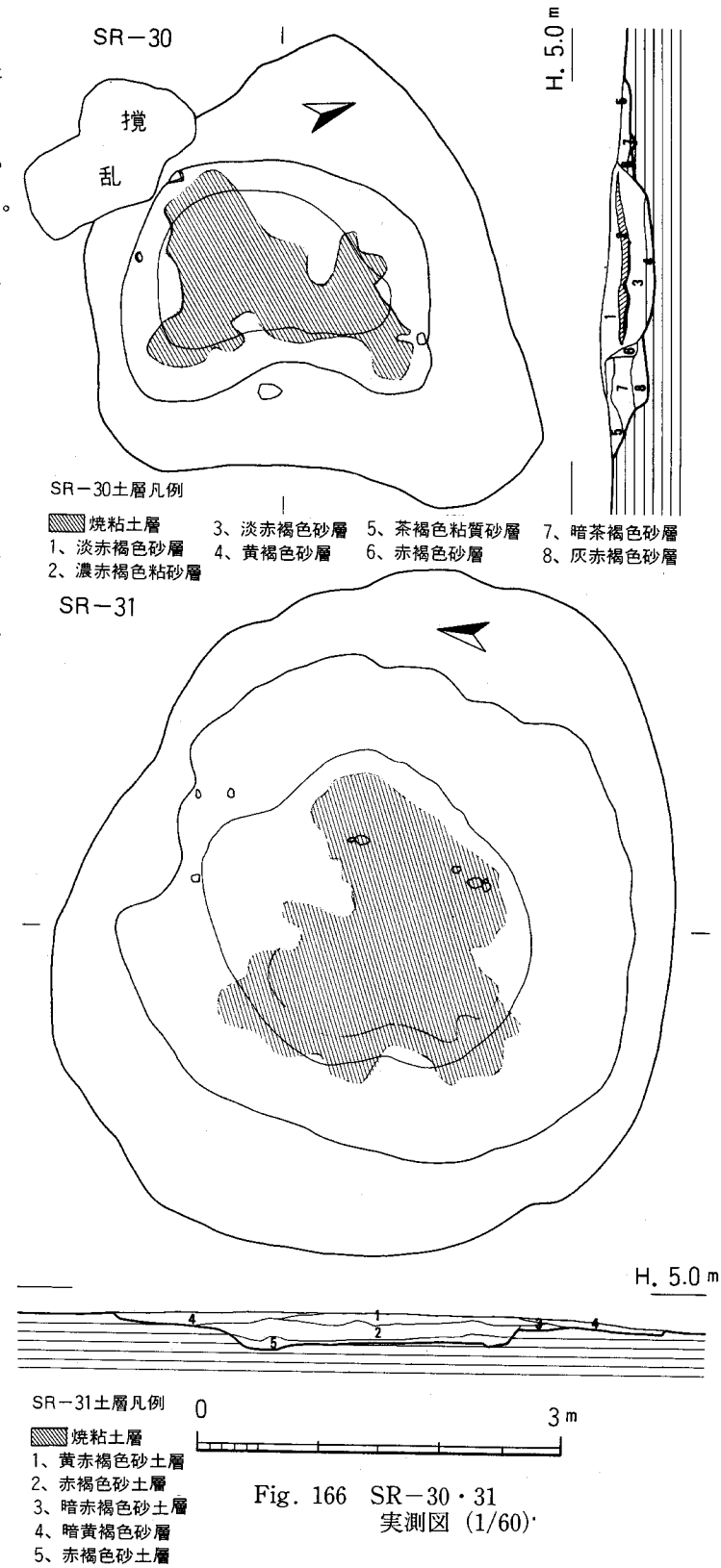


Fig. 166 SR－30・31 実測図 (1/60)

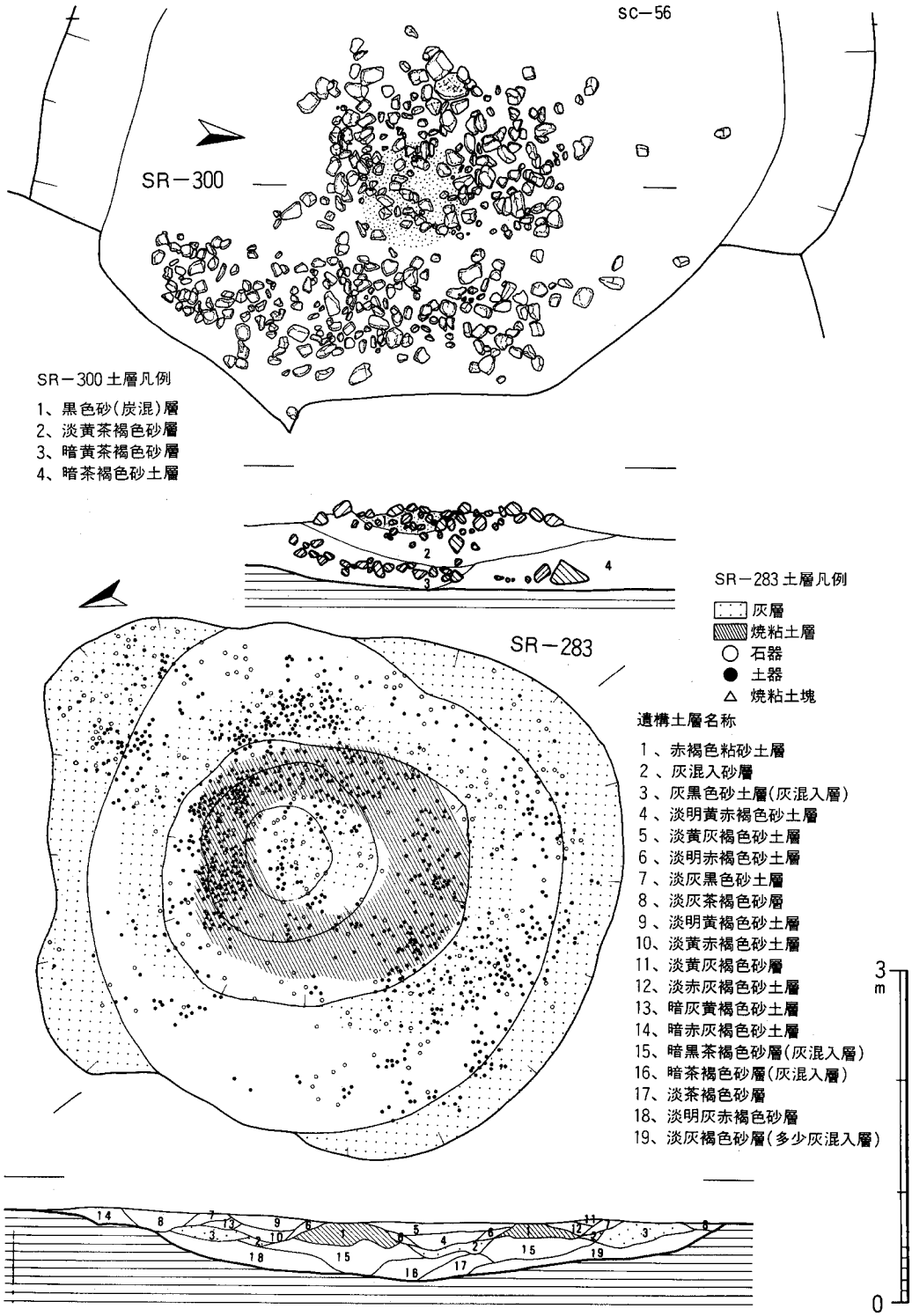


Fig. 167　SR−283・300実測図 (1/60)

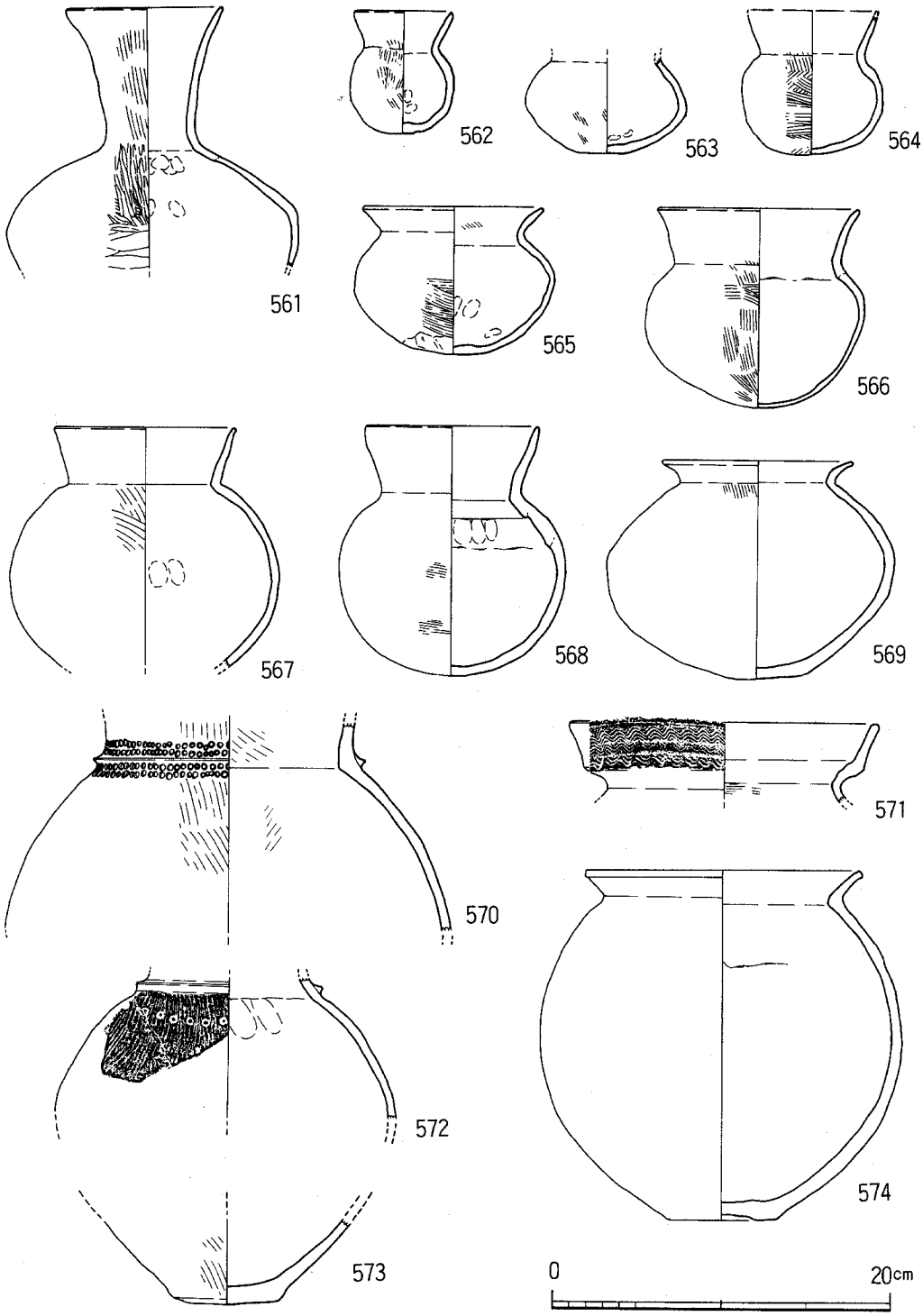


Fig. 168　SR出土土器実測図(1)（1/4）

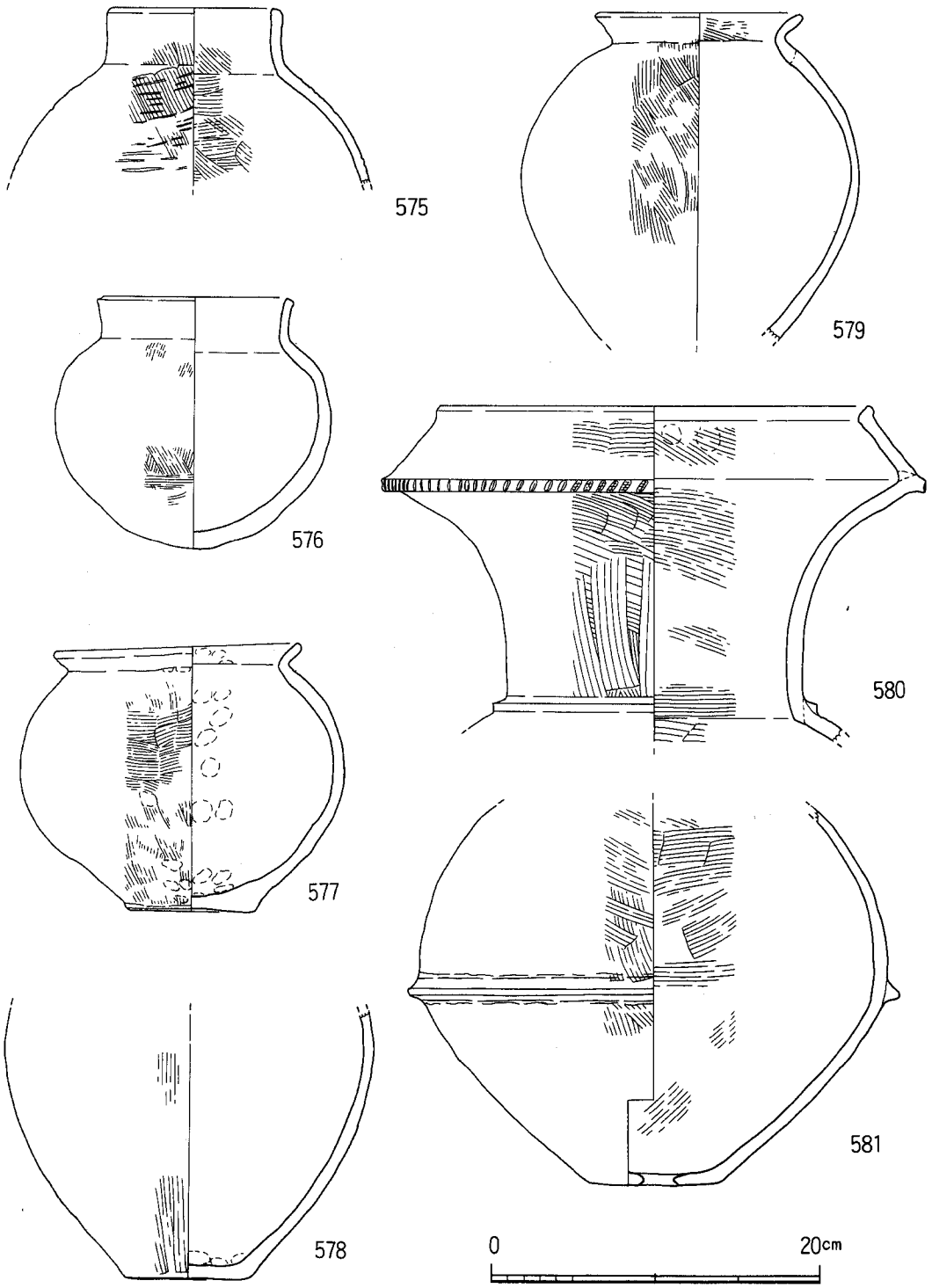


Fig. 169　SR出土土器実測図(2)（1/4）

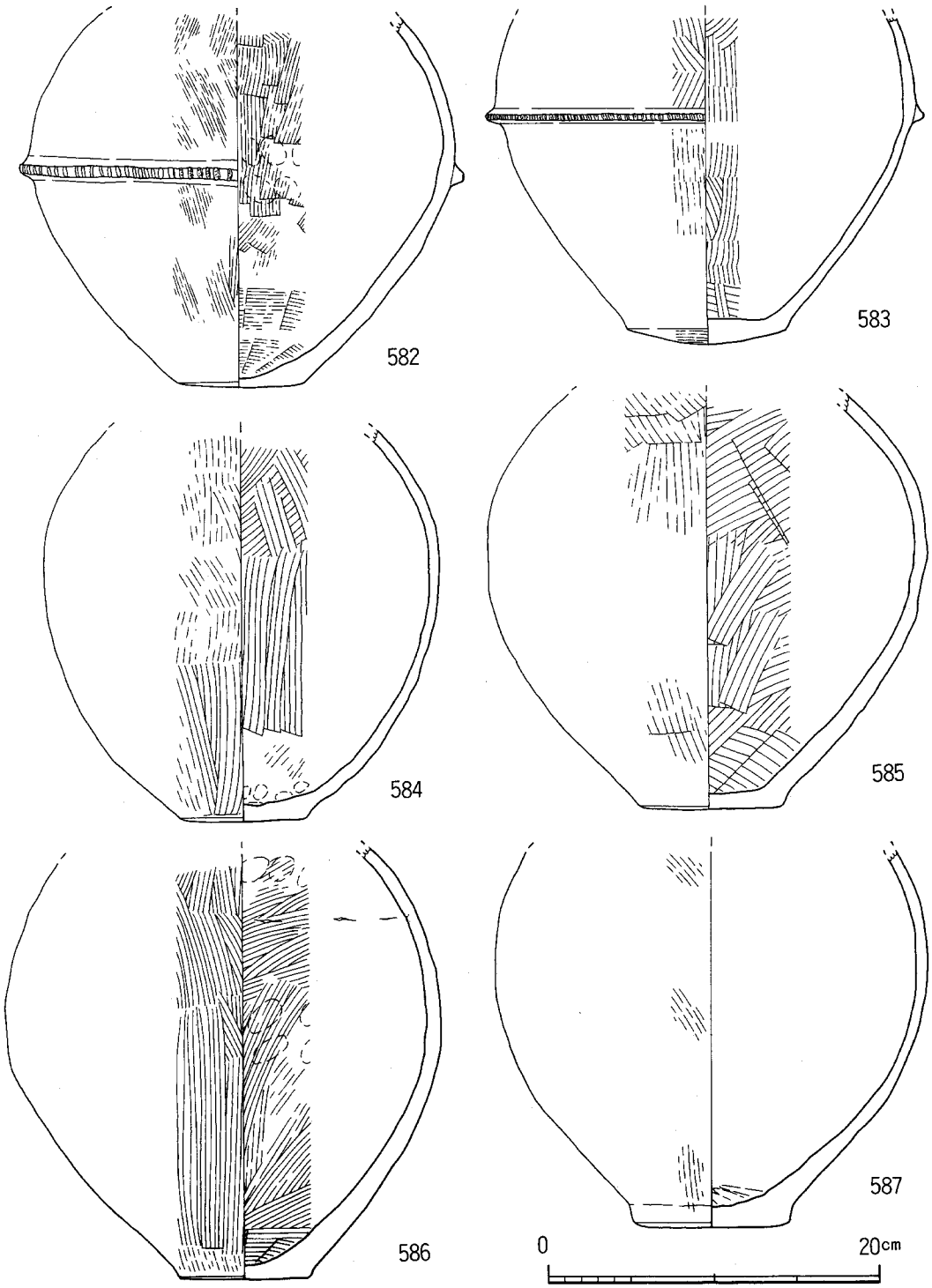


Fig. 170　SR出土土器実測図(3)（1/4）

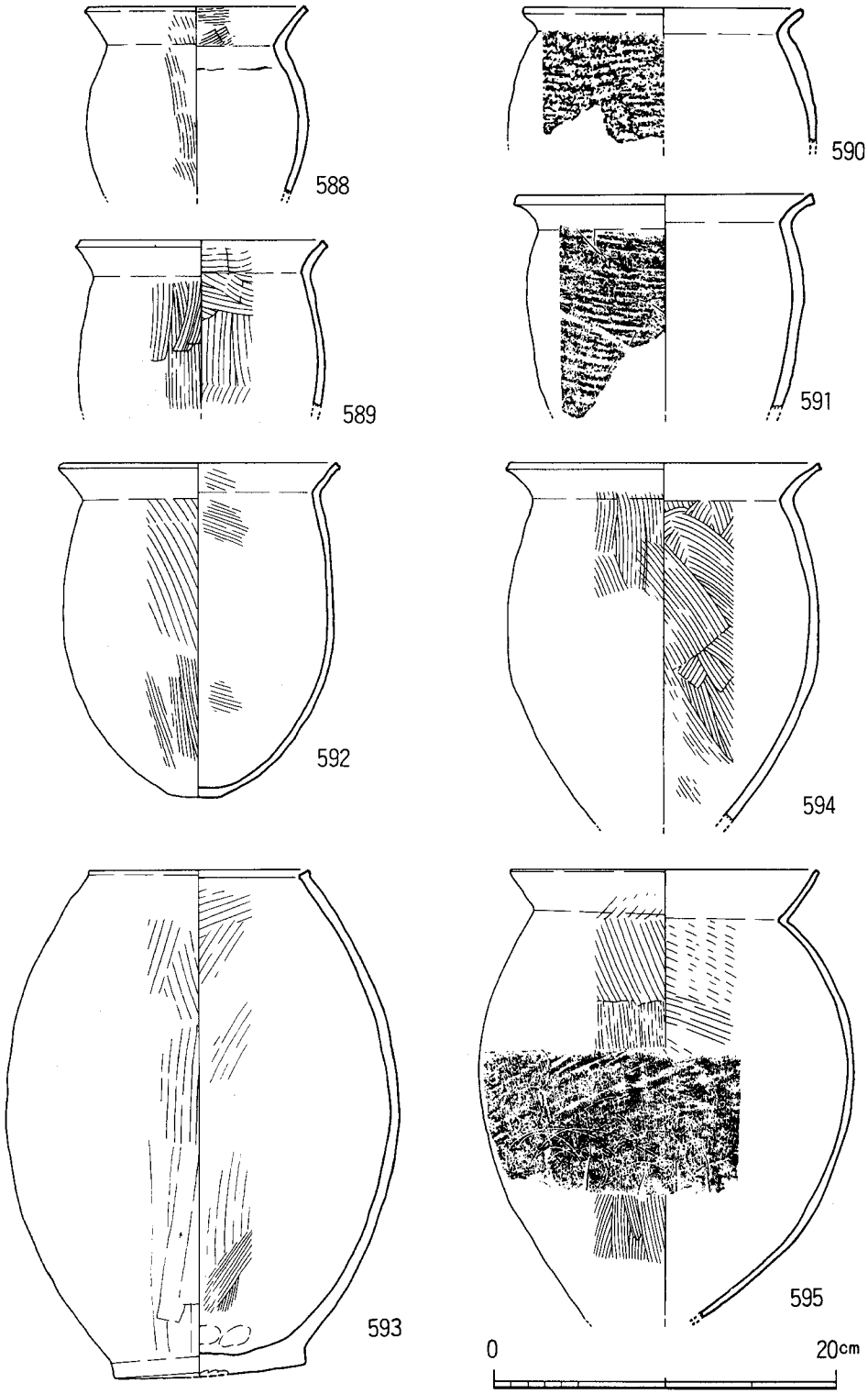


Fig. 171　SR出土土器実測図(4)（1/4）

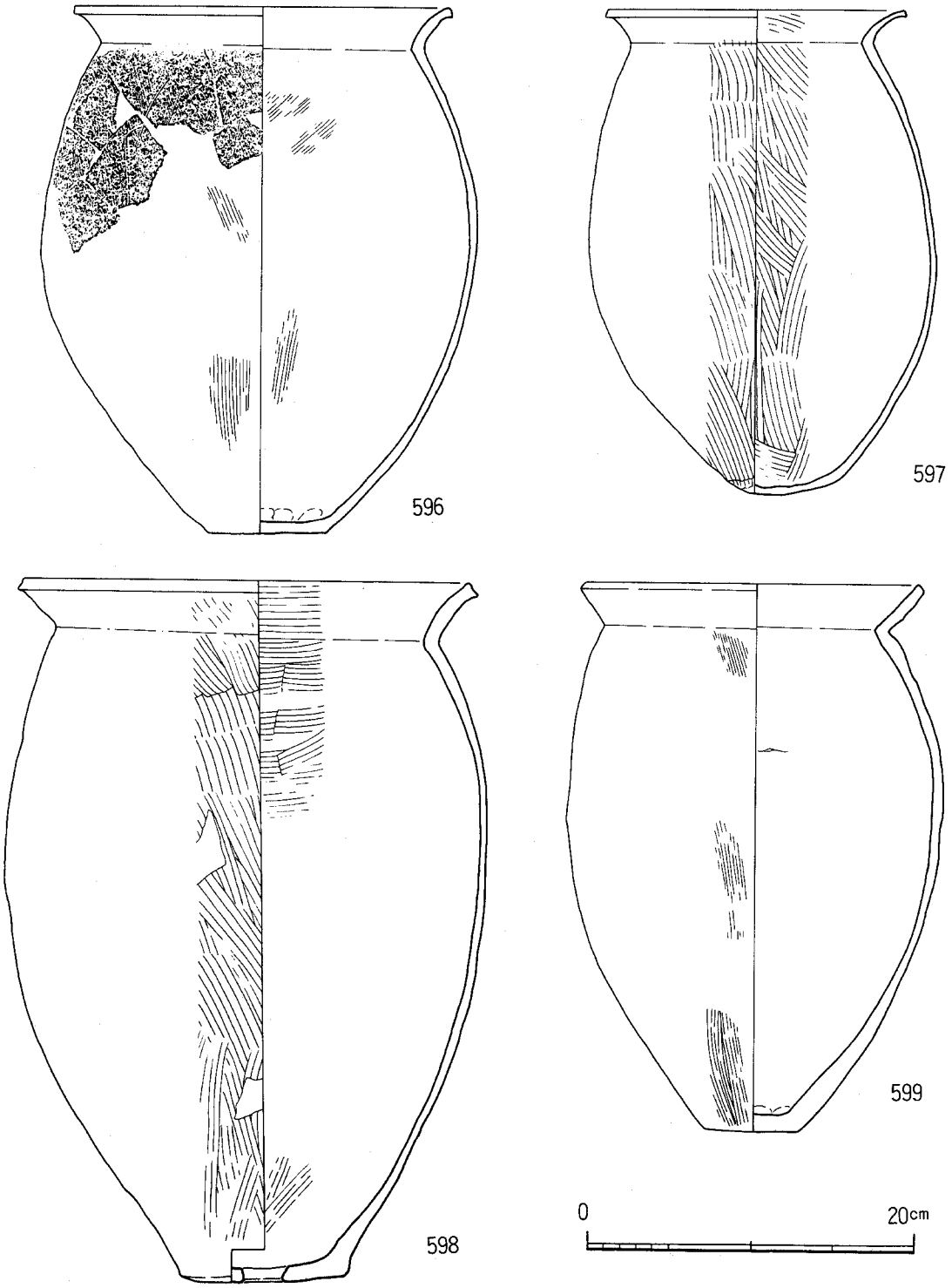


Fig. 172　SR出土土器実測図(5)（1/4）

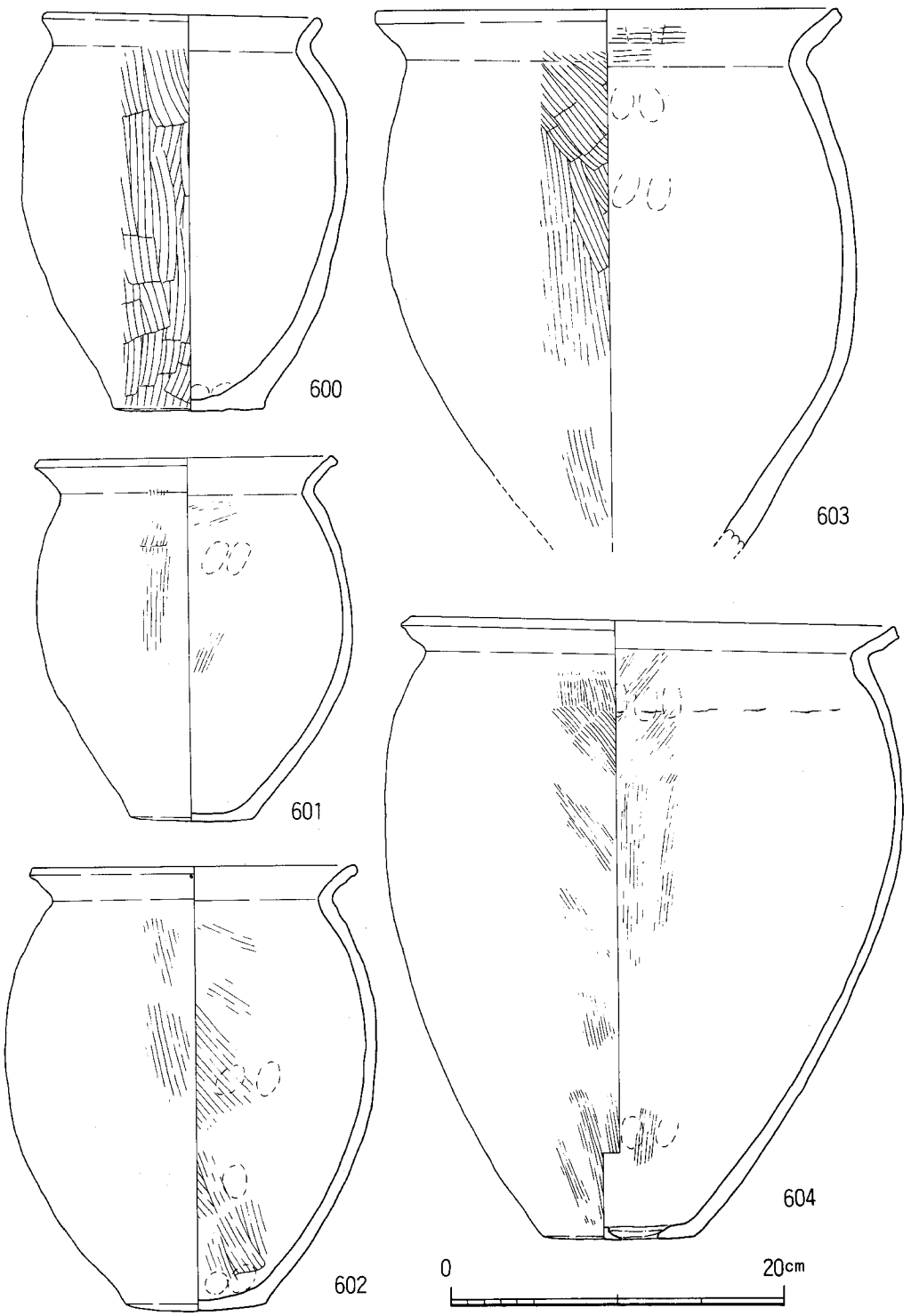


Fig. 173　SR出土土器実測図(6)（1/4）

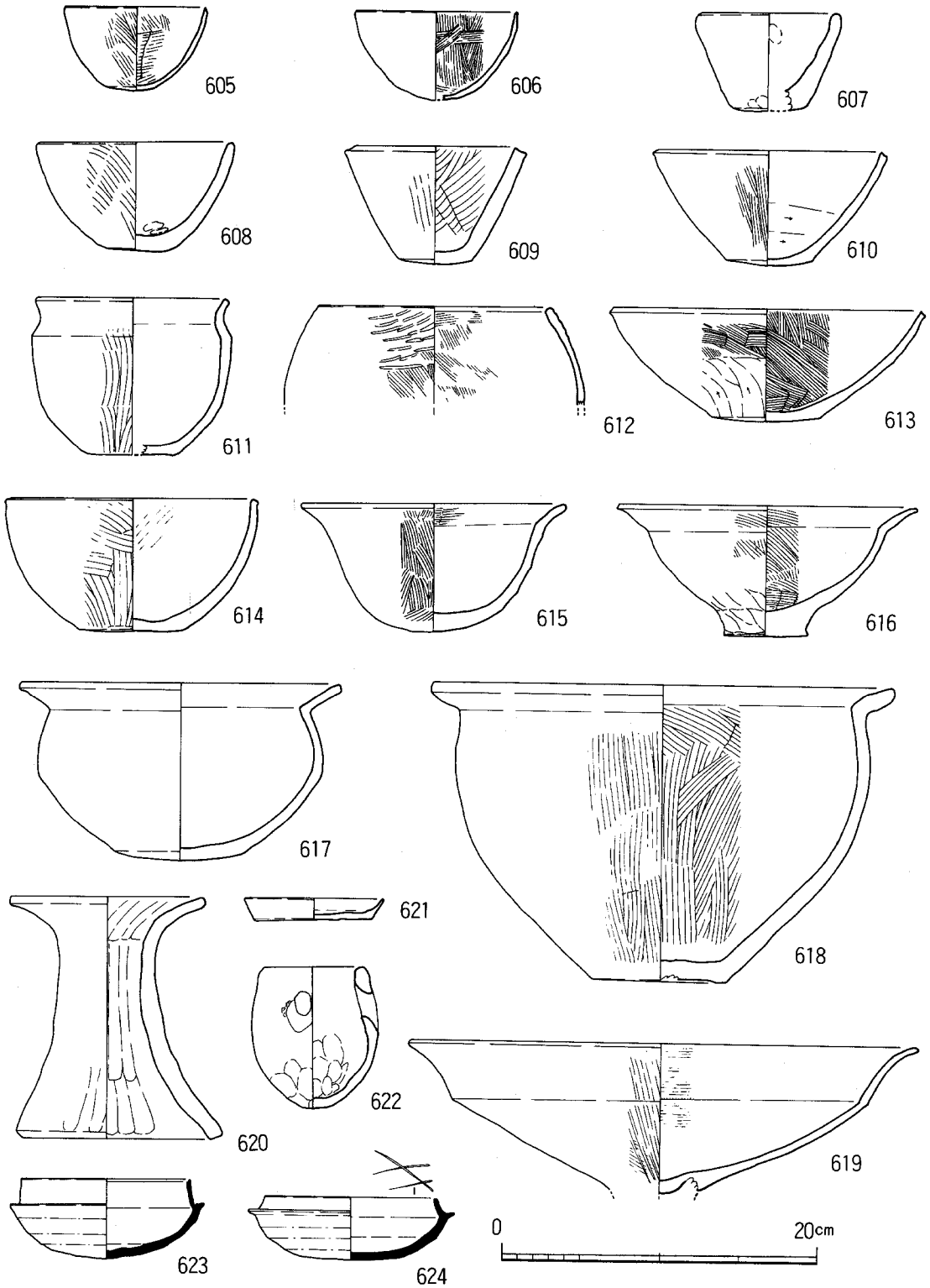


Fig. 174　SR出土土器実測図(7)（1/4）

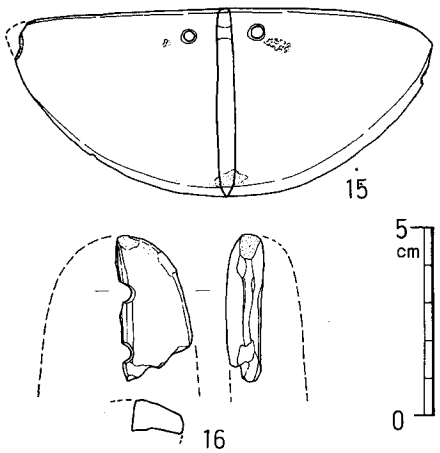


Fig. 175　SR出土石器実測図(1)（1/2）

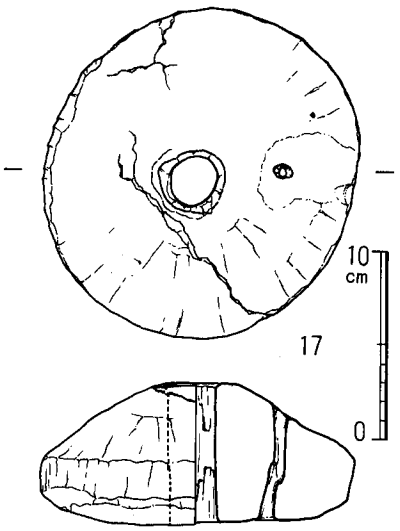


Fig. 176　SR出土石器実測図(2)（1/4）

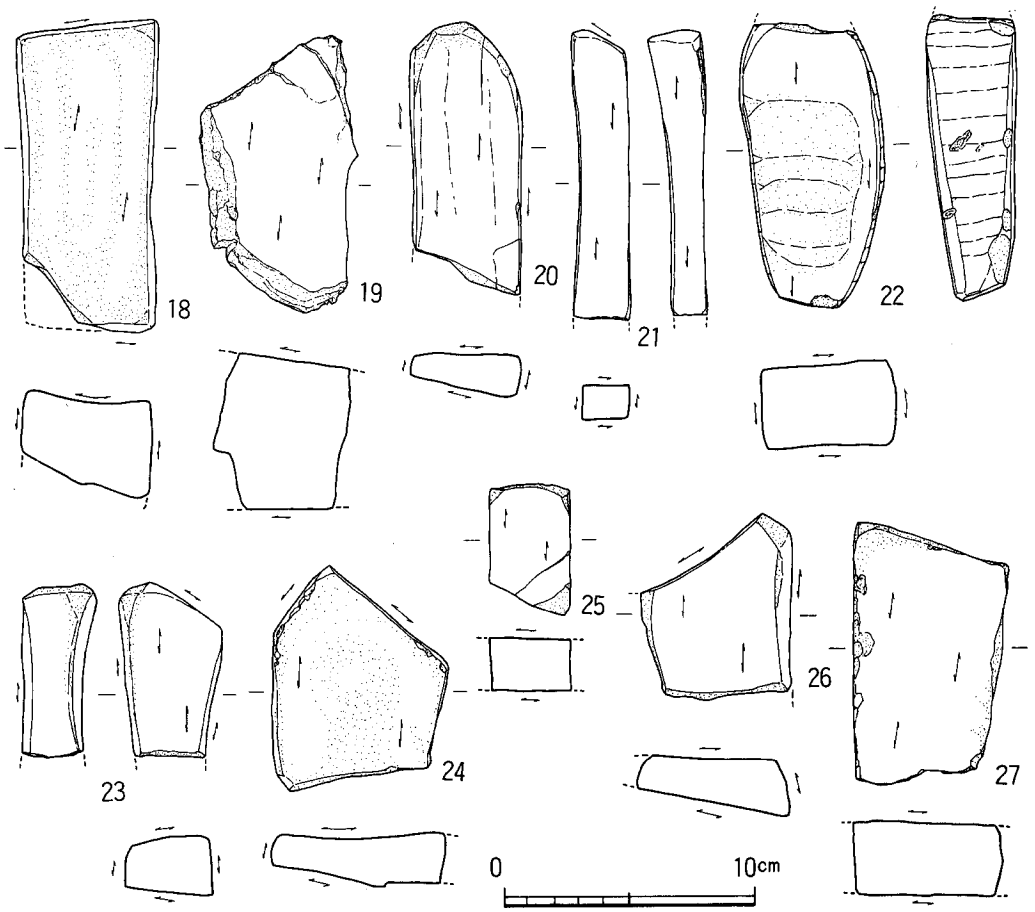


Fig. 177　SR出土石器実測図(3)（1/3）

る。上面には炉址を覆うように赤褐色砂が大きく拡がり、見かけ上は600×550cmの円形プランを呈する。遺物は少ない。B類に属する。

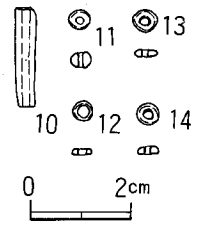


Fig. 178 SR出土玉実測図（2/3）

SR－30（Fig.166 PL.41）

D－III区に検出した炉址で、古砂丘尾根北端の西側に連なる一群中にあり、SR－31の北に隣接する。平面形は342×320cmの不整楕円形をなし、断面形は深さ40cmを測る舟底状を呈する。底面より20cmほどのところに厚さ2～3cmの粘土を一面に貼って炉床となしている。壁面の砂中にも半生焼けの黄褐色粘土ブロックがみられた。炉床は固く焼け、床下も赤変が著しい。炉址の四周には掻き出された灰の堆積がブロック状にみられた。遺物はほとんどない。B類に属する。

SR－31（Fig.166 PL. 41）

D－III区に検出した炉址で、古砂丘尾根北端の西側に連なる一群中にあり、SR－32の北2mの距離にある。平面形は426×405cmの不整円形をなし、断面形は深さ25cmの皿状を呈する。底面には厚さ2～4cmの粘土を一面に貼って炉床となしている。炉床は固くやけている。炉壁は緩く傾斜し、黄粘土ブロックを含むことから炉壁も粘土壁であったと推測される。また、炉の周囲には幅約1mの環状に灰の掻き出しによる堆積層がある。遺物は少ない。B類に属する。

SR－40（Fig.165）

E－IV区に検出した炉址で、古砂丘の尾根筋北側に位置しSR－50より北へ6mの距離にある。平面形は4.3×4.0mの円形で、深さ25cmを測る。断面形は皿状。炉址内は赤褐色砂で、焼粘土塊はなく、土器片も少ない。素掘りの炉址で、A類。炉址下層には間層を挟んで厚い赤褐色砂の堆積層があり、本炉址構築以前の炉址の存在が窺われる。

SR－283（Fig.167 PL. 42）

B－XI区に検出した炉址で、古砂丘尾根の南西端に位置する。SC－70と完全に重複し、竪穴住居址埋没後の凹みを利用して築かれている。炉址の平面形は255×220cmの楕円形プラン内に幅50～85cmの環状に粘土床が巡り、浅い凹レンズ状の炉心には灰層が堆積している。この環状の粘土床の外周には幅約1mの灰層が同心円状に巡る。これを含めると炉址は直径5.4mの円形になる。遺物は弥生時代後期の土器片が密に出土するが、粘土床下よりの出土はほとんどない。B類。

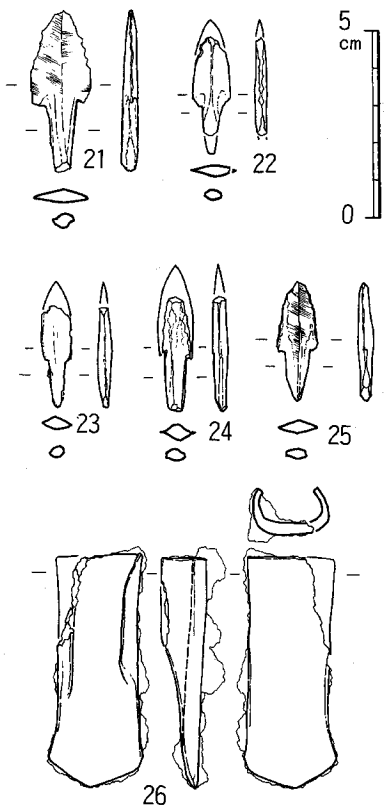


Fig. 179 SR出土青銅器・鉄器実測図（1/2）

SR－300 (Fig.167　PL. 47)

C－Ⅻ区に検出した炉址で、古砂丘尾根の南端部に位置する。SC－56と重複し、新しい。炉址は石敷き炉で、2度築かれている。はじめに竪穴住居址(SC－56)廃棄後の早い時期に一度築かれ、更に⅔ほど埋没した段階でもう一度築かれている。上層の炉址は平面形が東西4m、南北3mの楕円形プランを呈し、拳大から小児頭大の礫石を一面に重ね敷きしている。炉心は中央部南偏りに位置し、90cmの範囲に炭の多く混入した黒色砂がレンズ状に堆積し、四周の礫石も赤変していた。遺物は弥生時代後期の甕片が僅かに出土した。C類に属する。

出土遺物 (Fig.168～179)

壺形土器 (561～570・572・573・575～587) 580は二重口縁部の壺で、ＡＩ類のもの。口縁部は朝顔状に開き、鋭く屈曲して直線的に内傾する。端部は直交して外上方につまみ出す。581～587は同タイプの口縁部をもつ胴部であろう。胴部に三角凸帯の巡るものがある。561は口縁部は長くラッパ状に開くＢＩ類の長頸壺である。562～564・566～568は「く」字状の外反する口縁部をもつＢⅢ～Ｖ類のものである。575は球形の胴部に短く直口する口縁がつくＤＩ類。579は短い「く」字状の口縁部が大きく開くＥＩ類のもの。569・576・577はＦ類に属するものである。570・572は頸部に巡る凸帯の上下に竹管文を施すものである。

甕形土器 (571・588～604) 571は二重口縁をもつものでＣ類。574は「く」字状口縁をもつ短胴のものでＡＶ類。600は「く」字状の口縁部が短く開くものでＡⅥ類で、そのほかのものは口縁部が「く」字状に外反するＡＩ類のものである。593は「く」字状の口縁を頸部から箆で鋭く切りとったもので、端部を小さくつまみ出して口縁部を作っている。

鉢形土器 (610～618) 口縁部が「く」字状と素口縁のもので、浅手と深手のものがある。バリエーションに富みＡ～Ｆ類まである。

高坏 (619) 大型の坏部に細長いラッパ状に開く脚部がつくものでＡ類。

器台 (620) 受け部と脚部がラッパ状に開く筒状のもので、Ａ類。

手捏ね土器 (605～609) いずれも鉢形に類する素口縁のものでＤ類に属する。

蛸壺 (622) 口径5.8cmの砲弾状のもので、体部上位には内上方よりの穿孔がある。

土師Ⅲ (621) 口径8.6cmの糸切りの土師Ⅲである。

須恵器坏身 (623・624) 623は口径10.3cm。口縁部は蓋受けから小さく内傾した後に直口する。624は口径10.8cm。内面にヘラ記号がある。

石庖丁 (15) SR－80より出土したものである。背縁部はやや丸みをおびる。刃部は半月形を呈し、両面より砥ぎ出す。背縁部近くに内径3mmの円孔を一対穿つ。長さ11.1cm、幅5.0cm、厚さ5mm。粘板岩質。

石錘 (16・17) 16はSR－92より出土した扁平な釣鐘形の有溝・孔石錘で基部を欠く。縦方向

に１条の溝を配し、その溝上に直交する２孔を縦方向に配する。重さ10g。滑石製。17はＳＲ－93より出土した滑石製の大型有孔石錘である。形状はほぼ円形を呈し、断面形は扁平な算盤珠状。中央部には内径2.7×2.3cmの楕円形の主孔があり、２～３cm離れた位置に内径６mmの副孔がある。この副孔は上下両面より穿っているが、下面からは斜め方向に穿孔するために中央部で交錯する。径17.6×16.4cm、厚7.7cm、重さ3.0kg。大型有孔石錘中で貫通した副孔を有する唯一の資料である。この外に図示しなかった破片資料がSR－47・93・122・158より出土している。

砥石（18～27）いずれも欠損資料である。18・20～23・25は棒状で掌中に納まり易い形状をなし、欠損後もさらに掌に握って使用される例が多い。19・24・26・27はやや大型のもので研砥の機能とともに作業台的性格も兼ね備えていたものであろう。18は砂岩質でSR－01出土、19は泥岩質でSR－28出土、20は泥岩質でSR－47出土、21は泥岩質でSR－96出土、22はケイ質泥岩質でSR－131出土、23は泥岩質でSR－93出土、24は砂岩質でSR－142出土、25は泥岩質でSR－65出土、26は砂岩質でSR－126出土、27は泥岩質でSR－148出土。この外にも図示しなかった破片資料が多数ある。

管玉（10）長さ2.05cm、径４mm、重さ１gを測るもので、孔は同一の大きさで貫通している。

小玉（11～14）11はＳＲ－97出土のガラス丸玉で、色調はコバルトブルーを呈す。径4.2mm、厚さ1.5mm。12～14は臼玉である。12はＳＲ－200より出土。径４mm、厚さ1.4mmを測り内径２mmと大きめの孔を穿つ。13･14はＳＲ－299より出土した。13は径4.8mm、厚さ1.5mm。14は径4.25mm、厚さ1.4mm。12・14は蛇文岩質か。

銅鏃（21～25）いずれも有茎鏑造腸抉柳葉式に属する。断面形は身が菱形、茎が円～楕円形を呈する。21は身幅が1.5cmで他に比べてやや広く、茎部にはバリがでる。

鉄斧（26）長さ6.2cm、刃幅2.5cm、袋幅約2.2cm、袋厚さ約1.3cmを測る鍛造斧である。袋部は欠損しているところがあるが、短く簡単な折り曲げである。

炉 址 一 覧 表

遺構番号	グリット	平 面 形	法 量 (cm) 長さ×幅×深さ	方 位	備 考
SR-01	E-V	不整楕円形	300×270×22	N-81°30′-E	A
02	E-V. E-VI	楕 円 形	514×327×21	N-81°30′-E	A
03	E-VI	不整円形	343×337×42	N-8°30′-W	A
04	E-V	不整円形	454×450×28	N-2°15′-E	A
05	E-VI	不 整 形	338×274×29	N-30°-W	A
06	E-VI	円 形	590×512×43	N-5°-E	C・B′
07	E-VI	不整円形	545×452×34	N-81°30′-E	A
08	E-VI	不整円形	610×524×38	N-36°45′-E	A
09	G-VI	不整楕円形	450×372×20	N-8°30′-W	A
10	E-VI	円 形	530×470×32	N-81°30′-W	A
11	E-VII	不 整 形	415×273×12	N-26°-E	A
12	E-VII	不 整 形	458×420×20	N-81°30′-E	C
13	E-VII	不 整 形	468×210×22	N-81°30′-E	A
14	E-VII	隅丸長方形	460×422×18	N-24°-E	A
15	E-VII	円 形	360×330×17	N-8°-W	A・C
16	E-VII	不 整 形	270×150×13	N-8°30′-W	A
17	E-V	不整長方形	358×318×18	N-35°-E	A
18	E-V	不整円形	365×348×20	N-53°-W	A
19	E-V	円 形	154×136×14	N-63°30′-E	A
20	E-V	不整楕円形	360×320×14	N-29°30′-E	A
21	E-V	不整長方形	282×198×16	N-9°-E	A
22	F-IV	不整円形	404×400×10	N-90°-W	A
23	E-VII	不 整 形	482×223×40	N-8°30′-W	A
24	E-VII	不整円形	450×405×37	N-8°30′-W	A・C′
25	C-IX	不整円形	61×56×1	N-20°-E	B′
26	E-V	不整楕円形	440×350×12	N-67°-W	A
27					
28	D-III. E-III	円 形	565×555	N-8°30′-E	A
29	E-II. E-III	楕 円 形	427×410×14	N-81°30′-E	A
30	D-III	不 整 形	413×343×40	N-48°-E	B
31	D-III	不 整 形	550×478×30	N-81°30′-E	B
32	D-IV	隅丸方形	605×550	N-2°20′-W	B′
33	E-IV	円 形	286×286×19	N-82°30′-E	A
34	E-IV	不整楕円形	450×425×27	N-18°30′-E	C′
35	E-IV	円 形	275×275×9	N-85°-E	A
36	C-X	不整楕円形	93×66×8	N-81°30′-E	B′
37	D-IV	不整楕円形	373×238×16	N-9°-W	B′
38	D-IV. D-V	楕 円 形	480×410×8	N-8°30′-W	B′
39	E-IV	隅丸方形	438×306×18	N-84°30′-E	A
40	E-IV. E-V	円 形	400×468×25	N-8°30′-W	A

Tab. 4 炉址一覧表 (1)

炉 址 一 覧 表

遺構番号	グリット	平 面 形	法 量 (cm) 長さ×幅×深さ	方 位	備 考
SR-41	D-V. E-V	隅丸方形	455×433×35	N-81°30′-E	A
42	D-V	不整楕円形	310×264×23	N-8°30′-W	A
43	D-V	隅丸方形	506×420×16	N-8°30′-W	A
44	D-V	円 形	390×375×16	N-8°30′-W	B′
45	D-V	隅丸方形	510×490×18	N-81°30′-E	A
46	C-X	不 整 形	155×132	N-81°30′-E	A
47	C-IV	不整楕円形	202×133	N-34°-W	A
48	D-VII	不整方形	302×250×10	N-42°-E	A
49	D-V	円 形	170×162×21	N-81°30′-E	A
50	E-V	円 形	398×392×18	N-81°30′-E	B′
51	D-V	不整円形	253×240×15	N-8°30′-W	B′
52	D-VI	不整方形	442×436×22	N-8°30′-W	B′
53					
54	D-VI	楕 円 形	120×94×10	N-37°-E	A
55	D-VI	不 整 形	342×335×8	N-81°30′-E	B′
56	D-VI	不整方形	430×400×21	N-8°30′-W	B′
57	D-VI	円 形	282×282×13	N-81°30′-E	A
58	D-VI	不 整 形	154×105×10	N-19°30′-E	A
59	D-VII	円 形	356×330×20	N-8°30′-W	B′
60	D-V	不整楕円形	295×165×21	N-8°30′-W	A
61	E-VI	楕 円 形	360×335	N-8°30′-W	C＋B′
62	D-VII	円 形	170×160×22	N-81°30′-E	A
63	E-VIII	楕 円 形	325×280×29	N-9°-W	A
64	E-VII	隅丸方形	354×140×9	N-51°-E	A
65	E-VI	楕 円 形	420×375×32	N-81°30′-E	A
66	E-VI	楕 円 形	280×238×24	N-21°-W	B′
67	E-V	不整方形	384×374×25	N-8°30′-W	A
68					
69					
70	E-IV	隅丸方形	226×190×10	N-8°30′-W	B′
71	E-IV	不整方形	350×250×13	N-8°31′-W	A
72	E-IV	楕 円 形	137×155×9	N-8°40′-W	A
73	E-IV	隅丸方形	247×246×13	N-81°20′-E	A
74	D-VI	楕 円 形	423×417×32	N-8°30′-W	B′
75	D-VI	不整楕円形	324×239×10	N-8°30′-W	A
76	D-VI	円 形	241×240×22	N-81°30′-E	A
77	E-III	楕 円 形	230×213×40	N-83°-E	A
78	E-VI	楕 円 形	626×520×36	N-8°30′-W	B′
79	E-IV	楕 円 形	218×160×27	N-9°-W	B′
80	E-V	隅丸方形	186×166×13	N-8°30′-W	A

Tab. 5 炉址一覧表 (2)

炉 址 一 覧 表

遺構番号	グリット	平 面 形	法 量 (cm) 長さ×幅×深さ	方 位	備 考
SR-81	D-VII	円 形	424×338×30	N-81°30′-E	A
82	D-VII	楕 円 形	385×286	N-8°30′-W	A+C′
83					
84	D-VII	不整楕円形	225×182	N-21°30′-E	A
85	D-V	不 整 円 形	303×293×18	N-81°30′-E	B
86	D-VI	不整楕円形	300×192	N-11°20′-E	A
87	D-VI	隅 丸 方 形	262×202×6	N-81°30′-E	A
88	E-V	楕 円 形	240×110×34	N-8°30′-W	B′
89	E-V	隅 丸 方 形	130×110×28	N-81°30′-E	B′
90					
91					
92	D-VII	円 形	486×438×43	N-90°-W	B′
93	E-VII	不 整 円 形	460×440	N-81°30′-E	B′
94	D-VII	楕 円 形	140×132×26	N-17°-E	B′
95	D-VII	楕 円 形	180×160	N-15°-E	B′
96	D-VII	不 整 円 形	358×245×20	N-81°30′-E	A
97	E-VI	不 整 円 形	270×240	N-78°-W	A
98	D-VI	楕 円 形	170×130	N-22°-E	A
99					
100	C-IV	楕 円 形	86×70	N-4°40′-W	A
101	D-VII	不整楕円形	175×88×30	N-70°30′-E	B′
102	D-VII	不整楕円形	445×308×18	N-81°30′-E	B′
103	E-VI	円 形	170×150×36	N-81°30′-E	B′
104	D-VI	円 形	195×193×17	N-81°30′-E	B′
105	E-V	楕 円 形	115×72×23	N-18°-E	B′
106	D-VI	不 整 円 形	305×253	N-81°30′-E	A
107	D-VI	楕 円 形	98×76×12	N-81°30′-E	B′
108	D-VI	楕 円 形	160×137×23	N-81°30′-E	B′
109	D-VI	不 整 形	170×110×8	N-8°30′-W	B′
110	D-VI	不整楕円形	356×232×25	N-8°30′-W	B′
111					
112		不 整 円 形	496×440×23	N-9°-E	B′
113	E-VII	楕 円 形	100×55	N-44°-E	B′
114	C-IV	楕 円 形	40×30	N-82°-E	A
115	D-VII	円 形	174×150×21	N-38°30′-E	A
116	D-VII	楕 円 形	315×202	N-23°-E	B′
117	D-VII	楕 円 形	310×114×23	N-10°30′-E	B′
118	E-VII	楕 円 形	190×128×20	N-35°20′-W	A
119	D-VII	楕 円 形	350×220×13	E-2°-S	B′
120					

Tab. 6 炉址一覧表 (3)

炉 址 一 覧 表

遺構番号	グリット	平 面 形	法 量 (cm) 長さ×幅×深さ	方 位	備 考
SR-121	D-Ⅶ	楕 円 形	146×56×32	N-55°30′-E	A
122	D-Ⅶ	不 整 形	546×542×54	N-10°-E	A
123	D-Ⅶ	不 整 形	583×432×49	N-74°30′-W	A
124	D-Ⅶ	不 整 形	× ×26		A
125	D-Ⅶ	不 整 形	448×118	N-74°-W	B′
126	D-Ⅷ	円 形	280×268×23	N-81°30′-E	B′
127	D-Ⅷ	不 整 形	220×215×14	N-77°-W	B′
128	D-Ⅷ	楕 円 形	293×260	N-8°30′-W	C′
129	D-Ⅷ	楕 円 形	300×130	N-8°-E	A
130					
131	E-Ⅷ	楕 円 形	450×300	N-4°-E	A
132	D-Ⅷ	不整楕円形	320×280	E-2°-S	A
133	D-Ⅷ	円 形	308×303	N-8°30′-W	A
134	D-Ⅷ	不整円形	390×385×32	N-8°30′-W	B′
135	D-Ⅷ	円 形	404×366×18	N-32°30′-W	B′
136	D-Ⅷ	隅丸方形	407×355×28	N-8°30-W	B′
137	D-Ⅶ	不 整 形	250×215×49	N-9°-E	A
138					
139	D-Ⅷ	不整円形	542×462×18	N-35°-W	A
140					
141	D-Ⅷ	楕 円 形	350×230	E-1°-S	A
142	D-Ⅷ	楕 円 形	428×352×34	N-40°-E	A
143	D-Ⅷ	不 整 形	255×153×13	N-81°30′-E	A
144	D-Ⅷ	不整円形	120×15	N-8°30′-W	B′
145	D-Ⅷ	不 整 形	158×180	N-27°10′-E	A
146	D-Ⅷ	円 形	98×95	N-81°30′-E	A
147	D-Ⅷ	不整円形	120×115	N-8°30′-W	A
148	D-Ⅷ	不整方形	429×327×44	N-40°-W	A
149	D-Ⅸ	楕 円 形	270		A
150	D-Ⅸ	楕 円 形	200×170	N-10°-E	A
151	D-Ⅷ	楕 円 形	154×82	N-49°-E	A
152	C-Ⅸ	不整楕円形	372×324×30	N-33°15′-W	B′
153	B-Ⅻ	不整円形	348×300×20	N-72°30′-E	A
154	B-Ⅺ	不 整 形	320×235	N-81°30′-E	A
155	B-Ⅺ	楕 円 形	490×216×52	N-43°-W	C′
156	B-Ⅺ	楕 円 形	508×244×46	N-47°30′-E	A
157	B-Ⅺ	不整楕円形	336×256×16	N-29°45′-W	A
158	B-Ⅺ	不整長楕円形	420×330×38	N-53°-W	A
159	B-Ⅺ	不整楕円形	420×226×34	N-43°-E	A
160	B-Ⅺ	楕 円 形	178×135×17	N-10°30′-E	A

Tab. 7 炉址一覧表 (4)

炉 址 一 覧 表

遺構番号	グリット	平 面 形	法 量 (cm) 長さ×幅×深さ	方 位	備 考
SR-161	B-XI	不整長方形	202×96×24	N-11°-E	A
162	B-XII	不 整 形	262×190×12	N-64°30′-W	A
163	B-XII	不 整 形	320×221×24	N-82°15′-E	A
164	B-XI	不 整 形	345×150	N-8°30′-W	A
165	B-XI	長楕円形	423×105	N-11°30′-E	A
166	D-VIII	不整方形	56×26	N-56°20′-W	A
167	D-VIII	楕 円 形	211×130×28	N-28°-E	A
168	D-VIII	楕 円 形	198×145×39	N-50°-W	A
169	D-VIII	円 形	100×93×24	N-81°30′-E	A
170	D-VIII	不 整 形	115×80×8	N-72°30′-W	A
171	D-VIII	不 整 形	193×152×43	N-71°-E	A
172	D-VIII	不 整 形	148×120×30	N-51°30′-W	A
173	D-VIII	円 形	225×210×7	N-8°30′-W	A
174	D-VIII	不 整 形	308×250×52	N-8°30′-W	A
175	D-VIII	不整楕円形	190×150	N-12°-E	B′
176	D-IX	不 整 形	401×284×34	N-65°30′-E	B′
177	D-IX	円 形	180×160×38	N-29°-W	A
178	C-IX	長楕円形	486×380×54	N-66°15′-W	A
179	C-VIII	不 整 形	341×326×24	N-83°30′-E	A
180	C-VIII	長楕円形	318×240×24	N-81°-E	A
181	C-IX	不整長方形	450×256×33	N-20°-E	A
182	C-IX	長楕円形	325×253×45	N-17°30′-E	A
183	C-IX	不 整 形	397×348×9	N-8°30′-W	A
184	C-IX	不整円形	152×148×20	N-13°15′-W	A
185	C-IX	円 形	164×154×30	N-56°30′-W	A
186	C-IX	楕 円 形	137×106×18	N-2°30′-E	A
187	C-IX	長楕円形	174×115×29	N-25°-W	A
188	C-IX	楕 円 形	215×172×36	N-13°15′-W	A
189	C-IX	不整楕円形	192×152×30	N-3°30′-W	A
190	C-IX	円 形	167×154×26	N-40°15′-W	A
191	B-X・C-X	不 整 形	300×195×31	N-35°-E	B′
192	B-X	不 整 形	290×95×29	N-8°30′-W	B′
193	D-IX	円 形	452×443	N-8°30′-W	A
194	D-IX	不 整 形	290×140×8	N-81°30′-E	B′
195	D-IX	不整長方形	388×289×44	N-21°-E	A
196	C-IX	楕 円 形	239×180×21	N-52°-E	A
197	C-IX	円 形	175×165×18	N-72°-W	A
198	D-IX	不整円形	197×195×24	N-3°-W	B′
199	D-IX	円 形	200×178×22	N-81°30′-E	A
200	D-IX	不整楕円形	245×200×28	N-89°-E	B′

Tab. 8 炉址一覧表 (5)

炉 址 一 覧 表

遺構番号	グリット	平 面 形	法 量 (cm) 長さ×幅×深さ	方 位	備 考
SR-201	D-IX	不整方形	246×210×22	N-35°30′-E	A
202	D-IX	不整円形	289×280×29	N-81°30′-E	A
203	D-IX	不整円形	279×260×22	N-3°E	A
204	C-X	不整円形	360×320×18	N-2°-W	A
205	C-X	円 形	215×200×26	N-47°-E	A
206	C-X	長楕円形	198×140×23	N-8°30′-W	A
207	C-IX	不整円形	187×156×13	N-82°30′-W	A
208	C-IX	不整円形	151×148×19	N-19°-W	A
209	C-IX	不整長方形	222×156×9	N-69°-W	A
210	C-IX	不整楕円形	133×100×22	N-90°-W	A
211	C-X	不整円形	224×187×27	N-81°30′-E	A
212	C-X	不整楕円形	287		A
213	D-IX	不整長方形	143×114×13	N-64°-W	A
214	D-IX	不整長楕円形	114×97×16	N-8°30′-W	A
215	C-X	不 整 形	392×300×	N-81°30′-E	B′
216	C-IX	不整楕円形	106×96×28	N-12°30′-E	A
217	C-IX	不整楕円形	96×75×1	N-81°30′-E	A
218	C-IX	円 形	75×67	N-81°30′-E	A
219					
220	C-IX	不整方形	254×210×21	N-22°-E	A
221	D-IX	不整楕円形	141×79×20	N-81°30′-E	A
222	C-X	不 整 形	180×135×20	N-8°30′-W	B′
223	C-X	不 整 形	240×186×25	N-8°30′-W	B′
224	C-X	不整楕円形	176×117	N-8°30′-W	B′
225	C-X	楕 円 形	118×58	N-43°-W	B′
226	C-X	長楕円形	334×121×15	N-81°30′-E	A
227	C-X	不整楕円形	166×116×17	N-47°-E	A
228	C-X	不 整 形	283×208	N-22°-E	A
229	C-IX	不 整 形	231×164×9	N-37°-W	A
230	C-IX	不 整 形	260×150×22	N-89°-W	A
231	C-IX	不 整 形	335	N-29°-E	A
232	C-X	不 整 形	259×158×12	N-81°30′-E	A
233	C-X	円 形	113×95×18	N-81°30′-E	A
234	C-X	不 整 形	234×206×18	N-37°-E	B′
235	C-X	楕 円 形	127×103×25	N-49°-W	A
236	D-X	楕 円 形	63×55×11	N-8°30′-W	A
237	D-X	楕 円 形	395×306×14	N-1°30′-E	A
238	C-X	円 形	147×140×10	N-8°30′-W	A
239	C-X	不整円形	119×64×23	N-81°30′-E	B′
240	C-X	楕 円 形	73×59×14	N-20°30′-E	B′

Tab. 9 炉址一覧表 (6)

炉 址 一 覧 表

遺構番号	グリット	平面形	法量（cm） 長さ×幅×深さ	方位	備考
SR-241	C-X	不整長楕円形	194×124×16	N-13°-E	B′
242	C-X	円　　形	310×272×20	N-3°30′-E	B′
243	C-X	円　　形	91×65×10	N-81°30′-E	A
244	C-XI	円　　形	250×246×13	N-81°30′-E	A
245	C-XI	円　　形	167×160×13	N-81°30′-E	A
246	C-XI	円　　形	280×277×38	N-81°15′-W	A
247	C-XI	円　　形	150×148×14	N-81°30′-E	A
248	D-X	不整円形	220×180	N-81°30′-E	A
249	D-IX	不整楕円形	141×114×19	N-81°30′-E	A
250	C-IX	不整方形	294×278×35	N-49°30′-W	B′
251	C-IX	方　　形	177×160×18	N-5°-E	A
252	D-IX	円　　形	85×82×10	N-8°30′-W	A
253	D-IX	不整楕円形	207×150×17	N-56°-W	A
254	C-X	不　整　形	466×458×20	N-81°30′-E	A
255	C-IX	長楕円形	170×120×18	N-27°-E	B′
256	C-IX	円　　形	85×84×19	N-30°-W	A
257	C-X	不整楕円形	114×88×12	N-25°30′-E	A
258	C-X	不整円形	59×49×8	N-81°30′-E	A
259	C-IX	不整楕円形	113×81×16	N-51°-E	A
260	D-IX	円　　形	275×273×11	N-81°30′-E	B′
261	C-IX	不　整　形	263×180	N-26°30′-W	B′
262	C-X	不　整　形	172×145×5	N-8°30′-W	A
263	C-XI	不整円形	230×172×26	N-40°30′-W	A
264	C-XI	円　　形	208×183×18	N-21°10′-W	A
265					
266	B-XI	馬　蹄　形	730×650×28	N-32°-E	A
267	C-XI	円　　形	511×490×35	N-81°30′-E	A
268	C-XI	不整円形	282×247×24	N-34°30′-W	A
269	C-XI	隅丸方形	331×311×49	N-60°-W	A
270	C-XI	楕　円　形	277×183×27	N-42°10′-E	C′
271	C-XI	楕　円　形	240×182	N-52°40′-W	A
272	C-XI	円　　形	363×345×41	N-8°30′-W	C′
273	C-XI	隅丸方形	195×234×32	N-81°30′-E	A
274	C-X	不整円形	272×262	N-8°30′-W	B′
275	C-XI	不　整　形	183×160×33	N-17°30′-E	A
276	C-X	不　整　形	336×254×36	N-26°30′-E	B′
277	C-X	円　　形	195×188×23	N-81°30′-E	A
278	C-X	楕　円　形	218×158×22	N-8°30′-W	A
279					
280					

Tab.10　炉址一覧表（7）

炉 址 一 覧 表

遺構番号	グリット	平面形	法量（cm） 長さ×幅×深さ	方位	備考
SR-281					
282	B-XII	不 整 形	400×235	N-81°30′-E	B′
283	B-XI	不整円形	533×435	N-81°30′-E	C・B′
284	B-XI	不 整 形	254×108	N-50°-W	B′
285	C-X	不整楕円形	230×180	E-7°-S	B′
286	C-X	不整楕円形	200×120	E-41°-S	B′
287	B-XI	不 整 形	281×170	N-8°30′-W	B′
288	B-X	不整楕円形	363×250	N-8°30′-W	A
289	C-IX	楕 円 形	54×43×17	N-81°30′-E	B′
290	C-IX	不 整 形	43×24	N-39°30′-E	B′
291	D-IX	不整楕円形	180×107×5	N-81°30′-E	B′
292	C-X	不 整 形	252×198×11	N-81°30′-E	A
293	C-X	不 整 形	46×16	N-81°30′-E	A
294	C-X	不整円形	70×52	N-81°30′-E	A
295	C-X	不 整 形	92×65×3	N-42°-E	B′
296	C-X	不整形隅丸 長 方 形	92×35	N-19°30′-E	B′
297	C-X	円 形	46×46	N-81°30′-E	B′
298	C-X	長楕円形	87×61	N-19°′-E	B′
299	B-XII	不整円形	318×300	N-8°30′-W	B′
300	C-XII	不整円形	450×360	N-83°30′-E	C
301	D-VII	楕 円 形	127×90	N-81°30′-E	C
302	D-VII	楕 円 形	213×190	N-81°-E	C
303	C-IX	円 形	245×187	N-42°-E	C
304	D-IX	楕 円 形	190×115	N-81°30′-E	C
305	D-IX	楕 円 形	220×152	N-2°-E	C
306	E-IX	円 形	160×145	N-81°30′-E	C
307	D-X	不整円形	205×210	N-8°30′-W	C
308	D-X	円 形	326×330	N-8°30′-W	C
309	D-X	楕 円 形	138×68	N-81°30′-E	C
310	D-X	円 形	190×186	N-1°30′-E	C
311	D-X	円 形	276×253	N-40°-E	C
312	B-XI	円 形	143×105	N-8°30′-W	C
313	C-XI	円 形	172×150	N-81°30′-E	C
314	C-XI	円 形	225×200	N-81°30′-E	C
315	C-XI	円 形	540×515	N-81°30′-E	C
316	C-XII	円 形	350×320	N-81°30′-E	C
317	C-IX	円 形	100×80	N-81°30′-E	C
318	C-XII	円 形	145×140	N-81°30′-E	C
319	C-XII	円 形	390×330	N-81°30′-E	C

Tab.11 炉址一覧表 (8)

(4) その他の遺構と包含層の遺物

調査区の中央には、北端から南西方向へ緩やかに弧状にのびる古砂丘が形成されていた。この古砂丘尾根上には多数の炉址を伴う弥生時代後期の集落址が形成されていた。これに対して弥生時代終末から古墳時代になると尾根東側の緩斜面上に集落址は移動する。これは生活空間の拡大と東側緩斜面の埋没の進行を窺わせるものである。

このうち弥生時代後期の集落址が営まれた古砂丘尾根上には竪穴住居址や炉址の狭間を縫うようにして倒置甕が点在している(Fig.180)。これらの甕は2・3の例を除いてほとんどが単基で存在し、口縁部を打ち欠いたものである。また、甕を埋置した土壙も検出できなかった。

No.3～5号甕 (Fig.181)

E－XI区で検出した甕で、SR－10の南隅に3基並んであり、10～20° の傾きをもってる。No.5は胴上半より打欠く。2次焼成痕はなく、状況からして炉址以前のものと推定される。

No.7・8号甕 (Fig.181)

D－VIII区で検出したもので、SK－86内に重複してあり、No.9・10より以東へ約6mの距離にある。ほぼ垂直に倒置した甕の下部に蓋をするようにして鉢を接している。

No.9・10号甕 (Fig.181)

D－VIII区に検出した甕で、SR－142の南隅に並置する。両者とも口縁部直下より打欠き、ほぼ垂直に倒置する。D－VIII区には西側10mの範囲内に5基の倒置甕が近接して一群をなす。

No.11号甕 (Fig.181)

D－IX区で検出したもので、SC－73の南西隅に隣接して位置する。甕は70×50cmの楕円形プランを呈する浅い皿状の土壙底面に口縁部を接して垂直に倒置している。

No.14号甕 (Fig.181)

B－X区で検出した甕で、SC－60の北約4mの距離にある。砂丘上に水平に埋置したもので、

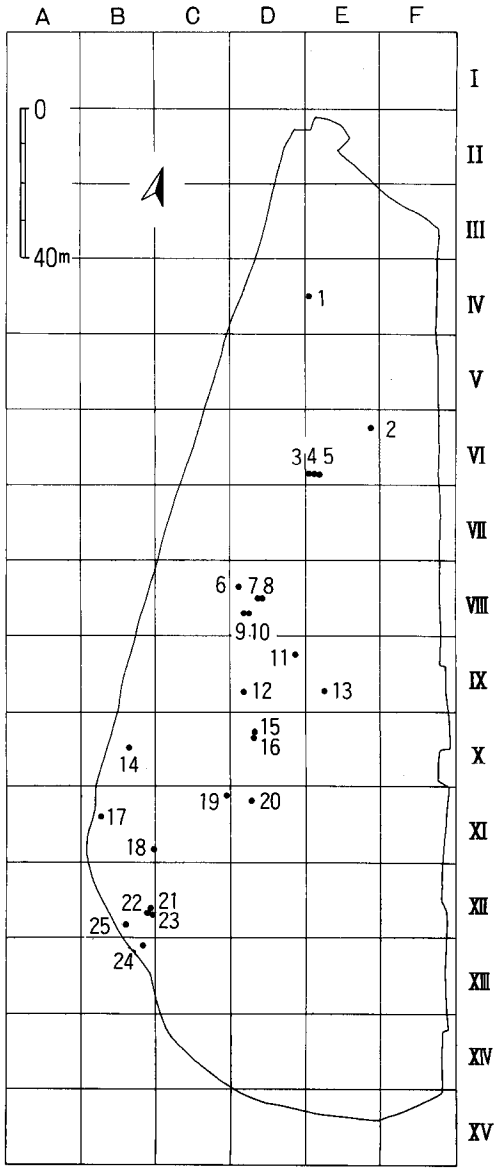


Fig. 180 SR倒置甕分布図 (1/2,000)

土壙は精査したが検出できなかった。

No.15号甕 (Fig.181)

D－X区で検出した甕で、SC－45の東側に隣接してある。甕は約15°の傾斜をもって倒置され、口縁部の一部を打欠いている。甕周囲の土色変化はなく、埋置後直ちに埋められたものであろう。

No.20号甕 (Fig.181)

D－X区で検出した甕で、SC－46の東に隣接してある。甕は口縁部を打欠きほぼ垂直に倒置しているが、攪乱により胴部上半のみが原状を留めるにすぎない。

No.21号甕 (Fig.181)

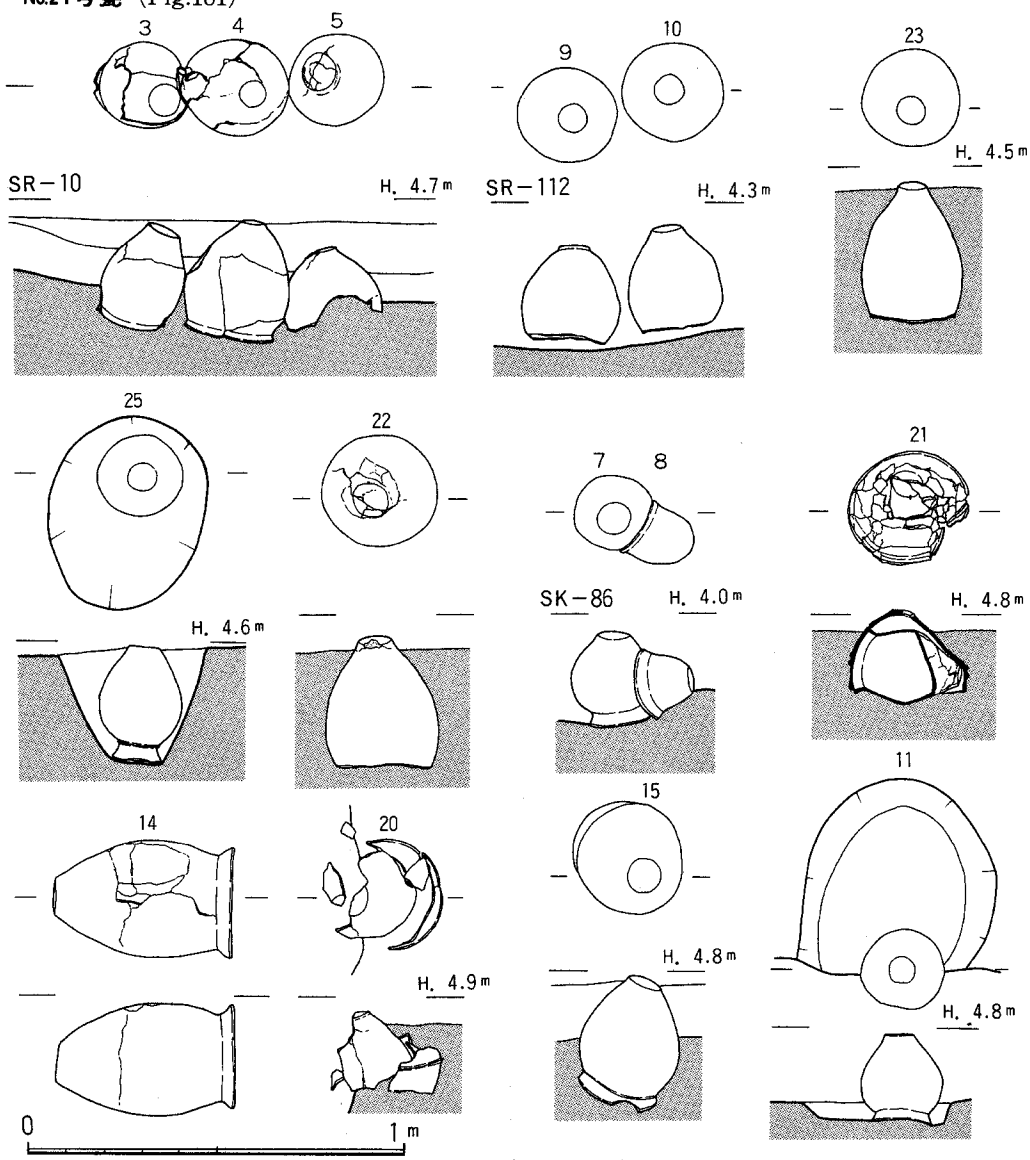


Fig. 181　倒置甕実測図 (1/20)

B－XII区で検出した甕で、SC－35に隣接する。甕はほぼ水平に埋置した小型甕に口縁部～胴部上半を打欠いた壺を垂直に覆い被せている。壺の直径は甕の器高より小さいために埋置時に一部破損している。甕周囲の土色変化はみられなかった。

No.22号甕（Fig.181）

B－XII区に検出したもので、No.21～25と近接してある。甕は口縁部を打欠いて垂直に倒置したもので、四周の土色変化はみられなかった。

No.23号甕（Fig.181）

B－XII区に検出した甕で、SC－35のすぐ南にNo.21・22と隣接してある。甕は口縁部をきれいに打欠き垂直に倒置したもので、四周の土色変化はみられなかった。

No.25号甕（Fig.181）

B－XII区で検出した甕で、No.21～24と狭い範囲に集中する。甕には唇部を打欠き、53×42cm、深さ30cmの楕円形の土壙にほぼ垂直に倒置する。覆土は暗黒色砂。

出土遺物（Fig.182～191）

壺形土器（626～639）627は口縁部が細長くラッパ状に開くＢＩ類の長頸壺である。625～629はＢII・III・Ｖ、Ｆ類の小型壺である。634は口縁部が短くラッパ状に開くもので、ＥII類に属する。胴部は肩のはった卵型で頸部に三角凸帯が巡る。638は同タイプのもので底部穿孔。635・636は二重口縁のＡＩ類、635は口縁部が内弯ぎみに内傾する袋状のものである。636は頸部が長めで、口縁部は内弯ぎみに直口する。頸部と胴部下位に刻目を施した凸帯が巡る。

甕形土器（641～662）645～647・649～656は口縁部が「く」字状に外反するＡＩ類のものである。661・662は「く」字状の口縁部が内弯ぎみに開く布留系のAIV類に属する。661は肩部に箆描きによる文様を施す。641・642・648は口縁部が短く「く」字状に開くものでAVI類に属する。642・657は「く」字状口縁に短胴のつくものでＡＶ類のものである。

鉢形土器（640・663～666）640は短い「く」字状口縁をもつＡ類。664～666は素口縁をもつ深手の鉢でＦ類。666は内傾した口縁部が直交して短く「く」字状に開く。

高杯（667～674）大型の杯部をもつＡ類（669～671）と小型の杯部をもつＣ類（672～674）がある。667は杯部が扁平な半球形に棒状の短い脚部がつく。

土師皿（675・676）小型のもので、676は糸切り。

皮袋形土器（677）逆台形のもので、外面はハケ目後ナデ、内面はナデて仕上げている。

須恵器壺（630）口縁部は「く」字状に外反し、口縁部は小さくつまみ上げる。

須恵器甑（678）口縁部は大きくラッパ状に開き、口縁下に小さな段を作る。胴部は扁球形。

有孔円盤（28・29）28はＤ－VIII区で出土のボタン状有孔円盤。直径2.0cm、厚さ３㎜、重さ0.9ｇ。中央に孔が２個並ぶ。蛇文岩。29はＣ－XI区出土のボタン状有孔円盤で中央に内径１～２㎜の孔が並ぶ。径3.0cm、厚さ４㎜で断面形は台形に近い六角形。重さ5.8ｇ。蛇文岩。

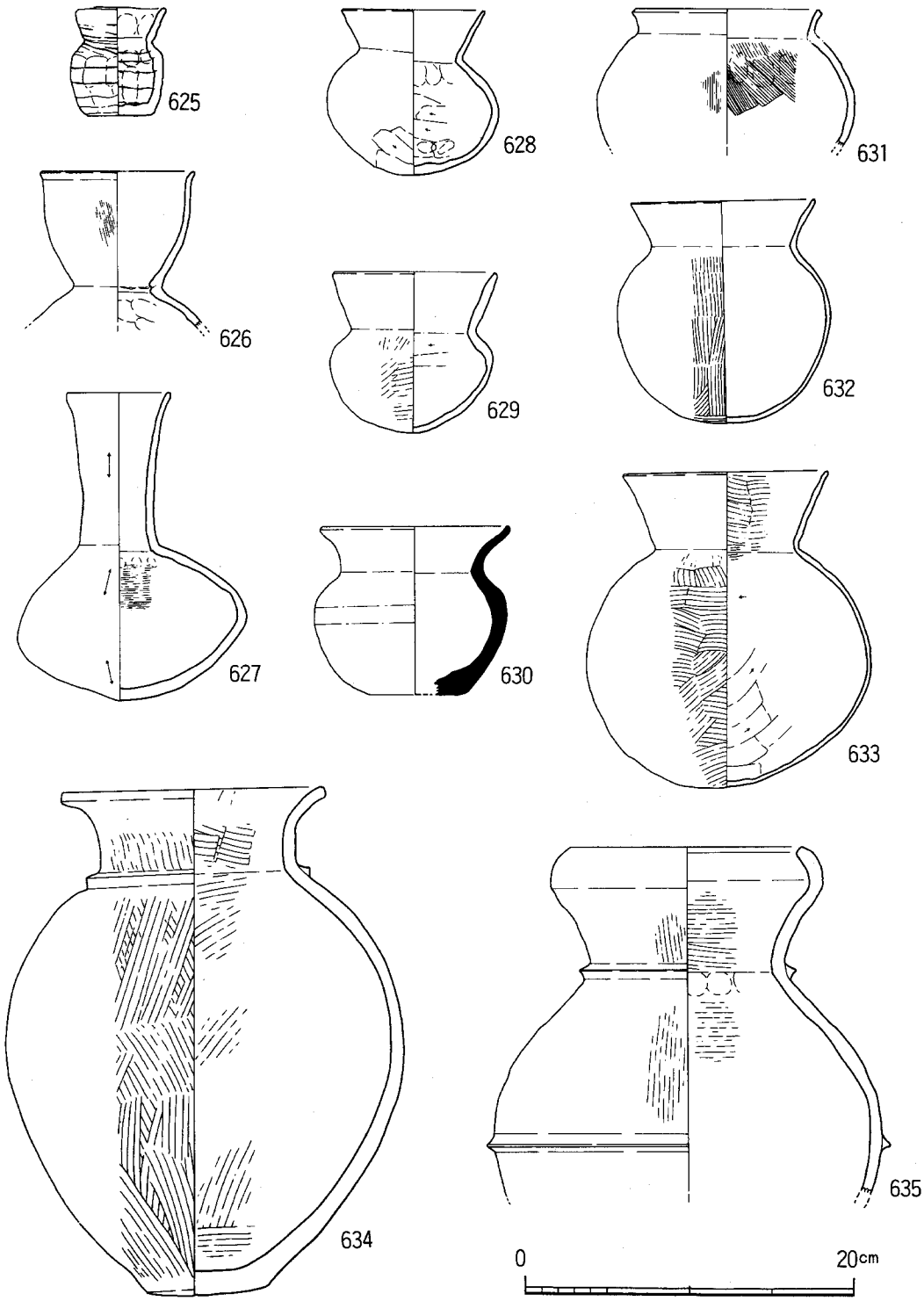


Fig. 182　包含層出土土器実測図(1)（1/4）

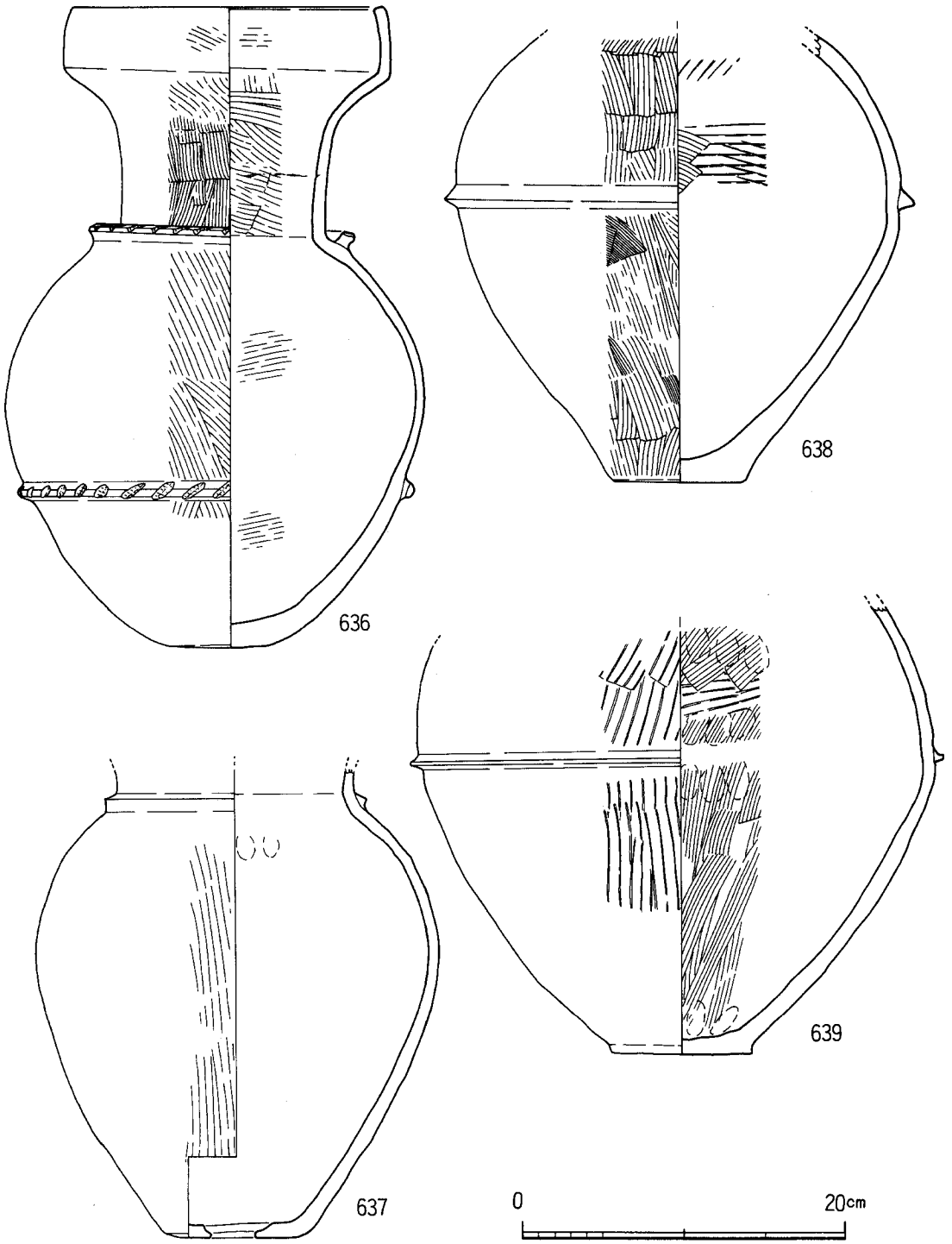


Fig. 183　包含層出土土器実測図(2)（1/4）

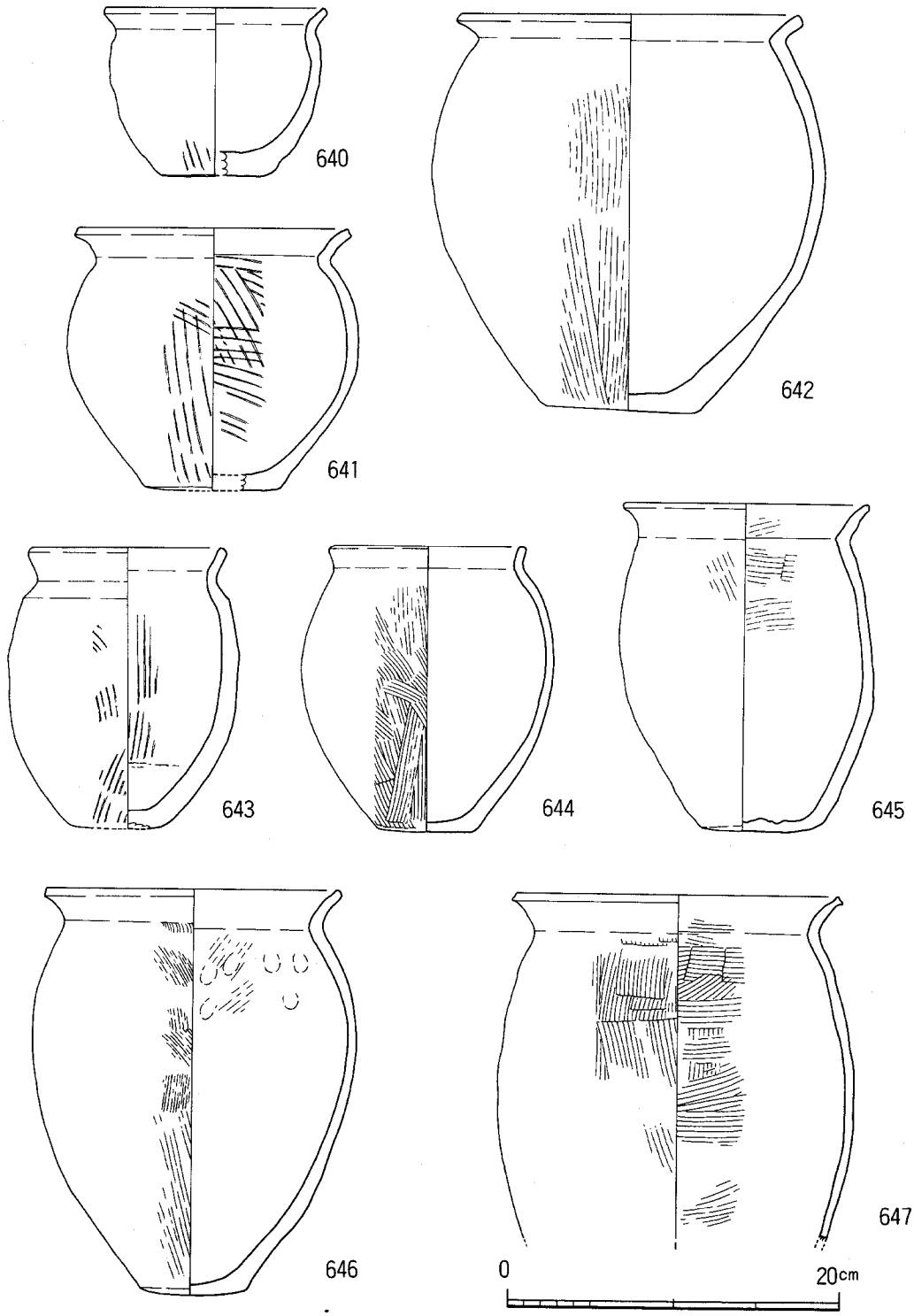


Fig. 184　包含層出土土器実測図(3)（1/4）

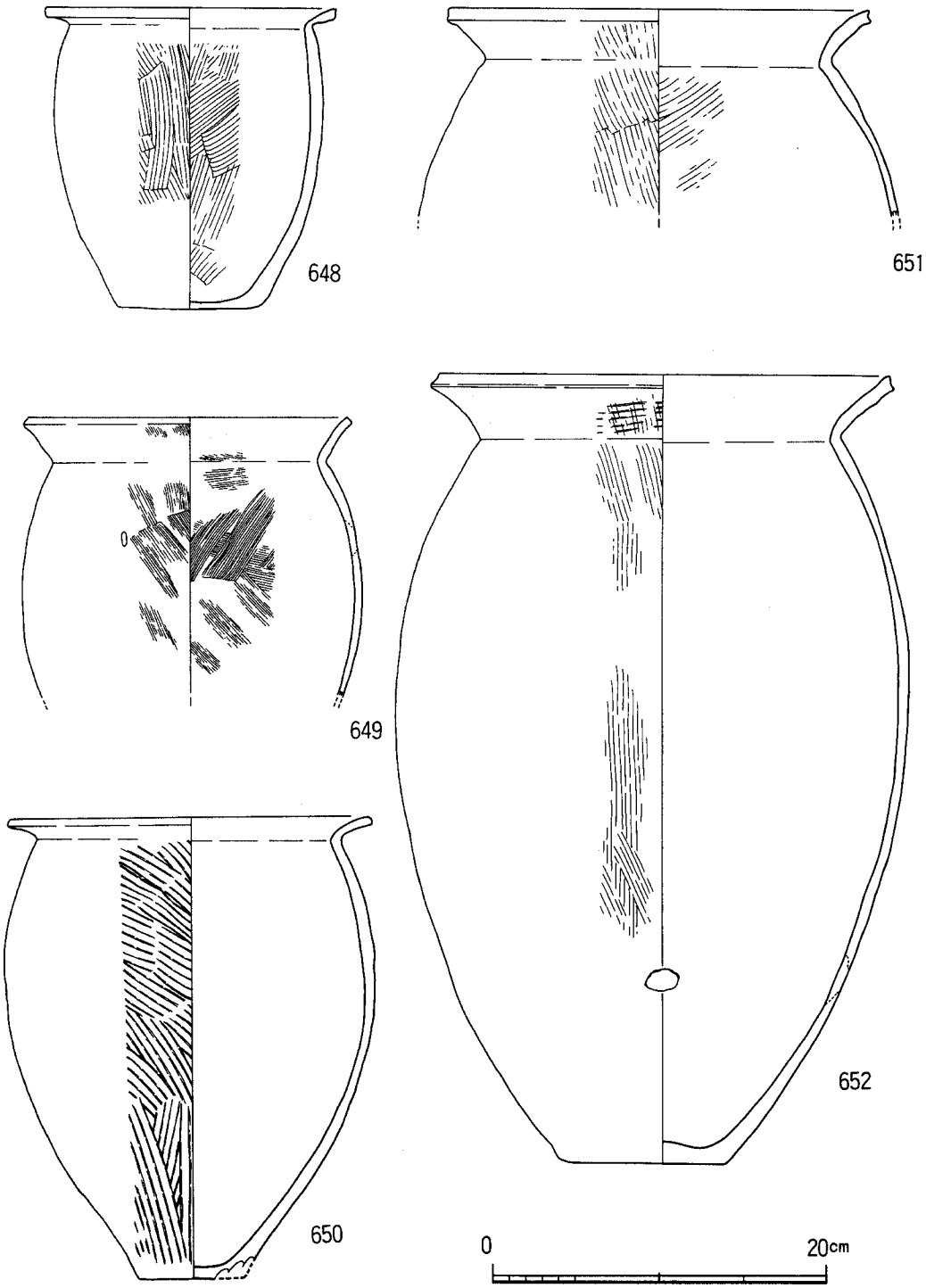


Fig. 185　包含層出土土器実測図(4)（1/4）

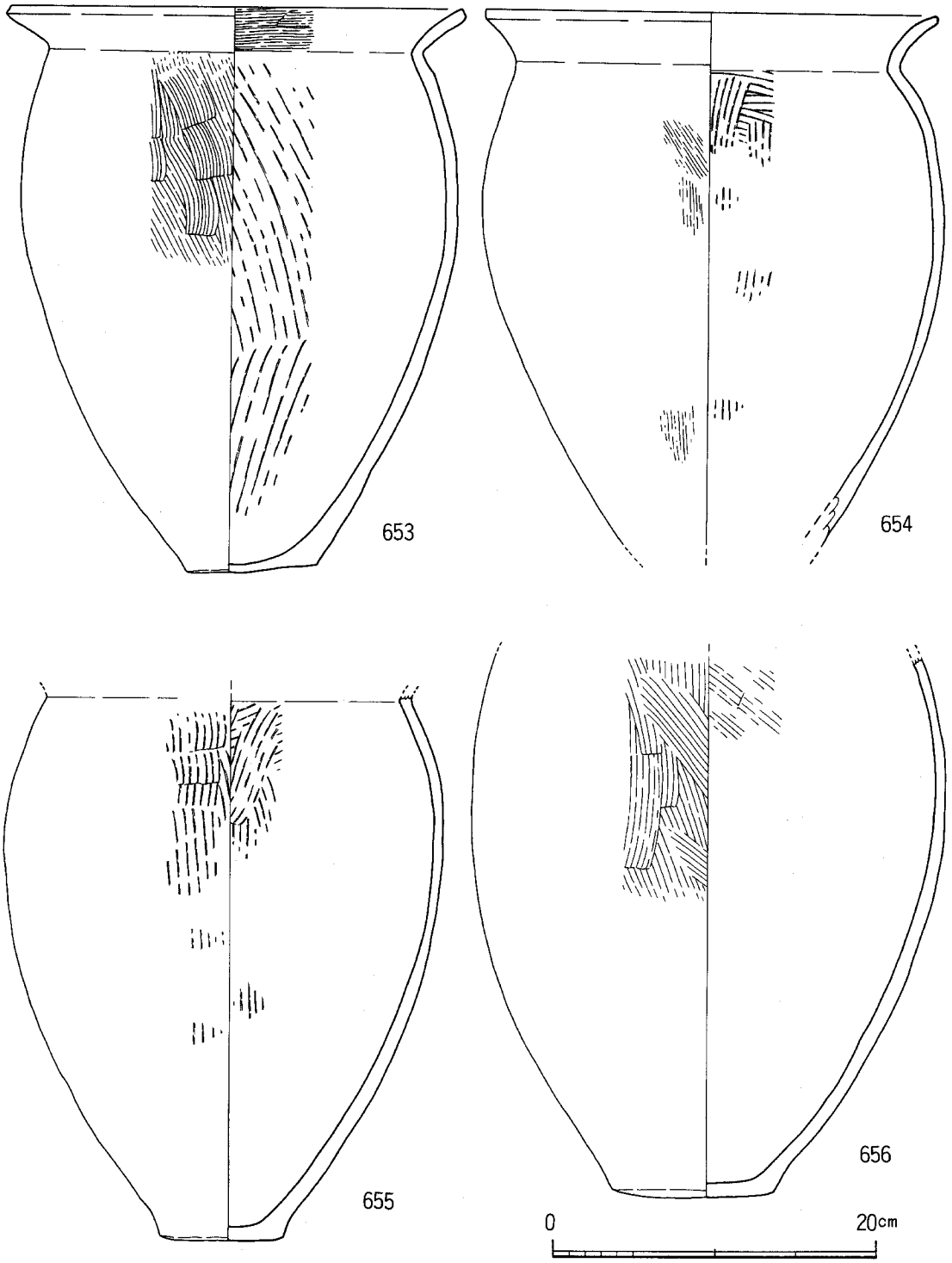


Fig. 186　包含層出土土器実測図(5)（1/4）

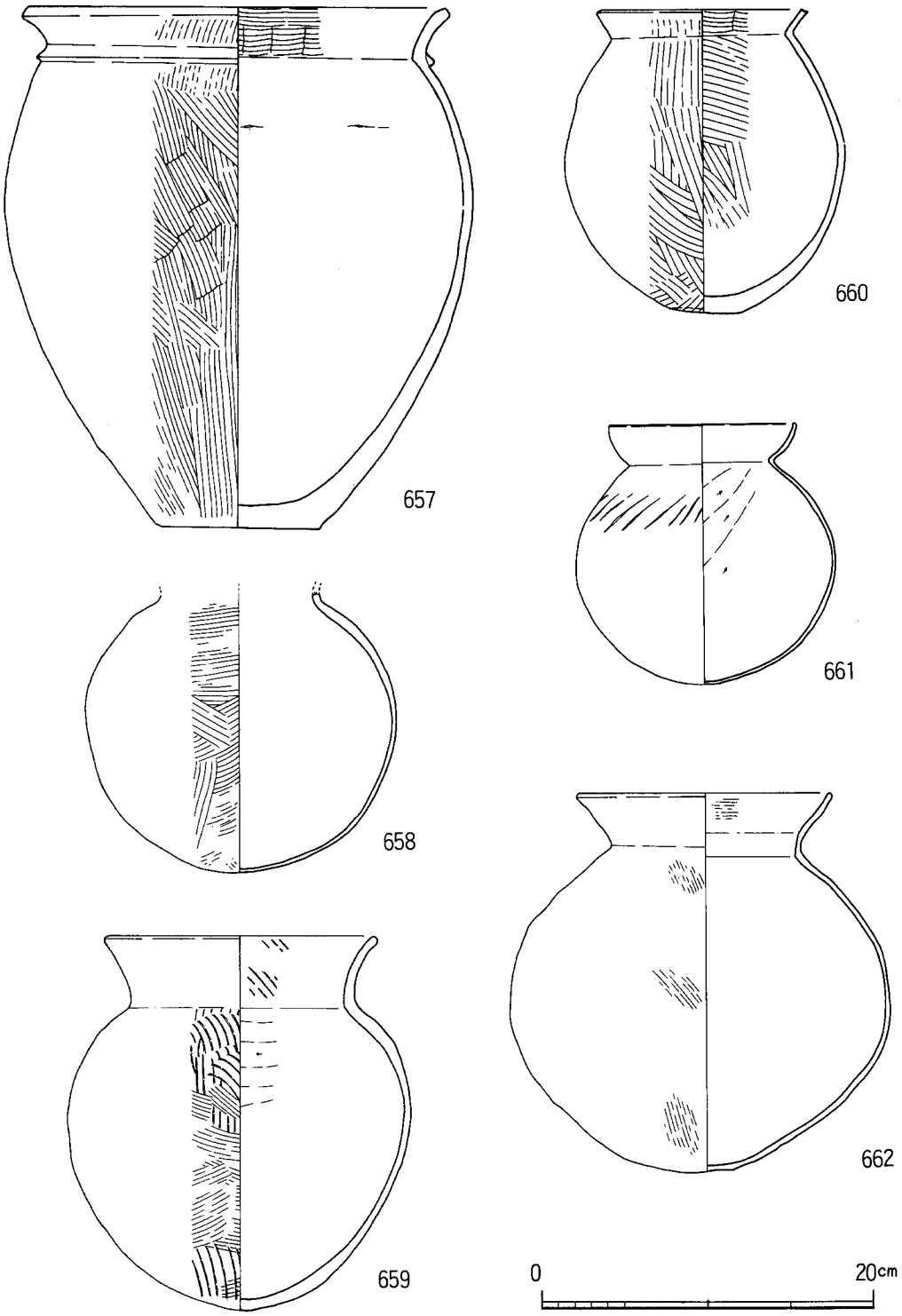


Fig. 187　包含層出土土器実測図(6) (1/4)

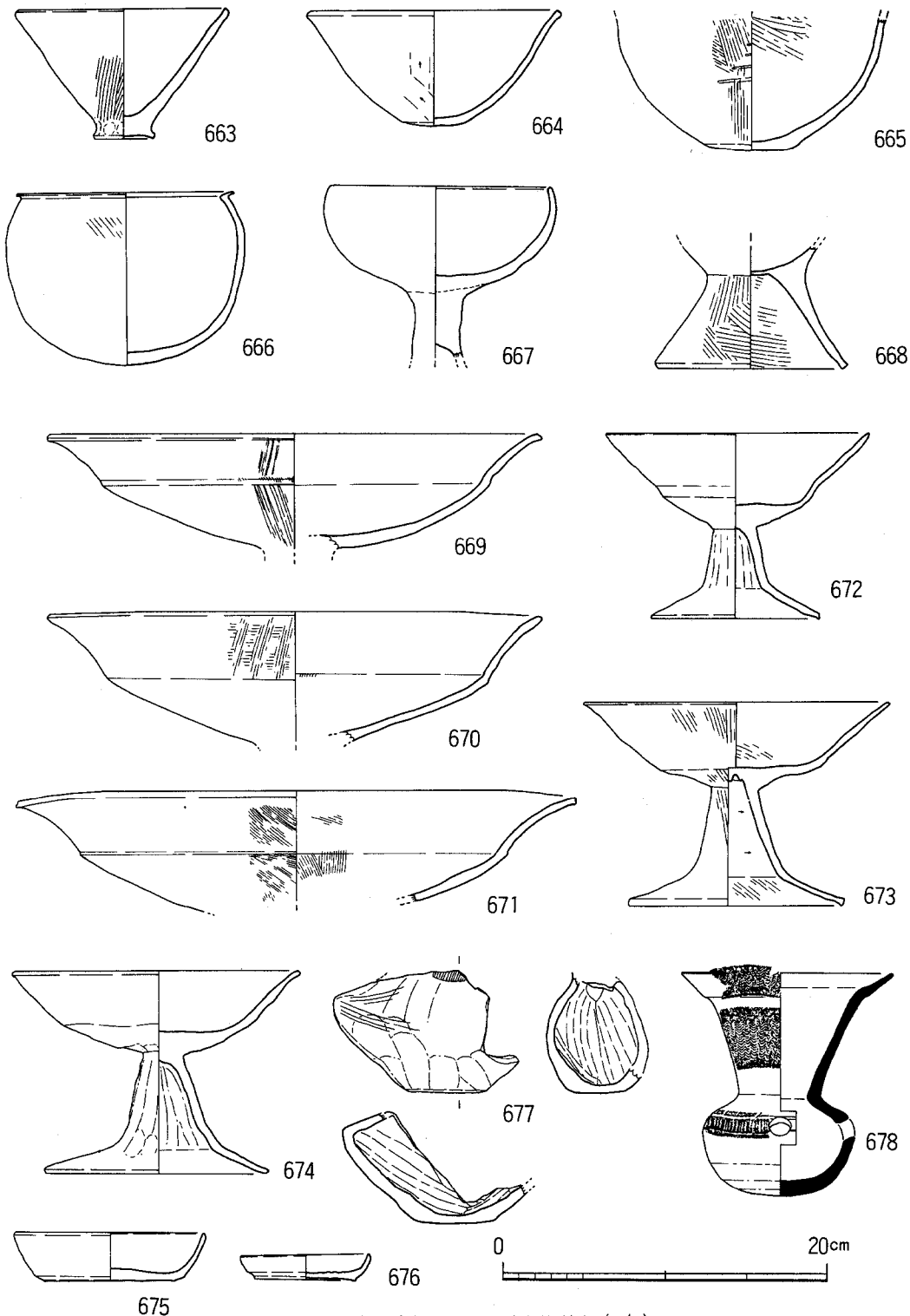


Fig. 188　包含層出土土器実測図(7)（1/4）

石錘（30・31）30はＢ－Ⅻ区出土の棒状の有溝石錘。長軸方向に溝を配するが平坦に整えた端部には巡らない。長さは6.2cmで、体部中央に最大径を有す。重さは12.8ｇ。滑石片岩製。31はＤ－Ⅻ区出土の滑石製の大型有孔石錘。形状は径15.2×14.8cmの円形で、中央部に内径2.4cmの円孔がある。断面形は長円形で厚さ6.9～7.8cm。側縁部は４段の面取りを行った後丸く整形している。側縁部は横方向に、円孔内は縦方向に粗いノミ状工具痕が残る。重さ2.56kg。

銅鏃（27）有茎鎬造腸抉柳葉式のもので、切先を欠く。身幅は８㎜を測り、身・茎ともに断面形は菱形である。

刀子（28）長さ3.2cm、身幅1.0cmを測る。刀子の切先資料である。

釣針（29・30）29は針先を欠き、身はＵ字状になる。基部は外方に短く折り曲げる。長さ3.3cm。30は基部を欠くもので針先は内面に返しがつく。長さ6.1cm。身の断面形は方形。

鉈（31）長さ9.4cm、身幅1.1cm。Ｖ字形の刃部は端部が外傾して研がれている。

鉄斧（32）長さ8.6cm、刃部幅5.3cm、袋幅3.8cmを測る鍛造鉄斧で刃部はバチ形を呈する。

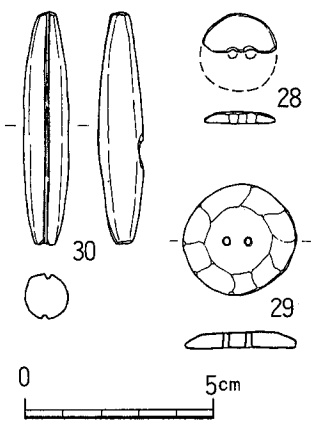


Fig. 189　包含層出土石器実測図(1)（1/2）

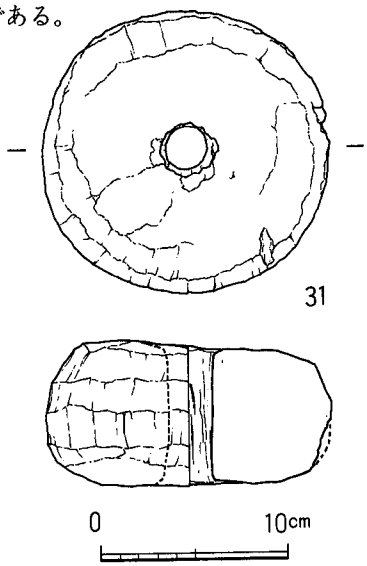


Fig. 190　包含層出土石器実測図(2)（1/4）

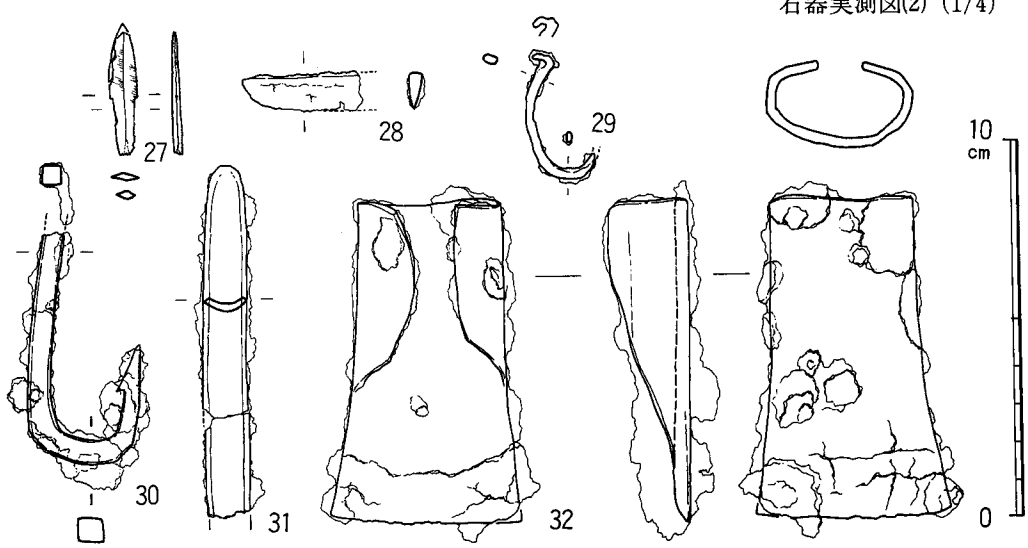


Fig. 191　包含層出土青銅器・鉄器実測図（1/2）

青銅器鉄器計測表

〈凡例〉
・表中の数値の単位は、重量がgであり他はcmで表記した
・数値の後の＊マークは欠損状況を示す
・Figは図版ナンバー、番号は図版中の番号に一致する。

Fig	番号	遺構	全長	幅 刃部	幅 基部	厚さ	重量	素材	器種	備考
38	1	SC-21	10.5＊	2.2	0.4	0.4		鉄	鉄鏃	圭頭斧箭式
43	2	SC-23	2.8＊	1.3		0.2		鉄	鉈	先端、木質付着
43	3	SC-23	3.7＊		0.9＊	0.3		鉄	鉄鏃	圭頭斧箭式？
46	4	SC-24	4.9＊	2.6		0.4		鉄	鉄鏃	基端部欠損
46	5	SC-24	5.0＊	2.7		0.2？		鉄	鉄鏃	先端欠損
46	6	SC-24	4.1	1.7		0.2		鉄	鉄鏃	基端部片方欠損
57	7	SC-29	5.6＊	1.2	0.6			鉄	鉄鏃	
77	8	SC-33	4.9＊	1.0＊	0.6	0.4	4.5	青銅	銅鏃	長茎
77	9	SC-33	3.3＊	0.8	0.5	0.4		青銅	銅鏃	
92	10	SC-42	6.7＊	1.3	＊	0.2		鉄	刀子	
92	11	SC-42	9.5	1.3	0.5	0.2		鉄	刀子	
92	12	SC-42	12.8＊	1.2	1.1	0.3~0.5		鉄	鉈	
106	13	SC-52	18.9	3.0	3.2	0.4		鉄	鉄鎌	
108	14	SC-53	6.9	4.1	2.9	2.0		鉄	鉄斧	完形
117	15	SC-58	6.5＊	0.7		0.5		鉄	ヤス	漁具
124	16	SC-60	2.1＊	1.5		0.2		鉄	釣針	表面に木質付着
138	17	SC-71	9.5＊	1.7	1.0	0.2~0.4		鉄	刀子	わらび手型
148	18	SC-81	3.1＊	0.9＊	0.5＊	0.4		青銅	銅鏃	
163	19	SK-32	14.3	0.8		0.3		鉄	鉈	表面に2種の布付着
163	20	SK-110	5.2	2.8				鉄	釣針	
179	21	SR	5.3＊	1.6	0.7	0.5	6.2	青銅	銅鏃	
179	22	SR	2.6＊	1.0	0.5	0.3	2.6	青銅	銅鏃	
179	23	SR-134	2.7＊	0.8	0.4	0.4	1.5	青銅	銅鏃	
179	24	SR	3.1＊	0.8＊	0.5	0.3	2.2	青銅	銅鏃	
179	25	SR	3.1	1.1	0.6	0.4	2.9	青銅	銅鏃	
179	26	SR-22	6.2	2.5	2.5＊	1.2		鉄	鉄斧	
191	27	包含層	3.3＊	0.7	0.6	0.2	1.3	青銅	銅鏃	
191	28	包含層	3.3＊	1.1		0.6		青銅	銅鏃	腐食肥大している
191	29	包含層	3.3＊	1.9		0.2~0.3		鉄	不明	端部U字に曲がる
191	30	包含層	6.2＊	3.1		0.5		鉄	釣針	かえしあり
191	31	包含層	9.4＊	1.2		0.2		鉄	鉈	

Tab.12　青銅器鉄器計測表

石錘計測表

Fig	番号	遺構	長径	短径	孔径	器高	重量	素材	備考
21	1	SC-10	19.3	14.4	2.5	6.5	2,870	滑石片岩	平面不整形な長楕円形
21	2	SC-10	18.1	13.9＊	2.2	5.8	1,620＊	滑石片岩	平面長楕円形
21	3	SC-10	15.0	13.7	2.3	6.4	2,180	滑石片岩	平面長楕円形
85	7	SC-37	19.9	17.0	2.9	8.3＊	3,640	滑石片岩	平面卵形
91	8	SC-41	14.4	13.7	2.1	4.6	1,365	滑石片岩	平面円形
91	9	SC-41	15.6	13.9	1.9	4.4	1,465	滑石片岩	平面円形
129	12	SC-62	13.4	12.6	2.4	6.4	1,720	滑石片岩	平面円形
141	13	SC-74			2.3~2.8	15.5	2,980	滑石片岩	縦型、横方向穿穴
162	14	SK-103	15.4	15.0	2.5	8.7	3,170	滑石片岩	平面円形
176	17	SR-93	17.6	16.5	2.4	7.7	3.000	滑石片岩	上面から下面への副孔あり
190	31	包含層	15.5	15.0	2.4	7.8	2,565	滑石片岩	平面円形

Tab.13　石錘計測表

IV. おわりに、

(1). 発掘調査の成果と問題点

博多湾は玄界灘にむかって湾口を開き、ここを玄関口として各時代に亘って様々の文化を受け入れてきた。この博多湾の最奥部には奈多浜・海浜・和白浜の砂丘がつづき、立花山から派生した低丘陵がこれらの砂丘に覆い被さるようにしてのびている。このためかこの地域における遺跡の密度はきわめて薄く、考古学的調査も昭和45年の和白遺跡群、昭和54年の下和白塚原古墳群の発掘調査以来絶えて久しいものであった。　このような中で実施された唐原遺跡の発掘調査は、白浜砂丘の南端に位置する小砂丘を完掘する結果となり、試掘調査時の予察をはるかに越える成果をもたらした。発掘調査では、古砂丘尾根上に拡がる炉址群、竪穴住居址、土壙等の集落性遺構と箱式石棺墓、円形周溝墓、方形周溝遺構と円墳からなる墳墓群を検出した。このうち古砂丘尾根上に拡がる80軒以上の竪穴住居址群は、300基を越す大炉址群や大型有孔石錘の発見と相俟って弥生時代後期から古墳時代前期における海浜性集落のあり方や生産活動の一端を垣間見ることができたといえよう。

稲作農耕の開始による弥生文化の成立は歴史上の大変革期であり、その確立は日本社会・経済の根幹を方向づけるものであった。稲作農耕の成立は、縄文的食習慣からの脱却を意味するが、狩猟・漁撈による鳥獣類や魚貝類・海産物類は依然として食資源の重要な一翼を担うものであり、海浜性集落と漁撈活動とを隔絶して考えることは困難なことである。

標高４～５ｍの古砂丘上に立地する唐原遺跡の前面には内海が拡がり、背後には立花山から派生した小山塊が迫っている。こうした立地条件下にあっては遺跡周辺に可耕地を求めることは困難なことであり、求めえたとしても谷水田的な小規模なもの以外にはなかろう。したがって、その経済的基盤を農耕生産力に求めることは不可能なことであり、必然的に海との関わりの中にその生産（経済）活動の場が求められよう。生産具としての農工具が石庖丁１点であるのに比べて、釣針をはじめとする刀子・鎌等の鉄器類や大型有孔石錘など漁撈活動に関連すると思われる遺物は種類・量的にも多く、生業の主体が漁撈活動にあったことは十分に窺いえる。それは、漁撈集団としての活動と自立にその経済的基盤を求められ、漁撈専業集団としての特異な性格を有していたことが容易に想定される。

魚獣骨・貝類等の発見は、古砂丘を完掘したにもかかわらずまったくなく、周辺地域における貝塚等の発見もない。魚貝類の処理法・場所等にも関連するものであろうが、古砂丘上に立地する慣海洋性的集落址としてはきわめて特異であり、該期の漁業内容・漁法等を知る上からも残念なことであった。

一方、古砂丘尾根上のみに意識的に立地する夥しい数の炉址群は、その異常な数の多さに驚

嘆する。砂丘尾根上に立地する必然性は、また、その機能・目的は何であるのか。漁撈集落や漁撈活動との関わりやあり方を考える上で多くの問題を提起するものであろう。

唐原遺跡の発掘調査は、小砂丘尾根を完掘しえたと云えどもその範囲は連なる砂丘や内陸部へも拡がり、広大な範囲に及ぶものである。その内容もさらに大規模に、複雑・多岐に亘るものであろう。それは、いわゆる外来系土器の多様性からも云える。庄内・布留系の畿内系土器に混って吉備系・山陰系土器も出土し、一点ではあるが朝鮮半島系の陶質土器片も出土している。この外来系土器の多様性が、この大規模な集団の経済的基盤やその背景を窺い知る一要素となるものであろう。

弥生時代後期から古墳時代前期にかけて連綿と形成された漁撈集落は、その後忽然と姿を消し墳墓地と化す。それが集落自体の変貌なのか、あるいは内外的要因による変動なのかは明確ではない。それは漁撈集団のもつ必然的な宿命によるものなのであろうが、その解明こそが今後に残された大きな問題である。

今回報告した集落址遺構の提起せる問題点は複雑・多岐に亘るが、莫大な遺物量や時間的制約にまして勉強不足が災いし、その調査成果を十分に深化しえなかった。ここでは提起された問題点について若干触れ、整理しなおして今後に備えたいと思う。

(2). 炉址について

調査区の中央部には南北にのびる古砂丘が形成され、幅30～40mの尾根上には300基を越す炉址が重複して立地している。これらの炉址は東西の緩斜面上にはなく、尾根上の占地が明確な意識のものに行われている。

炉址の平面形は径50～600 cmと規模に大小の差こそはあるものの円形あるいは楕円形プランで、断面形は皿状あるいは浅い凹レンズ状を呈する。このうち大型のものは古砂丘尾根の北半部に多く、小型のものは南半部に多く分布する。大型のものほど重複度が著しい。炉址内は赤褐色砂で埋まり、周辺部には掻き出した灰の堆積層がある。灰層はブロック状堆積とドーナツ状堆積があり、大型の炉址ほど後者例が多く焼成度も高い。これは小型の炉址が1回から数回の使用で廃棄されたのに対して、大型の炉址は繰返し使われ、使用に際して灰が周辺に掻き出されたからであろうことは容易に窺いうる。

構造（形態）的には、A類：素掘りの炉址（SR－40外）。B類：炉床及び炉壁に粘土を貼りつけた炉址（SR－30･31外）。C類：炉床に小礫石を敷詰めた炉址、（SR－300外）、の概ね3タイプに分類される（Tab. 4 ～11）。このうちB類としたものは完存するものが少なく、使用後に破壊された焼粘土塊が埋土中に散在するものが大半を占める（B′類）。これらの炉址で竪穴住居址と重複するものはほとんどが竪穴住居址廃絶後の凹みを利用して構築されている。殊に石敷炉（C類）が顕著である。また、A･B（B′）類としたものの中には埋土上層より土器小片が集中して

出土するものがある。これは大型炉に多く、破砕した5の小片をびっしりと炉址一面に敷詰めたようで、土器敷炉的色彩が強いが土器片のうち2次焼成痕の残るものは少ない。新たな区分が適切かもしれない。

炉址は、はじめに古砂丘尾根の北端側より造営が始まり、幾筋かの群に別れながらも大勢として漸次南方側へ移ってゆき、弧状の古砂丘尾根南端部に至っている。時期的には弥生時代後期前半に始まり、終末には終焉をむかえている。あわせて構造的分布を概観するとA類は古砂丘尾根全域でみられる。B類は北半側に多く、南半側で少なくなるのに比べて、C類は南半側でしかみられない。この現象が即座に炉址の形態的変遷に繋がるとは云い難いが、C類とした石敷炉が最も後出する新しい形態であることだけは明らかであろう。

次に、これら多数の炉址のもつ本来的機能とはいかなるものであったのだろうか。列挙すれば、(1). 製塩炉址。(2). 土器焼成炉址。(3). 海産物加工炉址。(4). 日常生活用煮沸炉址等の諸機能が考えられる。

このうち(1)は製塩土器が出土していない。仮に甕形土器の使用を想定しても外面の2次焼成痕がなく、濃海水の煮沸時に生じる内面の剝離したものもないことから製塩炉としてはほとんど考え難い。(2)の土器焼成炉は、これまで弥生時代の土器焼成土壙として報告されている大阪府河内長野市大師山遺跡[註1]や大分県大分市雄城台遺跡[註2]・羽田遺跡の例とは隔世の感がある。仮に土器焼成炉であるとすれば浅い土壙内に土器を野積みにし、草木等で覆って焼いた露天窯であったろうことが想定される。中国雲南省では野積みにした土器を燃料で覆い、更にそれを簡便な粘土壁で覆って通風孔を設けた原始的な土器焼成窯[註3]が報告されている。この土器窯は焼成後に粘土壁を取り除いて土器を取り出すために粘土床しか残らない。B類とした炉址の中には凹レンズ状に貼った粘土床の端部が2～5cmほど内傾ぎみに立ち上がって炉壁をつくり、炉床内に炭片の残っていたものが数例あり、この中国雲南省例にきわめてよく類似する。以上の点から本遺跡の炉址中には土器焼成炉としての可能性を十分に検討しうるものがあることを挙げておきたい。しかし、土器焼きには焼成時に塩分を含むと破砕が容易に起こるとの指摘があり、これからするとこの条件を満たす本遺跡の炉址は形態的類似性により直ちに土器焼成炉と断じることは難しくなろう。(3)の海産物等の加工炉址については検討しうるものがあろう。弥生時代後期になると大型貝類によって構成される貝塚が海浜性集落に隣接して出現しはじめる。これらの大型貝類は商品性価値の高いもので活発化する交易活動の交易品になるものとされ、のちの律令制下における租税（調）へと繋がるものも多いという。しかし、唐原遺跡においては貝塚はおろか日常の食用に供したと思われるブロック状貝層すら検出されておらず、可能性としては考えられなくもないが、特定するには多くの困難が伴う。(4)の日常生活用煮沸炉について

(註1)「河内長野　大師山」1977　関西大学文学部考古学研究室

(註2)富来隆「弥生式土器窯址について（予報）」1964（『考古学雑誌』第50巻第3号）

(註3)北九州市立考古博物館長小田富士雄先生よりご教示を受ける。

は最も考え易いものであろう。炉址内の遺物には甕片が圧倒的に多く、散在する土器片の中には煤の付着したものも少なくないことからソトクド的機能は十分に妥当性の高いものと思われる。この場合小型の炉址は理解も容易であるが、直径4～6mの大型炉についてはやや理解に苦しむ。この場合大規模かつ大量の煮炊きを必要とする要因とは何かが問題となろう。

以上簡単に検討を加えてみたが、本遺跡で検出した大量の炉址の機能については容易に特定することは難しく、単一の機能のみを考えることは避けるべきであろう。この中にあって土器焼成炉とソトクド的煮沸炉(日常生活用煮沸炉)の二者についてはその可能性が十分に考えられるべきものであることを指摘しておきたい。また、大量の炉址が古砂丘尾根上に立地する必然性については、集落址に隣接していることもさることながら、燃料等の資源確保が容易であったこととあわせてその広い空間が集落の入会地的公共空間として容易に利用されていたであろうことを挙げておきたい。いずれにしても、今後の類例資料の増加を待って再検討を加えてみたい。

(3). 倒置甕について

調査区のほぼ中央部を南北にゆるく孤状に形成された古砂丘があり、この尾根上には弥生時代後期の竪穴住居址・土壙・炉址が立地している。この竪穴住居址や土壙の周辺には　その間隙を縫うようにして倒置甕(壺)が点在している。これらの甕は口縁部を打ち欠いたものが多く、かつ狭小な範囲の中に数墓のまとまりをつくる傾向がある。2～3の例を除いては土壙は検出されず、甕の埋置後は直ちに埋め戻されたものと推定される。時期的には弥生時代後期前半に比定される。これは弥生時代後期中葉の長頸壺を出土したSR－62以前と思われる箱式石棺墓(SX－01)の時期とも概ね合致する。また、立地的には箱式棺墓群が集落址よりやや離れたところに占地するのに対して、一群の倒置甕は竪穴住居址に隣接して集落内に占地する。この倒置甕のうちNo.21号甕は横置した甕を口縁部から胴部上半を打ち欠いた壺ですっぽり被っており、明らかに葬送的色彩を強く漂わせるものである。No14・25号甕等も同様の傾向を示している。この一群の倒置甕はこれらの稀薄な状況と少ない資料から直ちに断ずることは早計であるが、縄文時代以降の埋甕的色彩の強いものではなかろうか。短絡的に云い換えれば成人墓としての箱式石棺等に対して、倒置甕は小児埋葬墓としての機能を考えたい。今後の類例資料の増加を待ちたい。

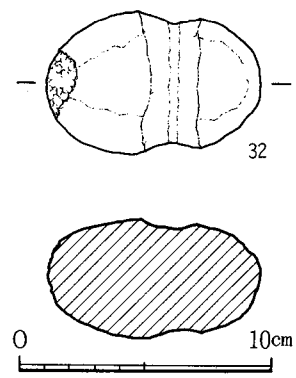


Fig. 192　SC－06
出土石錘実測図 (1/3)

(4). 石錘について、

円形の有孔石錘は弥生時代後期後半の博多湾沿の遺跡より九州型石錘[註4]とともに出土し、早くから該期の漁撈関連具として注

(註4)下條信行「弥生、古墳時代の九州型石錘について」1984、(九州文化史研究紀要第29号)

目され、いくつかの検討がなされている。[註5]使用の目的としては、網具の沈子としての打欠石錘、管状土錘や棒状の双孔小土錘等や延縄漁具としてのタコ壺との同遺跡内での出土例はあるが、今のところ良好な共伴例はない。円の中心に穿たれた円形の主孔の外側に小さな副孔を穿つ例がある。網の本縄の両端に垂下するだけの錘であれば副孔の必要性を感じないが、タコ壺や二枚具を用いる延縄漁の民俗例を見た場合、本縄を沈めっぱなしにするため、縄の両端に目じるしとなる浮子を結び付けることがある。これをもって副孔の存在を考えるのはどうであろうか。

弥生時代後期後半に出現する九州型石錘や有孔石錘の存在は、物理的には福岡県北を東西に走る三郡変成岩帯が博多湾の西と東に露呈し、タルク（滑石）を含んだ加工しやすい片岩類が手に入りやすかったことに依っている。また、社会的には該期の多分野に渡る鉄器の普及と瀬戸内方面からの新たな漁獲法（タコ壺漁等）[註6]とに刺激された博多湾沿周辺地域の漁業の活性化に対応したひとつの姿として捉えることができる。

(5). 漁具にみる唐原遺跡

博多湾沿周辺の弥生時代後期から古墳時代前期頃にかけての漁業関連遺物を出した遺跡を概観すると、遺跡の立地条件を考えた場合次の3つのグループに分けることができる。I群は臨海地の砂丘（Tab.14 No.1・3・12・13・16）や低台地（Tab.14 No.2）にあるもの。II群は砂丘後背地で河川に近く、小規模な低湿地に接するもの（Tab.14 No.7・8・9)。III群はラグーン後背丘陵地や河川沿の段丘面上や扇状地、沖積地上の低台地（微高地）等山と海との中間的位置にあるもの（Tab.14 No.4・5・6・10・11・14・15)。

また、遺跡から出土する漁具を漁種別に分けた場合、釣針と九州型石錘とからなる釣具。打欠石錘と管状土錘、棒状の両端に孔を穿つ双孔小土錘と1kgを越える石錘とからなる網具。タコ壺や二枚貝、巻貝と1kg以上の石錘とを組み合わせた延縄具。ヤス、モリ、アワビオコシなどの潜水刺突具。鎌を用いた藻刈具。刀子、刀等の解体具。鉄斧や鉋を用いて船や他の関連用具を製作、整備する道具とに分けうる(Tab.14)。

前記立地別3群を漁法、工程別の区分を通して見た場合、さらに次の類型を見ることができる。I群には各分野のほとんどの道具が揃うA類（Tab.14 No.1・16）と部分的に道具の保有に止まるB類（Tab.14 No.2・3・13）とがあり、B類中にも釣具と延縄具との組み合わせのものと網具だけのものとが見られる。II群にはすべてが揃うものがなく、釣具と網具の組合せC類（Tab.14 No.8・9）とそれにタコ壺等延縄具が加るD類（Tab.14 No.7）とがある。III群には釣具と延縄具（Tab.14 No.15)、網具と延縄具といった延縄具十単種、E類とがある。

B類は漁場に近い臨海地に置かれた「ハマガケ小屋」的性格が想定される。C類は河川が近い

(註5)橋口達也　八幡一郎「半球形有孔滑石製品」(考古学雑誌57巻3号）等。

(註6)SC－06出土の長円礫の短径に太く浅い溝を切る石錘（Fig.192）は瀬戸内通有の釣漁の沈子であり、タコ壺等と伴にもたらされたものであろう。平川敬治氏御教示。

こともあって川の漁具との弁別に気を配らねばならないが、II群の多くは起耕具のみならず、水田経営に関わる多種類の農具との共伴例が多く、生業の比重がどちらかにかかるのかは断じがたいがC・D類は半農半漁村的な性格を想定しうる。E類の属するIII群の遺跡は小平野単位の地域を代表する様な環濠集落を含む拠点的集落で生業基盤は農業にあると思われるが、タコ壺漁などが臨海集落に限ったものでないことを逆説的に示している。

唐原遺跡は御床松原遺跡とともにA類に属する純漁村と想定するが、展開する集落が恒常的なものであったのかどうかは、さらに土器等を含めた異った分析を要するものである。季節的な大規模な作業場であったと想定する場合、両遺跡ともに瀬戸内系の土器や石器、はたまた韓半島との関係を想定する変様土器を保有する点で、C.D.E.類等、近隣の集落との関係のみで完結するものではない。

No.	遺跡条件＼漁種			釣漁				網漁			延縄漁			潜水漁突	藻刈	解体	整備工具		?	
				釣針		九州型石錘														
	遺跡名	時期	立地	大	小	大	小	打欠石錘	管状土錘	双孔小土錘	大型錘	タコ壺	浮子	アワビオコシ ヤス・モリ	鉄鎌	刀子	鉄斧	やりがんな	投弾	備考
1	御床松原	弥中末～古中	砂丘	4		43	8	52	31		孔3			9	13 (石+3)	14	12	3	2	アワビオコシ、7
2	小篠	弥中後～後末	臨海地			5	2				孔2									
3	今宿 今山42.3地点	古	砂丘				1				1	21								
4	今宿 五郎江1次	弥後前～中	低台地			2					孔2				1					ラグーン臨接
5	五郎江2次 SD100他	弥中後～後後	〃			14	3				孔9		1							環濠集落。農具多い。
6	今宿青木	弥	〃				1				孔2									
7	下山門	弥後～古前	砂丘後背地				3		7			13								
8	拾六町ツイジ	弥～古	低湿地			2	1	6	3										10	農具多い。十郎川沿い。水田
9	湯納	弥～古前	谷部低湿地			7	10	7	11		孔1								11	農具多い
10	宮の前	弥後後～古初	低丘陵			3	6				孔2				1					集落
11	野方・中原	弥後後～古前	扇状地上			6	3				孔1				3		2			環濠集落
12	西新	弥後後～古前	砂丘			2						17						2		
13	藤崎9次		〃						11	2			1							
14	比恵7次	弥後	低台地				1				孔1	2							2	
15	多々良込田	古前	段丘面						23	1		3								100gほどの石錘15ケ
16	唐原	弥後～古前	砂丘	2	1	1	1				孔11	1		1	2	7	3	4		瀬戸内型沈子1ケ

Tab.14博多湾沿周辺主要遺跡出土漁具表（大型錘は1kgを越えるもので「孔」は有孔石錘を示す。）

同類の御床松原遺跡の比較に於いて、岩礁性の漁場を持つ同遺跡の潜水刺突具、藻刈具が優勢な点は理解できるが、唐原遺跡の釣具が少なく網具が欠落している点には理解に苦しむ。

両遺跡の漁具に見る質的な差と、連綿と続いた炉の有無との関わりがあるのか否かは今後の課題となろう。

(6). 土器群について

弥生時代終末から古墳時代前期にかけての土器群については、柏田、今光、西新町、宮の前、三雲、御床松原等の遺跡が相次いで調査され、竪穴住居址等より出土した良好な一括資料が提示された。その結果として平野ごとに井上・柳田氏等の編年案が提示されている。こうした中にあって、福岡平野東部地域では未だに良好な一括資料が得られておらず、体系的な編年案は試みられていない。

唐原遺跡出土の土器群は、弥生時代後期から古墳時代前期の長時間にわたる良好な一括資料がみられ、福岡平野東部地域における当該期の編年を試みるには十分な条件を備えていると云える。しかし、時間的制約や不勉強により、ここでは編年についてはふれず、当該期の土器群の形態的変遷についてのみ一応の整理をしておきたい。なお、分類にあたっては土器群相互の組成関係や搬入系土器と在地系土器との相互関係等の諸要素については十分な検討を加味することなく、あくまで形態的特徴のみをとらえているために不十分な点が多くある。編年等については、これらの諸要素を十分に加味した資料の詳細な分析・修正を行った上で論及し、その責を果たしたいと思う。

また、唐原遺跡出土の土器群中には畿内系や瀬戸内・山陰系土器と云われるいわゆる外来系土器が多くみられる。この外来系土器の多様性の起因は海に面する地理的条件が他地域との活発な交渉の結果としてそのまま土器組成に反映されたものと推察されるが、その背景となる地域相・時代的様相の解明が今後の課題であろう。

壺形土器

- A1…長頸の袋状もしくは二重口縁を持つ。
  - 1…袋状部が深く長くゆるいカーブを描く。
  - 2…袋状部が横に拡張し浅いもの。外面に屈曲の稜線がある。
    - a　緩く内弯する口縁部は長めで鋭角的に屈曲する。
    - b　内弯する縁部はaよりも緩く短い。
  - 3…一旦ラッパ状に開き90°近くの屈曲を持って短く、内傾するもの。
    - a　内傾する口縁部は内弯ぎみで平坦な端部も内傾するもの。
    - b　内傾する口縁部は直線的で端部は水平になる。
    - c　内傾する口縁部は反りぎみに開き端部は丸くおさめる。
  - 4…屈曲部外面に平坦面を持ち、内傾する口縁はやや外反する。
  - 5…口縁端部が平坦面を持って外反する。
  - 6…一旦ラッパ状に開き、内弯しながら直立する口縁を持つもの。
  - 7…一旦ラッパ状に開き、直立する口縁を持つ。屈曲部は小さく突出し、口縁端部に平坦面を有す。
- AII…ゆるく屈曲し外反する二重口縁を持ち、胴外面はヨコ方向へハケメ、胴内面はケズリを有するもの。(山陰系)
- AIII…高さのない胴を持つ二重口縁。
  - 1…口縁の屈曲が強く、頸部もしまっている。
  - 2…口縁の屈曲が弱く上方に長くなり頸部が広い。
    - a　胴部は肩が張り、外面ハケメ。内面ケズリ。
    - b　内外面ともにケズリを施す。
- AIV…頸部が柱状をなす二重口縁で、口縁はかなり外反する。胴は径に比し高さがなく尖底でレンズ状の底を持つ。(畿内系)
- AV…胴は肩が張りラッパ状に開く口縁の外面中位に三角凸帯を貼り擬似二重口縁様に仕上げる二重口縁を持つ。
- BI…扁球形の胴部から口縁が上方に延びる長頸壺。
  - 1…尖底でレンズ状の平坦面がある。
  - 2…尖底の丸底。胴はやや肩張りする。
    - a　やや頸が広く短い
    - b　長頸で外面にタテ方向のミガキがある。
  - 3…胴中位が張り出し、頸が広いもの。
  - 4…丸底で横長の扁球形の胴を持つもの。
    - a　頸が短く、外面はタテ方向のハケメあり。
    - b　長頸で外面はタテ方向のミガキを有するもの。やや頸のくびれ部が広い。(丸底壺と言われるもの。)
  - 5…丸底で球形の胴部を持ち、口縁端部が外反する。

Tab.15　土器型式分類表　(1)

BII…体部径と口径が同じくらいの大きさで、球形の胴部に直線的に外に延びる口縁がつくもの。			
	1…胴部の高さが口縁の高さの1.5倍程度のもの。薄手。		
		a	口縁がストレートに開くもの。
		b	口縁が内弯気味に開くもの。
	2…胴部の高さが口縁の高さの2倍程度のもの。薄手。口縁は内弯気味。外面と内面上位にハケメ。		
	3…胴部の高さが口縁の高さの3倍近いもの		
		a	直線的に開く口縁部は屈曲が弱くなる。胴部は球形を呈す。薄手。
		b	口縁は端部を小さく上方に摘み上げる。外面と口縁内面に荒いハケメを施す。厚手。
BIII…器高10cm程度で頸部が太く、短くストレートに外反する口縁を持ついわゆる小型丸底壺と言われるもの。			
	1…底部にかけてやや尖底に近いカーブを持つ。薄手		
	2…頸部が広くなり屈曲も弱くなる。厚手で、胴内面に指頭痕が残り、凹凸が著しいものがある。胴部が不整形な球形を呈すものが多く、形態も多様。		
		a	口縁が「く」字形をなし、外面にハケメを有す。
		b	口縁が直立気味で、より厚手のもの。
BIV…球形の胴部からゆるく外反しストレートにやや長く延びる口縁を持つ。頸部に窪みを持つのが特徴。			
	1…胴部は肩が張り、頸部は段を持って立ち上がる。ハケメは胴部外面にヨコ方向に入る。		
	2…胴部は肩張りするが、頸部の屈曲は段ではなくゆるい窪みとなる。口縁にハケメの入るものがある。		
		a	やや大きめで器壁が厚い。
		b	口縁が短くなる。
	3…頸部の窪みがカーブになり、胴部も球形化する。		
	4…小型で厚手。　$BIII_2$タイプに近接する。		
BV…器高値と器幅値とが近似する、背が低く広口のもの。			
	1…丸みのある尖底で、肩張りのするもの。		
	2…口縁は屈曲が強い。胴部は肩張りする。突底気味。厚手。		
	3…丸底。口縁はストレートに外反する。		
C…長頸の素口縁を持つもの			
	1…肩が張り口縁はやや外反ぎみ。平底がつくと思われる。		
	2…口縁端部が外反するもの。		
		a	胴部最大径が中央に下り、平底に近いレンズ状の底がつくもの。
		b	胴部と頸部の屈曲が弱く、あまり肩も張らず、長胴になると思われるもの。

Tab.16　土器型式分類表　(2)

ＤＩ…球形の胴部に、短く直上気味に立ち上がる口縁を有する。			
	1…少し内傾して立ち上がる口縁をもつ。		
	2…短く直上して立ち上がる口縁をもつ。		
ＤII…直立する短い口縁を持つもの。胴は縦長のラグビーボール状を呈し縦方向のミガキを施すもの。			
ＥＩ…ラッパ状に外反する広義の広口壺。甕ＡＶ類と通ずる形状をもつ。			
		a	口縁は長く、肩部に貼付三角凸帯を持つ。口径も大きいが、頸部も広い。内外面にハケメがある。
		b	口縁は広いが、頸部が口径に対し５割近くすぼまる。肩張りの長胴。
		c	口縁はきつく外反し、短くおさまる。口縁端部に刻み目を持つ。
		d	口縁はｃに近いが、胴中央に最大径がある。平底に近いレンズ底が付く。
		e	ｄに比し口縁が少し立ち上がり、胴部は肩張りし、尖底にレンズ状平坦面がある。
		f	口縁はストレートに開き、胴は肩張りがし、尖底。内面はケズリ。
		g	頸がやや柱状に立ち上がり、口縁端部にはね上げが見られる。
		h	口縁はきつく外反しラッパ状に開き、端部に平坦面を持つが、口径が胴部最大径の５割弱しかなく、かなり小さくみえる。
		i	口縁はきつく外反する。高さが低いのが特徴。球形の胴部を持つ。
ＥII…ＥＩ類に対し頸部が広いもの。口縁端部に明確な平坦面を作らない。			
	1…平底で、胴上位に最大径があり肩部に三角突帯が廻る。頸はやや柱状気味に立ち、ゆるく外反する口縁に続く。		
	2…平底に近いレンズ状底を持つ。		
		a	柱状に立ち上がる頸はなく、口径がやや大きくなり口縁は短く屈曲する。
		b	肩の張りがなく、頸が広く、甕型土器の「く」字形口縁がつく。
		c	頸の柱状部分が長く、長胴。頸部から口縁部の屈曲がゆるやか。

Tab.17　土器型式分類表　(3)

F…器高が胴部径より小さく、口縁が短いもの。			
	1…平底で内弯気味に立ち上がる底部を持ち、口縁はきつく短く「く」字形に屈曲し外反する。2ケ1対の穴を口縁に穿つものもある。		
	2…平底に近いレンズ底を持つ。		
		a	肩張りがなく口縁が短く直立する。
		b	外面にミガキを施す。
		c	「く」字形の口縁を持つ。
	3…丸みのある尖底。		
		a	やや長めに口縁が直立する。
		b	肩張りし、頸部の屈曲がゆるい。
		c	頸がやや狭いもの。
	4…丸底		
		a	ゆるい「く」字形口縁を持ち、胴部外面にミガキを持つ。
		b	胴部内面にケズリを施す。
		c	胴部径が器高の1.3倍ほどあり胴部内部に荒いケズリを施す。

甕形土器			
AⅠ…「く」字形口縁を持つもの。もしくはそれから派生するもの。			
	1…平底。		
		a	ストレートに延びる体部を持つもの。
		b	胴上位に張りのある体部を持つもの。
	2…平底で内弯せず立ち上がるものか、平底的レンズ状底のもの。		
		a	AⅠ$_1$aタイプに比べ、口縁の屈曲が弱い。
		b	aタイプよりさらに口縁が上に延び、砲弾形の胴部を有す。
		c	口縁が長く上に延び胴部がふくらむ。
		d	ゆるく長く「く」字形に外反する大型のもの。
		e	素口縁。端部に平坦面がある。底はやや凸レンズ状を呈すが、内弯ぎみに立ち上がる。
	3…丸底的レンズ状底		
		a	口縁端部が外反するもの。
		b	胴部下半にケズリ気味の擦過を施すもの。
	4…尖底でレンズ状の平坦面があるもの		
	5…丸形の尖底		
		a	長胴で口縁端部が外反するもの。
		b	長胴で口縁端部に平坦面があるもの。
		c	長胴で口縁端部に刻目があるもの。
		d	口縁が内弯気味に立ち、胴部にタタキが残っている。薄手である。

Tab.18　土器型式分類表 (4)

AII…「く」字形口縁をなし、短胴のもの。			
	1…尖底でレンズ状の平坦面のあるもの。		
	2…尖底で胴部最大径が上位にあり肩張りのするもの。		
		a	口縁のくびれが強く、胴内部全面にハケメがあるもの。
		b	口縁がやや立ち上がり、胴内部はナデとケズリがあるもの。
		c	さらに口縁が立ち上がり、底も丸味を持つ。
		d	くびれの屈曲がゆるやか、胴内部はケズリ。
	3…丸底。		
		a	胴内部はケズリのみ。
		b	全体に不整形の胴内部はケズリのみ。
AIII…口縁が上方に延びるもの。			
	1…尖底の丸底。		
		a	口縁は内弯気味。胴外部上位はヨコハケ。内部上位はヨコ方向のケズリ。
		b	口縁の屈曲が弱く、立ち上がりはやや長い。胴外面上位はタテハケ。胴内部の上中位はヨコ方向ケズリ。
		c	胴外部上位は斜方向のハケメ。
	2…丸底。		
		a	口径と胴部最大径が近い。やや肩張りする。
		b	胴部中位に最大径がある。
		c	全体に不整形。
AIV…口縁は内弯ぎみに立ち上がり端部につまみ上げを持つ。布留系もしくは布留系の影響を受けたもの。			
	1…丸底。胴部が球形をなし、内面ケズリ、薄手。		
	2…やや長胴で全体に不整形。布留系と在地系の折衷型。		
AV…「く」字形口縁を持つ短胴のもの。			
	1…内弯気味に立ち上る平底を持つもの。		
	2…平底的レンズ状底を持つ。口縁屈曲がやや弱い。		
AVI…短く開く口縁を持つもの。			
	1…平底。		
		a	全体に不整形。
		b	全体に厚手。
	2…平底状レンズ底を持ち、口縁は内弯ぎみ。口縁端は摘み出す。		
	3…尖底でそりぎみの口縁を持つ。外面はタタキが残る。		
		a	胴部が砲弾状を呈す。
		b	長胴で口縁部との境は不明瞭。
	4…箱形の丸底を有する。		
B…上方に短く延びる口縁を持ち、胴は強く肩が張り、縦長の隅丸方形様の形状を呈す。丸底。外面タタキ。内面ナデ。			
		a	無文のタタキを施すもの。内面はナデ。
		b	格子目のタタキを施すもの。内面はナデ。

Tab.19　土器型式分類表　(5)

C…二重口縁をもつもの。山陰系か。			
		a	口縁部に波状文を施す。
		b	口縁部無文で鋭角的に屈曲する。
		c	尖底。やや厚手。小型。
		d	頸部の屈曲が強く、内面にケズリを持つもの。
D…小型で擬似二重口縁を持つもの。			
	1…口縁が外反するもの。		
		a	内面タテ方向ケズリ。
		b	内面の屈曲が略される。内面ヨコ方向ケズリ。
	2…口縁の反りが弱く、内傾するもの。		
		a	内面ヨコ方向ケズリ。
		b	二重口縁というよりつまみ上げ様を呈す。尖底レンズ底。
	3…肩の張りがなく、二重口縁というよりつまみ上げ的。		

鉢形土器			
A…短い「く」字形口縁を持つ。口径は器高の1.5倍程度。			
	1…やや内弯気味に立ち上る平底を持つ。内外面ハケメを施す。大型。		
	2…平底。		
		a	小型で弱い「く」字形の口縁を持つ。
		b	口縁の屈曲が弱く、厚手。
B…口縁が鍔状に長い。深手で口径が器高の2倍程度。			
	1…内弯気味に立ち上がる平底。鍔が長い。		
		a	胴中位が張る。口縁端部に平坦面がある。
		b	胴の張りがなく、口縁が外反する。
		c	bタイプに脚が付くもの。
	2…尖底にレンズ状の平坦面を持つ。口径は器高の1.5倍。		
	3…丸底。		
		a	口縁の屈曲が弱い。
		b	胴部が頸部に向かって、一旦内弯し、口縁は横に延びる。胴が箱形を呈す。
C…口縁が鍔状に長く、口縁が器高の3倍程度あるもの。			
	1…尖底に近いレンズ底。口縁端部に平坦面がある。		
	2…尖底。口縁端部に平坦面がある。		
	3…丸底。口縁端部は尖り気味。		
		a	浅手。
		b	胴が箱形をなす。
		c	柱部が太い脚が付く。

Tab.20　土器型式分類表　(6)

D…「く」字形口縁を持ち器高と器幅が等しいかそれに近いもの。胴の肩が張る。			
	1…尖底。		
		a	口縁端部に平坦面を持つ。
		b	口縁端部は尖り気味。
		c	口縁の屈曲が弱く、胴部が短い。
	2…丸底。壺型土器ＢＶ類に近い。		
		a	口縁の屈曲が弱く長い。
		b	胴の中央に最大径がある。
		c	肩がなく、口縁は屈曲が弱く先端が尖る。
		d	胴部がやや箱形を呈す。
E…素口縁で砲弾形を呈す。器高と最大径がほぼ等しい。			
	1…内弯気味に立ち上がる平底を持つ。		
	2…尖底にレンズ状の平坦面を持つもの。		
	3…尖底。		
		a	胴下半部にケズリ気味の擦過を施すもの。
		b	胴上位にタタキを有するもの。
		c	10cm前後の小型のもの。素口縁で深手のもの。
F…素口縁で深手のもの。			
	1…小さな平底で内面には平坦面を持たない。		
		a	体部がストレートに開くもの。
		b	体部がやや内弯気味に立ち上るもの。
	2…平底に近いレンズ底。		
		a	口縁端部が直立するもの。
		b	口縁端部が内弯するもの。
	3…尖底でレンズ状の平坦面を持つもの。口縁はやや外反する。		
	4…尖底。口縁は外反し、内面にわずかに稜をつくる。		
	5…丸底。		
		a	体部は内弯し口縁端部をやや外に摘み出す。
		b	体部はストレートに立ち上がる。
		c	口縁端部が内弯する。
		d	ごく短い「く」字形の口縁を持つ。
G…素口縁で浅手のもの。			
	1…平底で、内面に明確なフラット面を持つ。		
	2…平底に近いレンズ状底。		
	3…尖底、もしくはそれに近いもの。		
		a	口径が高さの２倍程度のもの。
		b	口径が高さの３倍程度のもの。
		c	ｂタイプに短い脚が付くもの。
	4…丸底。		
		a	口径が高さの２倍程度のもので、全体に不整形。
		b	口径が高さの３倍程度のもの。

Tab.21　土器型式分類表　(7)

器台形土器			
A…上下ともラッパ状に開く筒状のもの。			
	1…屈曲が上下2ヶ所にある。内面のハケメは上下とも施される。		
	2…屈曲が上位に寄るもの。		
		a	やや薄手。
		b	厚手。
B…ラッパ状に開く脚に小型の坏状のものがのるもの。			
		a	坏はストレートに横に開く。
		b	坏は上方に延びやや深め。

手づくね・ミニチュア土器			
A…壺型BⅢ類に類するもの。			
B…平底で体部が直立するもの。			
C…底部が小さく肩張りする素口縁の壺型。			
D…逆台形の鉢状を呈すもの。			
	1…平底に近いレンズ底。		
		a	体部がストレートに立ち上がり、口縁端部を平坦になす。
		b	体部が内弯ぎみに立ち上がり、口縁は摘み上げた様になる。
	2…尖底にレンズ状の平坦面を有すもの。		
	3…尖底。		
		a	整形。
		b	指頭痕が残り、不整形。
E…浅い坏に低い脚がつくもの。			

Tab.22　土器型式分類表　(8)

高坏形土器			
A…口径30cm程の大きな坏部と長い柱部とラッパ状に開く裾部とからなる大型のもの。			
	1…坏の深さが口径の3～4倍程とやや深めで口縁内面に明確に屈曲が見られるもの。		
		a	口縁が上方に延びる。口径が深さの3倍程度。
		b	口縁の延びが下がり、口径が深さの4倍強。
		c	形状はA_1bタイプで小型で厚手のもの。
	2…口の延びが下がり長くなる。口径が深さの5から6倍近く、より浅くなるもの。		
		a	口縁端部が外反する。薄手。
		b	坏底部が横に延びる。
		c	坏部は鉢C_{3a}類に近い。内外面ミガキを施す。
	3…坏部の屈曲がないもの。		
B…坏部は深く口縁の屈曲も強いが端部が外反する。脚は柱部がなく、すぐ外開きに広がる。			
C…口径が20cm程度の小型のもので、脚柱部内側は横方向のケズリを施すもの。			
	1…坏部の底部と体部が段を持って屈曲するもの。		
		a	坏内面の底が窪み、口縁端部が外反するもの。
		b	底が平坦で、底部と体部は外面で段を持つが、連続するカーブで描かれ一体化する。口縁端部は外反する。
		c	口縁端部は内弯する。
		d	坏部の底部と体部の境に立ち上がりがある。
	2…坏部の底部と体部が「く」字形をなして屈曲し、屈曲部から口端部までが長いもの。		
		a	杯部と脚部の接合はソケット式。
		b	坏部の屈曲部が断面三角形の稜をなす。
		c	脚柱部がなく短く大きく開くもの。
		d	脚柱部がなくゆっくり開く裾を持つもの。
	3…C_2類に比べ坏部が浅く、脚柱部が長いもの。		

Tab.23　土器型式分類表　(9)

壺A I型

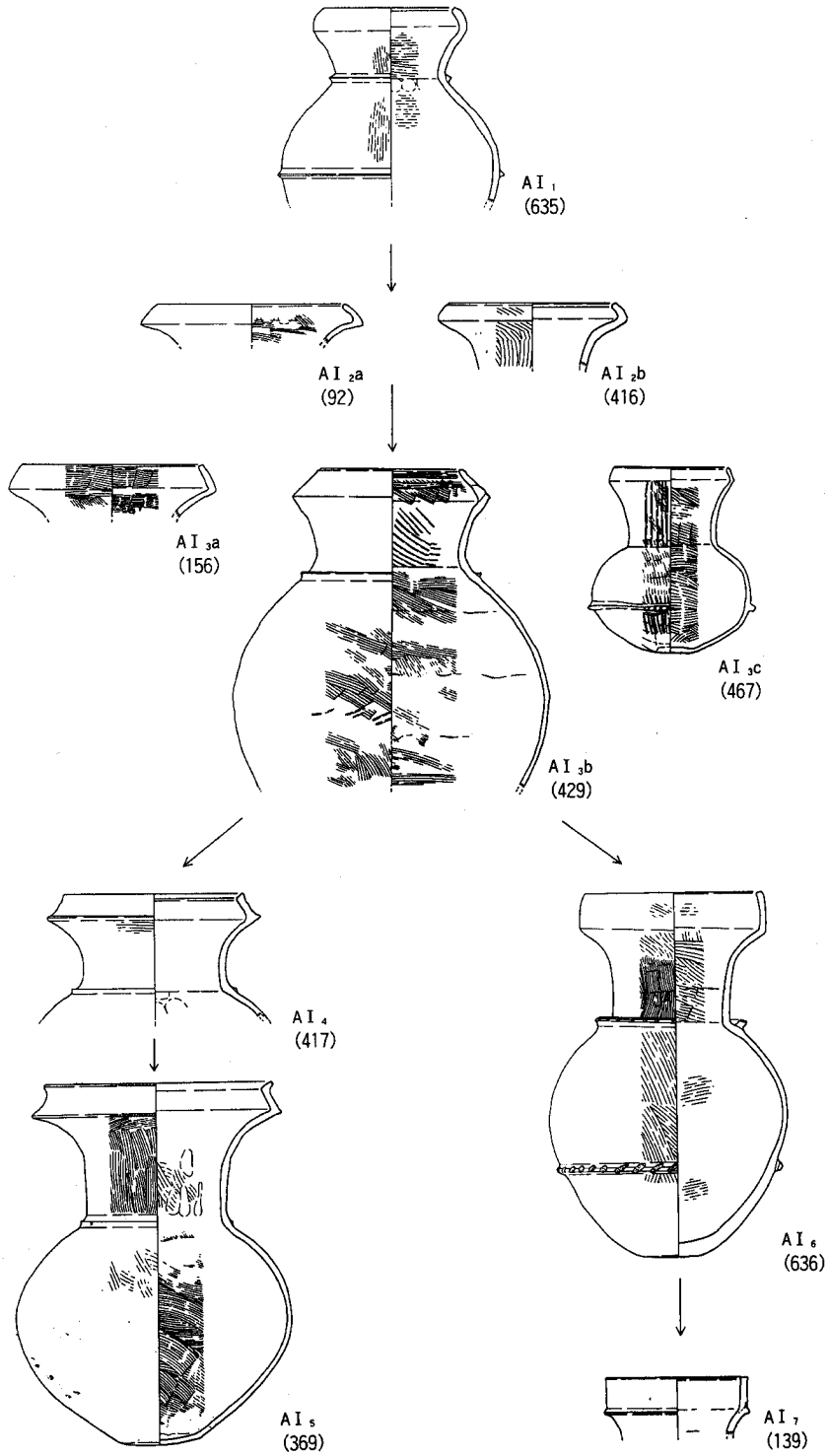
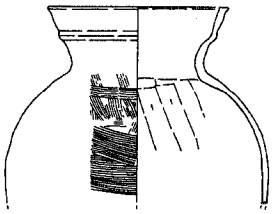
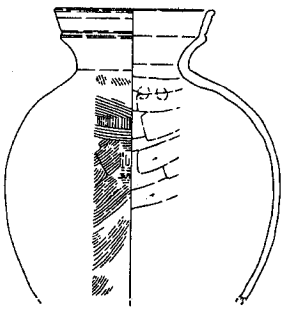


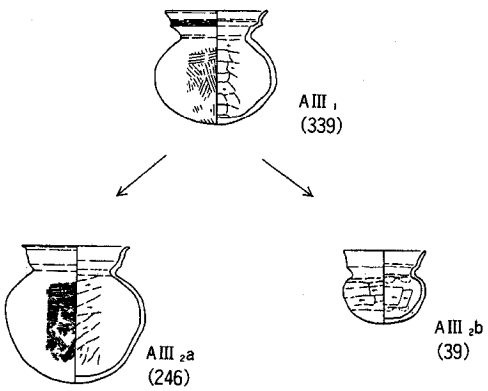
Fig. 193 壺形土器分類図(1)

壺A II 類

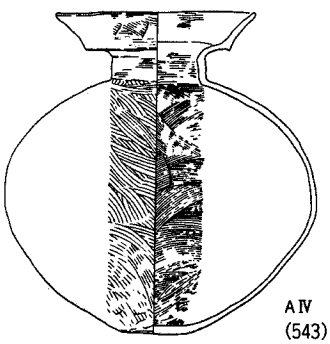




壺A III 類



壺A IV 類



壺A V 類

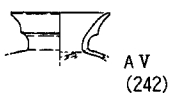
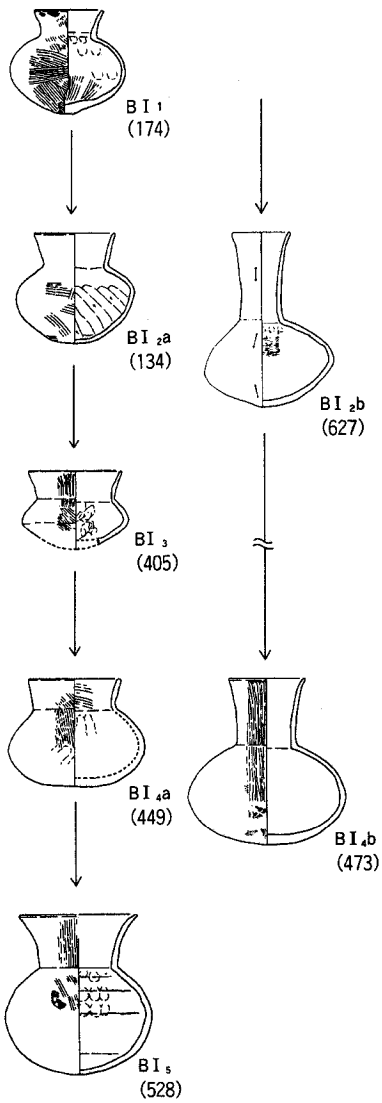
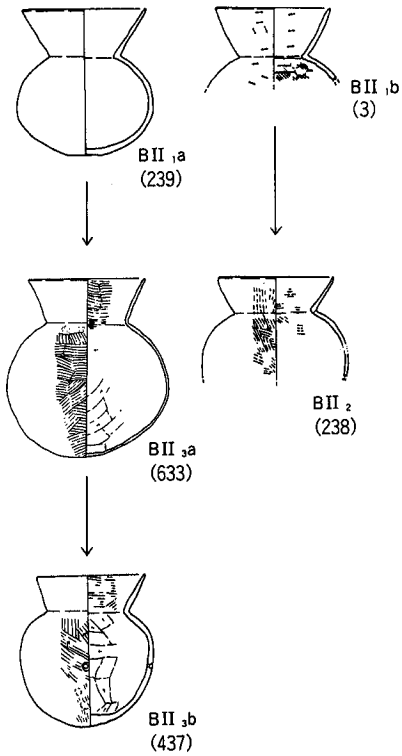


Fig. 194　壺形土器分類図(2)

壺B I類



壺BII類



壺BIII類

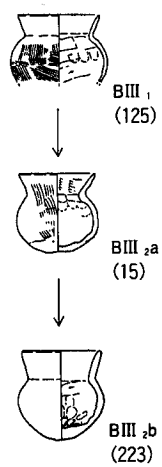
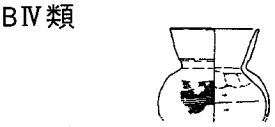
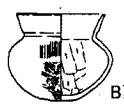
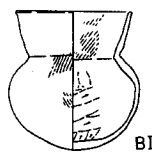


Fig. 195　壺形土器分類図(3)

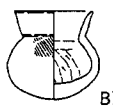
壺BⅣ類

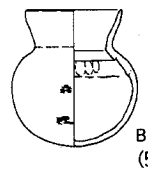


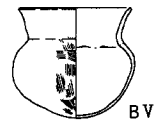


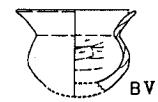


壺BⅤ類

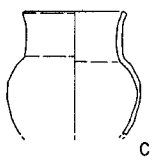


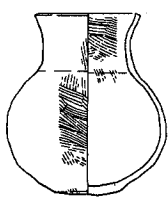


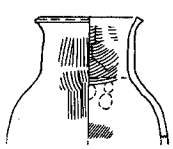




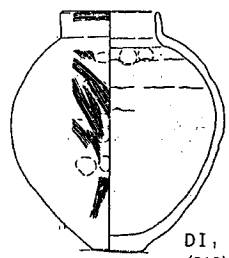
壺C類

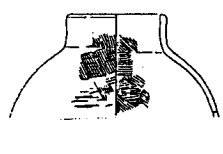






壺D Ⅰ類





壺DⅡ類

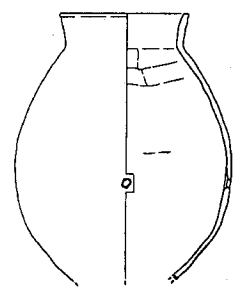


Fig. 196　壺形土器分類図(4)

壺E Ⅰ類

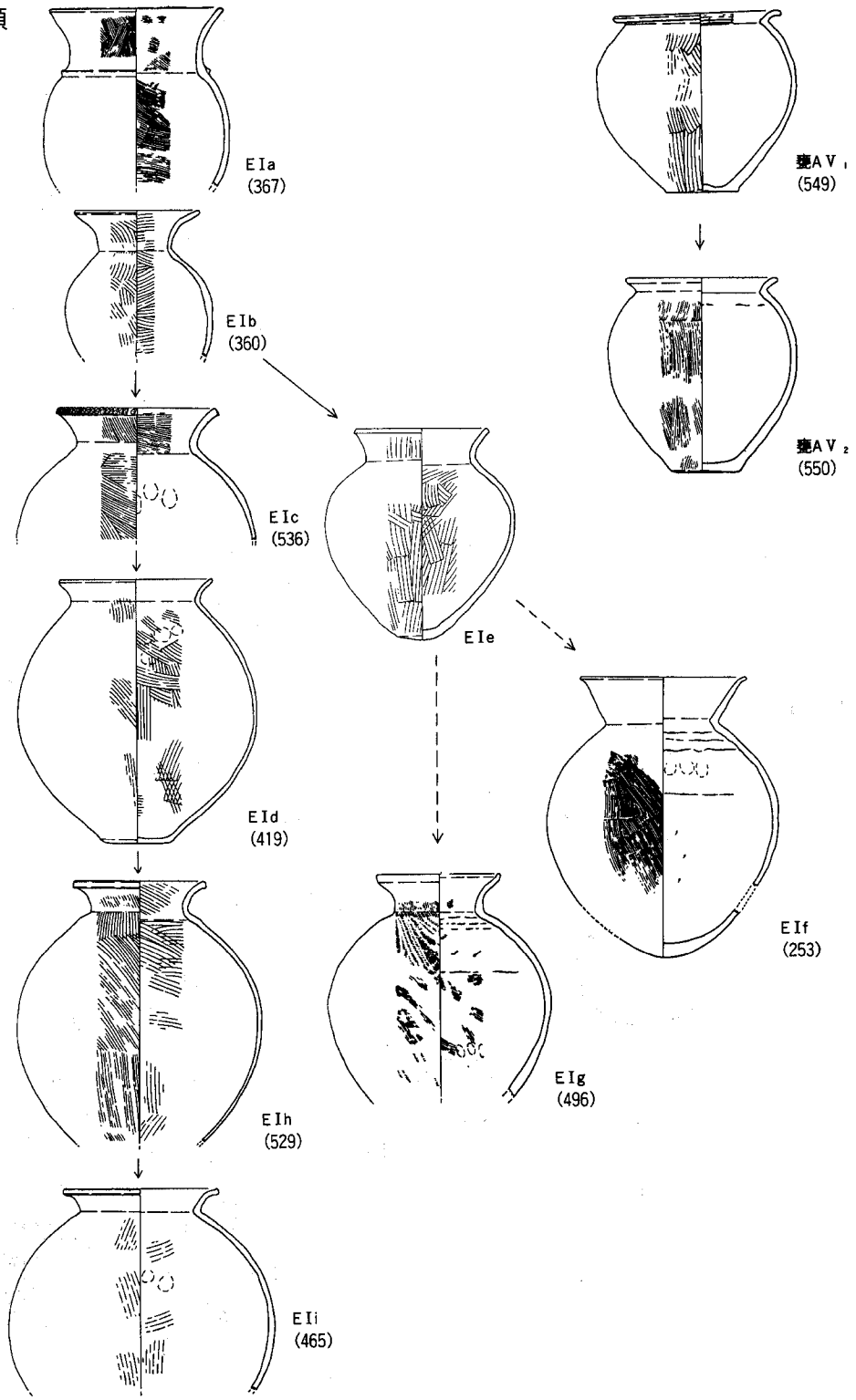
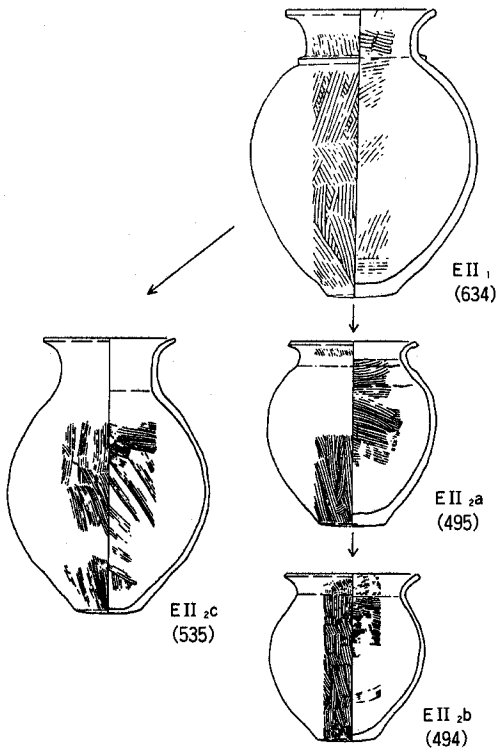


Fig. 197 壺形土器分類図(5)

壺E II 類



壺F類

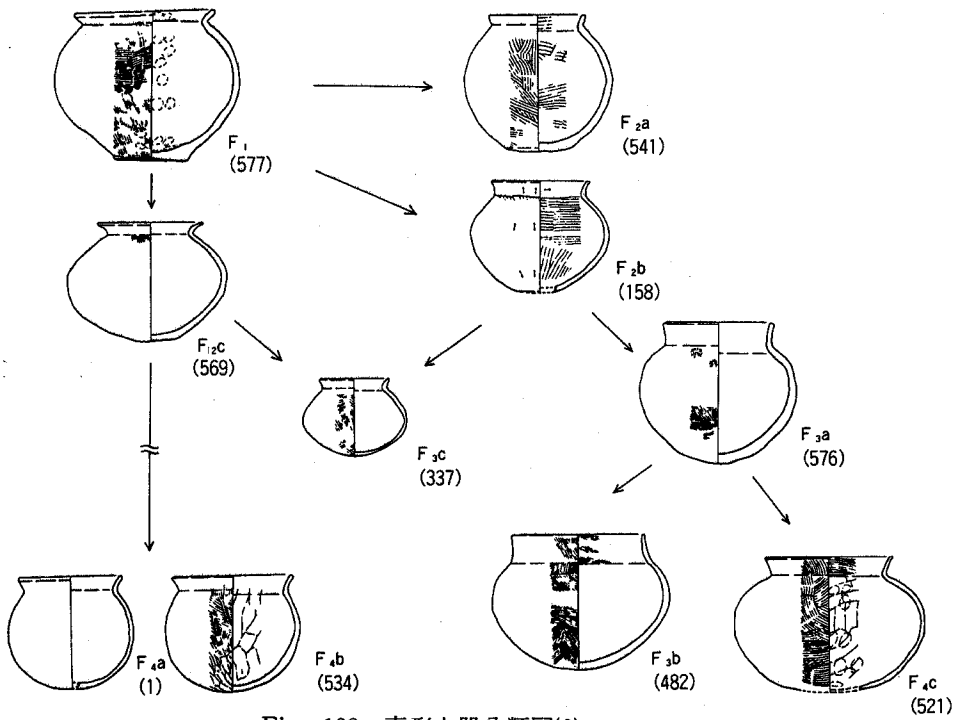


Fig. 198　壺形土器分類図(6)

甕A I類

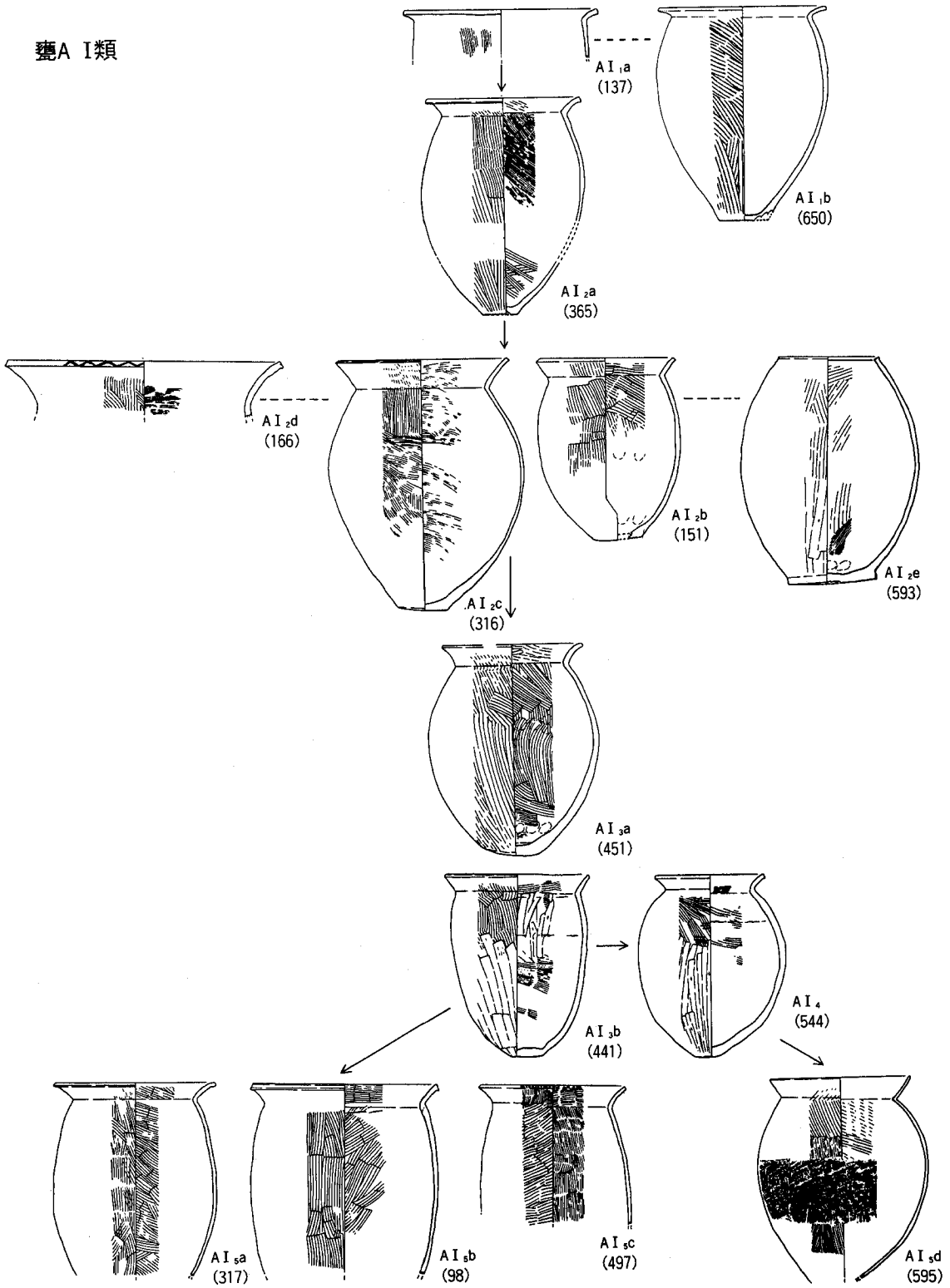


Fig. 199 甕形土器分類図(1)

甕AII・AIII類

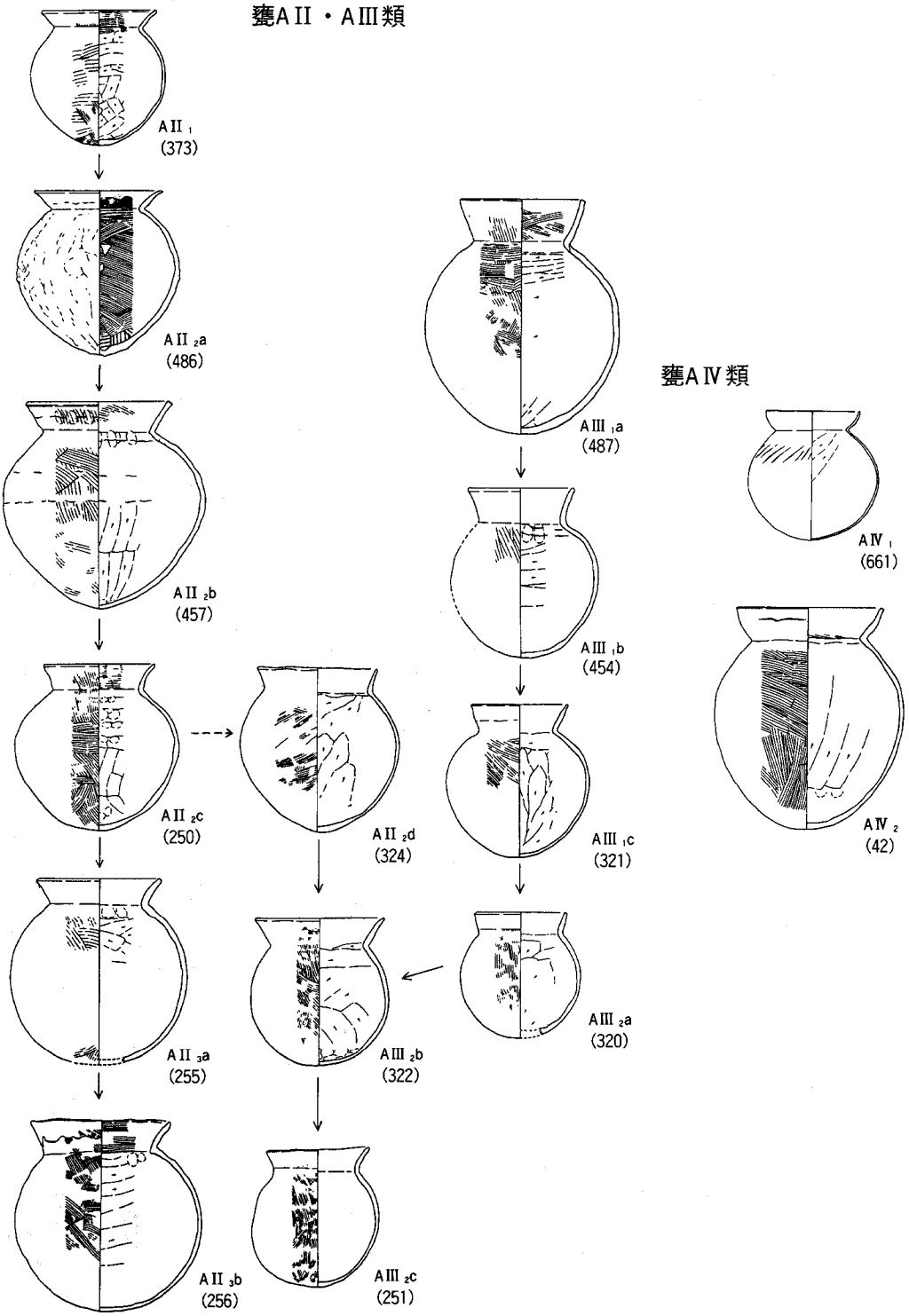
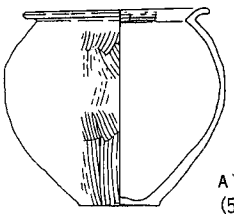
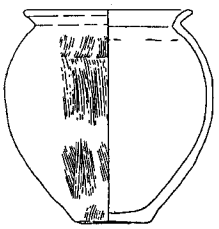


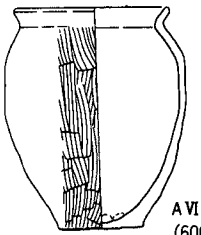
Fig. 200　甕形土器分類図(2)

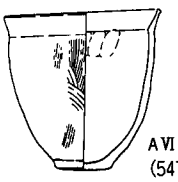
甕A V 類

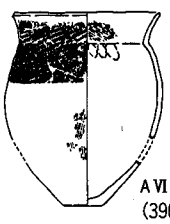


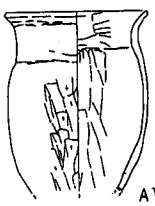


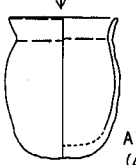
甕A VI 類



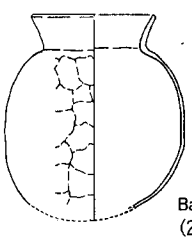


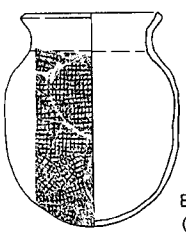




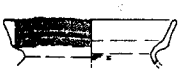


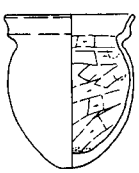
甕B類

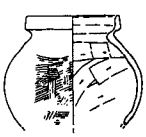




甕C類







甕D類

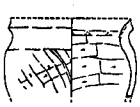
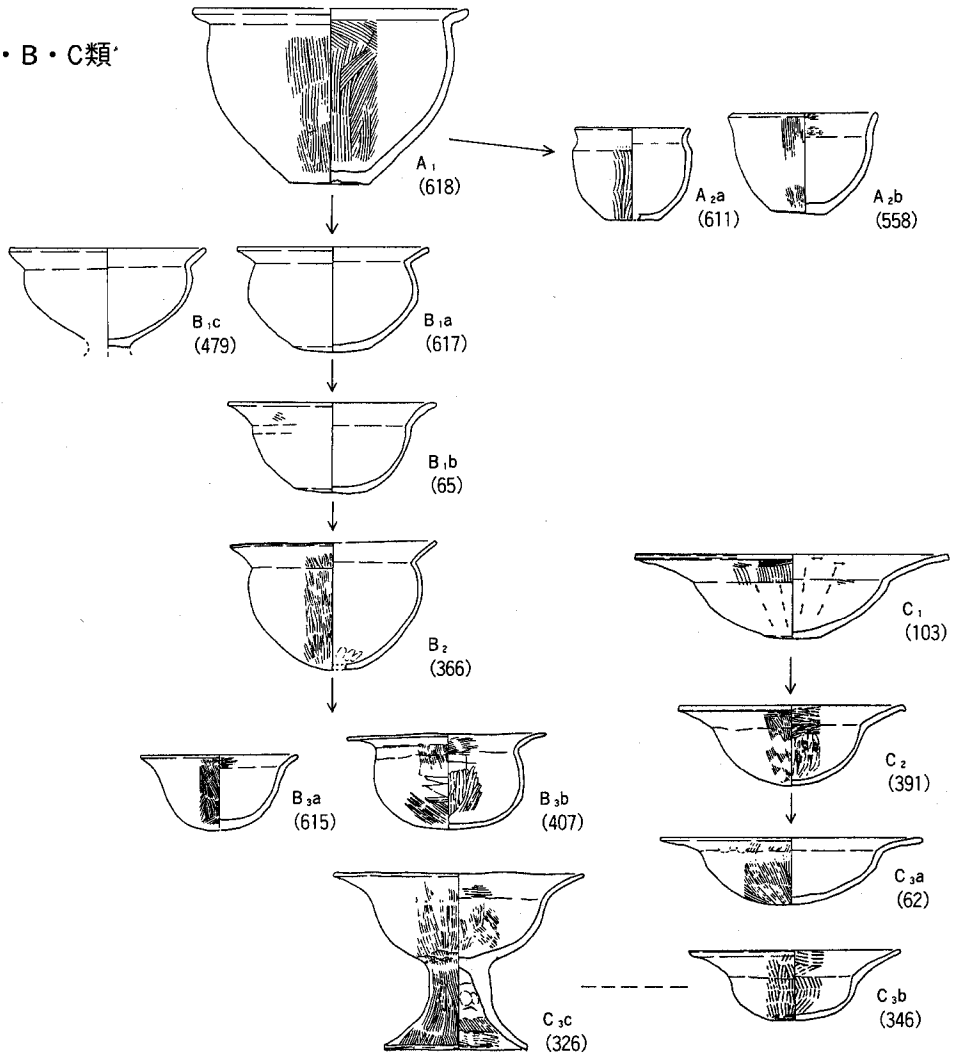


Fig. 201　甕形土器分類図(3)

鉢A・B・C類



鉢D類

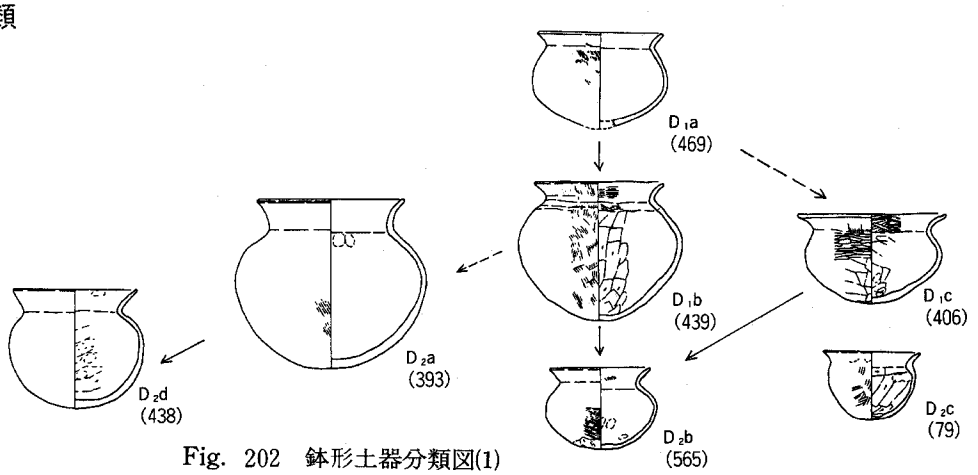
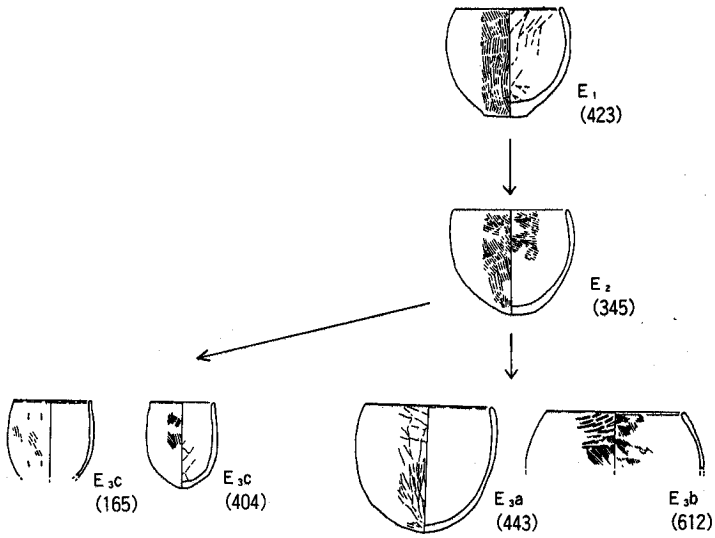


Fig. 202　鉢形土器分類図(1)

鉢E類



鉢F類

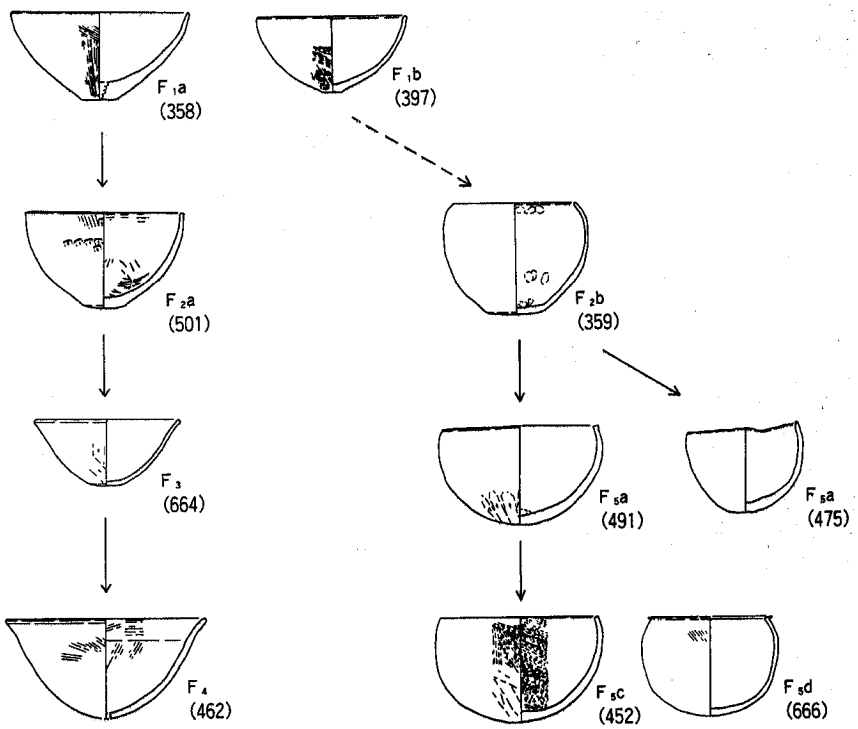


Fig. 203　鉢形土器分類図(2)

鉢G類

器台A・B類

手づくね・ミニチュア土器A～E類

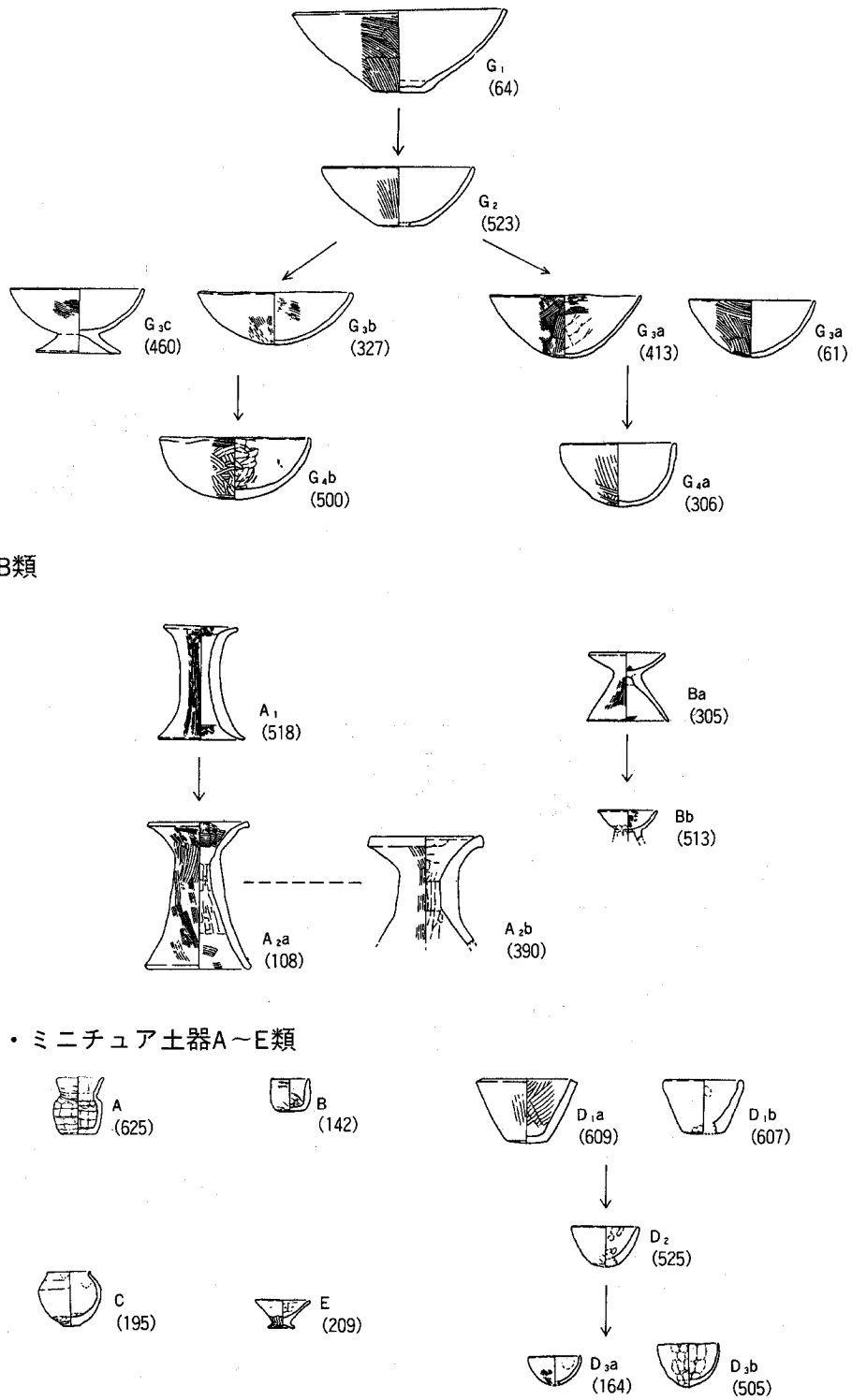


Fig. 204 鉢・器台・手づくね・ミニチュア土器分類図

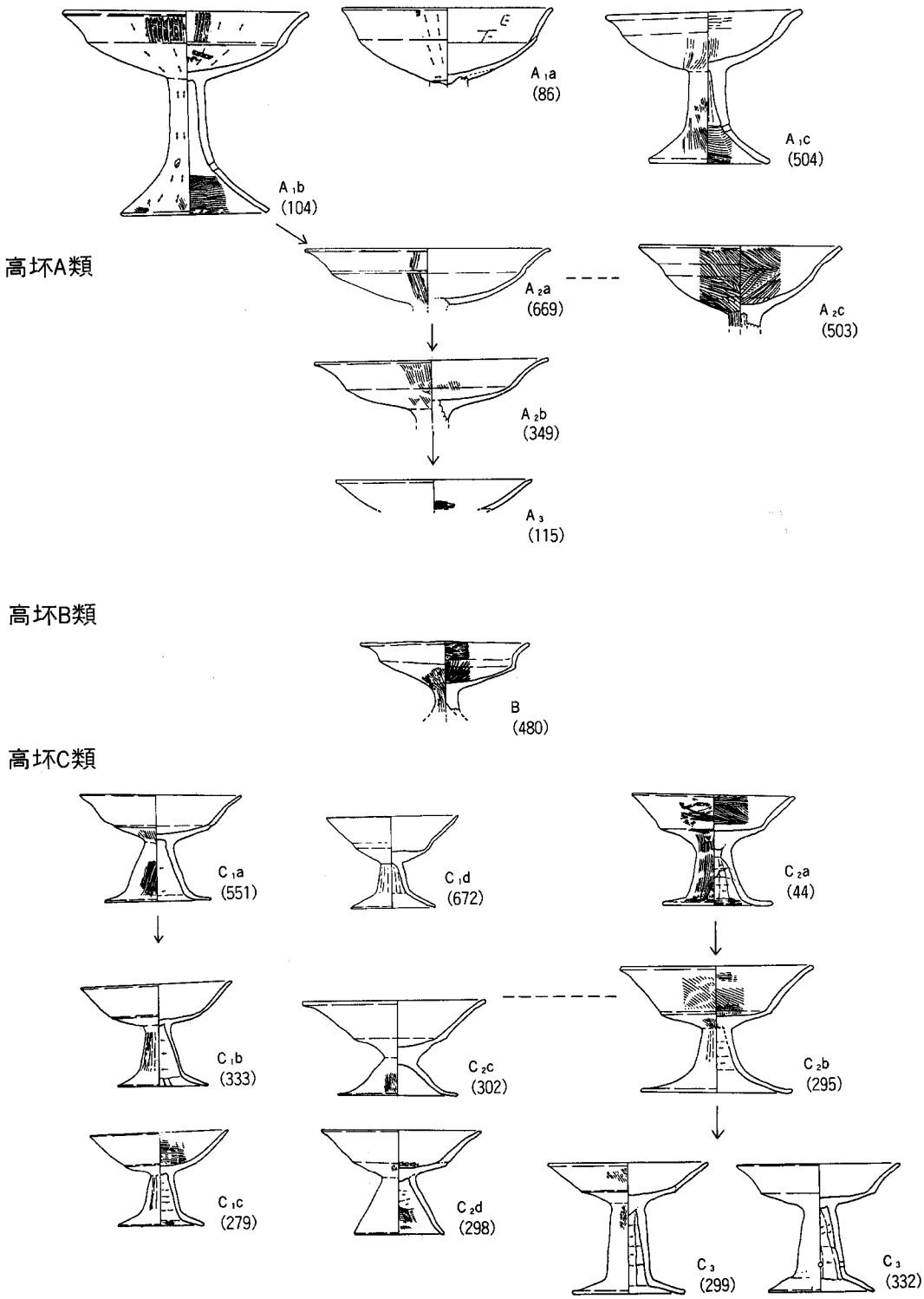


Fig. 205　高坏形土器分類図

付　　論

福岡市東区唐原遺跡土壙(SK－32)出土の鉋に付着する織物について

布　目　順　郎

福岡市東区唐原遺跡土壙(SK－32) 出土の鉈に付着する織物について

京都工芸繊維大学名誉教授　布目順郎

標記の鉈に付着する2種類の織物(第1図)について調査したので、ここにその結果を報告する。本土壙の時代は弥生時代後期終末ないし古墳前期とされる。もし、出土の織物が絹であれば、当時の絹出土品がきわめて少なく、かつ、耶馬台国時代からさほどかけ離れていないことから興味が持たれる。

1．材質

材質調査は繊維断面形によった。断面作成には従来同様パラフィン切片方を適用した。　繊維断面形は第2図にみるように、いずれも家蚕のものである。

2．織り密度と繊維断面計測値による産地推定出土の絹は第1図にみるように、両者とも平絹であり、その織り密度と繊維断面計測値は第1表に示す通りである。平絹(1)の織り密度を同時期のものと比較しようとしても、同時期の絹出土品が殆どないところから、それは不可能である。そこで弥生中期後半の9資料での平均値25.4×16.8と比較してみると、大差がない。しかし、古墳前期の33資料での平均値41.8×26.1に比べると格段に粗いことがわかる。

平絹(2)のほうは、弥生時代の平絹を通じて最も粗い部類に属し、弥生後期の麻織物4資料での平均値22.3×13.3と比較しても格段に粗い。

これまで筆者は、他の弥生絹を、織り密度の点からすべて日本製とみなしてきた。したがって、本土壙出土の2種類の絹もまた日本製とみて差し支えない。

次に、出土の絹の繊維断面計測値を第2表に示す漢代4墓のそれと比較（比較は経緯の平均値で行ない、差の有意性検定は省略する）するときは、次のようになる。

平絹(1)：完全度においては、漢代4墓でのいずれよりも小さい。

断面積のほうは、陽高よりも大きく、楽浪、馬王堆、ノイン・ウラのいずれよりも小さい。楽浪と陽高の中間よりもやや陽高寄りの値である。

平絹(2)：完全度については、漢代4墓でのいずれよりも小さい。

断面積では、陽高、楽浪よりも大きく、馬王堆、ノイン・ウラよりも小さい。楽浪と馬王堆の中間により馬王堆寄りの値である。

両絹の完全度がともに漢代4墓での値よりも小さいことは、それらの材料糸が日本製であることを示しているとみてよい。また、断面積からみるときは、平絹(1)の繊維を産出した蚕は楽浪系の三眼蚕であった可能性が濃いのに対し、平絹(2)のほうは中国本土系の四眼蚕であった可能性が考えられる。しかし、楽浪系三眼蚕の可能性もないではない。

いずれにせよ、そのような蚕が出土地のあたりで飼育されていたと考えられる。

終わりに、本調査の機会を与えられた福岡市教育委員会に感謝の意を表する。

文献

(1) 布目順郎「養蚕の起源と古代絹」雄山閣 、1979

第１図　繊維断面拡大転写図(顕微鏡視野にあらわれた個ヶの繊維の断面転写図を無秩序に並べたもの。)

資　　料	経緯の別	繊維断面についての計測値			織糸数(対1㎝)	経糸数と緯糸数の比	織糸の巾(㎜)
		完全度(%)	面　積(μ^2)	供試繊維の数			
鉇に付着する平絹(1)	経	46.0±3.15	39.7±4.51	30	25	1.25	0.25−0.37
〃	緯	47.2±3.40	45.6±3.25	30	20		0.33−0.45
鉇に付着する平絹(2)	経	51.8±3.61	58.0±5.23	30	11	1.22	0.48−1.20
〃	緯	47.9±1.89	60.0±6.24	25	9		0.40−0.65

第１表　唐原遺跡出土の鉇に付着する平絹の繊維断面計測値と織り密度

備考　鉇は土壙（SK−32）からのもの。　時期は弥生後期終末ないし古墳前期。

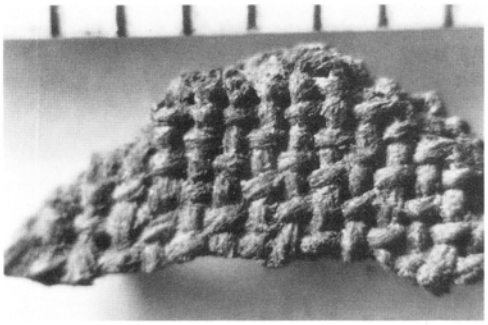
遺　跡　名	繊維横断面についての計測値	
	完全度（%）	面　積（μ^2）
陽高県（山西省）	50.9　(10)	37.1　(10)
楽　　浪	50.8　(23)	49.8　(23)
馬王堆１号	− 〔53.9〕（5）	65.5 〔69.3〕（5）
ノイン・ウラ	53.9　(20)	73.0　(20)
パルミラ	−	−

第２表　漢代の平絹における繊維断面計測値

備考(1)　馬王堆の絹繊維横断面計測値は『考古学報』（1974年第１期）にあるもの（ただし、〔　〕内の数値は筆者が同学報に示された繊維横断面写真をもとに算出したもの)。

(2)　本表の数値にはマワタでのものは含まれていない。

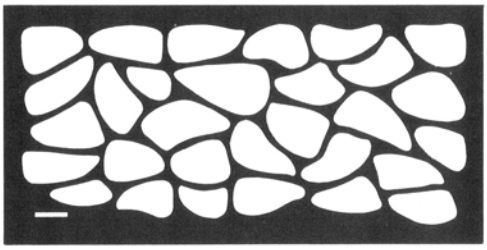
(3)　（　）内の数値は資料数。



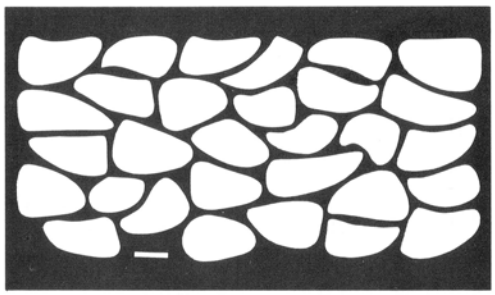
平絹(1)

平絹(2)

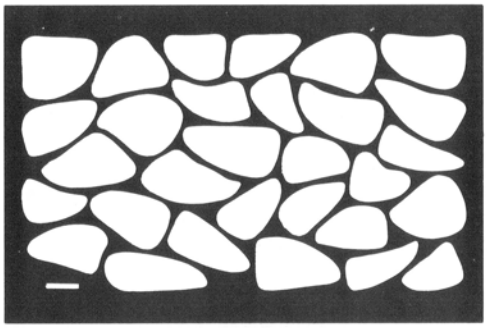
第1図



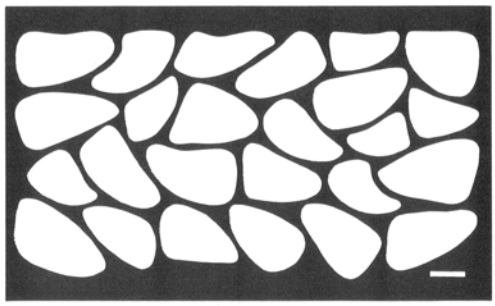
A



B



C



D

第2図

繊維断面拡大転写図(顕微鏡視野にあらわれた個々の繊維の断面転写図を無秩序に並べたもの)

A．平絹(1)の経糸　　B．平絹(1)の緯糸

C．平絹(2)の経糸　　D．平絹(2)の緯糸

═ 土器観察表凡例 ═

(1) 法量
○現存または復原されうる数値だけを記載した。
○上段が口径、中段が底径、下段が器高を示す。(単位はcm)
(2) 形態の特徴
○部位とその形態と場合によって残存状況を記載した。
(3) 手法の特徴
○調整の用語はカタカナで略式的に記載した。
○上段が外面、下段が内面の手法を表わす。また、おのおの上部から下部の順に記した。
(4) 胎土
○砂粒の大小については、細＜小＜（無冠）＜粗の順で示し、砂粒の前に冠した。
(5) 焼成
○焼成の状況については、不良＜やや良＜良＜良好の使い分けを設けた。
(6) 色調
○農林水産省農林水産技術会議事務局監修『標準土色帖』に依る。
※なお、遺構・土器番号については、本文中に使われている番号と一致している。

No.	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	SC-01	壺 F	11.1 12.0	口縁部は小さく外反し胴部は球形。	ヘラ研磨 ナデ	小砂粒少含	良	黄橙色	
2	SC-01	甕 AI	19.7	口縁は「く」字状に外反し端部は平坦に整えている。 胴部は砲弾状。	ヨコナデ、タテハケ目 ヨコハケ目	砂粒、 金雲母含	良	橙色	
3	SC-02	小型壺 BII	12.1	口縁部は、内弯ぎみに外方に長く開く。胴部は球形	研磨 ナデ、ハケ目後ナデ	小砂粒含	良	赤色	
4	SC-02	小型壺		胴部は球形	ヨコナデ ヘラケズリ	小砂粒含	良	橙色	
5	SC-02	甕 AIII	10.0 16.5	口縁は立ちぎみに外反し、胴部は球形。 胴部中央に穿孔。	ヨコハケ、タテハケ ヨコハケ、ヘラケズリ	小砂粒含	良	明赤褐色	
6	SC-02	甕 AIV	15.0	「く」字状の口縁部は内弯ぎみに開き、端部は水平に整えて内側に小さく摘み出す。胴部は長胴形。	ヨコナデ、ハケ目 ヘラケズリ	粗砂粒多含	良	黄橙色	スス付着
7	SC-02	甕 AII	13.0	口縁部は「く」字状に外反し、端部は平坦に整えている。 胴部は卵形。	ヨコナデ、ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ、ヘラケズリ	細砂粒含	良	橙色	スス付着
8	SC-02	甕 AII	13.8	口縁部は「く」字状に開き、内面に稜を作る。	ハケ目 ヘラケズリ	砂粒、 金雲母含	良	橙色	
9	SC-02	甕 AIII	14.1	「く」字状に外反する。口縁部は中位で屈曲して直口ぎみに立ち上がる。	ハケ目 ヘラケズリ	小砂粒多含 (赤褐色粘土粒含)	良	橙色	スス付着
10	SC-02	甕 AIV	13.9	口縁部は「く」字状に外反し、端部は嘴状に膨らむ。 胴部は卵形。	ヨコナデ、ハケ目 ヘラケズリ	小砂粒含	良	明赤褐色	スス付着
11	SC-02	高坏 C	17.6	坏部は下半に明瞭な稜を有し、反ぎみに外方に開く。 脚部は膨らみぎみに短くのびる。	ナデ ハケ目、ヘラケズリ	細砂粒含	良	橙色	
12	SC-02	高坏 C	11.6	脚部はストレートにのび、緩く開いた裾部は端部を内側に小さく摘み出す。	ナデ ナデ、ヘラケズリ	細砂粒含	良	橙色	
13	SC-02	高坏 C	11.8	脚は短くストレートにのび、裾部は大きく開いて端部は内側に小さく摘み出す。	ナデ ヘラケズリ	細砂粒含	良	橙色	

Tab.24 土器観察表 (1)

No.	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
14	SC-03	小型壺	9.4 1.6 9.3	口縁部は内弯ぎみに長く外方にのびる。胴部は扁球形。	ヨコナデ、ハケ目、ナデ ハケ目指頭押圧後にナデ	小砂粒含	良	黄橙色	
15	SC-03	小型壺 BIII	8.1 8.6	「く」字状の口縁部は短く外反する。胴部は球形。	ヨコナデ、ハケ目後ナデ ハケ目指頭押圧後にナデ	細砂粒少含	良	橙色	
16	SC-03	甕 AII	11.2	口縁部は小さく外反し、端部を外方に小さく摘み出す。 胴部は扁球形。	ヨコナデ、ハケ目 ナデ・ヘラケズリ	小砂粒含	良	橙色	スス付着
17	SC-03	甕 AII	12.4	口縁部は「く」字状に外方し、端部を小さく摘み出す。胴部は肩がはる。	ナデ ヘラケズリ	小砂粒含	良	橙色	
18	SC-03	甕 AII		胴部は球形。	ハケ目 ヘラケズリ	小砂粒含	良	明赤褐色	
19	SC-03	甕 AIV	14.1	口縁部は直口ぎみに短く外反し、端部は水平に面を作る。 胴部は卵形。	ヨコナデ、ハケ目 ナデ、板目ハケ	細砂粒含	良	黄橙色	
20	SC-03	高坏 C		坏部は内弯ぎみに外方に開く。	ハケ目 ナデ、指頭押圧痕	小砂粒含	良	黄橙色	
21	SC-03	高坏 C	10.8	脚部はストレートにのび。 裾部は、小さく開く。	タテ研磨、ナデ ヘラケズリ、ヨコナデ	小砂粒含	良	黄橙色	
22	SC-05	小型壺 BIV	9.4	口縁部は直線的に長くのび下位に擬口縁状の弱い段を作る。 胴部は肩のはる球形。	ヨコナデ、ハケ目 ヨコナデ、ヘラケズリ	小砂粒含	良	橙色	
23	SC-05	小型壺 BIII		口縁部は「く」字状に短くのびる。 胴部は扁球形。	ヨコナデ、ハケ目、ヘラケズリ ナデ、ヘラケズリ	小砂粒含	良	橙色	
24	SC-05	甕 AIV	14.2	口縁部は水平に面を整え、内側に小さく摘み出す。	ヨコナデ ヨコナデ	砂粒含	良	橙色	
25	SC-05	甕 AIV	12.4	直口ぎみに短く立ち上がり、口縁部は、端部を水平に整え、内側に小さく摘み出す。胴部は肩のはる球形。	ヨコハケ目 ヘラケズリ、ナデ	細砂粒含	良	橙色	スス付着
26	SC-05	高坏 C	18.3	坏部は内弯ぎみに外方に開き、端部は小さく外方に摘み出す。	ハケ目、ナデ ヘラナデ	小砂粒含	良	橙色	
27	SC-05	高坏 C	10.1	脚部はストレートにのび裾部は小さく開く。	ハケ目後ナデ ヘラケズリ、ナデ	小砂粒含	良	橙色	
28	SC-06	小型壺 BIV		胴部は球形。	ヨコナデ、ハケ目 ヘラケズリ	細砂粒含	良	橙色	
29	SC-06	壺		胴部は球形。	ハケ目、ケズリ風撫過 ハケ目	粗砂粒含	良	橙色	
30	SC-06	高坏 C	16.8	口縁部は緩く屈曲して小さく外方に開く。	ヨコナデ ヨコナデ	砂粒金雲母含	良	橙色	
31	SC-06	高坏 C	18.3	坏部は下位で緩く屈曲し反りぎみに外方に開く	ヨコナデ ヨコナデ	粗、小砂粒含	良	橙色	
32	SC-06	高坏 C	18.3	坏部は反りぎみに外方に開き、口縁端部は小さく摘み出す。	ヨコナデ 	小砂粒含	良	橙色	

Tab.25　土器観察表　(2)

No.	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
33	SC-06	高坏 C	19.2	坏部はストレートに外反し、中位に小さな凸帯を作り出す。	タテハケ目 ナデ、ヘラケズリ	小砂粒含 (赤褐色粘土粒含)	良	橙色	
34	SC-06	高坏 C	13.4	脚部はストレートにのびる。裾部は強く屈曲して、短く外方に開き、端部を小さく上方に摘み上げる。	ナデ ヘラケズリ	小砂粒含	良	明黄褐色	スス付着
35	SC-08	壺 DII	12.4	口縁部は直口ぎみに立ち上がり、端部を外方に小さく摘み出す。胴部は長胴形	研磨 研磨・ヘラケズリ	石英、金雲母含	良	橙色	
36	SC-08	甕 AI	18.1	「く」字状の口縁部は反りぎみに外方に開き、平坦に整える。端部は小さく摘み出す。胴部は長胴形。	タテハケ目 タテハケ目	細砂粒含	良	明赤褐色	スス付着
37	SC-08	高坏 A	20.1	脚部は細長く、裾部はラッパ状に開き、端部は内側に小さく摘み出す。穿孔あり。	タテ研磨 ヘラケズリ、しぼり痕	小砂粒含	良	橙色	
38	SC-08	高坏 A	19.4	脚部は細長く、裾部はラッパ状に開き、端部は内側に小さく摘み出す。穿孔あり。	タテハケ目後、研磨 ヘラケズリ、ハケ目	細砂粒多含	良	橙色	
39	SC-09	小型壺 AIII	8.7	二重口縁。口縁部は一旦、外方に開き屈曲して垂直に立ち上がり、端部は緩く外反。胴部は扁球形。	ヨコナデ、ヘラケズリ ヨコナデ、ヘラケズリ	細砂粒含	良	赤橙色	炭化物付着
40	SC-09	壺 BII	13.3	口縁部は直線的に外反する。 胴部は球形。	ナデ ナデ	細砂粒含	良	橙色	
41	SC-09	甕 AIV	15.6	口縁端部は、水平に面を整え内側に小さく摘み出す。	ヨコナデ ヨコナデ	砂粒金雲母含	良	橙色	
42	SC-09	甕 AIV	17.6 26.6	「く」字状の口縁部は、内弯ぎみに外方に開く。 胴部は卵形。	ヨコナデ、ハケ目 ヨコハケ後ナデヘラケズリ	小砂粒含	良	橙色	スス付着
43	SC-09	高坏 C	22.8	坏部下半の屈曲は粘土を摘み出して凸帯状に作る。 口縁部は反りぎみに外方に開く。	ナデ、タテハケ ナデ	細砂粒含	良	黄橙色	
44	SC-09	高坏 C	20.1 13.6 13.4	坏部は下半が屈曲して緩い稜をなし口縁部は、大きく外反する。 胴部はストレートにのび、裾部は大きく跳ね上がりぎみに外反する。	タテハケ目 ハケ目、ヘラケズリ	小砂粒含	良	橙色	
45	SC-09	鉢 (台付)	12.4	裾部はラッパ状に開く。	ハケ目 ヨコハケ目	石英 金雲母含	良	黄橙色	
46	SC-09	鉢 (台付) G	14.5 7.9 6.9	体部は内弯して立ち上がる。脚部は短く、裾部は緩く屈曲して外方に開く。	ナデ ナデ	細砂粒含	良	赤褐色	黒斑
47	SC-09	器台	10.3	ストレートにのびる。脚下半は膨らみ、裾端部は、小さく摘み出す。	ナデ ヘラケスリ、ナデ	小砂粒含	良	橙色	
48	SC-10	小型壺		「く」字状の口縁部は、内弯ぎみに立ち上がり、端部は直口する。 胴部は球形。	ヨコナデ ナデ	微砂粒金雲母含	良	橙色	スス付着
49	SC-10	壺 F	10.4	口縁部は短く「く」字状に開く。 胴部は玉葱状。	タテハケ目後ナデ 指頭押圧後ナデ	砂粒、金雲母含	良	橙色	
50	SC-10	壺 AII	16.4	二重口縁。口縁部は、一旦屈曲して凸帯状の段を作り直線的に小さく外方に開く。端部は水平に面を整え外方に摘み出す。	ヨコナデ ヨコナデ	砂粒含	良	橙色	
51	SC-10	壺 AII	19.9	二重口縁。外反する口縁部は一旦屈曲して凸帯状に段を作り、直線的に外方に開く。端部は水平に面を整え外方に小さく摘み出す。胴部は球形。	ハケ目 ナデ、ヘラケズリ	砂粒含	良	橙色	スス付着

Tab.26　土器観察表　(3)

No.	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
52	SC-10	壺 DI	9.4	口縁部は直口して立ち上がり、緩く屈曲して小さく外方に開く。胴部は肩のはる球形。	ヨコナデ ナデ、ヘラケズリ	石英含	良	黄橙色	
53	SC-10	壺 DII	13.8	口縁部は直口に立ち上がり、端部は小さく外方に摘み出す。胴部は長胴形。	ヘラ研磨 ヘラナデ、ヘラケズリ	細砂粒含	良	橙色	外面黒斑
54	SC-10	甕 AI	27.8	口縁部は「く」字状に外反し、端部は平坦。	ヨコナデ ヨコナデ	砂粒含	良	灰白色	
55	SC-10	甕		胴部は長胴形。	ハケ目 ハケ目	小砂粒含	良	橙色	
56	SC-10	高坏	22.0	口縁端部は外方に摘み出して平坦に整え掻目状の横凹線を巡らす。	ヨコナデ ヨコナデ	砂粒含	良	明赤褐色	
57	SC-10	高坏 C		脚部はストレートにのびる。	ナデ ヘラケズリ	小砂粒含	良	黄橙色	
58	SC-10	器台 A	9.8	器壁は厚く裾部はラッパ状に開く。	指頭押圧後ナデ 指頭押圧後ナデ	砂粒金雲母含	良	橙色	
59	SC-10	鉢 G	16.6 12.7	体部は内弯して立ち上がり、口縁部は直口ぎみ。底部は平底	ナデ ナデ	石英含	良	黒褐色	黒斑
60	SC-10	鉢 G	16.8 6.9	体部は緩く膨らんで外方に開く。底部は凸レンズ状。	ヘラケズリ ヘラケズリ、ナデ	砂粒含	良	橙色	
61	SC-10	鉢 G	14.3 6.5	体部は内弯して立ち上がり、直口ぎみの、口縁部は端部を外方に小さく摘み出す。底部は丸底ぎみ。	ハケ目 ナデ	小砂粒含	良	赤色	スス付着
62	SC-10	鉢 C	27.8 7.3	体部は扁球形で口縁部は屈曲して大きく外方に開く。底部は丸底。	タテハケ目 ナデ	砂粒含	やや良	明赤褐色	
63	SC-10	鉢 B	23.0	口縁部は扁球形の体部から緩く屈曲して小さく外方に開く。	ハケ目後ナデ 	小砂粒含	良	橙色	
64	SC-10	鉢 G	24.3 5.0 9.3	体部は小さく膨らんで外方にストレートに開き、口縁部は平坦に整える。	ハケ目 	白色小砂粒含	良	赤色	
65	SC-10	鉢 B	22.1 4.6	扁球形の体部は直口して立ち上がり口縁部は反りぎみに外方に開く。底部は平底状の丸底。	ハケ目、ナデ 指頭押圧後ナデ	砂粒含	良	赤色	
66	SC-11	長頸壺 BI	8.8	頸部は、ラッパ状に長くのび口縁端部は小さく外方に開く。	ヨコナデ、研磨 ヘラケズリ、ヘラナデ	白色小砂粒含	良	橙色	
67	SC-11	壺 AI		二重口縁。口縁部は外方に開き、一旦強く屈曲して、鋭く内傾する。	ハケ目 ハケ目	砂粒含	良	橙色	
68	SC-11	壺 AI		胴部は、球形で最大径部に三角凸帯を1条巡らす。	ヨコナデ、ハケ目 ヨコナデ、ナデ	砂粒含	良	黄橙色	
69	SC-11	壺 AI		扁球形の胴部は肩部で、小さく屈曲して頸部は内傾にのびる。	タテハケ、ナデ 	砂粒含	良	黄橙色	
70	SC-11	甕 AI	20.0	口縁部は「く」字状に短く開く。胴部は長胴形。	ハケ目 ヨコナデ、ハケ目	砂粒含	良	黄橙色	

Tab.27　土器観察表　(4)

No.	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
71	SC-11	甕 AI		胴部は長胴形。	ハケ目 ハケ目、ナデ	砂粒含	良	橙色	外表面黒色化
72	SC-11	甕 AI	16.9	口縁部は、短く「く」字状に開く。	ヨコナデ ヨコナデ	小白砂粒含	良	赤色	
73	SC-11	甕	7.4	底部は凸レンズ状の平底。	ハケ目 ハケ目	小砂粒含	良	明赤褐色	
74	SC-11	高坏 C		脚部は、ストレートにのび、裾部は強く屈曲し、水平に開く。	ナデ ヘラケズリ、ナデ	小砂粒含	良	灰黄褐色	
75	SC-11	高坏 A	20.0	朝顔状に大きく外方に開く。	ハケ目 ハケ目	小砂粒含	良	橙色	
76	SC-12	壺 BI	8.1	頸部はラッパ状にのびる。	タテ研磨 ヨコハケ、ナデ	小砂粒含	良	明赤褐色	
77	SC-12	小型壺 BIII	10.6	口縁部は「く」字状に開き、端部は小さく直口する。胴部は球形。	ナデ、ハケ目 ナデ、ヘラケズリ	微砂粒含	良	橙色	
78	SC-12	小型壺 BIII	10.5	「く」字状の口縁部は、反りぎみに外方に開く。	ヨコナデ、ハケ目 ヨコハケ、ナデ、ヘラケズリ	砂粒含	良	橙色	
79	SC-12	鉢 D	10.2 7.2	「く」字状の口縁部は、反りぎみに短く外方に開く。胴部は半球形。	ナデ、ハケ目 ナデ、ヘラケズリ	砂粒含	良	橙色	
80	SC-12	甕 AIII	12.1 15.2	「く」字状の口縁部は、直線的に外方に開く。胴部は球形。	ハケ目 ヨコナデ、ヘラケズリ	砂粒含	良	橙色	
81	SC-12	甕 AI	19.7	「く」字状の口縁部は、大きく外方に開き平坦に整えた端部は上方に小さく摘み上げる。胴部は長胴形。	ハケ目 ヨコナデ、ナデ	砂粒含	やや良	浅黄橙色	
82	SC-12	甕 AI	25.4	「く」字状の口縁部は、緩く屈曲して外方に開き、端部は平坦に整える。	タテハケ ヨコハケ	砂粒含	良	黄橙色	
83	SC-12	甕 AI	30.0	「く」字状の口縁部は、緩く屈曲して外方に開き、端部は平坦に整える。	タテハケ ヨコハケ	砂粒、金雲母含	良	黄橙色	
84	SC-12	甕 AI	19.3	「く」字状の口縁部は、大きく外方に開き端部は平坦に整える。胴部は長胴形。	ヨコナデ、ハケ目 ヨコナデ	小砂粒含	良	黄橙色	
85	SC-12	甕 AI		口縁部は「く」字状に開く。胴部は卵形。	ヨコナデ、タテハケ 	砂粒含	不良	赤褐色	スス付着
86	SC-12	高坏 A	25.0	坏部は膨らみ、中位で、弱く屈曲して直口ぎみに立ち上がる。口縁部は小さく外反する。	ヘラ研磨 ナデ	砂粒含	良	橙色	
87	SC-12	高坏 A	26.0	坏部は反りぎみに開き、口縁部は外方に、摘み出して、水平面につくる。	ナデ ナデ	砂粒含	良	明赤褐色	
88	SC-12	器台 B		坏部は内弯ぎみに立ち上がる。	ナデ ナデ	微砂粒含	良	橙色	
89	SC-12	高坏 A		脚部はストレートにのびる。	研磨 ナデ	微砂粒含	良	橙色	

Tab.28　土器観察表　(5)

No.	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
90	SC-12	高坏 A	19.3	脚部は朝顔状に、ストレートに大きく開き、端部は内側に小さく摘み出す。	ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ	砂粒含	良	橙色	
91	SC-12	土匙		手捏の棒状で、基部を欠く。	指頭押圧後ナデ	白色砂粒含	良	橙色	
92	SC-13	壺 A I	20.4	二重口縁。大きく開いた口縁部は一旦強く屈曲して、膨らみぎみに内傾する。	ハケ目後ナデ	砂粒含	不良	橙色	
93	SC-13	壺 A I		胴部は、肩のはった球形で、頸部は、三角凸帯が1条巡る。	ヨコナデ、ハケ目 ヨコナデ、ハケ目、ナデ	小砂粒含	良	淡黄色	
94	SC-13	甕 A I	19.4	「く」字状の口縁部は、反りぎみに大きく開く。	ハケ目後ナデ ヨコナデ	小砂粒含	良	橙色	
95	SC-13	甕 A I	4.5	胴部は卵形で、肩部はやや凸レンズ状。平底。	タテハケ ナデ	砂粒含	良	橙色	
96	SC-13	甕 A I	23.6	「く」字状の口縁部は、大きく外方に開き、端部は小さく摘み出す。胴部は長胴形。	ハケ目 ハケ目、ヘラケズリ	砂粒含	良	黄橙色	スス付着
97	SC-13	高坏 A	28.5	膨らんだ坏部は、中位で屈曲し一旦短く直口して外方に開く。	ハケ目、ナデ ヨコハケ後ナデ、研磨	砂粒含	良	橙色	
98	SC-14	甕 A I	24.3	「く」字状の口縁部は、短く外方に開き、平坦な端部は小さく摘み出す。胴部は長胴形。	ヨコナデ、タテハケ ヨコハケ、下半風化	砂粒含	良	橙色	
99	SC-15	長頸壺 B I	11.6	頸部は、長くラッパ状に開く。	タテ研磨 ナデ	砂粒含	良	赤褐色	
100	SC-15	小型壺 BIV	10.1	「く」字状の口縁部は、長く外方に開き端部は薄い。 胴部は玉葱状。	ナデ ナデ	砂粒含	良	灰黄色	
101	SC-15	壺 E I	21.7	口縁部は大きくラッパ状に開き、端部は平坦に整える。	タテハケ ヨコハケ	小砂粒含	良	褐色	
102	SC-15	甕 A I	18.9	「く」字状の口縁部は短く開く。	ヨコナデ、タテハケ ヨコハケ、ナデ	砂粒含	良	赤褐色	
103	SC-15	鉢 C	33.3 6.4 9.0	体部は扁平な半球形で、口縁部は鋭く屈曲して大きく反りぎみに開く。底部は凸レンズ状の平底。	ナデ、ハケ目 ハケ目後ナデ	砂粒含	良	橙色	
104	SC-15	高坏 A	30.2 18.2 24.4	坏部は浅く膨らみ、中位で屈曲し口縁部は、反りぎみに開く。脚部は細長くラッパ状に開く。穿孔	ハケ目、研磨 ヨコハケ、研磨	微砂粒含	良	橙色	外面黒斑
105	SC-15	高坏 A	10.6	脚部は細長く小さくラッパ状に開く。穿孔6ヶ所。	タテ研磨 ヘラケズリ	小砂粒含	良	明赤褐色	
106	SC-15	高坏 A	20.0	脚部は大きく朝顔状に開き、端部は、内側に小さく摘み出す。	ナデ タテハケ目	砂粒含	やや良	明赤褐色	
107	SC-15	器台 A	11.6 11.5 16.3	受け部は大きく開く。 脚部はストレートに、ラッパ状に開く。	タテハケ、ナデ ヨコハケ、ヘラケズリ	砂粒含	良	橙色	
108	SC-15	器台 A	8.7 12.2 16.8	受け部は大きく開く。 脚部はストレートにラッパ状に開く。	ヨコナデ、ハケ目 ハケ目、ヘラケズリ	砂粒含	良	明赤褐色	

Tab.29　土器観察表　(6)

No.	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
109	SC-16	小型壺 BIII	9.1	「く」字状の口縁部は、直線的に開く。胴部は球形。	ヨコナデ、ハケ目 ハケ目、ヘラケズリ	砂粒含	良	橙色	
110	SC-16	甕 AII	12.8	口縁部は反りぎみに直口し、端部は細く摘み出すように小さく開く。胴部は球形。	ヨコナデ、ハケ目 ハケ目、ヨコナデ、ヘラケズリ	砂粒含	やや良	黄灰色	
111	SC-16	甕 AII	12.2	「く」字状の口縁部は短く直線的に開く。	ハケ目、ヨコナデ ハケ目、ナデ	微砂粒含	良	浅黄橙色	
112	SC-16	甕 AIV	15.0	「く」字状の口縁部は、内弯ぎみに開き、平坦に整えた端部は内傾する。	ヨコナデ ナデ、ヘラケズリ	砂粒含	良	橙色	
113	SC-16	甕 AIV	15.8	「く」字状の口縁部は、直線的に開き、端部は僅かに内傾し、内に小さく摘み出す。胴部は球形。	ヨコナデ、ハケ目 ヨコナデ、ヘラケズリ	石英含	良	橙色	
114	SC-16	甕		球形の胴部に「く」字状の口縁部がつく。	ハケ目、ナデ ナデ、ヘラケズリ	砂粒含	良	橙色	
115	SC-16	高坏 A	23.3	坏部は、僅かに膨らんで大きく外方に開く。	ヨコナデ ハケ目後ヨコナデ	砂粒含	良	橙色	
116	SC-16	高坏 C	20.6	坏部は下半に段をつくり、口縁部は反りぎみに大きく外方に開く。	ヨコナデ ヨコナデ	小砂粒含	良	浅黄橙色	
117	SC-16	高坏 C			ナデ ハケ目	微砂粒含	良	黄橙色	
118	SC-16	高坏 C		脚部は、細くストレートに開く。	ヨコハケ目 ヘラケズリ	砂粒含	良	橙色	
119	SC-16	高坏 C	16.0	脚裾部は朝顔状に大きく開き、端部は、内に小さく摘み出す。	タテハケ、ナデ ヨコハケ目	微砂粒含	良	橙色	
120	SC-16	陶質土器甕		胴部の小片。胴部は肩のはった球形で、肩部に横凹線が巡る。	タタキ ナデ	白色微砂粒含	やや良	灰黄色	
121	SC-17	小型壺 BI	9.2	「く」字状の口縁部は、直線的に長くのび、小さく開く。	ハケ後ヨコナデ ヨコナデ、ヘラケズリ	砂粒含	良	橙色	スス付着
122	SC-17	小型壺		「く」字状の口縁部は厚く直線的に開く。	研磨 研磨	砂粒含	良	赤色	
123	SC-17	小型壺	13.2	「く」字状の口縁部は、反りぎみに大きく開く。	ヨコナデ 	白色粗砂粒含	良	黄橙色	
124	SC-17	小型壺 BIII	8.9	「く」字状の口縁部は緩く屈曲して短く開く。胴部は球形。	ヨコナデ、ハケ目 ヨコナデ、ヘラケズリ	砂粒含	良	明赤褐色	
125	SC-17	小型壺 BIII	8.6	「く」字状の口縁部は、短く反りぎみに外方に開く。胴部は球形。	ヨコナデ、ハケ目 ヨコナデ、ヘラケズリ	砂粒含（赤褐色粘土粒含）	良	黄橙色	
126	SC-17	小型壺 BIII	8.2 8.3	口縁部は短く「く」字状に開く。胴部は扁球形。	ヨコナデ、ハケ目 ヨコナデ、下半指ナデ	砂粒含	良	橙色	
127	SC-17	甕 AIV	13.4	「く」字状の口縁部は、緩く屈曲して反りぎみに開き、平坦に整えた端部は水平面をつくる。	ヨコナデ ヨコナデ	砂粒含	良	橙色	スス付着

Tab.30　土器観察表　(7)

No.	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
128	SC-17	甕 AIV	13.6	「く」字状の口縁部は、僅かに内弯して開き、水平に平坦面をつくる。端部は、内外に摘み出す。胴部は、肩のはった球形。	ヨコナデ、ハケ目 ヨコナデ、ヘラケズリ	砂粒含	良	橙色	
129	SC-17	高坏	18.6	坏部は下半平坦で、緩く屈曲して、直線的に外方に開く。	ナデ ナデ	砂粒含	良	黄橙色	
130	SC-17	高坏 C		脚部は短くラッパ状に開き、裾部は屈曲して大きく外方に開く。	タテハケ目 ヘラケズリ、ヨコナデ	微砂粒含	良	橙色	
131	SC-17	高坏 C	11.0	脚部は短く、朝顔状に開き、裾部は屈曲して、内面に稜を作る。	ナデ ヘラケズリ、ヨコナデ	砂粒含	良	黄橙色	
132	SC-18	甕 AII	15.3	「く」字状の口縁部は、小さく外方に開く。 胴部は球形。	ヨコナデ、ハケ目 ヨコハケ後ナデ	小砂粒含	良	黄橙色	
133	SC-19	小型壺 BIII	7.8	「く」字状の口縁部は短く開く。胴部は球形。	ナデ ヨコナデ、ヘラケズリ	小砂粒含	良	橙色	
134	SC-19	小型壺 B I	8.7 11.7	口縁は長く反りぎみに小さく開く。胴部は玉葱状。	ナデ、ハケ目 ナデ、指頭押圧痕	砂粒含 (角閃石含)	良	橙色	
135	SC-19	甕 AIV	13.6	「く」字状の口縁部は、反りぎみに外方に開き、端部を内に小さく摘み出す。胴部は球形。	ヨコナデ、タテハケ ヨコナデ、ヘラケズリ	砂粒含	良	黄橙色	
136	SC-19	甕		球形の胴部に、反りぎみの「く」字状の口縁がつく。	ヨコナデ、ハケ目 ヨコナデ	砂粒含	良	橙色	スス付着
137	SC-19	甕 A I	24.8	口縁部は折り曲げるように短く開く。 胴部は、長胴形。	ハケ目 	砂粒含	良	橙色	スス付着
138	SC-19	高坏 C	12.1	脚裾部は、強く屈曲して大きく外方に開く。	タテハケ後ナデ ヘラケズリ、ヨコナデ	小砂粒含	良	明赤褐色	
139	SC-20	壺 A I	15.2	二重口縁。ラッパ状に開いた口縁部は、凸帯様の段を作って屈曲し、直口して立ち上がる。端部は水平面を作り、内に小さく摘み出す。	ヨコナデ ヨコナデ	微砂粒含	良	橙色	
140	SC-20	壺 AIV		二重口縁。 直口する頸部は、短く開き、一旦屈曲して反りぎみに外方に開く。	ハケ目、ナデ ハケ目	砂粒含	良	橙色	
141	SC-20	甕		胴部は薄く球形。	ハケ、ヨコナデ ヨコナデ、ヘラケズリ	砂粒含	良	赤褐色	
142	SC-20	手捏 B	4.4 3.4 3.9	平坦な小さな底部に厚手の直口する体部がつく。	押圧ナデ 押圧ナデ	微砂粒含	良	赤褐色	
143	SC-20	高坏 C	17.8	坏部は下半に下向きの小さな凸帯様の段がつき、口縁部は、反りぎみに大きく外方に開く。	ヨコナデ ヨコナデ	小砂粒含	良	明黄褐色	
144	SC-20	高坏 C	20.1	体部は、やや反りぎみに大きく外方に開く。	ヨコナデ ヨコナデ	砂粒含	良	褐色	
145	SC-20	高坏 C	20.0	坏部は、ほぼ直線的にのび口縁端部は小さく開く。	ナデ ハケ目後ナデ	微砂粒含	良	橙色	
146	SC-20	高坏 C		脚部は短くラッパ状にのび、裾部は屈曲して大きく開く。	ハケ目 ヘラケズリ、ハケ目後ナデ	小砂粒含	良	赤褐色	

Tab.31　土器観察表 (8)

No.	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
147	SC-20	高坏 C		脚部は細くストレートにのび裾部は緩く屈曲して大きく外方に開く。	タテハケ、ヨコナデ ヘラケズリ、ヨコナデ	砂粒含	良	赤褐色	
148	SC-20	高坏 C	13.2	脚部は短く筒状で裾部はラッパ状に開く。	タテハケ目 ヘラケズリ、ハケ目後ナデ	砂粒含	良	黄褐色	
149	SC-21	甕 AI	14.1	「く」字状の口縁部は短く外反する。胴部は卵形。	ハケ目 ハケ目	砂粒含	良	赤褐色	スス付着
150	SC-21	甕 AI	6.2	卵形の胴部に凸レンズの平底がつく。	板状工具による擦過 板状工具による擦過	砂粒含	良	褐色	スス付着
151	SC-21	甕 AI	18.0 6.1 23.4	「く」字状の口縁部は、短く直線的に開き、平坦に整えた端部は、外に小さく摘み出す。胴部は卵形。	ハケ目、ナデ ハケ目、ナデ	砂粒含	良	橙色	スス付着
152	SC-21	甕	6.0	卵形の胴部に凸レンズ状の底部がつく。	タテハケ目 タテハケ、ナデ	細砂粒含	良	褐色	
153	SC-21	高坏 A	24.2	坏部は、膨らみぎみに、立ち上がり、上半で、一旦屈曲して段を作り口縁部は反りぎに開く。	タテ研磨 タテ研磨	砂粒含	良	黄褐色	
154	SC-21	高坏 A	26.7	坏部は、膨らみ中位に弱い稜を作って反りぎみに大きく開く。	ヨコナデ ハケ目ナデ	砂粒含	良	明褐色	
155	SC-21	高坏 A	19.0	脚部は、細長く裾部はラッパ状に大きく開き、端部を外方に小さく摘み出す。	研磨 ヘラケズリ、ナデ	砂粒含	良	赤褐色	
156	SC-22	壺 AI	19.5	二重口縁。大きくラッパ状に開いた口縁部は強く屈曲して内傾する。	ヨコハケ目 ヨコハケ目	粗砂粒含	良	橙色	
157	SC-22	小型壺 BIII	8.2 10.0	「く」字状の口縁部は薄く直線的に開く。胴部は扁球形。	ハケ目、ナデ ヘラケズリ	砂粒含	やや良	橙色	
158	SC-22	壺 F	11.0 11.9	口縁部は、直口ぎみに立ち上がり端部は小さく外反する。胴部は玉葱状。	ヨコナデ、研磨 研磨、ハケ目	砂粒含	良	明赤褐色	
159	SC-22	甕 AI	12.8	「く」字状の口縁部は短く外反する。胴部は卵形。	調整不明 工具によるナデ	石英、金雲母多含	良	褐色	
160	SC-22	甕 AI	18.2	「く」字状の口縁部は、反りぎみに開き端部は平坦に整える。	 ハケ面、ナデ	砂粒含	良	明黄褐色	
161	SC-22	甕	2.2	卵形の胴部に小さな平底がつく。	ハケ目状擦痕 指頭押圧ナデ	砂粒含	良	黄橙色	
162	SC-22	甕 AVI	14.5 5.7 14.6	「く」字状の口縁部は、内弯ぎみに開く。胴部は厚手の砲弾形。底部は厚手の平底。	タテハケ目 ハケ目、ナデ	すな粒含	良	橙色	
163	SC-22	高坏	20.8	裾部はラッパ状に開き、端部は小さく内傾する。	タテハケ、ナデ ヨコハケ目	砂粒含	良	黄橙色	
164	SC-22	手捏 D	6.0 3.3	手捏状。体部は、半球形で口縁部は小さく直口する。	ハケ目 ナデ	砂粒含	良	橙色	
165	SC-22	壺 E	8.3	体部は卵形で口縁部は、直口ぎみに立ち上がり端部は、小さく摘み出す。	ハケ目、ナデ ナデ	砂粒含	良	橙色	

Tab.32　土器観察表　(9)

No.	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
166	SC-23	壺 AI		口縁部はラッパ状に大きく開き、平坦に整えた端部に山形の刻み目を施す。	ハケ目 ハケ目	砂粒含	良	黄橙色	
167	SC-23	甕 AII	14.1	「く」字状の口縁部は反りぎみに開く。胴部は球形。	ナデ、タテハケ目 ナデ、ヘラケズリ	砂粒多含	良	黄橙色	
168	SC-23	甕	10.3 4.7 13.9	「く」字状の口縁部は、大きく開き、肥厚した端部は、平坦に整え外に小さく摘み出す。胴部は短く卵形で凸レンズ状の平底がつく。	タテ研磨、ナデ ナデ	砂粒含	良	橙色	スス付着
169	SC-23	甕		口縁部は、反りぎみに開き、平坦に整えた端部は、小さく外に摘み出す。	ヨコナデ	砂粒含	良	黄橙色	
170	SC-23	甕	8.0	底部は平底で胴部は直線的に立ち上がる。	ナデ	砂粒含	やや良	黄橙色	
171	SC-23	鉢 B	14.0 5.5	半球形の体部は上半で屈曲し口縁部は短く外方に開く。	ナデ	砂粒含	良	橙色	
172	SC-23	高坏 C		脚部は細くストレートにのびる。	ナデ ヘラケズリ	砂粒含	良	橙色	
173	SC-24	壺	10.7	二重口縁。ラッパ状に開いた口縁部は強く屈曲して、反りぎみに内傾する。	ハケ目 ハケ目、ヨコナデ	砂粒含	良	黄橙色	
174	SC-24	壺 BI	10.5 1.9 11.0	「く」字状の口縁部は、反りぎみに開き、やや長め。胴部は、玉葱状で小さな平底がつく。	ハケ目、ナデ ナデ、ハケ目	砂粒含	良	橙色	
175	SC-24	甕 D	10.3	厚い「く」字状の口縁部は、外面に粘土紐を貼りつけて、凸帯様の段を作り一見、二重口縁状にみせている。	ヘラナデ ナデ、ヘラケズリ	砂粒含	良	暗赤褐色	スス付着
176	SC-24	甕 D	10.1 3.0 10.5	緩く「く」字状に開く口縁部は、端部を直口ぎみに摘み上げて、二重口縁状に作る。胴部は卵形で小さな平底がつく。	ヘラケズリ ヨコナデ、ヘラケズリ	小砂粒含	良	赤褐色	スス付着
177	SC-24	甕 C	15.5	二重口縁。短く「く」字状に開く口縁部は一旦屈曲して直口し端部は反りぎみに小さく開く。	ヨコナデ ヨコナデ	小砂粒含	良	明褐灰色	スス付着
178	SC-24	甕 C	20.2	二重口縁。口縁部は一旦屈曲して小さな凸帯様の段を巡らし、反りぎみに直口する。	ヨコナデ ヨコナデ	砂粒含	良	浅黄色	スス付着
179	SC-24	鉢 B	26.0	口縁部は緩く屈曲して、反りぎみに短く開く。	ハケ目 ナデ	砂粒含	良	橙色	
180	SC-25	甕 AIV	11.2	「く」字状の口縁部は、直線的に開き、内傾する端部は内に小さく摘み出す。	ヨコナデ ナデ	砂粒含	良	橙色	
181	SC-25	壺	3.5	長頸壺の胴部で玉葱状。	ハケ目 ナデ	砂粒含	良	橙色	スス付着
182	SC-25	壺	5.0	底部は平底で胴部は膨らんで立ち上がる。	ハケ目、ナデ	砂粒含	良	橙色	
183	SC-25	甕 AI	10.8	「く」字状の口縁部は強く反りぎみに短く開く。胴部は卵形。	ナデ	砂粒含	良	明赤褐色	
184	SC-25	甕 AI	21.9	「く」字状の口縁部は反りぎみに開く。	ナナメハケ後、ヨコナデ ハケ目後、ナデ	小砂粒含	良	橙色	

Tab.33　土器観察表 (10)

No.	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
185	SC-25	甕 AI		胴部は卵形。	タテハケ目 ヨコハケ目	砂粒含	良	黄橙色	
186	SC-26	甕 D	12.6	短く外反する「く」字状の口縁部は、端部を小さく上方に摘み上げて稜をつくり二重口縁状にする。	ナデ、ヘラケズリ ヘラケズリ	赤褐色粒含	良	橙色	
187	SC-26	甕 AII	15.8	「く」字状の口縁部は、反りぎみに開く。胴部は卵形。	タテハケ、ナデ ハケ目	白色砂粒含	良	橙色	
188	SC-26	甕	7.8	底部は平底。	ハケ目 	砂粒	良	明赤褐色	
189	SC-26	甕	7.5	平底の底部に卵形の胴部がつく。	タテハケ目 ナデ	粗砂粒含	良	褐色	
190	SC-26	壺		胴部は玉葱状。	研磨 ヘラケズリ	精良	良	黄橙色	スス付着
191	SC-27	甕	5.0	凸レンズ状の底部に、長胴形の胴部がつく。	タテハケ ナデ	砂粒含	良	橙色	スス付着
192	SC-27	甕 AI	13.2 4.0 16.1	口縁部は短く「く」字状に外反し、端部を平坦に整える。胴部は卵形で、丸底ぎみの小さな底部がつく。	タテハケ ハケ目、ナデ	小砂粒含	良	褐色	スス付着
193	SC-27	甕 AI	16.5	口縁部は、短く「く」字状に外反し平坦な端部は外方に小さく摘み出す。胴部は長胴形。	タテハケ ハケ目、ヨコハケ目	砂粒含	良	橙色	スス付着
194	SC-27	鉢 F	9.6	半球形の体部は上半で緩く屈曲し口縁部は小さく内傾して立ち上がる。	ヨコハケ目後ナデ ナデ	砂粒含	良	橙色	
195	SC-27	手捏 C	4.8 1.9 6.2	口縁部は屈曲して短く直口する。体部は、やや肩のはった球形で小さな平底がつく。	タテナデ(板) 指頭押圧後ナデ	小砂粒含	良	橙色	
196	SC-28	壺	12.5	口縁部は内弯ぎみに大きく開く。端部は直口ぎみに小さく摘み上げる。	ヨコナデ ヨコナデ	小砂粒含	良	赤褐色	
197	SC-28	壺		口縁部は「く」字状に開く。胴部は、肩のはった球形。	ヨコハケ ナデ	砂粒含	良	橙色	
198	SC-28	甕 D	7.6 2.7 6.0	「く」字状の口縁部は短く開き一旦、屈曲して直口して立ち上がり二重口縁状に見せかけている。胴部は、卵形で厚手の小さな平底がつく。	ナデ ナデ	微砂粒含	良	赤褐色	
199	SC-28	甕	7.4	口縁部は短く「く」字状に開く。胴部は、いびつな卵形。	ナデ ナデ、ヘラケズリ	砂粒含	良	黄橙色	スス付着
200	SC-28	甕	10.0	口縁部は短く「く」字状に外反する。胴部は扁球形。	タテハケ後ナデ ナデ、ヘラケズリ、ナデ	小砂粒少含	良	褐色	スス付着
201	SC-28	甕	12.4	「く」字状の口縁部は、反りぎみに開き端部は肥厚する。胴部は球形。	ナデ ナデ、ヘラケズリ	砂粒含	やや良	橙色	
202	SC-28	甕 AII	17.0	「く」字状に外反する口縁部は端部を小さく摘み出す。	ナナメハケ後ヨコナデ ヨコナデ	砂粒含	良	橙色	
203	SC-28	甕 C	17.3	二重口縁。短く「く」字状に開いた口縁部は一旦屈曲して直口した後に小さく外方に開く。	ヨコナデ ヨコナデ、ヘラケズリ	砂粒、金雲母含	良	黄橙色	

Tab.34　土器観察表 (11)

No.	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
204	SC-28	甕 C	14.0 1.6 16.4	二重口縁。短く「く」字状に開いた口縁部は一旦屈曲して直口した後に、小さく外方に開く。胴部は、卵形で丸底。	ナデ ヨコナデ、ヘラケズリ	砂粒含 (赤褐色粘土小粒含)	良	橙色	
205	SC-28	甕 AII	15.2	「く」字状の口縁部は直口ぎみに立ち上がった後に小さく外反する。胴部は球形。	ハケ目 ヨコナデ、ヘラケズリ	粗砂粒含	良	明赤褐色	
206	SC-28	鉢 G	13.5 3.6 5.0	体部は、内弯ぎみに膨らみ口縁部は直口ぎみに立ち上がる。	ヨコナデ、ハケ目 ハケ目	小砂粒含	良	褐色	
207	SC-28	高坏		坏部は、一旦屈曲して大きく、外方に開く。	ナデ(研磨風) ナデ	小砂粒含	良	橙色	
208	SC-28	高坏		脚部はラッパ状に開く。		砂粒含	不良	灰白色	
209	SC-28	手捏 E	6.2 2.8 3.2	坏部は、直線的に大きく開き、短く低い脚がつく。	ナデ ナデ	小砂粒含	良	橙色	
210	SC-28	高坏	9.5	坏部は、内弯ぎみに膨らんで立ち上がり口縁部は小さく直口した後に小さく外反する。	ナデ、ヘラケズリ ヘラケズリ、ナデ	小砂粒含	良	橙色	
211	SC-29	甕 C	14.1	二重口縁。短く「く」字状に開いた口縁部は屈曲して一旦直口した後に小さく外反する。	ヨコナデ	砂粒含	良	橙色	
212	SC-29	甕	4.2	小型甕の底部。厚手の小さな平底に卵形の胴がつく。	ナデ ナデ	小砂粒含 (赤褐色粘土粒多含)	やや良	橙色	
213	SC-29	甕 FIV	11.0	二重口縁。短く「く」字状に外反した口縁部は一旦屈曲して直口し端部は摘み出すように小さく開く。	ナデ ナデ、ヘラケズリ	砂粒含	良	赤色	
214	SC-29	甕	27.3	口縁部は、屈曲して「く」字状に開き口縁部直下に三角凸帯が1条巡る。	タテハケ目 ナデ	小砂粒含	良	橙色	
215	SC-30	小型壺 BIII	7.7	「く」字状の口縁部は短く直線的に小さく開く。胴部は扁球形。	ナデ 指頭押圧後ヨコナデ	細砂粒含	良	橙色	
216	SC-30	小型壺 BIV	8.2 9.5	口縁部は、「く」字状で端部は小さく摘み出す。胴部は、球形で下半は厚く扁平になる。	ナナメハケ、ナデ ハケ目後ナデ、指頭押圧	石英粗 砂粒含	良	明黄褐色	スス付着
217	SC-30	小型壺 BIII	7.4 9.0	「く」字状の口縁部は短く直線的に開く。胴部は肩のややはった球形で尖底ぎみになる。	ヨコナデ、ハケ目 ヨコナデ、指頭押圧ナデ	石英小 砂多含	良	橙色	
218	SC-30	小型壺 BIII	9.1 2.4 9.4	「く」字状の口縁部は、うすく直線的に開く。胴部は玉葱状の扁平な球形。	ヨコナデ、ハケ目 ヨコナデ、ヘラケズリ	細砂粒 雲母含	良	明赤褐色	
219	SC-30	小型壺 BIV	9.7 9.4	口縁部は、内弯ぎみに「く」字状に開きやや長め。胴部は、玉葱状の扁平な球形。	ナデ、ハケ目 ヨコハケ、ナデ	細砂粒 雲母含	良	橙色	
220	SC-30	小型壺 BIV	9.1 2.6 10.7	口縁部は、「く」字状に短く開く。胴部は、肩のややはった球形。	ナデ、ハケ目 ヨコナデ、ヘラケズリ	細砂雲母含	良	橙色	
221	SC-30	小型壺 BIV	9.6 9.9	「く」字状の口縁部は短く直線的に開く。胴部は、玉葱状で尖底ぎみ。	ナデ 指頭押圧ナデ	細粒多 雲母含	良	橙色	
222	SC-30	小型壺 BIII	10.2 12.8	「く」字状の口縁部は、やや長く直線的に開く。胴部は、やや肩のはった球形。	ヨコナデ、ハケ目 ヨコナデ、押圧後ヘラケズリ	小砂石英、 雲母含	良	黄橙色	

Tab.35　土器観察表 (12)

No.	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
223	SC-30	小型壺 BIII	8.5 9.7	口縁部は直線的に小さく開く。胴部は、やや肩のはった球形で尖底ぎみになる。	ナデ 指頭押圧後ナデ	細砂粒 雲母含	良	橙色	
224	SC-30	小型壺 BIII	7.9 8.7	「く」字状の口縁部は、長く直線的に開く。胴部は扁平な玉葱状で、やや尖底ぎみ。	ナデ 指頭押圧後ナデ	粗砂多 雲母含	良	橙色	
225	SC-30	小型壺 BIII	6.7 7.3	手捏様で厚手。「く」字状の口縁部は、直線的に開く。胴部は扁球形。	ナデ 指頭押圧後ナデ	細砂雲母含（赤色粒含）	良	褐色	
226	SC-30	小型壺 BIII	8.2 9.3	「く」字状の口縁部は、大きく外反する。胴部は、肩のはった扁球形で尖底ぎみ。	ハケ目後ナデ ハケ目、ヨコナデ指頭押圧後ナデ	石英細砂、雲母含	良	明黄褐色	
227	SC-30	小型壺 BIII	9.9 10.3	「く」字状の口縁部は長めで大きく直線的に開く。胴部は扁球形。	ハケ目後ナデ ヨコナデ、指頭押圧後ナデ	白、灰色小粒多含	良	明黄褐色	
228	SC-30	小型壺 BIII	8.9 11.5	「く」字状の口縁部は長く外反し、外面にヘラ記号あり。胴部は扁球形。	ナデ ナデ	粗砂多、雲母含	良	赤橙色	
229	SC-30	小型壺 BIII	10.6 10.8	「く」字状の口縁部は、緩く屈曲して直線的に長くのびる。胴部は肩のはった玉葱状。	ハケ目後ナデ 指頭押圧後ナデ	小砂多、雲母含	良	赤褐色	
230	SC-30	小型壺		扁球形の胴部に「く」字状の口縁部がつく。	ハケ目 ハケ目、ヘラケズリ、ナデ	砂粒多含	良	橙色	
231	SC-30	小型壺 BIV	12.3 15.0	口縁部は、僅かに膨らんで直口ぎみに長く立ち上がる。胴部は、やや肩のはった球形で尖底ぎみ。	ハケ目、ナデ ハケ目後ヨコナデ、ヘラケズリ	小砂粒雲母含（赤褐色粒含）	良	黄橙色	
232	SC-30	小型壺 BIII	8.4 8.3	口縁部は、短い「く」字状で小さく開く。胴部は球形。	指頭押圧後ナデ 指頭押圧後ナデ	細砂粒多 雲母含	良	橙色	スス付着
233	SC-30	小型壺	8.9 8.5	口縁部は、僅かに膨らんで短く直口する。胴部は扁球形で、平底ぎみ。	ハケ目後ナデ 指頭押圧後ナデ	細砂粒多 雲母含	良	橙色	
234	SC-30	小型壺 BIII	10.4 3.0 9.6	口縁部は、厚く「く」字状に長く外方に開く。胴部はやや扁平な球形。頸部は緩く屈曲し内面に弱く稜を作る。	ハケ目 ナデ（工具）	細砂粒多、雲母含	良	橙色	
235	SC-30	小型壺 BV	12.8	頸部は弱く屈曲して大きく外方に開く。胴部は、玉葱状で扁平な球形。	ナデ ヘラケズリ、ナデ	細砂粒多、雲母含	良	赤褐色	
236	SC-30	小型壺 BV	13.2 11.4	口縁部は、うすい「く」字状で端部は上方に小さく摘み上げる。胴部は球形。	ナデ ヘラケズリ	石英金黒 雲母含	良	橙色	
237	SC-30	小型壺 BII	11.7 11.3	「く」字状の口縁部は長くのび、端部は、上方に小さく摘み上げる。胴部は扁球形。	 指頭押圧後ナデ	小砂・石英・雲母含	良	橙色	スス付着
238	SC-30	小型壺 BII	12.4	「く」字状の口縁部は、うすく端部を上方に小さく摘み上げる。胴部は肩のはった球形。	ハケ目 ハケ目後ナデ	砂粒・金 雲母含	良	橙色	
239	SC-30	小型壺 BII	13.1 3.6 15.7	「く」字状の口縁部は直線的で長く外方に開く。胴部は扁球形で小さな平底がつく。	指頭押圧後ナデ 指頭押圧後ナデ	小砂・雲母含	良	橙色	
240	SC-30	小型壺 BII	12.5 18.5	「く」字状の口縁部は、直線的に外方に開き、端部は小さく摘み出す。胴部はやや肩のはった球形。	ハケ目 ヘラケズリ、ハケ目	細砂粒含	良	黄橙色	スス付着
241	SC-30	壺 AII	16.8	二重口縁。外反する口縁部は、一旦屈曲して、直口ぎみに立ち上がり、端部は平坦面を作って外方に摘み出す。擬口縁上面に凹線を巡らし凸帯状に仕上げている。胴部は卵形。	ハケ目 ヘラケズリ	肌色、灰色砂粒含	良	橙色	スス付着

Tab.36　土器観察表 (13)

No.	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
242	SC-30	壺 AV	10.3	口縁部は、反りぎみに外方に開き中位に粘土紐を貼りつけて擬口縁状になす。胴部は肩がはる。	ヨコナデ ナデ	砂粒含	良	黄橙色	
243	SC-30	壺 C	10.8	口縁部は反りぎみに直口し端部は水平に面を整える。胴部は卵形。	ナデ	白色粒多含	良	黄橙色	
244	SC-30	壺 AI	21.3	二重口縁。頸部は外反して擬口縁を作り、口縁部は、内弯ぎみに直口する。	ハケ目 ハケ目	白色小石粒多含	良	橙色	
245	SC-30	甕 C	10.0	二重口縁。外反する口縁部は一旦強く屈曲して、小さく内傾して立ち上がる。胴部は球形。	ハケ目 ヘラケズリ	砂粒含	良	赤色	スス付着
246	SC-30	壺 AIII	11.3 14.7	二重口縁。外反する口縁部は、小さく屈曲して、弱い稜を作り、反りぎみに立ち上がり、端部は外方に摘み出す。胴部は、やや肩のはった球形。	ハケ目 ヘラケズリ	石英砂多、雲母含	良	黄橙色	
247	SC-30	甕 AIII	14.7 15.9	口縁部は「く」字状を呈し反りぎみに外反する。胴部は球形。	ハケ目 ヘラケズリ	粗砂粒、雲母含	良	橙色	炭化物付着
248	SC-30	甕 AIII	13.4 17.3	「く」字状の口縁部は、直線的に長くのび、端部は小さく摘み上げる。胴部は球形。	ハケ目 ヘラケズリ	粗石英含	良	赤色	
249	SC-30	甕 AII	13.2 17.3	「く」字状の口縁部は短く、外方に開き、端部を小さく摘み出す。胴部は卵形。	ハケ目 ハケ目、ヘラケズリ	砂粒含	良	橙色	
250	SC-30	甕 AII	13.0 20.1	「く」字状の口縁部は短く、外方に開く。胴部は肩のはった球形。	ハケ目 ハケ目、指頭押圧後ナデ	砂粒含	良	明黄褐色	
251	SC-30	甕 AIII	12.0 16.9	「く」字状の口縁部は短く、外方に開く。胴部は肩のはった球形。	指頭押圧後ナデ 指頭押圧後ナデ	砂粒含	良	赤褐色	
252	SC-30	甕 AIII	14.0	「く」字状の口縁部は反りぎみに外方に開く。胴部は球形。	ハケ目 ハケ目後ナデ、ヘラケズリ	砂粒含	良	明赤褐色	
253	SC-30	壺 EI	19.5 33.0	「く」字状の口縁部は、直線的に開き、端部は外方に摘み出す。胴部は卵形。	ハケ目 ナデ、ヘラケズリ	白色石粒含	良	橙色	
254	SC-30	甕 AII	15.0 23.4	「く」字状の口縁部は、反りぎみに大きく外方に開き、端部を小さく摘み出す。胴部は卵形。	ナデ ヘラケズリ	砂粒含	良	明赤褐色	胴部下半にス付着
255	SC-30	甕 AII	14.8	肥厚した「く」字状の口縁部は、反りぎみに外方に開き、端部は丸くおさめる。胴部は球形。	ハケ目後ナデ ヘラケズリ	白色粒多含	良	黄橙色	
256	SC-30	甕 AII	16.4 23.0	「く」字状の口縁部は、反りぎみに外方に開き、端部を内側に小さく摘み出す。胴部は球形。	ハケ目 ハケ目、ヘラケズリ	灰色粒含	良	明黄褐色	スス付着
257	SC-30	甕 AII	16.3	「く」字状の口縁部は、反りぎみに外方に開き肥厚する。胴部は卵形。	ハケ目 ハケ目、ナデ、ヘラケズリ	砂粒含	良	橙色	
258	SC-30	甕 AII	17.5 26.2	「く」字状の口縁部は、やや反りぎみに外方に開く。胴部は球形。	ハケ目 ハケ目後ナデ、ヘラケズリ	小砂粒含	良	橙色	スス付着
259	SC-30	甕 AII	14.4 24.4	「く」字状の口縁部は、頸部で強く屈曲し反りぎみに大きく外方に開く。胴部はやや肩のはった球形。	ハケ目 ヘラケズリ	石粒含	良	黄橙色	
260	SC-30	甕 AII	13.8	「く」字状の口縁部は、短く直線的にのび、平坦に整えた端部は小さく外方に摘み出す。胴部はやや肩のはった球形。	ハケ目 ハケ目、ヘラケズリ	砂粒含	良	赤褐色	

Tab.37　土器観察表 (14)

No.	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
261	SC-30	甕 AII	15.0	「く」字状の口縁部はやや反りぎみに開き、端部を小さく外方に摘み出す。胴部は卵形。	ハケ目後ナデ ハケ目、ヘラケズリ	砂粒含	良	橙色	スス付着
262	SC-30	甕 AIV	17.2	「く」字状の口縁部は、直線的に開き、端部は内側に摘み出し凸線を作る。胴部は肩のはった卵形。	ハケ目 ヘラケズリ	粗砂粒含	良	橙色	
263	SC-30	甕 AIV	13.6	「く」字状の口縁部は小さく内弯し、端部は内側に摘み出す。胴部は肩のはった球形。	ハケ目 ヘラケズリ	白色粒多含	良	橙色	スス付着
264	SC-30	甕 AIII	16.3	「く」字状の口縁部は、直線的に外方に開き、端部は水平に面を整える。胴部は卵形。	ハケ目 ハケ目、ヘラケズリ	小砂粒多含	良	黄橙色	外面一部にスス付着
265	SC-30	甕 AIII	14.5	「く」字状の口縁部は直線的に開き、端部を小さく摘み出して、上面を平坦に整える。胴部は球形。	ハケ目 ハケ目、ヘラケズリ	砂粒含	良	褐色	
266	SC-30	甕 AIV	12.0 17.6	「く」字状の口縁部は内弯し、水平に整えた端部は内側に小さく摘み出す。胴部は肩のはった球形。	ハケ目 ナデ、ヘラケズリ	砂粒含	良	橙色	
267	SC-30	甕 AIV	12.8 18.4	「く」字状の口縁部は反りぎみに外方に開く。胴部は球形。	ハケ目 ヘラケズリ	砂粒多含	良	赤褐色	
268	SC-30	甕 AIV	12.3 18.7	「く」字状の口縁部は、直線的に開き端部は平坦に整える。胴部はやや肩のはった球形。	ハケ目、ナデ ハケ目、ヘラケズリ	砂粒含	良	灰褐色	
269	SC-30	甕 B	12.5	「く」字状の口縁部はやや反りぎみに開く。胴部は肩のはった球形。	タタキ 指頭押圧後ナデ	石英多含	良	明赤褐色	
270	SC-30	甕 AII	13.7 8.7	「く」字状の口縁部は反りぎみに外方に開く。胴部はやや肩のはった球形。	ハケ目後ナデ ナデ、ヘラケズリ	砂粒、金雲母含	良	橙色	二次焼成
271	SC-30	甕 AII	13.1 24.5	肥厚した「く」字状の口縁部は小さく外方に開く。胴部はやや肩のはった下膨れぎみの卵形。	ハケ目、ナデ ヘラケズリ	砂粒含	良	橙色	
272	SC-30	甕 AII	15.5	「く」字状の口縁部は反りぎみに短く開く。胴部は肩のはった卵形。	ハケ目 ヘラケズリ	白色粒含	やや良	橙色	
273	SC-30	甕 AII	13.4	「く」字状の口縁部は短く開き、端部を上方に小さく摘み上げる。胴部は肩のはった球形。	ナデ ヘラケズリ	石英含	良	橙色	
274	SC-30	甕 B	14.0 23.0	口縁部は直口に立ち上がり、中位で緩く屈曲して、小さく外方に開き、端部を内側に小さく摘み出す。胴部は肩のはった卵形。	格子目タタキ ナデ	白・灰色粒少含	良	赤橙色	スス付着
275	SC-30	甕 B	14.0	口縁部は直口して立ち上がり、中位で緩く屈曲して小さく外方に開く。端部を内側に小さく摘み出す。胴部はやや肩がはる。	格子目タタキ ナデ	肌・橙色粒含	良	橙色	
276	SC-30	高坏 C	14.9 10.7 9.0	坏部は直線的に開き、中位で弱い稜を作って、やや反りぎみに大きく開く。脚部は短く屈曲して内側に稜を作り、大きく朝顔状に開く。	ヘラケズリ、ハケ目 ナデ、ヘラケズリ	細砂・雲母含	良	橙色	
277	SC-30	高坏 C	17.3 11.6 11.3	坏部は内弯ぎみに立ち上がり口縁部は反りぎみに大きく開く。脚部は直線的で内面に弱い稜を作り、裾部は大きく反りぎみに開く。	ハケ目 ナデ	細砂粒・雲母含	良	橙色	剥離著しい
278	SC-30	高坏 C	16.8 12.2 12.1	坏部は下半に弱い稜を作り、やや反りぎみに外方に開く。脚部は太く裾部は屈曲して、内側に稜をつくり大きく外方に開く。	ハケ目、ナデ ハケ目、ナデ	石英含	良	橙色	
279	SC-30	高坏 C	17.0 10.5 11.4	坏部は内弯ぎみに外方にのび、体部下位で弱い稜を作る。細い脚部は直線的にのび裾部は屈曲して、短く外方に開く。	ヘラケズリ、ナデ ヨコハケ、ヘラケズリ	細砂粒多、雲母含	良	明褐色	外面にはスリップ様の赤褐色を塗布している。

Tab.38　土器観察表 (15)

No.	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
280	SC-30	高坏C	19.1 11.7 12.7	坏部は浅めで直線的に開き、口縁部は反りぎみに小さく外方に開く。脚部は直線的にのび裾部は屈曲して短く外方に開く。端部は平坦に仕上げ内側に小さく摘み出す。	ハケ目、ナデ ハケ目、ヘラケズリ、ナデ	細砂粒、雲母含	良	橙色	焼成前の穿孔（3孔あり）
281	SC-30	高坏C	16.8 12.6 12.4	坏部はストレートに外方に開く。脚部は膨らみをもち内面に凸帯状の段を作って、反りぎみに大きく開く。	ナデ ナデ	細砂粒多・赤褐色小粒少含	良	黄橙色	
282	SC-30	高坏C	18.6 12.0 13.7	坏部は直線的に立ち上がり口縁端部は反りぎみに小さく外方に開く。脚部は細かくラッパ状に開く。	ハケ目、ナデ シボリ痕	砂粒、金雲母含	良	橙色	
283	SC-30	高坏C	17.4 10.2 12.8	坏部は緩く膨らんで立ち上がり、口縁端部は小さく摘み出して外方に開く。脚部は細くのび裾部は屈曲して小さく開く。	ハケ目、ナデ ナデ、ヘラケズリ	砂粒多含	良	橙色	
284	SC-30	高坏C	19.0 14.2 12.7	坏部は下半が、内弯ぎみに立ち上がりやや反りぎみになる。口縁端部は内側に小さく摘み出す。脚部はストレートにのびてラッパ状に開く。	ナデ、ヘラ研磨 ハケ目、ヘラケズリ	砂粒含	良	黄橙色	
285	SC-30	高坏C	20.6 12.0 13.8	坏部はやや扁平で口縁にむかい直線的に開く。脚部は膨らみをもってのび下半は緩く屈曲。裾部は小さく屈曲して、外方に開く。	ハケ目、ナデ ハケ目、ナデ	小砂粒多雲母含	良	黄橙色	
286	SC-30	高坏C	16.5 10.5	坏部は下半に強い段をつくり、一旦、直口して反りぎみに大きく外方に開く。	ハケ目 ハケ目、ヘラケズリ	小砂粒含	良	淡黄褐色	
287	SC-30	高坏C	16.6 10.7 10.3	坏部は下半に段を作り、一旦、直口して反りぎみに大きく外方に開く。脚部はストレートにラッパ状にのび、裾部は屈曲して反りぎみに外方に開く。	ナデ、ハケ目 ハケ目、ナデ、ヘラケズリ	細砂粒雲母含	良	橙色	
288	SC-30	高坏C	17.0 11.7 11.8	坏部は、下半に段を作り反りぎみに外方に開き、端部は内側に小さく摘み出す。脚部は大きくラッパ状に開く。	ナデ、ハケ目 ナデ	細砂粒雲母含	良	橙色	
289	SC-30	高坏C	19.0	坏部は下半に弱い稜を作り、膨らみぎみに立ち上がるが中位で、小さく屈曲して反りぎみに開く。脚部は、細くストレートにのびる。	ナデ ハケ目、ヘラケズリ	細砂粒、雲母含	良	橙色	
290	SC-30	高坏C	16.4 13.4 12.5	坏部は下半に段を作り、一旦、直口して反りぎみに外方に大きく開く。脚部はラッパ状に開く。	ナデ ナデ、ヘラケズリ	砂粒含	良	黄褐橙色	
291	SC-30	高坏C	18.4 12.2 12.6	坏部は下半で稜を作り、反りぎみに大きく外方に開く。口唇端部は小さく外方に摘み出す。脚部は直線的にのび裾部は強く屈曲して内弯ぎみに開く。	ナデ ナデ、ヘラケズリ	砂粒多、石英多含	良	橙色	
292	SC-30	高坏C	19.6 12.6 12.1	坏部は下半に段を作って外方にのび口縁部は反りぎみに開く。脚部は膨らみぎみにのび屈曲して大きく外方に開く。	ナデ、ハケ目 ハケ目、ナデ、ヘラケズリ	細砂粒含	良	橙色	
293	SC-30	高坏C	18.8 11.8 13.2	坏部は下半に段を作り、反りぎみに大きく外方に開く。脚部はストレートにのび、裾部は強く屈曲して大きく外方に開く。	ナデ ハケ目、ヘラケズリ	砂粒含	良	橙色	
294	SC-30	高坏C	20.3 12.2 12.6	坏部は扁平で下半に緩い稜を作り、反りぎみに大きく外方に開く。脚部は直線的にのび、裾部は緩く屈曲して、やや反りぎみに開く。	ナデ、ハケ目 ナデ、ヘラケズリ	小砂粒多雲母含	良	橙色	
295	SC-30	高坏C	23.7 18.5 15.5	坏部は下半に小さな凸帯状の段を作り、反りぎみに大きく外方に開く。脚部はラッパ状に大きく開き、端部は上方に小さく摘み上げる。	ナナメハケ、ナデ	細砂粒多含	良	橙色	
296	SC-30	高坏C	24.3	坏部は下半に強い段を作り、反りぎみに、大きく外方に開く。脚部は反りぎみに外方にのびる。	指頭押圧後研磨 ナデ、ハケ目、ヘラケズリ	砂粒、金雲母含	良	橙色	
297	SC-30	高坏C	17.7 11.6 12.2	坏部は、下半に弱い稜を作り、直線的にのびて、外方に開く。脚部は短く朝顔状に大きく開く。	ハケ目、ナデ ハケ目、ナデ、ヘラケズリ	細砂粒多含	良	橙色	
298	SC-30	高坏C	19.6 11.0 12.9	坏部は下位で、段を作り大きく外方に開く。脚部は短く朝顔状に開く。	ナデ、ハケ目 ナデ、ヘラケズリ	赤褐色砂粒含	良	橙色	

Tab.39　土器観察表 (16)

No.	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
299	SC-30	高坏 C	19.5 13.4 16.2	坏部はやや浅く、下半に段を作って外方に開く。脚部は細長く直線的にのび、裾部は強く屈曲して大きく外方に開く。端部は上方に小さく摘み上げる。	ハケ目、ナデ ナデ、ヘラケズリ	精良	良	橙色	
300	SC-30	高坏 C	19.6 12.5 15.4	坏部は下半に小さな凸帯状の段を作って直線的に開く。口縁端部は小さく外方に摘み出す。脚部はストレートにのび、裾部は強く屈曲して稜を作り、短く外方に開く。	ハケ目、ナデ ナデ、ヘラケズリ	砂粒、金雲母含	良	明黄褐色	
301	SC-30	高坏 C	17.5 13.0 15.4	坏部は下半に弱い稜を作り、やや反りぎみに立ち上がる。脚部は、厚くラッパ状に開く。	研磨、ハケ目 ナデ、ヘラケズリ、ハケ目	砂粒、金黒雲母含	良	明黄褐色	
302	SC-30	高坏 C	32.1 14.3 12.0	坏部は、下半に強い稜を作り反りぎみに大きく外方に開く。脚は短く、朝顔状に開く。	ナデ 指頭押圧後ナデ	砂粒含	良	明黄褐色	
303	SC-30	高坏 C	13.0	脚部は細く緩やかに、ラッパ状に開いてのびる。	ハケ目、ナデ ヘラケズリ、ハケ目	粗砂粒石英、雲母含	良	橙色	ヘラ記号
304	SC-30	高坏 C	12.4	脚部は朝顔状に開き、端部は小さく外方に摘み出す。	ナデ ナデ	細砂粒、雲母含	良	明褐色	
305	SC-30	器台 B	8.7 9.3 7.9	坏部は浅く口縁部は内弯ぎみに開く。脚部は、直線的に朝顔状に開く。	ハケ目 ハケ目、ナデ	細砂粒、雲母含	良	橙色	
306	SC-30	鉢 G	13.0 7.2	体部は半球形で、肥厚する。口縁部は直口する。	ハケ目 指頭押圧後ナデ	粗砂粒雲母赤色砂粒含	良	橙色	
307	SC-30	器台 B	8.0	短く直線的に開く。	ハケ目 指頭押圧後ナデ	砂粒少含	良	黄橙色	
308	SC-30	高坏 須恵器	14.9	坏部は内弯に立ち上がり口縁直下で小さく屈曲して直口する。口唇は内傾して平坦に仕上げる。	ヨコナデ ナデ	細砂粒、金雲母含	良	灰黄色	
309	SC-30	蛸壺	6.0 10.5	投弾状で口縁部は直口する。	指頭押圧後ナデ 指頭押圧後ナデ	小砂粒多含	良	黄橙色	人面様の線刻がある
310	SC-31	長頸壺 BI	5.7	直線的にのびラッパ状に小さく開く。口縁部は細く丸くおさめる。	ハケ目 ナデ	細砂粒雲母含	良	橙色	スス付着
311	SC-31	小型壺 BIII	10.2 10.8	「く」字状の口縁部は、頸部の屈曲が弱い。「く」字状の口縁部は、やや直口ぎみに立ち上がる。胴部は、玉葱状。	ハケ目 ハケ目、指頭押圧	砂粒、雲母含	良	橙色	黒斑アリ
312	SC-31	壺 DI	10.6 5.5 25.8	口縁部は短く直口し端部を丸くおさめる。胴部は卵形。	ハケ目、ナデ 指頭押圧後ナデ	黄色砂粒含	良	赤褐色	
313	SC-31	小型壺	13.8	「く」字状の口縁部は短く直線的にのびる。胴部は扁球形。	ナデ、ハケ目 ヘラケズリ	小砂粒多含	良	橙色	
314	SC-31	鉢 D	13.4 3.8 11.3	「く」字状の口縁部は短く反りぎみに開く。胴部は半球形で丸底ぎみの底部がつく。	ハケ目 ハケ目	砂粒含	良	橙色	
315	SC-31	甕 AI	19.2	「く」字状の口縁部はは大きく外方に開く。胴部は卵形。	ハケ目 ハケ目	精良	良	橙色	スス付着
316	SC-31	甕 AI	22.2 32.5	「く」字状の口縁部は反りぎみに開き平坦に整えた端部は中央が凹む。胴部は卵形。	ハケ目、カキ上げ ハケ目、ナデ	小砂粒多含	良	褐色	スス付着
317	SC-31	甕 AI	20.0	口縁部は「く」字状で大きく外方に開く。胴部は長胴形。	ハケ目 ハケ目	砂粒含	良	赤褐色	

Tab.40　土器観察表 (17)

No.	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
318	SC-31	甕 AII	12.8	「く」字状の口縁部に反りぎみに短く外方に開く。胴部は球形。	ハケ目、ナデ 指頭押圧後ナデ、ハケ目	砂粒含	良	褐色	
319	SC-31	甕 AIII	10.8	「く」字状の口縁部はストレートに外方に開き、端部は小さく摘み出す。胴部は球形。	ハケ目 ヘラケズリ、ナデ	砂粒多含	良	浅黄橙色	
320	SC-31	甕 AIII	11.2 14.8	口縁部は直口ぎみに立ち上がり、平坦に整えた口唇は端部を小さく摘み出す。胴部は球形。	ハケ目、ナデ ナデ、ヘラケズリ	粗砂粒多含	良	褐色	スス付着
321	SC-31	甕 AIV	11.6 18.6	「く」字状の口縁部はやや膨らみぎみに開き、中位に弱い稜をもつ。底部は、ややフラット気味の丸底。	ハケ目、ナデ ナデ、ヘラケズリ	白色砂粒含	良	橙色	
322	SC-31	甕 AIII	15.4 17.9	「く」字状の口縁部はストレートに外方に開く。胴部は球形。	ハケ目、ナデ ナデ、ヘラケズリ	細砂粒多含	良	明赤褐色	
323	SC-31	甕 AIII	12.3 16.8	「く」字状の口縁部は内弯ぎみに外方に開く。胴部は球形で、底部分はやや尖りぎみ。	ナデ、ハケ目 ナデ、ヘラケズリ	小砂粒微量含	良	橙色	
324	SC-31	甕 AII	14.2 20.1	口縁は直口ぎみの「く」字形。胴部は卵形で、尖形ぎみの底部をもつ。	ナデ、ハケ目 ヨコナデ、ヘラケズリ	小砂粒多含	良	橙色	
325	SC-31	甕 AIV	17.8 26.5	「く」字状の口縁部は内弯ぎみに開き、口唇端部は内側に小さく摘み出す。胴部は球形。	ナデ ナデ、ヘラケズリ	小砂粒多含	良	橙色	スス付着
326	SC-31	鉢 C	26.7 15.3 19.2	鍔の長い丸底鉢に太く短めのラッパ状に開く脚部がつく。	ハケ目 ハケ目、指頭押圧ナデ	小砂粒多含	良	褐色	
327	SC-31	鉢 G	17.7 5.1	体部は半球形や内弯ぎみに立ち上がる。	ハケ目 ハケ目、ナデ	白色砂粒含	良	明赤褐色	
328	SC-31	高坏 C	16.1	坏部は下半に弱い稜を作りやや反りぎみに大きく外方に開く。	ナデ 器面剥離	細砂粒赤褐色、雲母含	良	橙色	
329	SC-31	高坏 C	17.5	坏部は下半に弱い凹線状の段を作って外方に直線的に開き、口縁部は丸くおさめ外方に小さく摘み出す。	ナデ ナデ	細砂粒雲母含	良	赤色	
330	SC-31	高坏 C	18.0 12.0 11.8	坏部は下半に弱い稜を作り直線的に開く。胴部はストレートにのび裾部は強く屈曲して小さく外方に開く。	ナデ ハケ目、ヘラケズリ	白灰色石含	良	明赤褐色	
331	SC-31	高坏 C	19.5	坏部は下半に段を作り直線的に開く。脚部はストレートにのびる。	ナデ、研磨 ナデ、ヘラケズリ	細砂粒含	良	橙色	
332	SC-31	高坏 C	20.2 13.0 16.0	坏部は下半に段をつくり反りぎみに大きく開く。脚部は細長く、裾部は強く屈曲して内弯ぎみに短く開く。	ナデ ナデ、ヘラケズリ	細砂粒多含	良	橙色	
333	SC-31	高坏 C	18.7 11.2 13.0	坏部は下半に段を作り、直線的に大きく外方に開く。脚部はストレートにのび裾部は屈曲して大きく外方に開く。端部は上方に小さく摘み上げる。	ナデ、研磨 器面荒れ（ナデ）	小砂粒多含	良	明赤褐色	
334	SC-31	支脚	5.8	いわゆる沓形で器壁は厚い。脚は短く直線的に開く。	ナデ ナデ	細砂粒雲母含	良	黄褐色	
335	SC-32	小型壺 BIII	11.0 9.6	胴部は、玉葱状扁球形。頸部は、強く屈曲し直線的に大きく外反する。	ハケ目 ナデ	石英、細砂粒含	良	橙色	
336	SC-32	小型壺	13.3 11.1	口縁部は、短く直口した後に小さく外反する。胴部は玉葱状。	ナデ ヘラケズリ、ナデ	石英、雲母含	良	橙色	黒斑

Tab.41　土器観察表 (18)

No.	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
337	SC-32	小型壺 F	7.2 6.4	口縁部が短く直口した後に小さく外反する。胴部は玉葱状。	ヨコナデ、ハケ目 ヨコナデ、ナデ	細砂粒含	良	褐色	スス付着
338	SC-32	小型壺 BIII	9.3 2.2 11.0	「く」字状の口縁部は直線的に小さく開く。胴部は玉葱状で小さい底部がつく。	ハケ目、ナデ ハケ目、指頭押圧ナデ	細砂粒 雲母含	良	橙色	
339	SC-32	小型壺 AIII	10.6 12.0	二重口縁。「く」字状に開いた口縁部は一旦屈曲し段を作って直口した後に小さく外反する。胴部は扁球形。	ヨコナデ、ハケ目 ヨコナデ、ヘラケズリ	砂粒含	良	黄橙色	
340	SC-32	甕 AI	19.8	口縁部は短く「く」字状に外反する。胴部は卵形。	ハケ目 ハケ目	砂粒、金 雲母含	良	灰褐色	
341	SC-32	甕 AII	15.0	「く」字状の口縁部は直線的に開き平坦に整えた端部は小さく摘み出す。	ヨコナデ、ハケ目 ヨコナデ、ヘラケズリ	石英、 砂粒含	良	黄褐色	
342	SC-32	甕 AIV	13.3 20.0	「く」字状に外反する口縁部は端部を上方に小さく摘み上げる。胴部は卵形で凸レンズ状の小さな底部がつく。	ヨコナデ、ハケ目 ヨコナデ、ヘラケズリ	細砂粒含	良	橙色	スス付着
343	SC-32	甕 AII	11.0	「く」字状の口縁部は反りぎみに小さく開く。胴部は肩のはった卵形でやや尖底ぎみ。	ヨコナデ、ハケ目 ハケ目後ヨコナデ、ヘラケズリ	精良	良	赤褐色	
344	SC-32	手捏 D	10.8 3.4 5.0	胴部は半球形に膨らみ口縁部は小さく直口する。底部は凹レンズ状の平底。	指頭押圧ナデ ナデ	砂粒多含	良	橙色	
345	SC-32	鉢 E	12.0 11.5	胴部は卵形で口縁部は直口ぎみに小さく内傾する。	ハケ目 ハケ目、ナデ	砂粒含	良	赤褐色	
346	SC-32	鉢 C	22.5 7.5	体部は下膨れの半球形で緩く屈曲した口縁部は反りぎみに大きく開く。	ハケ目 ハケ目	粗砂粒少含	良	橙色	
347	SC-32	鉢	16.0	脚部は直線的に朝顔状に大きく開く。	ハケ目、ナデ ハケ目	細砂、 雲母含	良	黄橙色	
348	SC-32	高坏	12.2 17.6 12.7	坏部は卵形で口縁部は直口ぎみに立ち上がり端部を小さく摘み出す。脚部は低く朝顔状に大きく開く。	研磨、ナデ ナデ、ハケ目	細砂、 雲母含	良	赤褐色	
349	SC-32	高坏 A	28.8	坏部は小さく膨らんで立ち上がり、緩く屈曲して、口縁部は大きく外反する。	ハケ目後ナデ ハケ目後ナデ	砂粒含	良	赤褐色	
350	SC-32	高坏 A	31.4	坏部は内弯して立ち上がり中位で小さく屈曲して稜を作り、口縁部は外反する。	研磨 研磨	白色砂粒含	良	赤褐色	
351	SC-32	高坏 C	18.2	坏部下半は平坦で体部は直線的に大きく外方に開く。	ハケ目 ハケ目、ナデ	細砂粒 雲母少含	良	橙色	スリップ様の明赤褐色が塗布されている。
352	SC-32	高坏 C	16.8 12.2 13.4	坏部は中位に小さな段を作り、直線的に大きく外方に開く。脚部は小さく膨らみ裾部は屈曲して大きくラッパ状に開く。	ヨコナデ、ハケ目、ナデ ヨコナデ、ヘラケズリ	細砂粒 雲母含	良	明赤褐色	
353	SC-33	小型壺 BII	12.4	「く」字状の口縁部は内弯ぎみに長く開く。 胴部は球形。	ハケ目 ヨコナデ、ヘラケズリ	石英、 砂粒含	良	橙色	
354	SC-33	小型壺 BIII	12.4	「く」字状の口縁部はやや長めで直線的に開く。 胴部は球形。	ハケ目 ハケ目、ヘラケズリ	砂粒含	良	橙色	
355	SC-33	甕 AI	7.4	卵形の胴部に凸レンズ状の平底がつく。	ハケ目 ハケ目、ナデ	白色小 砂粒含	良	黄橙色	スス付着

Tab.42　土器観察表 (19)

No.	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
356	SC-33	高坏 C	18.7	体部は直線的に大きく開き、口縁端部は小さく摘み出して上面を平坦に整える。	ヨコナデ ハケ目	粗砂粒 石英、赤色粘土含	良	橙色	丹彩
357	SC-33	高坏 C	18.8	坏部は小さく膨らんで立ち上がり、口縁部は大きく外方に開く。 脚部は短めでラッパ状に開く。	ナデ、ヘラナデ ナデ	砂粒含 赤色粘土粒含	良	黄橙色	
358	SC-33	鉢 F	19.0 3.8 9.4	体部は内弯ぎみに膨らみ、口縁部は直口する。底部は厚手の小さな平底。	ハケ目 押圧後ナデ	砂粒、 雲母含	良	明赤褐色	黒斑
359	SC-33	鉢 F	12.6 3.7 11.9	体部は半球形で、口縁部は大きく内弯する。 底部は凸レンズ状の平底。	ヘラケズリ後ナデ 指頭押圧後ナデ	砂粒含	良	赤褐色	
360	SC-34	壺 EI	24.3	口縁部は朝顔状に開く。 胴部は卵形。	ハケ目 ハケ目	砂粒含	良	赤色	
361	SC-34	甕	15.5	「く」字状の口縁部は直線的に開く。胴部は卵形。	ハケ目 ハケ目、ナデ	砂粒、金雲母含	良	褐色	
362	SC-35	甕 AII	14.2	「く」字状の口縁部は厚手で小さく外反する。	ナデ、ハケ目 ナデ、ハケ目	砂粒、 金雲母含	良	橙色	
363	SC-35	甕 AI	16.2	「く」字状の口縁部は短く外反する。 平坦に整えた端部は小さく摘み出す。胴部は卵形。	ハケ目 ハケ目	砂粒、 金雲母含	良	褐色	
364	SC-35	甕 AI	14.7 7.0 25.5	「く」字状の口縁部は短く直線的に開き、端部を内に小さく摘み上げる。胴部は卵形。平底の底部。	ハケ目、ナデ ハケ目、指ナデ	精良	良	赤褐色	外面黒ずみ
365	SC-35	甕 AI	20.0 4.6 28.1	「く」字状の口縁部は短く外反し、平坦な端部は外に小さく摘み出す。 胴部は卵形。平底。	ハケ目 ハケ目	白色砂粒色	良	明赤褐色	片面黒い
366	SC-35	鉢 B	21.7 3.4 13.9	口縁部は「く」字状で直線的に開く。胴部は半球形で小さな平底がつく。	指頭押圧、研磨 指頭押圧後ナデ	砂粒含	良	橙色	
367	SC-36	壺 EI	20.3	頸部で緩く屈曲した口縁部は一旦直口して、立ち上がった後、ラッパ状に開く。頸部に三角凸帯が1条巡る。 胴部は卵形。	ハケ目 ハケ目	白色砂粒含	良	橙色	スス付着
368	SC-36	壺		胴部は球形。	ハケ目 指頭押圧、ハケ目	石英、金雲母含	良	明赤褐色	
369	SC-36	壺 AI	24.8 8.8 39.5	二重口縁。朝顔状に開いた口縁部は鋭く屈曲して、一旦内傾し、更に反転して口縁部を摘み出す。口縁部と擬口縁上に刻み目。頸部に三角凸帯をめぐらす。胴部は玉葱状で凸レンズ状の平底がつく。	ヨコナデ、ハケ目、研磨 ハケ目、ナデ	粗砂粒含	良	橙色	
370	SC-36	甕 AI	20.1	「く」字状の口縁部は短く外反する。 胴部は卵形。	ハケ目 ハケ目	砂粒含	良	淡褐色	
371	SC-36	甕 AI	21.0	「く」字状の口縁部は直線的に短く開く。 胴部は卵形。	ハケ目 ハケ目	白色小粒含	良	橙色	
372	SC-36	甕 AI	19.8	「く」字状の口縁部は短く外反し、平坦な端部を小さく摘み出す。 胴部は卵形。	ハケ目 ハケ目	白色粒含	良	橙色	
373	SC-36	甕 AII	13.3 16.4	「く」字状の口縁部は反りぎみに開き端部を上方に小さく摘み出す。 胴部は短卵形。	タタキ、ナデ ハケ目、ヘラケズリ	砂粒、金雲母含	良	黄橙色	
374	SC-36	甕 AIV	15.8 19.2	「く」字状の口縁部は内弯ぎみに開き、端部を小さく摘み出す。 胴部は球形で小さな底部がつく。	ハケ目 ヨコナデ、ヘラケズリ	砂粒含	良	黄橙色	

Tab.43　土器観察表 (20)

No.	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
375	SC-36	甕 AI	12.4 4.0 14.0	口縁部は折り曲げたように水平に大きく開く。 胴部は卵形で厚手の平底がつく。	ハケ目 ナデ、ハケ目	石英含	良	灰黄褐色	
376	SC-36	鉢 B	19.4 4.6 7.6	口縁部は緩く屈曲して大きく外方に開く。胴部は扁球形で凸レンズ状の平底がつく。	ハケ目後ナデ 指頭押圧後ナデ	石英、細砂粒含	良	明赤褐色	黒斑
377	SC-36	鉢 F	20.0	体部は内弯ぎみに立ち上がり直口する。口縁部は端部を小さく内傾させる。	ハケ目後ナデ ナデ	白色粒含	良	褐色	
378	SC-38	甕 AI	19.3 4.5 25.7	若干面を残した丸底(尖がりきみ)。「く」字状の口縁部は一旦直口した後に外反する。 胴部は卵形で凸レンズ状の小さな平底がつく。	ハケ目 ハケ目	白色粒多含	良	橙色	スス付着
379	SC-38	甕 AI	16.4 5.5 26.1	「く」字状の口縁部は反りぎみに短く開く。胴部は長胴形で凸レンズ状の平底がつく。	ヨコナデ、ハケ目 ヨコナデ、ハケ目	砂粒含	良	橙色	スス付着
380	SC-38	甕 AI	21.5 7.9 33.6	「く」字状の口縁部は鋭く屈曲して外反し端部はやや膨らむ。 長胴形の胴部に凸レンズ状の平底がつく。	ハケ目、ナデ ハケ目、ナデ	白色粒多含	良	橙色	スス付着
381	SC-38	甕 AI	19.0 6.2 27.4	「く」字状の口縁部は反りぎみに短く開き、端部を小さく摘み出す。 卵形の胴部、凸レンズ状の平底。	ハケ目 ハケ目	白色小砂粒多含	良	橙色	スス付着
382	SC-39	鉢 F	16.0	体部は小さく膨らんで立ち上がり口縁部は直口する。 薄手。	ハケ目 ハケ目	細砂粒含	良	淡黄褐色	
383	SC-39	高坏	18.1	脚部は低く朝顔状に大きく開く。	ナデ ナデ、ハケ目	微砂粒多、雲母含	良	赤褐色	スス付着
384	SC-40	鉢 F	16.6	薄手の体部は内弯ぎみに立ち上がり口縁部は直口する。	ハケ目 ナデ	細砂粒多雲母含	良	赤褐色	
385	SC-41	甕 AI	19.8	「く」字状の口縁部は短く、直線的に開き、端部を平坦に整える。 胴部は長卵形。	ハケ目 ハケ目	白茶色粗石粒多含	不良	橙色	
386	SC-42	壺 AI	21.5	朝顔状に開いた口縁部は強く屈曲して、短く直線的に内傾する。 頸部に三角凸帯1条巡る。	ヨコナデ、ハケ目 ヨコナデ、ハケ目	肌、橙色砂粒含	良	橙色	
387	SC-42	甕	7.0	凸レンズ状の平底	ハケ目 ハケ目	砂粒、石英含	良	橙色	
388	SC-42	鉢 F	14.8	薄手の体部は半球形で口縁部は直口する。	ハケ目、ナデ ハケ目、ナデ	砂粒、金雲母含	良	橙色	
389	SC-42	高坏		坏部は半球形に膨らんで立ち上がる。脚部は細い。	指頭押圧後ハケ目 指頭押圧後ハケ目	砂粒、金雲母含	良	橙色	
390	SC-42	器台 A	12.5	受け部は大きく外反する。 短く筒状にのびた脚部は屈曲して大きくラッパ状に開く。	ハケ目 指頭押圧後ナデ	砂粒、金雲母含	良	橙色	
391	SC-43	鉢 C	23.8 8.6	口縁部は緩く屈曲して外方に大きく開き、端部は小さく摘み出す。 体部は扁平な半球形。	ハケ目 ハケ目・研磨	砂粒、金雲母含	良	黄橙色	黒斑
392	SC-44	長頸壺	6.5 11.0	口縁部は短くラッパ状に開く。胴部は玉葱状。	研磨 指頭押圧後ナデ	赤茶色砂粒含	良	橙色	
393	SC-44	鉢 D	15.7 18.1	「く」字状の口縁部は一旦直口した後に外反する。 胴部は扁球形。	ハケ目 ナデ	石粒含	良	橙色	スス付着

Tab.44　土器観察表 (21)

No.	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
394	SC-44	鉢 A	17.5 6.0 16.8	「く」字状の口縁部は短く外反する。胴部は短卵形で凸レンズ状の平底がつく。	ヨコナデ、ハケ目 ハケ目、ナデ	白色粒多含	良	赤褐色	表面黒ずみ
395	SC-44	甕	7.0	凸レンズ状の底部に卵形の胴部がつく。	ハケ目 ハケ目	白色粒多含	良	橙色	
396	SC-44	甕 AVI	15.8 4.3 20.9	「く」字状の口縁部は反りぎみに小さく開く。卵形の胴部に凸レンズ状の平底がつく。	ハケ目 ヘラケズリ	白色粒多含	不良	赤色	スス付着
397	SC-44	鉢 F	17.5 2.0 8.2	体部は半球形で口縁部は直口する。厚手の小さな平底がつく。	ハケ目、ナデ ナデ	細砂粒多 雲母含	良	橙色	黒斑
398	SC-44	鉢 B	21.1 4.0 11.3	口縁部は緩く屈曲して大きく「く」字状に開く。体部は扁平な半球形で平底がつく。	ハケ目、ナデ ハケ目、ナデ	砂粒、金 雲母含	良	赤褐色	
399	SC-44	高坏 A	30.5	坏部は浅く膨らみ中位で屈曲して反りぎみに大きく開く。	ハケ目、研磨 研磨、ナデ	細砂粒多 雲母含	良	橙色	
400	SC-44	高坏 A	32.2	坏部はやや直線的に立ち上がり、緩く屈曲して外反した口縁部は短め。	ハケ目、ナデ ハケ目、ナデ	細砂粒多、 雲母含	良	明黄褐色	
401	SC-44	器台 A	11.3	ラッパ状に短く開く。	指頭押圧後ハケ 指頭押圧後ハケ	砂粒、 金雲母含	良	橙色	
402	SC-45	高坏 A	19.0	脚部は薄く朝顔状に大きく開く。	研磨 ハケ目	砂粒、 石英含	良	橙色	
403	SC-45	器台 A	10.2	受け部は大きく外反し、端部を小さく摘み出す。脚部は短く直口してラッパ状に開く。	ハケ目 指頭押圧後ハケ目	砂粒多含	良	橙色	
404	SC-45	鉢 E	6.5 9.3	体部は下半が小さく膨らんだ後直口して立ち上がり、蛸壺状。小さな底部がつく。	ハケ目、ナデ ナデ、ヘラケズリ	砂粒、金 雲母含	良	明赤褐色	
405	SC-46	小型壺 BI	4.7	「く」字状の口縁部は直口した後小さく外反する。胴部は玉葱状。	研磨 指頭押圧後ハケ	金雲母含	良	黄橙色	黒斑
406	SC-46	鉢 D	15.7 9.7	「く」字状の口縁部は外弯ぎみに大きく開く。胴部は玉葱状。	研磨、ヘラケズリ 研磨、指頭押圧後ケズリ、ナデ	粗砂粒少、 雲母含	良	浅黄橙色	口縁部黒斑
407	SC-46	鉢 B	11.1 10.2	「く」字状の口縁部は大きく外反する。胴部は下脹れの半球形。	ヘラケズリ 研磨後ナデ	金雲母含	良	褐色	
408	SC-46	甕 AI	20.2	「く」字状の口縁部は長めで、反りぎみに大きく開く。	ヨコナデ、ハケ目 ハケ目	砂粒、 金雲母含	良	橙色	
409	SC-46	甕 AI	17.0 5.0 24.5	短めの「く」字状口縁は反りぎみに開く。胴部は卵形で平坦な底部がつく。	ハケ目 指頭押圧後ハケ目	砂粒、 金雲母含	良	明赤褐色	
410	SC-46	甕 AI	18.7 25.6	「く」字状の口縁部は、短く外反し端部は平坦に整える。胴部は卵形で凸レンズ状の平底がつく。	ハケ目 ハケ目	砂粒、 金雲母含	良	橙色	
411	SC-46	鉢 G	12.7 5.0	体部は扁平な半球形で、口縁部は短く直口する。	 指頭押圧後ハケ	砂粒含	良	橙色	
412	SC-46	甕	3.9	小さな凸レンズ状の底部がつき胴部は球形に膨らむ。	ナデ 指頭押圧後ハケ目	石英含	良	橙色	

Tab.45　土器観察表 (22)

No.	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
413	SC-46	鉢 G	17.0 7.1	体部はやや内弯ぎみに大きく外方に開く。	ハケ目 ハケ目、ヘラケズリ	金雲母含	良	黄橙色	
414	SC-47	鉢 A	30.2 8.0 28.9	口縁部は「く」字状に外反し頸部に三角凸帯が1条巡る。胴部は短卵形。凸レンズ状の底部。	ナデ 指頭押圧後ハケ	白色粒少含	良	橙色	
415	SC-47	高坏	10.0	坏部は膨らみをもち立ち上がる。脚部はラッパ状に開き裾部は短く水平に開く。	ハケ目、ナデ ナデ、ヘラケズリ	細砂粒 石英、 雲母含	良	橙色	黒斑
416	SC-48	壺 AI	18.0	朝顔状に開いた口縁部は強く屈曲して膨らみぎみに小さく内傾する。	ハケ目 ナデ	白色粒含	良	明赤褐色	
417	SC-48	壺 AI	19.2	二重口縁。朝顔状に開く口縁部は一旦屈曲して鋭く内傾し端部を小さく摘み上げる。	ナデ	白色粒含	良	橙色	
418	SC-48	壺 AI	10.0	卵形の胴部下半に三角凸帯が1条巡る。	ハケ目 ナデ(表面剥離)	砂土	良	橙色	
419	SC-48	壺 EI	18.0 8.6 31.0	口縁部は「く」字状に短く外反する。卵形の胴部に平底の底部がつく。	ハケ目、ナデ 指頭押圧後ナデ	白茶色 粒多含	良	橙色	
420	SC-48	高坏 A		脚部は細長く裾部はラッパ状に開く。	研磨 ヘラケズリ	砂粒含	良	橙色	
421	SC-48	高坏	13.8	脚部は低く、朝顔状に開く。	ハケ目 ハケ目	石英、金 雲母含	良	明赤褐色	
422	SC-48	支脚		受け部は一端が高く嘴状に尖る。脚部は短く裾部はラッパ状に開く。	押圧ナデ、ハケ ナデ、ハケ目	白色粒含	良	赤褐色	
423	SC-49	鉢 E	11.3 4.6 11.6	体部は短卵形で口縁部は小さく内傾する。底部は厚手の凸レンズ状の平底。	ハケ目 押圧後ナデ	砂粒、金 雲母含	良	橙色	
424	SC-49	甕 AI	23.4	「く」字状の口縁部は、反りぎみに開き、端部を小さく摘み上げる。胴部は卵形。	ヨコナデ、ハケ ヨコナデ、ハケ	白色粒含	良	橙色	
425	SC-49	甕 C	15.2 4.6 21.0	「く」字状の口縁部は、長めで反りぎみに小さく開く。胴部は卵形で凸レンズ状の底部がつく。	ハケ目 ハケ目、ナデ	石英含	良	褐色	
426	SC-49	甕 C	6.4	口縁部は「く」字状で卵形の胴部に厚手で大きめの平底がつく。	ハケ目 ナデ	石英多含	良	褐色	
427	SC-49	高坏 C	18.0 11.7 12.0	坏部は浅く内弯ぎみに大きく外方に開く。脚部は細く裾部は屈曲して大きくラッパ状に開く。	ハケ目、研磨 ハケ目、ナデ	細砂粒含	良	橙色	
428	SC-49	高坏	9.0	脚部は低く裾部は小さく開く。	ハケ目 ヨコナデ	砂粒、金 黒雲母含	良	褐色	
429	SC-50	壺 AI	15.2	二重口縁。朝顔状に開いた口縁部は一旦屈曲して強く内傾する。胴部は長球形。肩部に三角凸帯。	ハケ目 ハケ目、ナデ	白色小粒含	良	橙色	
430	SC-50	小型壺 BII	9.8	「く」字状の口縁部は長く直線的に開く。	ハケ目 ハケ目	砂粒含	良	褐色	
431	SC-50	甕	16.0	「く」字状の口縁部は小さく開き端部は雫状に肥厚する。	ヨコナデ、ハケ ヨコナデ、ハケ	砂粒含	良	橙色	

Tab.46　土器観察表 (23)

No.	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
432	SC-50	高坏 C	17.3	坏体部は内弯ぎみに大きく外方に開く。	ナデ ナデ	細砂粒多 石英、 雲母含	良	橙色	黒斑
433	SC-50	高坏 C	15.8 11.3	坏部は下半で緩く屈曲して稜を作り大きく外反。脚部はラッパ状にのび裾部は屈曲して大きく外反。	ヨコナデ、ハケ、ナデ ヨコナデ、ナデ、指頭押圧後ケズリ	石英多、 金雲母含	良	淡橙色	
434	SC-50	鉢 F	18.7 2.7 9.0	半球形の体部に小さな凸レンズ状の底部がつき口縁部は直口する。	ハケ目 指頭押圧後ハケ目、ナデ	石英、金 雲母含	良	赤褐色	
435	SC-50	鉢 C	26.0	口縁部は強く屈曲して反りぎみに大きく外方に開き、端部を小さく摘み上げる。体部は扁平な半球形。	ハケ目、ナデ ハケ目、ナデ	石英、金 黒雲母含	良	褐色	
436	SC-51	甕 AI	22.4 5.6 33.0	「く」字状の口縁部は反りぎみに開き平坦な端部は小さく摘み出す。胴部は長胴形で、凸レンズ状の平底がつく。	ヨコナデ、ハケ ヨコナデ、ハケ	白色、 砂粒含	良	赤褐色	
437	SC-52	壺 BII	11.2 16.2	「く」字状の口縁部は長く直線的にのびて開く。胴部は肩のはった、球形で、尖底ぎみ。	ヨコナデ、ハケ ハケ目、ナデ、ヘラケズリ	砂粒、金 雲母含	良	明赤褐色	
438	SC-52	鉢 D	12.7 12.8	「く」字状の反りぎみに開く。胴部は扁球形。	ヨコナデ、削り後ナデ 指頭押圧後削りナデ	石粒、金 雲母含	良	赤褐色	
439	SC-52	鉢 D	13.6 2.9 14.8	「く」字状の口縁部は、反りぎみに短く開く。玉葱状の胴部に小さな丸底ぎみの底部がつく。	ハケ目 ヨコナデ、ケズリ	粗砂粒、 雲母含	良	褐色	
440	SC-52	甕 AII	16.4 19.8	口縁部は短く「く」字状に開く。胴部は、はりの強い卵形で凸レンズの平底がつく。	ヨコナデ、ハケ ヨコナデ、ハケ、ナデ	砂粒含	良	赤褐色	スス付着
441	SC-52	甕 AI	18.4 23.5	「く」字状の口縁部は短かめで直線的に開く。胴部は長胴で砲弾形で凸レンズ状の平底がつく。	ヨコナデ、ハケ、ナデ ヨコナデ、ハケ、ナデ	白色砂粒含	良	赤褐色	
442	SC-52	鉢 F	12.5 7.2	体部は半球形で口縁部は小さく内傾し、端部を小さく摘み出す。	ナデ ヨコナデ、指頭押圧後ナデ	細砂粒 雲母含	良	灰黄褐色	
443	SC-52	鉢 E	13.2 13.5	体部は卵形で口縁部は肥厚して小さく内傾する。底部は丸底ぎみ。	ヘラケズリ、ナデ ヘラケズリ後ナデ	砂粒、金 雲母含	良	明赤褐色	黒斑
444	SC-52	鉢 F	15.0 8.0	半球形の体部で口縁部は小さく内傾する。	ヘラケズリ、ナデ ハケ目、ナデ	砂粒、金 雲母含	良	褐色	
445	SC-52	鉢	14.0	体部は皿状の扁平な球形で口縁部は強めに内傾する。	ヘラケズリ後ナデ ヘラケズリ後ナデ	砂粒含	良	橙色	
446	SC-52	鉢 B	16.0	体部は扁平な半球形で、鋭く屈曲した「く」字状の口縁部は短めで直線的に開く。	ナデ ハケ目、ナデ	細砂粒 雲母含	良	赤褐色	スス付着
447	SC-52	高坏	14.4	朝顔状に開く脚部は内弯ぎみ。	指頭押圧後ナデ 指頭押圧後ハケ目、ナデ	砂粒、金 雲母含	良	黄橙色	
448	SC-52	高坏	15.3 13.8 21.6	坏部は下脹れの半球形で短い「く」字状の口縁部は小さく開く。脚部は柱状で裾部は朝顔状に開く。	ハケ目 ハケ目、ナデ	砂粒含	良	褐色	スス付着
449	SC-53	小型壺 BI	9.9 11.5	口縁部は短めで直口ぎみに開く。胴部は扁球形。	ヨコナデ、ハケ ハケ後ヨコナデ指頭押圧ナデ	細砂粒 石英 雲母含	良	橙色	
450	SC-53	甕 AVI	44.5 3.3 15.2	短い「く」字状の口縁部は屈曲が弱く、直口ぎみに外反。胴部は長胴形不明瞭な平底。	指頭押圧後ナデ 指頭押圧後ナデ	細砂粒 石英 雲母含	良	褐色	

Tab.47　土器観察表 (24)

No.	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
451	SC-53	甕 AI	17.9 6.8 27.2	「く」字状の口縁部は反りぎみに開き端部を小さく摘み出す。 胴部は卵形。凸レンズ状の平底。	ヨコナデ、ハケ ハケ目	細砂粒 雲母含	良	橙色	スス付着
452	SC-53	鉢 F	16.7 11.3	体部は半球形で、口縁部は小さく内傾する。	ハケ目 押圧後ハケ目	細砂粒 石英 雲母含	良	褐色	スス付着
453	SC-53	鉢 G	13.2 6.8	口縁部は直口して立ち上がる。 体部はやや扁平な半球形で、不明瞭な底部がつく。	ヘラケズリ、ナデ 指頭押圧後ヘラケズリ、ナデ	砂粒含	良	橙色	
454	SC-54	甕 AIII	12.8 20.5	「く」字状の口縁部は一旦直口した後に、反りぎみに小さく開く。 胴部は肩のはった球形。	ヨコナデ、ハケ目、ナデ ヨコナデ、指頭押圧後ケズリ、ナデ	白色粗 砂粒含	良	赤橙色	スス付着
455	SC-54	甕 BIV	11.8 15.3	「く」字状の口縁部は短く外反する。胴部は肩のはった扁球形で尖底ぎみ。	ヨコナデ、ハケ目、ナデ ハケ目後ヨコナデ、ヘラケズリ	白色砂粒含	良	橙色	
456	SC-54	甕 AIV	13.1 21.3	「く」字状の口縁部は、強く屈曲して内弯ぎみに開き小さく肥厚する。 胴部はやや肩のはった球形。	ヨコナデ、ハケ目、ヨコナデ 押圧後ヘラケズリ	白色砂粒含	良	明赤褐色	スス付着
457	SC-54	甕 AII	17.2 25.5	「く」字状の口縁部は鋭く屈曲して直線的に開く。胴部は肩のはった卵形で底部は尖底。	ヨコナデ、ハケ ハケ目、ナデ、ヘラケズリ	白色砂粒含	良	橙色	スス付着
458	SC-54	鉢 G	15.2 5.9	体部は半球形で口縁部は僅かに直口ぎみに開く。	ヨコナデ、ヘラケズリ 押圧後ハケ目	細砂粒、 雲母含	良	橙色	
459	SC-54	高坏 C	18.0 13.3 12.3	坏部は緩く屈曲して直線的に外方に開く。脚部は直線的にのび裾部は屈曲してラッパ状に開く。	ヨコナデ、ナデ ヨコナデ、ヘラケズリ	細砂粒 雲母含	良	黄橙色	
460	SC-54	鉢 G	15.3 9.7 7.2	坏部はやや扁平な半球形で口縁部は直口ぎみに立ち上がる。 脚部は低くラッパ状。	ヨコナデ、ハケ目ナデ ヨコナデ、ナデ	細砂粒 雲母含	良	橙色	
461	SC-55	甕 AII	13.0	「く」字状の口縁部は短く反りぎみに開き、平坦な端部は中央が凹む。胴部は卵形	ヨコナデ、ハケ ヨコナデ、指頭押圧後ハケ目	白色粗砂粒	良	橙色	
462	SC-55	鉢 F	21.0 10.7	体部は内弯ぎみに立ち上り口縁部は弱く屈曲して短く直線的に開く。 底部は丸底。	ハケ目、ナデ ハケ目、ナデ	白色粗 砂粒含	良	橙色	
463	SC-55	鉢 G	15.0	体部はやや内弯ぎみに大きく外方に開き口縁部は外方に僅かに摘み出す。	ハケ目 ハケ目	白色粗 砂粒含	良	褐色	
464	SC-55	高坏	11.4	脚部は朝顔状に開く。 穿孔。	ハケ目 	砂粒、金 雲母含	良	黄橙色	
465	SC-56	壺 EI	18.0	「く」字状の口縁部は大きく反って外方に開き端部を小さく摘み出す。 胴部は大きく膨らんだ球形。	ヨコナデ、ハケ目後ナデ ヨコナデ、ハケ目後ナデ	白色粗 砂粒含	良	橙色	
466	SC-56	高坏 A	20.4	坏部下半はやや一旦弱く屈曲して小さく直口した後に大きく外反する。	ヨコナデ、ハケ ヨコナデ、研磨	砂粒含	良	橙色	
467	SC-57	壺 AI	12.0 4.0 20.1	二重口縁。朝顔状に開いた口縁部は、一旦屈曲して稜を作った後に短かく直線的に内傾する。胴部は肩のはった玉葱状で下半に凸帯が巡り小さな平底状の底部がつく。	ナデ、ハケ目、研磨（暗文） ハケ目、ナデ	白砂粒金 雲母含	良	明赤褐色	黒斑
468	SC-57	甕 AVI	14.9	口縁部は弱く屈曲して一旦短く直口した後に外反する。 胴部は長胴形。	ヨコナデ、ヘラケズリ、ナデ ヨコナデ、指頭押圧後ナデ	砂粒、金 雲母含	良	赤褐色	
469	SC-57	鉢 D	13.3	「く」字状の口縁部は、反りぎみに短く開く。胴部は玉葱状の扁球形で肩部は尖底ぎみ。	ハケ目後ナデ ヨコナデ指頭押圧後ナデ	細砂粒 雲母含	良	黄橙色	

Tab.48　土器観察表 (25)

No.	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
470	SC-57	鉢 F	25.0	体部は半球形で直口して立ち上がる。口縁部は端部を水平に整え外方に小さく摘み出す。	ヨコナデ、ハケ ハケ目	白色砂粒含	良	赤褐色	
471	SC-57	高坏 A	17.3	脚裾部はラッパ状に大きく開く。	研磨、ハケ目 ヘラケズリ、ハケ	砂粒含	良	褐色	
472	SC-57	高坏 A	20.4	脚部は大きくラッパ状に開く。	ハケ目後研磨 ヘラケズリ、ハケ目	細砂粒、 雲母含	良	褐色	
473	SC-58	壺 BI	8.1 17.8	口縁部は短めでラッパ状に開く。 胴部は玉葱状の扁球形。	研磨、ハケ目 ヨコナデ、 指頭押圧後ナデ	微細砂粒、 石英、雲母含	良	橙色	スス 付着
474	SC-58	甕 AI	18.8	「く」字状の口縁部は強く屈曲して直線的に開く。 胴部は長めの卵形。	ヨコナデ、ハケ ハケ目、ナデ	白色粗 砂粒含	良	褐色	スス 付着
475	SC-58	鉢 F	11.4 2.5 9.7	体部は半球形で口縁部は小さく内傾し、小さな底部がつく。	ナデ、押圧 指圧後ヘラケズリ、 ナデ	石英、金 雲母含	良	灰黄褐色	
476	SC-58	鉢 G	14.6 7.4	体部は半球形で、直口ぎみに立ち上がる。口縁部は端部を整える。	ヨコナデ、 ヘラケズリ 押頭押圧後ナデ	砂粒含	良	橙色	
477	SC-58	鉢 G	16.2 6.1	体部は半球形で、内弯ぎみに大きく開く。	ナデ、ハケ目 ハケ目後ナデ	石英金 雲母含	良	橙色	
478	SC-58	鉢 C	23.3 14.9 17.7	坏部は半球形で頸部は直口ぎみに立ち上がって緩く屈曲し、大きく外反。鉢型。脚部は低くラッパ状。	ヨコナデ、ハケ目 ハケ目、ナデ	砂粒含	良	橙色	
479	SC-58	鉢 B	20.9	坏部は扁平な半球形で、頸部は小さく内傾し、口縁部は短く直線的に開く。	ナデ 押圧、ナデ	砂粒含	良	褐色	炭化物 付着
480	SC-58	高坏 B	10.6	坏部は下半で強く屈曲して直口した後大きくなって開く。 脚部は細く短い。	ヨコナデ、ハケ目 ハケ目後研磨、ナデ	金雲母含	良	橙色	
481	SC-59	壺 C	10.0	頸部は直口して立ち上がり口縁部は小さく外反する。平坦に整えた端部は外傾し小さく摘み出す。胴部はやや肩がはる。	ナデ、ハケ目 指頭押圧後ハケ目、 ナデ	白色粗 砂粒含	良	橙色	
482	SC-59	壺 E	14.0 14.6	口縁部は内傾ぎみに短く直口する。 胴部は玉葱状の扁球形。	ハケ目 ハケ目後ナデヘ ラケズリ	細砂粒 石英、 雲母含	良	橙色	
483	SC-59	甕 AII	16.3	口縁部は「く」字状に外反する。 胴部はやや肩のはった球形で尖底状の小さな底部がつく。	ハケ目 ヘラケズリ	金雲母含	良	橙色	スス 付着
484	SC-59	甕	13.3 2.1 13.7	頸部は内傾ぎみに直口して緩く屈曲し、口縁部は「く」字状に開く。胴部は玉葱状の扁球形で尖底状の底部がつく。	ハケ目、タタキ、 ヘラケズリ ハケ目後ナデ	砂粒、 雲母含	良	明褐色	
485	SC-59	甕 AII	12.6	「く」字状の口縁部は短めで小さく外反する。 胴部はやや肩がはる。	ハケ目 ハケ目	粗砂粒 石英、金 雲母含	良	橙色	
486	SC-59	甕 AII	15.2 19.8	「く」字状の口縁部は強く屈曲して大きく外反する。 胴部は短めの卵形で尖底ぎみ。	ナデ ヨコナデ、ハケ目	白色砂粒含	良	明赤褐色	
487	SC-59	壺 AIII	14.9 28.3	口縁部は僅かに膨らんで直口ぎみに小さく開く。平坦に整えた端部は外傾し、小さく摘み出す。胴部はやや肩のはった球形。	ハケ目後ナデ ハケ目、ナデ、 ヘラケズリ	白色粗 砂粒含	良	橙色	スス 付着
488	SC-59	鉢 B	17.8 15.4 15.8	坏部は扁平な球形をした鉢状で口縁部は短く「く」字状に外反する。 胴部は低くラッパ状に開く。	ハケ目、ナデ ハケ目、ナデ	精良	良	赤褐色	スス 付着

Tab.49　土器観察表 (26)

No.	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
489	SC-59	鉢 F	8.9 5.3	体部は半球形で小さく内傾する。口縁部は小さく摘み出す。底部は小さな平底。	ハケ目、ナデ ハケ目、ナデ	金雲母含	良	赤褐色	
490	SC-59	鉢 G	17.0 5.9	体部は内弯ぎみに大きく外方に開く。	ハケ目 ハケ目、ナデ	細砂粒、雲母含	良	橙色	
491	SC-59	鉢 F	14.3 10.7	体部は半球形で口縁部は小さく内傾し、水平に整えた端部は、小さく摘み出す。	ナデ、ヘラナデ 押頭押圧後ナデ	細砂粒、雲母含	良	橙色	
492	SC-59	鉢 F	12.8 4.1 6.6	体部は半球形で口縁部は直口する。底部は凸レンズ状の平底	ナデ ナデ	細砂粒 雲母含	良	橙色	黒ずみ
493	SC-59	高坏 C	18.0	坏部は下半で緩く屈曲し反りぎみに、大きく開く。	ナデ ナデ	細砂粒、雲母含	良	橙色	
494	SC-60	壺 EII	13.8 6.1 18.0	「く」字状の口縁部は緩く屈曲して反りぎみに開く。胴部は卵形で大きめの平底がつく。	ハケ目 ハケ目、ナデ	石英、金雲母含	良	橙色	
495	SC-60	壺 EII	13.0 7.0 20.0	「く」字状の口縁部は短く折り曲げるように外反する。胴部は肩のはった卵形で、大きめの底部がつく。	ナデ、ハケ目 ハケ目、押圧後ナデ	白色砂粒含	良	橙色	
496	SC-60	壺 EI	14.3	口縁部は直口した後小さく外反し更に端部を摘み上げ小さく直口させる。胴部は肩のはった卵形。	ハケ目 押圧後ハケ目、ナデ	白色粗砂粒含	良	橙色	スス付着
497	SC-60	甕 AI	18.5	「く」字状の口縁部は反りぎみに開く。端部に刻み目を施す。胴部は長胴形。	ハケ目、タタキ ハケ目	石粒、金雲母含	良	黄橙色	
498	SC-60	甕 AI	2.9	砲弾形の胴部に小さな平底がつく。	ハケ目 ハケ目	白色粗砂粒金雲母含	良	黄橙色	
499	SC-60	甕 AI	20.2 5.2 30.3	「く」字状の口縁部は反りぎみに大きく開く。胴部は卵形で凸レンズ状の平底がつく。	ヨコナデ、ハケ目 ヨコナデ、指頭押圧後ハケ目	白色小砂粒含	良	赤色	
500	SC-60	鉢 G	16.5 7.1	体部は半球形で、口縁部は小さく直口する。	ハケ目、ナデ ナデ	石粒含	良	褐色	黒斑
501	SC-60	鉢 F	16.8 4.9 10.3	体部は半球形。口縁部は端部を水平に整え小さく摘み出す。凸レンズ状の小さな平底がつく。	ハケ目後粗い研磨 ヨコナデ、ハケ目後研磨	白色小砂粒含	良	明赤褐色	
502	SC-60	高坏 A	24.6	坏部は内弯ぎみに立ち上がり、上位で緩く屈曲した口縁部は直線的に開く。脚部は細い。	ハケ目後ナデ、ハケ目 ナデ、ハケ目	粗砂粒含	良	褐色	
503	SC-60	高坏 A	24.6	坏部は内弯ぎみに立ち上がり口縁部は緩く屈曲して開く。平坦に整えた端部は中央が凹み小さく摘み出す。	研磨、ハケ目 ハケ目	黒色微砂粒含	良	赤褐色	
504	SC-60	高坏 A	23.8 14.4 18.6	坏部は内弯ぎみに立ち上がり厚手の口縁部は緩く屈曲して反りぎみに開く。脚部は細長く裾部はラッパ状に開く。	ヨコナデ、ハケ目、ナデ ナデ（研磨）ハケ目	砂粒含	良	赤褐色	
505	SC-62	手捏 D	6.8 5.0	鉢形。体部は膨らみ口縁部は小さく直口する。底部は尖底状。	指頭押圧ナデによる手捏形	砂粒含	良	褐色	
506	SC-64	甕 AII	14.0	「く」字状の口縁は小さく外反する。胴部はやや肩のはった球形。	ハケ目、ナデ ハケ目、ナデ	白色砂粒含	良	橙色	
507	SC-65	壺 EII	10.8 3.7 14.9	口縁部は屈曲して短く外反し折り曲げるようにして内面を水平にする。胴部は肩のはった球形平底。	ヨコナデ、ハケ目、ヘラケズリ ヨコナデ、押圧後ヘラケズリ、ナデ	石粒、金雲母含	良	明赤褐色	

Tab.50　土器観察表 (27)

No.	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
508	SC-65	壺 AI	18.8	二重口縁。口縁部は短く外反した後、一旦屈曲して短く直口する。胴部は卵形。	ヨコナデ、ハケ目 ハケ目	白色砂粒色	良	明赤褐色	
509	SC-65	甕 AI	18.0 5.7 28.4	「く」字状の口縁部は短く外反する。胴部は卵形で凸レンズ状の平底がつく。	ヨコナデ、ハケ目 ハケ目、ナデ	白色小砂粒含	良	明褐色	
510	SC-65	高坏 A	30.0	坏部は内弯ぎみに立ち上がり、口縁部は屈曲して大きく外反する。	研磨(暗文様) 研磨(暗文様)	白色小砂粒含	良	橙色	
511	SC-65	高坏 A	17.9	脚部は細長く、裾部はラッパ状に開く。	研磨、ナデ ナデ、ヘラケズリ	細砂粒石英、雲母含	良	橙色	丹彩
512	SC-65	高坏 A	31.5 17.4 27.5	坏部は内弯ぎみに開き、口縁部は緩く屈曲して、稜を作り大きく外反する。脚部は細長く裾部はラッパ状。	ナデ ハケ目後ナデ、ケズリ、ハケ目	砂粒、金雲母含	良	橙色	
513	SC-65	器台 B	6.5	小さく盃状。 体部は内弯ぎみに外方に開く。	ハケ目 ハケ目、ナデ	砂粒、金雲母含	良	褐色	
514	SC-68	甕 AII	14.7	「く」字状の口縁部は短めで反りぎみに開く。 胴部は肩のはった球形。	ヨコナデ、ハケ目 ハケ目、押圧ナデ	微砂粒含	良	橙色	
515	SC-68	高坏	14.3	脚部は短くラッパ状に開く。	ハケ目 ナデ、ハケ目	白色砂粒含	良	橙色	
516	SC-71	甕 AI	23.6 6.6 34.0	「く」字状の口縁部は反りぎみに開き、外傾する端部を小さく摘み出す。胴部は砲弾形で、凸レンズ状の平底。	ヨコナデ、ハケ目 ハケ目	白色砂粒含	良	橙色	
517	SC-71	甕 AII	12.8	「く」字状の口縁部は短く直口ぎみに開き、端部を小さく摘み出す。胴部はやや肩のはった球形。	ハケ目、ナデ ヨコナデ、ヘラケズリ	白色砂粒含	良	橙色	
518	SC-71	器台 A	8.4 9.9 13.0	受け部は短く外反する。 脚部は細めの筒状で裾部は短く反りぎみに開く。	ナデ、ハケ目 ハケ目、ヘラケズリ	細砂粒含	良	赤褐色	
519	SC-71	器台 A	8.2	脚裾部は小さくラッパ状に開く。	指頭押圧ナデ 指頭押圧ナデ	細砂粒、雲母含	良	橙色	淡黒斑
520	SC-71	器台 A	9.3	脚部は長めの筒状で裾部は緩く屈曲して小さく外反する。	ハケ目 ハケ目、ヘラケズリ	細砂粒、石英含	良	橙色	
521	SC-72	壺 F	13.0	口縁部は短く直線的に小さく開き、端部は雫状に小さく膨らむ。 胴部は肩のはった扁平な玉葱状。	ハケ目 ハケ目、ヘラケズリ	砂粒、金雲母含	良	黄橙色	
522	SC-72	小型壺 BIII	8.6 9.1	「く」字状の口縁部は緩く屈曲して反りぎみに開く。 胴部は扁球形。	ナデ ナデ	灰色粒含	良	黄橙色	
523	SC-72	鉢 G	17.3 5.6 6.9	体部は内弯ぎみに大きく開く。 口縁部は小さく直口する。底部は凸レンズ状の平底。	ヨコナデ、ハケ目 ナデ	白黒色砂粒含	良	橙色	
524	SC-73	甕 AI	16.8	「く」字状の口縁部は短く外反する。胴部は長胴形。	ハケ目、ナデ ハケ目、ナデ	砂粒、石英含	良	橙色	
525	SC-73	手捏 D	7.0 3.1 4.6	体部は厚く、内弯ぎみに開く。	押圧ナデ 押圧ナデ	砂粒、石英含	良	赤褐色	黒ずみ
526	SC-73	器台 A	10.5	脚部は小さくラッパ状	ナデ ナデ、ヘラケズリ	細砂粒、金雲母含	良	橙色	

Tab.51　土器観察表 (28)

No.	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
527	SC-73	高坏 A	21.9	脚部は細長く、裾部は内弯ぎみにラッパ状に開く。 穿孔。	ハケ目後ナデ ヘラケズリ、ナデ、ハケ目	細砂粒、金雲母含	良	赤色	
528	SC-74	壺 BI	12.2 17.2	「く」字状の口縁部は長く反りぎみに開く。 胴部は球形。	ヨコナデ、ハケ目、ナデ 指頭押圧後ナデ	白色砂粒含	良	橙色	
529	SC-74	壺 EI	15.0	「く」字状の口縁部は折り曲げるように外反し、平坦に整えた端部は小さく摘み出す。 胴部は肩のはった卵形。	ヨコナデ、ハケ目 ハケ目	白色砂粒含	良	浅黄橙色	スス付着
530	SC-74	壺 AI	19.0	二重口縁。朝顔状に開いた口縁部は強く屈曲して反りぎみに鋭く内傾し、更に端部を摘み出すようにして反転直口させる。 頸部に三角凸帯が1条巡る。	ナデ、ハケ目 ナデ、ハケ目	白色砂粒含	良	橙色	
531	SC-74	甕 AIV	17.4 25.4	「く」字状の口縁部は強く屈曲して内弯ぎみに開き、端部は雫状に膨らむ。胴部は卵形で尖底。	ハケ目後ナデ ナデ、ヘラケズリ	白色砂粒含	良	橙色	
532	SC-74	高坏	16.1	坏部は扁平な半球形で、口縁部は小さく直口する。	ヨコナデ、ハケ目 研磨、ナデ	細砂粒、雲母含	良	明赤褐色	
533	SC-80	甕	13.6 7.3 13.0	「く」字状の口縁部は短く直線的に開く。胴部は下脹れの球形で大きめの平底がつく。	ヨコナデ、ハケ目 ヨコナデ、ヘラケズリ	砂粒含	良	暗褐色	
534	SC-80	壺 F	12.3 12.5	「く」字状の口縁部は短く外反する。胴部は球形。	ヨコナデ、ハケ、ヘラケズリ ヨコナデ、ヘラケズリ	石英含	良	褐色	スス付着
535	SC-81	壺 EII	14.0 7.1 29.6	口縁部は直口して立ち上がった後、緩く屈曲して短く外反する。胴部は卵形で凸レンズ状の平底がつく。	ナデ、ハケ目 ナデ、ハケ目	白色微砂粒含	良	橙色	
536	SC-81	壺 EI	19.0	「く」字状の口縁部は大きく外反する。端部に刻み目を施す。胴部は卵形。	ヨコナデ、ハケ目 ハケ目、押圧後ナデ	白色砂粒含	良	橙色	スス付着
537	SC-81	甕 AI	20.4 7.7 31.4	「く」字状の口縁は反りぎみに開き、端部を平坦に整える。胴部は長卵形で凸レンズ状の平底がつく。	ヨコナデ、ハケ目 ヨコナデ、ハケ目後ナデ	白色砂粒含	良	黄橙色	
538	SC-81	鉢 A	25.5 9.2 20.2	厚い「く」字状の口縁部は、反りぎみに開き平坦な端部は中央が凹み外に小さく摘み出す。 胴部は扁平な半球形で凸レンズ状の平底がつく。	ヨコナデ、ハケ目 ヨコナデ、ハケ目後ナデ	白色小砂粒含	良	橙色	
539	SK-97	壺 C	11.0 19.5	口縁部は直口して立ち上がった後、緩く外反し、外傾する口縁端部は内に小さく摘み出す。胴部は球形で凸レンズ状の平底がつく。	ハケ目、ナデ ハケ目後ナデ	白色小粒含	良	明赤褐色	
540	SK-03	壺 C	7.0 18.8	口縁部は直口して立ち上がる。 胴部は肩のはった扁球形で、凸レンズ状の平底がつく。	ハケ目 指頭押圧後ハケ目、ナデ	白色石粒含	良	赤褐色	
541	SK-94	壺 E	10.2 7.5 14.7	口縁部は、短く直口ぎみに開く。 胴部は球形で凸レンズ状の平底がつく。	ハケ目 ハケ目	白色小粒多含	良	橙色	
542	SK-110	壺		胴部は砲弾状に膨らんで立ち上がり中位で緩く屈曲して、反りぎみに小さく内傾する。 底部は凸レンズ状の小さな平底。	ハケ目後ナデ 指頭押圧後ハケ目、ナデ	白色小粒含	良	橙色	
543	SK-120	壺 AIV	21.3 7.0 34.5	二重口縁。口縁部は、一旦短く朝顔状に開いた後、屈曲して反りぎみに開く。胴部は肩のはった球形。	ハケ目 ハケ目	粗砂粒含	良	橙色	
544	SK-110	甕 AI	14.0 3.0 23.6	「く」字状の口縁部は短く外反する。胴部は卵形で尖底ぎみの小さな底部がつく。	ハケ目、ナデ 指頭押圧後ハケ目、ナデ	灰白色石粒含	良	橙色	
545	SK-106	甕 AI	16.4 6.7 20.6	「く」字状の口縁部は短く外反し、端部は雫状に小さく膨らむ。胴部は卵形で凸レンズ状の平底がつく。	ヨコナデ、ハケ目 ハケ目後ナデ	白色小粒少含	良	赤褐色	スス付着

Tab.52　土器観察表 (29)

No.	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
546	SK-101	甕 AI	16.6 18.4	「く」字状の口縁部は反りぎみに開き外傾する。平坦な端部は中央が凹む。胴部は卵形で底部は尖底ぎみ。	ハケ目、ナデ ハケ目、ナデ	灰色小粒多含	良	橙色	部分的に黒っぽい
547	SK-93	甕 AVI	16.6 6.0 16.8	口縁部は短く直線的に開く。胴部は厚手の砲弾形で凸レンズ状の平底がつく。	ヨコナデ、ハケ目 ナデ	白色石粒多含	良	黄橙色	スス付着
548	SK-28	甕 AI	16.6 5.6 22.4	「く」字状の口縁部は反りぎみに開き、平坦な端部は外傾する。胴部は卵形で凸レンズ状の平底がつく。	ヨコナデ、ハケ目 指頭押圧後ハケ目、ナデ	石英粒含	良	赤褐色	スス付着
549	SK-38	甕 AV	19.7 8.4 21.0	「く」字状の口縁部は短く外反し、肥厚した端部は水平に整える。胴部は扁平な卵形で、平底の底部。	ヨコナデ、ハケ目 ハケ目、ナデ	白色石粒含	良	明黄褐色	
550	SK-86	甕 AV	17.0 7.0 22.8	「く」字状の口縁部は短く外反する。胴部はやや肩のはった厚手の卵形で底部は平底。	ヨコナデ、ハケ目 ナデ	白色石粒多含	良	黄橙色	
551	SK-96	高坏 C	19.5 13.0 13.2	坏部は、下半に弱い凹線状の段を作り大きく外反する。脚部は、ラッパ状にのび、裾部は、屈曲して短く開き、端部は水平になる。	ナデ、ハケ目 ナデ、ヘラケズリ	白、灰色小石粒含	良	赤褐色	
552	SK-106	鉢 G	9.5 5.1	体部は半球形で、口縁部端を直口ぎみに小さく摘み上げる。	指頭押圧 押圧ナデ	灰色砂粒含	良	褐色	
553	SK-110	鉢 G	10.7 4.7	体部は半球形で、直口ぎみの口縁部は小さく外方に開く。	ハケ目後ナデ ハケ目	白色小粒多含	良	明赤褐色	スス付着
554	SK-61	鉢 G	12.1 3.4 5.2	体部は僅かに膨らんで、大きく開く。底部は平底。	ハケ目 ハケ目	白色粒少含	良	赤褐色	
555	SK-103	鉢 F	13.2 4.0 7.6	体部は砲弾状に膨らみ、直口ぎみの口縁部は、僅かに開く。底部は凸レンズ状の平底。	研磨 研磨	精良	良	橙色	
556	SK-110	鉢 G	15.8 7.0	体部は半球形で、内弯ぎみに立ち上がる。器壁は厚い。底部は、凸レンズ状の平底。	研磨 研磨	白色粒多含	良	褐色	スス付着
557	SK-92	鉢 G	18.6 5.5 7.8	口縁部は、短く緩く屈曲して小さく開く。胴部は、短い砲弾状で底部は厚い平底。	ハケ目 ナデ	白色石粒多含	良	橙色	部分的に黒っぽい
558	SK-86	鉢 A	15.8 5.8 10.8	口縁部は、短く緩く屈曲して小さく開く。胴部は、短い砲弾状で底部は厚い平底。	ハケ目 ナデ	白色石粒多含	良	橙色	
559	SK-12	須恵器 坏蓋	15.6 3.1	体部は平坦で扁平な乳頭状のつまみがつく。身受けの立ち上がりは低い。	ケズリ、ヨコナデ ナデ	精良	良	灰黄色	
560	SK-12	須恵器 坏蓋	14.1 2.9	平坦な天井部に扁平なつまみがつく。身受けは短く直口に立ち上がる。	ケズリ、ヨコナデ ナデ	白色石粒含	良	白黄色	
561	SR-126	壺 BI	8.9	口縁部は短めでラッパ状に開く。胴部は肩のはった玉葱状。	ハケ目、研磨 指頭押圧後ナデ	砂粒含	良	橙色	
562	SR-127	小型壺 BIII	5.5 2.0 7.3	「く」字状の口縁部は長めで直線的に開く。胴部は球形で小さな平底の底部がつく。	ハケ目、ナデ 指頭押圧後ナデ	小砂粒・雲母含	良	橙色	
563	SR-266	小型壺	2.6	胴部は、扁平な玉葱状で小さな平底の底部がつく。	ナデ、ハケ目 指頭押圧後ナデ	砂粒、雲母含	良	橙色	
564	SR-122	小型壺 BIII		「く」字状の口縁部は、やや長めで反りぎみに開く。胴部は球形。	ヨコナデ、ハケ目 指頭押圧後ナデ	白色小粒多含	良	黄橙色	

Tab.53　土器観察表 (30)

No.	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
565	SR-152	鉢 D	10.4 8.8	「く」字状の口縁部は短く外反する。胴部は、扁平な玉葱状。	ハケ目、ナデ 指頭押圧後ナデ	砂粒多含	良	橙色	
566	SR-149	小型壺 BV	11.6 11.8	「く」字状の口縁部は長めで反りぎみに開く。胴部は、やや肩のはった球形で尖り底ぎみ。	ヨコナデ、ハケ目 ナデ	砂粒含	良	橙色	
567	SR-235	小型壺 BIV	10.8	口縁部は、直口ぎみに小さく開く。胴部は、やや肩のはった球形。	ヨコナデ、ハケ目 指頭押圧後ナデ	灰白 小石粒 多含	良	橙色	
568	SR-150	小型壺 BIV	10.3 14.7	「く」字状の口縁部は長めで小さく開く。 胴部は球形。	ハケ目、ナデ 指頭押圧後ナデ	白色小 粒少含	良	橙色	
569	SR-137	壺 F	11.0 3.4 12.9	口縁部は短く「く」字状に外反する。胴部は、扁平な玉葱状で、小さな底部がつく。	ハケ目後研磨 押圧ナデ	白色細 粒少含	良	橙色	スス 付着
570	SR-267	壺		頸部に巡る1条三角凸帯を挟んで、竹管文を2段施文する。 胴部は卵形。	ハケ目 ハケ目	砂粒含	良	橙色	
571	SR-14	甕 C	17.6	二重口縁。短く「く」字状に外反した口縁部は一旦、屈曲して小さく反りぎみに開く。外面に櫛描波状文を施す。	ヨコナデ ヨコナデ、ハケ目	白色小 粒少含	良	橙色	
572	SR-242	壺		頸部に三角凸帯が1条巡り、肩部には竹管文を施すが全周しない。 胴部は、卵形。	ハケ目 ナデ	白、灰色 小粒含	良	褐色	
573	SR-242	壺	6.0	底部は、凸レンズ状の平底で胴部は、内弯ぎみに立ち上がる。 574と同一個体か？	ハケ目 ナデ	白灰色 小粒含	良	褐色	
574	SR-34	甕 AV	16.3 6.1 20.8	「く」字状の口縁部は短く外し、端部を平坦に整える。 胴部は球形で、底部は厚手の平底。	ナデ ナデ	白色石 粒多含	良	橙色	
575	SR-283	壺 DI	9.4	直口する口縁部は長めで端部は水平。 胴部は、やや肩のはった球形。	タタキ後ハケ目 ハケ目	砂粒金 雲母含	良	橙色	
576	SR-93	壺 F	11.9 15.2	直口ぎみの口縁部は小さく開き外傾する端部は中央が凹む。 胴部は、やや肩のはった扁球形。	ハケ目後ナデ ナデ	白色小 粒少含	良	橙色	
577	SR-12	壺 F	14.6 8.8 16.1	「く」字状の口縁部は短く外反する。胴部は、やや肩のはった球形で底部は平底。	指頭押圧後ハケ 指頭押圧後ハケ	石英、金 雲母含	良	橙色	黒斑
578	SR-01	甕	7.6	胴部は卵形で、底部は平底。	ハケ目 ハケ目後ナデ	白色石 粒多含	良	橙色	
579	SR-34	壺 EI	12.0	「く」字状の口縁部は短く外反する。 胴部は、肩のはった卵形。	ハケ目、ケズリ ハケ目、指頭押圧後ナデ	砂粒、金 雲母含	良	橙色	
580	SR-129	壺 AI	26.0	朝顔状に開いた口縁部は、凸帯様に張り出した後、鋭く屈曲して内傾し更に直交ぎみに摘み出す。 口縁部はに刻み目を施し頸部に三角凸帯が巡る。	ハケ目 ハケ目	白色石粒含	良	橙色	
581	SR-137	壺 AI	7.6	胴部は、やや扁平な卵形で、最大径部に三角凸帯が1条巡る。 底部は、平底で穿孔あり。	ハケ目、ナデ ハケ目、ナデ	白色粒多含	やや 良	橙色	
582	SR-137	壺 AI	7.6	胴部はやや扁平な卵形で最大径部に刻み目を施した三角凸帯が1条巡る。 底部は、平底。	ハケ目、ナデ ハケ目	白色石 粒多含	良	橙色	
583	SR-220	壺 AI	7.6	胴部は、やや扁平な卵形で最大径部に刻み目を施した三角凸帯が1条巡る。底部は、凸レンズの平底。	ハケ目 ハケ目、ナデ	石英、 小粒含	良	橙色	

Tab.54　土器観察表 (31)

No.	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
584	SR-137	壺 AI	7.6	胴部は、卵形。 底部は、凸レンズ状の平底で厚手。	ハケ目 ハケ目、ナデ	白色粒多含	良	橙色	
585	SR-142	壺 AI	8.6	胴部は肩のはった卵形。 底部は平底。	ハケ目後ナデ ハケ目	小白石粒少含	良	橙色	
586	SR-142	壺 AI	7.6	胴部は卵形で、底部は平底。	ハケ目 ハケ目	精良	良	橙色	
587	SR-78	壺 AI	9.3	胴部は卵形。 底部は厚手の平底。	ハケ目、ナデ ナデ	白小砂粒少含	良	橙色	
588	SR-24	甕 AI	12.3	「く」字状の口縁部は、反りぎみに開く。 胴部は卵形。	ハケ目 ハケ目、ナデ	白色小粒多含	良	褐色	
589	SR-84	甕 AI	14.6	「く」字状の口縁部は、短く外反。外傾する平坦な端部は中央がやや凹む。胴部は砲弾形。	ヨコナデ、ハケ目 ハケ目	白灰色粒含	良	褐色	
590	SR-242	甕 AI	16.0	「く」字状の口縁部は、短く外反する。 胴部は、厚く、卵形。	タタキ ナデ	白色石粒多含	良	褐色	
591	SR-242	甕 AI	17.4	「く」字状の口縁部は短く外反する。 胴部は、厚手の砲弾形。	タタキ ナデ	白色石粒含	良	褐色	
592	SR-83	甕 AI	18.4	「く」字状の口縁部は反りぎみに開き平坦な端部は小さく摘み出す。胴部砲弾形。	ハケ目、ナデ ハケ目	白色小粒含	良	橙色	スス付着
593	SR-37	甕 AI	15.8 2.4 19.5	「く」字状の口縁部は直線的に開き端部を小さく摘み出す。胴部は砲弾形で、小さな底部がつく。	ハケ目 ハケ目、ナデ	白色石粒多含	良	橙色	スス付着
594	SR-61	甕 AI	12.8 11.0 29.5	口縁部は、平坦な端部を小さく直に摘み上げる。胴部は、卵形。底部は厚く大きめの平底。	ハケ目、ナデ ハケ目後ナデ	白色小粒多含	良	黄橙色	
595	SR-14	甕 AI	18.0	「く」字状の口縁部は、内弯ぎみに開く。 胴部は、卵形で、線刻文がみられる。	タタキ後ハケ目 ハケ目、ナデ	砂、粗砂多含	良	明黄褐色	
596	SR-74	甕 AI	23.0 7.1 32.3	「く」字状の口縁部は、反りぎみに開く。胴部は卵形で底部は平底。肩部に線刻文がみられる。	ハケ目 ハケ目後ナデ	白色小石砂多含	良	橙色	スス付着
597	SR-14	甕 AI	18.3 6.8 29.7	「く」字状の口縁部は、大きく外反する。胴部は、卵形で凸レンズ状の平底がつく。	ハケ目 ハケ目	白色小粒少含	良	橙色	
598	SR-01	甕 AI	27.0 10.0 43.2	「く」字状の口縁部は反りぎみに開き平坦に整えた端部は小さく摘み出す。胴部は、長胴形で平底の底部に穿孔。	ハケ目 ハケ目後ナデ	白色小粒多含	良	橙色	
599	SR-134	甕 AI	20.4 5.8 33.4	「く」字状の口縁部は内弯ぎみに開く。 胴部は、長胴形で、底部は、平底。	ハケ目、ナデ ナデ	白色粒含	良	橙色	
600	SR-122	甕 AVI	16.6 9.0 23.7	「く」字状の口縁部は、短く外反する。胴部は、肩のはった卵形。 底部は大きめの平底。全体に厚手。	ハケ目 ナデ	白色粒含	良	黄橙色	
601	SR-94	甕 AI	18.1 7.3 22.0	「く」字状の口縁部は短く開く。 胴部は卵形。 凸レンズ状の平底はやや大きめ。	ハケ目 ハケ目後ナデ	白色小粒多含	良	橙色	
602	SR-78	甕 AI	19.5 8.3 26.7	「く」字状の口縁部は短く外反する。胴部は卵形で底部は凸レンズ状の平底。全体に厚手。	ハケ目、ナデ ハケ目後ナデ	白色石粒含	良	浅黄橙	

Tab.55　土器観察表 (32)

No.	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
603	SR-153	甕 AI	27.6 32.4	「く」字状の口縁部はやや反りぎみに開く。胴部は卵形。全体に厚手。	ハケ目 ハケ目、ナデ（下に指頭痕）	白色粒多含	良	橙色	
604	SR-123	甕 AI	29.0 9.0 36.7	「く」字状の口縁部は内弯ぎみに短く開き、端部を小さく摘み出す。胴部は卵形。平底の底部に穿孔。	ハケ目 ハケ目後ナデ	石粒多含	良	橙色	
605	SR-122	手捏 D	8.8 3.1 5.3	体部は内弯して立ち上がり口縁部は小さく内傾する。底部は凸レンズ状の平底。	指頭押厚後ハケ 指頭押厚後ハケ	砂粒含	良	橙色	黒斑
606	SR-15	手捏 D	10.2 5.6	体部は半球形で口縁部は直口する。	指頭押圧後ハケ目、ナデ ハケ目	白色小粒少含	良	橙色	スス付着
607	SR-139	手捏 D	9.5 4.4 6.1	体部は直線的に開き、口縁部は小さく直口する。底部は平底。全体に厚手。	指頭押圧後ナデ 指頭押圧後ナデ	石英含	良	橙色	
608	SR-101	手捏 D	12.0 4.4 7.0	体部は内弯ぎみに開き、口縁部は小さく直口する。底部は平底。	指頭押圧後ハケ 指頭押圧後ナデ	砂粒、石英多含	良	橙色	
609	SR-237	手捏 D	10.0 4.8 7.4	体部は直線的に開き平坦な端部は小さく摘み出す。底部は凸レンズ状の平底。	ハケ目 ハケ目	白・灰色粒多含	良	橙色	外・縦方向に小さいヒビわれあり
610	SR-122	鉢 F	14.8 5.4 7.3	体部は膨らみぎみに大きく開き、端部は平坦に整える。底部は凸レンズ状の平底。	ハケ目 ナデ、ヘラケズリ	精良	良	橙色	スス付着
611	SR-15	鉢 A	11.6 5.4 10.0	口縁部は小さく内傾した後、反りぎみに開く。体部は扁平な半球形で底部は大きめの平底。	ハケ目 ナデ	精良	良	橙色	
612	SR-266	鉢 E	14.0	内傾した口縁部は端部を平坦に整える。	タタキ・ハケ目 ハケ目	砂粒含	良	明赤褐色	
613	SR-48	鉢 G	19.4 6.3 7.2	体部は内弯ぎみに大きく開き、端部は小さく摘み出す。底部は凸レンズ状の平底。	ハケ目、ケズリ ハケ目	精良	良	明赤褐色	口縁部が部分的に黒い
614	SR-203	鉢 G	15.0 6.0 8.5	体部は半球形で直口する口縁部は小さく摘み出す。	ハケ目 ハケ目、指頭押圧	白・茶色小粒多含	良	橙色	黒斑
615	SR-122	鉢 B	16.8 8.1	口縁部は弱く屈曲して、短く外反する。体部は半球形で開きぎみに立ち上がる。	ハケ目 ハケ目、ナデ	白色微粒多含	良	橙色	
616	SR-176	鉢 C	19.1 5.4 8.2	口縁部は大きく外反する。体部は扁平な球形。平底の底部は厚く高い。	ハケ目、ナデ ハケ目	白色小粒含	良	赤褐色	
617	SR-211	鉢 B	20.0 8.4 11.2	「く」字状の口縁部は長めで、反りぎみに開く。体部は扁平な玉葱状で凸レンズ状の平底がつく。	ナデ ナデ	白色小粒多含	良	黄橙色	
618	SR-22	鉢 A	29.4 8.0 28.7	「く」字状の口縁部は短く外反する。体部は扁平な卵形で凹レンズ状の平底がつく。全体に厚手。	ハケ目 ハケ目	白色小石粒含	良	黄橙色	
619	SR-153	高坏 A	32.3	坏部は浅く口縁部は緩く屈曲して反りぎみに開く。	ハケ目 ナデ	石英粒含	良	橙色	外面に暗文
620	SR-131	器台 A	12.2 11.8 15.2	受け部は小さく反りぎみに開く。脚部は筒状で裾部はラッパ状に開き内に小さく摘み出す。	ナデ ナデ	白色小粒含	良	橙色	
621	SR-60	皿	8.6 7.3 1.4	体部は直線的に短く開く。底部は糸切り。	ヨコナデ ナデ	砂粒、金雲母含	良	橙色	

Tab.56　土器観察表 (33)

No.	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
622	SR-148	蛸壺	5.8 9.1	体部は砲弾形で、口縁部は小さく内傾する。 体部上位に内より穿孔	指頭押圧後ナデ 指頭押圧後ナデ	砂粒含	良	橙色	
623	SR-24	須恵器 坏身	10.3 5.5	口縁部は直口ぎみに小さく内傾し平坦な端部は外上方に小さく摘み上げる。底部は丸みをもつ。	ヨコナデ、ケズリ ヨコナデ、ナデ	砂粒含	良	灰色	
624	SR-260	須恵器 坏身	10.8 4.0	蓋受け部は平坦で口縁部は反りぎみに内傾する。 底部はやや扁平。	ヨコナデ、ケズリ ナデ	精良	良	黄灰色	ヘラ記号
625	E-VIII	手捏 A	5.0 3.6 6.5	「く」字状の口縁部は小さく外反する。胴部は肩のはった卵形で大きめの平底がつく。	粘土仕上げナデ、ハケ目 押圧ナデ	白色砂粒含	良	橙色	
626	E-XIII	小型壺	9.3	口縁部は、内弯ぎみに開いた後直口し、端部は摘み出して小さく外反する。	ハケ目ナデ ナデ	白色砂粒含	良	橙色	
627	E-VIII	長頸壺 BI	6.2 18.8	口縁部は細長くラッパ状に開く。 胴部は扁平な玉葱状で尖底ぎみ。	研磨 ナデ	白色小粒含	良	赤色	
628	D-X	小型壺 BIII	8.6 10.5	「く」字状の口縁部は、小さく反りぎみに開く。 胴部は扁球形。	ナデ、ヘラケズリ ナデ、ヘラケズリ	粗砂粒 雲母含	良	橙色	
629	E-VIII	小型壺 BIII	10.0 9.8	「く」字状の口縁部は小さく外反する。 胴部は肩のはった扁平な玉葱状。	ヨコナデ、ハケ ヨコナデ、ケズリ	肌色小 石粒含	良	黄橙色	
630	C-XI	須恵器 壺	11.3 10.3	「く」字状の口縁は、反りぎみに開き、端部は小さく屈曲して上方に摘み上げる。胴部は肩のはった球形で平底がつく。	ヨコナデ、ケズリ ヨコナデ、ナデ	細小砂多含	堅	浅黄色	
631	E-VIII	壺 F	11.5	「く」口縁部は短く外反する。 胴部は球形。	ヨコナデ、ハケ ヨコナデ、ハケ	白色砂粒含	良	橙色	
632	E-VIII	壺 BV	11.3 13.5	「く」字状の口縁部は小さく外反する。 胴部は球形。	ヨコナデ、ハケ ヘラケズリ、ナデ	石英含	良	橙色	
633	D-IX	壺 BII	12.4 19.2	「く」字状の口縁部は、長く反りぎみに開く。 胴部は球形。	ヨコナデ、ハケ ハケ、ヘラケズリ	砂粒含	良	橙色	
634	B-XII	壺 EII	15.6 7.3 30.8	口縁部は短く直口した後、小さくラッパ状に開く。胴部は卵形で、凸レンズ状の平底がつく。頸部に三角凸帯。	ヨコナデ、ハケ目 ヨコナデ、ハケ目	細小砂多 雲母含	良	黄橙色	口縁打ち欠き
635	E-VII	壺 AI	14.0	袋状口縁。口縁部は小さく朝顔状に開き、緩く屈曲して膨らみぎみに内傾。頸部、胴部に三角凸帯。	ヨコナデ、ハケ目 ナデ、ハケ目	白色小 石粒含	良	橙色	
636	E-VIII	壺 AI	19.2 39.4	二重口縁。口縁部は朝顔状に開いた後、内弯ぎみに直口し端部は小さく内傾する。卵形の胴部に凸レンズ状の平底がつく。頸部、胴部に一条の凸帯が巡る。	ヨコナデ、ハケ目、ナデ ハケ目、ナデ	細小砂 粒多含 雲母含	良	明赤褐色	
637	D-IX	壺 AI	8.6	胴部は肩のはった卵形で頸部に三角凸帯が1条巡る。 平底の底部には、穿孔がある。	ハケ目 ナデ	黄色砂粒含	良	浅黄色	
638	C-XI	壺 EII	7.3	胴部は卵形で胴大径部に三角凸帯が1条巡る。 底部は平底。	ハケ目、ナデ ハケ目、ナデ	小砂粒多含	良	橙色	
639	C-XI	壺 AI	8.1	卵形の胴部には三角凸帯が1条巡る。 底部は平底。	ハケ目、ナデ ハケ目	白色砂粒含	良	橙色	
640	D-IX	鉢 A	13.0 10.2	「く」字状の口縁部は、短く外反する。胴部は半球形で大きめの平底がつく。全体に厚手。	ナデ、ハケ目 ナデ	白色砂粒含	良	橙色	スス付着

Tab.57　土器観察表 (34)

No.	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
641	D-X	甕 AV	16.2 8.2 15.7	「く」字状の口縁部は短く外反する。胴部は短めの卵形で、やや大きい。平底の底部がつく。	ヨコナデ、ハケ ヨコナデ、ハケ目、ナデ	粗砂粒 雲母含	良	明黄褐色	
642	D-X	甕 AV	20.2 8.6 23.7	「く」字状の口縁部は短く外反する。胴部は卵形で平底の底部がつく。全体に厚手。	ヨコナデ、ハケ ヨコナデ、押圧ナデ	小～粗 砂粒多含	良	黄橙色	スス付着
643	E-VII	甕 AVI	12.0 5.5 16.8	「く」字状の口縁部は小さく開く。胴部は砲弾状で頸部に弱い稜がつく。底部は凸レンズ状の平底。	ナデ、ハケ目 ナデ、ハケ目	白色砂粒含	良	橙色	
644	C-XII	甕 AVI	11.8 5.7 17.2	口縁部は短く直口ぎみに立ち上がる。 胴部は卵形で平底の底部がつく。	ヨコナデ、ハケ ヨコナデ、ハケ	小砂粒 赤褐色 粒雲母含	良	黄橙色	スス付着
645	D-IX	甕 AI	14.7 7.3	「く」字状の口縁部は、反りぎみに開く。胴部は砲弾形で、凸レンズ状の平底がつく。	ハケ目後ナデ ハケ目、ナデ	白色砂粒含	良	橙色	スス付着
646	E-VIII	甕 AI	17.6 6.6 24.7	「く」字状の口縁部は短く外反する。胴部は卵形で凸レンズ状の平底がつく。	ヨコナデ、ハケ目、ナデ仕上げ ヨコナデ、ハケ	細～粗 砂粒 雲母含	良	黄橙色	スス付着
647	C-XII	甕 AI	20.0	「く」字状に外反する口縁部は端部が僅かに凹み、内外両方向に小さく摘み出す。胴部は長胴形。	ハケ目 ハケ目	白色砂粒含	良	橙色	スス付着
648	D-VII	甕 AVI	17.4 8.5 17.8	「く」字状の口縁部は、短く水平に屈曲して開く。胴部は、長胴形で大きめの平底がつく。	ヨコナデ、ハケ ヨコナデ、ハケ	細砂粒 多含雲 母含	良	橙色	
649	不明	甕 AI	19.1	「く」字状の口縁部は反りぎみに開く。	ヨコナデ、ハケ ハケ目	細砂粒多含	良	橙色	二次焼成
650	E-VIII	甕 AI	21.7 6.3 27.6	「く」字状の口縁部は短めで、屈曲して大きく外反する。 卵形の胴部に平底の底部がつく。	ヨコナデ、ハケ ヨコナデ、ナデ	小～粗 砂多含 雲母含	良	橙色	スス付着
651	D-IX	甕 AI	25.4	「く」字状の口縁部は反りぎみに開き、平坦に整えた端部は中央が凹む。	ハケ目 ハケ目後ナデ	白色砂粒含	良	橙色	
652	B-X	甕 AI	26.7 9.8 47.0	「く」字状の口縁部は反りぎみに開き、平坦に整えた端部は中央が凹む胴部は長胴形で平底の底部。	ハケ目 ハケ目、ナデ	細小砂 粒多含 雲母含	良	明赤褐色	
653	不明	甕 AI	28.4 8.1 34.8	「く」字状の口縁部は反りぎみに開き、端部を平坦に整える。 胴部は長胴形で底部は平底。	ヨコナデ、ハケ ハケ、ヨコナデ	細～粗 砂多含 雲母含	良	橙色	スス付着
654	B-XIII	甕 AI	28.0	「く」字状の口縁部は反りぎみに開き、端部は丸くおさめる。	ヨコナデ、ハケ ヨコナデ、ハケ目、押圧ナデ	細小砂 粒多含	良	黄橙色	スス付着 二次焼成
655	B-XII	甕 AI	7.8	長胴形の胴部に平底の底部がつく。	ハケ目、ナデ ハケ目、ナデ	細小砂 粒多含 雲母含	良	橙色	スス付着 口縁打ち欠き
656	B-XII	甕 AI	10.0 33.6	胴部は長胴形で底部は凸レンズ状の平底。	ハケ、ナデ上げ ハケ目、ナデ	細小砂 粒多含	良	橙色	スス付着 口縁打ち欠き
657	D-X	甕 AV	24.8 9.9 31.1	「く」字状の口縁は小さく外反し頸部に三角凸帯が巡る。 胴部は卵形で平底の底部がつく。	ヨコナデ、ハケ ハケ目、ナデ	細～粗砂粒 雲母含	良	橙色	口縁打ち欠き
658	D-IX	甕		胴部は卵形。	ハケ目 ヘラケズリ、ナデ	細砂粒含	良	橙色	スス付着
659	D-X	甕 AIII	16.0 22.5	「く」字状の口縁部は小さく外反する。胴部はやや肩のはった卵形で尖形ぎみ。	ヨコナデ、ハケ ハケ目、ヘラケズリ、ナデ	細小砂粒 雲母含	良	黄橙色	スス付着

Tab.58　土器観察表 (35)

No.	出土遺構	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
660	B-XI	甕	12.8 4.4 18.2	「く」字状の口縁部は短く直線的に開く。胴部は下膨れぎみの球形で小さな丸底ぎみの底部がつく。	ナデ、ハケ目 ハケ目、ナデ	細～粗 砂粒多 雲母含	良	赤褐色	
661	D-IX	甕 AIV	11.3 15.6	「く」字状の口縁部は内弯ぎみに開き端部を小さく摘み出す。胴部は球形でやや尖底。薄手。	ハケ目、ナデ ヨコナデ、ケズリ	細砂粒、 雲母含	良	明黄褐色	
662	D-IX	甕 AIV	15.4 22.6	「く」字状の口縁部はやや内弯ぎみに外方に開く。胴部は球形。全体に薄手。	ハケ目、ナデ ハケ、押圧ナデ	細砂粒含	良	黄橙色	
663	D-IX	鉢	13.0 3.6 7.9	体部はストレートに大きく開く。底部は短く立ち上がりやや上げ底状をなす。	押圧、ハケ目	白色砂粒含	良	黄褐色	
664	C-XIII	鉢 F	15.6 3.6	体部は膨らみぎみに大きく開き口縁部は外方に小さく摘み出す。丸底ぎみの小さな底部がつく。	ヨコナデ、ケズリ ナデ	小砂粒多 雲母含	良	赤褐色	二次 焼成
665	C-X	鉢 F	16.2 4.7 8.6	体部は半球形で、口縁部は直口ぎみに立ち上がる。底部は平底。	タタキ後ハケ ハケ目、ナデ	細小砂粒多 雲母含	良	橙色	
666	B-XIII	鉢 F	13.0 10.6	口縁部は鋭く屈曲して短く外反する。胴部は球形	ハケ目後ナデ ナデ	白色砂粒含	良	明赤褐色	
667	D-VI	高坏	12.6	坏部は平球状に内弯して立ち上がり口縁部は小さく内傾する。胴部は細い棒状で短い。	ナデ ナデ	細砂粒、 雲母含	良	明赤褐色	
668	E-VII	高坏	11.8	脚部は短かく、ラッパ状に開く。	ナデ ナデ	細砂粒多、 雲母含	良	黄褐色	
669	C-VII	高坏 A	30.4	坏部は浅く膨らみ、中位で小さく直口した後、大きく外反する。口縁部は小さく摘み出し水平になる。	ハケ目 ナデ、ハケ目	細砂粒多含	良	黄褐色	
670	C-VII	高坏 A	30.4	坏部は浅く膨らんで立ち上がり中位で屈曲して反りぎみに開く。	ハケ目、ナデ ヨコナデ、ハケ目後ナデ	細砂粒 石英含	良	黄褐色	
671	C-XII	高坏 A	34.5	坏部は浅く膨らみ中位で屈曲して小さな段を作った後大きく外反する。	ハケ目 ヨコナデ、ハケ目	細砂粒、 石英 雲母含	良	赤褐色	
672	B-XI	高坏 C	16.2 10.4 11.3	坏部は底部近くで短く立ち上がった後、弱く屈曲してストレートに開く。脚部は短くのび裾部は屈曲してラッパ状に開く。	ヨコナデ、ヘラケズリ ヨコナデ、押圧ナデ ヘラケズリ	微砂粒含	良	明赤褐色	
673	D-IX	高坏 C	18.9 13.0 12.6	坏部はストレートに大きく開く。脚部はラッパ状に開き、裾端部は下方に小さく摘み出す。	ハケ目、ナデ ハケ目後ナデ、 ヘラケズリ	白色細 砂粒含	良	橙色	
674	C-X	高坏 C	17.4 13.4 12.5	坏部は反りぎみに開き、口縁部は、小さく摘み出す。脚部はラッパ状、裾部は屈曲して大きく開く。	ヨコナデ、ナデ ナデ	砂粒含	良	橙色	
675	F-VI	III	11.5 8.0 2.9	体部は内弯ぎみに小さく立ち上がり口縁部は直口ぎみに小さく摘み出す。	ヨコナデ ヨコナデ	白色砂粒含	良	橙色	
676	F-VII	III	8.0 6.2 1.4	体部は、内弯ぎみに立ち上がる。口縁部は、直口ぎみに小さく摘み上げる。	ヨコナデ ヨコナデ	細砂粒 石英雲 母含	良	褐色 橙色	スス 付着
677	E-XIII	皮袋形 土器	底 長径5.1 短径3.5		ハケ目ナデ ナデ	白色砂粒含	良好	橙色	
678	C-IX	須恵器 瓦泉	13.2 13.7	頸部はラッパ状に開いた後口縁直下で一旦水平に屈曲した後外反する。体部は肩のはった扁球形。	ヨコナデ、ヘラケズリ ヨコナデ、指頭押圧後ナデ	細砂粒含	良好	暗灰 黄色	口頸部 波状沈 線

Tab.59　土器観察表 (36)

P L A T E S

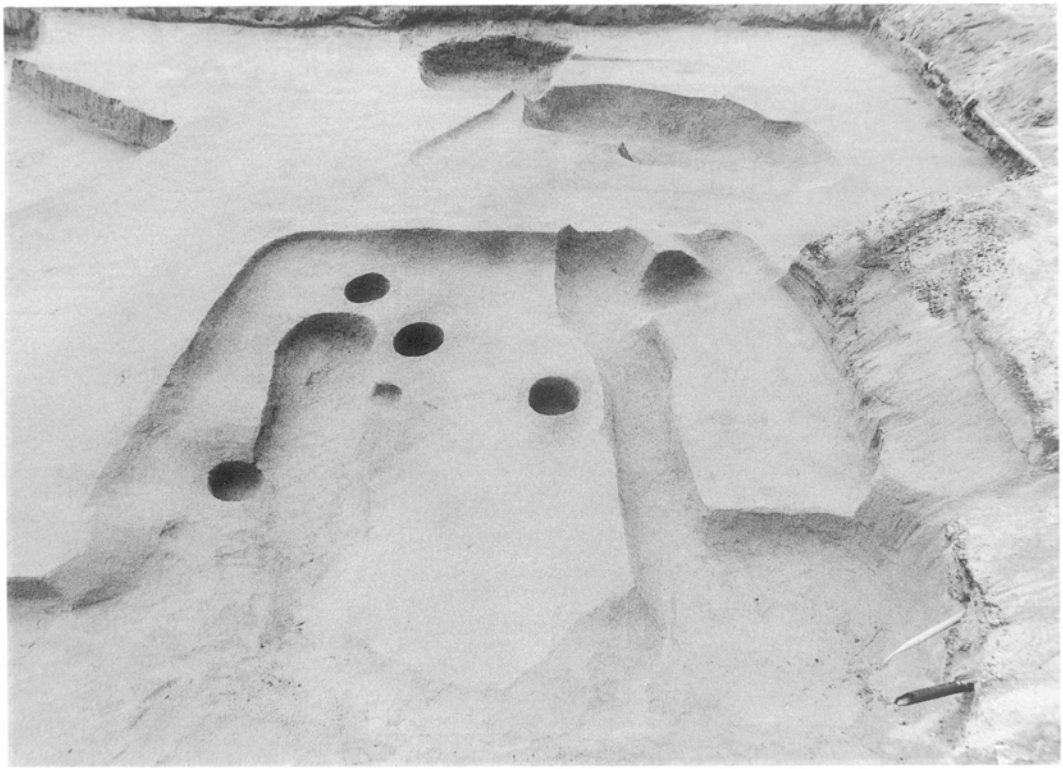
遺跡周辺航空写真

(1) 調査区全景(東上空より)

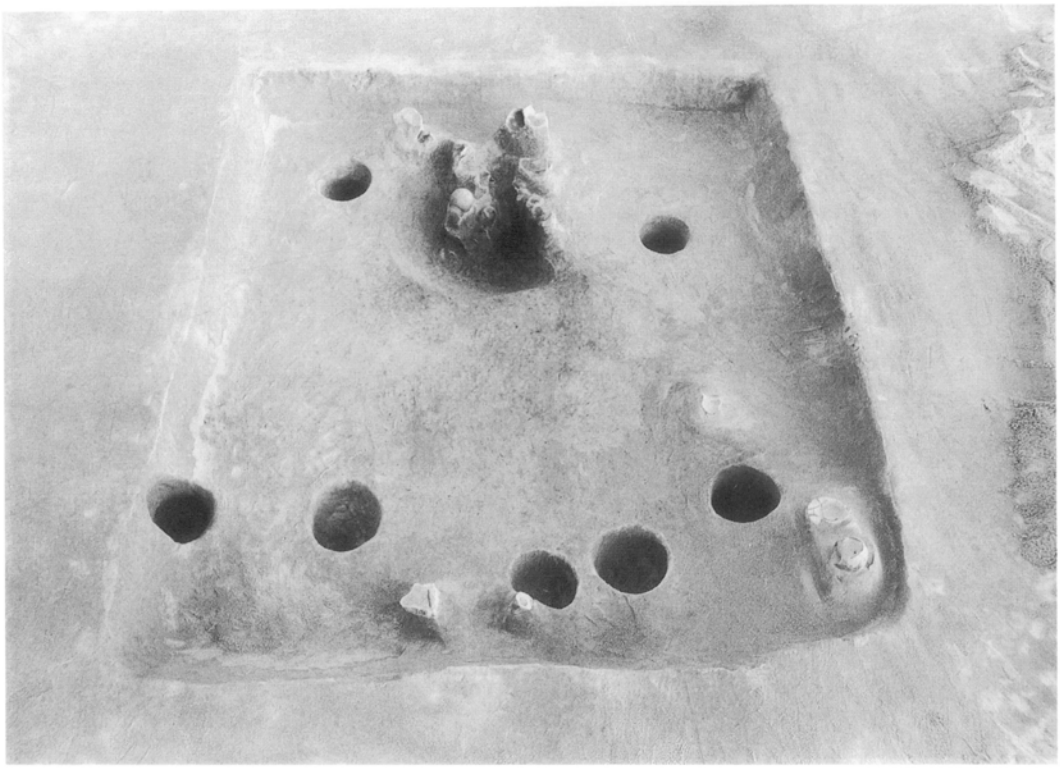
(2) 調査区全景(南上空より)

(1) ST－01周辺住居址群全景

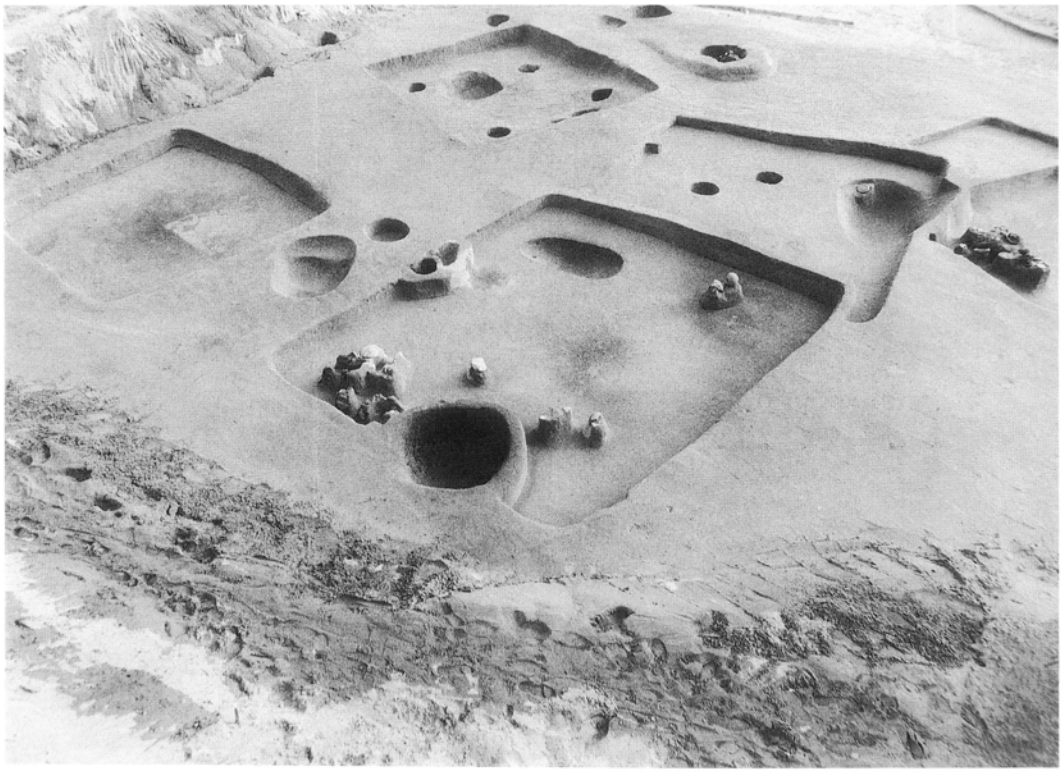
(2) SC－02～09全景



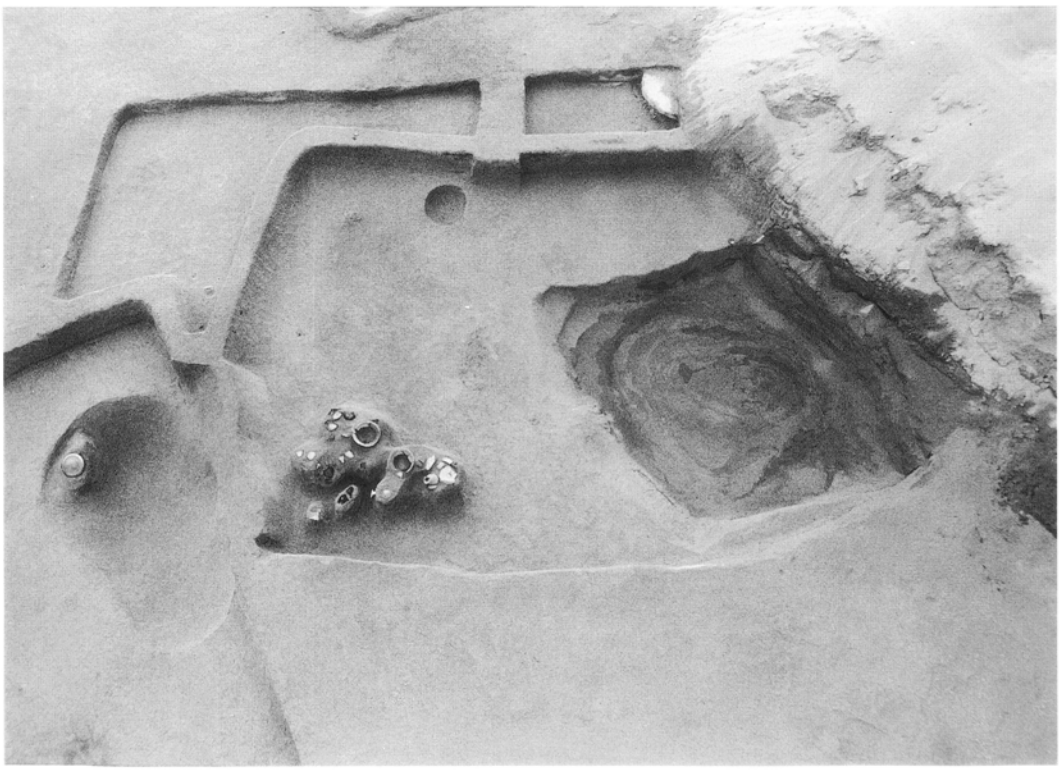
(1) SC－01全景



(2) SC－02全景

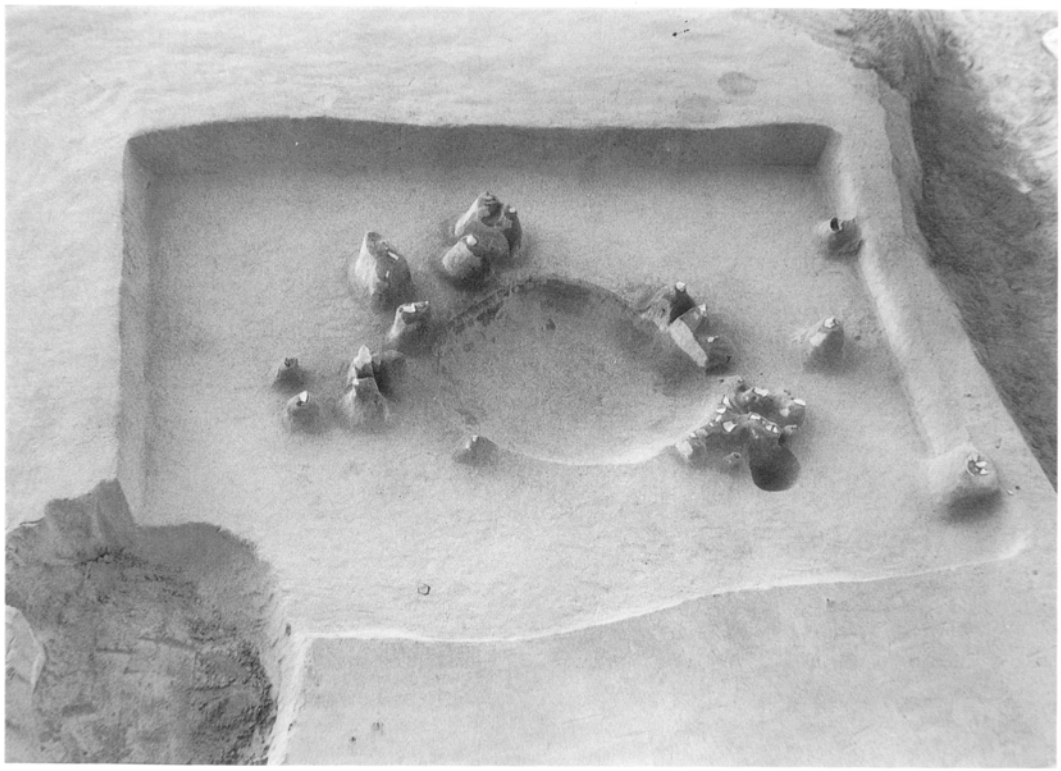


(1) SC－02・05・06・07全景



(2) SC－09全景

(1) SC－10全景

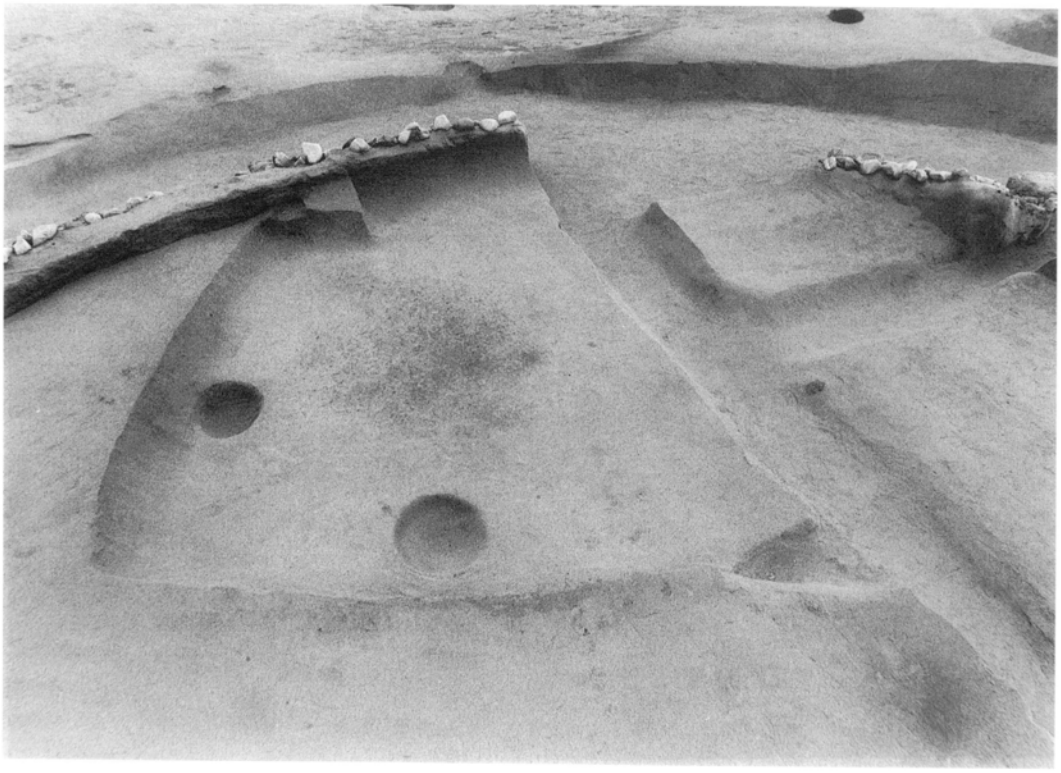


(2) SC－11全景

(1) SC－12全景

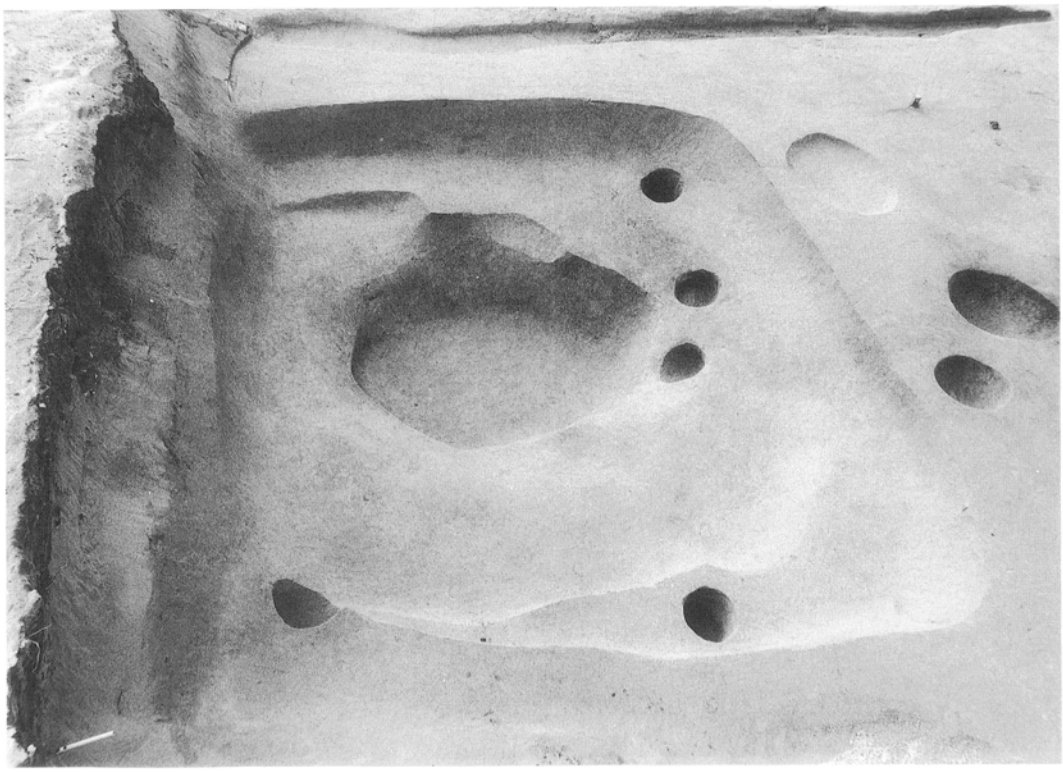
(2) SC－13全景

(1)　SC－14全景

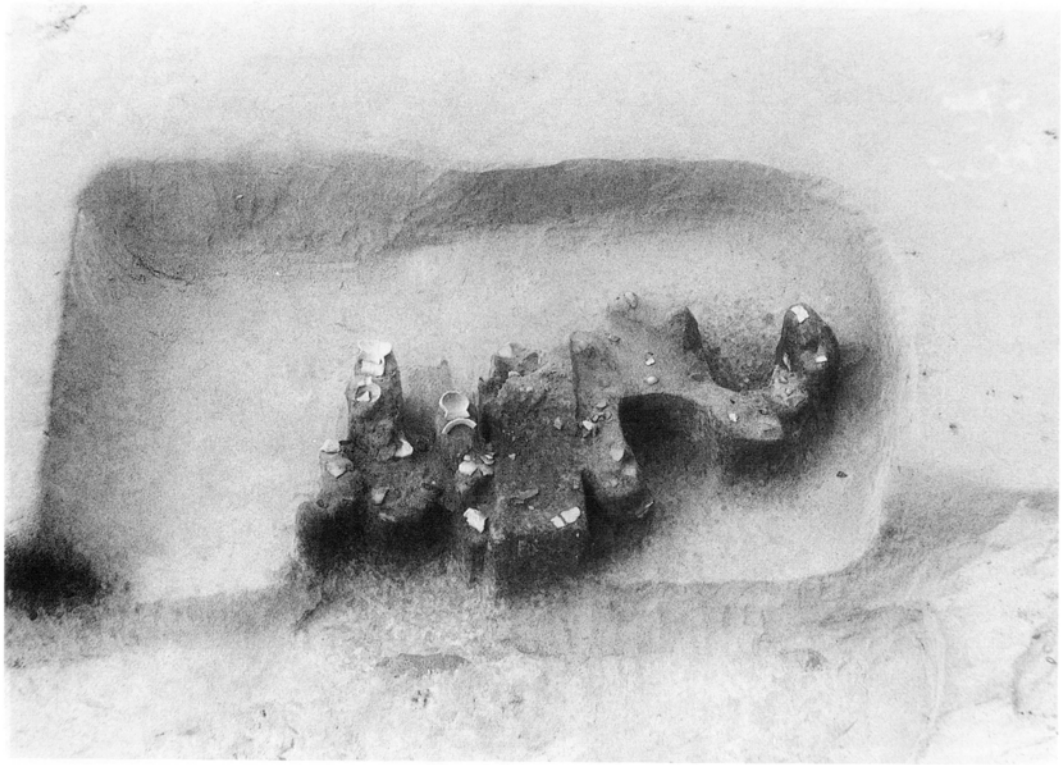


(2)　SC－15全景

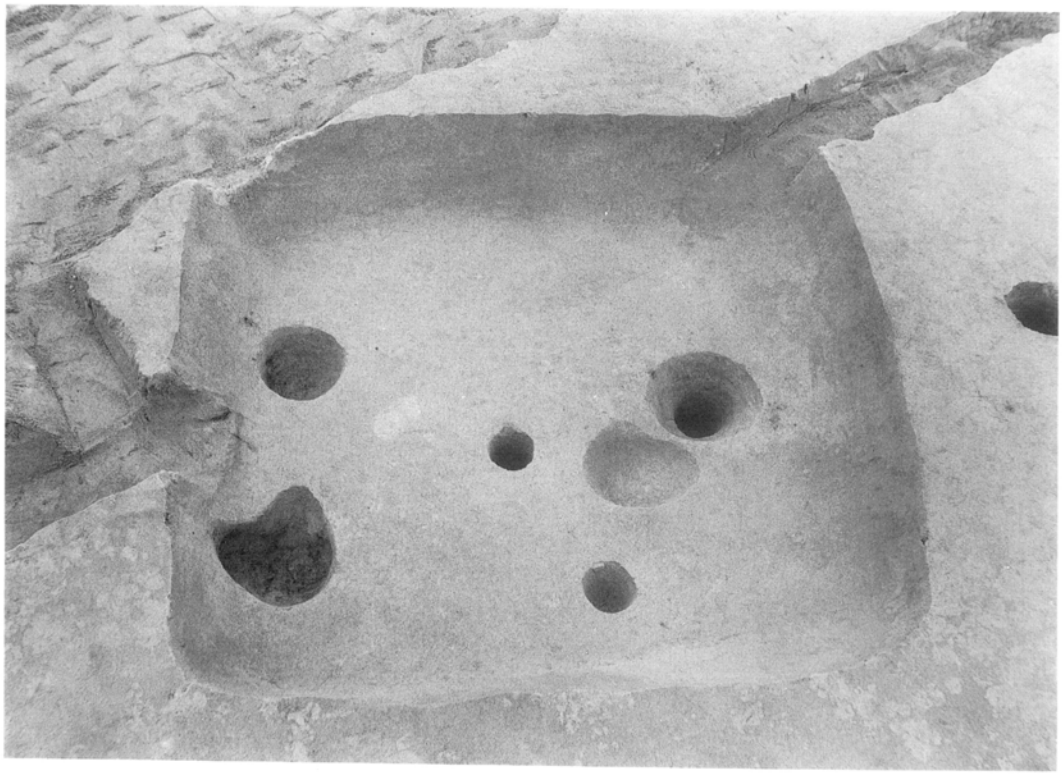
(1) SC－16～20全景



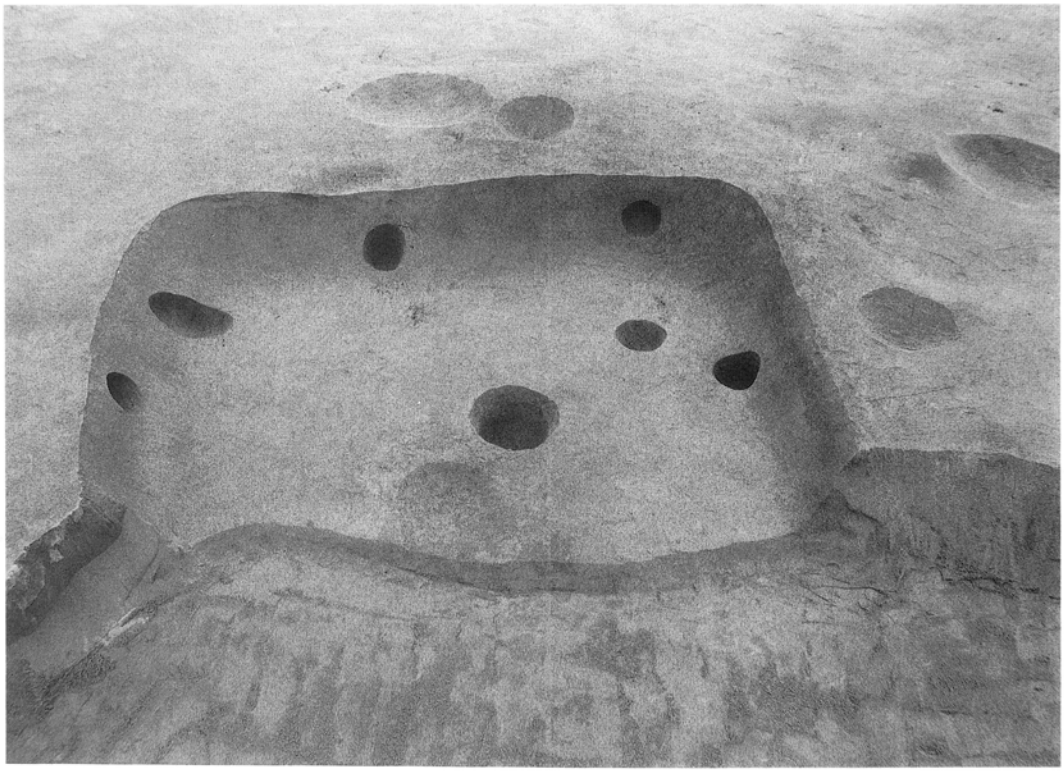
(2) SC－16全景



(1) SC－17全景

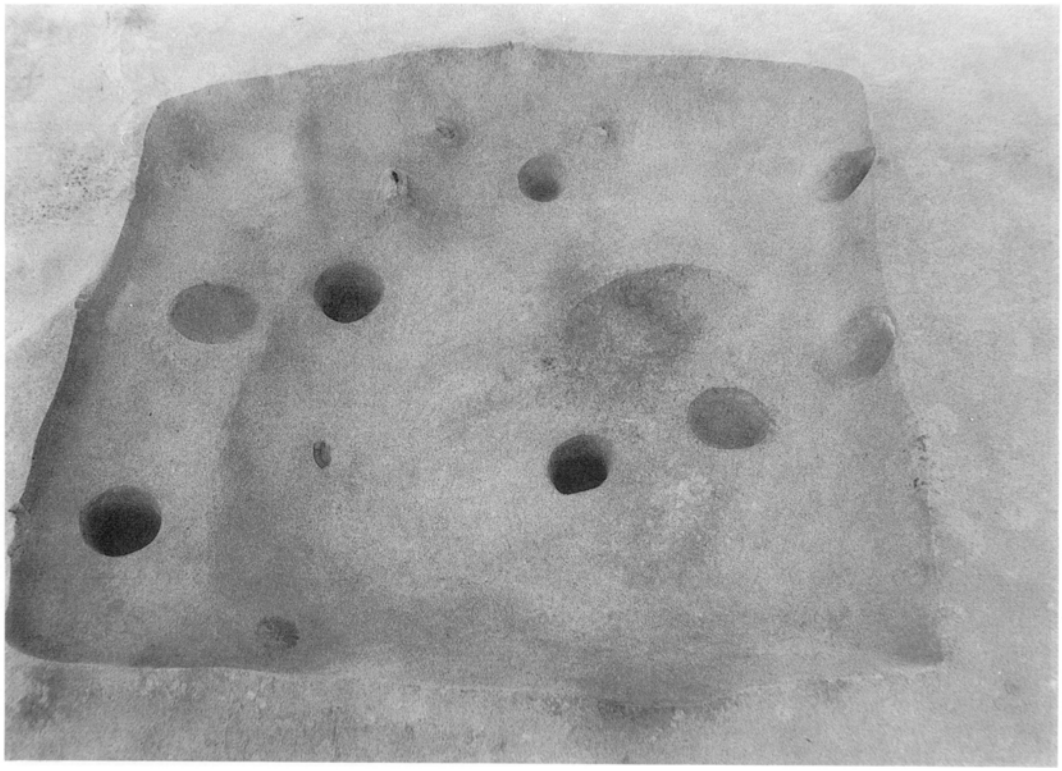


(2) SC－18全景



(1) SC－19全景

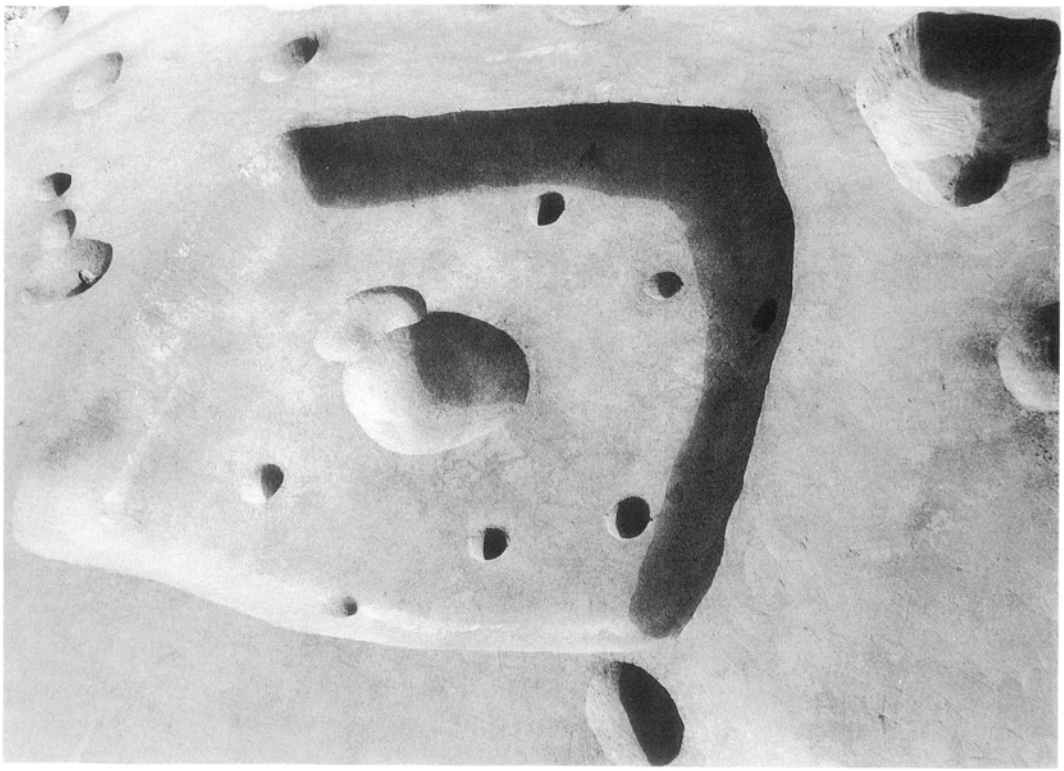
(2) SC－20全景



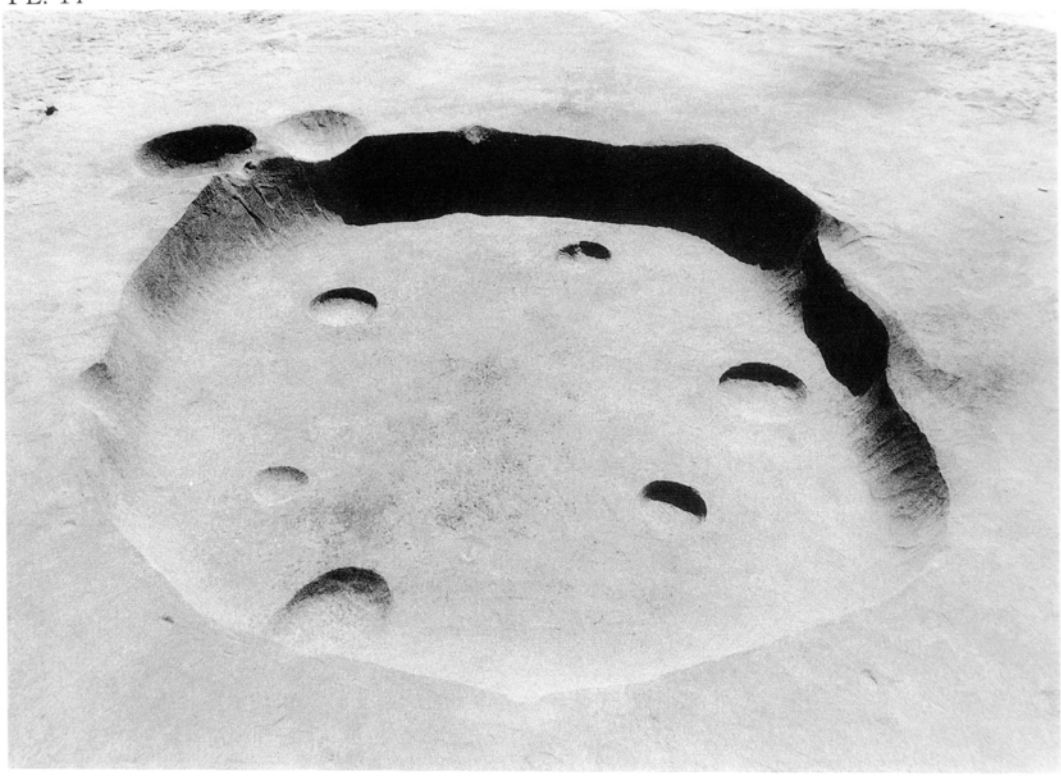
(1) SC－21全景

(2) SC－22全景

(1) ST－02周辺住居址群全景

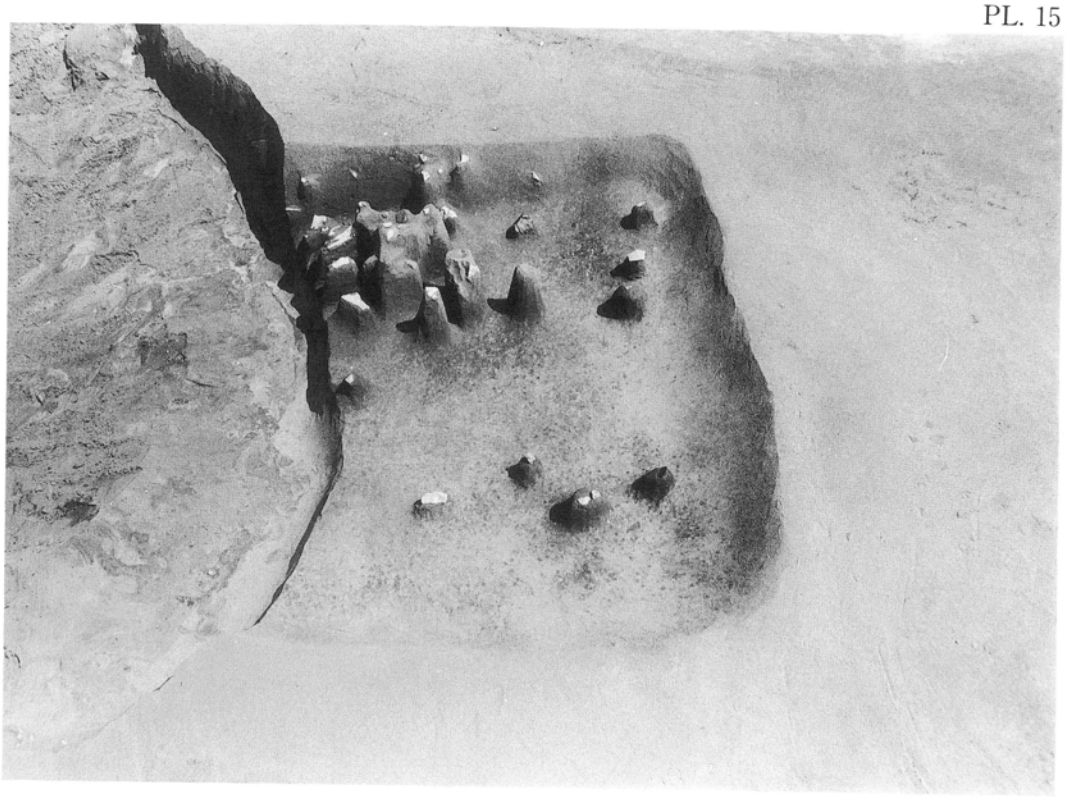


(2) SC－23全景

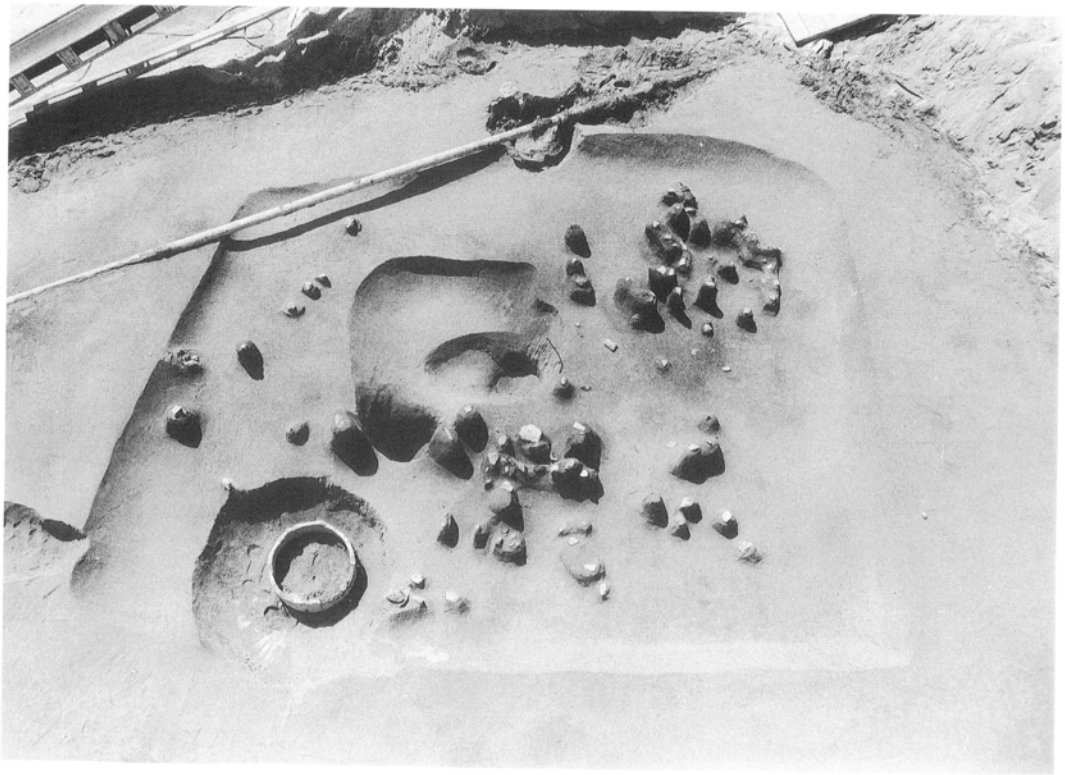


(1) SC－24全景

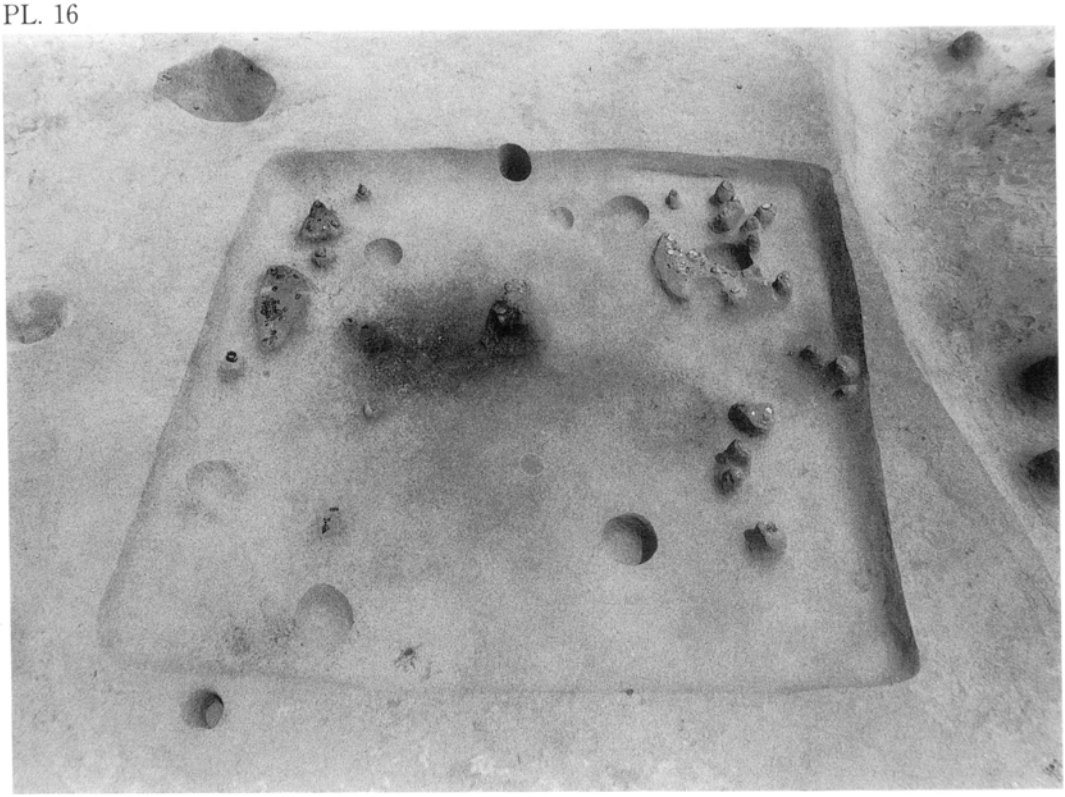
(2) SC－25全景



(1) SC－26全景

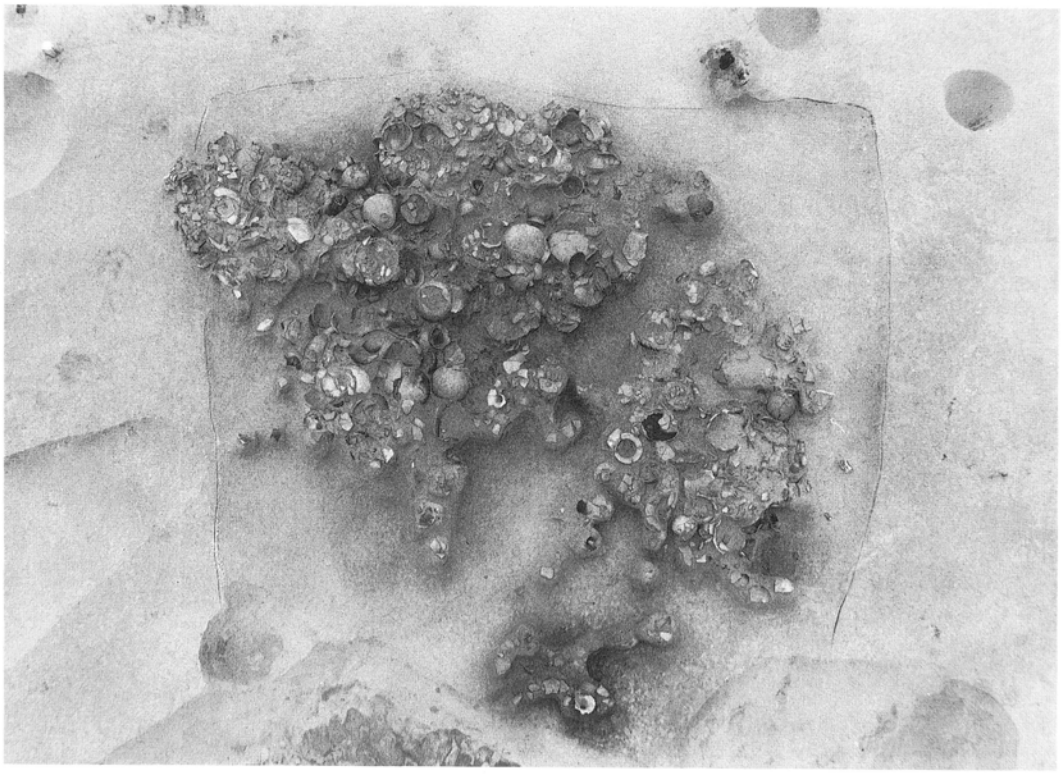


(2) SC－27全景



(1) SC－28全景

(2) SC－29全景



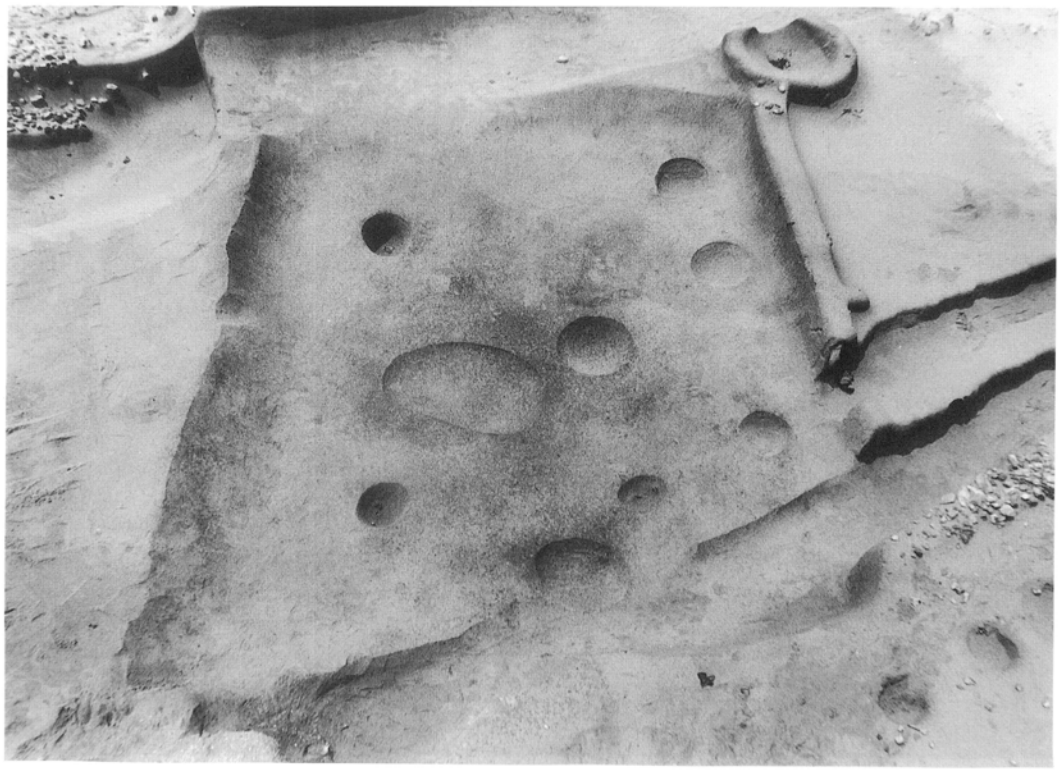
(1) SC－30全景

(2) SC－30遺物出土状況

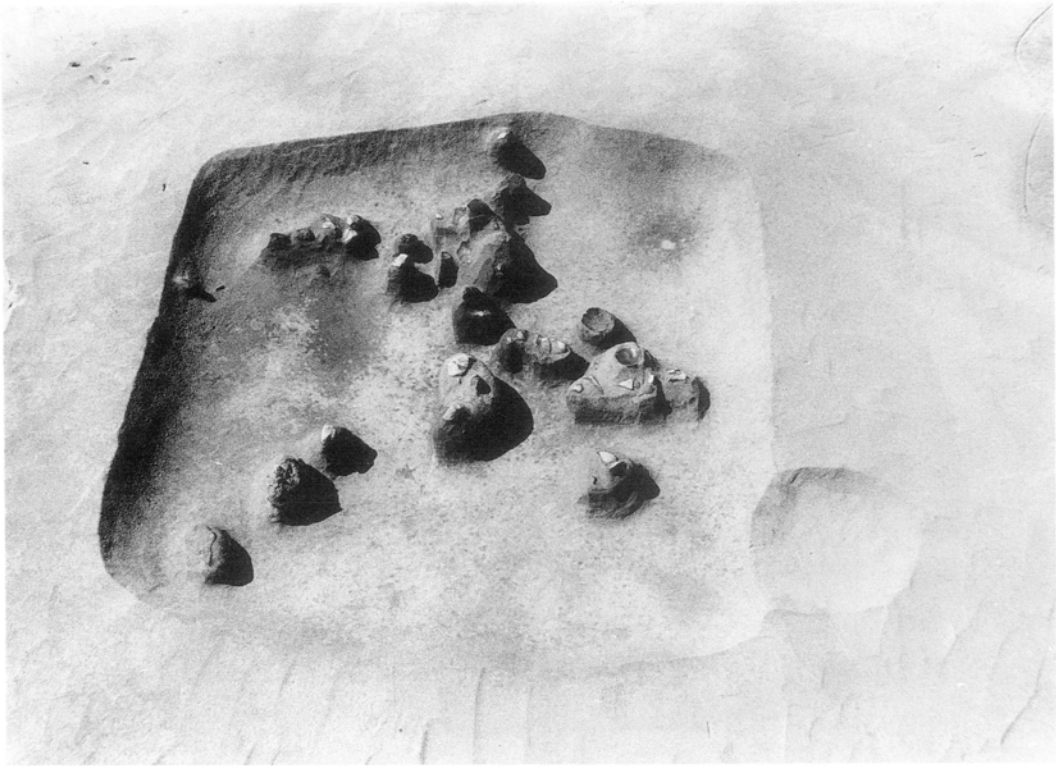
(1) 調査区西南部住居址・土壙・炉址全景

(2) SC－31全景

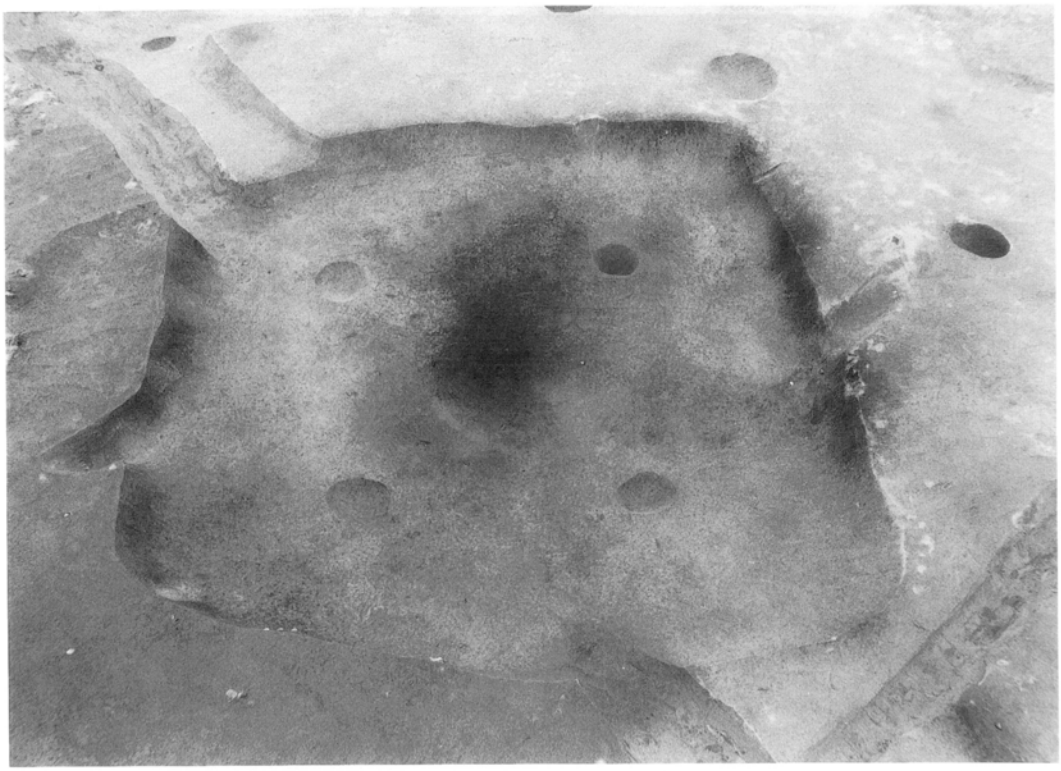
(1) SC－32全景



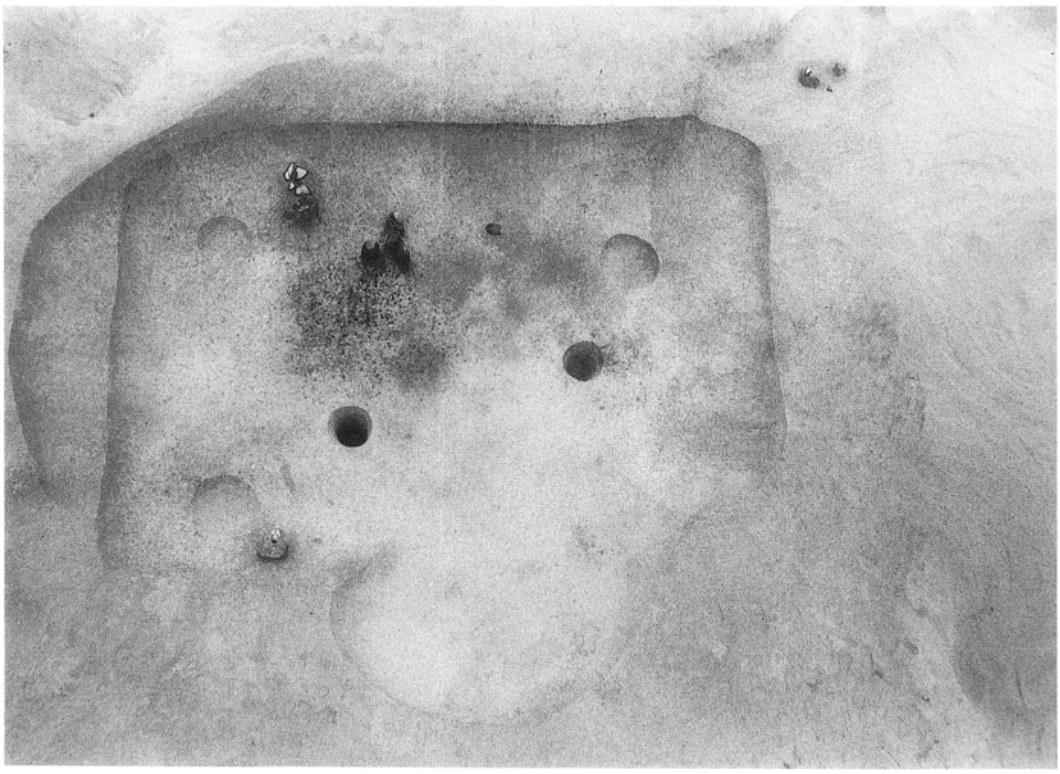
(2) SC－33全景



(1) SC－34全景

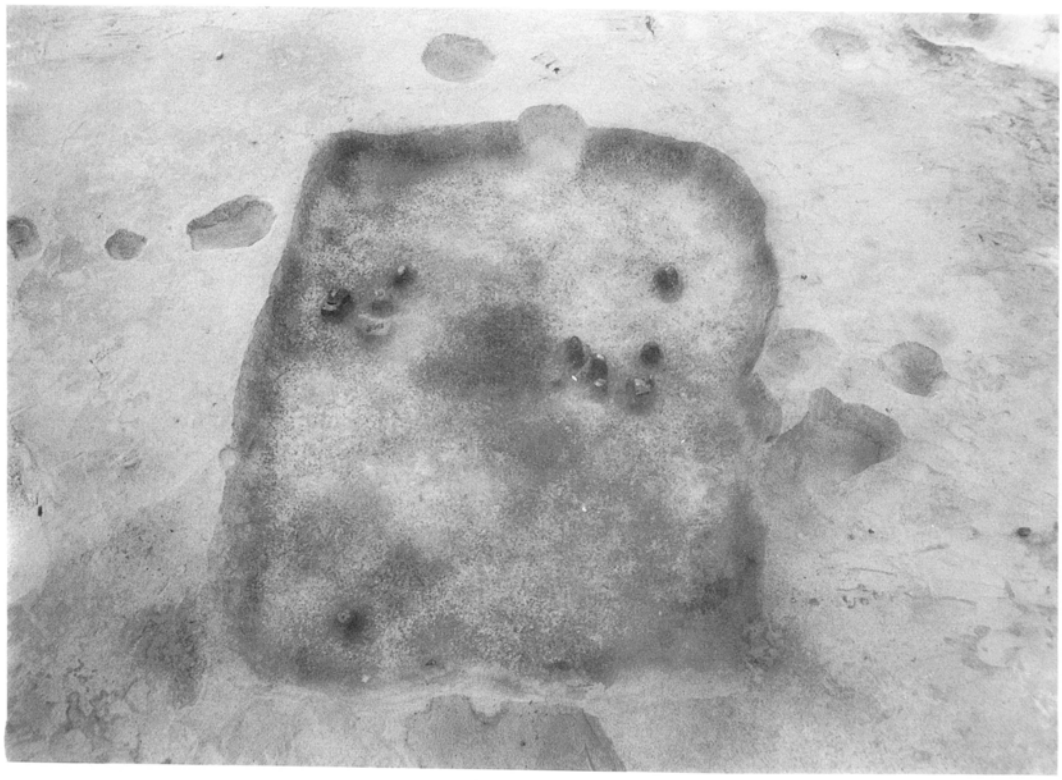


(2) SC－36全景

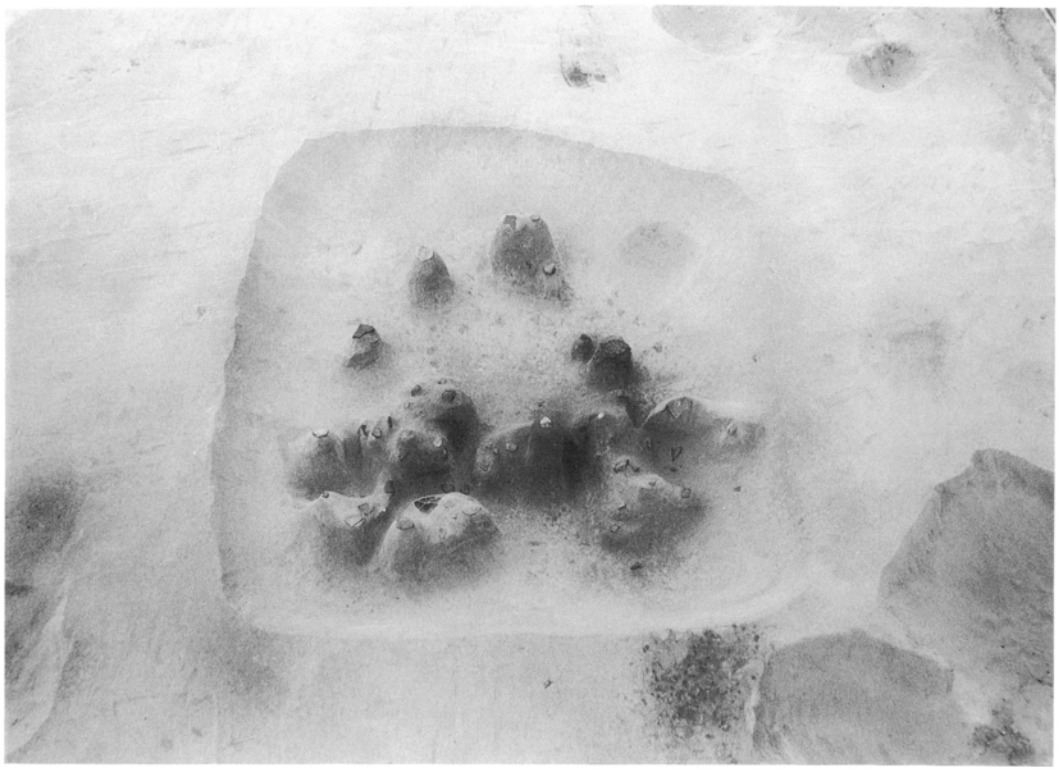


(1) SC－37全景

(2) SC－38全景



(1) SC－39全景



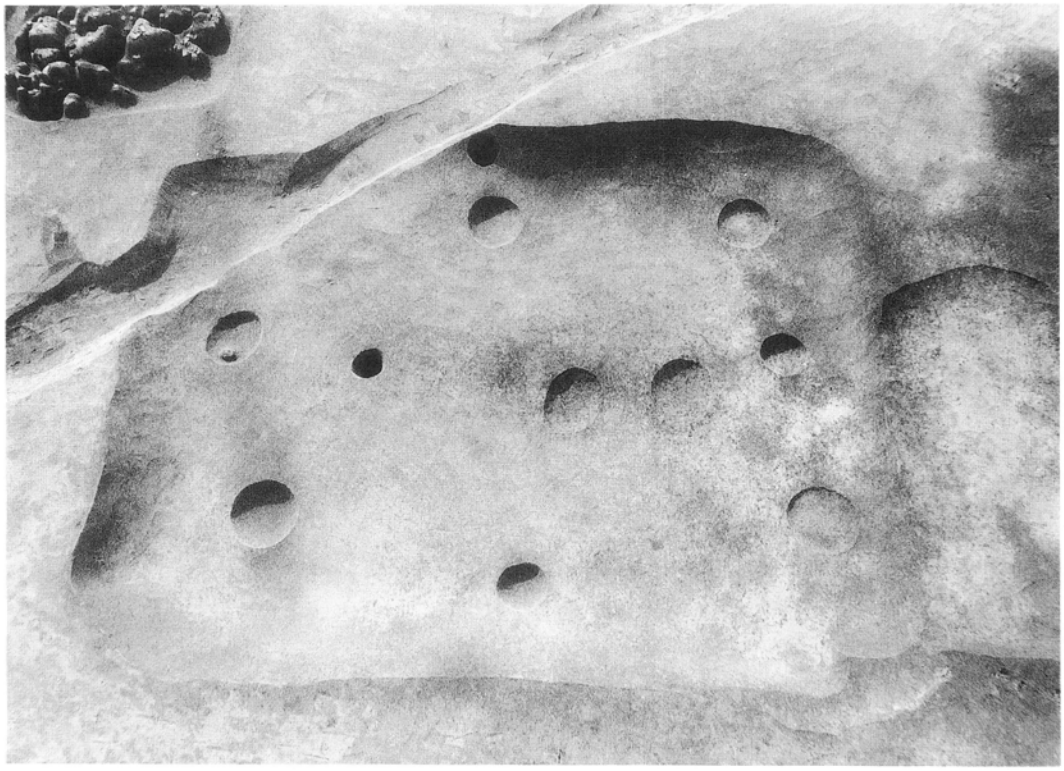
(2) SC－40全景

(1) SC－41全景

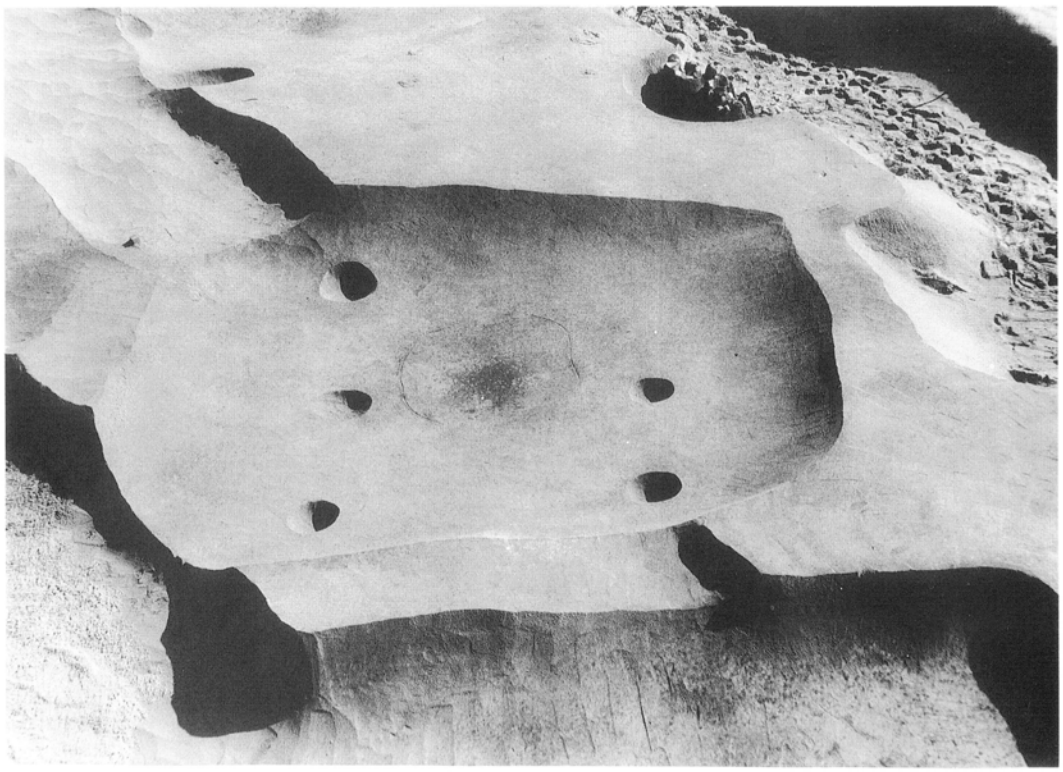
(2) SC－41石錘出土状況

(1)　調査区中央部住居址・土壙・炉址全景

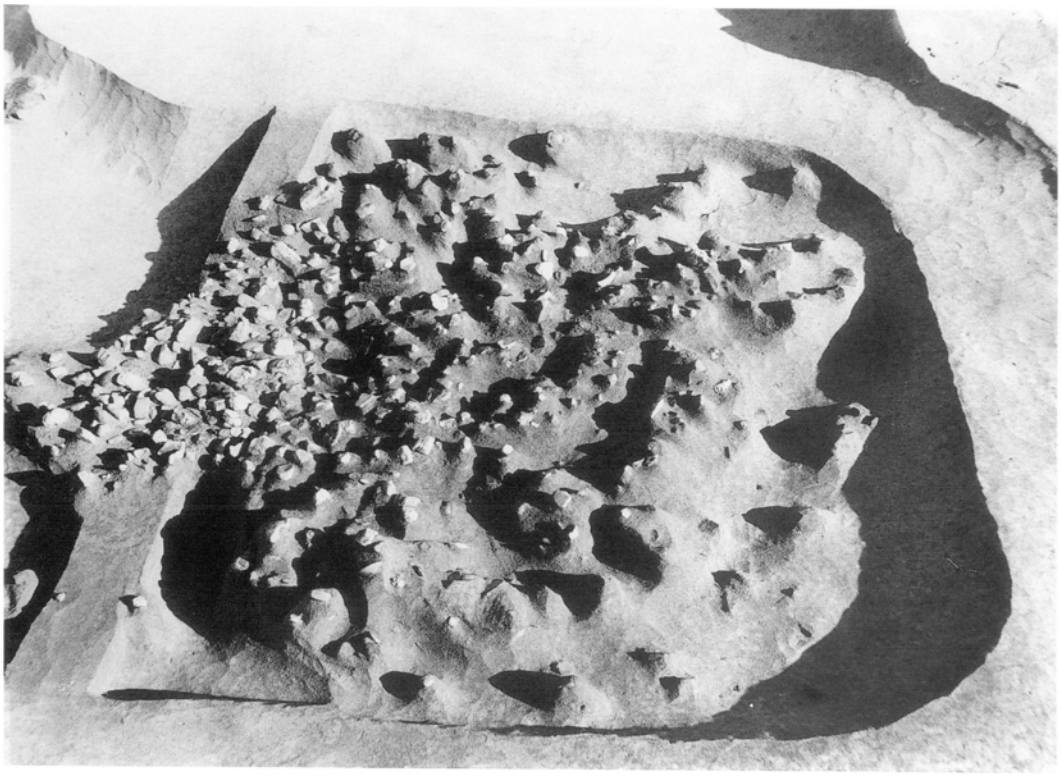
(2)　SC－43～45・SK－94・97全景



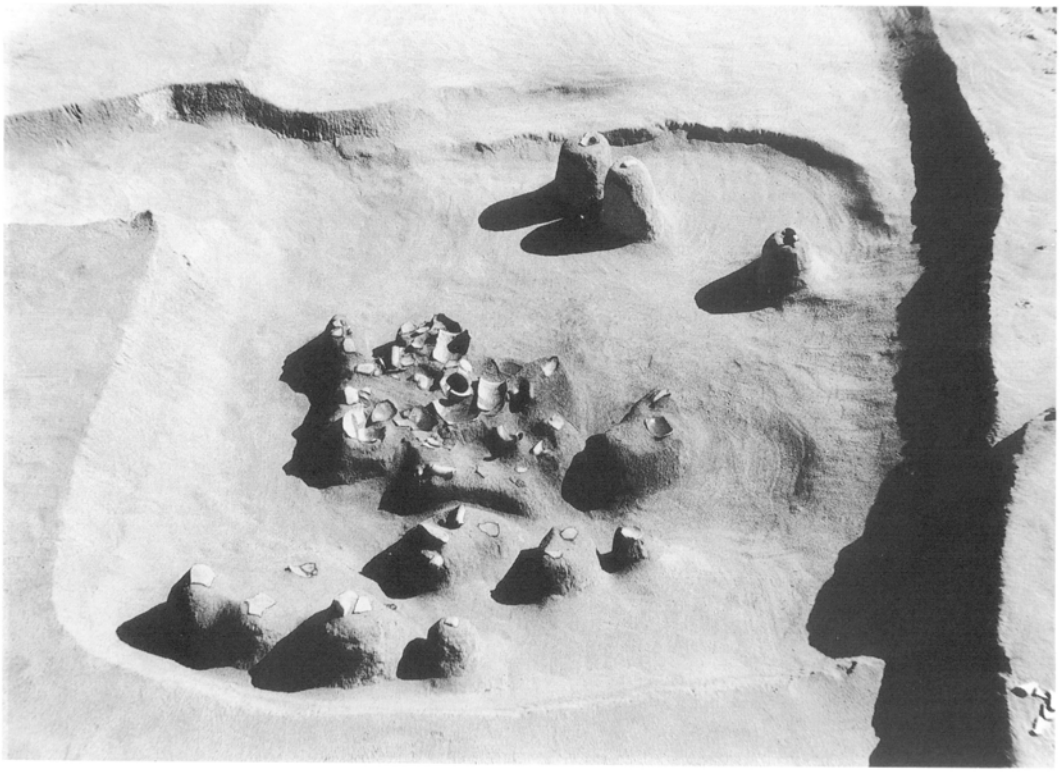
(1) SC－42全景



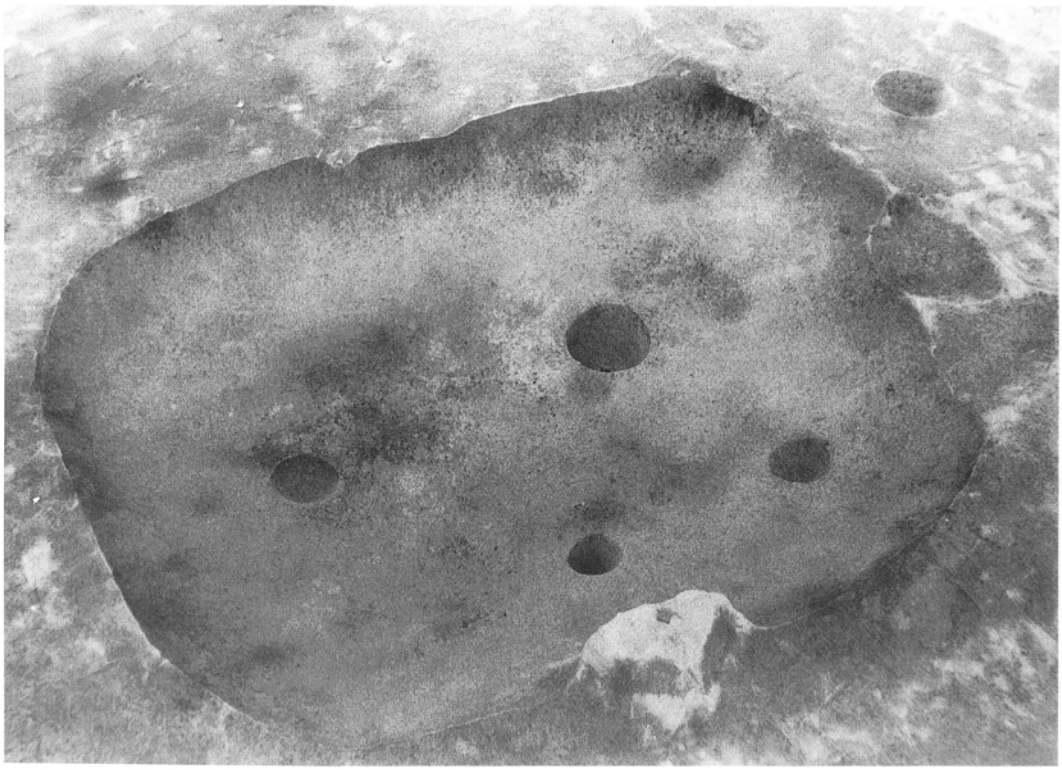
(2) SC－43全景



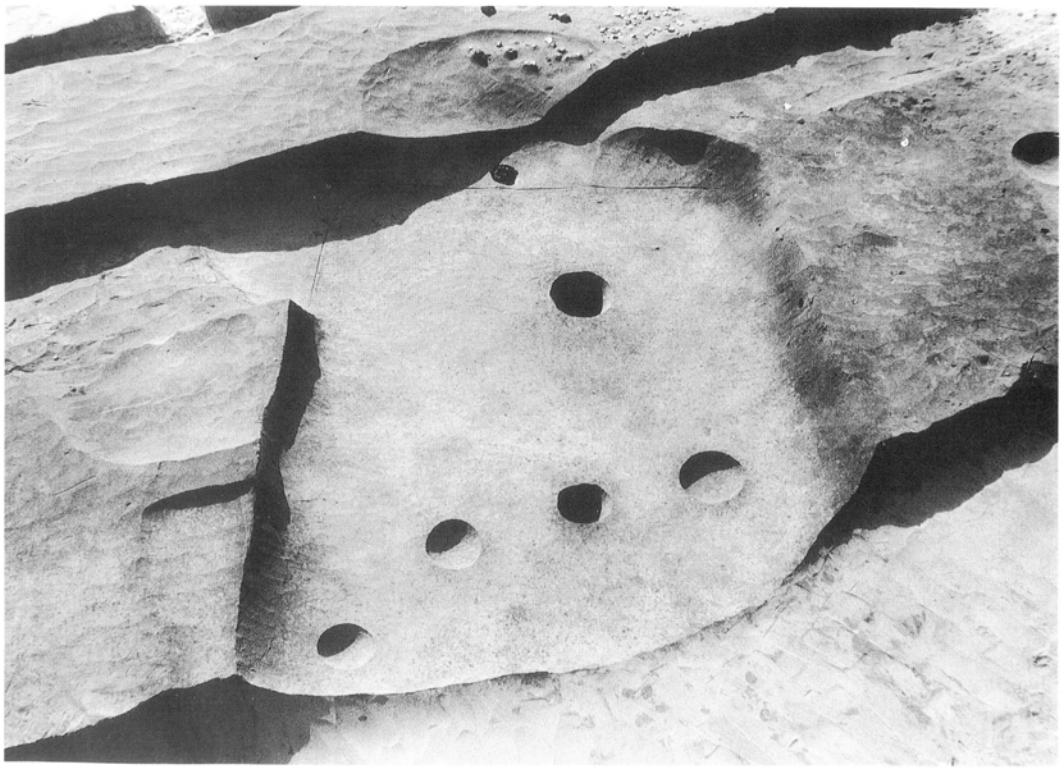
(1) SC－45全景



(2) SC－46全景



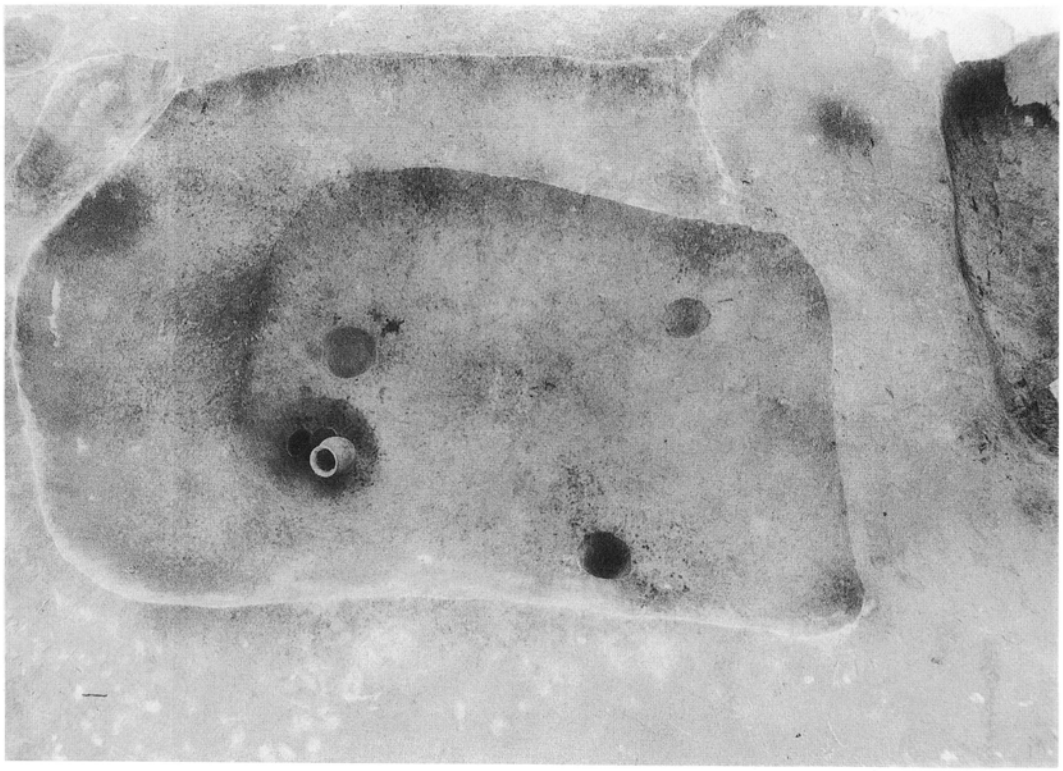
(1) SC－47全景



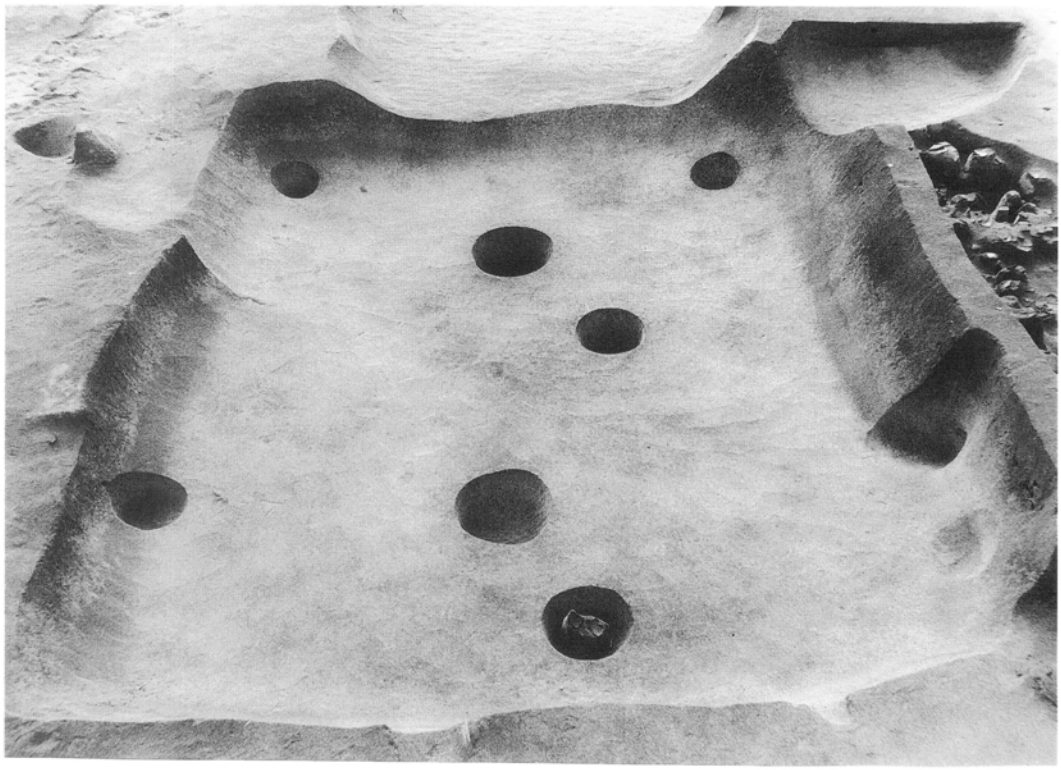
(2) SC－49全景

(1) SC－50全景

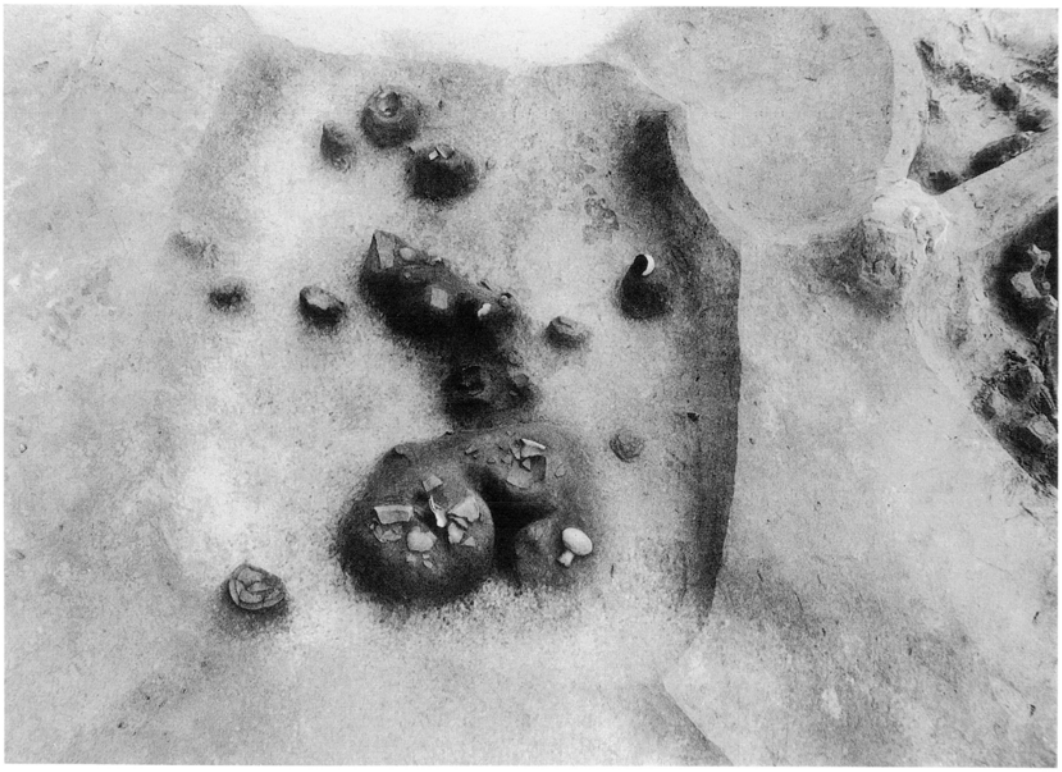
(2) SC－52全景



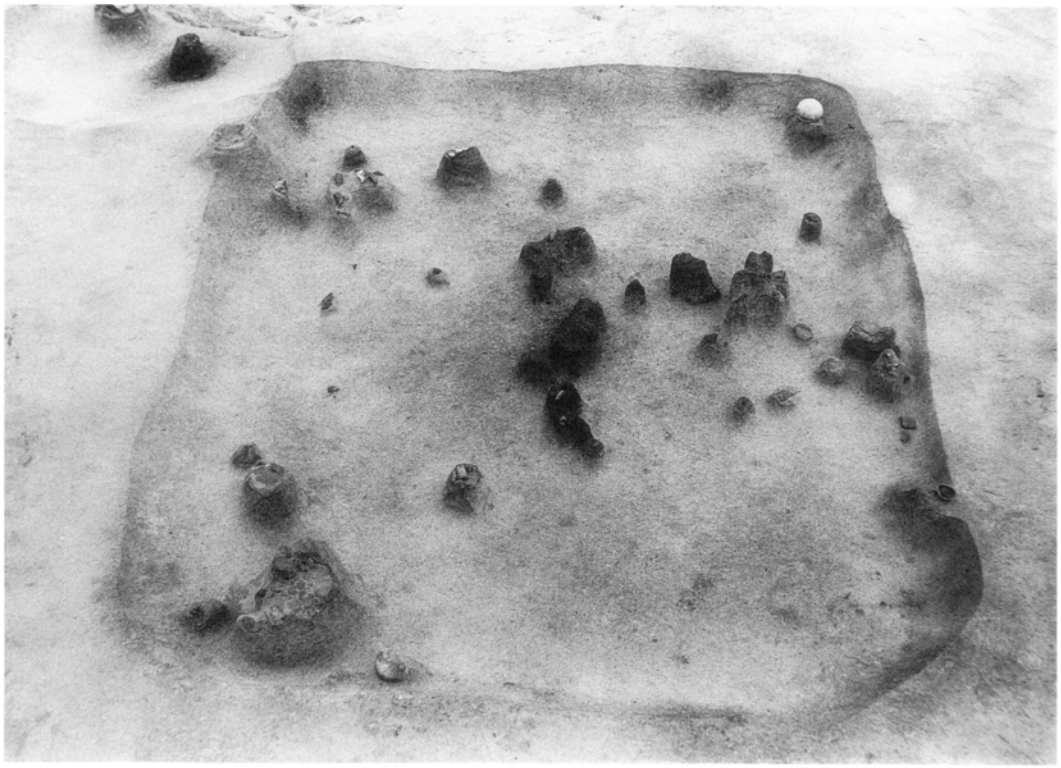
(1) SC－53全景



(2) SC－57全景



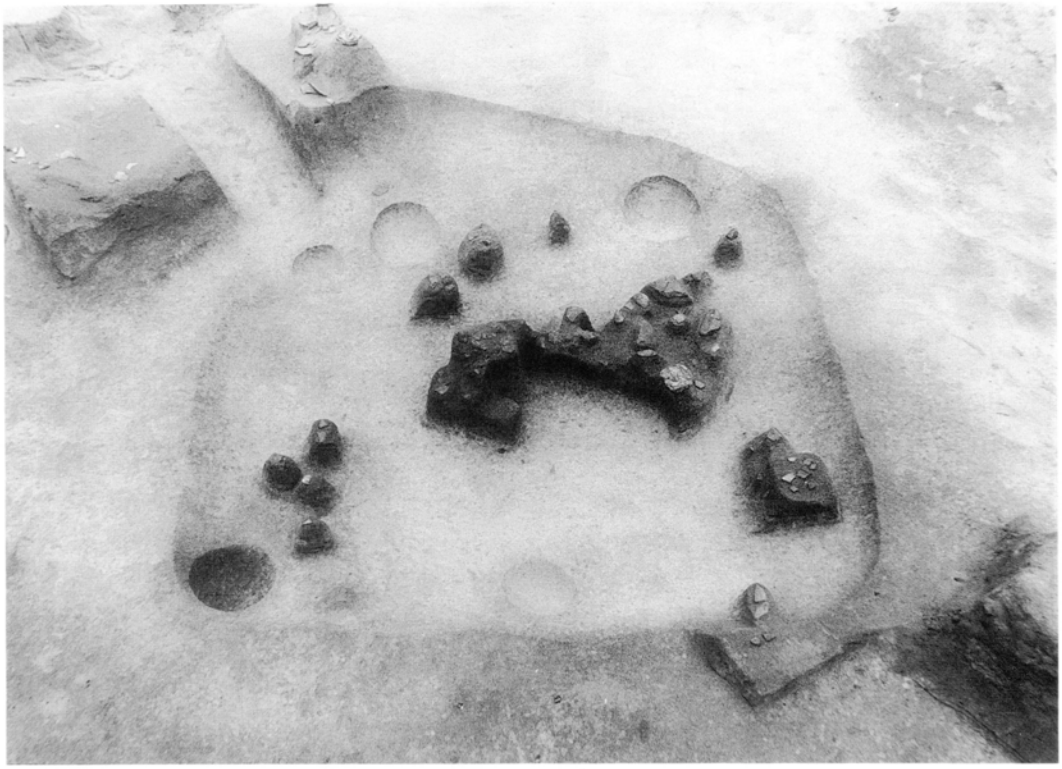
(1) SC－58全景



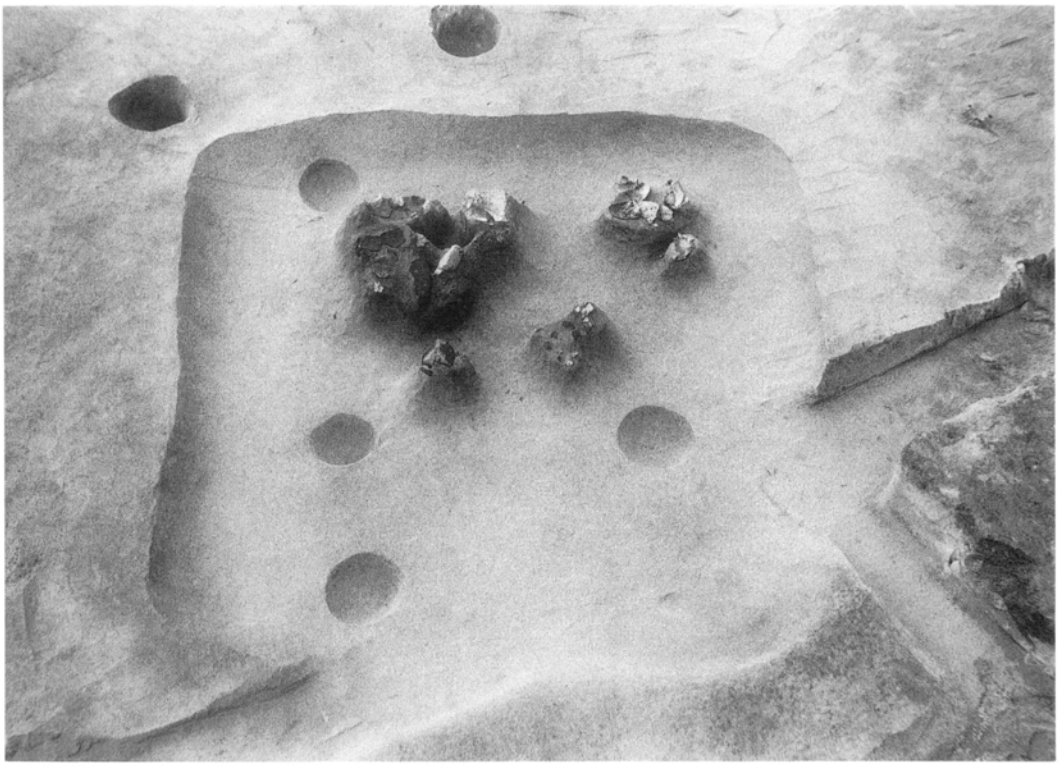
(2) SC－59全景

(1) SC－60全景

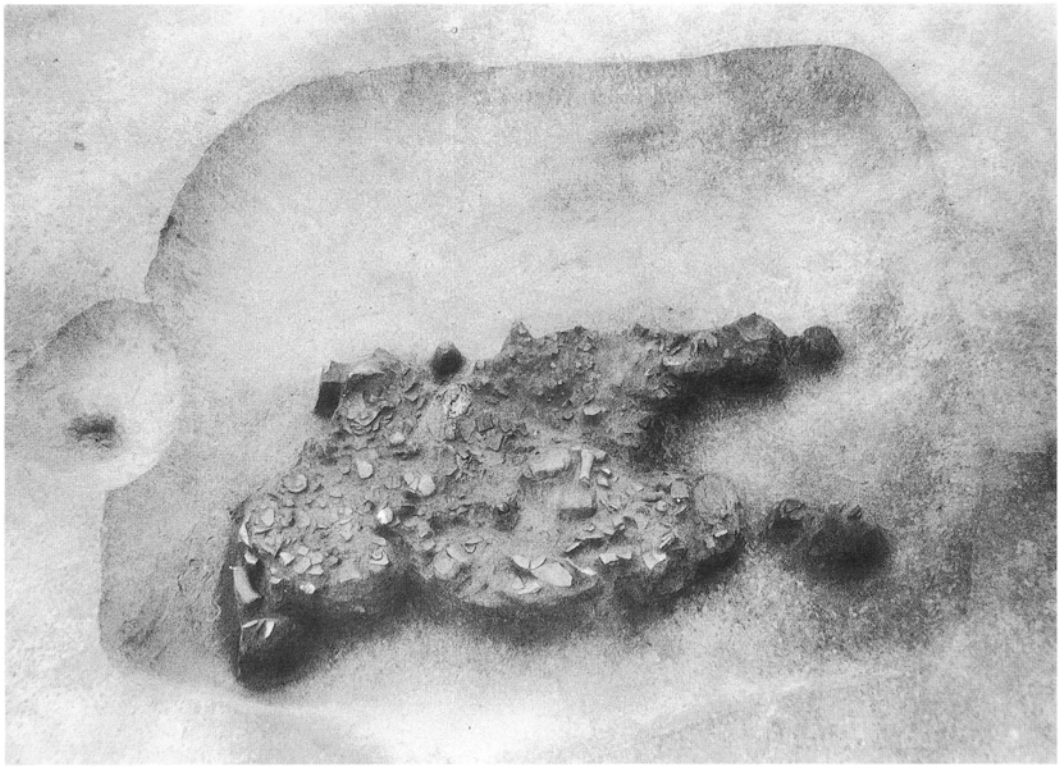
(2) SC－62全景



(1) SC－63全景



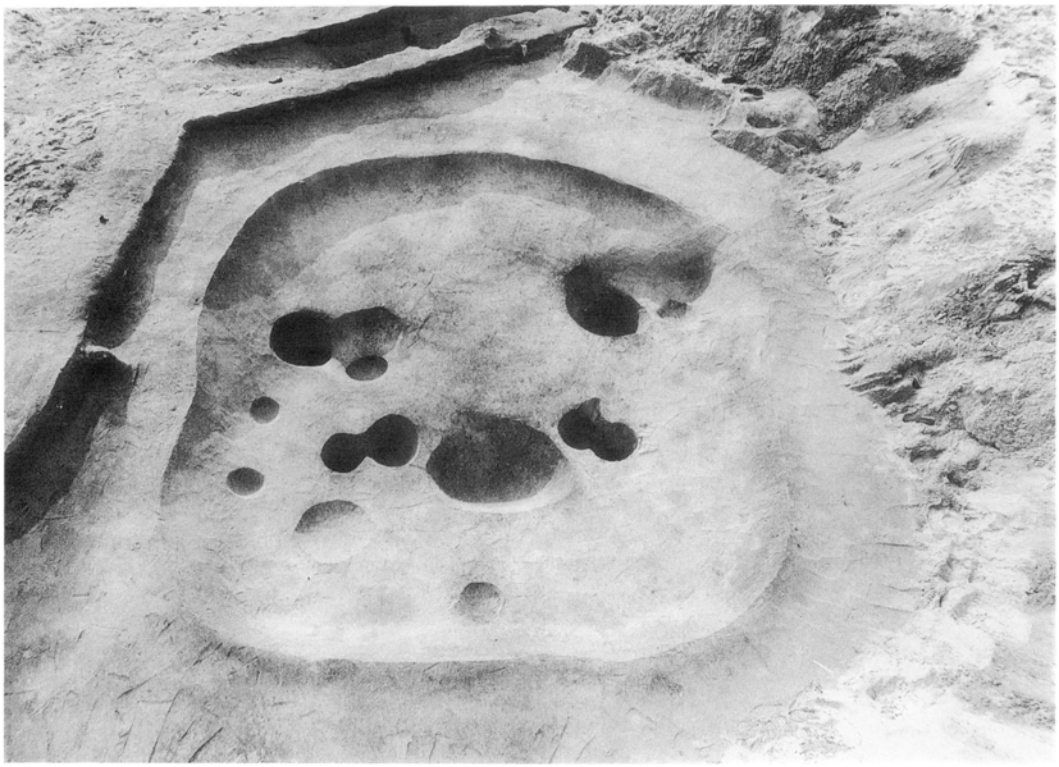
(2) SC－64全景



(1) SC－65全景

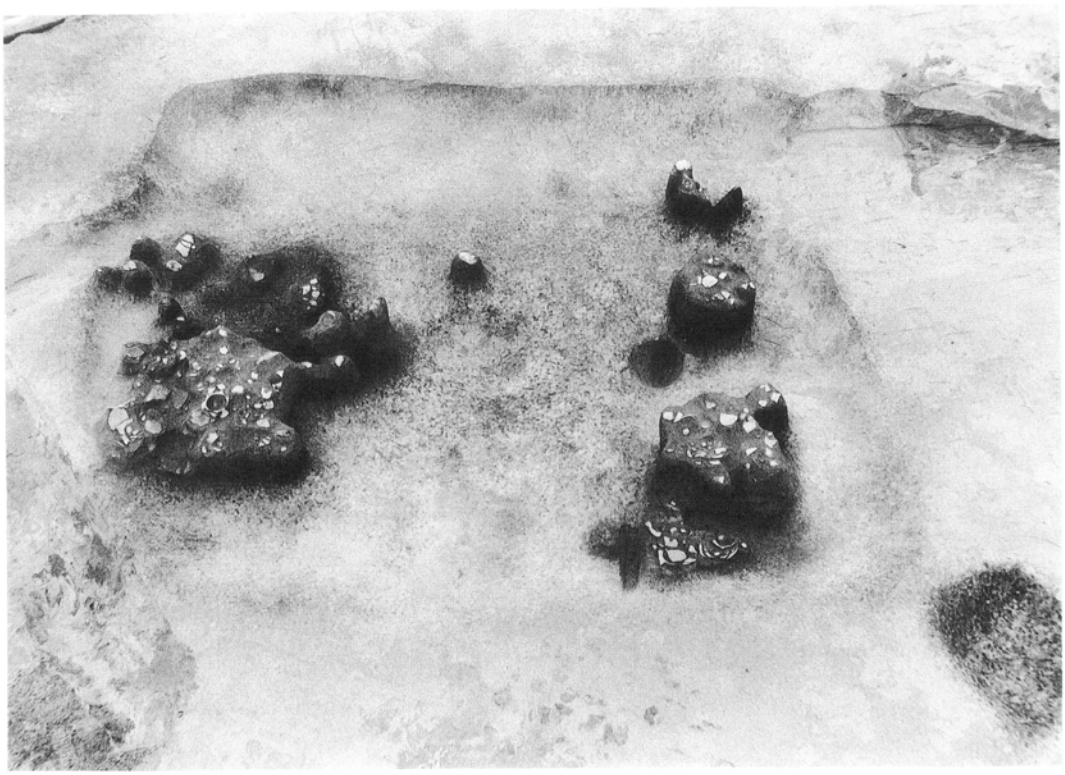
(2) SC－67全景

(1)　SC－71全景

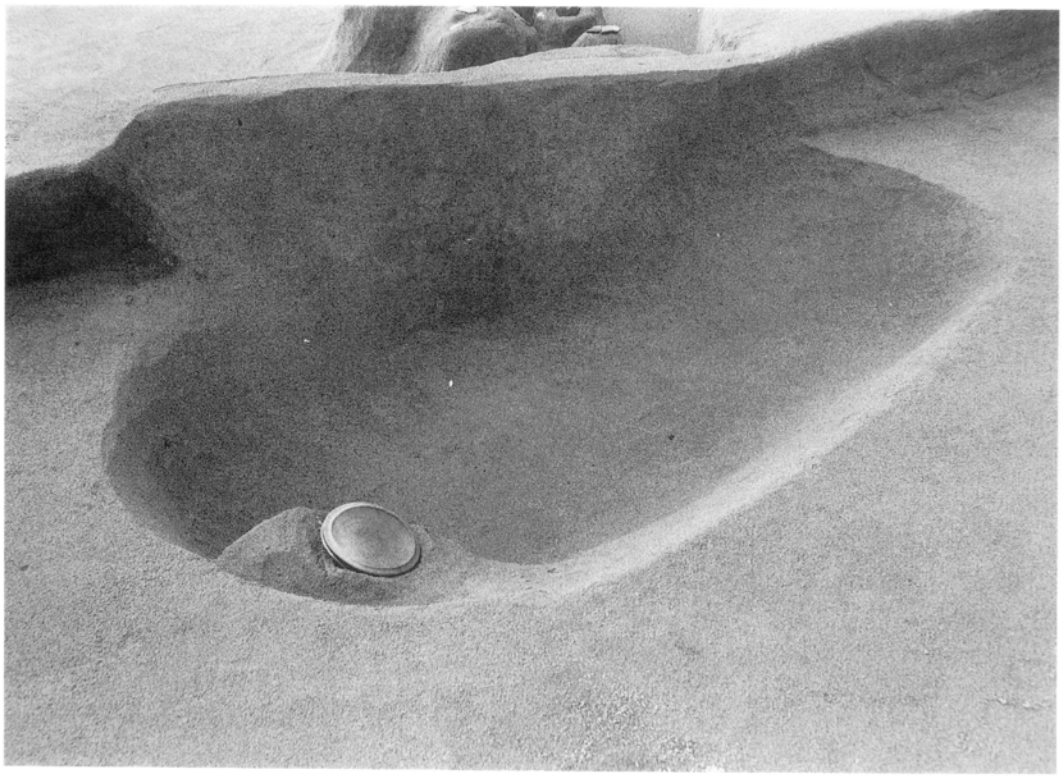


(2)　SC－79全景

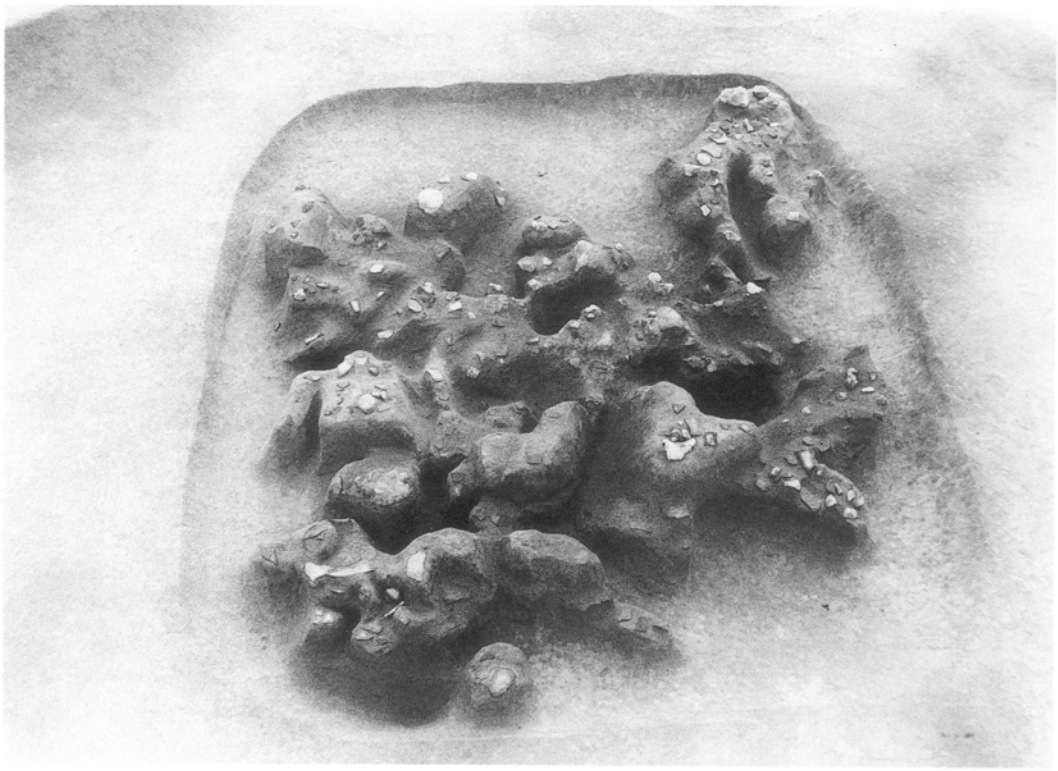
(1) SC－80全景



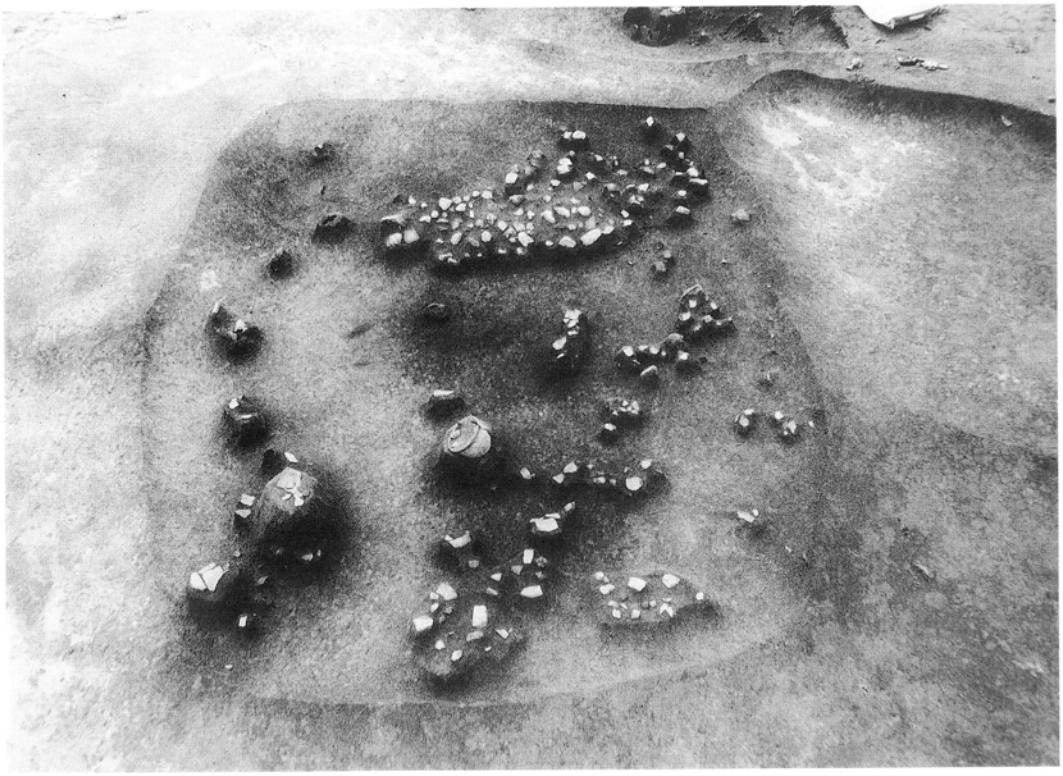
(2) SC－81全景



(1) SK－12全景



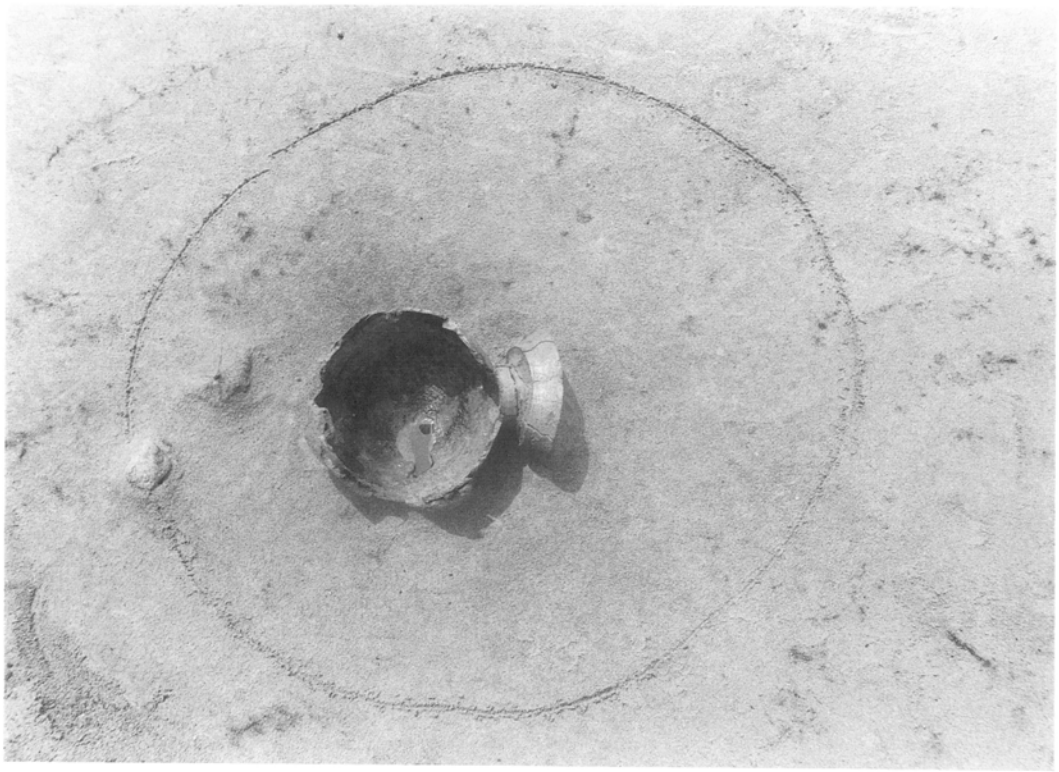
(2) SK－94全景



(1) SK－101全景

(2) SK－103全景

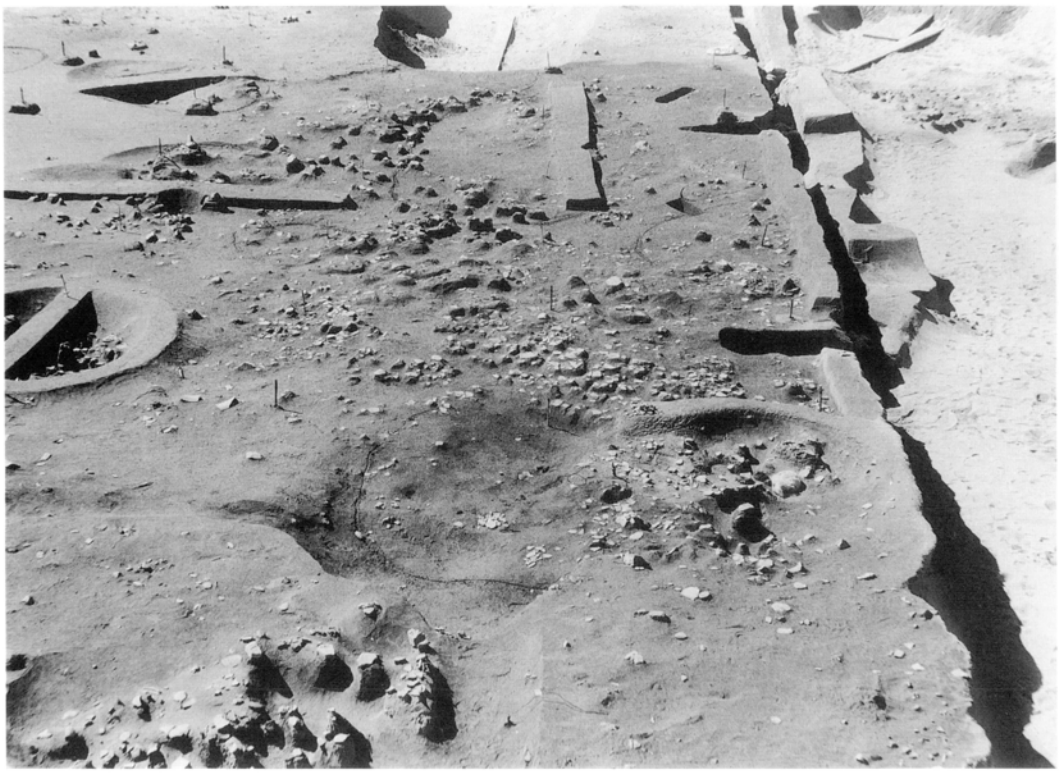
(1) SK－38全景



(2) SK－120全景

(1) 北側炉址群全景（中央部より北を望む）

(2) 北側炉址群全景（北から）

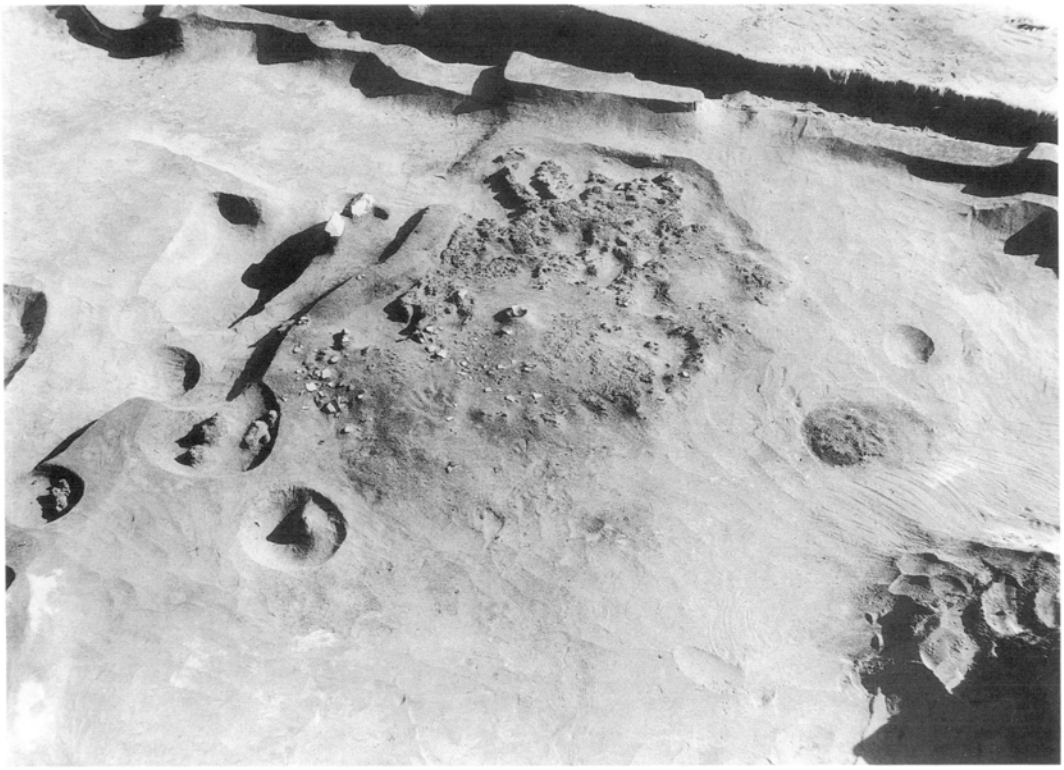


(1) 東北部炉址群遺物出土状況

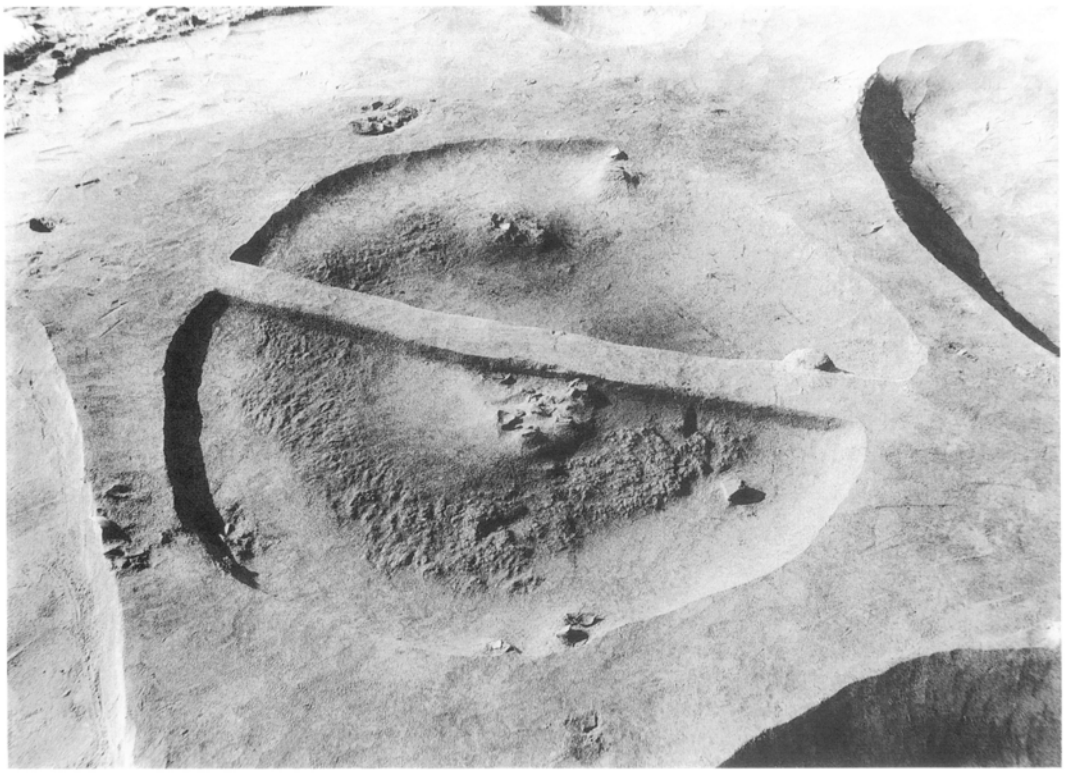
(2) 東北部炉址群全景

(1) SR－30全景

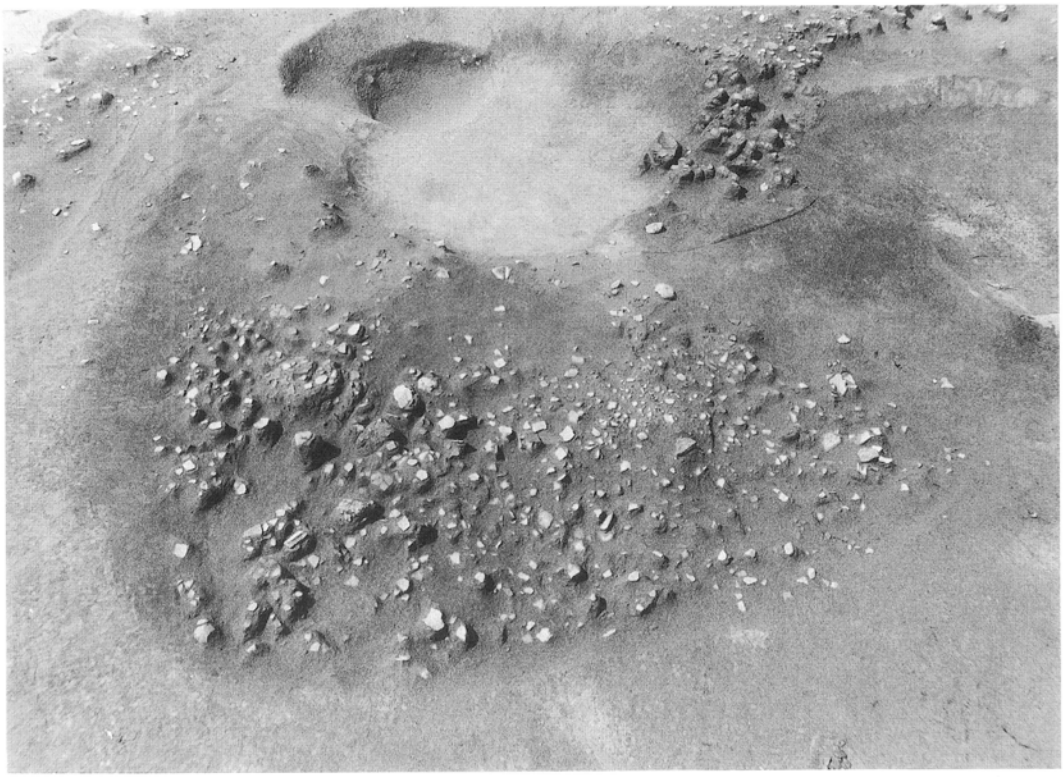
(2) SR－31全景



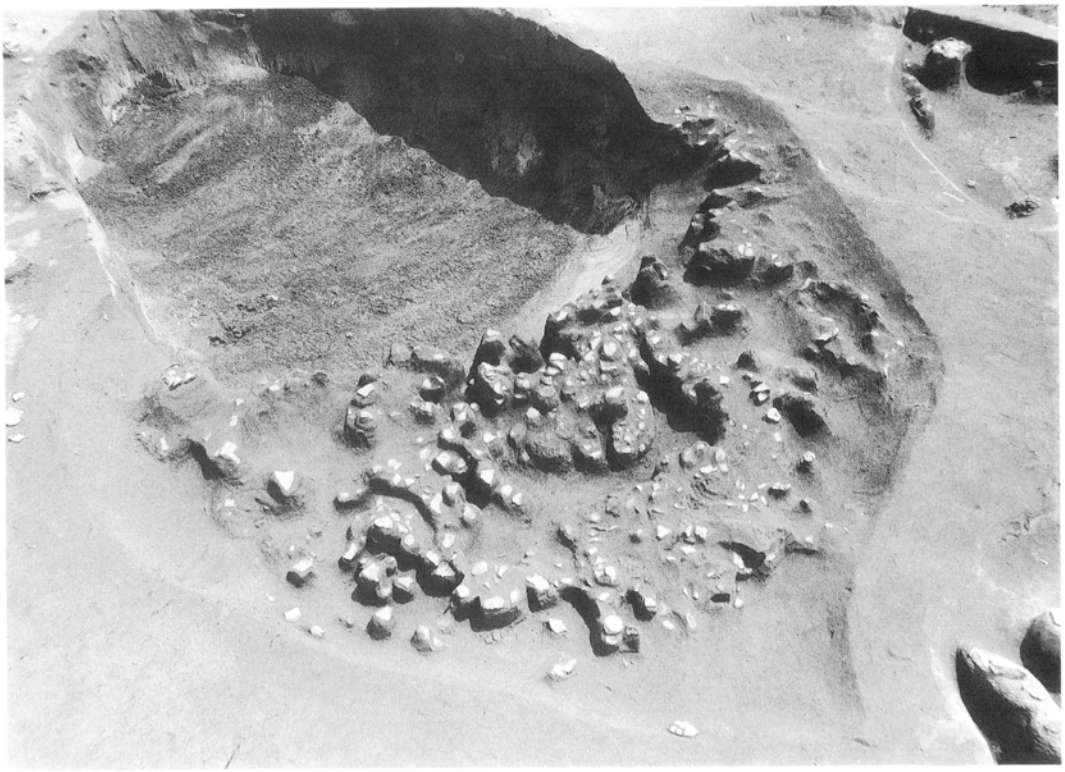
(1)　SR－215全景



(2)　SR－283全景

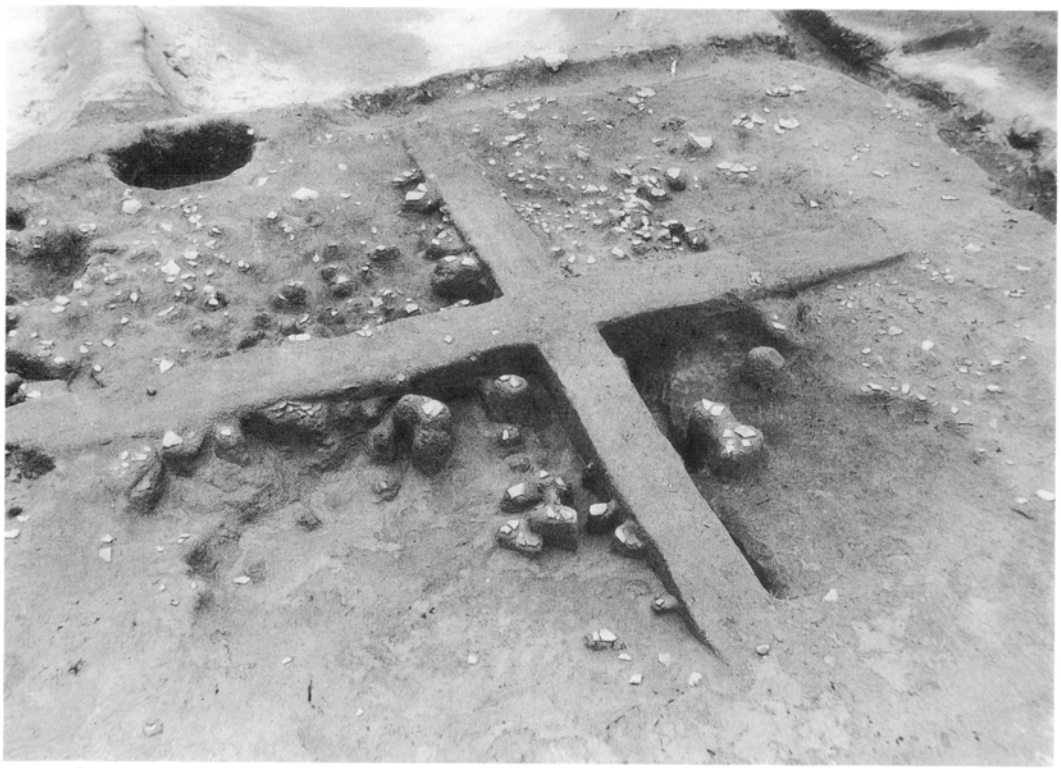


(1) SR－139全景

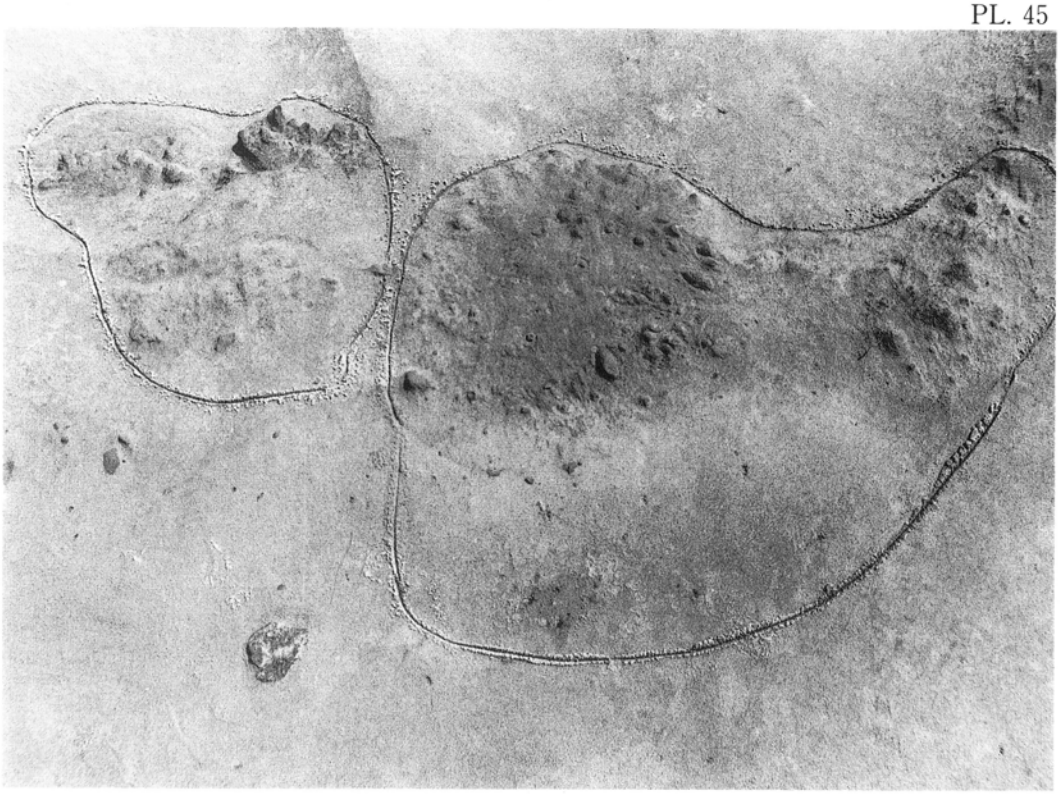


(2) SR－141全景

(1)　SR－48全景



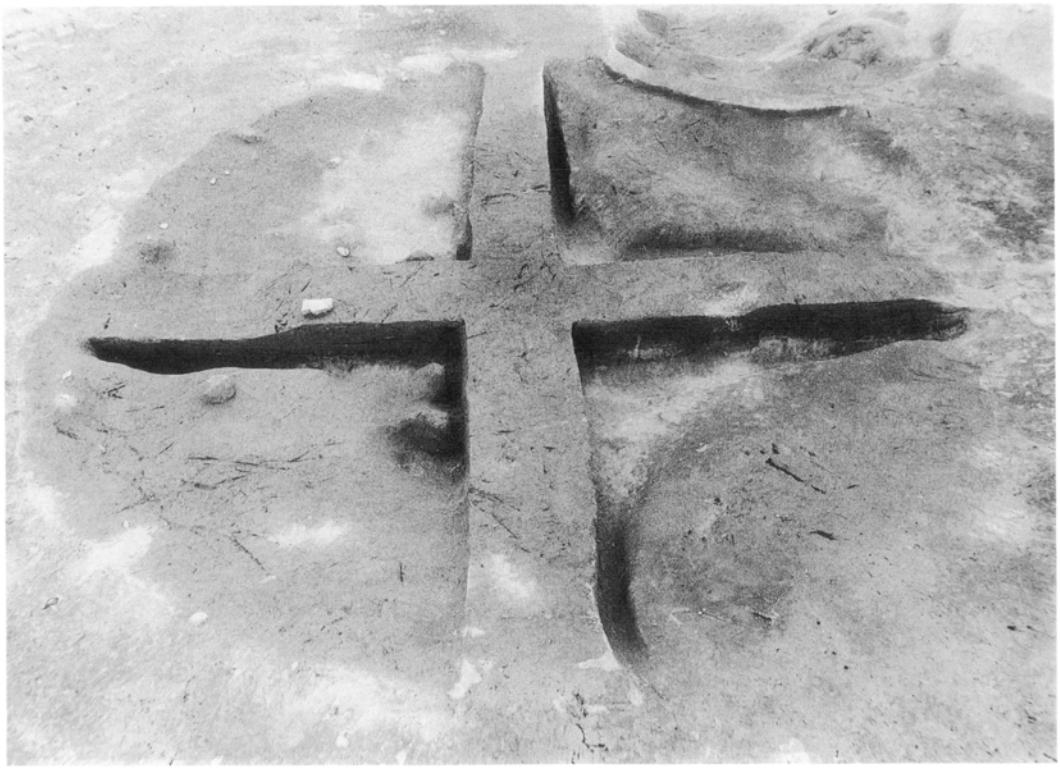
(2)　SR－66全景



(1) SR－108・109全景

(2) SR－192炭・炉壁体検出状況

(1) SR－274全景

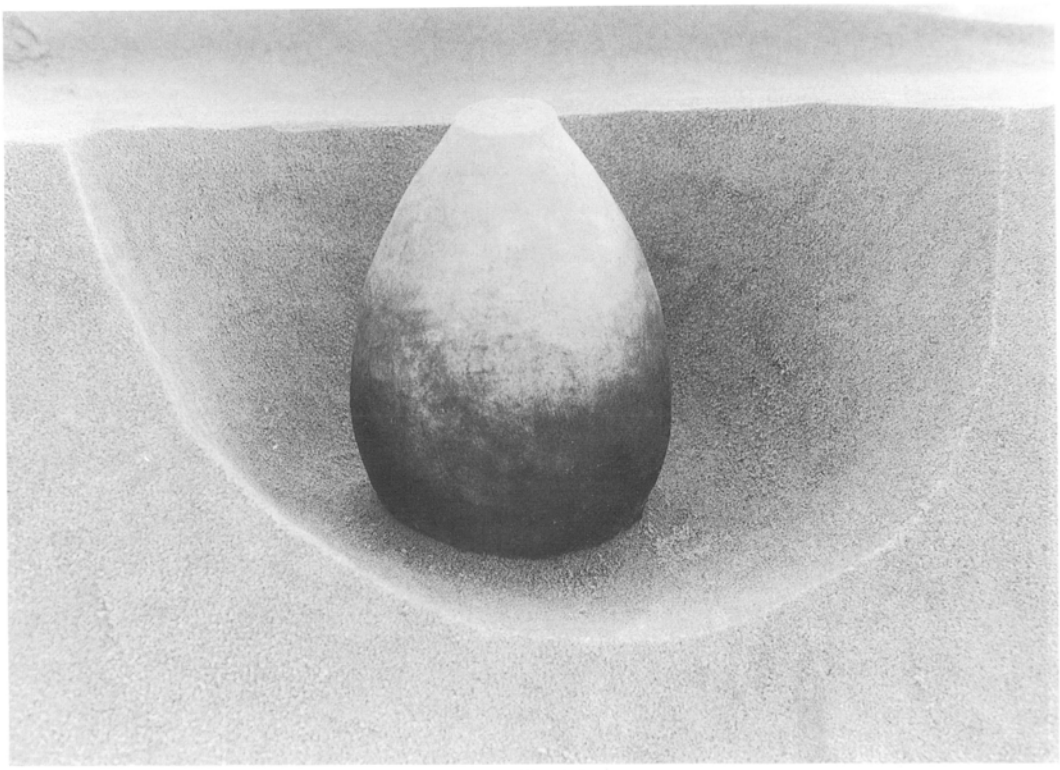


(2) SR－74全景

(1) SR－300（石敷炉）全景

(2) SR－301（石敷炉）全景

(1) 倒置甕No.1・No.2全景



(2) 倒置甕No.3全景

9

14

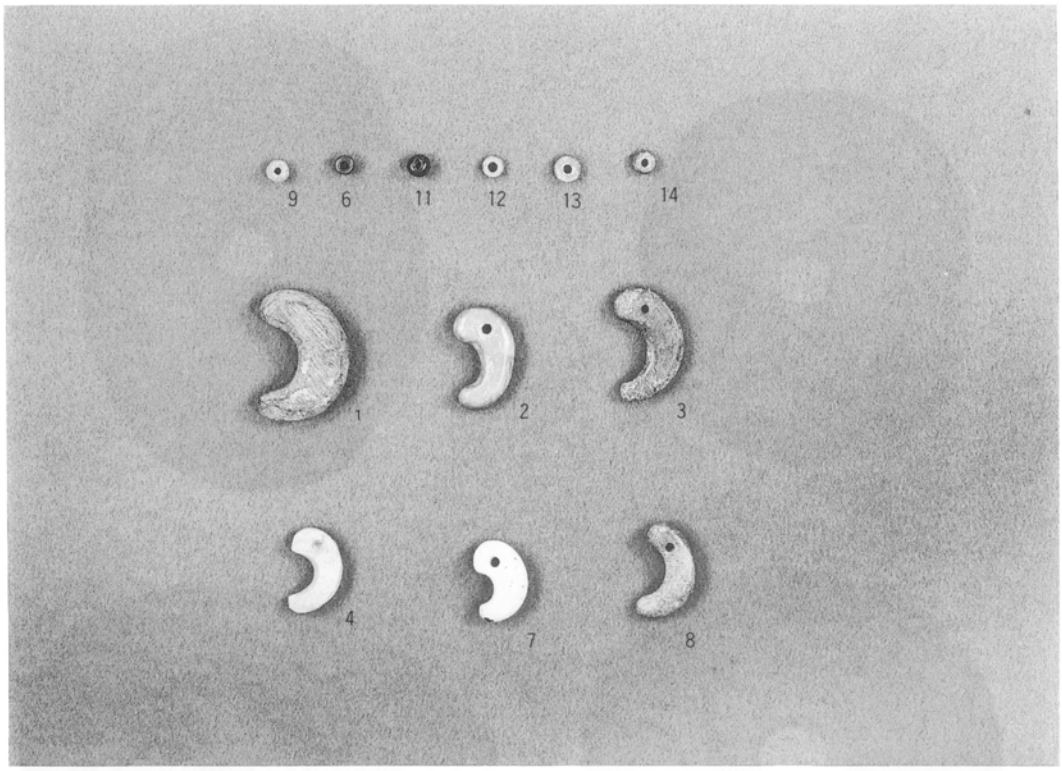
12

7

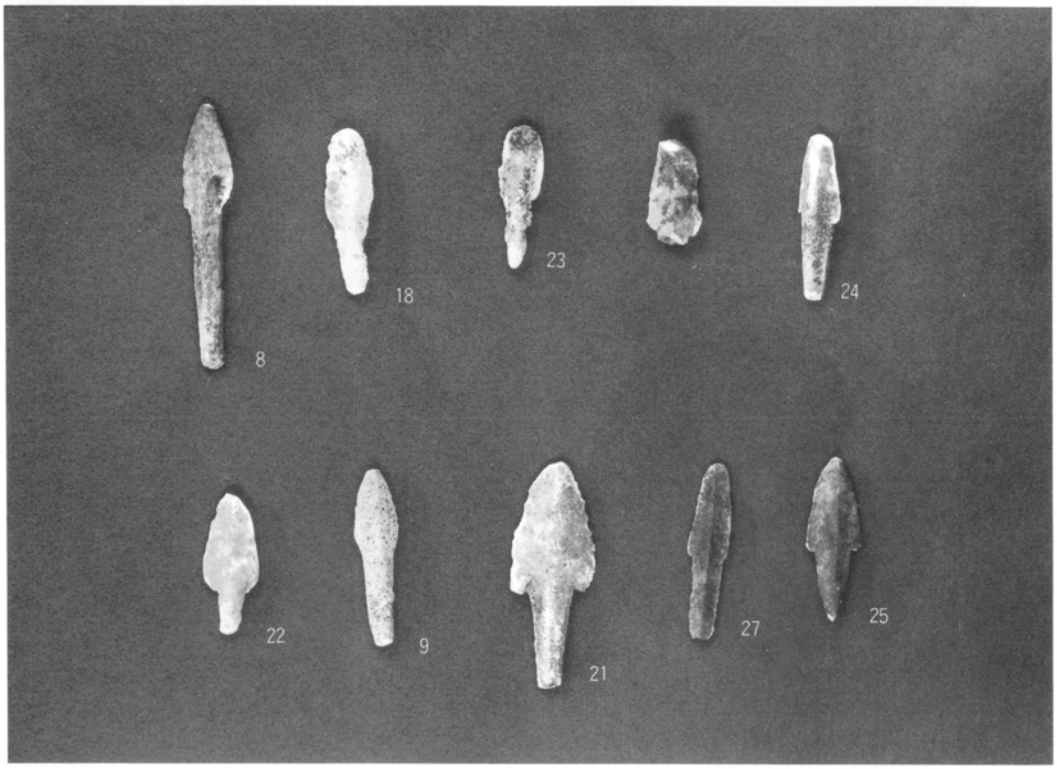
3

8

石錘



(1) 勾玉類・小玉類



(2) 銅鏃

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第207集
唐原遺跡　－集落址編－
1989年３月25日

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区大名2丁目10の29
印刷　福博綜合印刷株式会社